レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

⑨

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

レーニン10巻選集のしおり

No. 6
1971. 3. 20.
大月書店

レーニン10巻選集
第九巻（第六回配本）について

米原　昶

この第九巻には、一九一八年一一月から一九二〇年五月までの一年半のあいだにレーニンが書いた著作がおさめられています。

この時期は、はげしい外国の武力干渉と国内戦の時期であり、また、共産主義インタナショナルの創設の時期でもあります。したがって、この巻のおもな内容となっているのは、ソヴェト共和国の防衛、社会主義建設の原則的諸課題、国際共産主義運動の原則的諸問題にあてられた著作です。

以下、これらの著作を読みなおして、私が感じた点を記してみましょう。読者のみなさんの参考になれば、さいわいです。

1

『ピチリーム・ソローキンの貴重な告白』は、小ブルジョア民主主義派にたいしてとるべき革命的プロレタリアの態度をのべている点で、非常に興味ぶかい論文です。ピチリーム・ソローキンは、憲法制定議会の著名な議員の一人であり、エス・エル右派の党員だったのですが、それが外国の武力干渉と国内戦の激化のなかで、自己の果たしてきた有害な行動を反省し、選挙民に公開の手紙を発表して、議員の肩書を返上し、政治への参加を一切断念すると言明したのです。

レーニンは、この事件を、小ブルジョア民主主義派全体、非プロレタリア的中間層全体の転換、すなわち「ボリシェヴィズムにたいする敵対から最初は中立への、のちにはそれの支持への転換」として正しくとらえ、この中間派の転換を考慮に入れ、利用する能力をもつことを強調しています。そして、のちに第八回党大会によって確認された「中農との協定、同盟」というスローガンをこの論文のなかではじめて打ちだしています。

『プロレタリア革命と背教者カウツキー』は、いうまでもなく、レーニンの古典的な労作の一つです。

この著作をレーニンが書きあげたのは、ちょうど一九一八年の一一月九日でしたが、一一月九日から一〇日にかけて、ドイツでは革命がはじまり、キール軍港その他の北部諸都市と首都ベルリンでは、権力が労働者・兵士

代表ソヴェトの手にうつったのでした。その点で、これは文字通りドイツ革命の直前に書きあげられた著作です。

もちろん、レーニンは、第一次大戦の末期、とくにロシア十月革命以後、ドイツをはじめ西ヨーロッパ諸国に革命的情勢が成熟していることを知っており、その革命にとって最も大きな危険は、それらの国々に、ロシアのボリシェヴィキ党のような革命的なプロレタリア党が存在していないこと、労働運動を修正主義者が支配していることだとみていました。

だからこそレーニンは、この著作のなかで、マルクス主義を歪曲し、プロレタリア革命とプロレタリアートの独裁の必要を否認している修正主義者カウツキーの著作を、あれほどはげしくするどく暴露し、非難したのです。「民主主義一般」を「独裁一般」に対置させ、プロレタリアートの独裁が民主主義の死滅を意味し、したがってうけいれられないものであるかのように言う、カウツキーその他の修正主義者の主張が徹頭徹尾いつわりであることを、レーニンはこの著作のなかで明らかにしています。

どんな国家にとっても、その本質は、経済的に支配している階級の独裁であり、その階級は自分の支配の経済的基礎をまもるため、自分の階級敵をおさえつけるために政治権力を利用します。したがって、搾取階級の独裁は、勤労者の圧倒的な多数を暴力的におさえつけることであったし、いまでも依然としてそうです。これに反して、労働者階級の独裁は、住民のなかのとるにたらない少数からなる搾取者をおさえつけるために、その政治権力を利用します。プロレタリアートの独裁のおもな任務は、暴力ではなく、新しい社会主義制度をうちたてることであると、レーニンは強調しています。

抽象的な独裁というものはないし、またありえないのと同じように、「純粋民主主義」、民主主義一般もないし、またありえません。「『純粋民主主義』とは、労働者を愚弄する自由主義者のかたり文句である」とレーニンは書いています。歴史上実際に存在するのは、『純粋民主主義』ではなくて、「封建制度にとってかわるブルジョア民主主義と、ブルジョア民主主義にとってかわるプロレタリア民主主義である」ことを、レーニンは指摘しています。

ブルジョア民主主義は、封建制度にくらべるとたしかに歴史的な進歩でした。資本主義諸国における労働者階級とすべての進歩勢力は、マルクス主義党を先頭におしたて、反動の攻撃にたいしてこのブルジョア民主主義の獲得物を断固としてまもらなければなりません。しかし、ブルジョア民主主義は、制限されたものであって、資本

の支配のもとでは、いつでも、富めるもののための、搾取者のための、せまい、切りつめられた、偽善的な民主主義であることを同時に忘れてはなりません。

レーニンは、プロレタリアートの独裁が、とるにたりないひとにぎりの搾取者のための民主主義を制限することによって、住民の圧倒的な多数、すなわち、勤労人民のための民主主義を未曽有に発展させ、拡大すると指摘しています。

「プロレタリア民主主義は、いっさいのブルジョア民主主義より百万倍も民主主義的である。ソヴェト権力は、最も民主主義的なブルジョア共和国より百万倍も民主主義である。」これがレーニンの指摘です。

ちなみに、プロレタリアートの真の民主主義が損われれば、社会主義の勝利を維持することも、共産主義社会へみちびくことも困難となることは、レーニンもすでに、明らかにしている点を考えることが大切です。(『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」について』＝本選集第七巻)

この著作でのべられた民主主義にかんするレーニンの指摘は、今日の状況でも創造的に積極的に生かされなければならないと思います。

第二インタナショナルの崩壊のあと、レーニンとボリシェヴィキ党が積極的に準備してきた『**共産主義インタナショナル第一回大会**』は、一九一九年三月はじめにモスクワで開催されました。

この大会で、レーニンは『ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁とについてのテーゼと報告』を発表しています。この『テーゼと報告』では、さきに『背教者カウツキー』でのべられたレーニンの思想が実に簡潔に正確に要約されています。

レーニンがここでのべているプロレタリアートの独裁の原則は、国家統治への大衆の決定的な参加、人民にたいする民主的権利の実質的な保障、人民のうえに君臨する特権的な官僚制と旧軍隊の廃絶、立法権力と執行権力の分立のない勤労者の自治大衆組織、民主集中制など、ロシアに生まれたソヴェト権力の基本的な特徴であったばかりでなく、第二次大戦後、ヨーロッパとアジアに生まれた人民民主主義権力の基本的な特徴ともなったことに注目する必要があると思います。

共産主義インタナショナルの大会につづいて、三月一八日からモスクワで『ロシア共産党(ボ)第八回大会』がひらかれました。

この大会で、第七回大会から懸案になっていた党綱領の改訂がなされました。レーニンはこの大会で、中央委員会報告をおこなうとともに、大会で討議された基本問題——党綱領と農村活動についても報告しました。

『党綱領についての報告』は、資本主義から社会主義への過渡の全期間を目安とした共産党の任務を規定し、社会主義社会建設のためにたたかう党と労働者階級を思想的に武装させている点で、原則的な意義をもっています。

レーニンは、綱領の一般的部分から独占以前の資本主義と単純商品生産の特徴づけを削除しようとするブハーリンの提案をするどく批判しています。ブハーリンやかれに同調したピャタコフの見解によると、帝国主義は資本主義の発展における一段階ではなく、特別の社会経済構成体のように扱われています。

ブハーリンのその後におけるあやまりも、この「純粋帝国主義」の理論と結びついています。その意味で、この「報告」におけるレーニンの指摘は、原則的な意義をもっています。

民族問題に関する党の任務を論じた項でも、レーニンは、民族自決権の条項を綱領から削除しようとしたブハーリンの大国＝排外主義的な提案に断固として反対しました。あらゆる民族に自決権をあたえることだけが、さまざまな民族の勤労者のあいだの正しい相互関係、相互の信頼、諸民族の自発的な同権的な同盟を保障することを、レーニンは指摘しています。

この『報告』のなかで、も一つ重要なのは、中農にたいする態度の問題です。ソヴェト共和国がうまれた当初、ブルジョアジーを鎮圧し、プロレタリアートの独裁を確立することが主要な任務であり、ソヴェト権力がまだ固まっておらず、中農が動揺していたころには、中農を中立化させる政策がただ一つ正しい政策でした。反革命派の最初の襲撃が撃退され、ソヴェト権力が確立され、社会主義建設の任務が日程にのぼってきた新しい状況のもとで、中立化政策ではなく、中農との同盟の政策が必要となっていました。レーニンは、いちはやくこの問題をとりあげています。さらに、協同組合、ブルジョア専門家、動揺的なインテリゲンツィアの問題、ソヴェト・ロシアにおける官僚主義の克服の問題、プロレタリアートの指導的役割と選挙権の問題についてのべています。

論文『第三インタナショナルとその歴史上の地位』は、一九一九年の四月なかばに書かれたものですが、おくれたロシアで、なぜプロレタリア社会主義革命が成功したかを明らかにしながら、ソヴェト民主主義は「世界ではじめて、大衆のための、勤労者のための、労働者と小農民のための民主主義をつくりだした」と、その世界史的意義を明らかにしています。

『ハンガリアの労働者へのあいさつ』は、この年の五月モスクワをおとずれた、ハンガリア・ソヴェト共和国の軍事委員チボル・サムエルに託しておくられた手紙で

す。

この手紙は、プロレタリアートの独裁の本質を簡単にわかりやすく説明している点で、レーニンの著作のなかでも、代表的なものといってよいでしょう。その意味でくりかえし熟読すべき内容をもっています。

レーニンは、干渉軍と白衛軍にたいする激烈な闘争を組織したこの時期、外国における革命運動の急激な発展と、共産主義インタナショナルの創設のこの時期にも、理論問題への熱心なとりくみをやめていません。かれはマルクスとエンゲルスの諸労作をあらためて何回も読みなおし、きわめて大きな理論的意義のある論文をいくつも書いています。

『偉大な創意』はそうした論文の一つです。これは、当時「共産主義土曜労働」に関連して書かれたものですが、単なる時事評論ではなく、過渡期の理論問題を明確にしている点で、「社会主義経済学」にかんする今日の国際共産主義運動内部の討論からみても、重要な意義をもっています。

「だが、『階級の廃絶』とはなにを意味するのか！　社会主義者と自称する人々はみな、この社会主義の究極の目的をみとめているが、かならずしもすべてのものがこの意味をよく考えているわけではけっしてない。」

「階級を完全に廃絶するには、搾取者、すなわち地主と資本家を打倒する必要があるばかりでなく、彼らの所有を廃止する必要があるばかりでなく、さらに、生産手段のあらゆる私的所有を廃止する必要があり、都市と農村の区別をも、肉体労働者と精神労働者の区別をも廃止する必要がある。これは、長い年月を要する事業である。これをなしとげるには、生産力の発展における巨大な進歩が必要であり、小規模生産の数多くの残存物の抵抗（しばしば受動的な抵抗——それはとくに頑強であり、克服するのはとくに困難である）を克服する必要があり、またこれらの残存物と結びついた習慣と因習との巨大な力を克服する必要がある。」

「すべての『勤労者』に一様にこの仕事を果たす能力があると考えるのは、時代おくれの、マルクス以前の社会主義者のこのうえもない空文句か幻想であろう。なぜなら、この能力はひとりでにあたえられるものではなく、歴史的に成長し、しかも大規模な資本主義的生産の物質的諸条件からだけ成長するものだからである。」

レーニンは、このように説明することによって、プロレタリアートの独裁のおもな任務が、主として搾取者にたいする暴力にあるのではなくて、プロレタリアートが勤労被搾取者の全大衆を指導して、社会主義社会をつくりだし、階級の完全な廃絶を達成することにあることを明らかにしています。

レーニンは、「共産主義土曜労働」が、労働の生産性を発展させ、新しい労働規律へうつり、社会主義的な経済的条件と生活条件とをつくりだすうえでの労働者の自覚した、自発的な創意を示しているという点、共産主義の事実上の発端であるという点に、巨大な歴史的意義を認めています。

『国家について』は、ロシア共産党（ボ）の最初の最高党学校「スヴェルドロフ大学」で、レーニンが一九一九年七月一一日におこなった講義です。

これは、われわれがマルクス・レーニン主義の国家論を正しく理解するためにも、またわれわれがどんな風に「講義」をおこなうべきかの見本としても、非常に興味あるものです。

『ソヴェト共和国における婦人労働運動の任務について』は、一九一九年九月二三日に開催された、第四回モスクワ全市党外婦人労働者会議での演説です。

この演説は、社会主義へ移行しつつある労働者国家の、婦人についての一般的任務を総括的にのべている点で重要です。

『プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治』は、レーニンが多忙のために完成し得なかった論文です。しかし、ここに発表された部分だけを読んでみても、過渡期における経済発展の法則をあきらかにしようとしたものであったことがわかります。

この点でわれわれに多くの問題点を教えています。

レーニンは、ロシアがたいへん遅れており、小ブルジョア的であるため、ロシアの労働者階級の独裁は、不可避的に先進諸国にくらべていくつかの特殊性をもっているが、基本的な諸勢力——と基本的な社会経済諸形態は、どの資本主義国でも同じであるから、この特殊性は、最も主要な点にかかわるものでありえない、とのべています。そしてレーニンは、とくに、ロシアにおける革命後の階級関係を分析していますが、「勤労農民と所有者としての農民とを、——働き手としての農民と小商人としての農民とを、——働く農民と投機者としての農民とを、区別し、区分しなければならない」ことを強調しています。また、当時のロシアの情勢のもとで、「この区分のうちに社会主義の全核心がある」ことを明らかにしています。そして、レーニンは、労働者階級が、資本家階級をたおし、政治権力を獲得して、支配階級となったロシアにおいて、労働者階級が、国家権力をその手に維持し、すでに社会化された生産手段を処理し、動揺的な中間分子と階級を指導し、搾取者の反抗を鎮圧して、階級の廃絶にむかってすすむべき道筋を示しています。

『東洋諸民族共産主義組織の第二回全ロシア大会での報告』は、一九一九年一一月二二日にモスクワでひらか

れた、旧帝政ロシア領内の東洋諸民族の共産主義組織の大会での報告として、特殊な意義をもっています。

この報告で、レーニンは、二年にわたる内戦の経過を総括しながら、「革命戦争が、真に被抑圧勤労大衆を引きいれ、彼らに関心をいだかせるときには、自分たちは搾取者に反対してたたかっているのだということを彼らに意識させるときには、そのような革命戦争は、奇跡をおこなうエネルギーと能力を生むということが、実地に証明されている」とのべています。

これは、その後における植民地従属国における民族解放戦争の経験によっても証明された重要な点です。

さらに、レーニンは、「すべての先進国における帝国主義者と搾取者にたいする勤労者の内乱は、国際帝国主義にたいする民族戦争と結びつきはじめている」と指摘しています。

『憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁』は、エス・エル派の発行した論集『ロシア革命の一年。一九一七―一九一八年』に掲載されていた論文「全ロシア憲法制定議会選挙（序文）」を資料としてとりあげ、レーニンが、なぜロシアでボリシェヴィズムが勝利したかを、数字的に明らかにしている点で、非常に興味深いものがあります。

すなわち、ボリシェヴィキにとっては不利であったと一般にみられていた憲法制定議会の選挙の資料にもとづきながら、レーニンは、ボリシェヴィキが、(一)プロレタリアートのあいだで圧倒的多数をにぎっていた、(二)軍隊内でほとんど半数をにぎっていた、(三)決定的な時機に、決定的な地点で、すなわち両首都（ペトログラードとモスクワ）と、中央に近い戦線（北部戦線と西部戦線）とで、力の圧倒的な優位を占めていたという結論を引きだしています。

そして、レーニンは、ここから、プロレタリアートが国家権力を獲得し、ソヴェト制度を実現したことの意義を明らかにしています。また、ここから、あらゆる資本主義国のブルジョア議会制度とプロレタリア革命の関係という問題についても、一つの結論をひきだしています。

われわれは、レーニンがここでひきだしている命題を、今日のわが国の状況のもとで、どのように創造的に理解すべきか、大いに究明すべき点だと考えます。

『デニーキンにたいする勝利にさいしてウクライナの労働者と農民におくる手紙』は、当時の社会主義の勝利の状況のもとで、民族問題をいかに解決すべきかについて、レーニンのとっていた、きわめて慎重な態度を示しています。

レーニンは、この問題の解決にあたって、考慮すべき

二つの面があることを指摘しています。
第一の面は、「資本は国際的な力である。それに打ち勝つには、労働者の国際的同盟が、国際的な友誼が必要である。」という面です。
第二の面は、「資本主義が諸民族を、少数の抑圧的・大国的な（帝国主義的な）、完全な権利をもった特権的な民族と、圧倒的多数の被抑圧的な、従属的また半独立的な、平等の権利をもたない民族とに分裂されたことをわすれてはならない。」「われわれは、諸民族の自発的な同盟――ある民族が他の民族にたいしていかなる暴力をくわえることもゆるさないような同盟――、最も完全な信頼に、兄弟的な統一のはっきりした自覚に、完全に自発的な一致にもとづくような同盟をのぞむものである。」という面です。
この二つの面がそなわってこそ、真の国際的な団結が生まれるわけです。
『ロシア語の純化について』は、随想的な短い論文ですが、非常に重大な内容をもっています。日本語についても、同じような問題があると思います。
『共産主義内の「左翼主義」小児病』は、いうまでもなく、レーニンの古典的な労作の一つです。
共産主義インタナショナルの第一回大会後、共産主義諸党は成長して、労働者階級のあいだで大きな影響をもちはじめました。それと同時に、「異常なほど急速に発展している国際共産主義運動の二つの誤り、または弱点が見えてきた」と、レーニンは、共産主義インタナショナル第二回大会のときのべています。そして、この著作は、この第二回大会にまにあわせるようにいそいで出版され、大会の代議員の全員に配布されたのですから、レーニンの著作の意図がどこにあったかも、実に明瞭です。
この論文は、大会が、当時コミンテルン加盟の若い各国の党の内部にひろがっていた「左翼」日和見主義の誤りとたたかい、国際共産主義運動の戦術と政策を確立するうえで、決定的ともいえる役割を果たしました。そして、この論文は、今日でも革命闘争を発展させるために、両翼の日和見主義の誤りとたたかい、運動の正しい方向をまもるための闘争を前進させ、自国の情勢・条件に適応した正しい戦略・戦術を科学的社会主義の原則に適合して発展させるために、必ず読まなければならない文献のひとつです。
この論文は、第一にロシア革命の国際的意義についてのべています。
第二にボリシェヴィキの成功の一基本条件についてレーニンは「わが党に最もきびしい真に鉄のような規律がなく、労働者階級の全大衆が、すなわち労働者階級のなかの思慮に富み、誠実で、献身的で、影響力をもち遅れ

た層をみちびき、ひきつけもすることのできるすべてのものがわが党をこのうえなく、完全に献身的に支持しなかったら、ボリシェヴィキは二年はおろか、二ヵ月でさえ権力を持ちこたえられなかったであろう」とのべています。

第三にレーニンは、十月革命の勝利にいたる闘争の歴史を六段階に分け、ボリシェヴィキ党の各段階での戦術をあとづけて、十月革命の勝利とその勝利の維持は、長期にわたる周到な準備、ゆたかな経験の積み重ねのなかから生み出されたものであることを示しています。

第四にレーニンは、ボリシェヴィキが労働運動のなかのどのような敵とたたかって成長し、強くなってきたのかと設問し、その答えとして「日和見主義」と「小ブルジョア革命性」という二つの敵とのたたかいをあげています。とくに「この小ブルジョア革命性は、いくらか無政府主義に似ているか、またはそれからなにかを借りてきたものであり」、資本主義のもとで急速に零落していく「逆上した」小ブルジョア＝小所有者の意識を反映している。かれらは、「たやすく極端な革命性に移っていくが忍耐、組織性、規律、確固さをあらわすことが」できず、たえず動揺し、幻想にはしり、「はなはだしくなると、あれこれのブルジョア的流行思想に熱狂的に魅せられてしまう特性」をもっていることを明らかにしています。

第五にレーニンは、プロレタリアートの前衛党の役割、労働組合運動、議会闘争、妥協などについてのドイツ共産党「左派」の原則的な誤りをきびしく批判しています。まず党精神と党規律を否定した「下からのもりあがってくる闘争」を期待する「左派」の解党主義の批判をしています。またレーニンは党と労働組合との相互関係、プロレタリアートの革命党が成長した段階での労働組合の反動性は避けられないことを明らかにし、反動的労働組合のなかでの活動を不要なものと考え、新しい「労働者同盟」をつくるべきだとする「左派」の意見をきびしく批判し、「いやしくもそこにプロレタリア的、また半プロレタリア的大衆がいるなら、その機関、協会、団体——たとえそれが、どんなに反動的であろうとも——のなかでこそ、系統的に、頑強に、根気づよく、忍耐づよく、宣伝し、扇動するために、どんな犠牲をもはらい、最大の障害にも打ち勝つことが必要で、「そして労働組合と労働者協同組合こそ、そこに大衆のいる組織である」とのべ、そこでの活動を重視すべきことを説いています。さらにレーニンは議会主義を否定する「左派」の誤りをとりあげています。さいごに「妥協」「迂回政策」、もまったく拒否する戦術は、「児戯に類したこと」で、一定の条件のもとで労働者階級は、妥協と迂回

政策をとって味方の隊列を強め、最終的に階級敵を敗北させなければならないことをのべています。

その他、イギリス、イタリアの「左派」の誤りについて批判し、新しい歴史的状況のもとで、プロレタリア党の戦略・戦術上の最も重要な問題を究明しています。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第 9 巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

＊　＊　＊

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』(第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は*をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号(一)(二)……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』(全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目 次

ピチリーム・ソローキンの貴重な告白

きょうの『プラウダ』[1]には、ピチリーム・ソローキンのすばらしく興味ぶかい手紙がのっている。この手紙には、すべての共産主義者の特別の注意を喚起する必要がある。『北ドヴィナ執行委員会通報』[2]に掲載されたこの手紙のなかで、ピチリーム・ソローキン[3]は、エス・エル右派の党[4]から脱退し、憲法制定議会議員を辞任すると言明している。手紙の筆者があげている動機は、要するに、彼が、他人だけでなく、自分自身にたいしても、局面打開の政治的処方箋を示すのに苦しんでおり、そこで「政治からいっさい手をひく」というのである。ピチリーム・ソローキンはこう書いている。「過ぎさった革命の一年は、私に一つの真理を教えた。政治家は誤りをおかすこともある。政治は社会的に有益なこともあるが、また社会的に有害なこともある。だが、科学や国民教育の分野での活動は、つねに有益であり、つねに人民に必要である」と。……手紙の署名は「ペテルブルグ大学講師、精神神経病研究所講師、元憲法制定議会議員、元エス・エル党員ピチリーム・ソローキン」となっている。

この手紙は、なによりも、すこぶる興味ぶかい「人間記録」として注目に値する。ペ・ソローキンのように、自分の政策の誤りを正直に、率直に告白している例は、そうざらに見られるものではない。まずたいていの場合に、自分のとってきた方針がまちがっていたことを悟った政治家は、自分の方向転換を隠し、それをごまかし、なにか多少ともあたりさわりのない動機を「考えだす」等々のことを試みるものである。自分の政治的誤りを公然と、正直に告白するのは、それだけでも、大きな政治的行為である。だが、ピチリーム・ソローキンが科学の分野の活動は「つねに有益である」と書いているのは、まちがいである。というのは、この分野にも誤りはあるからである。意識的には反動的でない人がたとえば反動的な哲学的見解をしつこく説く例は、ロシアの文献にもある。他方、有名な、すなわち全人民によく知られた、責任ある政治的地位を占めている人物が、政治から手をひくと公然と言明することは、これまた一つの政治である。政治的誤りの正直な告白は、かつて

大衆に影響力のあった多数の政党が共通にもっていた誤りが問題となっている場合には、多くの人にきわめて大きな政治的利益をもたらす。

ピチリーム・ソローキンの手紙の政治的意義は、いまこそきわめて大きい。それは、われわれすべてに、よく考えて学びとるべき「教訓」をあたえている。

どんな資本主義社会でも決定的な勢力でありうるのはプロレタリアートとブルジョアジーだけであって、他方、この両階級の中間に立って、小ブルジョアジーという経済的部類にはいる社会的分子はみな、かならずこれらの決定的な勢力のあいだを動揺するという真理は、マルクス主義者ならだれでもとっくの昔に知っていることである。しかし、この真理を書物のうえで認めることと、実際の現実の複雑な状況のなかでこの真理からでてくる結論を引きだす能力をもつこととでは、たいへんな違いがある。

ピチリーム・ソローキンは、非常に広範な社会的・政治的潮流、すなわちメンシェヴィキ＝エス・エル的潮流の代表者である。これが一つの潮流であること、メンシェヴィキとエス・エルとの相違は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの闘争にたいする彼らの態度という観点からすれば重要でないこと、このことは、一九一七年二月以来のロシア革命の諸事件がとくに納得ゆくように、とくにはっきりと証明している。メンシェヴィキとエス・エルは、ともに小ブルジョア民主主義派の変種である。これがこの潮流の経済的本質であり、基本的な政治的特徴である。この潮流が、その青年期にしばしば「社会主義的」色彩をおびることは、先進諸国の歴史からよく知られている。

それでは、なにが数ヵ月まえにこの潮流の代表者をボリシェヴィキから、プロレタリア革命から、とくに激しく離反させたのか、そして、なにがいま彼らを敵対から中立へ転換させているのか？　まったく明らかなことだが、転換の原因は、第一に、ドイツ帝国主義が崩壊し、それにともなってドイツその他の国々に革命が起こり、またイギリス＝フランス帝国主義が暴露されたことであり、第二には、ブルジョア民主主義の幻想が暴露されたことである。

第一の原因についてすこしくわしく述べよう。愛国主義は、別々の祖国が何百年も、何千年も存在してきたことによって固められた、最も根ぶかい感情の一つである。わが国のプロレタリア革命のとくに大きな、異常とも言える困難の一つは、革命が愛国主義ときわめて鋭い食いちがいをきたした時期、すなわちブレスト講和(三)の時期をとおらなければならなかったという事情であった。この講和が呼びおこした悲しみ、怒り、ものすごい憤懣は、よくわかる。そして、いうまでもなく、世界プロレタリア革命の最高の利

益のためにわれわれは最大の民族的犠牲をはらっているし、またはらわなければならないという真理の理解を、われわれマルクス主義者は、プロレタリアートの自覚した前衛にしか期待できなかった。マルクス主義に属さないイデオローグ、長年のストライキと革命の学校で訓練されたプロレタリアートに属さない広範な勤労大衆は、この革命が成熟しているという確固たる信念や、革命にたいする絶対の忠誠を、どこからもとってきようがなかった。われわれの戦術は、せいぜいよくいっても幻想、狂信、冒険であり、何億という人民のきわめて明白な現実的利益を、今後他の国国で起こるであろうことへの抽象的、空想的な、あるいはおぼつかない期待の犠牲にするもののように、彼らには思われた。だが、小ブルジョアジーは、その経済的地位からして、ブルジョアジーよりも、プロレタリアートよりも、もっと愛国的であった。

　そして、実際はわれわれの言ったとおりになった。

　唯一の敵と思われていたドイツ帝国主義は崩壊した。「幻想茶番劇」（プレハーノフの有名な表現をつかえば）と思われていたドイツ革命は事実となった。小ブルジョア民主主義者の空想が民主主義の友、被抑圧者の擁護者のように描いていたイギリス＝フランス帝国主義は、実際には、ドイツ共和国とオーストリアの諸民族にブレストの条件以上に苛酷な条件を押しつけた野獣であること――「自由な」共和国民、フランス人とアメリカ人の軍隊をつかって、憲兵と死刑執行人の役割、弱小民族の独立と自由の圧殺者の役割を果たさせている野獣であることがわかった。世界史は容赦のない徹底さと率直さで、この帝国主義の面皮をはいだ。自分の祖国の直接の（従来理解されていたかたちでの）利益のほかにはなにひとつ眼中になかったロシアの愛国主義者に、世界史の諸事実は、わがロシア革命の社会主義革命への転化が冒険ではなくて必然事であったことを示した。というのは、それ以外には選択の余地はなかったからであり、もし世界社会主義革命、世界ボリシェヴィズムが勝利しなければ、イギリス＝フランス帝国主義とアメリカ帝国主義がロシアの独立と自由を圧殺するのは避けられないだろうからである。

　事実は曲げられないものである、とイギリスのことわざは言う。ところで、われわれは、この数ヵ月のうちに、世界史全体の最大の転換を意味するような諸事実を経験した。これらの事実にせまられて、ロシアの小ブルジョア民主主義者は、わが党内闘争の歴史によってボリシェヴィズムにたいする憎悪をつちかわれていたにもかかわらず、ボリシェヴィズムへの敵意から、はじめは中立へ、のちにはその支持へと、転換しないわけにはいかなかった。このような

民主主義的愛国者をわれわれからとくに鋭く離反させたあの客観的条件は、いまでは過ぎさった。彼らがわれわれの側へ転換せざるをえないような、世界的な客観的条件が生じた。ピチリーム・ソローキンの転換は、けっして偶然ではなく、階級全体、小ブルジョア民主主義派全体の不可避的な転換の現われである。このことを考慮にいれて、利用するすべを知らないものは、マルクス主義者ではなく、つまらない社会主義者である。

つぎに、「民主主義」一般が普遍的な万能薬のききめをもつという信仰、それがブルジョア民主主義であって、その有用性と必要性は歴史的に制限されたものであることを理解しないこと、このような信仰とこのような無理解は、あらゆる国で、何百年、何十年のあいだ、小ブルジョアジーのあいだにとくに根づよくたもたれてきた。大ブルジョアは海千山千のしたたかものであって、民主的共和制が、資本主義のもとでのその他のあらゆる国家形態と同じく、プロレタリアートを弾圧するための機構にほかならないことを知っている。大ブルジョアがこのことを知っているのは、彼らが、あらゆるブルジョア的国家機構の実際の指導者とごくうちとけた仲であり、この国家機構の最も深いところにある(だからこそ、しばしば最も念いりに隠蔽されている)ばねに精通しているからである。小ブルジョアは、その経済的地位のために、そのあらゆる生活条件のために、この真理を会得する能力がとぼしく、民主的共和制が「純粋民主主義」、「自由な人民国家」、非階級的あるいは超階級的な人民支配、全人民の意志の純粋な現われ、その他等等を意味するかのような幻想さえいだいている。小ブルジョア民主主義者のこうした偏見の根づよさは、彼らが激しい階級闘争から、取引所から、「真の」政治から、より遠ざかっていることの避けられない結果なのであって、宣伝だけの力で短期間にこれらの偏見を根絶できるだろうと期待するのは、まったく非マルクス主義的であろう。

しかし、いまや世界史は、すさまじい速さですすんでおり、測りしれない威力をもった鉄鎚で、かつてないほど激しい危機によって、いっさいの習慣的なもの、いっさいの古いものを破壊しつつあるので、どんなに根づよい偏見ももちこたえられなくなっている。「民主主義者一般」が憲法制定議会を素朴に信じ、素朴にも「プロレタリア執権」に「純粋民主主義」を対置したのは、当然であったし、避けられなかった。しかし、アルハンゲリスクやサマラで、またシベリアや南部で「憲法制定議会派」がなめた経験は、どんなに根づよい偏見も打ちこわさずにはおかなかった。ウィルソンの理想化された民主的共和制が、実際には、最も凶暴な帝国主義の形態であり、弱小民族を最も恥しらず

に抑圧し圧殺する形態であることがわかった。普通の「民主主義者」一般、メンシェヴィキとエス・エルは、次のように考えた。「いったいなんで高度な型の国家とかいうものが、ソヴェト権力とかいうものが、われわれに必要なのか！　普通の民主的共和制をあたえてもらいたいものだ！」と。そして、もちろん、「普通の」、比較的平穏な時代ならば、こういう「期待」は何十年もの長いあいだたもたれることができたであろう。

だが、いまや世界的諸事件の歩みや、ロシアのあらゆる帝政派とイギリス＝フランス帝国主義およびアメリカ帝国主義との同盟のきわめて手きびしい教訓は、次のことを実際に示している。すなわち、民主的共和制は、帝国主義が歴史の日程にのぼせた諸問題の見地からみてすでに古くさくなったブルジョア民主主義的共和制であるということ、――ソヴェト権力が世界のすべての先進国で勝利をおさめるか、それとも、民主的共和制の形態を利用することをすばらしくうまく学びとった最も反動的で、最も凶暴な、あらゆる弱小民族を圧殺して全世界に反動を復活させつつあるイギリス＝アメリカ帝国主義が勝利をおさめるか、これ以外にはどんな選択の余地もないということ、これである。

二つに一つである。中間の道はない。ついこのあいだまで、このような見解はボリシェヴィキの目のくらんだ狂信だと思われていた。

ところが、事実はまさにそのとおりになった。

ピチリーム・ソローキンが憲法制定議会議員を辞任したのは、偶然ではない。それは、この階級全体、小ブルジョア民主主義派全体の転換の徴候である。彼らのあいだの分裂は避けられない。一部はわれわれの側へ移ってくるであろうし、一部はなお中立派のままであろうし、一部は、ロシアをイギリス＝アメリカ資本に売り渡して外国の銃剣で革命を圧殺しようとしている帝政派のカデットに、意識的に加担するであろう。メンシェヴィキおよびエス・エル的民主主義派のあいだに見られるこの転換、すなわち、ボリシェヴィズムにたいする敵対から、はじめは中立への、のちにはその支持への転換を考慮にいれ、利用するすべを知ることは、当面の切実な任務の一つである。

党が大衆のなかへ投じるどんなスローガンも、硬化し、死物となり、このスローガンを必要とならせた条件が変化したときにさえ、なお多くの人にたいして効力をもちつづける、という性質をもっている。この弊害は避けられないものであって、これとたたかいこれを克服することを学びとらずには、党の正しい政策を確保することはできない。わが国のプロレタリア革命で、革命がメンシェヴィキおよびエス・エル的民主主義派ととくに鋭い食いちがいをきた

した時期は、歴史的に避けられないものであった。彼らがわれわれの敵の陣営の側へ動揺し、ブルジョア的および帝国主義的な民主的共和制の復活に従事したときには、このような民主主義者との激しい闘争なしにはすまなかった。この闘争の多くのスローガンは、いまでは硬化し、化石化してしまって、こういう民主主義派のあいだに新しい転換、われわれの側への転換、偶然なものではなく、国際情勢全体のきわめて奥ぶかい諸条件に根ざした転換が始まった新しい時機を、われわれが正しく考慮にいれ、適切に利用するのを妨げている。

この転換を支持するだけでは、われわれの側へ転換してくる人々を歓迎するだけでは、十分でない。自分の任務を自覚している政治家は、もしこのような転換に重大な、奥ぶかい歴史的原因があることを確信するなら、小ブルジョア民主主義派の広範な大衆の個々の層や集団のなかにこの転換を呼びおこすことを学びとらなければならない。革命的プロレタリアは、だれを抑えつけるべきか、そしてだれと——いつ、どのようにして——協定を結ぶことを解すべきかを、知らなければならない。地主と資本家や、ロシアを外国の「連合国」帝国主義者に売り渡そうとしている彼らの腰巾着どもにたいするテロルと弾圧をやめるのは、滑稽であり、ばかげたことであろう。彼らを「説得」したり、総じて彼らに「心理的影響をおよぼそう」とするのは、茶番であろう。しかしまた、事態の進展が小ブルジョア民主主義派をわれわれの側へ転換させつつあるときに、彼らにたいする弾圧とテロルの戦術だけを固執することも、同じように——それ以上ではないにしても——ばかげた、滑稽なことであろう。

そして、プロレタリアートは、いたるところでこのような民主主義派に出あっている。農村でのわれわれの任務は、地主をなくし、搾取し投機をする富農の反抗を打ち砕くことである。このためにわれわれがしっかりとたよることのできるのは、半プロレタリア、「貧農」だけである。だが、中農はわれわれの敵ではない。彼らは動揺していたし、いまも動揺しているし、今後も動揺するであろう。動揺する人々にはたらきかけるという任務は、搾取者を打倒し、積極的な敵に勝利するという任務と同一ではない。富農との闘争を一瞬間も放棄せず、貧農だけにしっかりと依拠しながら、中農との協定を達成するすべを知ること——これが当面の任務である。なぜなら、いまこそ、まえに述べた原因によって中農がわれわれの側に転換してくることが避けられないからである。

これと同じことが、クスターリ(六)についても、手工業者についても、最も小ブルジョア的な条件におかれているか、

あるいは最も小ブルジョア的な見解をもちつづけてきた労働者についても、また多くの職員についても、将校についても、そして——とくに——インテリゲンツィア一般についても言える。わが党内には、彼らのあいだの転換を利用するうえでの無能力がしばしば見られること、この無能力は克服できるし、克服しなければならず、それを能力に転化しなければならないことは、疑う余地がない。

われわれは、労働組合に組織されたプロレタリアの大多数のあいだに、すでにしっかりした支持を得ている。いまやわれわれは、われわれの側へ転換しつつある最も非プロレタリア的な、最も小ブルジョア的な勤労者の諸層をわれわれのほうへ引きつけ、共同の組織に引きいれ、一般プロレタリア的な規律に服させるすべを知らなければならない。ここでは、当面のスローガンはこうである。——彼らと闘争するのではなく、彼らを引きつけよ、彼らにうまくはたらきかける能力をもて、動揺する人々を説得せよ、中立的な人々を利用せよ、立ちおくれた人々、あるいは「憲法制定議会」の幻想や「愛国主義的民主主義」の幻想をつい最近脱しはじめたばかりの人々を——プロレタリアの大衆的影響でとりまいて——教育せよ。

われわれは勤労大衆のあいだに、(三)すでに十分しっかりした支持を得ている。第六回ソヴェト大会はこのことをとくにはっきりと示した。われわれは、ブルジョア・インテリゲンツィアを恐れないし、彼らのうちの悪辣なサボタージュ分子や白衛派にたいしては、一瞬時もたたかいの手をゆるめないであろう。しかし、当面のスローガンは、彼らのあいだに見られるわれわれの側への転換を利用する能力をもて、である。われわれのあいだには、ソヴェト権力に「とりいった」ブルジョア・インテリゲンツィアの悪質分子が、なお少なからず残っている。彼らをつまみだすこと、彼らを、きのうまではまだ意識的にわれわれに敵対していて、きょうやっと中立的になったにすぎないインテリゲンツィアと交替させること、これが最も重要な当面の任務の一つであり、「インテリゲンツィア」と接触するすべてのソヴェト活動家の任務であり、すべての扇動家、宣伝家、組織者の任務である。

いうまでもなく、中農と協定し、きのうまでメンシェヴィキであった労働者と協定し、きのうまでサボタージュ分子であった職員やインテリゲンツィアと協定するには、複雑な、急変する情勢のもとでのあらゆる政治活動がそうであるように、能力を必要とする。肝心なことは、これまでのわれわれの経験によって得られた能力だけで満足せずに、かならずもっと先へすすむこと、かならずもっと多くのものを達成するようにつとめること、かならずやりやすい任

務から困難な任務へと移ってゆくことである。そうせずには、総じてどんな進歩もありえないし、社会主義建設における進歩もありえない。

先日私のところへ、信用協同組合代表者大会の代表がやってきた。彼らは、彼らの大会に提出される、信用協同組合銀行と共和国人民銀行との合同反対の決議案を私に示した。私は彼らに、私は中農との協定に賛成であり、ボリシェヴィキにたいする協同組合員の態度が敵対から中立へ転換しはじめたというだけでも、高く評価するものであるが、しかし協定の基盤は、彼らがこの特殊銀行と共和国の単一銀行との完全な合同に同意するときにはじめて生まれる、と話した。すると大会の代表たちは、彼らの決議案を別の決議案に代え、大会で別の決議を可決した。この決議では、合同に反対する議論はみな削除されていたが、しかし……しかし、実際上別個の銀行とすこしも違わない、協同組合員の別個の「信用組合」という案をもちだしていた！　それは笑うべきことであった。もちろん、ことばの言いかえでまるめこまれたり、だまされたりするのは、ばかだけである。しかし、このような……「試み」のひとつが「失敗」したからといって、われわれの政策はいささかも動揺させられはしない。われわれは、ソヴェト権力とソヴェト社会主義建設との方針を変更させようとする企ては、どんなものでも断ちきるとともに、協同組合員との、中農との協定の政策を実行してきたし、今後も実行してゆくであろう。

小ブルジョア民主主義者の動揺は避けられない。チェコスロヴァキア軍が数回勝利しただけで、これらの民主主義者は恐慌をきたし、恐慌をひろめ、「勝利者」の側へはしり、ぺこぺこして彼らを迎えるのをはばからなかった。もちろん、いまでも、たとえばイギリス＝アメリカ＝クラスノーフの白衛軍が部分的な勝利をおさめでもしたら、たちまち彼らは反対の方向へ動揺しはじめるであろうし、恐慌が強まるであろうし、恐慌をひろめた事例、裏切りの事例、帝国主義者の側への寝がえり、等々の事例がふえるであろうということを、一瞬も忘れてはならない。

われわれはそれを知っている。われわれは今後もそれを忘れるまい。われわれのかちとった、半プロレタリアに支持されるソヴェト権力の純プロレタリア的な基盤は、今後も変わりなく強固なものであるだろう。われわれの軍勢はたじろぎはしない。われわれの軍隊は動揺しはしない。――このことをわれわれは経験によってすでに知っている。しかし、深刻きわまる世界史的変化が無党派の民主主義派や、メンシェヴィキ的、エス・エル的民主主義派の大衆を、不可避的にわれわれの側へ転換させているとき、われわれはこの転換を利用し、それを支持し、それぞれの集団や層

のなかに転換をおこさせ、これらの分子との協定を達成するためにやれることはなんでもやり、こうして社会主義建設の仕事をやりやすくし、社会主義の勝利を遅らせている苦しい荒廃、無知、無能力という重荷を軽くすることを、学びとらなければならないし、また学びとるであろう。

一九一八年一一月二〇日に執筆
一九一八年一一月二一日に新聞
『プラウダ』第二五二号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三七巻、一八八―一九七ページ所収
邦訳全集、第二八巻、一九一―二〇〇ページ所収

プロレタリア革命と背教者カウツキー(一)

序文

近ごろウィーンで出版されたカウツキーの小冊子『プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)』(ウィーン、一九一八年、イグナーツ・ブラント刊、六三ページ)は、すべての国の、すべての誠実な社会主義者がずっとまえから語ってきた第二インタナショナルの完全な、不名誉きわまる破産の、きわめて明瞭な一例である。プロレタリア革命の問題は、いま幾多の国々で実践的に日程にのぼっている。そこで、カウツキーの背教者的な詭弁とマルクス主義の完全な放棄とを検討する必要がある。

だが、はじめに強調しておかなければならないのは、本論の筆者は、カウツキーがマルクス主義と手を切ったことを、戦争の当初から幾度となく指摘してきたことである。国外で発行されていた『ソツィアル-デモクラート』と『コムニスト』(一〇)に一九一四—一九一六年にのった多くの論文は、このことにあてられていた。これらの論文はいっしょにして、ペトログラード・ソヴェトが出版したゲ・ジノヴィエフ、エヌ・レーニン共著『流れに抗して』、ペトログラード、一九一八年(五五〇ページ)におさめられている。一九一五年にジュネーヴで出版され、当時すぐにドイツ語とフランス語に翻訳されたある小冊子(一一)のなかで、私は「カウツキー主義」について次のように書いた。

「第二インタナショナルの最大の権威者カウツキーは、口さきでのマルクス主義の承認が、実際には、マルクス主義を『ストルーヴェ主義』または『ブレンターノ主義』(すなわち、プロレタリアートの非革命的な『階級』闘争を承認するブルジョア自由主義的学説で、ロシアの著作家ストルーヴェとドイツの経済学者ブレンターノがとくにはっきりと表明したもの)に変える結果になったというきわめて典型的で明瞭な一例である。同じことがプレハーノフの事例にも見られる。この連中は、見えすいた詭弁によって、マルクス主義からその革命的な、生きた魂を抜きとり、マルクス主義において、その革命的

な闘争手段、そうした手段の宣伝と準備、ほかならぬこの方向での大衆の教育を除けば、すべてを承認する。カウツキーは、この戦争での祖国擁護を承認するという社会排外主義の基本思想と、左派にたいする外交的な、見せかけの譲歩——軍事費の表決のさいに棄権したり、自分たちの反政府的立場を口さきで公言したり、等々するかたちでの——とを、無原則的なやり方で『和解させ』ている。一九〇九年には、革命の時代の切迫について、また戦争と革命の関連について、一巻の本を書いたカウツキー、一九一二年には、きたるべき戦争を革命的に利用するというバーゼル宣言[三]に署名したカウツキー、その彼が、いまは手をかえ品をかえて社会排外主義を正当化し美化し、プレハーノフと同じように、ブルジョアジーに同調して、あらゆる革命の思想、直接の革命闘争へのあらゆる歩みをあざわらっている。

　労働者階級は、この背教、無節操、日和見主義のご機嫌とり、マルクス主義の前例のない理論的卑俗化と容赦なくたたかわずには、自分の目標である世界革命を実現することはできない。カウツキー主義は偶然なものではなく、第二インタナショナルの諸矛盾から、すなわち、口さきでのマルクス主義への忠誠と行動のうえでの日和見主義への屈従との結合から生じた社会的産物である」(ゲ・ジノヴィエフ、エヌ・レーニン共著『社会主義と戦争』、ジュネーヴ、一九一五年、一三―一四ページ)[三]。

　さらに、一九一六年に書いた著書『資本主義の最新の段階としての帝国主義』(一九一七年にペトログラードで刊行)のなかで、私は、カウツキーの帝国主義にかんするあらゆる論議の理論上の虚偽をくわしく分析した。私は、カウツキーがくだした次のような帝国主義の定義をあげた。「帝国主義は、高度に発展した産業資本主義の産物である。帝国主義は、そこにどんな民族が住んでいるかにはかかわりなく、ますます大きな農業地域(傍点はカウツキーのもの)を併合し隷属させようとする、あらゆる産業資本主義的民族の志向である。[三]」私は、この定義がまったく誤っていること、それが、帝国主義の最も深刻な矛盾をあいまいにし、ついで日和見主義と和解するのに「適した」定義であることを示した。私は次のような自分の帝国主義の定義をかかげた。「帝国主義とは、独占体と金融資本との支配が成立して、資本の輸出が顕著な重要性をもつようになり、国際トラストによる世界の分割が始まり、巨大な資本主義諸国による地球の全領域の分割が完了した、そういう発展段階の資本主義である。[三]」私は、カウツキーの帝国主義批判がブルジョア的批判や小ブルジョア的批判にすら劣っていることを示した。

最後に、一九一七年八月と九月、すなわちロシアにプロレタリア革命（一九一七年一〇月二五日―一一月七日）が起こるまえに、私は、一九一八年はじめにペトログラードで刊行された小冊子『国家と革命。マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務』を書き、同書第六章「日和見主義者によるマルクス主義の卑俗化」で、カウツキーに特別の注意をはらって、彼がマルクスの学説をまったくゆがめ、これを日和見主義に偽造し、「口さきでは革命を承認しながら、実際にはそれを放棄した」ことを証明した(二)。

実質上、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）にかんする小冊子でカウツキーがおかした理論上の基本的な誤りは、私の小冊子『国家と革命』のなかでくわしく暴露しておいたマルクスの国家学説の日和見主義的歪曲にほかならない。

以上のことをあらかじめ注意しておくことが必要だったのは、ボリシェヴィキが国家権力を掌握し、そしてそのためにカウツキーから非難をうけるよりもずっとまえに私がカウツキーにその背教の罪を公然と問うていたことを、それが証明しているからである。

カウツキーはどのようにマルクスをありふれた自由主義者に変えたか

カウツキーが彼の小冊子のなかでふれている基本的な問題は、プロレタリア革命の根本的な内容の問題、すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の問題である。これは、あらゆる国にとって、とくに先進諸国にとって、とくに交戦諸国にとって、とくに現在にあっては、きわめて重要な意義をもっている問題である。これはプロレタリアートの階級闘争全体の最も主要な問題である、と言っても言いすぎではない。だから、この問題は注意ぶかく検討しなければならない。

カウツキーはつぎのように問題を提起している。「社会主義の両潮流」（すなわちボリシェヴィキと非ボリシェヴィキ）「の対立」は、「根本的に異なった二つの方法、民主主義的方法と執権的方法との対立である」（三ページ）と。

ついでに注意しておけば、カウツキーがロシアの非ボリシェヴィキ、すなわちメンシェヴィキとエス・エルを社会主義者とよぶのは、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争で彼らの占めている現実の地位をたよりにせずに、彼らの名称、すなわちことばをたよりとするもので

ある。なんとすばらしいマルクス主義の理解と適用ではないか！　だが、これについてはあとでもっとくわしく述べよう。

いまは、主要な点をとりあげなければならない。すなわち、「民主主義的方法と執権的方法」との「根本的な対立」というカウツキーの大発見がそれである。ここに問題の要点がある。ここにカウツキーの小冊子の全核心がある。そして、これは、カウツキーがベルンシュタインをはるかに追いこしたと認めなければならないほどの、とほうもない理論的混乱であり、マルクス主義の完全な放棄である。

プロレタリアートの執権の問題は、ブルジョア国家にたいするプロレタリア国家の関係の問題であり、ブルジョア民主主義にたいするプロレタリア民主主義の関係の問題である。このことは火を見るように明らかだと思われよう。ところが、カウツキーは、歴史の教科書を繰りかえすうちにひからびてしまった中学教師のように、かたくなに二〇世紀に背を向け、一八世紀に顔を向けて、絶対主義や中世的制度にたいするブルジョア民主主義の関係について、百ぺんも言われた古くさいことをもう一度、信じられないほど退屈に、多くの章節をつかってくどくどしゃべりたてるのだ！

じっさい、まるで寝言をもぐもぐ言っているみたいだ！

これは、なにが問題になっているのか、全然わかっていないということではないか。「民主主義の蔑視」（一一ページ）等々を説く人間がいるかのように見せかけようとするカウツキーのむだ骨おりは、微笑をさそうだけではないか。カウツキーがこんなくだらないおしゃべりで問題をあいまいにし、混乱させなければならないのは、彼が自由主義者ふうに民主主義一般の問題を提起して、ブルジョア民主主義の問題を提起しないからである。彼は、このブルジョア民主主義という正確な階級的概念さえ避けて、「社会主義以前の」民主主義について語ろうとつとめている。わがおしゃべり屋は、その小冊子のほとんど三分の一、すなわち六三ページのうちの二〇ページを、ブルジョアジーにははなはだ気持ちのよいおしゃべりでみたしている。というのは、このおしゃべりは、ブルジョア民主主義を美化するのも同然で、プロレタリア革命の問題をあいまいにしているからである。

だが、なんといっても、カウツキーの小冊子の表題は『プロレタリアートの執権』なのだ。これこそマルクスの学説の核心であることは、周知のとおりである。そこで、カウツキーは、テーマに縁のないおしゃべりをさんざんしたあとで、プロレタリアートの執権にかんするマルクスのことばを引用しないわけにはいかなかった。

「マルクス主義者」カウツキーがこれをやってのけた仕方といったら、まったくの喜劇である！　まあ聞きたまえ。「この見解」（カウツキーから民主主義の蔑視だときめつけられた見解）「は、カール・マルクスの一つのことばをよりどころにしている」——二〇ページに文字どおりこう書かれている。また六〇ページにもこのことを繰りかえして、「マルクスが一八七五年に一度手紙のなかでつかったプロレタリアートの執権という一片言」（文字どおりにそう書いている!!　des Wörtchens と）「を」（ボリシェヴィキが）「折よく思いだしたのだ」とさえ言っている。マルクスのこの「一片言」というのは、次のとおりである。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的執権以外のなにものでもありえない。（三）」

第一に、マルクスの革命的学説全体を総括している彼のこの著名な考察を、「一つのことば」とか、それどころか「一片言」とさえよぶことは、マルクス主義を愚弄することであり、それを完全に放棄することである。カウツキーがマルクスをほとんど暗記していること、カウツキーの書いたものすべてから判断すると、彼の机、あるいは頭のなかにはたくさんの木製の引きだしがあって、そのなかにはマルクスが書いたものが全部、引用するのにしごく便利なように、きちんと分類されていることを、忘れてはならない。プロレタリアートの執権については、マルクスもエンゲルスも、手紙のなかでも、著作のなかでも、何度も、パリ・コミューンのまえにも、とくにそのあとでも論じていることを、カウツキーが知らないはずがない。「プロレタリアートの執権」という定式が、ブルジョア国家機構を「打ち砕く」というプロレタリアートの任務を、歴史的にみていっそう具体的に、科学的にみていっそう精密に述べたものにすぎず、マルクスもエンゲルスも、この任務については、一八四八年の革命の経験を考慮にいれ、それ以上に一八七一年の革命の経験を考慮にいれながら、一八五二年から一八九一年まで、すなわち四〇年のあいだ論じていることを、カウツキーが知らないはずがない。

マルクス主義の経文読みであるカウツキーがマルクス主義をこのようにとほうもなくゆがめたことは、どう説明したらよいのか？　この現象の哲学的基礎を述べるとすれば、問題は弁証法を折衷主義や詭弁とすりかえることに帰着するであろう。カウツキーは、こういうすりかえの名人である。実践的＝政治的に言えば、問題は、日和見主義者にた

いするついしょう、すなわち結局はブルジョアジーにたいするついしょうに帰着するであろう。戦争が始まって以来、カウツキーは、いよいよ急速に進歩して、口さきではマルクス主義者だが、実際にはブルジョアジーの従僕であるというこの技術で、名人の域に達したのである。

カウツキーがプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)というマルクスの「一片言」にどんなにすばらしい「解釈」をあたえたかを見れば、このことはいっそうよく納得される。聞きたまえ。

「残念なことに、マルクスは、彼がこの執権(ディクタツーラ)をどう考えているかを、もっとくわしく示すことを怠った。……」(これは、背教者の徹頭徹尾うそっぱちの文句である。というのは、マルクスとエンゲルスは、まさに多くのきわめてくわしい指示をあたえているのに、マルクス主義の経文読みであるカウツキーは、それをわざと避けているからである。)「……文字どおりにとれば、執権(ディクタツーラ)ということばは民主主義の廃棄を意味する。だが、もちろん、このことばは、文字どおりにはまた、どんな法律にも拘束されない一個人の全一的権力(一)をも意味する。この全一的権力が専政と違う点は、それが恒常的な国家制度と考えられずに、一時的な応急策と考えられている点にある。『プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)』、したがって一個人ではなく一階級の執権(ディクタツーラ)、という表現だけからみても、マルクスが、この場合文字どおりの意味での執権(ディクタツーラ)を念頭においていたということはありえないのである。マルクスがここで言っているのは、統治形態のことではなく、プロレタリアートが政治権力を獲得したところではどこでも、かならずやってくるにちがいない、ある状態のことである。マルクスがここで統治形態を念頭においていたのでないことは、彼が、イギリスやアメリカではこの移行は平和的に、したがって民主主義的な方法によっておこなわれうる、という意見をもっていたことで、すでに証明されている。」(二〇ページ)

われわれはこの論議の全文をわざわざそっくり引用したが、それは、「理論家」カウツキーがどういう手口をつかっているかを、読者がはっきり見てとることができるようにするためであった。

カウツキーは、執権(ディクタツーラ)という「ことば」の定義から始めるというやり方で、この問題を取りあげることがよいと考えた。

けっこうだ。どういうやり方で問題を取りあげようと、それは各人の神聖な権利である。ただ、問題のまじめで、正直な取りあげ方と、ふまじめな取りあげ方とを区別することは必要である。右のようなやり方で問題を取りあげる

場合、まじめな態度をとろうと思う者は、この「ことば」に自分自身の定義をあたえなければなるまい。そうすれば、問題ははっきり、率直に提起されるであろう。カウツキーはそうはしていない。「文字どおりにとれば、執権（ディクタツーラ）ということばは民主主義の廃棄を意味する」と、彼は書いている。

第一に、これは定義ではない。執権（ディクタツーラ）の概念の定義を避けるのがカウツキーには好都合なのだとすれば、なぜ問題のこういう取りあげ方を選んだのか？

第二に、これは、明らかに正しくない。自由主義者ならば、「民主主義」一般をうんぬんするのは、当然である。マルクス主義者は、「どの階級のための？」という質問を提出することをけっして忘れないであろう。だれでも知っているように――そして、「歴史家」カウツキーもやはりご存じのことだが――、たとえば古代の奴隷の反乱は、いや、そこまでいかずとも彼らの激しい動揺でさえ、奴隷所有者の執権（ディクタツーラ）としての古代国家の本質を一挙に明るみにだしたのである。この執権（ディクタツーラ）は、奴隷所有者のあいだの、奴隷所有者のための民主主義を廃棄したであろうか？　そうでないことは、だれでも知っている。

「マルクス主義者」カウツキーはとほうもないたわごととうそを言ったのだが、これは彼が階級闘争を「忘れた」ためである。……

カウツキーの自由主義的ないつわりの主張を、マルクス主義的な正しい主張に変えるためには、つぎのように言わなければならない。執権（ディクタツーラ）は、他の諸階級にたいしてこの執権（ディクタツーラ）をおこなっている階級にとっては、かならずしも民主主義の廃棄を意味するものではない。しかしそれは、その執権（ディクタツーラ）のもとにある、あるいはその執権（ディクタツーラ）が向けられている階級にとっては、かならず民主主義の廃棄（あるいはそのきわめて本質的な制限――これも廃棄の一形態である）を意味する、と。

だが、この主張がどんなに真実であっても、これは執権（ディクタツーラ）の定義をあたえてはいない。

カウツキーの次の文句を吟味してみよう。

「……だが、もちろん、このことばは、文字どおりにはまた、どんな法律にも拘束されない一個人の全一的権力をも意味する。……」

ゆきあたりばったりにあちらこちらと鼻でつつきまわるめくらの小犬のように、カウツキーは、ここではからずも一つの正しい思想（すなわち、執権（ディクタツーラ）はどんな法律にも拘束されない権力である、という思想）につきあたったのであるが、しかし執権（ディクタツーラ）の定義はやはりあたえていない。おまけに彼は、執権（ディクタツーラ）が一個人の権力を意味するという、明らかな歴史的うそを言っている。これは文法的にも正し

くない。なぜなら、ひとにぎりの人間も、寡頭制も、一階級等々も、執権（ディクタツーラ）をおこなうことができるからである。

つぎにカウツキーは、執権（ディクタツーラ）と専政との区別を指摘している。だが、彼の指摘は明らかにまちがっているけれども、われわれの関心をひいている問題とはまったくかかわりがないので、それにはふれないことにしよう。二〇世紀から一八世紀へ向きをかえ、そして一八世紀から古代へ向きをかえるカウツキーの性癖は、周知のところである。だから、ドイツのプロレタリアートが執権（ディクタツーラ）を達成したあかつきには、この性癖を考慮にいれて、カウツキーをたとえば古代史の中学教師に任命するよう、われわれは希望する。専政についての小理屈をひねることでプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の定義を避けるというのは、極端な愚鈍か、でなければ拙劣きわまるぺてんである。

けっきょく、執権（ディクタツーラ）を論じることにとりかかったカウツキーは、見えすいたうそをさんざんしゃべりたてたが、どんな定義もあたえなかったのだ！　彼は、自分の知力をあてにしないで、自分の記憶にたよって、マルクスが執権（ディクタツーラ）について述べているあらゆる場合を、「引きだし」のなかから引っぱりだせばよかったのだ。そうすれば、きっと、次のような定義か、あるいは実質上それと一致する定義を得たことであろう。すなわち、

執権（ディクタツーラ）とは、直接に強力をよりどころにし、どんな法律にも拘束されない権力である。

プロレタリアートの革命的執権（ディクタツーラ）は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの強力によってたたかいとられ維持され、どんな法律にも拘束されない権力である。

ところが、この単純な真理、だれでも自覚した労働者（あらゆる国の社会帝国主義者のように、資本家に買収された小市民的ごろつきの上層ではなく、大衆の代表者）には火を見るように明らかなこの真理、自分の解放のためにたたかっている被搾取者の代表者にはだれにも明白なこの真理、だれでもマルクス主義者には争う余地のないこの真理を、いとも博学なカウツキー君から「たたかいによって奪いかえさ」なければならないのだ。どうしてこういうことになったのか？　それは、いやしむべきおべっかつかいとなって、ブルジョアジーの御用をつとめている第二インタナショナルの指導者たちには、下僕根性がしみこんでいるからである。

まずはじめにカウツキーは、執権（ディクタツーラ）ということばの文字どおりの意味は単独の執権者（ディクタトル）を意味するという明らかなたわごとを述べて、すりかえをやり、つぎに――このすりかえをもとにして――「だから」階級の執権（ディクタツーラ）というマルクスのことばは文字どおりの意味をもってはいないと言明す

るのである（そうではなくて、それのもっている意味は、執権（ディクタツーラ）が革命的強力を意味せずに、ブルジョア――これに注意せよ――「民主主義」のもとで多数者を「平和的に」獲得することを意味するような、そういう意味なのだ。）

諸君、よろしいか、「統治状態」と「統治形態」とを区別しなければならない、というのだ。驚くほど深遠な区別である。まったくこれは、ばかげた議論をする人間の愚鈍の「状態」と彼の愚鈍の「形態」とを区別するようなものである。

カウツキーには、執権（ディクタツーラ）を「支配の状態」（この表現を、彼はすぐ次の二一ページで文字どおりつかっている）と解釈することが必要である。そうすれば、革命的強力が消えてなくなり、強力革命が消えてなくなるからである。「支配の状態」とは、どんなものであれ、あらゆる多数者が……「民主主義」のもとでつねにおかれている状態である。こういうぺてん師的な手品によって、革命がうまいぐあいに消えてなくなる！

だが、このぺてんはおそまつすぎて、カウツキーを救ってはくれない。執権（ディクタツーラ）が、背教者には不愉快なことだが、一階級の他の階級にたいする革命的強力の「状態」を前提し、また意味するということ、これは「袋のなかの錐（きり）は隠しても現われる」のたとえのとおりである。「統治状態」と「統治形態」とを区別するのがばかげていることは、すぐに目につく。ここで統治形態をうんぬんするのは、幾重にもばかげている。というのは、君主制と共和制とが異なった統治形態であることは、どんなこどもでも知っているからである。カウツキー君に、この二つの統治形態が、資本主義のもとでのすべての過渡的な「統治形態」がそうであるように、ブルジョア国家すなわちブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）の変種にすぎないことを証明してやる必要がある。

最後に、統治形態をうんぬんすることは、ばかげた仕方というだけでなく、まずいやり方でマルクスを偽造することである。マルクスはここで、統治形態についてではなく、このうえなくはっきりと、国家の形態または型について論じているからである。

プロレタリア革命は、ブルジョア国家機構を強力的に破壊して、それをエンゲルスのことばを借りれば「もはや本来の意味の国家でない」[19]新しい国家機構とおきかえることなしには、不可能である。

カウツキーは、すべてこうしたことをぼやかして、うそをつかなければならない――彼の背教者としての立場がそれを要求するのである。

彼がどんなあわれむべき逃げ口上に訴えているか、見るがよい。

第一の逃げ口上。「……マルクスがこの場合統治形態を念頭においていたのでないことは、彼が、イギリスやアメリカでは平和的な変革、すなわち民主主義的な方法による変革が可能だと考えていたことで、証明されている。……」

統治形態などは、ここにはまったくなんの関係もない。というのは、ブルジョア国家としては典型的でない、たとえば軍閥のいないことを特色とする君主制もあれば、この点で完全に典型的な、たとえば軍閥や官僚制度をそなえた共和制もあるからである。これは、歴史上および政治上の周知の事実であって、カウツキーがこの事実を偽造しようとしても、うまくはいかないであろう。

もしカウツキーが、まじめに、正直に論じようと思ったなら、彼は自問したであろう。革命に関係のある歴史的法則で、例外のないものがあるだろうか、と。いや、そんな法則はない、というのが、答えであったろう。そういう法則は、典型的なもの、すなわち、マルクスがかつて、平均的な、正常な、典型的な資本主義という意味で「理想的」資本主義とよんだものだけを念頭においているのである。

つぎに、一八七〇年代には、いま論じている点について、イギリスやアメリカを例外とならせるようなものが、なにかあったであろうか？　こういう質問を提出しなければならないことは、歴史的問題の分野での科学の要求をいくらかでも知っている者なら、だれにでも明白である。この質問を提出しないのは、科学を偽造することを意味し、詭弁をもてあそぶことを意味する、そして、この質問を提出したなら、その答えについてはすこしの疑う余地もない。プロレタリアートの革命的執権（ディクタツーラ）はブルジョアジーにたいする強力である、というのが、それである。ところが、この強力が必要となるのは、マルクスとエンゲルスが非常にくわしく、また何度も説明した（とくに『フランスにおける内乱』とその序文で）ように、とりわけ軍閥と官僚制度が存在することによるのである。まさにこれらの制度が、まさにイギリスとアメリカには、まさにマルクスがこの意見を述べた一九世紀の七〇年代には、なかったのである！（ところが、いまでは、イギリスにもアメリカにもそれがある。）

カウツキーは、自分の背教を隠すために、文字どおり一歩ごとにぺてんをやらなければならない！

それに、彼がここで思わず知らず自分の馬脚をあらわしていることに注意されたい。彼は、「平和的に、すなわち民主主義的な方法で」と書いている!!

執権（ディクタツーラ）を定義するさい、カウツキーは、この概念の基本的な標識、すなわち革命的強力を読者にたいしてひたかくしに隠すことに、全力をつくした。だが、いまや真実が明

るみにでた。平和的変革と強力的変革との対立が問題なのだ。

ここに問題の眼目がある。すべての逃げ口上、詭弁、ぺてん師的偽造がカウツキーに必要なのは、まさに強力革命を拒否するためであり、自分が強力革命を放棄したこと、自由主義的労働者政治の側へ、すなわちブルジョアジーの側へ移ったことをおおいかくすためなのだ。ここに問題の眼目がある。

「歴史家」カウツキーは、恥しらずに歴史を偽造している。独占以前の資本主義――その絶頂はまさに一九世紀の七〇年代にあたっていた――が、イギリスとアメリカにとくに典型的に現われた根本的な経済的特性のおかげで、相対的にいって最大の平和愛好と自由愛好を特徴としていたという基本的なことを「忘れてしまう」のである。ところが、帝国主義、すなわち二〇世紀にやっと最後的に成熟した独占資本主義は、その根本的な経済的特質のために、最小の平和愛好と自由愛好を特徴とし、軍閥がいたるところで最大の発展をとげることを特徴としている。平和的変革、または強力的変革がどれほど典型的か、あるいはどれほど起こりそうかを考察しながら、このことに「気がつかない」のは、ブルジョアジーのありふれた下僕になりさがることを意味する。

第二の逃げ口上。パリ・コミューンはプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)であったが、このコミューンは、普通選挙によって、すなわちブルジョアジーから選挙権を奪うことなしに、すなわち「民主主義的に」選出された。そこで、カウツキーは意気揚々と言う。「……プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)は、マルクスにとっては」(つまり、マルクスによれば)「プロレタリアートが多数者をなす場合に」(bei überwiegendem Proletariat, S. 21)、「純粋民主主義から必然的に生まれてくる状態であった」と。

カウツキーのこの論拠はまったく滑稽なので、人々はじっさい、ほんとうの embarras des richesses(ありあまって多すぎるための困惑……反論が)を感じることだろう。第一に、ブルジョアジーの精華、幹部、上層部がパリからヴェルサイユへ逃亡したことは、よく知られている。ヴェルサイユには、「社会主義者」のルイ・ブランがいたが、このことは、とりわけ、コミューンには社会主義の「あらゆる潮流」が参加していたというカウツキーの主張がうそであることを、示している。パリの住民が二つの相戦う陣営に分かれ、その一つが戦闘的で、政治的に積極的なブルジョアジーの全体を結集していたことを、「普通選挙」をともなう「純粋民主主義」のように描くのは、滑稽ではないか?

第二に、コミューンは、ブルジョア政府に対抗するフランスの労働者政府として、ヴェルサイユとたたかったのである。パリがフランスの運命を決定しつつあったときに、「純粋民主主義」や「普通選挙」がこれにいったいどんな関係があるのか？　マルクスが、コミューンが全フランスに属する銀行を掌握しなかったのは誤りであったと考えた[三]とき、マルクスは、「純粋民主主義」の原則と実践から出発したのではあるまいか??

じっさい、カウツキーは、人々が「いっしょに」どっと笑うことが警察から禁止されているような国でものを書いていることは、明らかだ。でなければ、彼は笑い殺されたことだろう。

第三に、マルクスとエンゲルスを暗記しているカウツキー君に、失礼ながら、エンゲルスが……「純粋民主主義」の見地からコミューンをつぎのように評価したことに、注意をうながそう。

「これらの紳士諸君」（反権威主義者）「は、革命というものを一度も見たことがないのだろうか？　革命は、たしかに、およそあらゆるもののなかで最も権威的な事柄である。革命は、住民の一部が、小銃や銃剣や大砲、つまりきわめて権威的な手段を使って、住民の他の部分に自分の意志を押しつける行為である。そして、勝利した党派は、その武器が反動どもに呼びおこす恐怖によって、自分の支配を維持しなければならない。パリ・コミューンが武装した人民のこの権威をブルジョアにたいして行使しなかったなら、それは、ただの一日でももちこたえたであろうか？　それどころか、われわれはコミューンがこの権威を行使しなさすぎたことで、それを責めてよいのではなかろうか？」[三]

これが、「純粋民主主義」だというのだ！　そもそも諸階級に分かれた社会において、「純粋民主主義」を口にすることを思いつくような卑俗な小市民を、「社会民主主義者」（四〇年代にフランスでつかわれ、また一九一四—一九一八年に全ヨーロッパでつかわれた意味での社会民主主義者[三]）を、エンゲルスはどんなにあざわらうことだろう！

だが、もうたくさんだ。カウツキーがしゃべりたてているばかげたことをいちいち全部かぞえあげるのは、不可能である。なぜなら、彼の口にする一句一句に、背教の底しれない深淵がひそんでいるからである。

マルクスとエンゲルスは、パリ・コミューンをきわめてくわしく分析して、コミューンの功績は、コミューンが「できあいの国家機構」[三]を粉砕し打ち砕こうと企てた点にあることを示した。マルクスとエンゲルスは、この結論をたいへん重要なものだと考えたので、一八七二年に、『共

産党宣言』の（部分的に）「時代おくれになった」綱領に、この修正だけをとりいれたほどである。(註)マルクスとエンゲルスは、コミューンが軍隊と官僚制度を廃止し、議会制度を廃止し、「寄生する肉瘤たる国家」を破壊し等々したことを示した。ところが、いとも賢明なカウツキーは、ナイト・キャップをかぶったまま、自由主義的な教授連が千回も言ってきたこと――すなわち「純粋民主主義」にかんするおとぎ話を、繰りかえしている。

ローザ・ルクセンブルクが一九一四年八月四日に、ドイツ社会民主党はいまや悪臭紛々たる屍である、と言ったのは、もっともであった。

第三の逃げ口上。「もし、統治形態としての執権について語るとすれば、階級の執権をうんぬんすることはできない。なぜなら、すでに指摘しておいたように、階級は、支配することができるだけで、統治することはできないからである。……」統治するのは「組織」または「党」である、と。

「混乱屋」君、君は混乱している、手のつけられないほど混乱している！　執権は「統治形態」ではない。そんなことを言うのは、滑稽なたわごとである。マルクスが論じているのは、統治形態についてではなく、国家の形態または型についてなのだ。これは、まったく違ったものである、まったく違ったものである。階級は統治することができないというのも、まったくまちがっている。こういうたわごとを言うことができるのは、ブルジョア議会のほかにはなにものも見ず、「支配政党」のほかにはなにものも心にとめない「議会クレティン病患者」だけである。ヨーロッパのどの国も、支配階級がその国を統治した実例を、たとえば、中世には地主が、その不十分な組織性にもかかわらず、統治した実例を、カウツキーに示すであろう。

要約しよう。カウツキーは、プロレタリアートの執権の概念をまったく前代未聞のやり方でゆがめ、マルクスをありふれた自由主義者に変えてしまった。すなわち、「純粋民主主義」についての俗悪な文句をしゃべりたてて、ブルジョア民主主義の階級的内容を美化し、あいまいにし、被抑圧階級による革命的強力をなによりも忌みきらう、あの自由主義者の水準に、彼自身ころがりおちてしまった。カウツキーが、「プロレタリアートの革命的執権」の概念を、抑圧者にたいする被抑圧階級の革命的強力が消えてなくなるような仕方で「解釈した」とき、マルクスを自由主義的にゆがめる点で世界記録が破られた。背教者ベルンシュタインは、背教者カウツキーにくらべれば、駆けだしのぺいぺいであることがわかった。

ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義

カウツキーが手のつけられないように混乱させた問題は、実際にはつぎのようになっている。

常識と歴史を愚弄するのでないかぎり、いろいろな階級が存在するあいだは、「純粋民主主義」について語ることはできず、階級的民主主義について語りうるだけであるのは、明らかである。(ついでに言えば、「純粋民主主義」とは、階級闘争も国家の本質も理解していないことをさらけだした無知な文句であるばかりでなく、さらに幾重にも無内容な文句である。というのは、共産主義社会では、民主主義は生まれ変わり、習慣となって、死滅してゆくが、けっして「純粋」民主主義にはならないからである。)

「純粋民主主義」とは、労働者を愚弄する自由主義者のごまかし文句である。歴史上に知られているのは、封建制度にとってかわるブルジョア民主主義と、ブルジョア民主主義にとってかわるプロレタリア民主主義とである。

カウツキーは、ブルジョア民主主義が中世的制度にくらべれば進歩的であって、プロレタリアートは、ブルジョアジーにたいする闘争でかならずブルジョア民主主義を利用しなければならないという真理を「証明する」のに、ほとんど数十ページも費やしているが、これこそ労働者を愚弄する自由主義的なおしゃべりである。教養のあるドイツだけでなく、教養のないロシアでも、これはわかりきった真理である。カウツキーは、近代的民主主義すなわち資本主義的民主主義のブルジョア的本質にふれずにすませるために、もったいぶった様子でヴァイトリングやら、パラグアイのイエズス会派やら、その他あれこれとしゃべりたて、労働者にまさしく「博学」の目つぶしをくわせている。

カウツキーは、マルクス主義のうちから、自由主義者にとって、ブルジョアジーにとってうけいれうるもの(中世的制度の批判、一般に資本主義の、とくに資本主義的民主主義の進歩的な歴史的役割)をとりあげ、ブルジョアジーにとってうけいれえないもの(ブルジョアジーを滅ぼすためにプロレタリアートがブルジョアジーに向ける革命的強力)をマルクス主義のなかから捨てさり、それについては口をつぐみ、それをあいまいにしている。だからこそ、カウツキーは、その主観的信念がどうであれ、その客観的立場からみて、不可避的にブルジョアジーの下僕となるのである。

ブルジョア民主主義は、中世的制度にくらべれば大きな歴史的進歩であるとはいえ、依然として狭い、切りちぢめ

られた、いつわりの、偽善的な民主主義であり、金持にとっての天国、被搾取者、貧民にとってのわな、欺瞞である。そして、資本主義のもとでは、そうならざるをえないのだ。マルクス主義学説の最も本質的な構成部分となっているこの真理、まさにそれを、「マルクス主義者」カウツキーは理解しなかった。まさにこの――根本的な――問題で、カウツキーは、あらゆるブルジョア民主主義を金持のための民主主義にしている諸条件を科学的に批判することをせずに、ブルジョアジーにとって「好ましいもの」を提供している。

　われわれは、まずはじめに、この経文読みが（ブルジョアジーの気にいるように）恥さらしにも「忘れている」マルクスとエンゲルスの理論的発言をいとも博学なカウツキー君に思いださせ、つぎに、問題をできるだけわかりやすく説明しよう。

　古代国家や封建国家だけでなく、「近代の代議制国家」もまた、「資本が賃労働を搾取する道具である」（エンゲルスの国家にかんする著作[三四]）。「ところで、国家は、闘争において、革命において、敵を強力的に抑圧するために用いられる一時的な制度にすぎないのですから、自由な人民国家をうんぬんするのは、まったく無意味です。プロレタリアートがまだ国家を必要とするあいだは、自由のためにではなく、自分の敵を抑圧するためにそれを必要とするのであって、自由について語ることができるようになるやいなや、国家としての国家は存在しなくなります」（エンゲルス、一八七五年三月二八日付のベーベルあての手紙[三五]）。「国家は、一階級が他の一階級を抑圧するための機構にほかならないのであって、しかもこの点では、民主的共和制も、君主制となんら選ぶところがないのである」（マルクスの『フランスにおける内乱』へのエンゲルスの序文[三六]）。普通選挙権は「労働者階級の成熟度の計測器である。それは、今日の国家ではそれ以上のものにはなりえないし、またけっしてならないであろう」（エンゲルスの国家にかんする著作[三七]。カウツキー君は、この命題のうち、ブルジョアジーにうけいれうる前半部を、退屈きわまる仕方で、噛んでふくめるように説明する。これに反して、われわれが強調した、ブルジョアジーにはうけいれえない後半部については、背教者カウツキーは口をつぐむのである！）「コミューンは、議会ふうの機関ではなくて、同時に執行し立法する行動的機関でなければならなかった。……普通選挙権は、支配階級のどの成員が議会で人民を代表し、そして踏みにじる(ver- und zertreten) べきかを、三年ないし六年に一度きめるのではなくて、およそどこかの雇い主がその事業のために労働者や監督や簿記係をさがすさいに個人的選択権が

彼の役に立つのと同じ仕方で、コミューンに組織された人民の役に立たなければならなかった」（マルクスのパリ・コミューンにかんする著作『フランスにおける内乱』[三九]）。

いとも博学なカウツキー君がよく知っているこれらの命題の一つ一つが、彼に平手打ちを食わせ、その背教ぶりをあますところなく暴露している。カウツキーの小冊子全体をつうじて、これらの真理を理解した形跡は露ほどもない。彼の小冊子の全内容は、マルクス主義にたいする愚弄である！

近代国家の基本法をとりあげてみたまえ。その統治ぶりをとりあげてみたまえ。集会または出版の自由をとりあげてみたまえ。「法律のまえでの市民の平等」をとりあげてみたまえ。——そうすれば、諸君は、誠実で自覚した労働者ならだれでもよく知っているブルジョア民主主義の偽善を、一歩ごとにどの国家にも見いだすであろう。どんなに民主主義的な国家であろうと、「秩序が破壊された場合に」——実際には、被搾取階級が自分の奴隷的地位を「破壊し」、非奴隷的にふるまおうと企てた場合に、労働者に軍隊をさしむけたり、戒厳を宣告したり、等々する可能性をブルジョアジーに保障している抜け道または但し書きが憲法のなかに設けられていないような国家は、ひとつもない。カウツキーは、恥しらずにもブルジョア民主主義を美化して、たとえばアメリカまたはスイスの最も民主主義的で共和主義的なブルジョアでさえストライキ労働者にたいしてなにをやっているかについては、口をつぐんでいる。

ああ、賢明で博学なカウツキーが、このことについて口をつぐんでいるのだ！　このことについて口をつぐんでいるのは卑劣だということが、この博学な政治家にはわからない。彼は、民主主義とは「少数者の保護」を意味するというようなおとぎ話を労働者に話してやるほうが好きなのだ。信じられないことだが、これは事実である！　西暦一九一八年の夏に、すなわち世界的な帝国主義的屠殺の五年目、世界のすべての「民主主義国」で国際主義的な（すなわち、ルノデル、ロンゲら、シャイデマン、カウツキーら、ヘンダソン、ウェッブらのように社会主義を卑劣に裏切ることをしなかった）少数派が圧殺されだしてから五年目に、博学なカウツキー君は、あまったるい、あまったるい声をはりあげて、「少数者の保護」を歌うのである。ご希望の方は、カウツキーの小冊子の一五ページでこれを読むことができる。そして、一六ページを見れば、この博学な……[四〇]人間は、イギリスの一八世紀のウイッグ党とトーリ党の話をしてくれるであろう！

おおこれは、なんと博学なことだろう！　ブルジョアジーにたいするなんと洗練されたついしょうぶりだろう！

資本家のまえに這いつくばって、彼らの靴を嘗める、なんと開化したやり方だろう！　もし私がクルップかシャイデマン、またはクレマンソー、またはルノデルだったら、私はカウツキー君に数百万金をくれてやり、ユダの接吻をおくり、労働者のまえで彼をほめちぎり、カウツキーのような「尊敬すべき」人々との「社会主義の統一」をはかるように勧めるだろう。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）に反対する小冊子を書き、イギリスの一八世紀のウイッグ党とトーリ党の話をし、民主主義とは「少数者の保護」を意味すると説き、しかも「民主的」共和国アメリカで国際主義者にくわえられているポグロム(三一)については口をつぐんでいること――これは、ブルジョアジーへの下僕的奉仕ではなかろうか？

博学なカウツキー君は「ちょっとしたこと」を「忘れた」――たぶん、偶然に忘れたのであろう。……――すなわち、ブルジョア民主主義の支配政党が少数者の保護をあたえるのは、他のブルジョア政党にたいしてだけであって、他方、あらゆる重大な、深刻な、根本的な問題のさいにプロレタリアートにあたえられるのは、「少数者の保護」ではなくて、戒厳あるいはポグロムであるということ、これである。民主主義が発展すればするほど、ブルジョアジーにとって、危険なあらゆる深刻な政治的不一致のさいに、ポグロムまたは内乱がそれだけさしせまったものになる。博学なカウツキー君は、共和国フランスにおけるドレフュス事件(三二)や、民主的共和国アメリカにおける黒人や国際主義者のリンチや、民主国イギリスにおけるアイルランドとアルスターの実例(三三)や、民主的共和国ロシアにおける一九一七年四月のボリシェヴィキの迫害と彼らにたいするポグロムの組織によって、ブルジョア民主主義のこの「法則」を観察できたであろうに。私は、わざと戦時だけでなく、戦前の平和な時代からも例をとっている。あまったるいカウツキー君にとっては、二〇世紀のこれらの事実には目をつぶり、そのかわりに、一八世紀のウイッグ党とトーリ党について、驚くほど新しい、すばらしく興味ぶかい、非常に教訓に富んだ、信じられないほど重大な事柄を、労働者にものがたることが好ましいのである。

ブルジョア議会をとってみたまえ。博学なカウツキー君が次のことを聞いたことがないなどと、考えることができるだろうか？　民主主義が高度に発展していればいるほど、取引所や銀行家がそれだけしっかりとブルジョア議会を自分に従属させるということを。このことから、ブルジョア議会制度を利用してはならないという結論はでてこない（ボリシェヴィキは、世界中の他のどの党もおよばないほど、ブルジョア議会制度をうまく利用した。というのは、一九一二―一九一四年に、われわれは第四国会で労働者ク

ーリヤ全体を獲得したからである)。だが、このことからして、カウツキーが忘れているように、ブルジョア議会制度の歴史的な限界と制約性とを忘れることができるのは、自由主義者だけだ、という結論がでてくる。どんなに民主的なブルジョア国家でも、被抑圧大衆は、資本家の「民主主義」が宣言する形式的な平等と、プロレタリアを賃金奴隷にならせている何千という事実上の制限や手くだとのあいだのはなはだしい矛盾に、一歩ごとにぶつかっている。まさにこの矛盾が、資本主義の腐敗、虚偽、偽善にたいして大衆の目をひらかせるのである。社会主義の扇動家や宣伝家は、大衆に革命の準備をさせるために、たえず大衆にむかってほかならぬこの矛盾を暴露している！　ところが、革命の時代が始まったとき、カウツキーはこの時代に背を向けて、死滅しつつあるブルジョア民主主義の美点を賛美しだしたのである。

ソヴェト権力をその一形態とするプロレタリア民主主義は、まさに住民の大多数のための、被搾取勤労者のための民主主義を、世界にかつてなかったほどに発展させ拡大した。カウツキーのやっているように、民主主義について一巻の小著を書き、そのなかで執権(ディクタツーラ)についてはニページだけ述べ、「純粋民主主義」については数十ページにわたって論じながら、このことに気がつかないということは、問題を自由主義者ふうにまったくゆがめることを意味する。

対外政策をとってみたまえ。ブルジョア国では、どんなに民主的な国でも、対外政策が公然とおこなわれているところはない。どこでも大衆はだまされている。民主的なフランス、スイス、アメリカ、イギリスでは、他の国々におけるよりも百倍も大がかりに、手のこんだやり方でだまされている。ソヴェト権力は、対外政策から秘密のヴェールを革命的にはぎとった。カウツキーはこのことに気がつかなかった。彼はこれについては口をつぐんでいる。しかも、このことは、平和の問題、数千万の人間の生死の問題を左右するものなので、略奪戦争と「勢力範囲の分割」についての(すなわち、強盗資本家による世界の分割についての)秘密条約との時代には、基本的な意義をもっているのである。

国家組織をとってみたまえ。カウツキーは、(ソヴェト憲法では)選挙が「直接選挙でない」ということまでふくめて、「瑣末なこと」には目をつけるが、問題の核心を見ない。彼は、国家機構や国家機関の階級的本質には気がつかない。ブルジョア民主主義のもとでは、資本家は何千というトリックで――「純粋」民主主義が発展していればいるほど、ますます巧妙で効果の確実なトリックで――大衆を統治への参加から押しのけ、集会・出版などの自由から

押しのける。ソヴェト権力は、世界ではじめて（厳密にいえば、第二回目に。パリ・コミューンが同じことをやりはじめていたからである）大衆、ほかならぬ被搾取大衆を統治に参加させている。ブルジョア議会（これは、ブルジョア民主主義における最も重大な問題を決定することはけっしてない、そういう問題を決定するのは、取引所であり、銀行である）への参加を、勤労大衆は何千という垣でさえぎられている。そして労働者は、ブルジョア議会が無縁な施設であり、ブルジョアジーがプロレタリアを抑圧する道具であり、敵階級である少数の搾取者の施設であることを、すばらしくよく知っており、感じており、目で見、肌で感じている。

ソヴェトは、勤労被搾取大衆自身の直接の組織であって、彼らが自分で国家を整備し、統治するのを、ありとあらゆる手段で容易にする。この場合、ほかならぬ勤労被搾取者の前衛である都市プロレタリアートが、大企業によってだれよりもよく統合されているという利点をもっている。選挙したり、被選出者を監視したりすることは、彼らには他の者よりも容易である。ソヴェト組織は、すべての勤労被搾取者をその前衛であるプロレタリアートの周囲に統合することを、自動的に容易にする。旧来のブルジョア機構である官吏制度や、富、ブルジョア的教育、手づるその他の特権（これらの事実上の特権は、ブルジョア民主主義が発展していればいるほど、それだけ多種多様になる）——すべてこうしたものは、ソヴェト組織のもとではなくなる。印刷所と紙がブルジョアジーから取りあげられるので、出版の自由は偽善ではなくなる。りっぱな建物、宮殿、邸宅、地主邸についても同様である。ソヴェト権力は、こういうりっぱな建物を何千何万となく搾取者から一挙に取りあげ、こうして、大衆にとっての集会の権利を百万倍も「民主的」にした。しかも、この集会の権利がなければ、民主主義は欺瞞である。地区的、地域的ソヴェト以外のソヴェトの選挙が間接におこなわれることは、ソヴェト大会の開催を容易にする。そのことはまた、世の中が沸きかえっていて、自分の地区の代議員をリコールしたり、ソヴェト全国大会に代議員を派遣したりすることをとくに急速におこなえることが必要な時期には、機構全体をより安あがりにし、より機動的にし、労働者と農民にとっていっそう近づきやすいものにする。

プロレタリア民主主義は、どんなブルジョア民主主義よりも百万倍も民主的である。ソヴェト権力は、最も民主主義的なブルジョア共和国よりも、百万倍も民主的である。

このことに気がつかずにいられるのは、ブルジョアジーの意識的な召使いか、でなければ、ほこりだらけのブルジ

ョア的書物のかげにいて実生活が見えず、ブルジョア民主主義的偏見に骨の髄まで染まっているため、客観的にブルジョアジーの下僕になりさがっている、政治的にまったく死んだ人間だけである。

このことに気がつかずにいられるのは、被抑圧階級の立場から次の問題を提起することのできない人間だけである。すなわち、

普通のなみの労働者や、普通のなみの雇農または一般に農村の半プロレタリア（すなわち、被抑圧大衆の、住民の大多数者の典型的な分子）が、りっぱな建物のなかで集会をひらく自由、自分の考えを表明し自分の利益を守るために、巨大な印刷所とりっぱな用紙倉庫をもつ自由、ほかならぬ自分の階級の人々を抜擢して、国家の統治や国家の「整備」にあたらせる自由を、ソヴェト・ロシアに近い程度にでももっている国が、世界中に、最も民主的なブルジョア国のうちに、一国でもあるだろうか？

どこかの国で、世間のことに通じた労働者や雇農のあいだに、たとえ一〇〇〇人に一人でも、この質問の答えに迷うような者を、カウツキー君が見つけるだろうと考えるなら、それは滑稽である。全世界の労働者が、ブルジョア新聞にのった真実の告白の切れっぱしを聞き知って、本能的にソヴェト共和国に共鳴しているのは、彼らが、ソヴェト共和国のうちに、金持のための民主主義——あらゆるブルジョア民主主義は、その最良のものでさえ、実際にはこういうものである——ではなく、プロレタリア民主主義、貧乏人のための民主主義を見ているからにほかならない。

われわれを統治しているのは（そしてわれわれの国家を「整備」しているのは）、ブルジョア官吏、ブルジョア代議士、ブルジョア裁判官である。これは、簡単明瞭で、争う余地のない真理であって、最も民主的な国をもふくむあらゆるブルジョア国で、被抑圧階級の何千万、何億の人々が、自分の生活上の体験でこれを知っており、日々にこれを感じ、肌で感じとっている。

ところが、ロシアでは、官僚機構は完全に粉砕され、一物も残さず破壊しつくされ、旧来の裁判官はみな追放され、ブルジョア議会は解散された。——そして、ほかならぬ労働者と農民にたいして、はるかに近づきやすい代議制度があたえられ、彼らのソヴェトが官吏のうえにすえられ、彼らのソヴェトが裁判官の選挙人とされた。この事実一つだけでも、すべての被抑圧階級に、ソヴェト権力、すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の現存の形態が、最も民主的なブルジョア共和国よりも百万倍も民主的であることを、認めさせるのに十分である。

どんな労働者にでも理解できる、この明白な真理が、カウツキーにはわからない。なぜなら、彼は、どの階級のための民主主義か、という問題を提出することを「忘れ」、「習ったのに忘れた」からである。彼は「純粋」（すなわち無階級的な？　あるいは超階級的な？）民主主義の見地から論じる。彼は、シャイロックのように論じる。(註)「一ポンドの肉」、そのほかのものはなにもいらない、すべての市民の平等――そうでなければ、民主主義はない、と。

博学なカウツキー、「マルクス主義者」で「社会主義者」のカウツキーに次のような質問を提出しなければならない。

搾取者と被搾取者との平等はありうるか、と。

第二インタナショナルの思想上の指導者の著書を検討するさいに、こういう質問をださなければならないというのは、法外な、とうていありそうもないことである。だが「乗りかけた船」のたとえがある。カウツキーについて書きかけた以上、この博学な人に、なぜ搾取者と被搾取者との平等がありえないかを説明してやらなければならない。

搾取者と被搾取者との平等はありうるか？

カウツキーはつぎのように論じている。

（一）「搾取者は、つねに住民のうちのごく少数を占めるだけであった」（カウツキーの小著の一四ページ）。

これは、争う余地のない真理である。では、この真理から出発して、どう論じるべきか？　マルクス主義者、社会主義者として論じることもできる。そのときには、搾取者と被搾取者との関係を基礎としなければならない。また、自由主義者、ブルジョア民主主義者として論じることもできる。そのときには、少数者と多数者との関係を基礎としなければならない。

マルクス主義者として論じるなら、こう言わなければならない。搾取者は、国家（ここでは民主主義、すなわち国家形態の一つが問題になっている）を、かならず自分の階級すなわち搾取者が被搾取者を支配するための道具に転化させるであろう。だから、多数者である被搾取者を支配する搾取者がいるかぎり、民主主義国家も、かならず搾取者のための民主主義となるであろう。被搾取者の国家は、そのような国家とは根本的に異なったものでなければならない。それは、被搾取者のための民主主義、搾取者にたいする抑圧でなければならない。ところが、一階級にたいする抑圧とは、その階級を不平等の地位におくこと、その階級を「民主主義」から除外することを意味する、と。

自由主義者として論じるなら、こう言わなければならない。多数者が決定し、少数者は服従する。服従をこばむ者は罰せられる、と。それだけである。一般に国家の、とくに「純粋民主主義」の、階級的性格などを論じるにはおよばない。そんなことは問題に関係がない。なぜなら、多数者は多数者であり、少数者は少数者だからである。一ポンドの肉は一ポンドの肉である、それでおしまいだ、と。

カウツキーは、まさにそういうやり方で論じている。

(二)「どういう理由でプロレタリアートの支配は、民主主義とあいいれない形態をとる必要があるのか、またとらざるをえないのか?」(二一ページ)これにつづけて、プロレタリアートは多数者を味方にもっていることの説明がある。この説明は、非常に詳細をきわめ、たいへんくどくどしく、マルクスからの引用もあれば、パリ・コミューンの投票数もあげられている。その結論はこうである。「大衆のあいだにこのようにしっかりと根をおろしている政権には、民主主義を侵害しなければならない動機はなにもない。このような政権も、いつでも強力を用いずにすませるわけにはいかないであろう。つまり、民主主義を圧迫するために暴力が用いられるような場合には、強力なしにはすませないであろう。暴力にこたえることのできるのは、強力だけである。だが、大衆が背後に従っていることを知っている政権は、民主主義を廃止するためではなく、それを保護するためにしか、強力を行使しないであろう。もしこの政権が、自分の最も確実な基礎であり、力づよい道徳的権威の深い源泉である普通選挙権を廃止しようとするならば、それはまことに自殺行為であろう。」(二二ページ)

ごらんのように、カウツキーの論証では、搾取者と被搾取者との関係は消えてなくなっている。あとに残っているのは、多数者一般、少数者一般、民主主義一般、すでにわれわれにおなじみの「純粋民主主義」だけである。

これがパリ・コミューンに関連して述べられている点に、よくご注意ねがいたい! そこで、問題を一目瞭然とするために、マルクスとエンゲルスがコミューンに関連して執権(ディクタツーラ)についてどう言っているかを引用しよう。

マルクス。「……労働者が、ブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)を自分たちの革命的執権(ディクタツーラ)とおきかえるなら、彼らは、……ブルジョアジーの反抗を打ち砕くために、国家に革命的、過渡的な形態をあたえるのである。……」[36]

エンゲルス。(革命で)「……勝利した党派は、その武器が反動どもに呼びおこす恐怖によって、自分の支配を維持しなければならない。パリ・コミューンが武装した人民のこの権威をブルジョアジーにたいして行使しなか

ったなら、それはただの一日でももちこたえたであろうか？　それどころか、われわれは、コミューンがこの権威を行使しなさすぎたことで、それを責めてよいのではなかろうか？……(三)」

同じくエンゲルス。「……国家は、闘争において、革命において、敵を強力的に抑圧するために用いられる一時的な制度にすぎないのですから、自由な人民国家をうんぬんするのは、まったく無意味です。プロレタリアートがまだ国家を必要とするあいだは、自由のためにではなく、自分の敵を抑圧するためにそれを必要とするのであって、自由について語ることができるようになるやいなや、国家としての国家は存在しなくなります。……(二)」カウツキーとマルクスおよびエンゲルスとのあいだには、天と地ほどの差が、自由主義者とプロレタリア革命家とのあいだの差がある。純粋民主主義や、カウツキーが論じている単なる「民主主義」は、ほかならぬ右の「自由な人民国家」の言いかえにすぎない。つまり、まったく無意味である。カウツキーは、いとも博学な、愚鈍な書斎学者の博学ぶりで、あるいは一〇歳の小娘のあどけなさで、質問する、――多数を制しているのに、なんのために執権(ディクタツーラ)が必要なのか？　と。ところで、マルクスとエンゲルスはこう説明する。

――ブルジョアジーの反抗を打ち砕くためだ。

――反動どもに恐怖を呼びおこすためだ。

――武装した人民の権威をブルジョアジーに対抗して維持するためだ。

――プロレタリアートが自分の敵を強力的に抑圧できるようにするためだ。

カウツキーには、この説明がわからない。民主主義の「純粋さ」にほれこんで、そのブルジョア性が目につかない彼は、多数者であるからには、少数者の「反抗を打ち砕く」必要はない、それを「強力的に抑圧する」必要はない、――民主主義が侵害された場合にそれを弾圧すれば十分である、と「首尾一貫して」主張する。民主主義の「純粋さ」にほれこんだカウツキーは、すべてのブルジョア民主主義者がつねにおかしているあのごく瑣細な誤りを、思わず知らずおかすのである。すなわち、彼は、形式的な平等（資本主義のもとでは徹頭徹尾いつわりで偽善的な平等）を実際の平等と思っているのである！　まったく瑣細なことだ！

搾取者は、被搾取者と平等ではありえない。

この真理は、カウツキーにはどれほど不愉快であろうと、社会主義の最も本質的な内容をなすものである。

いまひとつの真理は、一階級が他の階級を搾取するあら

ゆる可能性が完全になくなされないあいだは、真の、実際の平等はありえない、ということである。

中央での蜂起が成功するか、軍隊が反乱を起こす場合には、搾取者を一挙に粉砕することができる。しかし、ごく稀な特別の場合を除けば、搾取者を一挙に絶滅することはできない。いくらかでも大きな国の地主と資本家を、全部一挙に収奪することはできない。さらに、法律上あるいは政治上の行為としての収奪だけでは、問題はけっして解決されない。なぜなら、地主と資本家を実際にやめさせ、工場と財産にたいする別の管理、すなわち労働者管理と実際におきかえる必要があるからである。多くの世代にわたって、教養の点でも、豊かな生活の条件の点でも、習性の点でもまさっていた搾取者と、最も進んだ、最も民主的なブルジョア共和国においてさえその大多数がしいたげられ、無知無学で、おどしつけられ、ばらばらである被搾取者とのあいだに、平等はありえない。搾取者が、変革のおこなわれたあとでも、長いあいだ多くの点で大きな実際上の優越をたもつことは、避けられない。すなわち、彼らには、貨幣（貨幣を一挙に廃止することはできない）や、なにがしかの、ときにはかなり多額の動産が残っており、手づるや、組織と管理の技能や、管理のあらゆる「秘訣」（習慣、方法、手段、可能性）についての知識が残っており、より高い教養や、高級技術家連（ブルジョア的に生活し、ものを考える）との緊密な連絡が残っており、はるかに大きな軍事上の技能（これは非常に重要なことだ）、その他いろいろなものが残っている。

搾取者がただ一国で粉砕されても――いくつかの国に同時に革命が起こるのは、稀な例外であるから、これが、もちろん、典型的な場合である――、搾取者の国際的なつながりは非常に大きいので、彼らは、依然としてやはり被搾取者よりも強い。最も遅れた中農・手工業者大衆などの被搾取者の一部が、搾取者に追随しており、また追随しかねないことは、コミューンをもふくめて（というのは、いとも博学なカウツキーの「忘れている」ことだが、ヴェルサイユ軍のなかにはプロレタリアもいたからである）、これまでのすべての革命が示しているところである。

こういう事情であるのに、いくらかでも深刻で重大な革命のさいに、多数者と少数者との関係がいとも簡単に問題を決定すると予想するのは、このうえない愚鈍さであり、ありふれた自由主義者の愚劣きわまる偏見であり、大衆をあざむき、明白な歴史的真理を大衆にたいして隠すことである。この歴史的真理とは、あらゆる深刻な革命のさいには、なお幾年かのあいだ被搾取者にたいして大きな実際上の優越をたもつ搾取者は、長期の、頑強な、死にものぐる

いの抵抗をおこなうのが通則だということである。あまったるいばか者カウツキーのあまったるい空想のなかででもなければ、搾取者が、最後の必死の戦闘、あるいは一連の戦闘で自分の優越性をためしてみずに、多数者である被搾取者の決定に服従することは、けっしてないのである。

資本主義から共産主義への過渡は、歴史上の一時代を占める。この時代が終わらないあいだは、搾取者には不可避的に復古の望みが残っていて、この望みは復古の企てに転化する。そして、自分が打ち倒されることを予期せず、そういうことを信ぜず、そういう考えすら容認しなかった、打ち倒された搾取者は、最初の重大な敗北のあとでは、奪われた「楽園」を取りもどすため、いままであのように甘美な生活をおくってきたのに、いまや「賤民ども」のために零落と貧困（あるいは「なみの」労働……）の運命を負わされた自分の家族のための戦闘に、十倍の精力と、狂気じみた熱情と、百倍にも増大した憎しみをもって身を投じる。そして、この搾取者である資本家のうしろに、小ブルジョアジーの広範な大衆がついてゆく。あらゆる国の数十年にわたる歴史的経験が証明しているように、彼ら小ブルジョアジーは、ためらい、動揺し、きょうはプロレタリアートに従い、あすは変革の困難に恐れをなし、労働者が敗北するか、なかば敗北するやいなや、あわてふためき、神経過敏となり、うろうろし、泣きごとを言い、転々としてひとつの陣営から他の陣営へ寝がえる……わがメンシェヴィキとエス・エルのように。

しかも、こういう事情であるのに、数百年、数千年もの昔からの特権の存否の問題が歴史によって日程にのぼされる、死にものぐるいの、激烈な戦争の時代に、多数者と少数者とか、純粋民主主義とか、執権（ディクタツーラ）は不必要だとか、搾取者と被搾取者との平等だとかを説くのだ!! こういうことをやるには、なんと底なしの愚鈍さ、底知れぬ俗物根性が必要なことか！

だが、一八七一年から一九一四年までの比較的「平穏な」資本主義の数十年は、日和見主義に適応しつつあった社会主義諸党のうちに、俗物根性、短見、背教のアウゲイアスの畜舎（注）を積みかさねたのである。……

⁂

おそらく、読者は、右にあげたカウツキーの著書からの引用文のなかで、彼が普通選挙権侵害の企てについて語っていることに、気づかれたであろう。（ついでに注意しておけば、カウツキーは、普通選挙権を力づよい道徳的権威の深い源泉とよんでいるのに、他方、エンゲルスは、同じパリ・コミューンについて、また同じ執権（ディクタツーラ）の問題につ

いて、ブルジョアジーに対抗して武装した人民の権威を論じている。俗物の「権威」観と革命家の「権威」観とを対比すると、特徴的である。……）

搾取者から選挙権を剝奪する問題は、純ロシア的な問題であって、プロレタリアートの執権一般の問題でないことを、注意しておかなければならない。もしカウツキーが偽善をやめて、彼の小冊子に『反ボリシェヴィキ論』という表題をつけたなら、この表題は小冊子の内容に合致したであろうし、それならば、カウツキーはまっこうから選挙権を論じてもよかったであろう。ところが、カウツキーは、まず第一に「理論家」として登場したかった。彼はその小冊子の表題を、『プロレタリアートの執権』一般とした。とくにソヴェトについて、ロシアについては、彼は、小冊子の第二部、第六節以下ではじめて論じている。第一部（私が右にあげた引用文はこの部からとったものである）では、民主主義と執権一般が論じられている。カウツキーが選挙権について語りはじめたのは、理論などに三文の値うちも認めない反ボリシェヴィキの論戦家という正体を暴露したものである。なぜなら、理論、つまり民主主義や執権の一般的な（ある民族の特殊なものでない）階級的基礎についての考察では、選挙権のような特殊問題を論じてはならず、搾取者を打ち倒してその国家を被搾取者の国家とおきかえる歴史的時期に、金持のためにも、搾取者のためにも、民主主義を保持することができるかどうか、という一般的な問題を論じなければならないからである。

理論家は、このようにしか、ただこのようにしか、問題を提起できない。

われわれは、コミューンの先例を知っている。われわれは、マルクス主義の創始者たちがコミューンに関連して、またコミューンについて論じたことをみな知っている。この資料にもとづいて、私は、たとえば十月革命前に書いた私の小冊子『国家と革命』のなかで、民主主義と執権の問題を分析した。選挙権を制限する問題については、私は一ことも述べなかった。いまでも、選挙権を制限する問題は、執権の民族的に特殊な問題であって、その一般的な問題ではない、と言わなければならない。選挙権を制限する問題は、ロシア革命の特殊な条件、ロシア革命の特殊な発展の道を研究するときに、これをとりあげなければならない。あとの叙述のなかで、実際にそうすることにしよう。だが、ヨーロッパのきたるべきプロレタリア諸革命がみな、あるいはその大多数が、ブルジョアジーの選挙権にかならず制限をくわえるだろうと、まえもって断言するのは誤りであろう。そうなることもありうる。戦争とロシア革命の経験とを経たあとでは、おそらくはそうなるであ

ろうが、しかし、それは、執権（ディクタツーラ）を実現するために必須な、ものではない。それは、執権（ディクタツーラ）の論理的概念の不可欠の標識ではない。それは、不可欠の条件として、執権（ディクタツーラ）の歴史的および階級的概念にふくまれるものではない。

執権（ディクタツーラ）の不可欠の標識、その必須の条件は、階級としての搾取者を強力的に抑圧することであり、したがって、この階級にかんしては「純粋民主主義」、すなわち平等と自由を侵犯することである。

理論的には、問題はこのようにしか、ただこのようにしか、提起できない。そして、問題をこのように提起しなかったことで、カウツキーは、彼が理論家としてボリシェヴィキに反対しているのではなく、日和見主義者とブルジョアジーとへのおべっか使いとして反対していることを証明した。

どういう国で、あれこれの資本主義のどういう民族的特殊性のもとで、搾取者にたいして民主主義のあれこれの制限、侵犯が（もっぱら、もしくは主として）適用されるか、――これは、あれこれの資本主義、あれこれの革命の民族的特殊性の問題である。理論上の問題は、これとは違った仕方で提出されている。それは、搾取階級にたいして民主主義を侵犯しないでも、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は可能であるか、ということである。

カウツキーはまさにこの、理論上ただひとつ重要で本質的な問題を回避した。カウツキーは、マルクスとエンゲルスからありとあらゆる引用をしているが、ただ、この問題に関係があり、そして私がさきに引用したものだけは除外している。

カウツキーは、なんでも気のむくままに、自由主義者やブルジョア民主主義者がうけいれうること、彼らの考えの範囲を出ないことならなんでもしゃべっているが、肝心なことだけは除外している。すなわち、プロレタリアートは、ブルジョアジーの抵抗を打ち砕かずには、自分の敵を強力的に抑圧せずには、勝つことができないということ、そして、「強力的抑圧」のあるところ、「自由」のないところには、もちろん、民主主義はないということ、このことだけは除外している。

カウツキーにはこのことがわからなかったのである。

＊＊＊

つぎに、われわれは、ロシア革命の経験に、また労働者・農民代表ソヴェトと憲法制定議会のあいだの不一致の問題に移ることにしよう。憲法制定議会が解散され、ブルジョアジーから選挙権が剝奪されることになったのは、この不一致によるものであった。

ソヴェトは国家組織になってはならない

ソヴェトは、プロレタリア執権のロシア的形態である。もしプロレタリアートの執権にかんする著作を書くマルクス主義理論家が、この現象をほんとうに研究したなら（そしてカウツキーのやっているように、メンシェヴィキのメロディーを歌いかえて、小ブルジョアの執権反対の嘆きの歌を繰りかえすのでなければ）、その理論家は、まず執権の一般的定義をあたえ、ついで執権の特殊な民族的形態、すなわちソヴェトを考察し、プロレタリアートの執権の一形態としてのソヴェトに批判をくわえたであろう。

カウツキーが、執権にかんするマルクスの学説を自由主義的に「書きかえた」以上、なににせよまじめなものを彼から期待できないのは、いうまでもない。しかし、彼がソヴェトとはなにかという問題をどうとりあげ、それをどうかたづけたかを見ると、はなはだ特徴的である。

彼は、一九〇五年にソヴェトが生まれたことを想起して、こう書いている。――ソヴェトは「すべての賃金労働者を包含していたので、プロレタリア組織のすべての形態のうちで最も包括的な（umfassendste）形態」をつくりだした（三一ページ）。一九〇五年には、ソヴェトは地方的な機関にすぎなかったが、一九一七年には全国的な組織となった、と。

「今日では、」――と、カウツキーはつづけて言う――「ソヴェト組織はすでに偉大な名誉ある歴史を背後にもっている。そして、その前途には、いっそう力づよい歴史が待っている。しかも、それは、ロシア一国に限られたことではない。金融資本が経済および政治の面でもっている巨大な力にたいしては、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争の従来の方法が不十分（versagen――このドイツ語の表現は『不十分』よりはすこし強く、『無力』よりはすこし弱い）なことが、どこでも明らかになっている。従来の闘争方法を捨てるわけにはいかない。それは、平常時にはいまなお欠かすことができない。しかし、ときには、これらの闘争方法では果たしえないような任務、労働者階級のあらゆる政治的および経済的な力の用具を合わせ用いてはじめて成功する見込みがあるような任務に当面する場合がある。」（三二ページ）

そのあとに、大衆的ストライキについての、また、「労働組合官僚」は、労働組合と同じように不可欠のものではあるが、「ますます時代の徴候となりつつある強力な大衆闘争を指導する役には立たない」ということについての考

察がつづいている。

「……こういうわけで、」——とカウツキーは結論する——「ソヴェト組織は、現代の最も重要な現象のひとつである。それは、われわれのむかえつつある資本と労働との偉大な決戦において決定的な意義をもつようになる見込みがある。

しかし、われわれは、ソヴェトにそれ以上のものを要求することが許されるだろうか？　一九一七年の十一月（新暦による、すなわちロシア暦では十月）革命のあとで、エス・エル左派と共同でロシアの労働者代表ソヴェトで多数を獲得したボリシェヴィキは、憲法制定議会を解散したのち、それまで一階級の闘争組織であったソヴェトを国家組織とすることに着手した。ボリシェヴィキは、ロシアの人民が三月（新暦による、ロシア暦では二月）革命でたたかいとった民主主義を廃止した。これにおうじてボリシェヴィキは、社会民主主義者と名のることをやめた。彼らは共産主義者と自称している。」（三三ページ、傍点はカウツキーのもの）

ロシアのメンシェヴィキの文献を知っている人には、カウツキーがマルトフ、アクセリロード、シテイン一派のことばを奴隷的に書き写しているのだということが、すぐにわかる。まさしく「奴隷的に」である。というのは、カウツキーは、メンシェヴィキの偏見に好都合なように、事実を滑稽なほどゆがめているからである。カウツキーは、たとえばボリシェヴィキが共産主義者と改称する問題、国家組織としてのソヴェトの意義の問題が、いつ提起されたかを、ベルリンにいるシテインやストックホルムにいるアクセリロードのような、自分の情報供給者に問い合わせる労をとらなかった。もしカウツキーがこの簡単な問合せをやっていたなら、彼は、物笑いの種になる文章は書かなかったであろう。なぜなら、ボリシェヴィキがこの二つの問題を提起したのは、一九一七年の四月のことで、たとえば一九一七年四月四日の私の「テーゼ」のなかでなされたことだったからである。[32] つまり、一九一七年の十月革命（一九一八年一月五日の憲法制定議会の解散は言うにおよばず）よりもずっとまえのことだからである。

だが、私がいま全文引用したカウツキーの議論は、ソヴェトの問題全体の眼目である。ソヴェトは国家組織となることをめざすべきか（ボリシェヴィキは、一九一七年四月に「全権力をソヴェトへ」というスローガンをかかげた。[33] そして、同じ一九一七年四月のボリシェヴィキ党の協議会で、ボリシェヴィキは、ブルジョア議会制共和国に満足するものではなく、コミューン型もしくはソヴェト型の労農共和国を要求することを声明した）、——それとも、ソヴ

ェトは、そういうことをめざしてはならず、権力を掌握してはならず、国家組織となってはならず、一「階級」の「闘争組織」（マルトフの表現による。彼は、ソヴェトが、メンシェヴィキの指導のもとでは労働者をブルジョアジーに従属させる道具であったという事実を、人聞きのいいように、自分のはかない願いによって潤色したのである）にとどまらなければならないのか、まさにこの点に眼目がある。

カウツキーは、マルトフのことばを奴隷的におうむがえしにし、ボリシェヴィキのメンシェヴィキにたいする理論上の論争から断片をぬきだしてきて、その断片を、無批判に、無意味に、一般理論の基盤のうえに、全ヨーロッパ的基盤のうえに移した。こうしてできあがったのはひどいごたまぜであって、ロシアの自覚した労働者ならだれでも、カウツキーの前掲の議論を知ったなら、腹をかかえて大笑いすることとであろう。

ヨーロッパの労働者はみな（ひとにぎりのこりかたまった社会帝国主義者を除いては）、ここでなにが問題になっているかの説明を聞いたなら、同じような哄笑をカウツキーにあびせることだろう。

カウツキーは、マルトフにありがためいわくなおせっかいをやいて、マルトフの誤りを、目に見えて明瞭な背理にしてしまった。じっさい、カウツキーの議論によるとどういうことになるか、まあ見たまえ。

ソヴェトは、すべての賃金労働者を包含している。金融資本にたいしては、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争の従来の方法では不十分である。ソヴェトの前途には偉大な役割が待っており、それはロシアだけに限られない。ソヴェトは、ヨーロッパの資本と労働との偉大な決戦において決定的な役割を果たすであろう。こうカウツキーは言っている。

すてきだ。だが、「資本と労働との決戦」は、この両階級のうちのどちらが国家権力を掌握するかを決定するのではないのか？

そんなことはない。とんでもない。

すべての賃金労働者を包含するソヴェトは、「決」戦において国家組織となってはならない！と。

では、国家とはなんなのか？

国家は、一階級が他の階級を抑圧するための機構にほかならない。

そこでこういうことになる。被抑圧階級は、現代社会のすべての勤労被搾取者の前衛は、「資本と労働との決戦」をめざさなければならないが、しかし資本が労働を抑圧するための機構に手をふれてはならない！――　――この機

構を打ち砕いてはならない！——搾取者を抑圧するために、自分の包括的な組織を利用してはならない。

カウツキー君、すばらしい、みごとだ！「われわれ」は階級闘争を承認する、——すべての自由主義者がそれを承認するのと同じ仕方で、すなわち、ブルジョアジーの打倒をぬきにして……。

まさにここで、カウツキーがマルクス主義とも、社会主義とも、完全に手を切ったことがはっきりする。これは、実際には、ブルジョアジーの側への寝がえりである。というのは、ブルジョアジーは、ブルジョアジーに抑圧されている階級の組織を国家組織とすることを除けば、なんでも大目にみる用意があるからである。ここでは、もはやカウツキーは、すべてを和解させ空文句ですべての深刻な矛盾からのがれようとする自分の立場を救うことは、だんじてできない。

カウツキーは、労働者階級の手に国家権力が移るのをいっさい拒否しているのか、でなければ、労働者階級が旧来のブルジョア国家機構を掌握するのは大目にみるが、労働者階級がこの国家機構を打ち砕き、粉砕し、それを新しいプロレタリア国家機構とおきかえることはけっして大目にみないのか、どちらかである。カウツキーの議論をいずれに「解釈」し「説明」しようと、どちらの場合にも、彼がマルクス主義と手を切ってブルジョアジーの側に寝がえったことは、明白である。

すでに『共産党宣言』のなかで、勝利した労働者階級にどんな国家が必要であるかを論じたさい、マルクスは、「国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」と書いた。(四三) ところが、ここに、いまなおマルクス主義者をもって自任するひとりの人間が現われて、ひとりのこらず組織され資本との「決戦」をおこなうプロレタリアートは、その階級組織を国家組織としてはならない、と声明するのだ。エンゲルスは、一八九一年に、「国家にたいする迷信」について、それが「ドイツでは、ブルジョアジーの一般意識のなかに、それどころか多くの労働者の一般意識のなかにさえ、もちこまれている」(四四) と書いているが、カウツキーがここでさらけだしているものこそ、まさにそれである。労働者諸君、闘争したまえ——わが俗物はそれには「同意する」（労働者はどのみち闘争するので、労働者の鋒先をどうやって挫くかを思案するほかはないのだから、ブルジョアもこれには「同意する」のだ）、——闘争したまえ、だが、まちがっても勝利してはならない！ ブルジョアジーの国家機構を破壊してはならない！ ブルジョア「国家組織」をプロレタリア「国家組織」とおきかえてはならない！

国家とは一階級が他の階級を抑圧するための機構にほかならない、というマルクス主義の見解にまじめに同意している人なら、またこの真理をいくぶんでも深く考えたことのある人なら、金融資本に勝利する力をもったプロレタリア組織が国家組織になってはならない、というナンセンスを説くまでに脱線することは、けっしてできなかったであろう。まさにこの点に、小ブルジョアの正体が現われている。小ブルジョアにとっては、国家は「やっぱり」、階級外の、あるいは超階級的な存在である。じっさい、プロレタリアートを支配しているだけでなく、さらに全人民を、小ブルジョアジー全体、農民全体をも支配している資本と決戦をまじえることが、「一階級」であるプロレタリアートに許されているのに、自分の組織を国家組織にすることが「一階級」であるプロレタリアートに許されないのは、なぜなのか？　それは、小ブルジョアが階級闘争を恐れ、それを最後まで、最も肝心な点まで押しすすめないからである。

カウツキーはすっかり混乱して、馬脚をあらわしてしまった。よろしいか、ヨーロッパが労働と資本のあいだの決戦をむかえようとしていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争の従来の方法では不十分なことを、彼は自分でも認めた。ところで、その闘争方法は、まさにブルジョア民主主義を利用する点にあった。そこからでてくる結論は？……

カウツキーは、そこからどういう結論がでてくるかを、考えぬくことを恐れた。

……そこからでてくる結論は、いまごろ、うしろ向きに命脈のつきた過去に目を向けて、ブルジョア民主主義の美点をごてごてとならべたて、純粋民主主義についておしゃべりをするようなことをやれるのは、反動家、労働者階級の敵、ブルジョアジーの召使だけだ、ということである。ブルジョア民主主義は、中世的制度にたいしては進歩的であったから、それを利用しなければならなかった。しかし、いまでは、労働者階級にとってはブルジョア民主主義では不十分である。いまでは、うしろではなく、まえを見て、ブルジョア民主主義をプロレタリア民主主義と交替させることに目を向けなければならない。また、プロレタリア革命を準備する活動が、プロレタリア軍の訓練と編成が、ブルジョア民主主義国家の枠内で可能（かつ必要）であったとしても、事態が「決戦」にたちいたったからには、プロレタリアートをこの枠で制限することは、プロレタリアートの大業の裏切者となり、背教者となることを意味する。

カウツキーは、マルトフの論拠をおうむがえしにしながら、マルトフにおいてはこの論拠がもう一つの論拠、カウ

ツキーがぬかしている論拠にもとづいていることに気づかなかったため、とくに滑稽な羽目におちいった！　マルトフは言う（そしてカウツキーは、彼のあとからおうむがえしに言う）。――ロシアはまだ社会主義を実現するまでに成熟してはいない。そのことからでてくる当然の結論は、ソヴェトを闘争の機関から国家組織に転化させるのは時期尚早だ（つぎのように読め――メンシェヴィキの指導者の助けをかりてソヴェトを、帝国主義ブルジョアジーに労働者を従属させる機関に変えることが、時宜にかなっている）ということである、と。だが、カウツキーは、ヨーロッパが社会主義を実現するまでに成熟していないと、あからさまに言うことはできない。彼がまだ背教者でなかった一九〇九年には、カウツキーは、いまや時期尚早の革命を恐れることは許されない、敗北を恐れて革命を拒否する者は裏切者である、と書いた。このことばを、カウツキーは、あからさまに否認する決心がつかない。そこで、ばかげたことになってしまい、小ブルジョアの愚鈍と臆病をとことんまでさらけだしてしまうのである。すなわち、一方では、ヨーロッパは社会主義を実現するまでに成熟しており、労働と資本との決戦へすすみつつあるが、他方では、闘争組織（すなわち、闘争のなかで形成され成長し強固になる組織）、すなわち被抑圧者の前衛かつ組織者であり、その指導者である プロレタリアートの組織を、国家組織に転化させてはならない、というのである！

⁂

ソヴェトは、闘争組織としては必要であるが、国家組織になってはならないという思想は、実践的〃政治的には、理論的にみた場合よりもはるかにばかげている。革命的情勢の存在しない平穏な時期にさえ、資本家との労働者の大衆闘争、たとえば大衆的ストライキは、双方の側に恐ろしい激憤、異常な闘志を呼びおこし、ブルジョアジーは、自分たちはいまなお「わが家の主人」であり、今後もそうであるつもりだ、等々とたえず言い立てるありさまである。また、政治生活がたぎりたつ革命期には、ソヴェトのように、すべての産業部門のすべての労働者を包含し、さらにすべての兵士と農村のすべての貧しい勤労住民をも包含する組織――このような組織が、闘争の進行につれて、攻撃と反撃の単純な「論理」にうながされて、おのずから問題を端的に提起するようになることは、避けられない。中間の立場を占めて、プロレタリアートとブルジョアジーとを「和解させ」ようと試みることは、愚かなことであり、みじめな破綻をこうむる。ロシアでマルトフその他のメンシェヴィキのやった説教がそういう目にあったし、また、ド

イツやその他の国で、ソヴェトがいくぶんでも広い範囲に発展し、統合と確立をなしとげることに成功するならば、そこでもそうなることは避けられないであろう。ソヴェトにむかって、闘争せよ、だがみずから全国家権力を掌握してはならない、国家組織となってはならない、と語ることは、階級協力を説き、プロレタリアートとブルジョアジーとの「社会的平和」を説くことを意味する。激しい闘争のなかで、このような立場が恥ずべき破産以外のなにかにみちびきうると考えることさえ、滑稽である。ふた道をかけること――これがカウツキーの永遠の運命である。彼は、理論上、日和見主義者とはどんな点でも意見が一致しないようなふりをしているが、実際には、すべての本質的な点で（すなわち、革命に関係のあるすべての点で）、実践上彼らと一致しているのである。

憲法制定議会とソヴェト共和国

憲法制定議会とボリシェヴィキがそれを解散した問題は、カウツキーの小冊子全体の眼目である。彼は、たえずこの問題に立ちもどっている。第二インタナショナルの思想的指導者のこの著作は、全巻をつうじて、ボリシェヴィキが「民主主義を廃止した」（さきにあげたカウツキーからの一引用文を見よ）というあてこすりにみちみちている。この問題は、じっさい、興味ぶかく、重要な問題である。なぜなら、ここで革命は実践的にブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義との関係の問題に当面したからである。さて、わが「マルクス主義理論家」がこの問題をどう考察しているかを見ることにしよう。

彼は、私が執筆して一九一七年一二月二六日付の『プラウダ』に発表した『憲法制定議会についてのテーゼ』(三四)を引用している。記録文書を手にして言っているのであるから、カウツキーが問題をまじめにとりあげていることの、これ以上りっぱな証明は、期待できないように思えるかもしれない。しかし、カウツキーがどういう仕方で引用しているかを見たまえ。彼は、このテーゼが一九項からなっていたことを述べておらず、またそこには、憲法制定議会をともなう普通のブルジョア共和国とソヴェト共和国との関係の問題のほか、さらにわが国の革命のなかで憲法制定議会とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)とのあいだに生じた不一致の歴史にかんする問題が、提起されていたことを、述べていない。カウツキーは、こうしたことをみな回避して、ただ「ここでは」（このテーゼでは）「二つの項目がとくに重要である」と、読者に告げているだけである。その一つは、エス・エルが憲法制定議会の選挙後に、だがそれの招集前に分裂

したことを述べている項目（カウツキーは、これが第五テーゼであることについては黙っている）であり、もう一つは、ソヴェト共和国が総じて憲法制定議会よりも高度の民主主義的形態であることを述べている項目である（カウツキーは、これが第三のテーゼであることについては黙っている）。

ところで、カウツキーがテキストの一部をそっくり引用しているのは、この第三のテーゼだけである。すなわち、次の命題である。

「ソヴェト共和国は（憲法制定議会をともなう普通のブルジョア共和国にくらべて）より高度な型の民主主義制度の形態であるばかりでなく、社会主義への最も苦痛の少ない移行を保障できる唯一の形態でもある。」（カウツキーは、「普通の」ということばと、このテーゼの書き出しのことば「ブルジョア制度から社会主義制度への過渡にとっては、すなわち、プロレタリアートの執権にとっては」とをはぶいている。）

＊ ついでに言っておけば、カウツキーは、「最も苦痛の少ない」移行というこの表現を何度も引用しているが、これは明らかに、皮肉をねらったものなのである。しかし、こんな手段でねらったのではだめなので、カウツキーは、その二、三ページさきでは偽造をやって、「苦痛のない」移行というふうに、うその引用をしている！　もちろん、こういう手をつかって論敵にばかげた考えをなすりつけるのは、ぞうさないことである。この偽造はまた、社会主義への最も苦痛の少ない移行をおこなうことは、貧乏人をひとりのこらず包含する組織（ソヴェト）が存在し、そして、国家権力の中核（プロレタリアート）がこのような組織を援助する場合にだけ可能であるという論拠を、実質的に回避する助けをしている。

カウツキーは、これらのことばを引用したのち、すばらしい皮肉をこめて叫ぶ。

「ただ残念なことは、こういう結論に到達したのが、憲法制定議会で少数派になったのちにはじめて、ということである。それ以前には、レーニン以上に熱烈に憲法制定議会を要求した者はだれもなかった。」

カウツキーの著書の三一ページに、文字どおりこう言っている！

これは珠玉のことばだ！　より高度な型の国家についてのボリシェヴィキの論議はすべて、ボリシェヴィキが憲法制定議会で少数派となったのちにこの世に現われた思いつきであるといった印象を読者にあたえるように、事柄をいつわって描くようなまねをやれるのは、ブルジョアジーのおべっか使いだけである！！　こんなに卑劣なうそをつくことができるのは、ブルジョアジーに身売りした無頼漢か、それとも、まったく同じことだが、ペ・アクセリロードを

信用し、自分の情報供給者たちを隠している無頼漢だけである。

なぜなら、ロシアに着いたその日、すなわち一九一七年四月四日に、私が公けの席でテーゼを読みあげ、そのなかで、コミューン型の国家がブルジョア議会制共和国よりもすぐれていることを述べたことは、天下周知のことだからである。私は、その後も一度ならず出版物で、たとえば諸政党にかんする小冊子のなかで、このことを述べた。この小冊子は英訳されて、一九一八年一月にアメリカで、ニューヨークの新聞『イーヴニング・ポスト』にのせられた。(四三) それればかりではない。一九一七年四月末のボリシェヴィキ党の協議会は、プロレタリア＝農民共和国はブルジョア議会制共和国よりも高度のものであり、わが党は後考に満足しない、党の綱領はこれに応じて変更されなければならない、という決議を採択した。(四四)

これらの事実に照らすとき、私が憲法制定議会の招集を熱烈に要求したかのように、そして、ボリシェヴィキが憲法制定議会で少数派になったのちにはじめて憲法制定議会の名誉と威信に「けちをつけ」はじめたかのように、ドイツの読者にむかって断言しているカウツキーの悪意ある発言を、なんとよんだらよいだろうか？　こういう発言にどういう弁解の余地があるだろうか？＊　カウツキーは事実を知らなかったのだ、ということによってか？　だが、それなら、なぜ彼はそれらの事実について書くことに手を出したのか？　あるいは、私――カウツキー――はメンシェヴィキのシテインやペ・アクセリロードの一派の情報にもとづいて書いているのだ、となぜ正直に言わなかったのか？　カウツキーは、客観性をよそおうことで、わが敗北に腹をたてたメンシェヴィキの提灯持ちという自分の役割を隠そうと思っている。

＊　ついでに言っておけば、カウツキーのこの小冊子には、この種のメンシェヴィキ的なうそが山ほどある！　これは怒りくるった一メンシェヴィキのパンフレットである。

しかし、これはほんの花にすぎない。実はこのあとにやってくる。

カウツキーが、ボリシェヴィキはブルジョア議会制民主的共和国に満足するかどうかという問題についてボリシェヴィキの出した決議や声明の翻訳を、彼の情報供給者から手にいれようと思わなかったか、あるいは手にいれることができなかった（？？）と仮定しよう。これはありそうもないことだが、それすら認めることにしよう。だが、カウツキーは、その著書の三〇ページで、一九一七年一二月二六日付の私のテーゼに直接に言及しているではないか。

カウツキーはこのテーゼの全文を知っているのか、それ

とも、そのうちでシテイン、アクセリロード一派に翻訳してもらった部分しか知らないのか？　カウツキーは、憲法制定議会の選挙よりもまえに、ソヴェト共和国がブルジョア共和国よりも高度なことをボリシェヴィキが意識していたかどうか、そしてそれを人民に告げたかどうか、という根本問題に関連して、第三のテーゼを引用している。だが、第二のテーゼについては、カウツキーは沈黙している。ところで、第二のテーゼは次のようなものである。

「憲法制定議会招集の要求をかかげながらも、革命的社会民主党は、ソヴェト共和国が、憲法制定議会をともなう普通のブルジョア共和国よりもいっそう高度な民主主義の形態であることを、一九一七年の革命の当初からたびたび強調してきた。」（傍点は私のもの）

ボリシェヴィキを無原則な連中、「革命的日和見主義者」（これは、なにに関連してであったか思いだせないが、カウツキーがその著書のどこかで用いている表現である）と見せかけるために、カウツキー君は、「たびたび」言明してきたことだとテーゼのなかにはっきり述べていることを、ドイツの読者に隠すのだ！

これが、カウツキー君の用いている、くだらない、あわれな、軽蔑すべき手口である。彼は、こういうやり方で理論問題を逃げたのである。

ブルジョア的民主的議会制共和国がコミューン型あるいはソヴェト型の共和国に劣っているというのは、正しいか、正しくないか？　これが眼目なのに、カウツキーはこれを回避した。マルクスがパリ・コミューンの分析のなかで示したものを、カウツキーはみな「忘れてしまった」。彼は、一八七五年三月二八日付のベーベルにあてたエンゲルスの手紙も「忘れてしまった」。ところが、この手紙には、「コミューンは、もはや本来の意味の国家ではなかった」というマルクスの同じ思想が、とくに明瞭にわかりやすく言いあらわされているのだ。[三]

これが、第二インタナショナルの最も卓越した理論家なのだ。この理論家は、「プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）」について専門的に論じた小冊子のなかで、ブルジョア的民主的共和制よりも高度な国家形態の問題が端的に、幾度となく提起されてきたロシアについてわざわざ論じながら、この問題を黙殺するのである。これは、実際上、ブルジョアジーの側への寝がえりとどこが違うのか？

（ついでに注意しておけば、この場合にも、カウツキーはロシアのメンシェヴィキの尻馬にのっているのである。メンシェヴィキのあいだには、マルクスとエンゲルスからの「あらゆる引用文」を知っている人間はいくらでもいるが、しかし、一九一七年四月から一九一七年一〇月までに、

また一九一七年一〇月から一九一八年一〇月までに、コミューン型の国家の問題を一度でも検討してみようとしたメンシェヴィキは、一人もいなかった。プレハーノフもこの問題を回避した。たしかに、沈黙を守らないわけにはいかなかったのだ。)

社会主義者、マルクス主義者と自称しながら、主要な問題、つまり、コミューン型の国家の問題について、事実上ブルジョアジーの側に寝がえっている連中を相手に、憲法制定議会の解散について論議してみても、馬の耳に念仏であることは、いうまでもない。この小冊子の付録に、憲法制定議会についての私のテーゼを全文転載しておけば十分であろう。読者は、このテーゼを見れば、一九一七年一二月二六日には、この問題が理論的にも、歴史的にも、実践的〃政治的にも提起されていたことが、おわかりになるだろう。

カウツキーは、理論家としてはマルクス主義を完全に捨てさったとしても、歴史家として、憲法制定議会とソヴェトとの闘争の問題を考察できたはずである。カウツキーの数多くの著作から、われわれは、彼がマルクス主義的歴史家になる能力をもっていたこと、最近の背教にもかかわらず、彼のこういう著作がプロレタリアートの恒久的な財産として残るであろうことを知っている。しかし、この問題については、カウツキーは、歴史家としても、真理に背を向け、万人周知の事実を無視して、おべっか使いとしてふるまっている。彼は、ボリシェヴィキを無原則的な人間と見せかけたいのである。そこで彼は、ボリシェヴィキが憲法制定議会を解散するまえに、いかにそれとの衝突を緩和させようと試みたかを語っている。そこには、まずい点は絶対になにもないし、われわれとしてなに一つ否認しなければならないようなことはない。私はテーゼの全文をのせておくが、そこでは、このうえなくはっきりとこう言っている。憲法制定議会に席を占める動揺的な小ブルジョア諸君、君たちがプロレタリア執権(ディクタツーラ)と和解するか、それともわれわれが「革命的方法」で諸君を打ち破るか、どちらかである、と(第一八テーゼおよび第一九テーゼ)。

真に革命的なプロレタリアートは、動揺的な小ブルジョアジーにたいして、つねにこのようにふるまってきたし、将来もつねにこのようにふるまうであろう。

カウツキーは、憲法制定議会の問題では、形式的な見地に立っている。私のテーゼには、革命の利益が憲法制定議会の形式的な権利に優先することが、はっきりと、幾度も述べられている(第一六テーゼおよび第一七テーゼを見よ)。形式的民主主義の見地は、まさしく、プロレタリアートとプロレタリア的階級闘争の利益が優先することを認

めないブルジョア民主主義者の見地である。歴史家としてのカウツキーは、ブルジョア議会がある階級の機関であることを、認めないわけにはいくまい。ところが、いまカウツキーに必要なのは、(革命を否認するといううけがらわしい仕事のために)マルクス主義を忘れることであった。そこで、カウツキーは、ロシアの憲法制定議会がどの階級の機関であったかという問題を提出しないのである。カウツキーは、具体的な状況を検討していない。彼は事実を見ようとしない。テーゼのなかでは、ブルジョア民主主義の制限性の問題が理論的に解明されているだけでなく(第一—第三テーゼ)、また、一九一七年一〇月なかばにつくられた諸政党の候補者名簿を一九一七年一二月の実情にそぐわないものにした具体的諸条件が示されているだけでなく(第四—第六テーゼ)、さらに一九一七年一〇—一二月における階級闘争と内乱の歴史も示されている(第七—第一五テーゼ)のだが、彼はドイツの読者にたいしてこれらのことを一言も述べていない。この具体的な歴史から、われわれは、「全権力を憲法制定議会へ」というスローガンは実際にはカデット[二七]やカレーヂン派とその助力者たちのスローガンになってしまった、という結論(第一四テーゼ)を引きだした。

歴史家カウツキーはこのことに気がつかない。歴史家カウツキーは、普通選挙権が、ときには小ブルジョア的な議会を、ときには反動的、反革命的な議会をもたらすということを、一度も聞いたことがない。マルクス主義的歴史家カウツキーは、選挙の形態や民主主義の形態と所与の制度の階級的内容とが別物であることを、聞いたことがない。この憲法制定議会の階級的内容の問題は、私のテーゼのなかではっきりと提起され、解決されている。私の解決は正しくないかもしれない。われわれにとって、われわれの分析にたいする第三者のマルクス主義的批判ほど望ましいものはなかったであろう。だれかがボリシェヴィズムの批判を妨げているかのようにいう、まったく愚にもつかない空文句(カウツキーには、それがたくさんある)を書いたりしないで、カウツキーはこのような批判にとりかかるべきであったろう。しかし、彼には批判がない点にこそ、問題がある。彼は、一方のソヴェト、他方の憲法制定議会の階級的分析の問題を、提起することさえしていない。だから、カウツキーと論争し、討論することは不可能である。そこで、カウツキーを、なぜ背教者としかよびようがないのか、その理由を読者に示すほかには、やりようがないのである。

ソヴェトと憲法制定議会との不一致には、独自の歴史があって、階級闘争の見地に立っていない歴史家でも、それ

を回避することはできないであろう。カウツキーは、このソヴェトがメンシェヴィキに支配されていたころにも、すなわち一九一七年二月末から一〇月までのあいだにも、ソヴェト「全国家的」(すなわちブルジョア的)諸機関と不一致をきたしていたという天下周知の事実(いまなおこのことを隠しているのは、悪質なメンシェヴィキだけである)を、カウツキーはドイツの読者に隠したのである。カウツキーは、実質上、プロレタリアートとブルジョアジーとの和解、協調、協力の見地に立っているのだ。カウツキーがどんなにそれを否認しようと、カウツキーのこういう見地は、彼の小冊子全体によって裏書きされている事実である。憲法制定議会を解散する必要はなかったと主張することは、ブルジョアジーとの闘争を最後まで遂行すべきではなかった、ブルジョアジーを打倒すべきではなかった、プロレタリアートはブルジョアジーと和解すべきであった、と主張することにほかならない。

では、メンシェヴィキが、一九一七年二月から一〇月までこのかんばしからぬ仕事にたずさわりながら、なんの成果もあげなかったことを、なぜカウツキーは黙っていたのか? もしブルジョアジーとプロレタリアートを和解させることが可能であったのなら、なぜメンシェヴィキのもとで和解させることに成功しなかったのか、なぜブルジョアジーはソヴェトによそよそしい態度をとったのか、なぜソヴェトは(メンシェヴィキから)「革命的民主主義派」とよばれ、そしてブルジョアジーは「法定有資格分子」とよばれたのだろうか?

ほかならぬメンシェヴィキが、彼らの支配していた「時代」(一九一七年二―一〇月)にソヴェトを革命的民主主義派とよび、そうすることで、ソヴェトは他のすべての機関にまさっていると認めたことを、カウツキーはドイツの読者に隠した。この事実を隠したおかげではじめて、歴史家カウツキーの著作では、ソヴェトとブルジョアジーとの不一致には独自の歴史がないことになり、ボリシェヴィキの性悪(しょうわる)のふるまいのために、この不一致が一挙に、突然に、なんの原因もなく出現したことになったのである。ところが、実際には、メンシェヴィキが協調政策を実行し、プロレタリアートとブルジョアジーとを和解させようと試みた半年以上(革命にとっては、これはたいへん長い期間である)にわたる経験こそが、そうした試みの不毛性を人民に確信させ、プロレタリアートをメンシェヴィキから突きはなしたのである。

ソヴェトが偉大な未来をもった、すばらしいプロレタリアートの闘争組織であることは、カウツキーも認めている。

そうだとすると、カウツキーの立場全体は、カルタの家のように、あるいはプロレタリアートとブルジョアジーとの激しい闘争なしにやっていけるという小ブルジョアの夢想のように、崩壊してしまう。なぜなら、およそあらゆる革命は、たえまない、しかも必死の闘争であり、そしてプロレタリアートは、すべての被抑圧者にとっての先進階級であって、自己の解放を求めるありとあらゆる被抑圧者のあらゆる願望の焦点であり、中心であるからである。被抑圧大衆の闘争機関であるソヴェトは、当然のこととして、この大衆の気分を、その見解の変化を、他のどんな機関よりも、はるかに急速に、完全に、正しく反映し、表現したのである（とりわけこの点に、ソヴェト民主主義が民主主義の最高の型である理由の一つがある）。

ソヴェトは、一九一七年二月二八日（旧暦）から一〇月二五日までに、ロシアの住民の大多数者、すなわち、労働者と兵士の全員、農民の一〇分の七ないし八の全ロシア大会を二回招集することに成功した。地区、郡、市、県、州の多くの大会はこのほかである。この期間にブルジョアジーは、多数者を代表するただ一つの機関の招集にも成功しなかった（プロレタリアートを憤激させた、あの明らかなにせもの、人を嘲弄する「民主主義会議」(四九)を別にしては）。憲法制定議会は、第一回（六月）全ロシア・ソヴェト大会(五〇)と同じ大衆の気分、同じ政治的グループ分けを反映していた。憲法制定議会が招集されるまでに（一九一八年一月）、第二回ソヴェト大会(五一)（一九一七年一〇月）と第三回ソヴェト大会(五二)（一九一八年一月）がひらかれた。そのさい、この二つの大会はともに、大衆が左翼化し、革命化し、メンシェヴィキやエス・エルから離れさってボリシェヴィキの側に移ったこと、すなわち、小ブルジョア的指導から離反し、ブルジョアジーとの協調という幻想を捨てさって、ブルジョアジーの打倒をめざすプロレタリアートの革命闘争の側に移ったことを、このうえなくはっきりと示した。

したがって、ソヴェトのたんなる外面的な歴史でさえ、憲法制定議会の解散が不可避であり、憲法制定議会が反動的であったことを示しているのである。だが、カウツキーは、かたくなに自分の「スローガン」を固執する。「純粋民主主義」さえ栄えれば、革命など

全ロシア・ソヴェト大会	代議員数	うちボリシェヴィキの数	ボリシェヴィキの%
第1回（1917年6月3日）	790	103	13%
第2回（1917年10月25日）	675	343	51%
第3回（1918年1月10日）(五三)	710	434	61%
第4回（1918年3月14日）(五四)	1232	795	64%
第5回（1918年7月4日）	1164	773	66%

滅びるがよい、ブルジョアジーがプロレタリアートに勝つがよい！　Fiat justitia, pereat mundus！〔たとえ世界は滅びるとも、正義をおこなわしめよ！〕と。

上表〔前ページの表〕は、ロシア革命の歴史における全ロシア・ソヴェト大会についての簡単な総括である。

これらの数字を一瞥しただけで、憲法制定議会を擁護したり、ボリシェヴィキは住民の多数者の支持をえていないと語ったり（カウツキーのように）すれば、わが国では笑いものになるだけだという理由を理解するのに十分である。

ソヴェト憲法

すでに示したように、ブルジョアジーから選挙権を剝奪することは、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の必須の、不可欠の標識ではない。そして、ロシアで十月革命のずっと以前にプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）のスローガンをかかげたボリシェヴィキは、搾取者から選挙権を剝奪すると、まえもって言いはしなかった。執権（ディクタトゥーラ）のこの構成部分は、ある党の「計画にもとづいて」出現したものではなく、闘争の過程でひとりでに生まれてきたものである。歴史家カウツキーは、もちろん、このことに気がつかなかった。まだメンシェヴィキ（ブルジョアジーとの協調派）がソヴェトを支配していたときにさえ、ブルジョアジーが自分でソヴェトから離れ、ソヴェトをボイコットし、ソヴェトに対立し、ソヴェトにたいして陰謀をたくらんだことを、彼は理解しなかった。ソヴェトは、どんな憲法もたずに生まれた。そして、一年以上も（一九一七年の春から一九一八年の夏まで）、どんな憲法ももたずに存在していた。被抑圧者のこの自主的で、全能な（すべての者を包含するゆえに）組織にたいするブルジョアジーの激憤、ソヴェトにたいするブルジョアジーの闘争——しかも、最も恥しらずな、貪欲な、きたならしい闘争——、最後に、コルニーロフ反乱へのブルジョアジー（カデットからエス・エル右派にいたる、ミリュコーフからケーレンスキーにいたる）の公然の参加——これらすべてが、ソヴェトからのブルジョアジーの正式の排除を準備したのである。

カウツキーは、コルニーロフ反乱のことを耳にはさんだ。しかし、彼は歴史的事実や、執権（ディクタトゥーラ）の形態を規定する闘争の経過、闘争の形態などは、歯牙にもかけない。じっさい、「純粋」民主主義を問題とするからには、事実などがこれになんの関係があろうか、と。だから、ブルジョアジーからの選挙権の剝奪に反対するカウツキーの「批判」は、こどもの口から出たのならかわいらしいが、まだ耄碌（もうろく）したという公式の認定をうけていない人の口から出たとなると、

胸のわるくなるような、……あまったるいあどけなさを特徴としている。

「……もし資本家が、普通選挙権のもとでとるにたりない少数者となれば、彼らはむしろ自分の運命を甘受するであろう。」（三三ページ）……かわいらしいことを言うではないか？　賢明なカウツキーは、多数者である被抑圧者の意志を尊重するような地主や資本家を、歴史のなかで何度も見たし、また一般に実生活の観察をつうじてよくご存知なのだ。賢明なカウツキーは、「野党」の見地、すなわち議会内闘争の見地をしっかりと守っている。彼は、文字どおり「野党」（三四ページその他多くの箇所で）と書いている。

おお、博学な歴史家兼政治家よ！　君は、「野党」とは平和的な、もっぱら議会的な闘争の概念であること、すなわち、非革命的な情勢に対応する概念、革命の不在に対応する概念であることを知っていてもよかったろうに。革命のさいに問題になるのは、内乱において当面する無慈悲な敵のことである。――カウツキーのように、内乱を恐れている小ブルジョアのどんな反動的な泣きごとも、この事実を変えるものではない。ブルジョアジーがどんな犯罪もはばからないときに――ヴェルサイユ派および彼らのビスマルクとの取引(三五)の実例は、歴史にたいしてゴーゴリのペトルーシカ(三六)のような態度をとる者でないかぎりだれにでも、なにかを教えている――、ブルジョアジーが外国に援助を求め、これらの国とともに革命にたいする陰謀をたくらんでいるときに、「野党」の見地から無慈悲な内乱の問題を見ることは、滑稽である。革命的プロレタリアートは、「混乱屋」カウツキーのように、ナイト・キャップをかぶるべきであり、ドゥートフやクラスノーフやチェコスロヴァキア軍団の反革命的反乱(三七)を組織したり、サボタージュ実行者に数百万ルーブリを支払ったりしているブルジョアジーを、合法的な「野党」と見なすべきだというのだ。なんという深遠な考えだろう！

カウツキーの関心をひくのは、もっぱら問題の形式的〃法律的な側面である。だから、ソヴェト憲法にかんする彼の議論を読むと、「法律家は骨の髄まで反動的な人間だ」というベーベルのことばが、思わずしらず思いだされる。カウツキーはこう書いている。「実際には、資本家だけを無権利にすることはできない。法律上の意味での資本家とはいったいなにか？　有産者のことか？　ドイツのように、経済的にはるかに進歩していて、プロレタリアートの人数の非常に多い国でさえ、ソヴェト共和国の設立は、広大な大衆を政治的に無権利にするであろう。一九〇七年に、ドイツ帝国では、農業、工業、商業の三大群における就業者とその家族の数は、職員と賃金労働者のグループでは約三

五〇〇万人、事業主のグループでは一七〇〇万人であった。だから、ある党が、賃金労働者のあいだで多数を占めていても、住民のあいだでは少数をなすだけだという場合も、まったくありうる。」（三三ページ）

これは、カウツキーの議論の見本の一つである。これは、ブルジョアの反革命的な泣きごとではあるまいか？　カウツキー君、君は、ロシアの農民の圧倒的多数が賃金労働者を雇っていないこと、だから権利を剝奪されてはいないことをよく知っているのに、なぜすべての「事業主」を無権利者のなかにいれるのか？　これは偽造ではないだろうか？

博学な経済学者よ、なぜ君は、同じ一九〇七年のドイツの統計のなかにあり、君のよく知っている経営群別の農業賃労働にかんする資料をあげなかったのか？　なぜ君は、君の小冊子の読者であるドイツの労働者に、この資料を示さなかったのか？――それを見れば、搾取者がどれだけいるか、ドイツの統計によれば、「農業事業主」総数のうちに搾取者の数がどんなに少ないかが、わかったであろうに。

それは、君の背教が君をブルジョアジーのたんなるおべっか使いにしてしまったからである。

資本家とは――まあ聞いてくれたまえ――不確定な法律概念である、と。そこで、カウツキーは、数ページにわたってソヴェト憲法の「専断」をどやしつける。この「まじめな学者」は、イギリスのブルジョアジーには、幾世紀もかかって新しい（中世にとっては新しい）ブルジョア憲法をつくりあげ、仕上げるのを許す。だが、われわれロシアの労働者と農民には、この従僕学問の代表者は、なんの猶予もあたえてくれない。われわれにたいしては、彼は、一字一句の末まで仕上げられた憲法を数ヵ月でつくりあげるよう要求するのである。……

……「専断」だと！　こういう非難が、いかに底知れぬ醜悪きわまるブルジョアジーへのついしょうと愚鈍きわまる物知りぶりとをさらけだしていることか、考えてみたまえ。資本主義諸国の骨の髄までブルジョア的で、たいていは反動的な法律家たちが、数百年または数十年にわたって、労働者を圧迫し、貧乏人の手足をしばりあげ、普通の勤労人民のだれにたいしてでも数千の言いがかりをつけ、障害を設けるいとも詳細な規則をつくりあげ、数十巻、数百巻の法律や法律解説書をあらわしたとき、おおそのときには、ブルジョア自由主義者とカウツキー君は、そこに「専断」を見いださないのである！　そこにあるのは「秩序」と「合法性」なのだ！　そこには、どうすれば貧乏人を「とことんまで押しつぶす」ことができるかが、すっかり考えぬかれ、書きしるされている。そこには数千のブルジョア

弁護士と官吏がいるが（カウツキーは、総じて彼らについてはロをつぐんでいるが、それは、おそらく、まさにマルクスが官僚機構の粉砕に大きな意義を認めたという、まさにその理由によるものからなのだろう……）、これらの弁護士や官吏は、労働者と普通の農民がこれらの法律の鉄条網をけっして突き破らないように法律を解釈するすべを心えている。これは、ブルジョアジーの「専断」ではない。これは、人民の血をむさぼり飲んだ、貪欲な、けがらわしい搾取者の執権ではない。けっしてそうではない。これは、日ごとにますます純粋になってゆく「純粋民主主義」なのだ。

ところが、帝国主義戦争によって外国の兄弟たちから切り離された勤労被搾取階級が、歴史上はじめて自分のソヴェトをつくり、これまでブルジョアジーに抑圧され、しいたげられ、愚鈍化されてきた大衆に、政治的建設への参加を呼びかけ、新しいプロレタリア国家を自分で建設しはじめ、激烈な闘争の炎と内乱の熱火のなかで、搾取者のいない国家にかんする基本的法規を立案しはじめたとき――そのときブルジョアジーの無頼漢、吸血鬼の徒党は、こぞって彼らの復唱者カウツキーといっしょに「専断」だとわめきはじめた！　じっさい、これらの無学者、労働者と農民、この「賤民」が、どうすれば自分の法律を解釈できるというのか？　彼ら、教養のある弁護士やブルジョア著述家やカウツキー一派や賢明な旧官吏たちの助言をうけずに、普通の勤労者がどこから正義感をとってくるというのか？

カウツキー君は、一九一八年四月二八日の私の演説から「……大衆自身が選挙の手続や期日を決定する……」(五)ということばを引用する。そして、「純粋民主主義者」カウツキーは、次のような結論をくだす。

「……してみると、どうやらそれぞれの選挙人集会が、随意に選挙手続を決定できるようになっているらしい。専断と、プロレタリアート自身の内部にいる好ましくない反対分子をかたづける可能性とは、それによって極度に強められるであろう。」（三七ページ）

これは、ストライキのさいに「就労を望む」勤勉な労働者を大衆が圧迫するといってわめきたてる、資本家に雇われた文筆苦力のことばと、どう違うのか？　「純粋」ブルジョア民主主義のもとで選挙手続を官僚的＝ブルジョア的に決定するのは、なぜ専断ではないのか？　数百年来の搾取者にたいする闘争に立ち上がった大衆、この必死の闘争によって啓蒙され、きたえられる大衆の正義感は、なぜブルジョア的偏見で教育されたひとにぎりの官吏やインテリゲンツィアや弁護士の正義感に、かならず劣るはずだというのか？

カウツキーは真正の社会主義者である。――このいとも尊敬すべき家父、このいとも正直な市民の誠実さを疑うようなまねをしてはならない。彼は、労働者の勝利の、プロレタリア革命の、熱烈な、確信をもった支持者である。ただ彼の願いは、大衆の運動が起こるまえに、大衆と搾取者との激しい闘争が起こるまえに、まずはじめに、ナイト・キャップをかぶったあまったるい小市民的インテリゲンツィアや俗物が、かならず内乱を避けるように、革命発展の穏健で、きちんとした規則をつくるようにということなのだ。……

いとも博学なわがイウドゥシカ・ゴロヴリョーフ(三六)は、深い義憤に駆られて、ドイツの労働者にむかい、全ロシア・ソヴェト中央執行委員会が一九一八年六月一四日にエス・エル右派の党とメンシェヴィキとの代表者をソヴェトから除名することを決定したしだい(三〇)を物語る。高貴な憤激に燃えて、イウドゥシカ・カウツキーはこう書いている。

「この措置は、特定の処罰すべき行為をおこなった特定の人間にむけられたものではない。……ソヴェト共和国の憲法は、ソヴェトの議員の不可侵権については一言も述べていない。この場合、特定の個人ではなく、特定の党が、ソヴェトから除名されているのだ。」（三七ページ）

そうだ、ほんとうに恐ろしいことである。これは、純粋民主主義にたいする許しがたい背反である。ところが、わが革命的なイウドゥシカ・カウツキーは、この純粋民主主義の規則にしたがって革命をおこなうはずなのだ。われわれロシアのボリシェヴィキは、まず最初にサーヴィンコフ一派、リーベルダン(三一)やポトレソフ（「アクチヴィスト」(三二)）の一派に不可侵権を約束してやり、そうしてから、チェコスロヴァキア軍団の反革命戦に参加したり、自国の労働者にそむいてウクライナまたはグルジアでドイツ帝国主義者と同盟したりする所業は「処罰される」と述べた刑法典を書くべきだったのだ。そうしてのちにはじめて、この刑法典にもとづいて、われわれは「純粋民主主義」にしたがって「特定の個人」をソヴェトから除名する権利をもつのである。そのさい、サーヴィンコフら、ポトレソフら、リーベルダンらの手をつうじて（あるいは彼らのやっている扇動のおかげで）、イギリス＝フランス資本家から金を受け取っているチェコスロヴァキア軍団も、ウクライナやチフリスのメンシェヴィキの援助でドイツ人から弾薬を手に入れているクラスノーフ一派も、われわれが正しい刑法典をつくりあげるそのときまで、おだやかにすわりこんで、最も純粋な民主主義者として、「野党」の役割を演じるだけにとどまるであろうことは、いうまでもない。……

ソヴェト憲法が「利潤を目的として賃金労働者を雇用する」者から選挙権を取りあげていることも、カウツキーに、右の場合におとらない激しい義憤を呼びおこしている。カウツキーはこう書いている。

「職人を一人使っている家内労働者あるいは小経営主は、まったくプロレタリア的な生活をおくり、プロレタリアの感情をもっていようと、彼には選挙権がない。」(三六ページ)

「純粋民主主義」にたいするなんという背反だろう！なんという不正だろう！　たしかに、今日までマルクス主義者はみな、小経営主こそ賃金労働者の最も無恥で、あくことを知らない搾取者であると考えてきたし、また何千という事実によってそれを実証してきた。だが、イウドゥシカ・カウツキーは、もちろん小経営主の階級をとりあげないで(この有害な階級闘争説を考えだしたのは、いったいだれだ？)、個々人を、「まったくプロレタリア的な生活をおくり、プロレタリアの感情をもっている」ような搾取者をとりあげる。とうの昔に死んだものと思われていた、あの有名な「しまつやのアグネス」が、カウツキーの筆によってよみがえったのである。この「しまつやのアグネス」は、いまから数十年まえに「純粋」民主主義者でブルジョアのオイゲン・リヒターが考えだして、ドイツの文筆界にはやらせたものである。リヒターは、プロレタリアートの執権から、搾取者の資本を没収することから、筆紙につくしがたい禍いが生じることを予言したのであった。彼は、法律上の意味での資本家とはいったいなにか、と無邪気な様子で質問した。彼は、邪悪な「プロレタリアートの執権者たち」に最後の一文までまきあげられてしまう貧しいしまつやの裁縫女(「しまつやのアグネス」)を例にとった。かつては、ドイツ社会民主党全体が純粋民主主義者オイゲン・リヒターのこの「しまつやのアグネス」を笑い話にした時期があった。だが、それはずっと昔のことである。それは、わが党内には多くの民族自由主義者がいる、と公然と率直に真実を語ったベーベルがまだ生きていた遠い昔のことである。(二三)それは、カウツキーがまだ背教者でなかった遠い昔のことである。

いま「しまつやのアグネス」は、「職人を一人使って、まったくプロレタリア的な生活をおくり、プロレタリアの感情をもっている小経営主」としてよみがえった。邪悪なボリシェヴィキは彼を侮辱し、彼から選挙権を取りあげる。なるほど、ソヴェト共和国の「どの選挙集会も」、――当のカウツキーも言っているように――たとえば当該の工場と結びつきをもつ貧しい小親方が、例外的に搾取者でなく、実際に「プロレタリア的な生活をおくり、プロレタリアの

感情をもっている」場合には、彼の参加を許すかもしれない。しかし、無秩序で、規則もたずに行動する（恐ろしいことだ！）普通の労働者の工場集会の生活知や正義感に、ほんとうにたよることができるだろうか？「しまつやのアグネス」や「プロレタリア的な生活をおくり、プロレタリアの感情をもっている小親方」が労働者に侮辱される恐れをおかすよりも、むしろすべての搾取者に、賃金労働者を雇用しているすべての者に、選挙権をあたえるほうがましなことは、明らかではなかろうか？

⁂

ブルジョアジーと社会排外主義者*から歓迎されている、軽蔑すべき背教の無頼漢どもが、わがソヴェト憲法は搾取者から選挙権を取りあげていると言って、これをこきおろすなら、そうするがよい。それはよいことである。なぜなら、それは、ヨーロッパの革命的労働者がシャイデマンら、カウツキーら、ルノデルら、ロンゲら、ヘンダソンら、ラムゼイ・マクドナルドらと、すなわち社会主義の旧来の指導者や旧来の裏切者と決裂するのを促進し、深めるからである。

＊私は、カウツキーの小冊子を有頂天になっておうむがえしにしている『フランクフルト新聞』（一九一八年一〇月二二日付、第二九三号）の社説をいま読んだところである。この株式仲買人の新聞は満足している。もちろんのことだ！ベルリンの一同志が私によこした手紙によると、シャイデマン派の新聞『フォールヴェルツ』は、特別の論説でカウツキー[注]のほとんど一行一行に同意を表明したとのことである。いや、おめでとう、おめでとう！

被抑圧諸階級の大衆、革命的プロレタリアの自覚した誠実な指導者は、われわれに味方するであろう。そういうプロレタリアとこの大衆に、わがソヴェト憲法を知らせてやるだけで十分である。そうすれば、彼らは即座にこう言うだろう、……これは、ほんとうのわれわれの仲間だ、これは、ほんとうの労働者党、ほんとうの労働者政府だ、なぜなら、この政府は、右に名まえをあげた指導者たちの全員がわれわれをだましたように、改良についてのおしゃべりで労働者をだましたりせずに、真剣に搾取者とたたかい、真剣に革命をおこない、実際に労働者の完全な解放のためにたたかっているからだ、と。

もし、ソヴェトの一年間の「実践」ののちに、ソヴェトが搾取者から選挙権を取りあげたとすれば、そのことは、これらのソヴェトが真に被抑圧大衆の組織であって、ブルジョアジーに身売りした社会帝国主義者や社会平和主義者の組織ではないことを意味する。もし、これらのソヴェト

が搾取者から選挙権を取りあげたとすれば、そのことは、ソヴェトが資本家との小ブルジョア的な協調の機関ではなく、議会ふうのおしゃべり（カウツキーら、ロンゲら、マクドナルドらの）の機関ではなく、搾取者にたいして生死をかけた闘争をおこなっている、真に革命的なプロレタリアートの機関であることを意味する。

「カウツキーのこの小著は、当地ではほとんどだれも知っていない」と、消息通の一同志が二、三日まえに（きょうは一〇月三〇日）ベルリンから私によせた手紙に書いてきた。ずっとまえから「悪臭紛々たる屍（しかばね）」となっている「ヨーロッパ」の――帝国主義的および改良主義的な、と読め――社会民主党を泥のなかに踏みつけてやるために、私は、わが国のドイツおよびスイス駐在の大使たちに、金に糸目をつけずにこの書物を買い占めて、それを自覚した労働者に無料で配布するよう忠告したい。

⁂

カウツキー君は、彼の著書の終りの六一ページと六三ページで、「新理論」（彼はボリシェヴィズムをこうよんでいるが、それは、マルクスとエンゲルスのパリ・コミューン分析にふれるのを恐れているからである）が「たとえばスイスのような古い民主主義諸国にさえ支持者を見いだしている」ことを、ひどく嘆いている。「ドイツの社会民主主義者がこの理論を受けいれるとすれば」、それはカウツキーには「不可解な」ことである。

そうではない、それはまったく理解できることである。戦争の重大な教訓を経た今日では、革命的大衆にとって、シャイデマンらもカウツキーらも、いとうべき存在となりつつあるからである。

「われわれは」、つねに民主主義の味方であった、それだのに、いま突然にわれわれはそれを放棄するのか、とカウツキーは書いている。

「われわれ」社会民主党の日和見主義者は、つねにプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）に反対であった。そして、コルプ一派は、ずっとまえから公然とそう言明していた。カウツキーはそのことを知っているのだが、自分がベルンシュタインやコルプらの「ふところへ帰った」という明白な事実を読者に隠すことができるだろうと、無益にも考えているのである。

「われわれ」革命的マルクス主義者は、「純粋」（ブルジョア）民主主義を物神化したことは、かつてなかった。周知のように、プレハーノフは一九〇三年には革命的マルクス主義者であった（ロシアのシャイデマンの立場へ彼をみちびいたいたましい転向をするまでは）。当時、プレハー

ノフは、綱領を採択した党大会で、プロレタリアートは革命にあたって、必要とあれば資本家から選挙権を取りあげるだろうし、どんな議会でも、それが反革命的なものであることがわかれば、解散させるだろう、と述べた。(三〇) まさにこのような見解だけがマルクス主義にふさわしいものであることは、私がさきにあげたマルクスとエンゲルスの言明を見ただけでも、だれでも理解するであろう。これは、明らかに、マルクス主義のすべての基本原則からでてくる結論である。

ブルジョアジーについいしょうし、ブルジョア議会制度に順応し、近代民主主義のブルジョア的性格については沈黙し、この民主主義の拡大、その徹底化を要求するだけの、あらゆる国のカウツキー派が好んでしてきたような発言を、「われわれ」革命的マルクス主義者は人民にむかってしたことはない。

「われわれ」はブルジョアジーにむかってこう語った。搾取者、偽善者である諸君は、民主主義を口にする一方で、たえず被抑圧大衆の政治参加に、一歩ごとに何千という障害を設けている。われわれは、諸君の言質をとらえて、この大衆の利益となるよう、諸君のブルジョア民主主義を拡大することを要求するが、それは、搾取者である諸君を打倒するための革命の準備を大衆にさせるのが目的なのである。そして、もし搾取者である諸君が、われわれのプロレタリア革命に反抗しようと企てるなら、われわれは諸君を容赦なく弾圧する。われわれは諸君を無権利なものにする。それればかりか、われわれは諸君にパンをあたえない。なぜなら、われわれのプロレタリア共和国では、搾取者は無権利となり、火と水を奪われるだろうからだ。なぜなら、われわれはシャイデマンふうやカウツキーふうの社会主義者ではなく、真剣に社会主義者なのだから、と。

「われわれ」革命的マルクス主義者は、まさにこのように語ってきたし、今後も語るであろう。被抑圧大衆がわれわれに味方し、われわれと行動をともにするのは、このためである。そして、シャイデマンらやカウツキーらは、背教者の掃きだめにほうりこまれるであろう。

国際主義とはなにか？

カウツキーは、自分で国際主義者だと固く確信しており、そう自称している。彼は、シャイデマン一派を「政府社会主義者」だときめつけている。カウツキーは、メンシェヴィキを擁護する（彼は、メンシェヴィキと同調していることをあからさまに言ってはいないが、メンシェヴィキの見解をそのまま説いている）ことで、彼のいわゆる「国際主

義」がどんな種類のものであるかを、目に見えてまざまざとさらけだした。ところで、カウツキーは、ひとりぼっちではなく、第二インタナショナルの環境のなかで不可避的にそだってきた一潮流(フランスのロンゲ、イタリアのトゥラーティ、スイスのノブスとグリム、グラベールとネーヌ、イギリスのラムゼイ・マクドナルド、等々)の代表者であるから、カウツキーの「国際主義」に立ちいってしらべてみると、教えられるところが多い。

メンシェヴィキもツィンメルヴァルト(六六)に出席したこと(これは、たしかに、一つの証明書ではあるが、しかし……腐った証明書である)を強調して、カウツキーは、彼の同意するメンシェヴィキの見解をつぎのように説明している。彼らは、すべての交戦国が無併合・無賠償のスローガンをうけいれるように望んでいた。この見解によると、それが達成されないあいだは、ロシア軍は戦闘準備をととのえていなければならなかった。ところが、ボリシェヴィキは、ぜがひでも即時の講和を要求していた。彼らは、必要な場合には単独講和を結ぶつもりであった。そうでなくてもすでにはなはだしかった軍隊の崩壊を助長することによって、彼らは単独講和をむりやり押しつけようとつとめた。」(二七ページ)

カウツキーの意見では、ボリシェヴィキは、権力を掌握するべきでなく、憲法制定議会で満足すべきだったのである。

こういうわけで、カウツキーとメンシェヴィキの国際主義は、帝国主義的ブルジョア政府に改良を要求しはするが、すべての交戦国が無併合・無賠償のスローガンをうけいれるまでは、ひきつづきこの政府を支持し、この政府のおこなう戦争を支持するというものである。トゥラーティらも、カウツキー派(ハーゼその他)も、ロンゲ一派も、たびたびこのような見解を述べて、自分たちは「祖国擁護」に賛成であると言明した。

理論的には、これは、社会排外主義者から離れる能力をまったく欠いていることであり、祖国擁護の問題における完全な混乱である。政治的には、これは、国際主義を小市民的民族主義とすりかえ、改良主義の側に寝がえることであり、革命を放棄することである。

「祖国擁護」を承認することとは、プロレタリアートの見地からすれば、現在の戦争を弁護し、この戦争の正当性を承認することである。ところで、ある時点に敵の軍隊がどこにいるか、自国内か、それとも他国内かにはかかわりなく、この戦争はあくまでも帝国主義戦争である(君主制のもとでも、共和制のもとでも)から、祖国擁護を承認する

ことは、実際には帝国主義的・強盗的ブルジョアジーを支持することであり、社会主義を完全に裏切ることである。ロシアでは、ケーレンスキーのもとでも、すなわちブルジョア的民主的共和制のもとでも、戦争はやはり帝国主義戦争であった。なぜなら、戦争をおこなっていたのは、支配階級としてのブルジョアジーだったからである（戦争は「政治の継続」である）。そして、戦争の帝国主義的性格のとくに明瞭な現われは、前ツァーリがイギリス＝フランスの資本家と結んだ、世界の分割と他国の略奪にかんする秘密条約であった。

メンシェヴィキは、このような戦争を防衛戦争または革命戦争とよんで、いまわしくも人民をあざむいた。そして、カウツキーは、メンシェヴィキの政策を是認することによって、人民の欺瞞を是認する。また、労働者をなぶりものにし、彼らを帝国主義者の車に縛りつけることで資本の御用をつとめてきた小ブルジョアの役割を是認する。カウツキーは、スローガンをかかげれば、それで事態が変わるかのように想像して（また大衆にそういうばかげた考えをつぎこんで）、典型的に小市民的な俗物的政策を実行している。ブルジョア民主主義の全歴史が、このような幻想を反駁している。ブルジョア民主主義者は、人民をだますために、つねになんでも思いついたままの「スローガン」をかかげてきたし、いまもかかげている。肝心なことは、彼らの誠実さを吟味し、ことばに行為を対比し、観念論的あるいは山師的な空文句に満足せずに、階級的な実体を探求することである。帝国主義戦争が帝国主義戦争でなくなるのは、山師や、口舌の徒や、市民的俗物があまったるい「スローガン」をかかげたときではない。それは、帝国主義戦争を遂行していて、無数の経済的な糸（それどころか綱）でこの戦争と結びついている階級が実際に打倒され、真に革命的な階級であるプロレタリアートがこの階級に代わって権力をにぎるときだけである。それ以外には、帝国主義戦争から――また帝国主義的・強盗的講和からも――脱出することはできない。

メンシェヴィキの対外政策を是認し、それに国際主義的でツィンメルヴァルト的な政策だといういきわめをつけることによって、カウツキーは、第一に、ツィンメルヴァルトの日和見主義的多数派の完全な腐敗（われわれツィンメルヴァルト左派(三)がただちにこのような多数派と一線を画したのは、理由のないことではない！）を示し、第二に、――これがいちばん肝心な点だが――プロレタリアートの立場から小ブルジョアジーの立場へ、革命的な立場から改良主義的な立場へ移るのである。

プロレタリアートは、帝国主義ブルジョアジーを革命的

に打倒するためにたたかい、小ブルジョアジーは、帝国主義を改良主義的に「改善する」ために、また帝国主義に従属してそれに順応するために、たたかう。カウツキーがまだマルクス主義者であったころ、たとえば彼が『権力への道』を書いた一九〇九年には、彼は、まさに戦争に関連して革命が起こることは避けられないという考えを主張し、革命の時代が近づいた、と述べた。一九一二年のバーゼル宣言は、一九一四年に実際に勃発した、あのほかならぬドイツ、イギリス両グループのあいだの帝国主義戦争に関連して、あからさまに、明確にプロレタリア革命について述べている。ところが、カウツキーは、それらの革命が一九一八年に戦争に関連して革命が始まると、一九一八年に戦争に関連して革命が避けられないものであることを説明しようとはせずに、また革命的戦術や、革命準備の方法手段を熟考し、徹底的に考えぬくこともせずに、メンシェヴィキの改良主義的戦術を国際主義だとよびはじめたのだ。これは背教ではないだろうか？

カウツキーは、軍隊の戦闘態勢を維持するように主張したというので、メンシェヴィキをほめたたえる。彼は、そうでなくてもすでにはなはだしかった「軍隊の崩壊」を助長したというので、ボリシェヴィキを非難する。これは、改良主義と帝国主義ブルジョアジーへの従属とをほめたたえ、革命を非難し、否認することを意味する。なぜなら、ケーレンスキーのもとで戦闘態勢を維持することは、ブルジョア的な司令部(たとえ共和主義的であっても)に率いられた軍隊を維持することを意味していたし、また実際にそうであったからである。この共和主義的軍隊が、コルニーロフ的な指揮官団のおかげで、コルニーロフ精神を維持していたことは、周知のことであり、また事件の経過がまざまざと確証したところである。ブルジョア的な将校団は、コルニーロフ派にならざるをえなかったし、また帝国主義へ、プロレタリアートの暴力的弾圧へ、傾かないわけにはいかなかった。帝国主義戦争のすべての基礎、ブルジョア執権のすべての基礎を従来のままに残しておき、瑣末な点をつくろい、つまらぬ点をかざりたてること(「改良」)——メンシェヴィキの戦術は、実際上こういうことに帰着したのであった。

まさにその反対なのだ。およそ大革命で、軍隊の「崩壊」なしにすんだものはひとつもなかったし、またあるはずがなかった。なぜなら、軍隊は旧制度を維持する最もこちこちにこりかたまった用具であり、ブルジョア的規律をたもち、資本の支配を維持し、勤労者の奴隷的従順を維持し、やしない、彼らを資本の支配に従属させるための最も強固なとりでだからである。反革命派は、軍隊とならんで武装した労働者がいるのを、けっしてがまんしなかったし、

またがまんするはずもなかった。エンゲルスは書いている。フランスでは、どの革命のあとでも、労働者は武装していた。「そこで、国政の舵をにぎったブルジョアにとって第一に必要なことは、労働者の武装を解除することであった(六〇)」。武装した労働者は、新しい軍隊の芽ばえであり、新しい社会制度の組織上の細胞であった。この細胞を押しつぶし、それを成長させないこと――これが、ブルジョアジーにとって第一のおきてであった。あらゆる勝利した革命の第一のおきては、――マルクスとエンゲルスがたびたび強調したように――旧来の軍隊を破壊し解散して、それを新しい軍隊とおきかえることであった(六一)。支配権をめざして立ち上がる新しい社会階級は、旧来の軍隊を完全に解体させる(反動的な、あるいはまったく臆病な小市民は、このことを「崩壊」だと言って叫びたてる)ことなしには、軍隊をまったくもたない、きわめて困難で苦難にみちた時期をとおりぬける(フランス大革命も、この苦難にみちた時期をとおりぬけた)ことなしには、また苦しい内乱のなかで新しい階級の新しい軍隊、新しい規律、新しい軍事組織を徐々につくりあげることなしには、この支配権をかちとって強固にすることはけっしてできなかったし、いまでもできない。歴史家カウツキーは、まえにはこのことを理解していた。背教者カウツキーは、このことを忘れてしまった。

カウツキーが、ロシア革命におけるメンシェヴィキの戦術を是認するのなら、彼は、どういう権利があって、シャイデマンらを「政府社会主義者」とよぶのか？ メンシェヴィキがケーレンスキーを支持し、ケーレンスキー内閣にはいったとき、彼らもまったく同じように政府社会主義者であった。帝国主義戦争を遂行している支配階級の問題を提起してみさえすれば、カウツキーは、この結論をはぐらかすことはけっしてできないであろう。だが、カウツキーは、支配階級の問題、マルクス主義者がかならず取りあげなければならない問題を提起するのを避けている。というのは、そういう問題を提起するだけで、背教者の正体が暴露されるからである。

ドイツのカウツキー派、フランスのロンゲ派、イタリアのトゥラーティ一派は論じて言う。社会主義は、諸民族の平等と自由、諸民族の自決を前提とする。だから、自分の国が攻撃されたときや、敵軍が自国の国土に侵入してきたときには、社会主義者は祖国を守る権利と義務がある、と。しかし、この議論は、理論的には、社会主義を徹頭徹尾愚弄するものか、それとも、ぺてん師的な逃げ口上か、そのどちらかであり、実践的＝政治的には、戦争の社会的・階級的性格、反動戦争の時期における革命党の任務について考えることさえできない、まったく無知な百姓の議論にそ

っくりである。

社会主義は、諸民族にたいする暴力に反対である。このことは争う余地がない。だが、社会主義は、一般に人間にたいする暴力に反対なのだ。けれども、キリスト教的無政府主義者やトルストイ主義者以外には、このことから、社会主義は革命的強力に反対するという結論を引きだした者はまだだれもいない。だから、反動的暴力を革命的強力から区別する諸条件を分析せずに「強力」一般をうんぬんすることは、革命を否認する小市民であることを意味するか、でなければ、まったくの話、詭弁で自分をあざむき、他人をあざむくことを意味する。

諸民族に対する暴力についても、これと同じことが言える。あらゆる戦争は、諸民族にたいする暴力である。だが、そのことは、社会主義者が革命戦争に賛成することを妨げない。戦争の階級的性格、これこそ社会主義者の当面する基本的な問題である（もし彼が背教者でなければ）。一九一四—一九一八年の帝国主義戦争は、世界を分割し、獲物を分配し、弱小民族を略奪し絞殺する目的で、帝国主義ブルジョアジーの二つのグループのあいだでおこなわれた戦争である。一九一二年のバーゼル宣言は、この戦争をこう評価し、そして諸事実はこの評価を裏書きした。戦争についてのこの見地から離れる者は、社会主義者ではない。

もしヴィルヘルム治下の一ドイツ人、もしくはクレマンソー治下の一フランス人が、敵が私の国に侵入してきたなら、私は社会主義者として祖国を守る権利と義務がある、と言うとすれば、これは社会主義者の議論でも、国際主義者の議論でも、革命的プロレタリアの議論でもなく、小市民的民族主義者の議論である。なぜなら、この議論では、資本にたいする労働者の革命的な階級闘争が消えてなくなり、世界ブルジョアジーと世界プロレタリアートの見地からの戦争全体の評価が消えてなくなるからである。すなわち、国際主義が消えてなくなって、貧弱でこりかたまった民族主義が残るだけだからである。私の国がいためつけられている、それ以外のことは私にはなんのかかわりもない——右の議論はこういうことに帰着する。ここに、この議論の小市民的・民族主義的な狭さがある。これは、個人的な暴力、一個人にたいする暴力に面して、だれかが、社会主義は暴力に反対である、だから私は監獄にはいるよりも裏切者になるほうがよいと思う、と言うようなものである。

フランス人、ドイツ人、もしくはイタリア人が、社会主義は諸民族にたいする暴力に反対である、だから、敵が私の国に侵入してきたなら、私は自分を守る、と言うとすれば、それは社会主義と国際主義を裏切るものである。なぜなら、そういう人間は自分の「国」だけを見て、「自国の」

……「ブルジョアジーをすべてに優先させ、戦争を帝国主義戦争とならせ自国のブルジョアジーを帝国主義的略奪の鎖の一環とならせている国際的連関を考えないからである。

小市民はみな、愚かで無知な百姓はみな、ちょうど背教者であるカウツキー派、ロンゲ派、トゥラーティ一派が論じているのと同じように論じる。すなわち、敵が私の国のなかにはいっている、それ以外のことは私にはなんのかかわりもない、と。*

社会主義者、革命的プロレタリア、国際主義者は、これとは違ったふうに論じる。戦争の性格（それが反動的な戦争か、それとも革命的な戦争かという）は、だれが攻撃したか、「敵」がだれの国のなかにはいっているかによってきまるのではなく、どの階級が戦争をしているか、その戦争はどういう政治の継続かによってきまるのである。もしその戦争が反動的な帝国主義戦争であるなら、つまり、帝国主義的、暴力的、強盗的な反動的ブルジョアジーの二つの世界的グループのおこなう戦争であるなら、あらゆるブルジョアジー（小国のブルジョアジーでさえ）が略奪の参加者に転化する。そして、世界的屠殺の惨禍からの唯一の救いの道として、世界プロレタリア革命を準備することが、私の任務、革命的プロレタリアートの代表者の任務となる。私は「自」国の見地から論じるべきではなく（なぜなら、それは、自分が帝国主義ブルジョアジーの手中の操り人形であることを理解しない、あわれな鈍物、民族主義的小市民の議論であるから）、世界プロレタリア革命の準備、宣伝、促進に私が参加するという見地から論じなければならない。

これこそ国際主義であり、これこそ、国際主義者、革命的労働者、真の社会主義者の任務である。背教者カウツキーは、まさにこのイロハを「忘れた」のである。そして、彼が小ブルジョア民族主義者（ロシアのメンシェヴィキ、フランスのロンゲ派、イタリアのトゥラーティ派、ドイツのハーゼ一派）の戦術を是認することから、すすんでボリシェヴィキの戦術の批判に移ると、彼の背教はいっそう明

* 社会排外主義者（シャイデマン、ルノーデル、ヘンダソン、ゴンパーズ一派）は、戦時に「インタナショナル」を口にすることを、いっさい拒否する。彼らは、「自国の」ブルジョアジーの敵を、社会主義の……「裏切者」と見なす。彼らは、自国のブルジョアジーの侵略政策に賛成である。社会平和主義者（すなわち、口さきでは社会主義者、行動では小市民的平和主義者）は、あらゆる「国際主義的」感情を表明し、併合その他に反対するが、実際には、自国の帝国主義ブルジョアジーの支持をつづける。この二つの型のあいだの相違が重要でないのは、毒舌をはく資本家と甘言を弄する資本家との相違が重要でないのと同様である。

瞭になる。つぎにかかげるのがその批判である。

「ボリシェヴィキ革命は、それが全ヨーロッパ革命の出発点となり、ロシアの大胆なイニシアティヴが全ヨーロッパのプロレタリアをふるいたたせるであろう、という前提に立っていた。

こういう前提のもとでは、ロシアの単独講和がどんな形態をとろうと、それがロシアの人民にどんな負担や領土の喪失（文字どおりには、四肢切除または身体毀損、Verstümmelungen）をもたらそうと、それが民族自決のどんな解釈をもたらそうと、もちろん、どうでもよいことであった。それからまた、ロシアが自衛の能力をもつかどうかも、どうでもよいことであった。この見解によれば、ヨーロッパ革命が、ロシア革命にとって最良の防衛をなすものであったし、また、以前のロシア領土に住むすべての民族に完全な、真の自決をもたらすはずであった。

ヨーロッパに社会主義をもたらし、確立するヨーロッパ革命が、またロシアで、国の経済的な後進性が社会主義的生産の実現にたいして設けている障害を取りのぞく手段となるはずであった。

ロシア革命はかならずヨーロッパ革命を誘発するにちがいないという、根本的前提を認めさえすれば、以上のすべては、きわめて論理的で、十分に根拠のあることであった。だが、そういうことが起こらない場合には、どうなるのか？

今日までのところ、この前提は実現されていない。そしていま、ヨーロッパのプロレタリアは、ロシア革命を見捨て、裏切ったかどで非難されている。これは、不詳の人々にたいする非難である。なぜといって、ヨーロッパのプロレタリアートのふるまいの責任をいったいだれに問おうというのか？」（二八ページ）

そして、カウツキーは、なおつけくわえてくどくどとしゃべりたてている。マルクス、エンゲルス、ベーベルは、彼らの期待した革命の到来について幾度も誤算した、だが、「一定の期間内に」（二九ページ）革命が起こるという期待のうえにその戦術を打ちたてたことは、かつてなかった、ところが、ボリシェヴィキは「いっさいを全ヨーロッパ革命という一枚のカードに賭けた」、と。

われわれはわざとこんなにも長々と引用したが、それは、カウツキーがどんなに「たくみに」マルクス主義を偽造し、それを卑俗で反動的な小市民的見解とすりかえているかを、読者にはっきり示すためであった。

第一に、明らかにばかげた考えを論敵になすりつけ、そうしてからそれを反駁するのは、あまり賢くない人間の手

ロである。もしボリシェヴィキが、他の国々で一定の期間内に革命が起こるという期待のうえにその戦術を打ちたてたとすれば、これは、議論の余地のないばかげたことであったろう。しかし、ボリシェヴィキ党は、そんなばかげたことはやらなかった。アメリカの労働者にあてた手紙（一九一八年八月二〇日付）で、私は、われわれはアメリカの革命に期待をかけてはいるが、一定の期間内にそれがやってくることを期待してはいない、と述べて、こういうばかげた考えとはっきり一線を画している。(き) 左派エス・エルと「左翼共産主義者」にたいする論戦（一九一八年一―三月）のさいにも、私は、同じ思想を幾度も述べた。カウツキーは、ちょっとした……まったくちょっとした改作をやって、その改作のうえに彼のボリシェヴィズム批判を打ちたてたのである。カウツキーは、多少とも近い将来に、だが一定の期間内にではなく、ヨーロッパ革命が起こるのを期待する戦術と、一定の期間内にヨーロッパ革命が起こるのを期待する戦術とを、いっしょくたにした。ちょっとした、まったくちょっとした偽造だ！

あとのほうの戦術はばかげている。まえのほうの戦術は、マルクス主義者にとって、すべての革命的プロレタリアと国際主義者にとって、必須なものである、――なぜ必須かといえば、この戦術だけが、すべてのヨーロッパ諸国に戦争によって生みだされている客観的情勢をマルクス主義的に正しく考慮しており、またこれだけがプロレタリアートの国際的任務に応じるものだからである。

革命的戦術一般の原則についての大問題を、ボリシェヴィキ的革命家がおかししかねない、だが実際にはおかしていない誤りについての小さな問題とすりかえることによって、カウツキーは、革命的戦術一般をまんまと否認したのだ！

政治上の背教者である彼は、理論の面では、革命的戦術の客観的前提の問題を提起することさえできないのだ。

ここでわれわれは、第二の点にたどりついた。

第二に、革命的情勢が現に存在する場合に、ヨーロッパ革命に期待をかけることは、マルクス主義者にとっては必須である。社会主義的プロレタリアートの戦術が、革命的情勢の存在するときと存在しないときとで一様ではありえないことは、マルクス主義のイロハに属する真理である。

もしカウツキーが、マルクス主義者にとって必須なこの問題を提起していたなら、それへの答えが無条件に彼に不利なものであることが、彼にわかっただろう。戦争の起こるずっとまえに、マルクス主義者はみな、社会主義者はみな、ヨーロッパ戦争が革命的情勢を生みだすだろうという点で、意見が一致していた。カウツキーがまだ背教者でなかったころには、彼は明瞭に、明確にこのことを認めてい

た——一九〇二年にも（『社会革命』）、一九〇九年にも（『権力への道』）認めていた。バーゼル宣言は、第二インタナショナル全体の名でこのことを認めた。すべての国の社会排外主義者と日和見主義者のあいだを動揺する連中）が、バーゼル宣言のこの点にかんする声明をこのうえなく恐れているのは、無理もない！

だから、ヨーロッパの革命的情勢に期待をかけることは、ボリシェヴィキののぼせあがりではなく、すべてのマルクス主義者の共通の意見だったのである。カウツキーが、この争うことのできない真理を、ボリシェヴィキは「つねに暴力と意志の全能を信じていた」というような文句でかたづけるとすれば、それは、まさしく、彼が革命的情勢の問題の提起から逃げだしたこと——恥しらずにも逃げだしたこと——をおおいかくすからっぽな文句である。

つぎに、革命的情勢は実際にやってきたのか、こなかったのか？　この問題も、カウツキーは提起できなかった。この問題には、経済的事実が答えている。すなわち、戦争によっていたるところに生みだされた飢えと荒廃は、革命的情勢を意味するのである。政治的事実もやはりこの問題に答えている。すでに一九一五年以来、腐れきった旧来の社会主義諸党の分裂の過程、プロレタリアートの大衆が社会排外主義的指導者から離反して、左へ、革命的な思想と気分のほうへ、革命的指導者のほうへすすんでゆく過程が、あらゆる国ではっきりと現われている。

カウツキーがその小冊子を書いた一九一八年八月五日に、この事実を見ることのできなかった人間は、革命を恐れ、革命を裏切る人間だけであった。そして、一九一八年一〇月末の今日では、ヨーロッパの一連の国に、革命が、万人の目のまえで、きわめて急速に成長しつつある。これまでどおりにマルクス主義者と見られたがっている「革命家」カウツキーは、マルクスに嘲笑された一八四七年の俗物たちと同じように、革命の近づいてきているのが目にはいらぬ近視眼の俗物であることがわかった!!

ここでわれわれは、第三の点にたどりついた。

第三に、ヨーロッパに革命的情勢が存在するという条件のもとでとるべき革命的戦術の特質はどういうものか？　背教者となったカウツキーは、マルクス主義者にとって必須なこの問題を提起することを恐れた。カウツキーは、典型的な小市民的俗物か無知な農民のように、こう論じる。「全ヨーロッパ革命」はやってきたかどうか、と。もしやってきたとすれば、彼もまた革命家になる用意がある！　だが、そのときには、——注意しておくが——どの悪党（勝利したボリシェヴィキにいま往々にしてとりいろうと

している無頼漢のような）も、革命家と自称しはじめるであろう！

もしやってきていないとすれば、カウツキーは革命に背を向ける！　無知な大衆に成熟しつつある革命の必然性を説き、革命の不可避なことを証明し、革命が人民にもたらす利益を説明し、プロレタリアートとすべての勤労被搾取大衆に革命の準備をさせる能力こそ、革命的マルクス主義者を俗物や小市民から区別するものなのだが、カウツキーにはこの真理を理解しているらしいところはつゆほどもない。

カウツキーはボリシェヴィキに、ヨーロッパ革命が一定の期間内にやってくることを期待して、いっさいをこの一枚のカードに賭けたかのようなばか話をなすりつけた。しかし、このばか話は、カウツキー自身にはねかえってきた。というのは、彼の議論からすれば、もし一九一八年八月五日までにヨーロッパ革命がやってきていたなら、ボリシェヴィキの戦術は正しかったろうということに、まさになるからである！　カウツキーは、ほかならぬこの日付を、彼の小冊子の執筆の日としてあげている。しかも、この八月五日から数週間後に、一連のヨーロッパ諸国で革命が始まろうとしていることが明らかになったとき、カウツキーの完全な背教、彼がマルクス主義をまったく変造したこと、彼には革命的に論じる能力ばかりか、問題を革命的に提起する能力さえまったくないことが、ものの見ごとにさらけだされた！

ヨーロッパのプロレタリアを裏切りのかどで非難するのは、不詳の人々を非難するものだ、とカウツキーは書いている。

カウツキー君、君はまちがっている！　鏡を見たまえ、そうすれば、この非難がむけられている「不詳の」人が見えるだろう。カウツキーは、無邪気をよそおっている。彼は、だれがこういう非難を提出したのか、この非難にどういう意味があるのか、わからないようなふりをしている。実際には、カウツキーは、この非難がドイツの「左派」、スパルタクス派、[13]リープクネヒトとその同志たちによって出されていることを、よく知っている。この非難は、ドイツのプロレタリアートがフィンランド、ウクライナ、ラトヴィア、エストニアを圧殺したとき、彼らはロシア革命（と国際革命）を裏切ったのだ、という明白な自覚をあらわしている。この非難がまず第一に、だれよりも多く向けられている相手は、つねにしいたげられている大衆ではなく、シャイデマンらやカウツキーらのように、大衆の惰性を克服するために大衆のあいだで革命的に扇動し、革命的に宣伝し、革命的に活動する義務を果たさなかった指導者

たち、被抑圧階級の大衆の底ふかくにつねにくすぶっている革命的な本能と熱望に事実上さからって行動した指導者たちである。シャイデマンらは、あからさまに、露骨に、鉄面皮に、たいていは欲得ずくで、プロレタリアートを裏切り、ブルジョアジーの側に寝がえった。カウツキーらとロンゲらは、動揺し、ためらい、おずおずと時の強者の顔色をうかがいながら、同じことをやった。カウツキーは、戦争中の彼のすべての著作によって、革命的精神を支持し発展させせずに、それに水をかけたのである。

ロシア革命を裏切ったかどでの、ヨーロッパのプロレタリアにむけられた「非難」がどんなに巨大な理論的意義をもち、またそれ以上に大きな扇動・宣伝上の意義をもっているかさえ、カウツキーには理解できないという事実、これは、公認のドイツ社会民主党の「平均的な」指導者の小市民的愚鈍さの、まさしく歴史的な記念碑として残るであろう！　この「非難」は、社会主義を裏切らなかったドイツの社会主義者、リープクネヒトとその同志たちが、シャイデマンらやカウツキーらをほうりだすように、そういう「指導者」を押しのけ、人を愚鈍にし卑俗にする彼らの説教をふりはらい、彼らにそむき、彼らを除外し、彼らを乗りこえて、革命をめざし、革命のために立ち上がるようにという、ドイツの労働者へのその呼びかけを言いあらわすための――ドイツ「帝国」の検閲の条件のもとでは――おそらく唯一の形式だということ、それがカウツキーには理解できないのだ！

カウツキーには、このことが理解できない。いったい、どうして彼にボリシェヴィキの戦術を理解することができようか？　革命一般を否認する人間に、最も「困難」な場合の一つにおける革命の発展条件を考えめぐらし評価するようなことが、期待できるであろうか？

ボリシェヴィキの戦術は正しかった。それは、唯一の国際主義的戦術であった。なぜなら、この戦術は、世界革命にたいする臆病な恐怖や小市民的「不信」にもとづくものでもなければ、他のあらゆるものには「三文の値うちも認めずに」、「自分の」祖国（自分のところのブルジョアジーの祖国）を守ろうとする狭い民族主義的願望にもとづくものでもなく、ヨーロッパの革命的情勢の正しい（戦争の起こるまでは、社会排外主義者と社会平和主義者が変節するまでは、一般に承認されていた）評価にもとづくものだったからである。この戦術が唯一の国際主義的戦術だったというのは、すべての国に革命を発展させ、支持し、めざめさせるために一国で実現できる最大限のことを実行したからである。この戦術の正しさは、それが大成功をおさめたことで確証された。なぜなら、ボリシェヴィズムは（ロシ

アのボリシェヴィキの功績によってではけっしてなく、実際に革命的なこの戦術に大衆がいたるところできわめて深い共感を示したおかげで）世界ボリシェヴィズムとなり、社会排外主義や社会平和主義とは具体的、実践的に異なった思想、理論、綱領、戦術をあたえたからである。ボリシェヴィズムは、シャイデマンらやカウツキーら、ルノデルらやロンゲら、ヘンダソンらやマクドナルドらの、古い腐ったインタナショナルにとどめをさした。これらの連中は、いまや「一致」を夢想し、屍をよみがえらせようとして、たがいに足をすくいあうことであろう。ボリシェヴィズムは、平和な時代の獲得物をも、開始した革命時代の経験をも考慮にいれる、真にプロレタリア的で共産主義的な第三インタナショナルの思想上、戦術上の基本原則をつくりだした。

ボリシェヴィズムは、「プロレタリアートの執権」という思想を全世界に普及させ、このことばをラテン語からまずロシア語に、ついで世界中のすべての言語に翻訳し、ソヴェト権力の実例によって、次のことを実証した。すなわち、後進国の労働者と貧農でさえ、最も経験の乏しく、教養の乏しい、組織に最も慣れていない労働者と貧農でさえ、巨大な困難のもとで、搾取者（全世界のブルジョアジーから支持された搾取者）とのたたかいのなかで、まる一年のあいだ勤労者の権力を維持し、世界中のこれまでのあらゆる民主主義よりもはるかに高度で広範な民主主義をつくりだす能力、社会主義を実際に実現するための幾千万人の労働者農民の創造的活動を開始する能力をもっていたということである。

ボリシェヴィズムは、これまでどの国のどんな党にもできなかったほど力づよく、ヨーロッパとアメリカのプロレタリア革命の発展を実際に助けた。シャイデマンらやカウツキーらの戦術が帝国主義戦争からも、帝国主義ブルジョアジーのもとでの賃金奴隷制からも労働者を解放しなかったこと、この戦術がすべての国にとっての模範としてはなんの役にも立たないことが、全世界の労働者に日ごとに明らかになりつつある一方で、ボリシェヴィズムが戦争と帝国主義の惨禍からまぬがれる正しい道を示したこと、ボリシェヴィズムがすべての者にとって戦術の模範として役だつことが、すべての国のプロレタリア大衆に、日ごとに明らかになりつつある。

全ヨーロッパのプロレタリア革命ばかりでなく、全世界のプロレタリア革命が、万人の目のまえで成熟しつつある。そして、ロシアにおけるプロレタリアートの勝利は、この革命を援助し、促進し、支持した。これだけでは、社会主義が完全に勝利するのに不十分であろうか？　もちろん、

不十分である。一国には、これ以上のことをすることはできない。それでも、この一国は、ソヴェト権力のおかげで、多くのことをなしとげたので、かりにドイツ帝国主義とイギリス＝フランス帝国主義との協定によって、世界帝国主義があすにもロシアのソヴェト権力を押しつぶすとしても、そういう最悪の場合にさえ、ボリシェヴィキの戦術は、社会主義に莫大な利益をもたらし、不敗の世界革命の成長を助けたことがわかるであろう。

「経済的分析」をよそおったブルジョアジーのご機嫌とり

すでに述べたように、カウツキーのこの著書は、――書名が内容を正しく伝えるものとすれば――『プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）』ではなく、『ブルジョアのボリシェヴィキ攻撃のおうむがえし』と名づけるべきであったろう。

ロシア革命のブルジョア的性格についてのメンシェヴィキの古い「理論」、つまりメンシェヴィキによるマルクス主義の古い歪曲（一九〇五年にカウツキーによって拒否されたもの！）が、いま一度わが理論家によってむしかえされている。この問題がロシアのマルクス主義者にとってどんなに退屈でも、この問題に立ちいって論じなければなるまい。

ロシア革命はブルジョア革命である――一九〇五年以前には、ロシアのすべてのマルクス主義者がそう言った。メンシェヴィキは、マルクス主義を自由主義とすりかえて、このことからつぎのような結論を引きだした――したがって、プロレタリアートは、ブルジョアジーがうけいれうるものをこえてすすんではならない、プロレタリアートはブルジョアジーとの協調政策をとらなければならない、と。ボリシェヴィキは言った。それは自由主義的ブルジョアジーの理論だ。ブルジョアジーは、君主制をも、地主的土地所有等々をもできるだけ維持しながら、革命的にではなく、ブルジョア的に、改良主義的に、国家の改造をおこなおうとつとめている。プロレタリアートは、ブルジョアジーの改良主義に「縛られる」ことなく、ブルジョア民主主義革命を最後まで遂行しなければならない、と。ブルジョア革命における諸勢力の階級的相互関係を、ボリシェヴィキはつぎのように定式化した。プロレタリアートは、農民を味方につけて、自由主義的ブルジョアジーを中立化し、君主制、中世的制度、地主的土地所有を徹底的に破壊する、と。

プロレタリアートと農民一般との同盟に、まさに革命のブルジョア的性格が現われている。なぜなら、農民一般は、

商品生産を基盤とする小生産者だからである。すでにその当時に、ボリシェヴィキは補足してこう言った。そのあとで、プロレタリアートは半プロレタリアート全体（被搾取者と勤労者の全体）を味方につけて、中農を中立化し、ブルジョアジーを打倒する。これは、ブルジョア民主主義革命とは違った社会主義革命であろう、と（論集『一二年間』、一九〇七年、ペテルブルグ刊、に再録された私の一九〇五年の小冊子『二つの戦術』を見よ）。

カウツキーは、一九〇五年のこの論争に間接に参加し、(三)当時のメンシェヴィキ、プレハーノフに意見を求められて、実質上プレハーノフに反対する意見を述べた。このことは、当時ボリシェヴィキの出版物で特別な嘲笑のまとになった。いまカウツキーは、当時の論争のことは一言もあげていない（自分の言ったことで自分が暴露されるのを恐れているのである！）。こうして彼は、ドイツの読者が問題の本質を理解するのをまったく不可能にしている。カウツキー君は、自分が一九〇五年には労働者と自由主義的ブルジョアジーとの同盟にではなく、労働者と農民との同盟に賛成であったこと、また自分がこの同盟をどういう条件で擁護したか、この同盟のためにどういう綱領を立案したかということを、一九一八年にドイツの労働者に話すことができなかった。

後退したカウツキーは、いまでは「経済的分析」をよそおい、「史的唯物論」についての高慢な空文句をつかって、ブルジョアジーにたいする労働者の従属を擁護し、メンシェヴィキのマースロフからの引用文の助けをかりて、メンシェヴィキの古い自由主義的見解をくどくどと説明している。その場合、これらの引用文によって、ロシアの後進性という新しい思想を証明しようとしているが、この新しい思想から引きだされているのは、ブルジョア革命ではブルジョアジーよりも先へすすんではならない、という趣旨の古い結論である！　だが、これは、一七八九—一七九三年のフランスのブルジョア革命と、一八四八年のドイツのブルジョア革命とを対比して、マルクスとエンゲルスが述べたことのすべてにまったく反している！(三)

カウツキーの「経済的分析」の主要な「論拠」と主要な内容に移るまえに、そもそも最初の文句がすでにこの筆者の思想の奇妙な混乱ぶり、あるいは浅慮ぶりをさらけだしていることを、注意しておこう。

わが「理論家」はこう宣言する。

「ロシアの経済的基礎はいまなお農業である。しかも、ほかならぬ農民的小生産である。住民の約五分の四、おそらくは六分の五までが、これによって生活している。」（四五ページ）

愛すべき理論家よ、第一に、君は、この小生産者大衆のあいだにいったいどれだけの搾取者がいるかを、考えたことがあるのか？　もちろん、それは小生産者総数の一〇分の一をこえることはないし、都市ではもっと少ない。なぜなら、都市では大規模生産がいっそう発展しているからである。いま、ありそうもないほど高い数字をとって、小生産者の五分の一が搾取者で、選挙権を失っていると仮定したまえ。そう仮定しても、第五回ソヴェト大会で六六％を占めていたボリシェヴィキは、住民の多数者を代表していたことになる。さらに、これにつけくわえて言わなければならないのは、左派エス・エルのかなりの部分がつねにソヴェト権力に賛成であったこと、すなわち、原則上は左派エス・エルの全員がソヴェト権力に賛成であったことである。そして、左派エス・エルの一部が一九一八年七月に冒険的な暴動をおこしたとき、彼らのそれまでの党のなかから、二つの新しい党、すなわち「ナロードニキ派共産主義者」[三四]の党と「革命的共産主義者」の党とが分かれてでた（すでにもとの党によってきわめて重要な国家的部署につけられていた有力な左派エス・エル党員のうちでは、たとえばザクスが前者に、コレガーエフが後者に属している）。したがって、カウツキーは、ボリシェヴィキには住民の少数者の支持しかないという滑稽な作り話を、――それと気づかずに！――自分で論駁したのである。

第二に、愛すべき理論家よ、君は、農民的小生産者がプロレタリアートとブルジョアジーのあいだを動揺するのは避けられないことを、考えてみたことがあるのか？　ヨーロッパの現代史全体によって裏書きされたこのマルクス主義的真理を、カウツキーはまことに都合よく「忘れてしまった」。なぜなら、この真理は、彼がおうむがえしにしているメンシェヴィキ的な「理論」全体を、こっぱみじんに打ち砕くからである！　もしこのことを「忘れて」いなかったなら、カウツキーは、農民的小生産者が優勢な国でプロレタリア執権（ディクタツーラ）が必要なことを否定できなかったであろう。

――――

さて、わが理論家の「経済的分析」の主要な内容を考察してみよう。

カウツキーは言う。ソヴェト権力が執権（ディクタツーラ）であること、このことは争う余地がない、「だが、これははたしてプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）だろうか？」（三四ページ）

「ソヴェト憲法によれば、農民は、立法と行政に参加する権利をもつ住民中の多数者をなしている。われわれにプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）だとして提示されているものは、もしそれが徹底的に実行されるならば、また総じて一つの階級が執権（ディクタツーラ）を直接に実現できるものとす

れば——執権は、政党だけが実現できるものなのだが——、農民の執権であることがわかるだろう。」(三五ページ)

こんなにも深遠で、才気ある議論にすっかり満足した善良なカウツキーは、皮肉をとばす試みをやる。「そうとすれば、最も苦痛の少ない仕方で社会主義を実現することは、この実現が農民の手にゆだねられるときに保障されるということになろう」(三五ページ)と。

わが理論家は、半自由主義者マースロフからまことに博学な引用をいくつもおこなって、農民は高い穀物価格や都市労働者の低賃金を利益とする等々という新しい思想を、詳細きわまる仕方で証明しにかかる。ついでに言えば、戦後期の真に新しい諸現象、たとえば農民が穀物の対価として貨幣を要求しないで商品を要求するとか、農民に農具が不足していて、どれほど金を出しても必要数だけ入手できないとかいう現象に、注意をむけることが少なければ少ないほど、この新しい思想の説明はますます退屈になる。この点については、なおあとで別に論じることにする。

こういうわけで、カウツキーは、ボリシェヴィキ、プロレタリアートの党が執権、社会主義実現の事業を小ブルジョア的農民の手にゆだねてしまったと言って、非難しているのである。みごとだ、カウツキー君！　では、ご高説によれば、小ブルジョア的農民にたいするプロレタリア党の態度は、どういうものでなければならないのか？

このことについては、わが理論家は沈黙するほうを選んだ。——きっと、「雄弁は銀、沈黙は金」という格言を思いだしたのだろう。しかし、カウツキーは、次のような議論によって正体を暴露した。

「ソヴェト共和国のはじめには、農民ソヴェトは農民一般の組織であった。今この共和国は、ソヴェトはプロレタリアと貧農の組織である、と宣言している。富農は、ソヴェトの選挙権を失っている。貧農は、ここでは『プロレタリアートの執権』のもとでの社会主義的農業改革の不断の大量的産物と認められている。」(四八ページ)

なんと辛辣な皮肉だろう！　こんな皮肉は、ロシアではどのブルジョアの口からも聞ける。彼らはみな、ソヴェト共和国が貧農の存在を公然と告白するのを見て、それみたことかとせせら笑い、あざけっている。彼らは社会主義をあざけっている。それは彼らの勝手である。しかし、はなはだしい荒廃をもたらした四年にわたる戦争のあとでわが国に貧農が残っている——そして今後長いあいだ残るだろう——からといってあざわらうような、そういう「社会主義者」は、大量的背教の環境のなかでしか生まれえないものであった。

そのさきを聞きたまえ。

「……ソヴェト共和国は、富農と貧農との関係に介入しているが、しかし、土地の再分配をつうじて介入しているわけではない。都市住民の穀物不足をなくすために、農村へ武装労働者の部隊を派遣し、富農から余剰の穀物を取り上げている。この穀物の一部は都市住民に渡され、一部は貧農に渡される。」(四八ページ)

社会主義者でマルクス主義者のカウツキーが、こういう措置を大都市の近郊のそとまでも拡大しようなどという考え(そして、わがロシアでは、この措置は全国に拡大されている)に、心の底から憤慨していることは、いうまでもない。社会主義者でマルクス主義者のカウツキーは、俗物のたぐいまれな、くらべるもののない、ほれぼれするほどの冷静さ(または愚鈍さ)で、教訓を垂れる。「……それ(富農の収奪)は、正常化のために平穏と安全を切に必要としている生産過程に、新しい不穏と内乱の要素をもちこんでいる。」(「生産過程」に内乱をもちこむとは、たしかに、超自然的な話だ!)(四九〔ページ〕)

いかにも、いかにも。余剰穀物を隠匿し、穀物専売法をぶちこわし、都市住民を飢えにおとしいれている搾取者や穀物投機者の平穏と安全のことで、社会主義者でマルクス主義者のカウツキーは、もちろん溜息をつき、涙をながさなければならない。カウツキー、ハインリヒ・ヴェーバー(ウィーン)、ロンゲ(パリ)、マクドナルド(ロンドン)等々といった諸君は、声を合わせて叫ぶ。われわれはみな社会主義者でマルクス主義者で国際主義者だ、われわれはみな労働者階級の革命に賛成である、ただ……ただ、穀物投機者の平穏と安全をみださないようにして革命をやりたいのだ!……そして、われわれは、「マルクス主義者ふうに」「生産過程」を引合いにだすことで、このけがらわしい資本家のご機嫌とりを隠そうとする、と。……これがマルクス主義なら、いったいなにをブルジョアジーへのついしょうとよぶのか?

わが理論家がどういう結末にたどりついたか、見てくれたまえ。彼は、ボリシェヴィキが農民の執権(ディクタツーラ)をプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)だと称している、と言って非難する。それと同時にまた彼は、われわれが農村に内乱をもちこんでいる(われわれはこのことを自分の功績と見ている)ということで、われわれが武装した労働者の部隊を農村に派遣し、それらの部隊が「プロレタリアートと貧農の執権(ディクタツーラ)」を実現することを公然と宣言し、貧農を助け、投機者や富農から彼らが穀物専売法に違反して隠匿している余剰穀物を収奪しているということで、われわれを非難する。

一方では、わがマルクス主義理論家は、純粋民主主義に

賛成し、勤労者と被搾取者の指導者である革命的階級を住民（したがって搾取者をもふくむところの）の多数者に従属させることに賛成する。他方では、彼は、われわれに反対して、この革命がブルジョア的性格をもつことは避けられない、なぜなら、全体としての農民はブルジョア的社会関係の基盤に立っているからだ、と説明し、しかもそれと同時に、自分がプロレタリア的、階級的、マルクス主義的見地を堅持しているかのようによそおうのだ！

これは「経済的分析」ではなくて、とびきりのごたまぜであり、混乱である。これはマルクス主義ではなくて、自由主義学説のきれっぱしであり、ブルジョアジーと富農におついしょうせよという説教である。

カウツキーがこんぐらからせた問題を、ボリシェヴィキはすでに一九〇五年に完全に説明している。いかにも、われわれが全体としての農民とともにすすんでいるあいだは、われわれの革命はブルジョア革命である。われわれは、このことを明瞭なうえにも明瞭に意識して、一九〇五年以来何百回、何千回となく語ってきたし、またかつて歴史過程のこの必然的な段階をとびこえようとしたり、布告によってこれを廃止しようとしたことはなかった。この点についてわれわれが罪をおかしたことを「証拠だてよう」とするカウツキーの大骨おりは、彼の見解の混乱ぶりを、また彼がまだ背教者でなかった一九〇五年に自分で書いたことを思いだすのを恐れていることを、証拠だてるだけである。

だが、十月革命のずっとまえから、われわれが権力をにぎるずっとまえから、一九一七年四月このかた、われわれは人民にむかって公然と語り、説明してきた。いまでは革命はここで立ちどまっていることはできない、なぜなら、国は前進をとげ、資本主義は歩みをすすめ、荒廃は未曾有の規模に達していて、社会主義にむかって歩みをすすめることを必要としている（だれかが望むといなとにかかわりなく）からである。なぜなら、そうしなければ、前進することも、戦争で疲弊した国を救うことも、勤労者や被搾取者の苦しみをやわらげることもできないからである、と。

事実はまさにわれわれの言ったとおりになった。革命の経過は、われわれの考え方が正しかったことを裏書きした。はじめには、「全」農民とともに、君主制に反対し、地主に反対し、中世的制度に反対する（そして、そのかぎりで、革命はなおブルジョア革命、ブルジョア民主主義革命である）。ついで、貧農とともに、半プロレタリアートとともに、すべての被搾取者とともに、農村の金持、富農、投機者をふくむ資本主義に反対する。そして、そのかぎりで、革命は社会主義革命となる。前者と後者のあいだに人為的な万里の長城を築き、プロレタリアートの準備の度合い、

およびプロレタリアートと貧農との団結の度合い以外のなにかによって両者を区別しようとすることは、マルクス主義をはなはだしく歪曲し、卑俗化し、自由主義とすりかえることである。これは、えせ学者ふうに中世的制度にくらべてのブルジョアジーの進歩性を言いたてることによって、社会主義的プロレタリアートに反対してブルジョアジーの反動的擁護をこっそりもちこむことを意味するであろう。

ソヴェトは、とりわけ、それが労働者農民の大衆を統合し、政治に引きいれて、「人民」（一八七一年にマルクスが[三四]真の人民革命について語ったその意味での）にとって最も身近かなバロメーター、大衆の政治的・階級的成熟の発展と成長を最も敏感に示すバロメーターとなるからこそ、民主主義のはるかに高度な形態、型なのである。ソヴェト憲法は、ある「計画」にしたがって書かれたものでも、書斎で起草されたものでも、ブルジョアジー出身の法律家が勤労者に押しつけたものでもない。そうではなく、この憲法は、階級矛盾の成熟におうじて、階級闘争の発展行程のなかから成長してきたものである。カウツキーが認めざるをえなかった諸事実そのものが、このことを証明している。

はじめにはソヴェトは農民全体を統合していた。ほかならぬ貧農の未熟、後進性、無知が、指導権を富農、金持、資本家、小ブルジョア・インテリゲンツィアの手にゆだねた。これは、小ブルジョアジー、すなわちメンシェヴィキとエス・エル（この両者を社会主義者と見なすことは、まぬけか、カウツキーのような背教者だけがやれることである）が支配していた時期であった。小ブルジョアジーは、その経済的地位の根本的な特質のために、自主的にはなにもやれないので、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）（ケーレンスキー、コルニーロフ、サーヴィンコフ）とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のあいだを不可避的に、必然的に動揺した。ついでに言っておけば、カウツキーがロシア革命を分析するさいに「民主主義」という法律的、形式的な概念——ブルジョアジーが自分の支配をおおいかくし大衆を欺くための目かくしにつかっている概念——でお茶をにごし、「民主主義」が実際にはあるときはブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）を表現し、あるときはこの執権（ディクタツーラ）に屈従する小市民の無力な改良主義を表現すること等々を忘れているのは、マルクス主義を完全に放棄するものである。カウツキーによると、資本主義国にはブルジョア政党はあったし、プロレタリアートの多数者、プロレタリアートの大部分を率いるプロレタリア党（ボリシェヴィキ）はあったが、小ブルジョア政党はなかったことになる！　メンシェヴィキとエス・エルには階級的根源、小ブルジョア的な根源はなかったことになる！

小ブルジョアジー、すなわちメンシェヴィキとエス・エ

ルの動揺は、大衆を啓蒙して、大衆の大多数者、「下層民」の全部、プロレタリアと半プロレタリアの全員を、こうした「指導者」から突きはなした。ソヴェトではボリシェヴィキが優位を獲得し（ピーテル〔ペトログラード〕とモスクワでは一九一七年一〇月ごろに）、エス・エルとメンシェヴィキのあいだに分裂が深まった。

ボリシェヴィキ革命の勝利は、動揺が終わったことを意味していたし、君主制と地主的土地所有が完全に破壊されたこと（十月革命までは地主的土地所有は破壊されていなかった）ことを意味していた。ブルジョア革命は、われわれの手で最後まで遂行された。農民は全体としてわれわれを支持した。社会主義的プロレタリアートにたいする農民の敵対は、一瞬のうちに表面化することはできなかった。ソヴェトは農民一般を統合していた。農民内部の階級分裂はまだ成熟しておらず、まだ表面に現われてこなかった。

この過程は、一九一八年の夏と秋に進展した。チェコスロヴァキア軍団の反革命的反乱が、富農を眠りから呼びさました。富農の暴動の波がロシア全土にひろまった。貧農は、富農、金持、農村ブルジョアジーの利益と自分たちの利益とが和解しえないように対立していることを、書物や新聞からではなく、実生活から学んだ。「左派エス・エル」は、およそ小ブルジョア政党のならわしで、大衆の動揺を反映し、まさに一九一八年の夏に分裂した。彼らの一部はチェコスロヴァキア軍団と行動をともにし（モスクワにおける暴動、このときプロシヤーンは――一時間だけ！――電信局を占領して、全ロシアにむかってボリシェヴィキの打倒を告げた。ついで、チェコスロヴァキア軍団にさしむけられた軍隊の総司令官ムラヴィヨーフが反逆した(三)、等等）、まえにあげた残りの一部は、ボリシェヴィキの側にとどまった。

都市の食料不足が激化したことは、穀物専売の問題をますます緊急なものとした。（理論家カウツキーは、一〇年まえにマースロフの著書で読んでおぼえたことのおさらいをしている彼の経済的分析のなかでは、この問題を「忘れている」！）

以前のブルジョア・地主国家は、それどころか民主的共和制の国家でさえ、事実上ブルジョアジーの意のままになっていた武装部隊を農村に派遣した。カウツキー君はこのことを知らない！　彼はそれを「ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）」とは考えない。とんでもない！　それは「純粋民主主義」であり、ブルジョア議会の承認をうけている場合には、とくにそうだ！　アウクセンチエフとエス・マースロフはケーレンスキーやツェレテーリの徒、その他のエス・エルやメンシェヴィキといっしょに、一九一七年の夏と秋に各地の

土地委員会の委員たちを逮捕したが、カウツキーはそれについては「聞いておらず」、それについては沈黙している！

問題の要点は、民主的共和制を手段としてブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）を実現するブルジョア国家は、自分がブルジョアジーの御用をつとめていることを人民に告白できず、真実を語ることができず、偽善的にふるまわざるをえないということ、もっぱらこの点にある。

ところが、コミューン型の国家、ソヴェト国家は、人民に公然と、率直に真実を語って、この国家はプロレタリアートと貧農の執権（ディクタツーラ）である、と言明し、まさにこの真実によって幾千万また幾千万の新しい市民を自分の味方につける。どんな民主的共和制においてもしいたげられているこれらの市民は、いまやソヴェトによって政治に、民主主義に、国家統治に引きいれられている。ソヴェト共和国は、武装した労働者、まず第一に両首都の先進的な労働者の部隊を、農村に派遣している。これらの労働者は、農村に社会主義をもちこみ、貧農を味方につけ、彼らを組織し、啓蒙し、貧農がブルジョアジーの抵抗を鎮圧するのを助けている。

農村にいたことがあって、事情に通じている者はみな、わが国の農村は一九一八年の夏と秋にはじめてみずから「十月」革命（すなわちプロレタリア革命）を経験している、と言っている。転換が始まりかけている。富農の暴動の波に入れかわって、貧農が立ち上がり、「貧農委員会」が成長している。軍隊では、労働者出身の委員、労働者出身の将校、労働者出身の師団長や軍司令官の数がふえている。七月（一九一八年）危機(三七)とブルジョアジーの悲鳴とにおびえたばか者のカウツキーが、「とさか」をふりたててブルジョアジーのあとについて走りまわり、ボリシェヴィキは農民によって打倒される前夜にあるという信念につらぬかれた一冊の小冊子を書いているそのときに、またこのばか者が左派エス・エルの脱落を、ボリシェヴィキ支持者の範囲の「縮小」（三七ページ）と見なしているそのときに――そのときに、ボリシェヴィズム支持者のほんとうの範囲はてしなく拡大しつつある。なぜなら、数千万の貧農が、富農と農村ブルジョアジーの後見や影響を脱却して、自主的な政治生活にめざめつつあるからである。

われわれは、何百人かの左派エス・エル、無節操なインテリゲンツィアや富農を失ったが、貧農分子を何百万人も獲得したのである。*

* 第六回ソヴェト大会（一九一八年一一月六―九日）には、議決権をもつ代議員九六七名が出席し、そのうち九五〇名がボリシェヴィキであった。また評議権をもつ代議員三五一名が出席し、そのうち三三五名がボリシェヴィキであった。合わせて九七%がボリシェヴィキであった。

両首都のプロレタリア革命から一年を経て、この革命の影響をうけ、この革命に援助されて、農村の片田舎で起こったプロレタリア革命が、ソヴェト権力とボリシェヴィズムを最後的に強固なものとし、国内にはボリシェヴィズムに対抗する勢力の存在しないことを最後的に証明した。

農民一般とともにブルジョア民主主義革命をなしとげたのち、ロシアのプロレタリアートが、農村を分裂させ、農村のプロレタリアと半プロレタリアを味方につけ、富農とブルジョアジー——農村ブルジョアジーをもふくむ——に対抗して、農村のプロレタリアと半プロレタリアを団結させることに成功したとき、彼らは最後的に社会主義革命へ移行したのである。

もし両首都と大工業中心地とのボリシェヴィキ的プロレタリアートが、富農に対抗して貧農を自分のまわりに団結させることができなかったなら、そのときには、ロシアが社会主義革命にすすむまでに「成熟していない」ことが、まさにそのことによって証明されたことになったろう。そのときには、農民はそれまでどおり「一体」のままであったろう。つまり、農民は、富農、金持、ブルジョアジーの政治的、経済的および精神的指導のもとにとどまったであろう。そのときには、革命は、ブルジョア民主主義革命の範囲を出なかったであろう。（しかし、ついでに言えば、そうであったとしても、プロレタリアートは権力を奪取すべきではなかった、ということが証明されたことにはならないであろう。なぜなら、ブルジョア民主主義革命を実際に最後まで遂行したのは、プロレタリアートだけであり、世界プロレタリア革命を近づけるために真剣な仕事を果たしたのは、プロレタリアートだけであり、コミューンについで、社会主義国家の方向への第二歩であるソヴェト国家を創立したのは、プロレタリアートだけだったからである。）

他方では、もしボリシェヴィキ的プロレタリアートが、農村の階級分化を待つ能力をもたず、この階級分化を準備し実現する能力をもたずに、一九一七年一〇月—一一月に、いきなり内乱や、農村への「社会主義の導入」を「布告」しようとしたり、農民一般と一時的なブロック（同盟）を結ぶことなしに、中農に一連の譲歩をおこなう等々のことなしにすませようとしたならば、マルクス主義をブランキ主義的にゆがめることになったであろう。それは、少数者が自分の意志を多数者に押しつけようとすることであったろう。それは、理論的にばかげたことであったろうし、全農民の革命はまだブルジョア革命であって、後進国では一連の過渡や過渡的段階なしにはこの革命を社会主義革命にすることはできないということを、理解しないことであったろう。

カウツキーは、きわめて重要な理論上および政治上の問題でなにもかもごっちゃにしてしまい、実践的には、プロレタリアートの執権に反対してわめきたてる、たんなるブルジョアジーの従僕になってしまったのである。

＊＊

カウツキーは、もう一つ別の、きわめて興味ぶかく、きわめて重要な問題にも、同様な、むしろそれに輪をかけた混乱をもちこんでいる。すなわち、土地改革――このきわめて困難であると同時に、きわめて重要な社会主義的改革――において、ソヴェト共和国の立法活動が原則的に正しく提起されていたかどうか、またそのあとで適切に実施されたかどうか、という問題がそれである。もしだれにせよ西ヨーロッパのマルクス主義者が、せめていちばん重要な文献なりとしらべてから、われわれの政策に批判をくわえるならば、われわれは、ことばにつくせないほど感謝するであろう。なぜなら、彼は、そうすることでわれわれを大いに助け、また全世界で成熟しつつある革命をも助けたであろうからである。ところが、カウツキーは、批判を提供せずに、マルクス主義を自由主義に転化させる、信じられないほどの理論的ごたまぜを提供し、実践的には、ボリシェヴィキにたいするからっぽで、悪意にみちた、小市民的攻撃をくわえるのである。読者はご自分で判断していただきたい。

「大土地所有を維持することはできなかった。革命の結果そうできなくなったのである。このことはただちに明白になった。大土地所有を農民人口に引き渡すことは避けられなくなった。……」（カウツキー君よ、うそだ。君は、この問題にたいするいろいろな階級の態度を示すかわりに、君にとって「明白なもの」をもちだしている。革命の歴史が証明したことは、ブルジョアと小ブルジョア、すなわちメンシェヴィキおよびエス・エルとの連立政府が、大土地所有を温存する政策をとったことである。このことをとくにはっきり証明したのは、エス・マースロフの法律と土地委員の逮捕とであった。プロレタリアートの執権がなかったなら、資本家と手を結んだ地主にたいして「農民人口」が勝利をおさめることはできなかったであろう。）

「……けれども、これをどんな形態でおこなうべきかについては、一致がなかった。いろいろな解決策がありえた。……」（カウツキーがなによりも第一に心にかけているのは、「社会主義者」――だれがそういう名称を名のるにせよ――の「一致」のことである。資本主義社会の基本的な諸階級は、それぞれに異なった解決策に到達するはずだということを、彼は忘れている。）「……社会主義の見地から

すれば、大経営を国家的所有に移し、これまで賃金労働者としてこの大経営で働いていた農民にまかせて、協同組合の形態で大所有地を耕作させるのが、いちばん合理的であったろう。しかし、この解決策は、ロシアには存在しないような農村労働者を前提とする。もう一つの解決策となることのできるのは、大土地所有を国家的所有に移すが、それを小さい地所に分割して、土地の少ない農民に賃貸することであったろう。そうすれば、なにがしかの社会主義が実現されるであろう。……」

カウツキーは、例によって、一方ではこれこれを認めざるをえないが、他方ではこれこれを承認しなければならないという、あの評判のやり方でお茶をにごしている。彼は、いろいろな解決策を列挙するが、しかし、これこれの特殊な条件のもとで資本主義から共産主義への過渡はどのようなものでなければならないかについての思考——ただ一つ現実的な、ただ一つマルクス主義的な思考——にはたずさわらない。ロシアには、農村賃金労働者は存在するが、その数は少ない。そこで、どうやってコミューンや協同組合による土地耕作に移るかという、ソヴェト権力が提起した問題に、カウツキーはふれなかった。しかし、いちばん奇妙なのは、カウツキーが土地を小さい地所に分割して賃貸することを「なにがしかの社会主義」と考えたがっていることである。実際には、これは小ブルジョア的スローガンであって、そこには「社会主義」はまったくない。もし土地を賃貸する「国家」がコミューン型の国家でなくて議会制ブルジョア共和国（これこそカウツキーがつねに前提しているものである）であるなら、小さい地所に分けた土地の賃貸は、典型的な自由主義的改良であろう。

ソヴェト権力がいっさいの土地所有を廃止したことについては、カウツキーは口をつぐんでいる。もっと悪いことには、彼は、信じられないようないんちきをやって、いちばん肝心な点をぬかして、ソヴェト権力の布告を引用している。

「小経営は、生産手段の完全な私有をめざしてつとめるものであり」、憲法制定議会こそ、分割を妨げることのできる「唯一の権威」であったろう（この主張は、ロシアでは大笑いをおこさせる。なぜなら、だれでも知っているように、労働者と農民はソヴェトだけを権威あるものと考えており、他方、憲法制定議会はチェコスロヴァキア軍団と地主のスローガンになったからである）と述べたのち、カウツキーはつづけて言う。

「ソヴェト政府の最初の布告の一つは、つぎのように決定した。（一）地主的土地所有は、いっさい無償で、ただちに廃止される。（二）地主所有地、ならびに帝室、

修道院、教会のすべての土地は、そのいっさいの家畜と農具、屋敷、すべての付属施設とともに、憲法制定議会が土地問題を解決するまで、郡農民代表ソヴェトの郷土地委員会の処理にゆだねられる。」この二項目だけ引用したのち、カウツキーはこう結論する。

「憲法制定議会の決定にゆだねるという指示は空文にとどまった。実際には、個々の郷の農民が土地を好きなようにすることができた。」（四七〔ページ〕）これこそ、カウツキーの「批判」の見本である！　これこそ、なによりも偽造に類する「学問的」労作である。ボリシェヴィキが土地私有の問題で農民に降伏した（！）かのような、ボリシェヴィキが農民に（「個々の郷に」）好きなようにさせた（！）かのような考えが、ドイツの読者に吹きこまれているのだ。

ところが、実際には、カウツキーの引用している布告——一九一七年一〇月二六日（旧暦）に公布された最初の布告——は、二ヵ条からなっているのではなく、五ヵ条と、それにくわえて八ヵ条の「委託書」とからなっている。そして、この委託書については、それが「指針とならなければならない」と述べている。[53]

布告の第三条には、経営は「人民の手に」移る、そして「全没収財産の正確な目録」をつくり、「革命的なやり方で厳重に保全する」ことが義務である、と述べられている。そして委託書のなかには、「土地の私有権は永久に廃止される」、「高度に発達した経営のおこなわれている地所」は「分割されない」、「没収された土地の経営用具は、家畜も農具も、すべて無償で、その大きさと重要性におうじて国家または共同体の排他的用益に移される」、「すべての土地は全人民的土地フォンドに属する」と述べられている。

さらに、憲法制定議会の解散（一九一八年一月五日）と同時に、第三回ソヴェト大会によって、『勤労被搾取人民の権利の宣言』[54]が採択されたが、これは、いまではソヴェト共和国基本法にはいっている。この宣言の第二条第一項は、「土地の私有権はこれを廃止する」、「模範的な農場と農業企業は、これを国民の財産と宣言する」と述べている。

だから、憲法制定議会の決定にゆだねるという指示は、空文にとどまったのではない。なぜなら、農民の目にはるかに大きな権威をもつものと映じていた別の全人民的な代議機関が、土地問題の解決を引きうけたからである。

さらに、一九一八年二月六日（一九日）に土地社会化法が公布されたが、この法律はいっさいの土地所有の廃止をいま一度確認し、土地をも、すべての私有の家畜・農具をも、連邦ソヴェト政府の監督のもとに各ソヴェト当局の処

理にゆだねている。土地の処理にかんする任務の一つに、次のものがかかげられている。

「社会主義的経営への移行を目的として、個人経営をへらして、労働および生産物の節約の点でより有利なものとしての集団的農業経営を発展させること」(第一一条、e項)

この法律は、均等な土地用益を導入するとともに、「だれが土地の用益権をもつか」という基本的な問題につぎのように答えている。

(第二〇条)「ロシア・ソヴェト連邦共和国の領土内で公的および個人的必要にあてられる個々の地面区画は、左記の目的に左記の者がこれを利用することができる。【A】文化的＝教育的目的のため。(一)ソヴェト権力(連邦、州、県、郡、郷および村の)の諸機関によって代表される国家。(二)公共団体(地方ソヴェト権力の監督のもとで、またその許可をうけて)。【B】農業に従事するため。(三)農業コミューン。(四)農業協同組合。(五)村団。(六)個々の家族および個人。……」[22]

カウツキーが事実をまったく歪め、ロシアのプロレタリア国家の土地政策と土地立法を、まったくいつわった姿でドイツの読者に示したことが、読者にはおわかりであろう。

カウツキーには、理論的に重要な基本的諸問題を提起する能力さえなかった！

それは次のような問題である。

(一)　土地の均等用益と

(二)　土地の国有化。——一般に社会主義にたいする、とくに資本主義から共産主義への過渡にたいするこの両方策の関係。

(三)　分散した小規模農業から大規模な集団農業への過渡としての土地の共同耕作。ソヴェト立法でこの問題を提起している仕方は、社会主義の要求をみたすものかどうか？

第一の問題については、まず最初に、次の二つの基本的事実を確認しておかなければならない。すなわち、(a)ボリシェヴィキは、一九〇五年の経験を評価するさいにも(たとえば、ロシア第一次革命における農業問題についての私の著作を参照されたい)[23]、均等用益というスローガンのもつ民主主義的な意味での進歩的な意義、民主主義的な意味での革命的意義を指摘したし、また、一九一七年にも、十月革命のまえに、このことをまったく明確に述べた。(b)土地社会化法——この法律の「魂」は土地の均等用益のスローガンである——を実施したさい、ボリシェヴィキはきわめて正確に、明確に声明した。この思想はわれわれのものではない。われわれはこのスローガンに同意して

はいないが、これが農民の圧倒的多数者の要求である以上、われわれはこのスローガンを実施することを義務と考える。そして勤労者の多数者の思想と要求は、彼ら自身で克服するほかはない。そういう要求を「廃止」することも、「とびこえる」こともできない。われわれボリシェヴィキは、農民が小ブルジョア的スローガンを克服し、そういうスローガンから社会主義的スローガンへ、できるだけ速やかに、できるだけ容易に移行するように助けるであろう、と。

科学的分析によって労働者革命を助けようとするマルクス主義理論家ならば、第一に、土地の均等用益の思想が民主主義的な意味で革命的意義をもち、ブルジョア民主主義革命を最後まで遂行する意義をもつということは、正しいかどうかという問題に答えるべきであり、第二に、ボリシェヴィキがその投票によって小ブルジョア的な均等用益法を通過させた（しかも、きわめて忠実にそれを守った）のは、正しいふるまいだったかどうかという問題に答えるべきであったろう。

カウツキーは、理論的にみてなにが問題の核心かということを見てとる能力さえもたなかった！

カウツキーは、均等用益の思想が、ブルジョア民主主義的変革において進歩的で革命的な意義をもっていることを、けっして論駁することはできないであろう。この変革は、それ以上にすすむことはできない。この変革が最後まで遂行されれば、ブルジョア民主主義的解決では不十分なこと、この解決の枠をこえて社会主義に移行する必要があることが、大衆にそれだけ明瞭に、それだけ速やかに、それだけ容易にさらけだされる。

ツァーリズムと地主を打倒した農民は、均等用益を夢みる。そして、どんな力も、地主とブルジョア議会制共和制国家との双方から解放された農民をはばむことはできないであろう。プロレタリアは農民にむかって言う。われわれは、諸君が「理想的な」資本主義に到達する助けをしよう、というのは、土地の均等用益は、小生産者の見地から資本主義を理想化したものだからである。だが、それと同時に、われわれは、これでは不十分なこと、土地の共同耕作に移行する必要があることを諸君に示そう、と。

農民の闘争にたいするプロレタリアートのこのような指導が正しいことを、カウツキーがどうやって否定しようとするか、お手なみ拝見したいところだった！

だが、カウツキーは問題を回避するほうを選んだ。……

さらに、カウツキーは、ソヴェト権力が土地法のなかでコミューンと協同組合とにはっきりと優先権をあたえて、この両者を第一位においたことを隠して、ドイツの読者をまっこうからあざむいた。

農民とともにブルジョア民主主義革命を最後まで遂行し──農民のうちの貧しい、プロレタリア的および半プロレタリア的な部分とともに、社会主義革命にむかって前進する！　これがボリシェヴィキの政策であった。そして、これがただ一つマルクス主義的な政策であった。

ところが、カウツキーは、ただ一つの問題さえ提出することができずに、まごついている！　一方では、彼は、プロレタリアは均等用益の問題で農民と袂を分かつべきだった、と言う勇気はない。なぜなら、彼は、そういうふうに袂を分かつことはばかげていると感じているからである（それに、彼がまだ背教者でなかった一九〇五年には、彼は、革命の勝利の条件として労働者と農民の同盟を明瞭に、あからさまに主張していた）。他方では、カウツキーは、メンシェヴィキのマースロフの自由主義的な俗論を、同感を表明しながら引用している。マースロフは、社会主義の見地からみて、小ブルジョア的平等が空想的、反動的なことを「証明する」一方、ブルジョア民主主義革命の見地からみて、平等をめざし、均等用益をめざす小ブルジョア的闘争が進歩的、革命的であることは、口をつぐんで語らない。

カウツキーの混乱は限りがない。次の点に注意されたい。カウツキー（一九一八年の）は、ロシア革命のブルジョア的性格を固執している。カウツキー（一九一八年の）は、この枠をこえてはならないと要求する！　しかも、その同じカウツキーが、貧農にたいする小地所の貸付という小ブルジョア的改良（すなわち、均等用益の方向への歩み）を「なにがしかの社会主義」（ブルジョア革命にあって）と考えている！

なにがなんだか、さっぱりわからない！

そのうえ、カウツキーは、特定の政党の現実の政策を考慮することができない俗物的無能力をさらけだしている。彼は、メンシェヴィキのマースロフの空文句を引用はするが、一九一七年にメンシェヴィキ党が、地主やカデットと「連合」して自由主義的土地改革や地主との協定（その証拠は、土地委員員の逮捕と、エス・マースロフの法案である）を事実上主張していたときの、同党の現実の政策を見ようとしない。

カウツキーは、小ブルジョア的平等は反動的で空想的だというペ・マースロフの空文句が、実際には、農民が地主とが協定する（つまり、地主が農民をあざむく）というメンシェヴィキの政策をおおいかくしていることに、気づかなかった。

これでも「マルクス主義者」カウツキーなのだ！

ブルジョア民主主義革命と社会主義革命との区別を厳密

に考慮にいれたのは、ほかならぬボリシェヴィキであった。ボリシェヴィキは、前者を最後まで遂行することによって、後者に移行する扉をひらいた。これこそ、ただ一つ革命的な、ただ一つマルクス主義的な政策である。

カウツキーが、「小農が理論的説得の影響で集団的生産に移行したことは、まだこれまでにどこにもなかった」(五〇〔ページ〕)と、気のぬけた自由主義的な贅句を繰りかえしているのは、むだなことである。

なんという才気だろう!

大きな国の小農がプロレタリア国家の影響下におかれたことは、これまでにどこにもないのだ。

プロレタリア国家権力が貧農を宣伝によって支持し、また政治的、経済的、軍事的に支持するという条件のもとで、貧農と富農との公然たる階級闘争——両者の内戦までもふくむ——が起こるような場合に小農が当面したことは、これまでにどこにもないのだ。

農民大衆がこんなに零落している一方で、投機者や金持が戦争でこんなに儲けたことは、これまでにどこにもないのだ。

カウツキーは、プロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)の新しい諸任務について考える事さえ恐れて、古くさい事を繰りかえし、言いふるされたことをくどくどとむしかえすのである。

ところで、愛すべきカウツキー君、農民に小規模生産のための農具が不足しているときに、プロレタリア国家が彼らを助けて、土地の集団耕作用の機械を手に入れてやるとすれば、どうなるか? これは「理論的説得」なのか?

———

つぎに、土地国有化の問題に移ろう。左派エス・エル全体をふくめて、わがナロードニキは、わが国で実施された方策が土地の国有化であることを否定している。彼らは理論的に正しくない。われわれが商品生産と資本主義との枠内にとどまっているかぎり、土地の私有制の廃止は、土地の国有化である。「社会化」ということばは、社会主義に移行する傾向、願望、準備を言いあらわしているにすぎない。

土地の国有化にたいするマルクス主義者の態度は、どうでなければならないか?

ここでも、カウツキーは、理論的問題を提起することさえできない。そうでないとすれば、——もっと悪いことだが——ことさらに問題を回避しているのである。しかも、土地の国有化、土地の公有化(大所有地を地方自治体に引き渡すこと)、土地分割の問題についてロシアのマルクス主義者のあいだにずっと以前におこなわれた論争をカウツキーが知っていることは、ロシア語の文献によって明らかである。

大所有地を国家に引き渡し、これを小地所に分けて土地の少ない農民に賃貸すれば、「なにがしかの社会主義」を実現することになる、というカウツキーの主張は、マルクス主義をあからさまに嘲笑するものである。われわれがすでに示したように、そこにはどんな社会主義もない。だが、それだけではない。それは、ブルジョア民主主義革命を最後まで遂行したものでさえない。カウツキーにとってたいへん不幸なことに、彼はメンシェヴィキを信用してしまった。このことから珍妙なことが生じた。わが革命のブルジョア的性格を主張し、ボリシェヴィキが社会主義にすすもうと思いついたと言って非難しているカウツキーが、自分では、社会主義というふれこみで自由主義的改良を提供し、土地所有関係におけるすべての中世的制度が完全に一掃されるところまでこの改良をやりぬこうとしない！　そこで、カウツキーの議論は、彼の相談相手のメンシェヴィキの議論と同じように、徹底的なブルジョア民主主義革命を擁護するのでなく、革命を恐れる自由主義的ブルジョアジーを擁護する結果となっている。

じっさい、なぜ大所有地だけを国有財産に変えて、すべての土地をそうしないのか？　自由主義的ブルジョアジーは、こういうやり方で古い状態をできるだけ維持し（つまり、革命をできるだけ不徹底なものにし）、古いものへの復帰をできるだけ容易にしようとしているのである。急進的ブルジョアジー、すなわちブルジョア革命を最後まで遂行するブルジョアジーは、土地国有化のスローガンをかかげる。

はるか昔、二〇年ほどまえに、農業問題にかんするすばらしいマルクス主義的労作を書いたカウツキーが、土地の国有化はブルジョアジーの徹底したスローガンにほかならない、と指摘したマルクスのことば(注)を知らないはずがない。カウツキーは、ロートベルトゥスとマルクスの論戦や、『剰余価値学説史』のなかのマルクスの注目すべき説明を知らないはずがない。『剰余価値学説史』では、土地国有化のブルジョア民主主義的な意味での革命的意義も、とくに明瞭に示されている。

カウツキーがはなはだまずい選択ぶりで相談役としたメンシェヴィキのペ・マースロフは、ロシアの農民がすべての土地（農民の土地をもふくめた）の国有化に同意する可能性を否定した。マースロフのこの見解は、彼の「独創的な」理論（ブルジョア的なマルクス批判家の説をとりついだ）と、すなわち、絶対地代を否定し、「土地豊度逓減」の法則（マースロフの表現によると「事実」）をうけいれていたこととと、ある程度関係があったかもしれない。

実際には、ロシアの農民――共同体農民も個人経営農民

も――の大多数者がすべての土地の国有化に賛成であることは、すでに一九〇五年の革命のさいに明らかになった。一九一七年の革命はこのことを確証し、権力がプロレタリアートの手に移ったのちに、これを実現した。ボリシェヴィキは、マルクス主義にたいしてあくまでも忠実で、ブルジョア民主主義革命を「とびこえ」ようなどとはしなかった（一かけらの証拠もあげずに、われわれがそうしたといって非難しているカウツキーのことばとはうらはらに）。ボリシェヴィキは、なによりもまず、農民のブルジョア民主主義的イデオローグのなかで、最も急進的、最も革命的で、プロレタリアートに最も近いもの、ほかならぬ左派エス・エルが、事実上の土地国有化を実施するのを助けた。土地私有は、ロシアでは一九一七年一〇月二六日から、すなわちプロレタリア社会主義革命の第一日目から廃止された。

これによって、資本主義の発展の見地からみて最も完全な基盤がつくりだされ（カウツキーは、マルクスと絶縁することなしには、このことを否定することはできないだろう）、またそれと同時に、社会主義への移行という点からみて最も弾力性に富んだ土地制度がつくりだされた。ブルジョア民主主義的な見地からすれば、ロシアの革命的農民はこれ以上すすみようがない。この見地からすれば、土地の国有化と平等な土地用益以上に「理想的なもの」はありえず、これ以上に「急進的なもの」（同じ見地からみて）はありえない。ほかならぬボリシェヴィキが、ボリシェヴィキだけが、もっぱら、プロレタリア革命の勝利にもとづいて、農民がブルジョア民主主義革命を真に最後まで遂行するのを助けたのである。そして、もっぱらこのことによって、ボリシェヴィキは、社会主義革命への移行を容易にし促進するために最大限のことをなしとげたのである。

カウツキーが、どんなに信じられないほど混乱したものを読者に提供しているか、これによって判断できる。彼は、ボリシェヴィキが革命のブルジョア的性格を理解していないと言って非難するが、自分では、土地国有化については沈黙を守り、最も革命的でない（ブルジョア的見地からみて）自由主義的土地改革を「なにがしかの社会主義」として提出するような、マルクス主義からの逸脱をさらけだしている！――

ここでわれわれは、まえに提起した問題のうちの第三の問題、すなわち、ロシアにおけるプロレタリア執権（ディクタツーラ）は土地の共同耕作に移行する必要をどれだけ考慮にいれたか、という問題に到達した。カウツキーは、ここでもまた偽造と紙一重のことをやっている。すなわち、彼は、土地の集団耕作に移行する任務を論じている一ボリシェヴィキの「テ

[三]ーゼ」を引用するだけにとどまっている！　このテーゼの一項を引用したのち、わが「理論家」は勝ちほこってさけぶ。

「ある事柄を任務だと宣言しても、残念ながら、それでその任務が解決されるわけではない。ロシアの集団農業は、いまのところ、紙上の計画に終わる運命にある。小農が理論的説得の影響で集団的生産に移行したことは、まだこれまでにどこにもなかった。」（五〇〔ページ〕）

カウツキーが転落のあげくにゆきついたほどの文筆上のぺてんは、まだこれまでにどこにもなかった。彼は、「テーゼ」を引用するが、ソヴェト権力の法律については沈黙している。彼は、「理論的説得」をうんぬんするが、工場をも商品をもにぎっているプロレタリア国家権力については沈黙している！　小農を徐々に社会主義にみちびくためにプロレタリア国家がもっている手段の問題について、マルクス主義者カウツキーが一八九九年に『農業問題』のなかで書いたことのすべてを、一九一八年に背教者カウツキーは忘れている。

もちろん、国家によって支持される農業コミューンやソヴェト農場（すなわち、国家の勘定で、労働者の協同組合によって耕作される大農場）が数百あるだけでは、まったく少ない。だが、カウツキーがこの事実を回避したことを、「批判」とよぶことができるだろうか？

プロレタリア執権（ディクタツーラ）がロシアで実施した土地の国有化は、ブルジョア民主主義革命を最後まで遂行することを最もよく保障した。――たとえ反革命が勝利した結果、国有化から土地分割へ逆もどりするようなことがあるとしてさえ、この点は変わらない（私は、一九〇五年の革命におけるマルクス主義者の農業綱領を論じた著書のなかで、そういう場合について特別に研究しておいた）。そのうえ、土地の国有化は、農業で社会主義に移行する最大の可能性をプロレタリア国家にあたえた。

要約しよう。カウツキーは、理論的には、信じられないようなごたまぜとマルクス主義の完全な放棄とをわれわれに提供したし、実践的には、ブルジョアジーとその改良主義にたいするついしょうを提供した。まったく、けっこうな批判である！

＊＊＊

カウツキーの著書では、工業の「経済的分析」は、次のようなすばらしい議論で始まっている。

ロシアには資本主義的大工業がある。これを基礎として社会主義的生産を建設することはできないだろうか？「もし、社会主義とは、個々の工場や鉱山の労働者がその工場や鉱山を掌握して自分の所有とし」（文字どおりには、わ

がものとし)、「それらを別々に経営することだとすれば、建設できると考えてよかろう。」(五二〔ページ〕)カウツキーはこれにつけくわえて言う。「私がまさにこの文章を書いているこの日(八月五日)、モスクワからレーニンが八月二日におこなったある演説が報道されたが、そのなかでレーニンは、『労働者は工場をしっかりとにぎっており、農民は土地を地主に引き渡しはしないだろう』と述べたとのことである。(八六)『工場を労働者へ、土地を農民へ』という標語は、これまでは、社会民主主義的な要求ではなく、アナルコ－サンディカリズムの要求であった。」(五二－五三〔ページ〕)

われわれはこの議論をそっくり書きぬいたが、それは、以前にはカウツキーに尊敬を、しかも至当な尊敬をはらっていたロシアの労働者が、ブルジョアジーの側への投降者のやり口を自分で見てとることができるようにするためである。

まあ考えてくれたまえ。――八月五日、ロシアの工場の国有化にかんする多くの布告がすでに出されていて、ただ一つの工場も労働者によって「わがものに」されたものはなく、全部共和国の所有に移されていたその八月五日に、カウツキーは、私の演説の一句を明らかにぺてん師的に解釈することによって、ロシアでは工場が個々の労働者に引き渡されているといった考えを、ドイツの読者にふきこんでいるのだ! しかも、カウツキーはそのあと数十行にわたって、工場を個々の労働者に引き渡してはならない、とうんざりするほど繰りかえしている!

これは批判などではなく、労働者革命を中傷するために資本家に雇われたブルジョアジーの従僕の手口である。

工場は国家、または自治体、または消費組合に引き渡されなければならない――と、カウツキーは何度も何度も書き、そして最後につけくわえて言う。

「ロシアでもいまこの道にすすもうと試みている」と。……いまだって!! これはどういう意味か? 八月のことか? いったいカウツキーは、仲間のシテインなり、アクセリロードなり、その他のロシア・ブルジョアジーの味方なりに、工場にかんする布告をせめて一つだけでも翻訳するように注文できなかったのだろうか?

「どのくらいこの方向にすすんだか、まだ明らかでない。とにかく、ソヴェト共和国のこの側面は、われわれにとって最も興味ふかいものだが、残念ながらいまはまだ闇につつまれている。もちろん、布告にはこと欠かない。」(この理由で、カウツキーは、布告の内容を無視するか、ないし読者にたいして隠すのである!)「しかし、これらの布告の効果についての確かな情報が欠けている。

社会主義的生産は、全面的な、詳細な、確かな、かつ急速に報告される統計なしには不可能である。だが、ソヴェト共和国は、これまでのところ、そういうものをつくりだすことができなかった。ソヴェト共和国の経済活動についてわれわれが知っていることは、極度に矛盾していて、確かめるすべもない。これもまた執権と民主主義の抑圧との結果の一つである。出版と言論の自由がないのだ。……」(五三〔ページ〕)

こういうやり方で歴史が書かれるのだ！　カウツキーは、工場が労働者の手に渡されつつあるという情報を資本家やドゥートフ派の「自由な」新聞から入手したのであろう。……まったく、この超階級的な「大学者」はすばらしい！　工場が共和国だけに引き渡されていること、また工場が、大部分労働組合の選出代表で構成されているソヴェト権力の一機関、最高国民経済会議によって管理されていることを証明する事実は数かぎりなくあるのに、カウツキーはそういう事実の一つにもふれようとしない。彼は、頑強に、箱のなかの男のようにしつこく、一つことを繰りかえす。内乱のない、執権のない、りっぱな統計をもつ（ソヴェト共和国は統計局を新設し、ロシアのすべてのすぐれた統計家を参加させた、しかし、もちろん、理想的な統計を早急に手にいれることはできない）平和な民主主義をあたえよ、と。一言でいえば、革命ぬきの、激しい闘争ぬきの、強力ぬきの革命――これこそ、カウツキーが要求しているものである。これは、労働者と雇主が激情を発揮しないストライキを求めるようなものである。この種の「社会主義者」とありふれた自由主義的官吏とどこが違うのか、言ってくれたまえ！

しかも、カウツキーは、こういう「事実資料」に立脚して、つまり、完全な軽侮をもって多数の事実を故意に無視しながら、こう「結論する」。

「ロシアのプロレタリアートが、布告の意味ででではなく、真の実際的獲得物の意味で、憲法制定議会から受け取ったであろうより以上のものをソヴェト共和国で獲得しているかどうか、疑わしいものである。憲法制定議会でも、ソヴェトにおけるとまったく同じように、社会主義者が――色合いこそ違ってはいたが――優勢だったのである。」(五八〔ページ〕)

なんと珠玉の言ではないか？　われわれは、このことばをできるだけ広くロシアの労働者のあいだにひろめるよう、カウツキー崇拝者たちに勧告する。というのは、彼の政治的堕落ぶりを評価するのにこれ以上よい材料を、カウツキーは提供できないだろうからである。労働者の同志諸君、ケーレンスキーもまた「社会主義者」であった、ただ「色

合いが違って」いただけである！ 歴史家カウツキーは、エス・エル右派とメンシェヴィキが「わがものに」していた呼び名、肩書で満足する。歴史家カウツキーは、ケーレンスキーのもとでメンシェヴィキとエス・エル右派がブルジョアジーの帝国主義政策と略奪を支持したことを物語る諸事実に耳をかそうともせず、憲法制定議会で多数を占めていたのは、まさにこれらの帝国主義戦争とブルジョア執権（ディクタトゥーラ）の英雄たちであったことについては、つつしみぶかく沈黙している。それでも、こんなものが「経済的分析」と名づけられているのだ！……

結びにあたって、「経済的分析」の見本をもう一つ。

「ソヴェト共和国は、九ヵ月存続したのちに、全般的福祉をひろめるのでなくて、全般的困窮がなぜ生じているかを、説明せざるをえなくなった。」（四一〔ページ〕）

こういう議論は、われわれはカデットの口から聞いて慣れっこになっている。ロシアにおけるブルジョアジーの召使たちはみなこう論じている。九ヵ月たったのだから、全般的福祉をあたえよ、と。——しかも、これは、四年間の荒廃戦争ののちに、ロシアのブルジョアジーのサボタージュと暴動を外国資本が全面的に援助しているときのことなのだ。カウツキーと反革命的ブルジョアのあいだには、事実上、なんの区別も、区別の影さえも残っていない。「社会主義」を偽装したあまったるいことばは、ロシアのコルニーロフ派やドゥートフ派やクラスノーフ派が露骨に、率直に、かざりけなく語っていることの繰りかえしである。

＊＊
＊

以上の文章を、私は一九一八年一一月九日に書いた。九日から一〇日にかけての夜に、ドイツから、勝利の革命が、まずキールその他の北部および沿海諸都市で始まり、そこでは権力が労働者・兵士代表ソヴェトの手中に移り、ついでベルリンでも始まって、同じように権力がソヴェトの手に移った、という知らせを受け取った。(八〇)

カウツキーとプロレタリア革命についてのこの小冊子にはなお結論が欠けているが、それはよけいなものになろうとしている。

一九一八年一一月一〇日

エヌ・レーニン

付録一　憲法制定議会についてのテーゼ

――『プラウダ』、ペトログラード、
水曜、一九一七年一二月二六日号所載

一　憲法制定議会招集の要求は、革命的社会民主党の綱領にはいっていたが、それはまったく正当であった。なぜなら、ブルジョア共和国では、憲法制定議会が民主主義の最高の形態だからであり、また、ケーレンスキーをかしらとする帝国主義的共和国は、予備議会(六)を設置することによって、民主主義にたいする幾多の侵害をふくむ選挙の偽造を準備したからである。

二　憲法制定議会招集の要求をかかげながらも、革命的社会民主党は、ソヴェト共和国が、憲法制定議会をともなう普通のブルジョア共和国よりもいっそう高度な民主主義の形態であることを、一九一七年の革命の当初からたびたび強調してきた。

三　ブルジョア制度から社会主義制度への過渡にとっては、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)にとっては、労働者・兵士・農民代表ソヴェト共和国は（憲法制定議会をともなう普通のブルジョア共和国よりも）いっそう高度な型の民主主義制度の形態であるばかりでなく、社会主義への最も苦痛の少ない移行を保障できる唯一の形態でもある。

四　われわれの革命のなかで、一九一七年一〇月なかばに提示された名簿にもとづいて憲法制定議会を招集するのは、この憲法制定議会の選挙が一般に民意を、とくに勤労大衆の意思を正しく表現することをまったく不可能とするような条件のもとでそれを招集することである。

五　第一に、比例代表制が民意を真に表現するのは、政党別名簿が、その名簿に反映している諸党派への人民の現実の配分に、真に一致しているときだけである。しかし、わが国では、周知のように、五月から一〇月まで人民、とくに農民のあいだに最も多数の支持者をもっていた党である社会革命党は、一九一七年一〇月なかばに憲法制定議会の単一候補者名簿を提出したが、一九一七年一一月、憲法制定議会の選挙のあとで、それが招集されるまえに分裂してしまった。

このため、選挙人の大多数の意思と憲法制定議会に選出された代表の構成とのあいだには、形式上の一致さえないし、またありえないのである。

六　第二に、人民、とくに勤労諸階級の意思と憲法制定議会の構成とが一致しないことのいっそう重要な根源、形式的、法律的な根源ではなく、社会経済的、階級的な根源は、憲法制定議会の選挙がおこなわれたときには人民の圧

倒的多数が十月・ソヴェト・プロレタリア農民革命――それは、一九一七年一〇月二五日に、すなわち憲法制定議会の議員の候補者名簿が提出されたあとで始まった――の規模と意義をまだ完全には知ることができなかったという事情である。

七　ソヴェトのために権力をたたかいとり、政治的支配権をブルジョアジーの手からもぎとって、プロレタリアートと貧農の手に渡した十月革命は、われわれの目の前で、つぎつぎとその発展諸段階を経過している。

八　十月革命は、首都における一〇月二四―二五日の勝利で始まったが、その日、労働者・兵士代表ソヴェト――プロレタリアートと、農民のうちの政治的に最も活動的な部分との前衛――の第二回全ロシア大会は、ボリシェヴィキ党に優勢をもたらし、これを権力につけた。

九　革命は、ついで、一一月と一二月のあいだに、軍隊と農民の全大衆を引きいれた。そのことは、なによりもまず、古い頭部機関（軍隊委員会、県農民委員会、全ロシア農民代表ソヴェト中央執行委員会、その他）の交替と改選に現われていた。これらの古い機関は、革命が経由した協調主義的な時期、革命の非プロレタリア的、ブルジョア的な段階を表現していた。だから、それらは、より奥ぶかい、より広範な人民大衆の圧力をうけて、不可避的に舞台から立ちさらなければならなかった。

一〇　自分たちの組織の指導機関をつくりかえようとする被搾取大衆のこの強力な運動は、一九一七年一二月なかばのいまでも、まだ終わってはいない。開会中の鉄道従業員大会はこの運動の一段階である。

一一　したがって、階級闘争のなかでのロシアの階級諸勢力の編成は、実際には、一九一七年一一月と一二月には、一九一七年一〇月なかばの憲法制定議会への政党別候補者名簿に表現されたものとは、原則的に異なったものとなっているのである。

一二　ウクライナにおける（部分的にはまたフィンランドと白ロシア、さらにカフカーズにおける）最近の諸事件も同様に、ウクライナのラーダ(三)、フィンランドの国会(セイム)その他のブルジョア民族主義と、これらの民族共和国のそれぞれにおけるソヴェト権力、プロレタリア農民革命とのあいだの闘争の過程で、階級勢力の新しい編成がすすんでいることを、示している。

一三　最後に、ソヴェト当局に反対し、労働者農民政府に反対するカデット＝カレーヂン派の反革命的蜂起によって始められた内乱は、階級闘争を決定的に激化させて、歴史がロシアの諸民族の前に、まず第一にその労働者階級と農民の前に提起した最も鋭い問題を、形式的民主主義の方

法で解決する可能性をいっさい奪いさった。

一四　ブルジョアと地主の蜂起（それはカデット＝カレーヂン派の運動に現われている）にたいする労働者と農民の完全な勝利だけが、この奴隷所有者の蜂起の容赦ない軍事的鎮圧だけが、プロレタリア農民革命の安全を実際に保障することができる。革命時の諸事件の進展と階級闘争の発展との結果として、「全権力を憲法制定議会へ」というスローガン――労働者農民革命の獲得物を考慮にいれず、ソヴェト権力を考慮にいれず、また労働者・兵士代表ソヴェト第二回全ロシア大会や農民代表第二回全ロシア大会(三)その他の決定を考慮にいれないスローガン――は、実際には、カデットとカレーヂン派(三)およびその助手たちのスローガンになってしまった。憲法制定議会がソヴェト権力と不一致をきたすようなことがあれば、憲法制定議会はかならず政治的に滅亡する運命にあることが、全人民に明らかになっている。

一五　人民の生活上のとくに鋭い問題のひとつは、平和の問題である。平和のための真に革命的な闘争は、ロシアでは、一〇月二五日の革命の勝利ののちにようやく始まった。そして、この勝利は、秘密条約の公表、休戦の締結、無併合・無賠償の全般的講和についての公開交渉の開始という、最初の成果をもたらした。

広範な人民大衆は、いまはじめて、平和のための革命的闘争の政策を見て、その結果を研究する可能性を、実際に、完全に、公然と手にいれたのである。

憲法制定議会の選挙のときには、人民大衆はこの可能性をもたなかった。

この面から見ても、憲法制定議会への選出代表の構成と、戦争終結の問題についての真の民意との不一致が避けられないことは、明らかである。

一六　上述した諸事情はあい集まって、次のような結果を生みだしている。それは、プロレタリア農民革命よりもまえに、ブルジョアジーの支配の条件下に存在していた諸政党の名簿にもとづいて招集された憲法制定議会は、一〇月二五日にブルジョアジーにたいする社会主義革命を開始した勤労被搾取諸階級の意思と利益に、かならず衝突せずにはいないということである。この革命の利益が憲法制定議会の形式的権利に優先することは、当然である。この形式的権利は、憲法制定議会にかんする法律には人民がいつなんどきでも自分の代表を改選できる権利が認められていないという点で、すでに侵害されていたのであるが、そのことがなかったとしてさえ、右の点に変わりはない。

一七　憲法制定議会の問題を、階級闘争や内乱を考慮にいれずに、形式的、法律的な側面から、普通のブルジョア

民主主義の枠内で考察しようとする直接間接の試みは、すべてプロレタリアートの大業にたいする裏切りであり、ブルジョアジーの見地への寝がえりである。一月蜂起とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の任務とを評価することができなかった少数のボリシェヴィズム上層幹部がおちいっているこの誤りをおかさぬよう、すべての人々に警告することは、革命的社会民主党の無条件の責務である。

一八　憲法制定議会の選挙が民意とも、また勤労被搾取諸階級の利益とも一致しないために生じた危機を、苦痛のない仕方で解決できる唯一の見こみは、人民が憲法制定議会の議員を改選する権利をできるだけ広範に、また速やかに行使すること、憲法制定議会自身が同議会の改選にかんする中央執行委員会の法律に同意すること、憲法制定議会がソヴェト権力、ソヴェト革命を承認し、講和、土地、労働者統制の諸問題にかんするソヴェト権力の政策を承認すると、無条件で声明すること、憲法制定議会がカデット＝カレーヂン派の反革命に反対する者の陣営に断固として参加することにある。

一九　これらの条件をよそにしては、憲法制定議会に関連して起こった危機は、革命的方法によってしか解決することができない。すなわち、カデット＝カレーヂン派の反革命がどのようなスローガンと制度のかげに身を隠そうと（たとえ憲法制定議会の議員という地位のかげに隠れようと）、この反革命にたいしてソヴェト権力が最も精力的な、急速な、確固たる、決然とした革命的措置をとることによってしか、解決することができない。この闘争でソヴェト権力の手を縛ろうとするあらゆる試みは、反革命を助けるものであろう。

付録二　国家にかんするヴァンデルヴェルデの新著

カウツキーの著書を読んだのちにはじめて、私は、ヴァンデルヴェルデの著書『国家対社会主義』（パリ、一九一八年版）に目をとおす機会があった。この二つの著書の比較が思わず知らず頭に浮かんでくる。カウツキーは、第二インタナショナル（一八八九—一九一四年）の思想上の指導者であり、ヴァンデルヴェルデは、国際社会主義ビューローの議長として、第二インタナショナルの正式の代表者である。二人とも、第二インタナショナルの完全な破産を代表している。二人とも、「たくみに」、老練なジャーナリストの巧妙さで、この破産、彼ら自身の破綻とブルジョアジーの側への寝がえりを、マルクス主義的なことばづかいでおおいかくしている。一方は、ブルジョアジーにとってうけいれえないものをマルクス主義から切りすてるという手段でマルクス主義を乱暴に変造する、重苦しく、理屈っぽいドイツ日和見主義の典型を、とくにはっきりとわれわれに示している。他方は、支配的な日和見主義のラテン的——ある程度まで西ヨーロッパ的（ドイツよりも西にあるという意味で）と言ってもよい——変種の典型であって、この変種は、前者よりも柔軟で、重苦しくなく、同じ基本的な手口をつかいながら、もっと洗練された仕方でマルクス主義を変造する。

二人とも、マルクスの国家学説をも、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）にかんするマルクスの学説をも、根本的にゆがめているが、そのさいヴァンデルヴェルデは第一の問題を多く論じ、カウツキーは第二の問題を多く論じている。二人とも、この二つの問題のあいだのきわめて密接な、不可分の関連をあいまいにしている。二人とも、ことばのうえでは革命家でマルクス主義者であるが、実際には、口実を設けて革命を捨てさることに全力をかたむけている背教者である。二人とも、マルクスとエンゲルスのすべての著作のすみずみまでゆきわたっているもの、社会主義のブルジョア的戯画と真の社会主義とを区別するものを、つゆほどももちあわせていない。すなわち、改良の任務とは違った革命の任務を明らかにし、改良主義的戦術とは違った革命的戦術を明らかにし、ブルジョアジーからその帝国主義的な超過利潤と超過利得の一片のおすそわけにあずかっている「大国」のプロレタリアートの役割とは違った、賃金奴隷制の制度または秩序、構造を一掃するプロレタリアートの役割を明らかにするということがそれである。

こういう評価の裏書きとして、ヴァンデルヴェルデの最

も中心的な議論をいくつか引用しよう。

ヴァンデルヴェルデも、カウツキーと同じように、マルクスとエンゲルスをきわめて熱心に引用する。また、カウツキーと同じように、ブルジョアジーにとってまったくうけいれえないもの、革命家を改良主義者から区別するものを除いて、マルクスとエンゲルスからなんでも手あたりしだいに引用する。プロレタリアートによる政治権力の獲得については、いくらでも論じる。なぜなら、これは、すでに実践によってもっぱら議会主義的な枠のなかにおさめられているからである。マルクスとエンゲルスは、コミューンの経験のあとで、部分的に時代おくれになった『共産党宣言』に、労働者階級はできあいの国家機構をそのまま掌握するわけにはいかない、それを粉砕しなければならないという真理の説明を補足する必要があると考えたのだが、このことについては、一ことも述べない！　ヴァンデルヴェルデも、カウツキーも、プロレタリア革命の経験のなかでまさに最も本質的なもの、すなわちプロレタリアートの革命をブルジョアジーの改良から区別するものを、申し合わせたかのように完全な沈黙によって回避している。

カウツキーと同じように、ヴァンデルヴェルデも、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）について論じるが、それは、口実を設けてこの執権（ディクタツーラ）を捨てさるためである。カウツキーは、これを乱暴な変造の方法でやってのけた。ヴァンデルヴェルデは、同じことをもっと巧妙に実行する。この問題を扱った一節、すなわち「プロレタリアートによる政治権力の獲得」を論じた第四節の（b）項を、彼は、「プロレタリアートの集団的執権（ディクタツーラ）」の問題にあてて、マルクスとエンゲルスを「引用し」（繰りかえして言うが、まさにいちばん肝心な点、すなわち旧来のブルジョア民主主義的な国家機構の粉砕にかんすることを省略して）、そして結論する。

「……社会主義者のあいだでは、社会革命は、通常、次のようなものと考えられている。すなわち、新しいコミューン、ただし今度は勝利をおさめる、それもただ一つの地点ででではなく、資本主義世界のいくつかの主要中心地で勝利をおさめるコミューン、と。

これは仮説である。しかし、戦後の時期に多くの国で前代未聞の階級対立と社会的動乱が見られるだろうことが、すでに明らかになりつつあるとき、この仮説にはありうべからざるものはなにもふくまれていない。

ただ、ロシア革命が遭遇している困難のことは言わないとしても、パリ・コミューンの失敗がなにかを証明しているとすれば、それは、たまたま四囲の状況が権力をプロレタリアートの手中にもたらすとしても、プロレタリアートの側にその権力を行使する十分な準備ができる

までは、プロレタリアートは資本主義制度に終止符を打つことはできない、ということである。」（七三ページ）そして、問題の核心については、これ以上まったくなにひとつ言っていないのだ！

こういう連中が、第二インタナショナルの指導者かつ代表者なのだ！　一九一二年には、彼らは、ほかならぬ一九一四年に勃発したあの戦争とプロレタリア革命との関連を明確に述べて、革命をおこすぞと言って公然と威嚇しているバーゼル宣言に署名した。ところが、戦争が起こり、革命的情勢が生まれると、彼ら、このカウツキーやヴァンデルヴェルデの徒は、口実を設けて革命を捨てさろうとしはじめた。よろしいか、コミューン型の革命は、ありうべからざることとは言えない仮説にすぎない！　と。これはヨーロッパでソヴェトがもしかしたら果たすかもしれない役割についてのカウツキーの議論そっくりである。

だが、教養のある自由主義者はだれでも、これと同じように論じているのだ。いまでは、自由主義者はだれでも、新しいコミューンが「ありうべからざるものではない」だの、ソヴェトの前途には大きな役割が待っているなどということに同意するであろうことは、疑いをいれない。プロレタリア革命家と自由主義者との違いは、まさに前者が、理論家としては、コミューンとソヴェトとの新しい国家的意義を分析する点にある。ヴァンデルヴェルデは、マルクスとエンゲルスがコミューンの経験を分析したさい、このテーマにかんしてくわしく述べた事柄のすべてを黙殺するのである。

実践家としては、マルクス主義者ならば、プロレタリア革命（コミューン型、ソヴェト型、またおそらくは、なにか第三の型の革命）の必然性を明らかにし、プロレタリア革命を準備する必要を説明し、大衆のあいだで革命を宣伝し、革命にたいする小市民的偏見を打破する等々の任務を今日回避できる者は、社会主義の裏切者だけであることを、明らかにすべきであったろう。

カウツキーも、ヴァンデルヴェルデも、そういうことはなにもやらない。それは、彼ら自身が、労働者のあいだで社会主義者として、マルクス主義者としての名声をたもちたがっている、社会主義の裏切者だからにほかならない。

問題の理論的な提起をとりあげてみよう。

国家は、民主的共和制のもとでも、一階級が他の階級を抑圧するための機構にほかならない。カウツキーは、この真理を知っており、承認し、これに同意する。だが、……だが、プロレタリアートは、プロレタリア国家をたたかいとったときに、どの階級を、なぜ、どんな手段で抑圧しなければならないか、という最も根本的な問題を回避してい

る。

ヴァンデルヴェルデは、マルクス主義のこの基本的な命題を知っており、承認し、これに同意し、これを引用している（彼の著書の七二ページ）。だが、……だが、搾取者の抵抗の抑圧という「不愉快な」（資本家諸氏にとって不愉快な）テーマについては、一ことも語らない!!

ヴァンデルヴェルデも、カウツキーも、この「不愉快な」テーマを完全に回避している。まさにこの点に彼らの背教がある。

ヴァンデルヴェルデも、カウツキーも、弁証法を折衷主義ですりかえる術にかけては名人である。一方ではこれこれを認めざるをえないが、他方ではこれこれを承認しなければならない。一方では、国家は「国民の総体」という意味に解することができるが（リトレの辞書を見よ――これは、たしかに、博学な労作だ――ヴァンデルヴェルデ、八七ページ）、他方では、国家は「政府」という意味に解することができる（同所）。ヴァンデルヴェルデは、この博学な俗論を承認し、これをマルクスからの引用文とならべて書きぬいている。

ヴァンデルヴェルデはこう書いている。「国家」ということばのマルクス主義的な意味は、普通の意味とは違っている。このために「誤解」が起こりかねないのである。

「マルクスとエンゲルスの言う国家は、広い意味の国家ではない。つまり、管理機関としての国家、社会の一般的利益（intérêts généraux de la société）の代表者としての国家ではない。それは、権力としての国家、権威の機関としての国家、一階級が他の階級を支配する用具としての国家である。」（ヴァンデルヴェルデ、七五―七六ページ）

マルクスとエンゲルスが、国家の廃絶について語っているのは、もっぱら後者の意味においてである。

「……あまりに絶対的な確言は、不正確になるおそれがある。もっぱら一階級の支配にもとづく資本家国家と、階級の廃絶を目標とするプロレタリア国家とのあいだには、多くの過渡的段階がある。」（一五六ページ）

これがヴァンデルヴェルデの「やり方」であって、カウツキーのやり方とはほんのすこし違っているが、実質上は同じものである。弁証法は、絶対的真理を否定し、対立物の交替や、歴史における危機の意義を明らかにする。折衷主義者は、革命を「過渡的諸段階」とすりかえようという自分の小市民的な、俗物的な願望をもちこむことのできるよう、「あまりに絶対的な」確言を望まない。

資本家階級の支配の機関としての国家とプロレタリアートの支配の機関としての国家とのあいだの過渡的段階とは、ほかならぬ革命であって、この革命は、ブルジョアジーを

打倒し、ブルジョアジーの国家機構を打ち砕き、粉砕するにあるが、カウツキー、ヴァンデルヴェルデらはこれについては沈黙を守っている。

ブルジョアジーの執権は一つの階級、すなわちプロレタリアートの執権と交替しなければならず、革命の「過渡的諸段階」のあとには、プロレタリア国家がしだいに死滅してゆく「過渡的諸段階」がつづくであろうこと、このことをカウツキー、ヴァンデルヴェルデらはあいまいにしている。

まさにこの点に、彼らの政治的背教がある。

理論的、哲学的にみれば、まさにこの点で、弁証法が折衷主義および詭弁とすりかえられている。弁証法は具体的で、革命的である。弁証法は、一つの階級の執権から他の階級の執権への「過渡」と、民主主義的プロレタリア国家から非国家への「過渡」（「国家の死滅」）とを区別する。カウツキー、ヴァンデルヴェルデらの折衷主義と詭弁は、ブルジョアジーの気にいるように、すべて階級闘争における具体的なもの、明確なものをぼやかして革命の放棄をそのかげに隠すことのできる（そして、現代の公認の社会民主主義者の一〇人中の九人までが実際に隠している）「過渡」という一般的概念とすりかえる！

ヴァンデルヴェルデは、折衷主義者、詭弁家としては、カウツキーよりもいくらか巧妙で、いくらか洗練されている。なぜなら、「狭い意味の国家から広い意味の国家への過渡」という空文句によれば、およそあらゆる革命の問題を回避し、革命と改良とのあらゆる差異を、それどころか、マルクス主義者と自由主義者との差異をさえ回避することができるからである。また、ヨーロッパ的教育をうけたブルジョアで、こういう「一般的な」意味での「過渡的諸段階」を「一般に」否定しようなどと思いつくような者がいるだろうか？

ヴァンデルヴェルデはこう書いている。

「次の二つの条件をまえもってみたすことなしには、生産手段と交換手段を社会化することは不可能だという点で、私はゲードに同意する。

一、プロレタリアートによる政治権力の獲得を手段として、一階級の他の階級にたいする支配の機関としての今日の国家が、メンガーのいわゆる労働の人民国家に転化されること。

二、権威の機関としての国家を管理の機関としての国家から切り離すこと、あるいはサン－シモンの表現で言えば、人間にたいする統治を物の管理から切り離すこと。」（八九〔ページ〕）

ヴァンデルヴェルデはこれらの命題の意義をとくに強調

して、これをイタリックで書いている。しかし、これは、まったくの折衷主義的なごたまぜであり、マルクス主義との完全な絶縁ではないか！「労働の人民国家」は、一八七〇年代にドイツの社会民主主義者が言いはやし、エンゲルスからナンセンスだという焼印を押された、古くさい「自由な人民国家」[23]の言いかえにすぎないではないか。「労働の人民国家」という表現は、小ブルジョア民主主義者（わが国の左派エス・エルのような）にふさわしい空文句であり、階級的概念を階級外的概念とおきかえる空文句である。ヴァンデルヴェルデは、プロレタリアート（一つの階級）による国家権力の獲得と「人民」国家とを同列にならべ、それから生まれてくるごたまぜに気づかない。「純粋民主主義」をもちだすカウツキーの場合にも、そこから生まれてくるのは同様なごたまぜであり、階級的革命の任務、階級的・プロレタリア的執権（ディクタツーラ）の任務、階級的（プロレタリア的）国家の任務の同様な反革命的、小市民的無視である。

さらに、人間にたいする統治は、あらゆる国家が死滅するときにはじめてなくなって、物の管理に席をゆずるであろう。ヴァンデルヴェルデは、この比較的に遠い将来についての議論で、ブルジョアジーを打倒するというあすの任務をおおいかくし、陰に押しのけるのである。

こういうやり方は、これまた自由主義的ブルジョアジーのご機嫌とりにひとしい。自由主義者は、人間を統治する必要がなくなったときにどういうことが起こるかについて論じることには同意する。こんなにも無害な夢想にふけって、なぜいけないのか？　だが、収奪に反抗するブルジョアジーの抵抗をプロレタリアートが抑圧することについては、沈黙することにしよう。ブルジョアジーの階級的利益がそれを要求しているのだ。

「社会主義対国家」。これは、ヴァンデルヴェルデがプロレタリアートにおじぎをしたものである。おじぎをするのは、むずかしくない。「民主的」政治家はだれでも、その選挙人におじぎをするすべを心えている。だが、「おじぎ」のかげで、反革命的、反プロレタリア的な内容がもちこまれているのである。

ヴァンデルヴェルデは、近代ブルジョア民主主義の文明的な、洗練された、なめらかな外見のかげに、どれほど多くの欺瞞、暴力、買収、うそ、偽善、貧乏人の圧迫[24]が隠されているかについてのオストロゴルスキーの記述をくわしく受け売りしている。だが、ヴァンデルヴェルデは、このことから結論を引きださない。ブルジョア民主主義は勤労被搾取大衆を抑圧し、他方、プロレタリア民主主義はブルジョアジーを抑圧しなければならないことに、彼は気がつ

かない。カウツキーとヴァンデルヴェルデは、このことには目をふさいでいる。これらのマルクス主義の小ブルジョア的な裏切者たちはブルジョアジーに追随しているのだが、そのブルジョアジーの階級的利益が、この問題を回避し、それについては沈黙するか、あるいはこういう抑圧の必要をまっこうから否認するよう要求しているのである。

小市民的折衷主義対マルクス主義、詭弁対弁証法、俗物的改良主義対プロレタリア革命、――ヴァンデルヴェルデの著書にはこういう表題をつけるべきであったろう。

本文は一九一八年一〇月―一一月一〇日までに執筆
付録一は一九一七年一二月一一日または一二日（二四日または二五日）に執筆
付録二は一九一八年一一月一〇日以前に執筆
一九一八年にモスクワの出版所「コムニスト」から単行本として発行
本文と付録二は全集、第五版、第三七巻、二三五―三三八ページ所収
付録一は全集、第五版、第三五巻、一六二―一六六ページ所収
本文と付録二は邦訳全集、第二八巻、二三九―三四八ページ所収
付録一は邦訳全集、第二六巻、三八八―三九二ページ所収

共産主義インタナショナル第一回大会(六七)

一九一九年三月二―六日

ブルジョア民主主義とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)とについてのテーゼと報告

三月四日

一、すべての国にプロレタリアートの革命運動が成長してきたため、ブルジョアジーと労働者諸組織内のその手先とは、搾取者の支配を擁護するための思想的=政治的な論拠を見つけようとして、懸命な努力をはらっている。そういう論拠のうちで彼らがとくに力点をおいているのは、執権(ディクタツーラ)を非難し、民主主義を擁護することである。資本家の新聞雑誌の紙面や、一九一九年二月(六八)にベルンでひらかれた黄色インタナショナルの会議で、いろいろに言いかえて繰りかえされているこのような論拠が、うそっぱちの欺瞞的なものであることは、社会主義の基本命題を裏切りたくない者には、だれの目にも明らかである。

二、まず第一に、この論拠は、どの階級について論じているのかという問題を提出せずに、「民主主義一般」という概念と「執権(ディクタツーラ)一般」という概念をもてあそんでいる。このようにこの問題を階級外の問題、あるいは階級を超越した問題として、あたかも全人民的な問題であるかのように提出することは、社会主義の基本的学説、すなわち階級闘争の学説をあからさまに嘲笑するものである。ブルジョアジーの側に寝がえった社会主義者たちは、この階級闘争の学説を口さきでは認めているが、実際には忘れている。というのは、資本主義的文明国のどこにも「民主主義一般」などというものはなく、あるのはブルジョア民主主義だけだからであり、またここで問題になっているのは「執権(ディクタツーラ)一般」などではなくて、抑圧者と搾取者すなわちブルジョアジーにたいする被抑圧階級すなわちプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)であって、自分の支配を守ってたたかう搾取者の反抗を打破することがこの執権(ディクタツーラ)の目的だからである。

三、歴史が教えるところでは、およそ被抑圧階級で、執権(ディクタツーラ)の時期——すなわち、政治権力を獲得して、搾取者がつねに示してきた必死の、凶暴きわまる、どんな犯罪も

はばからない反抗を強力的に弾圧する時期——をとおらずに支配の地位に達したものは、これまでに一つもなかったし、またあるはずもなかった。「執権一般」に反対して「民主主義一般」に血道をあげている社会主義者たちがいま擁護しているブルジョアジーの支配にしても、ブルジョアジーが先進諸国で権力を獲得するまでには、数多くの蜂起や内乱を経なければならなかったし、国王、封建領主、奴隷所有者や、彼らの復古の企てを強力的に弾圧することが必要であった。あらゆる国の社会主義者は、その著書や小冊子、その大会の決議、その扇動演説で、これらのブルジョア革命やこのブルジョア執権の階級的性格を何千回、何百万回となく人民に説明してきた。だから、いまになって「民主主義一般」を論じているように見せかけてブルジョア民主主義を擁護するのは、いまになって「執権一般」を非難しているように見せかけてプロレタリアートの執権を非難するのは、社会主義をあからさまに裏切ることであり、事実上ブルジョアジーの側に寝がえることであり、自分の革命、プロレタリア革命をおこなうプロレタリアートの権利を否認することであり、全世界のブルジョア改良主義が破綻してしまい、戦争によって革命的情勢が生じたまさにその歴史的瞬間に、ブルジョア改良主義を擁護することである。

四、ブルジョア文明、ブルジョア民主主義、ブルジョア議会制度の階級性を説明するさい、社会主義者はみな、どんなに民主主義的なブルジョア共和国も、ブルジョアジーが労働者階級を抑圧し、ひとにぎりの資本家が勤労大衆を抑圧する機構にほかならないという、マルクスとエンゲルスによって科学的にみてこのうえなく正確に言いあらわされた思想[九七]を述べてきた。いま執権に反対し、民主主義に賛成してわめきたてている革命家、マルクス主義者で、かつては、自分は社会主義のこの基本的真理を認めていると言って労働者の前で神かけて誓わなかったような者は、ひとりもいない。ところが、この抑圧機構の破壊とプロレタリア執権の獲得とをめざす激動や運動が革命的プロレタリアートのあいだに始まったいまになって、これらの社会主義の裏切者どもは、まるでブルジョアジーが勤労者に「純粋民主主義」を授けてくれたかのように、ブルジョアジーが反抗をあきらめて勤労者の多数者にすすんで服従しようとしているかのように、民主的共和国には資本が労働を抑圧するための国家機構などはなにもなかったし、いまもないかのように、見せかけている。

五、労働者大衆がパリ・コミューンに熱烈な、心からの共感をよせていることを知っているので、社会主義者だという評判をとりたい者は、口さきではみなパリ・コミュー

ンをたたえているが、そのパリ・コミューンは、ブルジョア議会制度とブルジョア民主主義とが歴史的に制約され、その価値が限られたものであることを、とくにはっきりと示したのであった。これらのものは、中世的制度にくらべればきわめて進歩した制度ではあるが、プロレタリア革命の時代には根本的な変更を必要とすることは避けられない。コミューンの歴史的意義をだれよりもよく評価したほかならぬマルクスが、コミューンを分析したさいに、ブルジョア民主主義とブルジョア議会制度の搾取者的な性格を明らかにしたのであった。これらの制度のもとで被抑圧階級にあたえられているのは、有産階級のどの代表が議会で人民を「代表し、そして踏みにじる」(ver- und zertreten) かを、数年に一度きめる権利である。いまソヴェト運動が全世界に波及し、万人の目の前でコミューンの事業をつづけているまさにそのときに、社会主義の裏切者どもは、パリ・コミューンの具体的教訓を忘れて、「民主主義一般」について古くさいブルジョア的駄弁を繰りかえしている。コミューンは議会ふうの機関ではなかったのである。(六)

六、さらに、コミューンの意義は、それがブルジョア国家機構、すなわち官僚、裁判所、軍隊、警察の機構を根底から粉砕し破壊し、立法権力と執行権力との分立などというものを知らない、労働者の自治的な大衆組織をもってそれにおきかえようとした点にある。現代のブルジョア的民主的共和国はすべて、社会主義の裏切者どもが真理をあざけってプロレタリア共和国とよんでいるドイツ共和国をもふくめて、この国家機構を温存している。こういうわけで、「民主主義一般」を擁護するわめき声は、実際には、ブルジョアジーと彼らの搾取者としての特権を擁護するものであることが、またしてもまったく明瞭に確証されている。

七、「純粋民主主義」の要求の見本としては、「集会の自由」をあげることができるであろう。搾取者が打倒されまいとして抵抗し、自分の特権を守っている時期に、またそういう情勢のもとで、搾取者に集会の自由を約束することがばかげているのは、自分の階級と絶縁してしまっていない、自覚した労働者ならだれにでも、すぐ理解できるであろう。一六四九年のイギリスにせよ、一七九三年のフランスにせよ、革命的であったころのブルジョアジーは、外国軍隊を呼びよせ復古の陰謀を組織するために「集会をひらいた」王党派や貴族に、「集会の自由」をあたえはしなかった。ずっとまえから反動化している今日のブルジョアジーがプロレタリアートにむかって、資本家が収奪されまいとしてどんなに抵抗しようと、搾取者に「集会の自由」をまえもって保障せよ、と要求するとすれば、労働者はブルジョアジーの偽善を笑うだけであろう。

他方では、どんなに民主主義的なブルジョア共和国でも「集会の自由」は空文句にすぎないことを、労働者はよく知っている。なぜなら、金持は公共のものと私人のものとを問わずいちばんよい建物をすべて自由に使用しており、集会をひらくのに十分なひまがあり、また彼らの集会はブルジョア権力機関の保護をうけているからである。都市農村のプロレタリアと小農民、すなわち住民の大多数者には、建物もなければ、ひまもなく、権力機関の保護もない。こういう事情がつづくあいだは、「平等」すなわち「純粋民主主義」は欺瞞である。ほんとうの平等をたたかいとり、勤労者のための民主主義を実際に実現するためには、まず最初に搾取者から公共の建物や私人の豪華な建物をみな取り上げなければならないし、まず最初に勤労者にひまをあたえなければならず、打ちひしがれた兵士を率いた貴族の息子や資本家出身の将校ではなく、武装した労働者が勤労者の集会の自由を守るようにしなければならない。

こういうふうにものごとを変えたのちにはじめて、集会の自由や平等を口にしても、労働者、勤労者、貧民をばかにしたことにならないのである。だが、そういうふうにものごとを変えることのできるのは、勤労者の前衛で、搾取者、ブルジョアジーを打倒するプロレタリアートのほかにはない。

八、「出版の自由」もまた、「純粋民主主義」の主要なスローガンの一つである。この場合にも、りっぱな印刷所と紙の膨大なたくわえとが資本家の手ににぎられているあいだは、新聞雑誌にたいする資本の権力が維持されているあいだは、そしてこの権力は世界中で、たとえばアメリカのように民主主義と共和制度が発達していればいるほど、いよいよ明らかに、鋭く、鉄面皮に現われてくるのだが、こういうことがつづくあいだは、この自由が欺瞞であることを、労働者は知っており、あらゆる国の社会主義者は何百万回となくそれを認めてきた。勤労者のための、労働者と農民のための真の平等とほんとうの民主主義をたたかいとるためには、まず最初に資本から、文筆家を雇ったり、出版所を買い取ったり、新聞を買収したりする可能性を奪いとらなければならない。だが、それには、資本のくびきをくつがえし、搾取者を倒し、彼らの反抗を弾圧することが必要である。資本家が「自由」とよんだものはいつも、金持が儲ける自由、労働者が飢え死にする自由であった。資本家が出版の自由とよんでいるものは、金持が出版物を買収する自由、いわゆる世論をでっちあげ偽造するためにに富を利用する自由である。ここでもまた、「純粋民主主義」の擁護者は、実際には、金持が大衆啓蒙の手段を支配する下劣きわまる、金しだいの制度の擁護者なのであって、も

っともらしい、かざりたてた、徹頭徹尾うそっぱちの空文句を用いて、新聞雑誌を資本への隷属から解放するという具体的な歴史的任務から人民をそらせる人民の欺瞞者である。真に自由で平等なのは、共産主義者が建設しつつある制度である。すなわち、他人の犠牲で金儲けをすることができないようになっており、新聞雑誌を直接にも間接にも金（かね）の権力に従わせることが客観的に不可能となっており、勤労者（またはある数の勤労者のグループ）ならだれでも、どんな障害にもあわずに公共の印刷所と公共の紙を利用する平等な権利をもち、それを行使する、そういう制度である。

九、この大評判の「純粋民主主義」が資本主義のもとで実際にどんなものかということは、すでに戦前にも、一九世紀と二〇世紀の歴史がわれわれに示している。民主主義が発達していればいるほど、それが「純粋」であればあるほど、階級闘争はそれだけあからさまな、鋭い、情け容赦のないものとなり、資本の圧制とブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）はそれだけ「純粋に」現われてくるということは、マルクス主義者がつねに言ってきたことである。共和国フランスにおけるドレフュス事件、自由な民主的共和国アメリカで資本家によって武装させられた雇い兵部隊がストライキ労働者に血なまぐさい制裁をくわえていること――これらの事実やこれに類する数千の事実は、ブルジョアジーが隠そうとしてむだ骨をおっている真実を明らかにしている。それは、どんなに民主的な共和国でも実際にはブルジョアジーのテロルと独裁（ディクタツーラ）が支配しており、資本の権力がぐらついたと搾取者に思われるときにはいつでもそれが公然と現われてくるということである。

一〇、一九一四―一九一八年の帝国主義戦争は、どんなに自由な共和国でもブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）という性格をもつブルジョア民主主義のこの真の性格を、遅れた労働者の目にさえ決定的に明らかにした。百万長者や億万長者のドイツ・グループが儲けるか、それともイギリス・グループが儲けるかをめぐって、数千万人が殺され、最も自由な諸共和国にさえブルジョアジーの軍事独裁（ディクタツーラ）が打ち立てられた。この軍事独裁（ディクタツーラ）は、ドイツが撃破されたあとでも協商諸国に引きつづき残っている。まさにこの戦争は、ほかのなによりも勤労者の目をひらかせ、ブルジョア民主主義からにせの飾りをはぎとり、戦時に、また戦争をたねにおこなわれる底なしの投機と荒かせぎをまざまざと人民に見せつけた。ブルジョアジーがこの戦争をおこなったのは、「自由と平等」の名においてであったし、軍需請負業者が前代未聞の金儲けをしたのも、「自由と平等」の名においてであった。ブルジョア的自由、ブルジョア的平等、ブルジョア民主主義の搾取者的な性格は、いまでは徹底的

に暴露されているので、ベルンの黄色インタナショナルがどんなにやっきになっても、それを大衆から隠すことはできないであろう。

一一、ヨーロッパ大陸で最も発達した資本主義国であるドイツで、帝国主義ドイツの壊滅によって完全な共和主義的自由がもたらされた当初の数ヵ月に、ブルジョア的民主的共和制の真の階級的本質がどんなものかが、ドイツの労働者と全世界に示された。カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの殺害は世界史的な重要事件であるが、それは、真のプロレタリア的共産主義インタナショナルのすぐれた人材、指導者が悲劇的な死をとげたという理由からだけではなく、ヨーロッパの先進国家——世界の先進国家と言っても誇張ではない——の階級的本質が徹底的に明るみにだされたという理由からもそうなのである。社会愛国主義者の政府のもとで、逮捕された人たち、つまり国家権力の保護のもとにおかれた人たちを、将校と資本家が殺しても、その犯人が処罰もされないとすれば、そういうことが起こりえた民主的共和制は、つまりブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)だということになる。カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクが殺されたことにはげしい憤りを表明しながらも、この真理を理解できない人は、とりもなおさず、自分の愚鈍さか、でなければ偽善をさらけだすだけである。世界で最も自由で先進的な共和国の一つであるドイツ共和国で「自由」と言われるのは、逮捕されたプロレタリアートの指導者を処罰のおそれなしに殺す自由である。そして、資本主義が維持されているかぎり、それ以外ではありえないのである。なぜなら、民主主義が発展すれば、階級闘争は緩和されずに、かえって激しくなるからである。戦争とその諸帰結とがもたらしたあらゆる結果、あらゆる影響のために、いま階級闘争は沸騰点に達している。

現在、全文明世界をつうじて、ボリシェヴィキは追放され、迫害され、投獄されている。たとえば、最も自由なブルジョア共和国のひとつであるスイスでそうであり、またアメリカではボリシェヴィキにたいするポグロムがおこなわれている、等々。何千万の部数で出されているブルジョア新聞の紙上で野蛮国、犯罪国などとよばれている遅れた、飢えた、荒廃したロシアからやってきた数十人の人間が自分の国にいるのを、先進的な、文明的な、民主主義的な、歯まで武装した国々が恐れるなどということは、「民主主義一般」または「純粋民主主義」の見地からすれば、まったく滑稽である。このようなはなはだしい矛盾を生みだすことのできた社会的環境が、実際にはブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)であることは明らかである。

一二、こういう事態のもとでは、プロレタリアートの

執権は、搾取者を打倒し彼らの反抗を弾圧する手段としてまったく正当なばかりでなく、あの戦争を引きおこし、いまも新戦争を準備しているブルジョアジーの執権にたいする唯一の防衛手段として、勤労大衆全体にとって絶体に必要である。

社会主義者が理解していないいちばん肝心な点、彼らが理論的に近視眼で、ブルジョア的偏見にとらわれていて、プロレタリアートを政治的に裏切っている点は、資本主義社会では、この社会の基礎にある階級闘争がいくぶんでも本格的に激化するときには、ブルジョアジーの執権あるいはプロレタリアートの執権以外の中間のものはありえない、ということである。なにか第三のものを夢想するのは、すべて小ブルジョアの反動的な哀歌である。あらゆる先進国におけるブルジョア民主主義と労働運動との一〇〇年をこえる発展の経験も、またとりわけ最近五ヵ年の経験も、このことを立証している。経済科学全体、マルクス主義の全内容もまた、このことを示している。マルクス主義が明らかにしているのは、およそ商品経済のもとではブルジョアジーの執権は経済的に避けられず、そしてこの執権にとって代わるものは、資本主義の発展そのものによって発展させられ増大させられ団結させられ強化される階級、すなわちプロレタリア階級をおいてほかにはないということなのである。

一三、社会主義者のもう一つの理論的ならびに政治的な誤りは、古代に民主主義が芽ばえて以来の数千年をつうじて、ある支配階級が別の支配階級と交替するにつれて民主主義の形態も不可避的に交替してきたことを、彼らが理解していない点にある。古代ギリシアの諸共和国と、中世の諸都市と、先進資本主義諸国とでは、民主主義はそれぞれ違った形態をもっており、それが適用される度合いもそれぞれに違っている。人類の歴史上で最も深刻な革命が、世界ではじめて権力が少数の搾取者の手から多数の被搾取者の手に移るというような出来事が、古い民主主義、ブルジョア民主主義、議会制民主主義の古い枠のなかで起こりうると、きわめて急激な転換がなくとも、民主主義の新しい諸形態、民主主義適用の新しい諸条件を具現する新しい諸制度その他をつくりださなくとも、そういうことが起こりうると考えるのは、このうえなくばかげたことであろう。

一四、プロレタリアートの執権は、他のどの執権もそうであるように、政治的支配を失いつつある階級の暴力的反抗を弾圧する必要から生まれたという点では、他の階級の執権に似ている。プロレタリアートの執権が他の階級の執権——中世における地主の執権、すべての資本主義的文明国におけるブルジョアジーの執権

――と根本的に違っている点は、地主やブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）が、住民の大多数者すなわち勤労者の反抗を暴力的に弾圧するものであったという点にある。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、これに反して、搾取者、すなわち住民中のとるにたりない少数者である地主と資本家の反抗を強力的に弾圧することである。

このことからさらに次の結論がでてくる。すなわち、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、一般的にいって民主主義の諸形態や諸制度の変化を不可避的にともなうというだけではなく、資本主義によって抑圧されてきた人々、すなわち勤労諸階級が民主主義を実際に享有するのを世界にこれまで見られなかったほどに拡大する、まさにそういう変化をかならず引きおこさずにはおかないということがそれである。

じじつ、すでに実際につくりだされているプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の形態、すなわちロシアのソヴェト権力、ドイツの Räte-System〔評議会制度〕、Shop Stewards Committees[九]〔職場世話役委員会〕、その他の国におけるこれに類似した他のソヴェト的諸制度、これらすべては、ほかならぬ勤労諸階級にとって、すなわち住民の大多数者にとって、最良の、最も民主的なブルジョア共和国にもかつてこれに近い程度のものさえなかったほどに、民主主義的権利と自由を実際に行使する可能性をえたことを意味し、またその可能性を実現するものである。

ソヴェト権力の本質は、資本主義によって抑圧されていたまさにその階級、すなわち労働者と半プロレタリア（他人の労働を搾取せず、自分の労働力のすくなくとも一部分を常時売らないわけにはいかない農民）の大衆組織が、国家権力全体、国家機構全体の唯一の恒常的な基礎となる点にある。どんなに民主的なブルジョア共和国でも、法律上は同権だが、実際には無数の手口や策略によって押しのけられて、政治生活に参加したり民主主義的権利と自由を行使したりすることのできなかった大衆、ほかならぬその大衆が、いまや国家の民主主義的統治に、常時に、確実に、しかも決定的な役割をもって参加させられるのである。

一五、性、宗教、人種、民族にかかわらない市民の平等ということは、ブルジョア民主主義がいつでも、どこでも約束しながら、どこでも実行したことがなく、しかも資本主義が支配しているために実行できなかったものであるが、その市民の平等を、ソヴェト権力すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、一挙に、完全に実現する。なぜなら、それをやれるのは、生産手段の私的所有や生産手段の分配と再分配をめぐる闘争に利益をもたない労働者の権力だけだからである。

一六、古い民主主義すなわちブルジョア民主主義と議会

制度とは、ほかならぬ勤労大衆をだれよりも統治機構から疎外するような仕方で、組織されていた。ソヴェト権力すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、これに反して、勤労大衆を統治機構に近づけるような仕方で組織されている。ソヴェト国家組織のもとでは立法権力と執行権力が一つに結合されていること、また工場などのような生産単位が地域的な選挙区にとってかわったことも、同じ目的に役だっている。

一七、軍隊が抑圧機構であったのは、君主制のもとに限られない。どのブルジョア共和国でも、どんなに民主的な共和国でも、軍隊はいまなおそういうものである。資本主義によって抑圧されてきたまさにその階級の恒常的な国家組織であるソヴェト権力だけが、ブルジョア的司令部への軍隊の従属を打破し、実際にプロレタリアートと軍隊を融合させ、実際にプロレタリアートの武装とブルジョアジーの武装解除とを実現することができるのであって、しかもそうすることなしには、社会主義の勝利はありえないのである。

一八、ソヴェト国家組織は、資本主義によって最も集積させられ啓蒙された階級であるプロレタリアートの指導的役割を実現するのに適している。被抑圧諸階級のすべての革命とすべての運動の経験、世界の社会主義運動の経験がわれわれに教えているように、プロレタリアートだけが動労被搾取住民の分散した、遅れた諸層を統合し率いてすすむ能力をもっているのである。

一九、ソヴェト国家組織だけが、古い、すなわちブルジョア的な官僚および司法機構を一挙に粉砕し、完全に破壊することができる。資本主義のもとでは、どんなに民主的な共和国でもこうした機構が維持されていたし、またぜひとも維持しないわけにはいかなかったのであって、これこそ、労働者と勤労者のための民主主義を実現するうえで実際上最大の障害であった。パリ・コミューンがこの道に世界史的な第一歩を踏みだし、ソヴェト権力がその第二歩をすすめたのである。

二〇、国家権力の廃絶は、マルクスをもふくめて、またマルクスをはじめとして、すべての社会主義者が目標としてかかげたものである。この目標を実現せずには、真の民主主義、すなわち平等と自由は実現できない。ところで、この目標へ実際にみちびくのは、ソヴェト民主主義すなわちプロレタリア民主主義だけである。なぜなら、プロレタリア民主主義は、勤労者の大衆諸組織を常時、確実に国家の統治に参加させることによって、あらゆる国家の完全な死滅をただちに準備しはじめるからである。

二一、ベルンに集まった社会主義者たちが完全に破産したこと、彼らが新しい民主主義すなわちプロレタリア民主

主義をまったく理解していないことは、とりわけ次の事実からはっきりわかる。一九一九年二月一〇日、ベルンで、ブランティングが黄色インタナショナルの国際会議の閉会を宣言した。一九一九年二月一一日ベルリンで、このインタナショナルの参加者たちの新聞『フライハイト』[100]に、プロレタリアートにあてた「独立派」[101]の党の呼びかけがのった。この呼びかけは、シャイデマン政府のブルジョア的性格を認めている。呼びかけは、ソヴェト〔評議会〕をTräger und Schützer der Revolution――革命の担い手で守護者とよんでおり、このソヴェトを廃止したがっているというのでシャイデマン政府を非難している。また、ソヴェトを公認し、それに国家的権能をあたえ、国民議会の決定を停止して問題を一般国民投票にかける権能をあたえるように、という提案をおこなっている。

このような提案は、民主主義を擁護し、民主主義のブルジョア的性格を理解できなかった理論家たちの完全な思想上の破綻である。ソヴェト制度すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）と、国民議会すなわちブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）とを結合しようとする滑稽な企ては、黄色社会主義者や社会民主主義者の思想の貧しさを、彼らの小ブルジョア的な政治的反動性を、さらに、押えようのない勢いで成長しつつある新しい民主主義、プロレタリア民主主義の力にたいする彼らの臆病な譲歩を、あますところなく暴露している。

二二、ベルンの黄色インタナショナルの多数派が、労働者大衆を恐れてその趣旨の決議をあえて正式の表決に付さなかったとはいえ、ボリシェヴィズムを非難したことは、階級的見地からみて正しくふるまったものであった。ほかならぬこの多数派は、ロシアのメンシェヴィキや社会革命党、ドイツのシャイデマン派と完全に連帯しているのである。ロシアのメンシェヴィキと社会革命党は、ボリシェヴィキからうけた迫害について苦情を言っているが、こういう迫害をうけたのは、メンシェヴィキと社会革命党がプロレタリアートを敵としブルジョアジーに味方して内戦に参加したためだという事実を、彼らは隠そうとつとめている。これとまったく同じように、ドイツのシャイデマン派と彼らの党は、彼らもやはり労働者を敵としブルジョアジーに味方して内乱に参加していることを、すでに証明している。

だから、ベルン黄色インタナショナルの参加者の多数派がボリシェヴィキ非難に賛成したのは、まったく当然である。ここに現われたのは、「純粋民主主義」の擁護ではなくて、内乱で自分がプロレタリアートを敵としブルジョアジーに味方していることを知っており感じている連中の自己防衛であった。

だから、階級的見地からみて、黄色インタナショナルの

多数派の決定を正しいものと認めないわけにはいかない。プロレタリアートは、真実を恐れず、真実を直視して、そこからすべての政治的結論を引きださなければならない。

同志諸君！ 最後の二つの項目についてすこしばかりつけくわえて説明しておきたい。もっとくわしいことは、ベルン会議について報告してくれることになっている同志たちが、話してくれるだろうと思う。

ベルン会議全体をつうじて、ソヴェト権力の意義については一ことも述べられなかった。われわれはロシアですでに二年のあいだこの問題を討議している。すでに一九一七年四月の党協議会で、われわれは、「ソヴェト権力とはなにか、その内容はどういうものか、その歴史的意義はどこにあるか？」という問題を、理論的および政治的に提起した。われわれは、すでに二年近くもこの問題を討議しており、われわれの党大会でこの問題についての決議を採択した。(一〇二)

ベルリンの『フライハイト』の二月一一日号にドイツのプロレタリアートにあてた檄がのったが、それには、ドイツ独立社会民主党の指導者だけでなく、独立派の議員団全員が署名していた。一九一八年八月、この独立派の最大の理論家カウツキーは、その小冊子『プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）』のなかで、自分は民主主義およびソヴェト機関の支持者であるが、ソヴェトは経済的意義だけをもつべきであって、けっしてこれを国家組織と認めてはならない、と書いている。これと同じことを、カウツキーは『フライハイト』の一一月一一日号と一月一二日号でもくりかえし述べている。二月九日号には、やはり第二インタナショナルの最大の権威ある理論家のひとりと見なされているルードルフ・ヒルファディングの論文がのっている。彼は、法律によって、国家の立法によってソヴェト制度と国民議会とを結合せよ、と提案している。これは二月九日のことであった。一一日にはこの提案が独立派の党全体によって採用され、檄として公表された。

国民議会がすでに存在しているのに、また「純粋民主主義」が形をそなえた現実となったあとなのに、独立社会民主党の最大の理論家たちが、ソヴェト組織は国家組織となってはならないと言明したあとなのに、これらすべてのことにもかかわらず、またもや動揺しているのだ！ このことは、これらの諸君が新しい運動やこの運動の闘争条件について、ほんとうになにひとつ理解しなかったことを証明する。しかし、これはなおもう一つのことも証明している。つまり、こういう動揺をおこさせる条件、原因がきっとあるにちがいない、ということである！ すべてこういう出来事があったあとで、ロシアで革命がこのように勝利してからほとんど二年になるのに、ベルン会議で採択されたよ

うな決議、ソヴェトやソヴェトの意義についてなにも言っていない決議が提案されたとすれば、そして会議で代議員のひとりとしてただ一つの演説でもこのことに一こともふれなかったとすれば、これらの諸君はみな、社会主義者および理論家として、われわれにとって死んだ人間であると、当然に主張できるのである。

だが、同志諸君、以前にはこういう国家組織にたいして理論的に、原則的に反対していたこの独立派が、いま突然、国民議会とソヴェト制度とを「平和的に」結合するという、つまりブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とを結合するというようなばかげたことを提案するのは、実践的には、政治の見地からすれば、大衆のあいだに大きな変動が起こっている証拠である。ごらんのように、彼らはみな社会主義者および理論家として破産してしまい、そして大衆のあいだに大きな変化が起こっているのである。ドイツ・プロレタリアートの遅れた大衆がわれわれのほうにやってきて、われわれのところにたどりついたのである！　こういうわけで、ベルン会議でいちばんましな部分であるドイツ独立社会民主党も、理論的および社会主義的な見地からみてその意義はゼロに等しいのである。しかし、この党にもいくらかの意義は残っている。その意義というのは、これらの動揺分子がわれわれにとってプロレタリアートの遅れた部分の気分を示す指標の役をする、という点にある。私の確信するところでは、まさにこの点に、この会議の最大の歴史的意義がある。われわれは、これに似たことをわが国の革命のあいだにも経験した。わが国のメンシェヴィキは、ドイツの独立派の理論家がたどったのとほとんどそっくりな発展の道をたどった。はじめ彼らがソヴェト内で多数を占めていたころには、彼らはソヴェトに賛成であった。そのころ耳にはいってくることばといえば、「ソヴェト万歳！」、「ソヴェトのために！」、「ソヴェトは革命的民主主義である！」の一点ばりであった。ところが、われわれボリシェヴィキがソヴェト内で多数を占めると、今度は彼らは別の歌をうたいだした。ソヴェトは憲法制定議会とならんで存在してはならない、というのである。そして、メンシェヴィキのさまざまな理論家が、ソヴェト制度と憲法制定議会とを結合せよとか、ソヴェトを国家組織のなかにふくめよとかいう、ほとんど同じような提案をおこなった。プロレタリア革命の一般的な経過は世界中どこでも同じだということが、ここでかさねて明らかになったわけである。はじめにソヴェトが自然発生的に成立する。ついでそれがひろがり、発展する。それから、ソヴェトか、それとも国民議会または憲法制定議会またはブルジョア議会制度か、という問題が実践的に現われてくる。指導者た

ちは完全にとほうにくれてしまう。そして最後に――プロレタリア革命がやってくる。しかし、革命の開始後ほとんど二年もたってから、われわれはこんなふうに問題を立てるべきではなく、具体的な決定をくださなければならない、と私は考える。なぜなら、ソヴェト制度の拡大は、われわれにとって、とくに西ヨーロッパ諸国の多数者にとって、最も重要な任務だからである。

ここでメンシェヴィキの決議を一つだけ引用してみたい。私は、この決議をドイツ語に翻訳してくれるように、同志オボレンスキーにたのんでおいた。彼はそうすると約束したのだが、残念なことに、この席にいない。私は、この決議の全文をもちあわせていないので、記憶をたどって再現するようにつとめよう。

ボリシェヴィズムのことなどなにも聞いたことのない外国人が、われわれの論争問題について自分の意見をまとめることは、非常に困難である。メンシェヴィキは、ボリシェヴィキの主張することにはなんにでも異論をとなえており、その逆もまた真である。もちろん、闘争のときにはこうなるほかはない。だから、一九一八年一二月にひらかれたメンシェヴィキ党の最近の会議が長文のくわしい決議を採択したことは、非常に重要である。この決議の全文は、メンシェヴィキの『印刷労働者新聞』〔102〕にのっている。この決議に、メンシェヴィキ自身が階級闘争と内戦の歴史を要約して述べている。決議には、ウラル、南部、クリミア、グルジアで有産階級と同盟している自党の諸グループを自分たちは非難する、と述べており、そういう地方をのこらず列挙している。有産階級と同盟してソヴェト権力に反対の行動をとったメンシェヴィキ党のグループは、いまでは決議で非難されているが、決議の最後の一項は、共産主義者の味方に変わった人々をも非難している。だから、彼らの党には統一がなく、ある者はブルジョアジーの味方をし、ある者はプロレタリアートの味方をしていることを、メンシェヴィキは認めないわけにいかなくなっているという結論になる。メンシェヴィキの大部分はブルジョアジーの味方に変わり、内戦のときにはわれわれの敵としてたたかった。もちろん、われわれはメンシェヴィキを迫害している。彼らがわれわれにたいする戦争でわが赤軍とたたかい、わが赤軍指揮官を銃殺するときには、われわれは彼らを銃殺さえしている。ブルジョアジーの戦争にたいしては、われわれはプロレタリアートの戦争でこたえた。そうするほかに道はない。だから、政治的見地からすれば、すべてこうしたことはメンシェヴィキの偽善にすぎないのである。狂人だという公けの宣告をうけてもいない人々が、ベルン会議で、メンシェヴィキとエス・エルの委託をうけて、この

連中にたいするボリシェヴィキの闘争について語りながら、いったいどうして、自分たちがブルジョアジーと同盟してプロレタリアートにたいしておこなっている闘争について沈黙していられたのか、歴史的にみて理解できないことである。

彼らはみな、われわれが彼らを迫害しているというので、猛烈にわれわれを攻撃する。これはほんとうのことである。だが、彼ら自身内戦でどんな役割を果たしたかについては、彼らはただのひとことも言わない！　私は、議事録にのせるためこの決議の全文を提出しなければなるまいと考えているが、外国の同志諸君に、どうかこの決議に注意をはらうようおねがいする。というのは、この決議は歴史的文書であって、そこでは問題が正しく提起されており、ロシアにおける「社会主義的」諸潮流のあいだの論争を評価するうえで最良の資料を提供しているからである。プロレタリアートとブルジョアジーの中間には、なお、あるときは一方にかたむき、あるときは他方にかたむく人々の一階級が存在している。これは、どの革命でもいつもそうであったし、プロレタリアートとブルジョアジーが二つの敵対的な陣営をかたちづくっている資本主義社会では、両者のあいだに中間層が存在しないなどということは、絶対にありえない。こういう動揺分子の存在は歴史的に避けることのできないものである。そして、残念ながら、あす自分がどちらの側の味方としてたたかうことになるか、自分にもわからないような分子は、今後もかなり長いあいだ存在することであろう。

私は、一つの決議を採択するようにという実践的な提案をしたいと思う。その決議ではとくに次の三点を指摘しなければならない。

第一に、西ヨーロッパ諸国の同志たちにとって最も重要な任務の一つは、ソヴェト制度の意義、重要性、必然性を大衆に説明することである。この問題では理解の不十分さが見られる。カウツキーとヒルファディングは理論家として破産したとはいっても、『フライハイト』にのった最近の諸論文は、彼らがそれでもやはりドイツ・プロレタリアートの遅れた部分の気分を正しく反映していることを、証明している。われわれのところでもこれと同じことが起こった。ロシア革命のはじめの八ヵ月間に、ソヴェト組織の問題について非常に多くの討議がなされた。しかも、新しい制度がどういうものなのか、ソヴェトを国家機構にすることができるのかできないのか、労働者にははっきりしていなかった。われわれの革命でわれわれが前進していったのは、理論によってではなく、実践によってであった。たとえば、われわれは、以前には憲法制定議会の問題を理論

的に提起することをしなかったし、憲法制定議会を認めないなどと言いはしなかった。あとになってはじめて、ソヴェト組織が全国にひろがり、政治権力を獲得したときにはじめて、われわれは憲法制定議会を解散することにきめた。いまハンガリーとスイスでは問題がずっと鋭いかたちで提出されていることを、われわれは見ている。[101] 一方では、これは非常によいことである。このことからわれわれは、西ヨーロッパ諸国では革命はもっと急速に進行するであろうし、もっと大きな勝利をわれわれにもたらすであろうという固い確信を汲みとっている。だが他方では、この点にある種の危険がひそんでいる。すなわち、闘争があまりにも急激にすすむため、労働者大衆の意識がそういう発展についていけないという危険である。ソヴェト制度の意義は、政治的な教養の高いドイツの労働者の大多数にも、いまなおはっきりわかってはいない。なぜなら、彼らは、議会主義の精神とブルジョア的偏見とで教育されてきたからである。

第二に、ソヴェト制度の拡大について。ソヴェトの思想がドイツや、さらにイギリスでさえ急速にひろまっているということを聞くとき、これはわれわれにとって、プロレタリア革命が勝利するだろうという最も重要な証拠である。革命の進行を押えることができるのは、ほんの短い期間のことにすぎない。しかし、同志アルベルトとプラッテンが、彼らの国の農村では農村労働者と小農民のあいだにソヴェトはほとんど存在していない、とわれわれに告げるときには、問題は別のものとなる。私は『ローテ・ファーネ』で、農民ソヴェトに反対し、雇農と貧農の[102]ソヴェトに賛成している——これはまったく正しい——論文を読んだ。ブルジョアジーと、シャイデマン一派のようなブルジョアジーの従僕とは、すでに農民ソヴェトというスローガンをかかげている。しかし、われわれに必要なものは、雇農と貧農のソヴェトだけである。残念なことに、同志アルベルト、同志プラッテン、その他の同志の報告によって、ハンガリーを例外として、農村にソヴェト制度を拡大するためにはごくわずかなことしかなされていないことが、わかる。おそらく、ドイツのプロレタリアートが確実な勝利をおさめるためには、いまなおまさにこの点にかなり大きな実践上の危険があると思われる。都市の労働者ばかりでなく、農村プロレタリアも組織されたとき、しかもこれまでどおりのやり方で——労働組合や協同組合に——組織されるのでなく、ソヴェトに組織されたときにはじめて、勝利は保障されたものと見なすことができる。われわれが比較的容易に勝利をえたのは、われわれが一九一七年一〇月に農民とともに、全農民とともにすすんだからであった。この意味で

は、当時のわれわれの革命はブルジョア革命であった。われわれのプロレタリア政府の第一歩は、すでにケーレンスキーのもとで農民ソヴェトや農民集会によって表明されていた古くからの全農民の要求を、革命の翌日の一九一七年一〇月二六日（旧暦）にわれわれの政府の公布した法律で承認したことであった。この点にわれわれの強みがあった。だからこそ、われわれは、あれほど容易に圧倒的多数者を獲得できたのである。農村にかんしては、われわれの革命はなおひきつづきブルジョア革命であった。あとになって、半年たってからはじめて、われわれは、国家組織の枠内で農村に階級闘争の端緒をひらき、それぞれの農村に貧農、半プロレタリアの委員会[108]をつくって、農村ブルジョアジーと系統的にたたかわざるをえないようになったのである。わが国では、これは、ロシアの後進性のために避けられないことであった。西ヨーロッパでは、事情はこれとは違ったものになるであろう。だから、適当な、おそらくは新しい形態でソヴェト制度を農村住民にも拡大することが絶対に必要であるということを、われわれは強調しなければならない。

第三に、ソヴェト権力がまだ勝利していないどの国でも、ソヴェト内で共産主義者が多数を獲得することが主要な任務であることを、われわれは述べなければならない。われわれの決議委員会はきのうこの問題を討議した。おそらくほかの同志たちもなおこのことについて発言するであろうが、私は、以上の三項目を特別決議として採択するように提案したい。もちろん、われわれは発展の進路を指定することはできない。多くの西ヨーロッパ諸国で革命が非常に急速にやってくることも、大いにありうる。だが、われわれは、労働者階級の組織された部分として、党として、ソヴェト内で多数者を獲得することにつとめるであろうし、またつとめなければならない。そうなったときにわれわれの勝利は保障され、どんな勢力も、共産主義革命に反対してなにかを企てることはできなくなるであろう。そうならなければ、勝利はそうたやすくはえられないであろうし、また長つづきもしないであろう。こういうわけで、私は、右の三項目を特別決議として採択するように提案したいと思う。

テーゼは一九一九年三月六日に新聞『プラウダ』第五一号および新聞『イズヴェスチヤ』第五一号に発表
報告は一九二〇年に『共産主義インタナショナル第一回大会議事録』ドイツ語版に発表
全集、第五版、第三七巻、四九一―五〇九ページ所収
邦訳全集、第二八巻、四九〇―五〇八ページ所収

ロシア共産党（ボ）第八回大会(103)

一九一九年三月一八―二三日

一　党綱領についての報告

三月一九日

（拍手）同志諸君、私と同志ブハーリンのあいだで打ち合わせたテーマの分担にしたがって私に割りあてられたのは、最も論議の余地が多いか、でなければ現在党の最も大きな関心をひいているいくつかの具体的な論点について、委員会(104)の見解を説明することである。

はじめに私は、同志ブハーリンが、彼の報告の終りで、われわれ委員のあいだで異論があった点だといってふれた問題を簡単に述べよう。第一の問題は、綱領の総論部分の組立てをどういうふうのものとするかである。私の考えでは、同志ブハーリンは、古い資本主義を論じた部分をすっかり削除した綱領をつくろうというあらゆる試みを、なぜ委員会の多数者が拒否したのか、その理由をここでかならずしも正確に述べなかったと思う。同志ブハーリンの言い方には、まるで委員会の多数者が、そうしたなら人になにか言われはしないかと気づかい、自分たちが過去にたいして十分敬意をはらっていないと責められはしないかと気づかっていたかのように、とれるところがときどきあった。委員会の多数者の立場をこんなふうに述べれば、この立場がきわめて滑稽に思われることは、疑いをいれない。だが、それは真実からかけはなれている。委員会の多数者がこれらの試みを拒否したのは、それがまちがっているからである。そういうことは、現実の事態にそわないことになるであろう。資本主義という基礎をもたない純粋の帝国主義などは、かつて存在したことはないし、どこにも存在していないし、今後もけっして存在しないであろう。金融資本主義を古い資本主義の基礎をすこしももたないもののように描くのは、シンジケートやカルテルやトラストや金融資本主義についてこれまで言われてきたことのすべてを、まちがった仕方で一般化するものである。

それはまちがっている。それは、帝国主義戦争の時期と帝国主義戦争のあとの時期とについては、とくにまちがっ

ているであろう。すでにエンゲルスは、きたるべき戦争[9]について論じた一考察のなかでこう書いた。三十年戦争のあとの荒廃よりもずっとひどい荒廃が起こるであろう、人類ははなはだしく野蛮化するであろう[10]、われわれの人為的な商工業機構は破綻するであろう、と。戦争のはじめに裏切り社会主義者と日和見主義者は、資本主義の生命力を誇って、「狂信者または半無政府主義者」——彼らはわれわれのことをそうよんでいたのだ——をあざけった。彼らは言った。「そら見たまえ、これらの予言は実現しなかった。諸事件は、それがごく少数の国について、ほんのわずかな期間しか正しくなかったことを示した！」と。ところが、いまでは、ロシアばかりでなく、またドイツばかりでなく、戦勝国でも、現代資本主義のきわめて大がかりな崩壊が始まっていて、いたるところで、この人為的な機構を取りのぞいて、古い資本主義を復活させているほどである。

同志ブハーリンが、資本主義と帝国主義の崩壊の純一的な描写をあたえるよう試みることが可能であると述べたとき、われわれは委員会で反論した。そして、ここでも私は反論しなければならない。まあ一度やってみれば、うまくいかないことがわかるだろう、と。同志ブハーリンは、委員会でそういう試みを一つやってみたが、自分でそれを断念してしまった。もしだれかそういう試みをやれる人があるとすれば、だれよりも同志ブハーリンこそその人であると、私はまったく確信している。同志ブハーリンは、この問題を非常に広範に、また非常にくわしく研究してきたからである。課題がまちがっているから、そういう試みがうまくいくはずはない、と私は断言する。ロシアでいまわれわれは、帝国主義戦争の諸結果とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の始まりとを見ている。それと同時に、以前にもましてたがいに切り離されているロシアの多くの地方で、いたるところにわれわれは、資本主義の復活とその初期の段階の発展とを見ている。この状態から抜けだすわけにはいかない。もし綱領を同志ブハーリンが望んだような仕方で書くとすれば、その綱領はまちがったものになるだろう。せいぜいうまくいって、それは、金融資本主義と帝国主義についてこれまでに言われたいちばんすぐれた叙述を再録するだけであろうし、現実を再現しはしないだろう。なぜなら、この現実には、まさにそういう純一性はないからである。異質的な部分からなる綱領は——スマートではないが（だが、これはもちろんたいしたことではない）——そうでない綱領はまったくまちがったものとなろう。たとえ気にいらなくても、たとえ十分に整然としていなくても、われわれは、この雑多なものから、このいろいろな材料からなりたった状態から、まだ非常に長いあいだ抜けだすことができない

であろう。それから抜けだすときがきたら、われわれは別の綱領をつくることにしよう。だが、そのときには、われわれはすでに社会主義社会に生活していることであろう。そうなったときでも事情は今日と同じだと主張するのは、滑稽であろう。

いまわれわれは、資本主義の幾多の最も原始的な基礎的な現象が復活している時期に生活している。たとえば、われわれがきわめてよく――もっと正確に言えば、きわめてつらく――身にしみて味わっている運輸組織の崩壊なりと、とってみたまえ。これは、他の国々にも、戦勝国にさえ起こっている。ところで、帝国主義体制のもとでの運輸組織の崩壊とは、なにを意味するか？　それは、商品生産の最も原始的な形態への復帰を意味する。担ぎ屋とはどんなものか、われわれはよく知っている。このことばは、これまで外国人には理解できなかったようである。だが、いまはどうか？　第三インタナショナルの大会にやってきた同志諸君と話し合ってみたまえ。これと似たことばが、ドイツにも、スイスにも、できはじめていることがわかる。ところで、諸君は、このカテゴリーをどんなプロレタリアートの執権にもあてはめることができないであろうし、そのためには資本主義社会と商品生産の最下の段階に立ちもどらなければならないであろう。

すらすらした、純一的な綱領をつくって、この悲しむべき現実から抜けだそうとすることは、真空の、雲のかなたの世界にとびこむこと、まちがった綱領を書くことを意味する。そして、われわれが古い綱領の数節をここに挿入した動機は、同志ブハーリンがものやわらかにほのめかしたように、過去にたいする敬意ではけっしてない。つまり、彼はこう言いたかったのだ。一九〇三年の綱領は、レーニンが参加して書いたものである。この綱領の出来が悪いことは疑いない。けれども、老人連は昔のことを思いだすことがなによりも好きなので、古いものに敬意をはらって、新しい時代に、古いものを繰りかえしている新しい綱領をつくったのだ、と。もしこれがほんとうなら、そういう変人たちはあざけってしかるべきであろう。だが、私は断言する。そうではないのだ。一九〇三年に記述されたような資本主義は、まさに帝国主義が解体したため、それが崩壊したため、一九一九年のソヴェト・プロレタリア共和国にもまだ残っている。たとえば、そういう資本主義は、モスクワからあまり遠くないサマラ県でも、ヴャトカ県でも、見つけることができる。内戦のために国が分断されている時期には、われわれはこの状態から、この担ぎ屋商売から、すぐには抜けだすことができないであろう。以上の理由で、綱領のこれ以外の構成は正しくないであろう。われわれは、

あるがままのものを語らなければならない。綱領は、絶対に争う余地のないものを、事実として確かめられているものを、ふくまなければならない。その場合にだけ、それはマルクス主義的な綱領である。

　同志ブハーリンは、理論上はこのことを十分理解していて、綱領は具体的でなければならない、と述べている。しかし、理解することと実行することとは別である。同志ブハーリンの具体性とは、金融資本主義を書物ふうに叙述することである。現実には、われわれは異質的な諸現象を目撃している。どの農業県でも、われわれは、独占化された工業とならんで、自由競争を目撃している。幾多の部門で自由競争をともなわないような独占資本主義は、世界のどこにも存在したことはないし、これからも存在しないであろう。そういう体制を書くのは、実生活から遊離した、まちがった体制を書くことである。マルクスはマニュファクチュアのことを、それは大量な小規模生産のうえに立つ上部構造であると言った[三]が、帝国主義と金融資本主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造である。それの上層を破壊するなら、古い資本主義が現われてくるであろう。古い資本主義をともなわない純一の帝国主義があるというような見地をとることは、希望を現実ととりちがえることを意味する。

　これは、きわめておちいりやすい自然な誤りである。また、もしわれわれが資本主義を徹底的につくりかえた純一の帝国主義に当面しているのなら、われわれの任務はいまの十万倍もたやすくなろう。それなら、すべてのものが金融資本ただ一つに従属させられている体制ができていたであろう。その場合には、上層を取りのぞいて、あとに残るものをプロレタリアートの手に引き渡すだけでよかったであろう。これは非常に愉快なことであろうが、現実にはそういうものは存在しない。現実の発展は、これとはまったく違った行動をとらなければならないようなかたちをとっている。帝国主義は資本主義のうえに立つ上部構造である。帝国主義が崩壊するときに、われわれが当面するのは、上層が破壊され、基底が露出した状態である。だからこそ、われわれの綱領が正しいものでありたいなら、それはあるがままのものを言わなければならないのである。存在するものは、幾多の分野で帝国主義に成長した古い資本主義である。それの傾向は、もっぱら帝国主義的なものである。根本的な問題は、もっぱら帝国主義の見地からのみ検討することができる。内政上、外政上の大きな問題で、この傾向の見地を離れて解決できるような問題は、一つもない。だが、綱領がここで述べているのは、そのことではない。現実には、古い資本主義の広大な基盤が存在している。帝

国主義という上部構造があり、この上部構造が戦争を引きおこし、その戦争からプロレタリアートの執権の端緒が生じた。諸君はこういう局面から抜けだすことはできないだろう。この事実が、全世界におけるプロレタリア革命の発展の速度そのものの特徴を規定しており、それは今後多年にわたってひきつづき事実であろう。

西ヨーロッパの革命は、おそらく、もっとすらすらとすすむであろうが、それでも、全世界を改造するためには、大多数の国々を改造するためには、きわめて多くの歳月を要するであろう。だが、このことは、いまわれわれがとおっている過渡期には、この寄木細工的な現実から抜けだすわけにはいかないことを、意味している。異質的な諸部分からなるこの現実が、どれほどスマートでないとしても、それを捨てさるわけにはいかないし、たとえ一粒でもそれから取りのぞくわけにはいかない。いまの書き方と違ったふうに書かれた綱領は、まちがったものになるであろう。

われわれは執権に到達したと、われわれは言う。しかし、どういうふうにしてこれに到達したかを知らなければならない。過去はわれわれを押えつけ、何千という手でわれわれをつかんで、一歩も前進させないか、でなければ、現在われわれがやっているように、まずいやり方ですすむほかないようにしている。だから、いまわれわれがどういう状態におかれようとしているかを理解するためには、われわれがどういうふうにすすんできたか、なにがわれわれを社会主義革命そのものにみちびいたかを、言わなければならないのである。われわれをここまでみちびいたものは帝国主義であり、商品経済の原始的な諸形態にある資本主義であった。こうしたことをすべて理解しなければならない。というのは、たとえば中農にたいする態度のような問題は、現実を考慮にいれなければ解決できないだろうからである。じっさい、純帝国主義的な資本主義の時代に、どこから中農がやってきたのだろうか？　単純な資本主義の国にさえ、中農は存在していなかったではないか。もっぱら帝国主義とプロレタリアートの執権の見地に立って、このほとんど中世的な現象（中農）にたいするわれわれの態度の問題を解決しようとすれば、全然つじつまのあわないことになり、さんざんな目にあうだろう。だが、もしわれわれが中農にたいする自分の態度を変えなければならないのなら、――それなら、中農がどこからやってきたか、中農とはどういうものかを、理論的部分のなかでも述べるようにつとめたまえ。中農は小商品生産者である。これは資本主義のイロハであるが、われわれはまだこのイロハから抜けだしていないのだから、これをぜひ言っておかなければならない。このことをほったらかして、「われわれはすでに金融資本

主義を研究したのに、なぜイロハを勉強しなければならないのか！」と言うのは、このうえなくふまじめである。

民族問題についても、私は同じことを言わなければならない。ここでも、同志ブハーリンは希望を現実ととりちがえている。彼は言う。民族自決権を承認するわけにはいかない。民族といえば、ブルジョアジーとプロレタリアートがいっしょになったものである。われわれプロレタリアが、どこかの軽蔑すべきブルジョアジーの自決権を承認するとは！　これはまったく理屈に合わない！　と。いや、失礼だが、それは現実と合致しているのである。もし君がこれを削除するなら、空想的なものができあがるであろう。君は、民族の内部に生じている分化の過程を、プロレタリアートとブルジョアジーが分離する過程を、引合いにだしている。しかし、この分化がどういうふうにすすむかを、もっと見ようではないか。

たとえば、ドイツをとってみたまえ。これは、先進資本主義国の模範であって、資本主義の、金融資本主義の組織性の点では、アメリカにまさっていた。ドイツは、多くの面で、技術と生産の面で、政治の面でアメリカに劣っていたが、金融資本主義の組織性、独占資本主義の国家独占資本主義への転化という点では、アメリカにまさっていた。これは模範国であると思われよう。ところで、このドイツでどういうことが起こっているだろうか？　ドイツのプロレタリアートはブルジョアジーから分化したであろうか？　いな！　報道によれば、労働者の大多数がシャイデマン派に反対しているのは、いくつかの大都市だけだというではないか。だが、どうしてそんなことになったのか？　これは、スパルタクス派が、あの、なにもかもごっちゃにして、ソヴェト制度と憲法制定議会とを結婚させようと望んでいる、じつにいまいましいドイツのメンシェヴィキ、独立派と、同盟を結んだからである！　これが、この当のドイツで起こっていることなのだ！　しかも、これが先進国なのだ。

同志ブハーリンは言う。「なぜ民族自決権がわれわれに必要なのか？」と。私は、一九一七年の夏に同志ブハーリンが最小限綱領を削除し、最大限綱領だけを残すように提案したときに、私が彼に反対して言ったことを、繰りかえさなければならない。そのとき私は答えた。「戦いの門出に自慢するな。戦いのあとで自慢せよ。」[三]われわれが権力を獲得し、そのうえしばらく様子を見てから、そうしよう、と。さて、われわれは権力を獲得したし、しばらく様子も見た。いまは私は自慢することに同意する。われわれは完全に社会主義建設のまっただなかにあるし、われわれを脅かした最初の襲撃を撃退した。――いまでは自慢するのは

適当であろう。民族の自決権についても、これと同じである。「私は勤労諸階級の自決権だけを承認したい」と、同志ブハーリンは言う。つまり、君は、現実にはロシアを除いてはただ一つの国でも達成されていないものを承認しようというのだ。これは滑稽である。

フィンランドを見たまえ。フィンランドは、わが国よりも進んだ、いっそう文化的な民主国である。そこでは、プロレタリアートの分離、分化の過程が進んでいる。独特の仕方で、わが国にくらべてずっと苦しい仕方で進んでいる。フィンランド人はさきにドイツの独裁(ディクタツーラ)を体験したが、いまや連合国の独裁(ディクタツーラ)を体験している。だが、われわれが民族自決権を承認したため、そこでの分化の過程は容易になっている。私は、フィンランドのブルジョアジーの代表者で絞刑吏の役を演じたスヴィンフヴド――ロシア語に翻訳すると、これは「豚の頭」という意味である――に、スモーリヌィで国書を手渡さなければならなかったときの光景を、よくおぼえている。(一三三) スヴィンフヴドはあいそよく私の手を握りしめ、私たちはあいさつをとりかわした。それはなんといやなことだったろう！　だが、そうしなければならなかったのである。なぜなら、その当時このブルジョアジーは、人民をあざむいており、モスカーリ(一三四)、排外主義者、大ロシア人がフィンランド人の息の根を止めたがっていると言って、勤労者をあざむいていたからである。われわれはそうしなければならなかった。

そして、きのうはこれと同じことを、バシキール共和国にたいしてもしなければならなかったではないか(一三五)？　同志ブハーリンが「ある者についてはこの権利を承認してもよい」と言ったとき、彼のこのリストには、ホッテントット人やブッシュメン人やインド人がはいっていたことを、私はわざわざ書きとめておいた。私は、こういうふうに数えあげられるのを聞きながら、考えた。同志ブハーリンがちょっとしたことを一つ忘れたのは、すなわちバシキール人を忘れたのは、どうしてだろうか、と。ロシアにはブッシュメン人はいないし、ホッテントット人についても、彼らが自治共和国を要求したいということは聞いていないが、わが国にはバシキール人、キルギス人、その他幾多の民族がいるではないか。彼らに自決権の承認を拒否することはできない。旧ロシア帝国の国境内に住む諸民族のどれにたいしても、われわれはこれを拒否することはできない。バシキール人が搾取者を打ち倒し、われわれは彼らがそうするのを助けるという場合をさえ仮定しよう。だが、これは、変革の機が完全に熟した場合にしかやれないことである。また、われわれが干渉したために、われわれが促進すべき当のプロレタリアートの分化過程をかえって遅らせること

のないよう、慎重にそれをやらなければならない。いまだにムラー(二〇)の影響下にあるキルギス人、ウズベク人、タジク人、トルクメン人のような民族にたいして、われわれはいったいなにをすることができるだろうか？　わがロシアでは、長いあいだ坊主というものをつぶさに経験してきたので、住民はわれわれが坊主を打倒するのに協力した。しかも、非教会結婚についての布告がまだどんなにわずかしか実行されていないか、諸君はご存知である。われわれは、これらの民族のところに行って、「諸君の搾取者どもを倒そう」と言えるだろうか？　われわれはそうすることはできない。というのは、彼らはまったく自分のところのムラーに隷属しているからである。この場合には、われわれは、その民族が成長し、プロレタリアートとブルジョア分子とが分化するまで待たなければならない。かならずそうなるにきまっているからである。

同志ブハーリンは待とうとしない。彼はあせっている。「どういうわけだ！　われわれ自身ブルジョアジーを打倒し、ソヴェト権力とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とを宣言したのに、どういうわけでそんなふうにふるまわなければならないのか！」と。こういうことばは、人を鼓舞する呼びかけのはたらきをするし、われわれのすすむべき道についての指示をふくんではいるが、われわれが綱領のなかでこのことを宣言するにとどめるなら、綱領ではなくて、宣言文ができあがるであろう。われわれは、ソヴェト権力とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を宣言し、ブルジョアジーにたいする徹底的な軽蔑を宣言することはできるが——彼らはそういう軽蔑を千度でもうけてしかるべきだが——、綱領では、現にあるものを絶対に正確に書かなければならない。そうしてこそ、われわれの綱領は、争う余地のないものになるのである。

われわれは階級的な立場を厳守する。われわれが綱領に書くことは、われわれが民族自決一般について書いていた時期以後に、現実に起こったことの承認である。その当時には、まだプロレタリア共和国はなかった。プロレタリア共和国が出現したときに、またそれが出現するのにおうじて、われわれはここに書いたことを書けるようになった。すなわち「ソヴェト型にもとづいて組織された諸国家の連邦的結合」と。ソヴェト型といっても、ただちに、ロシアに存在しているようなソヴェトということではないが、ソヴェト型は国際的なものになりつつある。われわれが言えるのは、このことだけである。これを一歩でもこえてすすむこと、これを髪の毛一筋でもこえてすすむことは、すでにまちがいであろうし、したがって綱領には不適当である。

われわれは言う。その民族が、中世的制度からブルジョア民主主義にいたり、そしてブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義にいたる道のどの段階にいるかを、考慮にいれなければならない、と。これは絶対に正しい。ホッテントット人やブッシュメン人をとりたてて言うまでもなく、すべての民族が自決権をもっている。地球の全人口の大多数、おそらく一〇分の九、もしかすると九五％が、この特徴づけにあてはまるであろう。なぜなら、すべての国が、中世的制度からブルジョア民主主義への途上にあるか、そうでなければブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義への途上にあるからである。これはまったく避けることのできない道である。これ以上のことは言えない。なぜなら、それはまちがいだろうからである。あるがままのものではないだろうからである。民族の自決を削除して、勤労者の自決をもちだすことは、まったくまちがっている。なぜなら、そういう問題の立て方は、各民族の内部の分化が、どのような困難をともないながら、どれほど曲りくねった道をとおってすすんでゆくかを、考慮していないからである。ドイツではわが国とは違ったゆき方ですすんでいる。ある点ではもっと急速に、ある点ではもっとゆっくりとした、血なまぐさいゆき方ですすんでいる。わが国では、ソヴェトと憲法制定議会との組合せというようなとほうもない考えをうけいれた党は、一つもなかった。だが、われわれは、これらの民族とならんで生活してゆかなければならない。シャイデマン派は、われわれがドイツを征服したがっていると、いまなお言っている。もちろん、これは笑うべきことであり、でたらめである。しかし、ブルジョアジーには彼ら自身の利益があり、何億もの部数で、全世界にむかってそう叫びたてている彼ら自身の新聞がある。そしてウィルソンは、自分の利益からそれを支持している。ボリシェヴィキは大軍をもっており、征服の方法によって自分のボリシェヴィズムをドイツに移し植えたがっている、というのである。ドイツの最もすぐれた人々——スパルタクス派——がわれわれに教えてくれたところでは、ボリシェヴィキのところではどんなにひどいありさまか、見たまえ、と言って、ドイツの労働者を共産主義者にけしかけているということである。だが、われわれのところではたいへんうまくいったとは、われわれも言うわけにはいかない。そこで、ドイツにおけるわれわれの敵は、ドイツにプロレタリア革命が起これば、ロシアと同じような無秩序におちいることになるのだという議論で、大衆にはたらきかけている。わが国の無秩序は、われわれの慢性病である。わが国にプロレタリア執権（ディクタツーラ）をつくりあげようとして、われわれは、とほうもない困難とたたかっている。ブルジョアジー

または小ブルジョアジーが、あるいはドイツの一部の労働者さえが、「ボリシェヴィキは自分の制度を力ずくで打ちたてようと思っている」というこのおどし文句に影響されているあいだは、「勤労者の自決」という定式を用いたところで、事態は改善しないであろう。ボリシェヴィキは自分のところえらばぬ制度を押しつけようとしているのだ――まるで赤軍の銃剣でそれをベルリンにもちこむことができるかのようだ――と言う口実を、ドイツの裏切り社会主義者たちにあたえないような仕方で、われわれは事をととのえなければならない。だが、民族自決の原則を否認する立場をとれば、そういう口実をあたえることになりかねない。

われわれの綱領は勤労者の自決を論じるべきではない。それはまちがっているからである。綱領は、現にあるものを言わなければならない。諸民族が、中世的制度からブルジョア民主主義にいたり、そしてブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義にいたる道のさまざまな段階にいる以上、われわれの綱領のこの命題は絶対に正しい。われわれは、この道をすすむにあたってきわめて多くのジグザグを経てきた。どの民族も自決権を手にいれなければならない。そして、それが勤労者の自決を促進するのである。フィンランドでは、プロレタリアートとブルジョアジーとが分離する過程は、すばらしくはっきりと、力づよく、深くすすんでいる。そこでは、どのみち万事わが国と同じようにはすすまないであろう。もしわれわれが、フィンランド民族などは承認しない、勤労大衆だけを承認すると言えば、それはまったくばかげた言い草になる。現にあるものを承認しないわけにはいかない。それはいやおうなしに自分を承認させるであろう。プロレタリアートとブルジョアジーとの分離は、国が違えばそれぞれ独特の道をとおっておこなわれる。この道では、われわれはきわめて慎重に行動しなければならない。さまざまな民族にたいして慎重にふるまうことが、とくに必要である。ある民族の不信を買うことほど、悪いことはないからである。ポーランド人のあいだでも、プロレタリアートの自決は進行している。ここにワルシャワ労働者代表ソヴェト〔三〕の構成についての最近の数字がある。それによると、ポーランドの裏切り社会主義者は三三三人、共産主義者は二九七人である。これでわかるように、われわれの革命暦によれば、ポーランドの十月はもう遠くはない。これは、一九一七年の八月か九月である。しかし、第一に、すべての国がボリシェヴィキの革命暦にしたがって生活しなければならないという布告はまだ出ていないし、またそういう布告が出されても、実行されはしないであろう。また、第二に、わが国の労働者よりも進んでいて、いっそう文化的なポーランドの労働者の多数者が

社会祖国防衛主義、社会愛国主義の見地に立っているのが、現状である。時機を待たなければならない。こういう場合に、勤労大衆の自決を語ってはならない。われわれは、そういう分化を宣伝しなければならない。われわれはそれをやっているが、しかし、ポーランド民族の自決をただちに承認しないわけにいかないことは、一点の疑いもない。これははっきりしている。ポーランドのプロレタリア運動は、われわれの運動と同じ道をすすんでおり、プロレタリアートの執権にむかってすすんでいるが、ロシアと同じやり方ですすんでいるわけではない。ところが、人々は、いつもポーランド人を抑圧してきたモスカーリ、大ロシア人が共産主義という名目に隠れて、自分たちの大ロシア排外主義をポーランドにもちこもうとしていると言って、ポーランドの労働者をおどしつけているのである。共産主義は暴力によって植えつけられるものではない。私がポーランドの共産主義者の最もすぐれた同志のひとりにむかって、「君たちは違ったやり方をするでしょう」と言ったとき、彼は私にこう答えた。「いや、われわれも諸君と同じことをやるが、ただもっとうまくやります」と。こういう論法にたいしては、私はまったくどんな異議もとなえようがなかった。われわれよりももっとうまくソヴェト権力をつくろうという、つつましい願いをみたす可能性をあたえなければならない。彼らのところの道がいくらか独特のものであることを、考慮にいれないわけにはいかないし、また「民族自決権打倒！　われわれは勤労大衆にたいしてだけ自決権をあたえる」などと言ってはならない。この自決は、非常に複雑で困難な道をすすんでいる。ロシア以外には、どこにも自決はおこなわれていない。また、他の国々ではあらゆる発展段階が予想されるのであるから、モスクワから指令などださないことが必要である。この提案が原則的に採用できないという理由は、以上のとおりである。

われわれのあいだできめた計画によって、私が説明することになっている他の諸問題に移ろう。私が第一位においたのは、小所有者と中農の問題である。この問題について第四七項につぎのように言っている。

「中農にたいするロシア共産党の政策は、彼らを徐々に、計画的に社会主義建設の活動に引きいれることにある。党は、中農を富農から切り離すこと、中農の必要に注意ぶかい態度をとって彼らを労働者階級の味方に引きいれることを自己の任務とするが、そのさい彼らの後進性にたいしては、けっして弾圧の方策によってではなく、思想的はたらきかけの方策によってたたかい、彼らの切実な利害にふれるあらゆる場合に、彼らとの実務的な協定に達することにつとめ、社会主義的改造の実施方法を

決定するにあたっては、彼らに譲歩する。」

私の考えでは、ここではわれわれは、社会主義の創始者たちが中農について何度も言ったことを定式化しているのである。この条項の欠陥は、十分に具体的でないということだけである。この条項の欠陥は、十分に具体的でないということだけである。綱領では、これ以上のことを述べることはまずできないであろう。しかし、大会でとりあげなければならないのは、綱領問題だけではないのであって、中農の問題には、われわれは深い注意、いやがうえにも深い注意をはらわなければならない。われわれの手もとにある資料によれば、若干の地点で起こっている暴動には、ある共通の計画がはっきり認められ、しかもその計画は、三月に総攻撃をおこない、一連の暴動を組織することを決定した白衛派の軍事計画と、はっきり結びついている。大会の幹部会の手もとには、大会の呼びかけの草案があるが、(三)これについてはあとで報告があるはずである。これらの暴動は、左派エス・エルと一部のメンシェヴィキ――ブリャンスクではメンシェヴィキが暴動をおこすために活動した――が白衛派の直接の手先の役割を演じていることを、このうえなくはっきり示している。白衛派の総攻撃、農村の暴動、鉄道交通の切断、――こういうやり方でボリシェヴィキを倒すことができないだろうか、というわけである。この場合、中農の役割は、とくに明瞭に、とくに切実に現われてくる。われわれは、この大会で、中農にたいするわれわれの譲歩的な態度をとくに強調しなければならないだけでなく、また、せめてなにかを直接に中農にあたえるような、できるだけ具体的な一連の方策を考えなければならない。自己保存のためにも、またわれわれのすべての敵とたたかうためにも、こうした方策が切実に必要になっている。これらの敵は、中農がわれわれと彼らのあいだを動揺していることを知っていて、中農をわれわれから引き離そうとつとめている。現在われわれは、膨大な予備軍をもつ状態にある。ポーランドの革命も、ハンガリーの革命も高まりつつあり、しかもきわめて急速に高まりつつあることを、われわれは知っている。これらの革命は、われわれにプロレタリア的な予備軍を供給し、われわれの状態を楽にし、われわれのプロレタリア的な基盤――わが国ではそれは弱い――を大いに補強してくれるであろう。これは、ここ数ヵ月のうちに起こるかもしれないが、それがいつ起こるかをわれわれは知らない。いま危機的な瞬間がやってきたことを、諸君は知っている。だから、中農の問題はいまや非常に大きな実践的意義をもつようになっているのである。

つぎに、協同組合の問題について述べたい。これは、われわれの綱領の第四八項である。この箇条はある程度古くさくなっている。われわれが委員会でそれを書いたときに

は、わが国に協同組合は存在していたけれども、消費コミューンはなかった。だが、その数日後に、あらゆる種類の協同組合を単一の消費コミューンに合同させる布告(二〇)が採択された。この布告が公布ずみかどうか、また本大会の出席者の大多数がこれを知っているかどうか、私は知らない。もしまだ公布されていないようなら、あすかあさってのうちにこの布告は公布されるであろう。この点ではこの条項はすでに古くさくなっているが、それにもかかわらず、これは必要であると、私には思われる。なぜなら、われわれがみなよく知っているように、布告と実施とのあいだにはかなりの距離があるからである。われわれはすでに一九一八年の四月以来、協同組合についていろいろ苦労してきた。そして、かなりの成功をおさめはしたが、それはまだ決定的な成功ではない。われわれは、ときとして、きわめて大がかりに住民を協同組合に組織することに成功したので、すでに農村人口の九八%が組織されている郡も多い。しかし、資本主義社会の当時から存在しているこれらの協同組合は、骨の髄までブルジョア社会の精神がしみこんでいて、メンシェヴィキや、エス・エルや、ブルジョア専門家に率いられている。われわれはまだこれらの協同組合をわれわれに服従させることができなかったし、その点ではわれわれの任務はまだ解決されずにある。われわれの布告は、消費コミューンを創設する方向に一歩をすすめるもので、ロシア全土のあらゆる種類の協同組合の合同を命じている。しかし、この布告のあとでも、たとえそれが完全に実施されたとしてさえ、未来の消費コミューンの内部には、労働者協同組合という自治的な部分が残るであろう。なぜなら、この問題について実践的な知識をもっている労働者協同組合の代表者たちがわれわれに語り、また証明したところによれば、より高度に発展した組織としての労働者協同組合は、必要にこたえて活動するようになったものなので、したがって保存されなければならないからである。協同組合の問題については、わが党内に意見の相違や論争がすくなからずあったし、協同組合で働くボリシェヴィキとソヴェトで働くボリシェヴィキとのあいだに摩擦があった。原則的にいえば、この問題は次のような趣旨で解決されなければならないことは、疑いないと思われる。すなわち、この機構は、資本主義が大衆のあいだにつくりあげた唯一の機構として、いまでも原始的資本主義の段階にある農村大衆のあいだで活動している唯一の機構として、ぜひとも保存し、発展させなければならず、どんな場合にも放棄してはならない、ということである。この方面での任務は困難である。というのは、協同組合は、たいていの場合に、ブルジョア専門家を、しばしば正真正銘の白衛派を、指導者と

しているからである。このため、彼らにたいする憎しみ、正当な憎しみが生まれており、このため、彼らにたいする闘争が生まれている。だが、もちろん、この闘争はたくみにおこなわなければならない。協同組合活動家の反革命的な意図は阻止しなければならないが、しかし、それが協同組合機構にたいする闘争になってはならない。これらの反革命的な活動家を切り離すとともに、機構そのものはわれわれに服従させなければならない。ここでの任務は、ブルジョア専門家にたいする任務とまったく同じである。これは私が論じたいと思っているもう一つの問題である。

ブルジョア専門家の問題は、摩擦と意見の相違をすくなからず引きおこしている。最近私がペトログラード・ソヴェトで演説したおり、私の手もとにさしだされた質問票のなかに、賃金率の問題にかんするものがいくつかあった。私にたいする質問はこうであった。いったい社会主義共和国で三〇〇〇ルーブリも払ってよいのか？と。われわれは、実質上、この問題を綱領にふくめておいた。というのは、これにもとづく不満はかなりひろまっているからである。ブルジョア専門家の問題は、軍隊でも、工業でも、協同組合でも、いたるところで起こっている。これは、資本主義から共産主義への過渡期における非常に重要な問題である。われわれは、ブルジョア科学技術の手段を用いて、共産主義をもっと大衆に近づきやすいものにしたときにはじめて、共産主義を建設することができる。これ以外の方法では、共産主義社会を建設することはできない。そして、こうして共産主義を建設するためには、ブルジョアジーの手から機構を取り上げて、これらの専門家の全員を活動に引きいれなければならない。われわれは、この問題の徹底的な解決をはかるために、綱領のなかでわざわざくわしくそれを説明しておいた。ロシアの文化上の後進性がなにを意味しているか、この後進性がソヴェト権力――それは、原則上、はかりしれないほど高度のプロレタリア民主主義をもたらし、全世界にこの民主主義の模範を示したのであるが――をどんなものにしているか、この非文化性がどんなにソヴェト権力の意義を低め、官僚主義をよみがえらせているか、われわれはよく知っている。ソヴェト機構は、額面からすればすべての勤労者にとって近づきやすいものであるが、われわれみなが知っているように、実際には、だれにとっても近づきやすいわけではけっしてない。そして、これは、ブルジョアジーのもとでそうであったように、法律に妨げられているためではけっしてない。それどころか、われわれの法律は、そうなるのを助けている。しかし、この場合には、法律だけでは足りない。それには、大々的な教育活動、組織活動、文化活動が必要である。これは、

法律によって手ばやくやってのけることはできず、それには長期にわたる膨大な活動が必要である。このブルジョア専門家の問題は、本大会で完全に明確に解決しなければならない。そういう解決があたえられれば、疑いもなくこの大会に注目している同志諸君は、大会の権威にたよることができ、われわれがどういう困難にゆきあたっているかを見てとることができるであろう。それは、一歩ごとにこの問題につきあたっている同志たちを助けて、せめて宣伝活動になりと参加するようにならせるであろう。

スパルタクス派の代表としてこのモスクワにきて、大会に列席している同志たちがわれわれに語ったところでは、工業が最も発達し、労働者のあいだにスパルタクス派の影響が最も強い西ドイツでは、スパルタクス派はまだ勝利をおさめていないのに、非常に多くの巨大企業の技師や工場長がスパルタクス派のところにやってきて、「諸君といっしょにやってゆこう」と語ったそうである。わが国では、そういうことは起こらなかった。明らかに、ドイツでは、労働者の文化水準がいっそう高いことや、技術職員のプロレタリア化がいっそうすすんでいることや、おそらく、その他のわれわれの知らない幾多の原因によって、わが国といくぶん違った関係が生まれているのである。

いずれにしても、ここに、われわれがさらに前進するのをはばんでいる主要な障害の一つがある。われわれは、いますぐ、他の国々の支持を待たずに、ただちに、いますぐ、生産力を高めなければならない。ブルジョア専門家の手を借りずには、そうすることはできない。このことはきっぱりと言っておかなければならない。もちろん、これらの専門家の大多数は、骨の髄までブルジョア的な世界観がしみこんでいる。彼らを同志的協働の雰囲気で、労働者コミサールや共産党細胞でとりまき、逃げだせないような状態に彼らをおかなければならないが、また彼らが資本主義の当時よりも良い条件で働けるようにしてやらなければならない。なぜなら、ブルジョアジーに教育されたこの層は、そうしなければ働こうとはしないだろうからである。一つの層全体を棍棒で強制して働かせることはできない。――われわれはこのことを十分経験した。彼らが反革命に積極的に参加しないように強制し、白衛派の檄に手をさしのべることをこわがるようにおどしつけることはできる。この点では、ボリシェヴィキは精力的に行動している。これならやれるし、またわれわれはそれを十分にやっている。われわれはみなそうすることを学びとった。しかし、こういう方法で一つの層全体を働かせることは、不可能である。この人々は文化的な活動に慣れており、ブルジョア制度の枠内でこの活動を押しすすめてきた。つまり、巨大な物質的

成果によってブルジョアジーを富ませ、他方プロレタリアートには、それをほんのちょっぴり分けあたえた。だが、ともかくも彼らは文化を押しすすめた。これが彼らの職業であった。いま、文化を尊重するだけでなく、文化を大衆に伝えるのを助けている、組織された先進的な諸層が、労働者階級のなかから進出してくるのを見ているので、彼らはわれわれにたいする態度を変えかけている。プロレタリアートが伝染病とのたたかいで勤労者の自主活動を高めているのを見るとき、医師はわれわれにたいしてまったく違った態度をとる。わが国には、こういうブルジョア的な医師、技師、農業技術者、協同組合活動家の厚い層がある。そして、プロレタリアートがますます広範な大衆をこの仕事に引きいれるのを実地に見るなら、彼らは、ブルジョアジーから政治的に切り離されるだけでなく、精神的にも征服されるであろう。そうなれば、われわれの任務はもっと楽になるであろう。そうなれば、彼らはすすんでわれわれの機構にはいってきて、その一部となるであろう。このためには犠牲をはらう必要がある。このために二〇億ルーブリを払っても、たいしたことではない。この犠牲を恐れるのは、こどもじみたことであろう。なぜなら、それは、われわれの当面している任務を理解していないことを意味するだろうからである。

運輸の乱脈、工業と農業の乱脈は、ソヴェト共和国の存立そのものの土台をそこなっている。ここでは、われわれは、国の総力をあらんかぎりふりしぼる、最も精力的な方策にうったえなければならない。われわれは、専門家にたいして、けちな小姑（こじゅうと）政策をとってはならない。これらの専門家は搾取者の従僕ではない。彼らは文化活動家であって、ブルジョア社会ではブルジョアジーに奉仕していたが、全世界のすべての社会主義者が言ってきたように、プロレタリア社会ではわれわれに奉仕するであろう。この過渡期には、われわれは彼らにできるだけよい生活条件をあたえなければならない。これが最良の政策であろう。これが最も経済的な経営方法であろう。そうしないなら、われわれは、数億ルーブリを節約したため、数十億ルーブリでもつぐなえない大損失をこうむるかもしれないのである。

私が労働人民委員の同志シミットと賃金率の問題で話し合ったとき、彼は次のような事実を指摘した。賃金を均等化するために、われわれは、どこでもなされたことのないほど、またどんなブルジョア国家が数十年かかってもやれないほど、多くのことをやりとげた、と彼は言った。戦前の賃金率をとってみたまえ。雑役工は日に一ルーブリ、月に二五ルーブリもらっていたが、専門家は、——数十万ルーブリもの俸給をとっていた人々は論外として——月に五

〇〇ルーブリもらっていた。専門家は労働者の二〇倍の給料をもらっていたわけである。わが国の現在の賃金率は、六〇〇ルーブリから三〇〇〇ルーブリまでを上下している。そのひらきは五倍にすぎない。均等化のために、われわれは多くのことをしたのである。もちろん、われわれはいま専門家に払いすぎている。しかし、彼らの学問にたいしてすこしばかりよけいに支払うことは、それだけの値うちがあるばかりでなく、ぜひともやらなければならないし、理論的にも必要である。この問題は、綱領のなかで十分くわしく論じられていると思う。この問題をとくに強調しなければならない。この問題は、ここで原則的に解決しなければならないだけでなく、大会参加者が、みなそれぞれの地方に帰ってから、自分の組織への報告や、自分の全活動のなかで、それの実現を確保するようにしなければならない。

われわれはすでに、動揺的なインテリゲンツィアのあいだに大きな転換をもたらすことができた。われわれが、きのうは小ブルジョア諸党を合法化すると言い、きょうはメンシェヴィキやエス・エルを逮捕しているとしても、こういう動揺をつうじて、われわれはまったく明確な方式を実行しているのである。これらの動揺をつうじて、一つのきわめて確固たる方針がつらぬいている。反革命を除去し、ブルジョア的な文化機構を利用するということが、それである。メンシェヴィキは、プロレタリア的な衣裳をまとっているので、社会主義の最も悪質な敵である。だが、メンシェヴィキは非プロレタリア的な層である。この層のとるにたりない表層だけがプロレタリア的で、この層自体は下級インテリゲンツィアからなっている。いまこの層がわれわれの味方に移りつつある。われわれは彼ら全部を、一つの層として受けいれよう。彼らがわれわれのところにやってくるたびに、われわれは言う。「さあどうぞ!」と。こういう動揺が起こるたびに、彼らの一部がわれわれの味方に移ってくる。メンシェヴィキやノーヴァヤ・ジーズニ派(三三)がそうであったし、エス・エルがそうであった。これらの動揺分子のすべてがそうであろう。彼らはまだ長いあいだ足手まといになり、泣き言を言い、一つの陣営から他の陣営へと鞍がえするであろう。それはどうしようもない。しかし、これらすべての動揺をつうじて、われわれは、文化的インテリゲンツィアの層をソヴェト活動家の隊列に受けいれるとともに、白衛派を引きつづき支持する分子を切りすてるであろう。

テーマの分担にしたがって私の受持ちとなっている次の問題は、官僚主義の問題と、広範な大衆をソヴェトの活動に引きいれる問題である。官僚主義についての不平は、ずっとまえからひろまっているし、この不平に根拠があるこ

とは疑いをいれない。官僚主義とたたかう点では、われわれは世界中のどの国家もやらなかったことをやりとげた。骨の髄まで官僚的で、ブルジョアの抑圧機構となっていた機構、どんなに自由なブルジョア共和国においてさえやはりそういうものである機構――この機構をわれわれは根底から破壊した。たとえば、裁判所をとってみたまえ。もっとも、ここでは任務は比較的容易であった。ここでは、新しい機構をつくりだす必要はなかった。なぜなら、勤労諸階級の革命的な法意識にもとづいて裁判をすることは、だれにでもできることだからである。この方面で、われわれはまだけっして最後まで仕事をやりとげていないが、裁判所を本来あるべきようにつくりかえた地方も多い。男ばかりでなく、最も遅れた不動の要素である婦人も、ひとりのこらず参加できるような機関を、われわれはつくりだした。

その他の行政分野の職員は、もっとこちこちの官吏、官僚である。ここでは任務はもっと困難である。われわれは、こういう機構なしに生活することはできない。どの行政部門も、こういう機構にたいする需要を生みだす。ここでは、われわれは、ロシアが資本主義的に十分に発展していなかったために悩んでいる。ドイツでは、明らかに、これをもっと容易に切りぬけることができるであろう。なぜなら、ドイツの官僚機構は多くの訓練を経ていて、そこでは、人民の膏血をしぼることはしぼっても、わが国の役所のように安楽椅子をすりきらせることだけを能とせずに、仕事をするように強制されているからである。われわれは、この古い官僚分子を追いはらい、移しかえたが、やがて彼らを新しい部署につけはじめた。ツァーリズムの官僚がソヴェト機関にはいってきて、官僚主義的なやり方を実行しはじめ、共産主義者に衣がえをし、立身出世の方便としてロシア共産党の党員証を手に入れはじめた。こうして、彼らは、戸口からおっぽりだされたが、窓から這いこんできたのである。ここでなによりも痛感されるのは、文化的な勢力の不足である。これらの官僚を首にすることはできようが、彼らを即座に再教育することはできない。ここでわれわれが当面するのは、なによりもまず組織的、文化的、教育的な任務である。

全住民が統治に参加するときにだけ、われわれは官僚主義と徹底的にたたかい、これにたいして完全な勝利をおさめるまでたたかうことができる。ブルジョア共和国では、これは不可能なばかりか、法律そのものによって妨げられていた。最良のブルジョア共和国でも、それがどんなに民主的な共和国であろうと、勤労者が統治に参加するのを妨げる何千という立法上の障害がある。われわれは、わが国にこれらの障害が残らないようにしたが、いままでのとこ

ろ、勤労大衆が統治に参加できるようにすることには、成功していない。法律以外に、なお文化水準というものがあって、それはどういう法律にも従わせることはできない。この低い文化水準のために、ソヴェトは、その綱領によれば勤労者による統治機関でありながら、実際には、勤労大衆によってではなく、プロレタリアートの先進層による勤労者のための統治機関となっている。

ここでわれわれが当面している任務は、長期の教育によらなければ解決できない任務である。いまはこの任務は、われわれにとってとほうもなく困難である。なぜなら、私が再三指摘するおりがあったように、統治の仕事をしている労働者の層は、法外に、信じられないほど稀薄だからである。われわれは援兵を手にいれなければならない。あらゆる徴候から見て、このような予備力は国内に成長しつつある。旺盛な知識欲と、なによりもまず学校教育以外の方法でえられているすばらしい教育の進歩――勤労大衆の教育の長足な進歩は、すこしも疑う余地がない。この進歩はどんな学校の枠にもおさまらないが、この進歩は絶大である。近い将来に膨大な予備力が生まれ、過労におちいっているプロレタリアートの稀薄な層の人々と交替するであろうことは、あらゆる徴候がこれを物語っている。しかし、いずれにせよ、この面でのわれわれの現状は、きわめて困難である。官僚は打ち破られた。しかし、文化水準が高まっていないので、官僚は以前の地位を占めている。官僚を押しのけることは、プロレタリアートと農民をこれまでよりはるかに広範に組織するとともに、労働者を統治に引きいれる方策をほんとうに実行することによってしかできない。それぞれの人民委員部の分野でとられているこういう方策については、諸君はみな知っておられるので、それを論じることはやめにしよう。

私がふれなければならない最後の問題は、プロレタリアートの指導的役割と選挙権の剝奪とについてである。わが国の憲法は、農民にたいするプロレタリアートの優位を認め、また搾取者から選挙権を剝奪している。[三] 西ヨーロッパの純粋民主主義者たちが最も攻撃したのも、この点である。われわれは彼らに、君たちはマルクス主義の最も基本的な命題を忘れている、君たちの問題にしているのはブルジョア民主主義だが、われわれはプロレタリア民主主義に移ったのだということを、君たちは忘れている、と答えてきたし、いまも答えている。労働者と貧農を国家統治に引きいれるためにこの数ヵ月のあいだにソヴェト共和国が労働者と貧農のためにやりとげたことの一〇分の一でもやった国は、世界中に一つもない。これは絶対的な真実である。紙のうえのものでない、真の民主主義のために、労働者と農

民を引きいれるためにわれわれがやりとげたことは、最良の民主的共和国が数百年のあいだにやったことのない、またやれなかったほどのものであることは、だれひとり否定しようとしないであろう。このことがソヴェトの意義を決定したのであり、このおかげで、ソヴェトは万国のプロレタリアートのスローガンとなったのである。

しかし、このことは、われわれが大衆の文化水準の不十分さにつまずいているという事実をなくすものではけっしてない。ブルジョアジーから選挙権を剝奪する問題を、われわれが絶対的な見地から考察したことはけっしてない。なぜなら、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）は、一歩ごとにブルジョアジーを弾圧するであろうが、ブルジョアジーから選挙権を剝奪せずにもすむことは、理論的に完全に認めうることだからである。これは理論的に完全に考えられる。われわれはまた、われわれの憲法を他の国々の模範として提出しているのでもない。われわれはただ、ブルジョアジーの弾圧をぬきにして社会主義への移行を考える者は、社会主義者ではない、と言うだけである。しかし、階級としてのブルジョアジーを弾圧することは必須であっても、彼らから選挙権や平等を奪うことは、必須ではない。われわれはブルジョアジーの自由を望まないし、搾取者と被搾取者との平等を認めはしないが、綱領では、労働者と農民のあいだの不平等というような種類の方策は、けっして憲法の命じるところではないというふうに、この問題を考察している。憲法は、これらの方策が実行されたあとで、それを書きこんだのである。ソヴェトの憲法は、ボリシェヴィキがつくったものでさえない。それは、ボリシェヴィキ革命のまえに、メンシェヴィキとエス・エルがつくったものであり、それが彼ら自身をぶんなぐることになったのである。彼らは実生活がつくりあげたとおりに憲法をつくった。プロレタリアートの組織化は、農民の組織化よりもずっと急速にすすみ、このことが労働者を革命の支柱にし、彼らに事実上の優位をあたえたのである。今後の任務は、これらの優位からしだいにその平等化にむかってすすむことである。十月革命のまえにもあとにも、だれもブルジョアジーをソヴェトから追いだしはしなかった。ブルジョアジーは自分でソヴェトから出ていったのである。

ブルジョアジーの選挙権については、事情はこういうふうになっている。われわれの任務は、この問題をきわめて明瞭に提起することである。われわれは、けっして自分の行動を言いわけしているのではなく、ありのままの事実をまったく正確に列挙しているのである。われわれが指摘しているように、われわれの憲法がこの不平等を実施せざるをえなかったのは、文化水準が低いためであり、われわれ

の組織が弱いためである。しかし、われわれはこれを理想状態にまつりあげはしない。反対に、綱領のなかで、党は、よりよく組織されたプロレタリアートと農民とのあいだのこの不平等をなくすために不断に努力することを、自分の義務としている。われわれは、文化水準を高めることができしだい、この不平等を廃止するであろう。そのときには、われわれはこういう制限なしにもやってゆけるようになるであろう。革命から約一七ヵ月ほどしかたっていないいまでも、すでにこれらの制限は実践上きわめてわずかな重要性しかもっていない。

同志諸君、以上が、綱領の一般的審議にあたって立ちいって論じ、そのいっそうの審議を討論にゆだねる必要があると私の考えた主要な諸問題である。(拍手)

『プラウダ』第六二号、一九一九年三月二二日
全集、第五版、第三八巻、一五一―一七三ページ所収
邦訳全集、第二九巻、一五二―一七五ページ所収

第三インタナショナルとその歴史上の地位

「協商」国の帝国主義者は、ロシアを封鎖して、ソヴェト共和国を、伝染病の巣として資本主義世界から切り離そうとつとめている。この連中は、自国の制度の「民主主義」を自慢にしているのだが、自分を笑いものにしていることに気がつかないほど、ソヴェト共和国にたいする憎しみで目がくらんでいる。考えてもみたまえ。歯まで武装し、軍事的に全地球を全一的に支配している、進んだ、最も文明的で「民主的な」諸国が、荒廃し、飢え、遅れた、彼らの主張によればなかば野蛮だとさえいう国からやってくる思想の伝染病を、火のように恐れるとは!

この矛盾ひとつだけでも、万国の勤労大衆の目をひらかせ、クレマンソー、ロイド・ジョージ、ウィルソンといった帝国主義者や彼らの政府の偽善を暴露する助けとなって

いる。

だが、われわれを助けているのは、資本家がソヴェトにたいする憎悪で目がくらんでいることだけではない。さらに、彼らがたがいにいがみあって、たがいに相手の足をすくいあっていることも、われわれの助けになっている。彼らは、総じてソヴェト共和国についての真実の報道を、とくにソヴェト共和国の公文書がひろまるのを、なによりも恐れて、本式の沈黙の陰謀を結んでいる。ところが、フランスのブルジョアジーの主要な機関紙『時代』（『タン』）が、モスクワに第三共産主義インタナショナルが創立されたという報道をのせた。

われわれはこのことで、フランス・ブルジョアジーの主要な機関紙、フランスの排外主義と帝国主義のこの指導者に、うやうやしく感謝をささげる。われわれは、同紙がこんなにもうまく、こんなにもたくみにわれわれを助けてくれていることにたいする感謝の表明として、『タン』紙に公式のあいさつを送ってもよいと考えている。

『タン』紙がわれわれの無線電信をもとにしてその報道記事をつくったやり方からみて、この金持の機関紙をうごかした動機が完全にはっきりわかる。まあ見なさい、あなたが交渉の相手として認めているのがどんな手合いだかを！　同紙はこう言って、ウィルソンにあてこすり、彼をちくりと刺したかったのだ。金持の注文でものを書いている賢人たちは、自分がボリシェヴィキをだしにしてウィルソンをおどしつけていることが、勤労大衆の目にはボリシェヴィキの広告になるということに、気がつかない。かさねて、フランスの百万長者の機関紙にうやうやしく感謝しよう！

第三インタナショナルが創立されたのは、次のような世界情勢のもとにおいてであった。すなわち、「協商」国の帝国主義者や、ドイツのシャイデマンら、オーストリアのレンナーらのような資本主義の従僕たちがどんなに禁止しようと、どんなにけちくさい、あさましい術策を用いようと、このインタナショナルについての報道とそれへの共感が全世界の労働者階級のあいだにひろがるのを妨げることは不可能なような、そういう世界情勢である。この情勢をつくりだしたのは、いたるところで、日ごとにではなく時時刻々に、明らかに成長しつつあるプロレタリア革命である。この情勢をつくりだしたのは、真に国際的な運動となるだけの力をすでにかちとった勤労大衆のあいだのソヴェト運動である。

第一インタナショナル（一八六四―一八七二年）は、資本にたいする労働者の革命的強襲を準備するための国際的な労働者組織の土台をすえた。第二インタナショナル（一

八八九―一九一四年）は、幅のひろがったプロレタリア運動の国際組織であったが、そのことは、革命的水準の一時的な低下を、日和見主義の一時的な強化を、ともなわずにはいなかった。それは、けっきょく、このインタナショナルの恥ずべき崩壊にみちびいた。

第三インタナショナルは、日和見主義と社会排外主義にたいする多年にわたる闘争、とくに戦争中の闘争の過程が幾多の国に共産党の結成をもたらした一九一八年に、事実上創立された。第三インタナショナルの正式の創立は、一九一九年三月のモスクワにおけるその第一回大会でおこなわれた。そして、このインタナショナルの最大の特徴、その使命は、マルクス主義の遺訓を果たし、実行に移し、社会主義と労働運動の数百年来の理想を実現することにある。――第三インタナショナルのこの最大の特徴は、新しい、第三の「国際労働者協会」が、すでに現在、ある程度までソヴェト社会主義共和国連邦と一致するようになった点に、ただちに現われた。

第一インタナショナルは、社会主義のためのプロレタリアートの国際的闘争の土台をすえた。

第二インタナショナルは、運動が幾多の国で広範に、大衆的にひろまる地盤を準備した時代であった。

第三インタナショナルは、第二インタナショナルの活動の果実を摂取し、その日和見主義的、社会排外主義的、ブルジョア的および小ブルジョア的な汚点を取りのぞき、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を実現しはじめた。

世界で最も革命的な運動、資本のくびきをくつがえすためのプロレタリアートの運動を指導する諸党の国際的同盟は、いまでは、かつてなかったほど堅固な基盤をもつにいたった。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）、資本主義にたいするプロレタリアートの勝利を国際的規模で体現している、いくつかのソヴェト共和国がそれである。

第三共産主義インタナショナルの世界史的意義は、マルクスの最も偉大なスローガン、社会主義と労働運動の数百年にわたる発展を総括するスローガン、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）という概念に言いあらわされるスローガンを、現実化しはじめたことにある。

この天才的な予見、この天才的な理論は、現実となりつつある。

いまでは、このラテン語は、現代ヨーロッパのすべての国民の言語に――そればかりか、世界のすべての言語に、とりいれられている。

世界史の新しい時代が始まった。

人類は、奴隷制の最後の形態、すなわち資本主義的奴隷制、または賃金奴隷制をふりすてつつある。

人類は、奴隷制から自己を解放することによって、はじめて真の自由に移ろうとしている。

プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を実現し、ソヴェト共和国を組織した最初の国が、ヨーロッパで最も遅れた国の一つであったというようなことが、いったいどうして起こったのか？　ロシアが遅れていること、そのロシアが民主主義の最高の形態へ、ブルジョア民主主義をとびこえてソヴェト民主主義またはプロレタリア民主主義へ「飛躍した」こと、この二つのあいだのこの矛盾、ほかならぬこの矛盾こそ、(日和見主義的な習慣と俗物的な先入見が大多数の社会主義指導者を圧迫していることのほかに) 西欧でソヴェトの役割の理解をとくに困難にし、あるいは遅らせた原因の一つであったと言って、おそらくまちがいはないであろう。

全世界の労働者大衆は、プロレタリアートの闘争の武器としての、またプロレタリア国家の形態としての、ソヴェトの意義を本能的に把握した。ところが、日和見主義に腐敗させられた「指導者たち」は、ブルジョア民主主義を「民主主義」一般とよんで、あいかわらずブルジョア民主主義に礼拝しつづけてきたし、いまもつづけている。

プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の実現がまずはじめに示したものが、ロシアの後進性と、そのロシアの、ブルジョア民主主義をとびこえての「飛躍」とのあいだの「矛盾」だったということは、不思議なことであろうか？　もし歴史が一連の矛盾なしに民主主義の新しい形態の実現をわれわれに授けたとしたら、それこそ不思議であろう。

マルクス主義者はだれでも、いや、総じて現代科学に通じている人ならだれでも、「いろいろな資本主義国が一様に、あるいは調和と釣合いをたもって、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)に移ってゆくことは、ありそうなことか？」と質問されたなら、きっと、そんなことはありそうもないと、答えるであろう。資本主義世界には、一様さも、調和も、釣合いも、かつてなかったし、またありえなかった。どの国も、資本主義と労働運動のある側面または特徴、または一群の特質を、とくにきわだって発展させた。発展の過程は不均等にすすんだ。

フランスがその偉大なブルジョア革命を遂行して、ヨーロッパ大陸全体を歴史上の新しい生活にめざめさせたとき、イギリスは、資本主義的にはフランスよりはるかに発展していながら、同時に反革命的連合の先頭に立っていた。しかも、その時代のイギリスの労働運動は、将来のマルクス主義の多くの要素を天才的に予想していた。

イギリスが最初の広範な、真に大衆的な、政治的にはっきりした形をとったプロレタリア的革命運動、チャーティズム[二三]を世界にもたらしたとき、ヨーロッパ大陸ではおおむ

ね微弱なブルジョア諸革命が進行しており、またフランスではプロレタリアートとブルジョアジーの最初の巨大な内乱(三三)が燃えあがった。ブルジョアジーは、さまざまな国で、さまざまなやり方で、さまざまな国のプロレタリアートの部隊を各個撃破した。

イギリスは、エンゲルスの表現を借りれば、ブルジョアジーが、ブルジョア化した貴族とならんで、最もブルジョア化したプロレタリアートの上層部をつくりだした国の見本であった(三四)。この先進的な資本主義国は、プロレタリアートの革命闘争の点では数十年も遅れた。フランスは、世界史的な意味で異常に多くのものをもたらしたあの一八四八年と一八七一年の、ブルジョアジーにたいする労働者階級の二度の英雄的蜂起で、プロレタリアートの力をいわば汲みつくしてしまった。ついで、労働運動のインタナショナルにおける主導権（ヘゲモニー）は、一九世紀の七〇年代以後ドイツに移ったが、当時のドイツは、経済的にはイギリスにもフランスにも遅れていた。しかし、ドイツが経済的にこの二つの国を追いこしたとき、すなわち二〇世紀の一〇年代に、全世界の模範党たるドイツのマルクス主義的労働者党の先頭にいたのは、ひとにぎりの札つきの醜類、シャイデマンとノスケからダーヴィットとレギーンにいたる、資本家に身売りした最もけがらわしいならずもの、君主制と反革命的ブルジョアジーに仕える労働者出身の最もいまわしい死刑執行人であった。

世界史は、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）をさしてたゆみなくすすんでいるが、けっして、なだらかな、単純な、まっすぐな道をすすんでいるのではない。

カール・カウツキーがまだマルクス主義者であって、シャイデマンらとの統一の闘士、またソヴェト民主主義またはプロレタリア民主主義に対抗してブルジョア民主主義を守る闘士としてマルクス主義の背教者に変わっていなかったころ、二〇世紀の初頭に、彼は『スラヴ人と革命』という論文を書いた。この論文で彼は、国際革命運動の主導権がスラヴ人に移る可能性を示す歴史的諸条件を述べていた。

まさにそのとおりになった。革命的プロレタリア・インタナショナルの主導権は、かつて一九世紀のさまざまな時期に、イギリス人、ついでフランス人、ついでドイツ人の手にあったように、いまや一時的に——もちろん、短いあいだにすぎないが——ロシア人の手に移った。

私はすでに何度かつぎのように言ったことがある。ロシア人が偉大なプロレタリア革命を始めるのは、先進諸国にくらべてたやすかったが、この革命をつづけ、社会主義社会の完全な組織化という意味での最後の勝利までやりとおすことは、より困難であろう、と。

われわれがそれを始めるのがたやすかったのは、第一に、ツァーリ君主制が政治的になみはずれて——二〇世紀のヨーロッパとしては——遅れていたことが、大衆の革命的強襲になみはずれた力をあたえたからである。第二に、ロシアの後進性が、ブルジョアジーにたいするプロレタリア革命と、地主にたいする農民革命とを独特のかたちで融合させたからである。一九一七年一〇月に、われわれはこのことから始めた。そして、もしこれから始めなかったなら、われわれは当時あのようにたやすく勝利をおさめることはできなかったであろう。マルクスはすでに一八五六年に、プロイセンについて論じながら、プロレタリア革命と農民戦争との独特の組合せが可能であることを指摘した(三三)。ボリシェヴィキは、一九〇五年のはじめから、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権の思想を主張してきた。第三に、一九〇五年の革命が、労働者農民大衆の前衛に西欧社会主義の「最新の成果」を知らせる点でも、大衆の革命的行動の点でも、労働者農民大衆の政治的訓練のために非常に多くのことをしたからである。一九〇五年のそれのような「総稽古」がなかったなら、一九一七年の革命は、二月のブルジョア革命も一〇月のプロレタリア革命も、不可能だったにちがいない。第四に、その地理的条件のおかげで、ロシアは、資本主義的先進国の軍事的優勢にたいして、ほかの国よりも長くもちこたえることができたからである。第五に、プロレタリアートと農民との独特な関係が、ブルジョア革命から社会主義革命に移るのを容易にし、都市プロレタリアが農村の半プロレタリア的な貧しい勤労者層に影響をおよぼすのを容易にしたからである。第六に、長期にわたるストライキ闘争の学校とヨーロッパの大衆的労働運動の経験とが、深刻な、急速に激化してゆく革命的情勢のもとで、ソヴェトのようなプロレタリア革命組織の独特な形態が発生するのを容易にしたからである。

もちろん、この列挙は完全ではない。だが、さしあたってはこれだけにとどめてよいであろう。

ソヴェト民主主義またはプロレタリア民主主義はロシアで生まれた。パリ・コミューンにたいして、世界史的な第二歩がすすめられたのである。プロレタリアと農民のソヴェト共和国は、世界で最初の長つづきした社会主義共和国であった。それは、国家の新しい型として、もう死ぬことはありえない。それは、いまではもうひとりぼっちではない。

社会主義建設の仕事をつづけるには、それを最後までやりとおすには、まだ非常に多くの事が必要である。ロシアよりもっと文化的な、プロレタリアートの比重と影響力がもっと大きい国々がいったんプロレタリアートの執権の道に立つなら、それらの国のソヴェト共和国がロシアを追

いこす見込みは十分にある。

破産した第二インタナショナルは、いま死にかけており、生きながら腐りつつある。それは、事実上、国際ブルジョアジーの召使の役割を演じている。それは、正真正銘の黄色インタナショナルである。カウツキーのようなその最大の思想的指導者たちは、ブルジョア民主主義を「民主主義」一般、あるいは——もっとばかげた、もっと乱暴なことだが——「純粋民主主義」とよんで、ブルジョア民主主義を賛美している。

ブルジョア民主主義は寿命を終わった。そして、このブルジョア民主主義の枠のなかで労働者大衆を訓練することが日程にのぼっていたころには歴史的に必要で有益な活動を果たした第二インタナショナルも、寿命を終わった。

どんなに民主的なブルジョア共和制も、資本が勤労者を弾圧するための機構、資本の政治的権力の道具、ブルジョアジーの執権以外のものではけっしてなかったし、またありえなかった。民主的ブルジョア共和制は、多数者に権力を約束し、それを宣言したが、土地その他の生産手段にたいする私的所有が存在していたかぎり、けっしてそれを実現することはできなかった。

ブルジョア的民主的共和制のもとでの「自由」とは、実際には金持のための自由であった。プロレタリアと勤労農民は、資本の打倒をめざし、ブルジョア民主主義の克服をめざして自分たちの勢力を準備するために、この自由を利用できたし、また利用しなければならなかったが、資本主義のもとでは、勤労大衆は、通例、民主主義を実際に利用することはできなかった。

ソヴェト民主主義またはプロレタリア民主主義が、世界ではじめて、大衆のための、勤労者のための、労働者と小農民のための民主主義をつくりだしたのである。

ソヴェト権力のような、住民の多数者の国家権力、この多数者の実際の権力は、世界にまだ一度もなかった。

この権力は、搾取者とその助手たちの「自由」を抑圧する。それは、搾取する「自由」、飢えをたねに儲ける「自由」、祖国の労働者と農民に敵対して外国のブルジョアジーと協定を結ぶ「自由」を、彼らから奪いとる。

カウツキーらがこのような自由を擁護するなら、するがよい。そのためには、マルクス主義の背教者、社会主義の背教者とならなければならない。

ヒルファディングやカウツキーのような第二インタナショナルの思想的指導者たちに、ソヴェト民主主義またはプロレタリア民主主義の意義、それとパリ・コミューンとの関係、その歴史的地位、プロレタリアートの執権の形態と

してのその必然性を、理解する能力がまったくないということほど、彼らの破産をあざやかにあらわしたものはない。

ドイツ「独立」（小市民的、俗物的、小ブルジョア的、と読め）社会民主党の機関紙『自由』（『フライハイト』）の一九一九年二月一一日付第七四号に『ドイツの革命的プロレタリアートにあたえる』という檄がのっている。

この檄には、党中央部とドイツの「憲法制定議会」にあたる「国民議会」の党議員団の全員とが署名している。

この檄は、シャイデマンらがソヴェトを廃止することにつとめていると言ってこれを非難し、そして——冗談もやすみやすみにしたまえ！——ソヴェトと憲法制定議会とを組み合わせ、ソヴェトに一定の国家的権能をあたえ、憲法のなかで一定の地位をあたえるように提案している。

ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とを和解させ統合するとは！　なんと簡単なことだろう！　なんと天才的な俗物的思想であろう！

ただ残念なことに、これは、すでにロシアでケーレンスキー時代に、自分で社会主義者だと思いこんでいた小ブルジョア民主主義者たち、メンシェヴィキと社会民主党の連合勢力によって、ためしずみのことである。

マルクスを読みながら、資本主義社会では、およそ先鋭化した時期には、およそ重大な階級衝突のさいには、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）か、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）か、どちらか一つだけしか可能でないことを理解しなかった者は、マルクスの経済学説についても、その政治学説についても、なに一つ理解しなかった人である。

しかし、このきわめて注目すべき、滑稽きわまる二月一一日の檄につめこまれた経済的および政治的愚論の底まで汲みつくそうとおもえば、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）との平和的結合というヒルファディング、カウツキー一派の天才的な俗物的思想を特別に検討する必要がある。それには別の論文[三六]をまたなければならない。

モスクワ　一九一九年四月一五日

一九一九年五月に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第一号に発表
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、第三八巻、三〇一—三〇九ページ所収
邦訳全集、第二九巻、三〇三—三一一ページ所収

ハンガリーの労働者へのあいさつ

同志諸君！　ハンガリーのソヴェト活動家から受け取る知らせは、われわれを熱狂と喜びでみたしています。ハンガリーのソヴェト権力は生まれてまだ二ヵ月あまりにしかなりませんが、(二七)組織性の点ではハンガリーのプロレタリアートはすでにわれわれを追いこしたようです。これは当然のことです。なぜなら、ハンガリーでは住民の一般的な文化水準はわが国より高く、つぎに全人口のうちで工業労働者の占める割合がはるかに高く（現在のハンガリーの人口八〇〇万にたいして、ブダペストの人口三〇〇万）、最後にソヴェト制度への、プロレタリアートの執権への移行も、ハンガリーでははるかにたやすく平和的におこなわれたからです。

この最後の事情はとくに重要です。ヨーロッパの大多数の社会主義的指導者は、社会排外主義的な傾向のものと、カウツキー主義的な傾向のものとを問わず、数十年にわたる比較的に「平和な」資本主義とブルジョア議会制度とによって育てられた、純小市民的な偏見に深くはまりこんでしまったため、ソヴェト権力とプロレタリアートの執権を理解できないのです。プロレタリアートは、自分のすすむ道からこれらの指導者を取りのぞき追いはらわずには、自分の世界史的な解放的使命をなしとげることができません。この連中は、ロシアのソヴェト権力についてのブルジョアのうそをすっかり信用するか、あるいはなかば信用してしまい、ソヴェト権力に具現された新しいプロレタリア民主主義、勤労者のための民主主義、社会主義的民主主義の本質を、ブルジョア民主主義から区別することができませんでした。そして、このブルジョア民主主義を、彼らは「純粋民主主義」とか「民主主義」一般とかよんで、そのまえに奴隷のように拝跪しているのです。

ブルジョア的先入見をつめこまれたこれらの盲人たちは、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義への、ブルジョア執権からプロレタリア執権への世界史的転換を理解できなかったのです。彼らは、ロシアのソヴェト権力、ロシアにおけるこの権力の発展のあれこれの特殊性を、国際的意義においてみたソヴェト権力と混同しました。

ハンガリーのプロレタリア革命は、めくらにさえ見ることができるようにしています。ハンガリーにおけるプロレタリアートの執権への移行の形態は、ロシアの場合とはまったく違っています。ブルジョア政府が自発的に辞職したこと、労働者階級の統一が、共産主義の綱領にもとづく社会主義の統一が一瞬にして回復されたことが、それです。いまでは、ソヴェト権力の本質は、それだけはっきりと現われています。いまでは、世界のどこでも、勤労者とその先頭に立つプロレタリアートとによって支持される権力は、ソヴェト権力以外には、プロレタリアートの執権以外にはありえないのです。

この執権は、搾取者、資本家、地主、彼らの腰ぎんちゃくどもの反抗を鎮圧するために、容赦なく峻厳な、速やかなる、断固たる強力を行使することを前提としています。これがわからなかった人は、革命家ではありません。そういう人は、プロレタリアートの指導者または助言者の地位から去らなければなりません。

しかし、プロレタリア執権の本質は、強力ひとつにあるのでもなければ、主として強力にあるのでもありません。その主要な本質は、勤労者の先進部隊であり、その前衛、その唯一の指導者であるプロレタリアートの組織性と規律とにあるのです。プロレタリアートの目的は、社会主義を建設し、社会の諸階級への分裂をなくし、社会のすべての成員を勤労者に変え、いっさいの人間による人間の搾取の基盤を取りのぞくことです。この目的は一挙に実現することはできません。それには、資本主義から社会主義へのかなり長い過渡期が必要です。それは、生産を組織がえすることが困難な仕事だからでもあり、生活のすべての分野にわたる根本的な変化のためには時間が必要だからでもあり、また、小ブルジョア的、ブルジョア的な事物運営の習慣の巨大な力は、長期のねばりづよい闘争をつうじて、はじめて克服できるからでもあります。だからこそ、マルクスは、資本主義から社会主義への過渡期として、プロレタリアートの執権の一時期がある、と述べているのです。（三）

この過渡期全体をつうじて、資本家も、ブルジョア・インテリゲンツィアのなかのその多数の手先も、この革命に反抗する――意識的に反抗する――でしょうし、また、小ブルジョア的な習慣と伝統にすっかりとらわれている勤労者、なかでも農民の膨大な大衆も、それに反抗する――きわめてしばしば無意識的に反抗する――でしょう。これらの層の動揺は避けられないものです。働く者としての農民は、社会主義に心をひかれ、ブルジョアジーの執権よりも労働者の執権のほうを選びます。穀物の売り手としての農民は、ブルジョアジーに、自由商業に心をひかれます、つ

まり、「慣れた」、古い、「昔ながらの」資本主義のほうに引きもどされます。

プロレタリアートが農民や、一般に小ブルジョア層全体を率いてすすむためには、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が、一階級の権力が、この階級の組織性と規律の力が、資本主義の文化、科学、技術のすべての成果に立脚する彼らの集中された威力が、あらゆる勤労者の心理にたいする彼らのプロレタリアとしての親近性が、分散した、遅れた、政治的にあまりしっかりしていない農村または小規模生産の勤労者にたいする彼らの権威が、必要です。ここでは、「民主主義」一般や、「統一」もしくは「勤労民主主義派の統一」や、すべての「働く人々の平等」や、これに類した空語——小市民化した社会排外主義者やカウツキー主義者の大好きな空語——は、なんの役にも立ちません。空語は、目をふさぎ、意識をくもらせ、資本主義や議会制度やブルジョア民主主義の古くからの愚鈍、沈滞、因襲を強めるだけです。

階級をなくすことは、長い、困難な、ねばりづよい階級闘争によってなされることです。資本の権力が打倒されたあとでも、ブルジョア国家が破壊されたあとでも、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が樹立されたあとでも、（古い社会主義と古い社会民主主義の俗物どもが考えているように）階級闘争はなくなりはしません。それは、その形態を変えるだけで、多くの点でかえっていっそう激しくなります。

プロレタリアートは、ブルジョアジーの反抗や、小ブルジョアジーの沈滞、因襲、不決断、動揺にたいする階級闘争によって、自分の権力を守り、自分の組織者としての影響力を強め、またブルジョアジーと別れることを恐れてすこぶるあやふやな態度でプロレタリアートのあとについてくる諸層を「中立化」させなければなりませんし、新しい規律、勤労者の同志的規律、勤労者とプロレタリアートとのしっかりした結びつき、プロレタリアートを中心とする彼らの団結を固め、中世の農奴制的規律に代わり、資本主義のもとでの飢えの規律、「自由な」賃金奴隷制の規律に代わるこの新しい規律、社会的連繋の新しい基礎を固めなければなりません。

階級をなくすには、一階級の執権（ディクタツーラ）、すなわち、被抑圧諸階級のなかでも、搾取者を打倒できるだけでなく、彼らの反抗を容赦なく鎮圧できるだけでなく、さらに、いっさいのブルジョア民主主義的イデオロギー、自由と平等一般についてのいっさいの小市民的空語（マルクスがとっくの昔に示したように、この空語は、実際には、商品所有者の「自由と平等」、資本家と労働者との「自由と平等」[三九]を意味するのです）と思想的に絶縁することのできる階級の執権（ディクタツーラ）の時期が必要です。

それぱかりではありません。被抑圧諸階級のなかでも、自己の執権(ディクタツーラ)によって階級をなくすことができるのは、資本にたいする何十年ものストライキ闘争と政治闘争とによって訓練され、団結させられ、教育され、きたえられた階級だけであり、――都市文化、工業文化、大規模資本主義の文化をことごとく吸収しており、この文化を守り、そのすべての成果を維持し、さらに発展させ、それを全人民、全勤労者に手のとどくものにする決意と能力をもっている階級だけであり、――過去と絶縁し、新しい未来にむかって大胆に道を切りひらく人々に歴史が不可避的に負わせるあらゆる重荷、試練、苦難、大きな犠牲を耐えぬくことのできる階級だけであり、――その最良の分子が、いっさいの小市民的なもの、俗物的なものにたいする小ブルジョアジーや下級職員や「インテリゲンツィア」のあいだにあのように栄えているこれらの資質にたいする、憎しみと侮蔑にみたされている階級だけであり、――「人をきたえる労働の学校を卒業し」ていて、自己の労働能力にたいする敬意をあらゆる勤労者、あらゆる誠実な人々にいだかせることのできる階級だけなのです。

ハンガリーの労働者同志諸君！　諸君は、真のプロレタリア執権(ディクタツーラ)の政綱にもとづいて一挙にすべての社会主義者を統合できた点で、ソヴェト・ロシアよりもすぐれた模範を世界に示しました。いま、諸君の前途には、協商国との苦しい戦争にもちこたえるという、きわめてやりがいのある、しかしきわめて困難な任務がひかえています。がんばってください。きのう諸君の味方となり、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の味方となった社会主義者のあいだや、小ブルジョアジーのあいだに動揺が現われたなら、容赦(きょう)なく動揺を鎮圧すべきです。銃殺――これが、戦争のさいの卑怯者の正当な運命です。

諸君は、唯一の正当な、正義の、真に革命的な戦争を、抑圧者にたいする被抑圧者の戦争、搾取者にたいする勤労者の戦争、社会主義の勝利のための戦争を、遂行しているのです。全世界の労働者階級のすべての誠実な分子は、諸君の味方です。ひと月ごとに世界プロレタリア革命が近づいていきます。

がんばってください！　勝利は諸君のものでしょう！

ヽヽ、ヽ、レーニン

一九一九年五月二七日

『プラウダ』第一一五号、一九一九年五月二九日
全集、第五版、第三八巻、三八四―三八八ページ所収
邦訳全集、第二九巻、三九〇―三九四ページ所収

偉大な創意

（銃後の労働者の英雄精神について。「共産主義土曜労働」にかんして）

新聞は赤軍兵士の英雄精神の多くの例を報じている。コルチャック軍、デニーキン軍その他の地主と資本家の軍隊とたたかっている労働者と農民は、社会主義革命の獲得物を守って、しばしば勇敢さと忍耐力の奇跡を示している。[30] パルチザン主義の克服、疲労とだらしなさの克服は、徐々に、苦労しながら、しかし、なにものにも屈せずに前進している。社会主義の勝利の大業に自覚的に犠牲をささげている勤労大衆の英雄精神、これこそ、赤軍の新しい同志的規律の基礎であり、赤軍の再生、強化、成長の基礎である。

銃後の労働者の英雄精神も、それにおとらず注目に値する。この点でじつに巨大な意義をもっているのは、労働者自身の創意によって共産主義土曜労働が組織されたことである。明らかに、これはまだ端緒にすぎないが、なみはずれて大きな重要性のある端緒である。これは、ブルジョアジーを打倒することよりも、もっと困難な、もっと本質的な、もっと根本的な、もっと決定的な変革の端緒である。なぜなら、これは、自分自身の沈滞、だらしなさ、小ブルジョア的利己心にたいする勝利であり、のろうべき資本主義が遺産として労働者と農民に残した、これらの習性にたいする勝利だからである。この勝利が固められるとき、そのときには、またそのときにはじめて、新しい社会的規律、社会主義的な規律がつくりだされるであろうし、そのときには、またそのときにはじめて、資本主義への復帰は不可能となり、共産主義は真に不敗のものとなるであろう。

五月一七日付の『プラウダ』は、同志ア・ジェの論文『革命的なやり方での活動（共産主義土曜労働）』をのせた。この論文はたいへん重要なので、ここに全文を再録しよう。

革命的なやり方での活動
（共産主義土曜労働）

革命的なやり方での活動にかんするロシア共産党中央委員会の手紙[31]は、党組織と党員に力づよい刺激をあたえた。いたるところにひろがった熱狂が多くの共産党員の鉄道労働者を前線に向かわせたが、大多数の者は、責任

作業場所	作業名称	労働者数	時間数		作業実施量
			1人当り時間	計	
モスクワ. 主機関車工場	ペローヴォ，ムーロム，アラートィリおよびスィズラニ向け線路用資材，機関車修繕用装置及び車両部品の積込み	48 21 5	5 3 4	240 63 20	積込み 7,500プード 取卸し 1,800プード
モスクワ. 客車車庫	機関車の複雑な臨時修繕	26	5	130	合わせて機関車1両半を修繕
モスクワ. 操車場	機関車の臨時修繕	24	6	144	機関車2両の修繕を完了し，機関車4両の要修繕部分を解体
モスクワ. 車両部	客車の臨時修繕	12	6	72	3等車2両
「ペローヴォ」 主車両工場	車両修繕および小修繕　土曜日 日曜日	46 23	5 5	230 115	有蓋貨車12両と長物車2両
	合　計…………………	205	—	1,014	合わせて機関車4両，車両16両の修繕完了，9,300プードの取卸しと積込み

のある部署を放棄するわけにはいかず、また、革命的なやり方で活動する新しい方法を探しだすこともできなかった。動員の仕事がはかどらないという現地からの報道と事務処理の渋滞とは、モスクワ―カザン鉄道分区の注意を鉄道経営の機構にむけさせた。ところが、労働力が不足なためと労働密度が低いためとで、緊急注文の処理や機関車の応急修繕が遅れていることがわかった。五月七日、モスクワ―カザン鉄道分区の共産党員と同調者の全員会議で、コルチャックにたいする勝利への協力について、ことばから行動に移る問題が出された。出された提案は次のとおりである。

「困難な内外情勢を考慮して、階級敵にたいする優勢を確保するために、共産党員と同調者は、さらに奮励努力して、各自の休息時間からもう一時間分の労働をさくこと、すなわち、自分の労働時間を一時間だけふやすこと。この余分の労働時間は、実質的な価値をただちに生産するために、土曜日に一度にまとめて、六時間の肉体労働を果たすこと。革命の獲得物のためには、共産党員は、その健康と生命を惜しんではならないと考えるので、この労働は無報酬でなされる。コルチャックに完全に勝利するまで、共産主義土曜労働は、全分区にわたっておこなわれる。」

いくらかのためらいはあったが、そのあとでこの提案は全員一致で採択された。
五月一〇日、土曜日、午後六時、共産党員と同調者は、兵士のように作業に出動し、隊伍をととのえ、喧噪もなく、職長たちによって持ち場持ち場に割りあてられた。革命的なやり方での活動の結果は、すでに現われている。ここに添付した集計表〔前ページの表〕は、企業と作業の性質とを示している。
作業の総価値は、通常賃金で計算して五〇〇万ループリ、時間外労働の賃金で計算すればその一倍半となる。
積込労働の密度は、普通の労働者より二七〇％高い。そのほかの作業もほぼ同じ密度である。
労働力の不足と事務処理の渋滞から七日ないし三ヵ月遅れていた注文（緊急）処理の渋滞は、取りのぞかれた。
作業は、設備の故障（たやすく修理可能なもの）があったにもかかわらず、おこなわれた。この故障のため、個個のグループの作業が三〇分ないし四〇分遅らせられた。
作業の指導のために、残留していた管理部員たちは、次の作業の準備がやっと間に合うという状態であった。だから、自覚のない、だらだらした労働者の作業にくらべると、共産主義土曜日には一週間分の作業がなされたという老職長のことばは、おそらくたいした誇張ではないであろう。
この作業にくわわったのは、ソヴェト権力の心からの支持者たちであって、今後の各土曜日には、このような人々が押しよせてくることが期待されるし、また他の地区もモスクワ—カザン線の共産党員鉄道労働者の例にならおうと希望しているので、私は現地からの報道にもとづいて、組織上の側面をもっとくわしく述べよう。
この作業にくわわった者のうちおよそ一〇％が、常時現場で働いている共産党員であった。残りは、責任ある部署を占めている者、鉄道のコミサールから個々の企業のコミサールにいたる被選出役員、さらに労働組合の役員、鉄道管理局や交通人民委員部の勤務員などであった。
作業の熱中と協力ぶりは、かつてないものであった。事務員、管理部員が、ロ論したりすることもなく、労働者、罵りあったり、四〇プードもある客車用機関車の車輪の輪鉄にとりついて、勤勉なアリのようにころがして適当なところまではこんだときには、集団的労働の喜びの熱い感情が胸のなかに湧きおこり、労働者階級の勝利はゆるがないという信念が強まった。世界の略奪者どもは、勝利者である労働者の息の根をとめることはできないし、国内のサボタージュはいくらコルチャックを待ってもむだであろう。

作業が終わったとき、そこにいた人々は、前例のない光景を目撃した。疲れきってはいるが、喜びに目をかがやかせた一〇〇人の共産党員は、壮大なインタナショナルの歌で事業の成功を祝った。そしてこの勝利の讃歌のかちほこった波が、壁をこえて労働者のモスクワじゅうに響きわたり、投げた石の波紋のように、労働者のロシアじゅうにひろがっていって、疲れた者、たるんだ者をゆりうごかすだろうと思われた。

ア・ジェ

このすばらしい「見ならう価値のある手本」を評価して、五月二〇日の『プラウダ』にのった同志エス・エルの論文は、右の標題で次のように書いた。

「共産党員のこのような活動の例は、珍しいことではない。私はそのような例が発電所やほうぼうの鉄道にもあることを知っている。ニコラーエフ線では、共産党員は転車台に落ちこんだ機関車を引き揚げるために、幾晩も時間外労働をした。北部鉄道では、冬に、すべての共産党員と同調者とが、日曜日に何日か働き、線路の除雪をした。多くの貨物駅の細胞は、積荷の盗難を防ぐために駅の夜まわりをおこなっている。——しかし、この活動は偶然のものであって、組織的なものではなかった。カザンの同志たちは、この活動を組織的、恒常的なものにするという新しい要因をもたらした。『コルチャックにたいする完全な勝利まで』とカザンの同志たちは決定した。そして、ここに彼らの活動の全意義がある。彼らは、戦争状態のつづく全期間、共産党員と同調者の労働を一時間だけ延長している。それと同時に、彼らは生産的な作業の手本を示している。

この手本は、すでに模倣をまねいたし、またひきつづいてまねくにちがいない。アレクサンドロフ線の共産党員と同調者の全員会議は、戦争状態とカザンの同志たちの決定とを審議したのち、次のように決定した。（一）アレクサンドロフ線の共産党員と同調者についても『土曜労働』を実施する。最初の土曜労働は五月一七日におこなう。（二）共産党員と同調者で手本となる模範作業班を組織する。この作業班は、どのように働かなければならないか、また、現在の資材、器具、給養のもとで現実にどれだけのことができるものかを、労働者に示さなければならないであろう、と。

カザンの同志たちのことばによると、彼らの実例は大きな感銘を生み、この次の土曜日には多数の非党員労働者が作業に参加するものと期待しているとのことである。この記事を書いているときには、アレクサンドロフ線の職場では、共産党員の時間外労働は始まっていなかった

が、予定されている作業のうわさが伝わっただけでも、非党員大衆はもう動きだし、つぎのように話しはじめた。もし知っていたら、『われわれはきのうは知らなかった。用意して同じように働いたのに』、『次の土曜日にはかならず行こう』、――あらゆる方面からこういう声が聞こえてくる。この種の作業の生んだ感銘は、きわめて大きなものであった。

銃後の共産党細胞はすべて、カザンの同志の手本に従わなければならない。モスクワ分岐駅の共産党細胞ばかりでなく、ロシアの全党組織は、この例に従わなければならない。そして農村では、共産党細胞はまず第一に、赤軍兵士の畑を耕すことを引きうけ、その家族を助けなければならない。

カザンの同志たちは、インタナショナルを歌って、その最初の共産主義土曜日の作業を終えた。もし全ロシアの共産党組織がその手本にならい、うまずたゆまずそれを実行するならば、――共和国の全勤労者のとどろきわたるインタナショナルの歌声のもとに、ロシア・ソヴェト共和国は、今後の困難な数ヵ月に耐えて生きぬくであろう。……

共産党員の同志諸君、仕事にとりかかろう！」

一九一九年五月二三日の『プラウダ』は、つぎのように報道した。

「五月一七日、アレクサンドロフ線で、最初の共産主義『土曜労働』がおこなわれた。九八人の共産党員と同調者は、全員会議の決議に従って、時間外に五時間の時間外労働を無報酬で働いた。彼らは、代金を出してもう一度余分に食事する権利をえただけであった。ただし、有料の食事には肉体労働者として半フントのパンが支給された。」

作業は準備も組織も不十分であったにもかかわらず、それでも労働生産性は平常より二、三倍高かった。

つぎに一例をあげよう。

五人の旋盤工が四時間に八〇個の軸を仕上げた。生産性は、平常にくらべて二一三％である。

二〇人の雑役工が四時間に六〇〇プードの量の廃物資材、一個あたりの重さ三プード半の車両バネ七〇個、全部で八五〇プードを集めた。生産性は平常にくらべて三〇〇％であった。

「同志たちはこのことを説明して、いつもは作業にうんざりし、あきあきするが、ここではみな喜んで、熱心に働くからだ、と言っている。だが、これからは、平常の仕事が共産主義土曜労働よりも少ないことは、恥ずべきことになるであろう。」

「いまでは多くの非党員労働者が土曜労働に参加したいという希望を表明している。機関車作業班は、土曜労働に『墓場』から機関車を引っぱりだして、それを修繕し、動くようにしたい、と申し出ている。

こうした土曜労働がヴャジマ線でも組織されているという報道がはいっている。」

これらの共産主義土曜労働のさいに作業がどのようにおこなわれているかを、同志ア・ヂャチェンコが六月七日の『プラウダ』に書いている。『一土曜労働者の手記』と題された彼の論文のおもな部分を引用しよう。

「私は一同志とともに、党の鉄道分区の決定に従って、大喜びで土曜労働の『実務見習』をやり、臨時に数時間のあいだ筋肉を働かして頭をやすめるつもりであった。……。われわれは鉄道の木工工場で働くことになっている。到着して、仲間たちに会い、あいさつをかわし、冗談を言い、総勢をかぞえる――みなで三〇人である。……目の前にあるのは『怪物』である。六〇〇プードから七〇〇プードもあろうか、かなり重そうなボイラーであって、われわれはこのしろものを『移動』させなければならない。つまり、ほとんど四分の一ないし三分の一ヴェルスタも離れた長物車のところまでころがしていかなければならない。心中に疑念が生じる。……だが、われわれは、もう仕事にかかっている。同志たちは、むぞうさに木のころをボイラーの下にあてがい、二本の綱をつけ、こうして作業が始まった……。ボイラーはなかなか動いてくれないが、ともかく動きだした。われわれは喜ぶ。われわれの人数はこんなに少ないのに。……このボイラーを三倍も人数の多い非党員労働者がものの二週間も引っぱったが、われわれが来るまではびくともしなかったのに。……『一、二、三』というわれわれの監督の同志の号令のリズミカルな響きに、力を合わせて、みっちり一時間働く、ボイラーは進み、また進みつづける。ふいに、なにが起こったのか？　いきなり並んでいた同志たちがみんな滑稽な格好でころげてしまった――われわれの握っていた綱が『そむいた』のだ。……だが、ちょっととまっただけだ。かわりに太い綱をつける……。夕方だ、めだって暗くなってくる。だが、われわれはもう一つ小さい丘を越さなければならない。そうすれば作業はじきにすむ。腕はずきずきと痛み、手のひらはひりひりし、身体は熱くなって、すっかり汗をかく、――だが仕事ははかどる。『管理部員』が立っている。成功に心をうごかされ、彼も思わず綱にとりつく。加勢してくれ、先刻お待ちかねだ！　ひとりの赤軍兵士がじっとわれわれの作業を見ていた。アコーディオンを手にしている。彼はど

う思っているのだろう？　これはどういう人たちなのだろう？　みなが家で休む土曜日になにをしようというのだろう？　私は彼の謎を解いてやって、こう言う。『同志！　愉快な曲を一つやってくれ。僕らは、そんじょそこらの労働者じゃないんだ、ほんものの共産党員だ。ほら、仕事はこんなにはかどっている。怠けたりなんかしない、一生懸命だ。』赤軍兵士はアコーディオンをそっと下において、急いで綱にとりついた。……

――『イギリス人はりこう者！』――美しいテノールで同志ウが歌いだした。われわれは彼に声を合わせる。労働歌の文句がこだましてひろがってゆく。『それ、のろまさん、やれひけ、それひけ。……』

慣れないので、筋肉は疲れきり、肩と背中が痛む。だがあすは休日だ、――われわれの休息だ。十分眠ることができよう。目標は近い。いくらかゆれると、われわれの『怪物』はもう長物車のすぐわきに来た。支え板をかけろ、長物車にのせろ、――そして、ながらくみなが待ちのぞんでいた仕事をこのボイラーにさせるのだ！　われわれはどやどやと部屋に、そこの地区細胞の『クラブ』にはいる。室内にはポスターがまわりじゅうにかかっており、小銃がおかれ、あかあかと燈火がついている。『インタナショナル』をうまく歌ってから、『ラム酒』入りのお茶と、パンまでごちそうになる。このようなごちそうは、ここの同志たちがととのえてくれたものだが、苦しい作業のあとでは申し分がない。この同志たちに親しい別れをつげて縦隊を組む。革命歌が夜の静けさをやぶって、眠った街路に響きわたり、そろった足音が歌に合う。『同志よ大胆にすすめ』、『起て、飢えたるものよ』――われわれのインタナショナルと労働の歌がただよってゆく。

一週間たった。われわれの腕と肩は休息をとった。そしてわれわれは、今度は、車両を修繕するため、九ヴェルスタ離れたところまで列車に乗って『土曜労働』にゆく。それはペローヴォである。同志たちは『アメリカ式』有蓋貨車の屋根によじのぼり、声高に美しい声で『インタナショナル』を歌う。列車の乗客は耳をかたむけ、驚いているらしい。車輪はリズミカルにきしむ。われわれのなかで上によじのぼることのできなかった者は、屋根にのぼるはしごにぶらさがり、『むこうみずな』乗客の格好をする。車が止まる。もう目的地についたのだ。長い構内をぬけて、親切なコミサールの同志ゲに迎えられる。

――仕事は山ほどあるが、人が少ない！　全部で三〇人で、六時間のあいだに一三両の車両の中修繕をすませ

てしまわなければならないのだ！　そこに印をつけた双輪軸があり、からの車両ばかりでなく、満水したタンク車もある。……だが、たいしたことはない、同志諸君、『そのつもりでやろう！』

作業はたけなわになる。私は五人の同志とワシカすなわち挺子をつかって働く。この六〇プードか七〇プードもある輪軸が、われわれの肩で押され、『監督』の同志が指揮する二つの挺子のおかげで、一つの軌道から別の軌道にすばやくとびうつる。一組かたづくと、そのあとにまた一組だ。とうとう全部が所定のところにおさまった。そして、われわれは使いふるした古物をレールづたいに大急ぎで物置場に『送りこむ』……。一、二、三――と鉄の回転クレーンでつかまれて、宙に釣りあげられ、もうレールのうえには一つもない。向こうの暗いところでハンマーの音が響く、蜜蜂のようにいそがしく、同志たちが『故障』車のところで働いている。そして指物仕事、ペンキ塗装、屋根ふきがなされる。――作業がわきたって、われわれもコミサールの同志も喜ぶ。向こうでは、鍛冶工もわれわれの手助けが必要だった。移動火床のなかには灼熱した『プラヴィーロ』、つまり連結棒がある。それは不注意な連結の衝撃で曲っていた。白熱して火花を散らしながら、鉄床のうえにおかれ、経験者の同志の目測にしたがい、われわれがたくみにたたくと、正常な形になる。それはまだ灼熱しているが、もうわれわれの肩にのせて、大急ぎで所定の場所にはこばれ、火花をはなって鉄の承口にはめこまれる、――二、三度たたくと、しっかりはまる。車の下にはいりこむ。ここでは連結器と連結棒の組立ては、けっして見かけほど簡単でない。ここは、リベットと螺旋状バネからなるまとまった機構になっている。……

作業はわきたつ。夜はますます暗くなり、炬火がいよいよ明るく燃える。やがて終了だ。同志たちの一部は積みあげた輪縁のわきに『なんとか席をつくって』、熱いお茶を『すすっている』。五月の夜はさわやかだ。空には三日月がかかって美しい。冗談、笑い声、健康なユーモア。

――同志ゲ、もうやめたまえ、一三台になるよ！

だが、同志ゲにはまだ足りない。

お茶が終わる。勝利の歌をうたって出口に向かってゆく。……」

「共産主義土曜労働」を組織する運動は、モスクワに限られてはいない。六月六日の『プラウダ』はつぎのように報じた。

「五月三一日、トヴェリで最初の共産主義土曜労働が

おこなわれた。一二八人の共産党員が鉄道で働いた。三時間半のあいだに一四両の積込みと取卸しがすみ、三両の機関車が修繕を終わり、一〇サージェンの薪が挽かれ、なおそのほかの作業がなされた。熟練した共産党員労働者の労働密度は普通の生産性の一三倍であった。」

ついで、六月八日の『プラウダ』にも次の記事がある。

共産主義土曜労働

「サラトフ、六月五日、共産党員の鉄道労働者たちは、モスクワの同志の呼びかけにこたえて、党員の全員会議で、国民経済を支援するために、土曜日ごとに無報酬で五時間の時間外労働をすることを決定した。」

＊＊＊

私は共産主義土曜労働にかんする報道を、ごくくわしく、またそっくり引用した。というのは、ここに見るものは、疑いもなく、われわれの新聞が十分な注意をはらっておらず、またわれわれみながまだ十分に評価していない、共産主義建設の最も重要な一側面だからである。

政治的なおしゃべりをなるべく少なくしよう、ごく単純な、だが生きた、生活のなかから取りだされ、生活によってためされた共産主義建設の事実に、なるべく多くの注意をむけよ――このスローガンを、われわれの著作家も、扇動家も、宣伝家も、組織者その他も、われわれすべてが、うむことなく繰りかえさなければならない。

プロレタリア革命後の初期には、われわれが、ブルジョアジーの反抗を克服し、搾取者に勝利し、彼らの陰謀（黒百人組とカデットから、メンシェヴィキとエス・エルにいたるまで、すべての者がくわわった、あの「奴隷所有者」のペトログラード明渡しの「陰謀」[三]のような）を鎮圧するという、主要かつ基本的な任務に、なによりも第一に従事するのは当然であり、避けられないことである。しかし、この任務とならんで、同じように不可避的に――さきにすすめばすすむほどますます不可避的に――、積極的な共産主義建設のいっそう本質的な任務、新しい経済関係、新しい社会を創出する任務が現われてくる。

プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、――私がすでに一度ならず指摘するおりがあったように、とりわけ三月一二日のペトログラード・ソヴェトの会議での演説でも指摘したように――たんに搾取者にたいする強力ではなく、また強力を主とするものでさえない。この革命的強力の経済的基礎、その生命力と成功の保障は、プロレタリアートが、資本主義にくらべていっそう高度な型の社会的労働組織を代表し実現する点にある。ここにこそ核心がある。ここにこそ共産

主義の力の源があり、その避けることのできない完全な勝利の保障がある。

農奴制的な社会的労働組織は、鞭（むち）の規律に支えられていたが、そのもとでは、勤労者はひとにぎりの地主に略奪され愚弄されて、極度の無知と打ちひしがれた状態とにあった。資本主義的な社会的労働組織は、飢えの規律に支えられてきた。そして膨大な勤労大衆は、ブルジョア文化とブルジョア民主主義のいっさいの進歩にもかかわらず、最も先進的な、文明的な民主的共和国においてさえ、依然として賃金奴隷または抑圧された農民の無知で打ちひしがれた大衆であって、それをひとにぎりの資本家が搾取し愚弄してきた。共産主義的な社会的労働組織――社会主義はその第一歩である――は、地主のくびきも資本家のくびきもくつがえした勤労者自身の自由な、自覚した規律に支えられており、さきにすすめばすすむほどますますそうなるであろう。

この新しい規律は、天から降ってくるものでもなく、殊勝な願望から生まれるものでもない。それは、大規模な資本主義的生産の物質的諸条件のなかから、もっぱらそのなかから、生じてくるのである。この物質的条件なしには、新しい規律は不可能である。だが、これらの物質的条件の担い手あるいは伝え手は、大規模な資本主義によってつくりだされ、組織され、結集され、訓練され、啓蒙され、きたえられた、特定の歴史的階級である。この階級とは、プロレタリアートである。

プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）とは、このラテン語の科学的な、歴史的＝哲学的な表現を、もっと平易なことばに翻訳すれば、次のことを意味する。

ある特定の階級、すなわち都市の労働者、一般に工場労働者、工業労働者だけが、資本のくびきをくつがえす闘争で、それをくつがえす過程で、勝利を確保し強化するための闘争で、新しい社会主義的な社会制度を創設する事業で、階級を完全に廃絶するための闘争全体で、勤労被搾取者の全大衆を指導することができる。（ついでに述べておけば、社会主義と共産主義との科学的な差異は、まえのことばが資本主義のなかから成長してくる新しい社会の最初の段階を意味し、あとのことばがこの社会のより高度な、いっそう進んだ段階を意味している、というだけのことである。）

「ベルン」黄色インタナショナルの誤りは、その指導者たちが、階級闘争とプロレタリアートの指導的役割を口さきで認めるだけで、最後まで考えぬくことを恐れ、ブルジョアジーにとってとくに恐ろしく、絶対にうけいれえない、避けられない結論を恐れていることにある。彼らは、プロ

レタリアートの執権（ディクタツーラ）もまた階級闘争の一時期であることを、階級闘争は、階級が廃絶されないかぎり避けられないものであり、資本の打倒後の初期にはとくに激しく、とくに独特なものになって、その形態を変えるということを、認めるのを恐れている。政治権力をたたかいとったのちにも、プロレタリアートは階級闘争をやめずに、階級の廃絶にいたるまでそれをつづける。だが、いうまでもなく、それは違った環境のなかで、違った形態で、違った手段でつづけられるのである。

だが、「階級の廃絶」とはなにを意味するか？　社会主義者と自称する人々はみな、社会主義のこの終局の目標を認めているが、しかし、けっしてすべての者がその意義をよく考えているわけではない。階級とよばれるのは、歴史的に規定された社会的生産体制のなかで占めるその地位の点で、生産手段にたいするその関係（その大部分は法律によって確認され成文化されている）の点で、社会的労働組織のなかで果たすその役割の点で、したがって、社会的富から自由に処分できる分けまえを受け取る方法とその分けまえの大きさとの点で、たがいに異なる人々の大きな集団である。階級とは、一定の社会経済制度のなかで占めるその地位が相違し、そのうちの一方が他方の労働をわがものにすることができるような、人間の集団を言うのである。

階級を完全に廃絶するには、搾取者、すなわち地主と資本家を打倒する必要があるばかりでなく、彼らの所有を廃止する必要があるばかりでなく、さらに、生産手段のあらゆる私的所有を廃止する必要があり、都市と農村とのあいだの差異をも、肉体労働者と精神労働者とのあいだの差異をもなくす必要があることは、明らかである。これは、きわめて長期にわたる事業である。これをなしとげるには、生産力の発展における長足の進歩が必要であり、小規模生産の数多くの残存物の抵抗（しばしば消極的な抵抗——それはとくに頑強であり、克服するのがとくに困難である）に打ちかつ必要があり、またこれらの残存物にともなう習慣と惰性との巨大な力に打ちかつ必要がある。

すべての「勤労者」に一様にこの仕事を果たす能力があると考えるのは、時代おくれの、マルクス以前の社会主義者のこのうえもない空文句か幻想であろう。なぜなら、この能力はひとりでにあたえられるものではなく、歴史的に成長してくるもの、しかももっぱら大規模な資本主義的生産の物質的諸条件のなかから成長してくるものだからである。資本主義から社会主義にいたる道のはじめには、この能力をもっているのはプロレタリアートだけである。プロレタリアートが、その双肩にかかっている巨大な任務をな

しとげることができるのは、第一に、プロレタリアートが文明社会の最も強力な、また最も先進的な階級だからであり、第二に、最も発達した諸国では、プロレタリアートが住民の多数者をなしているからであり、第三に、ロシアのような遅れた資本主義諸国では、人口の多数者が半プロレタリアに、すなわち、一年の一部はつねにプロレタリアとしての生活をおくり、つねに生計の一部分を資本主義的企業での賃労働によって得ている人々に属しているからである。

自由、平等、民主主義一般、勤労民主主義の平等などというような一般的な空文句から出発して、資本主義から社会主義への移行の任務を解決しようとする（カウツキー、マルトフ、その他のベルン黄色インタナショナルの英雄たちがやっているように）者は、それによって、思想上でブルジョアジーの尻に奴隷のようについてゆく小ブルジョア、俗物、小市民だという自分の本性をさらけだしているにすぎない。この任務の正しい解決は、政治権力を奪取した特殊な階級、すなわちプロレタリアートと、非プロレタリア的および半プロレタリア的な勤労住民大衆全体とのあいだの特殊な諸関係を具体的に研究することによってのみ、えられる。その場合、この関係は、空想上で調和をたもった「理想的」な環境のなかで形成されるのではなく、ブルジョアジーが狂暴な、多種多様な反抗をおこなっている現実の環境のなかで形成されるのである。

ロシアをもふくめてどの資本主義国でも、住民の――まして勤労住民の――大多数は、資本の圧制、資本による略奪、あらゆる種類の侮辱を、わが身と自分の近親者の身に何千回となくうけてきた。帝国主義戦争――すなわち、イギリスの資本とドイツの資本のどちらが全世界を略奪するうえで首位を占めるかという問題を解決するためにおこなわれた幾千万人の殺害――は、この経験を異常に鋭くし、ひろげ、深め、人々にいやおうなしにこれを理解させた。そこからして、プロレタリアートが英雄的な大胆さで、革命的な無慈悲さで、資本のくびきをくつがえし、搾取者を打倒し、その反抗を鎮圧し、搾取者が存在する余地のない、新しい社会を創造する道を自分の血で切りひらいていることに、住民の大多数者、とりわけ勤労大衆が、不可避的に共感をよせるのである。

非プロレタリア的および半プロレタリア的な勤労住民大衆がブルジョア的「秩序」のほうへ、ブルジョアジーの「庇護」のもとへ帰ろうとする小ブルジョア的な動揺と気迷いが、どんなに大きく、どんなに避けられなくても、それにもかかわらず、彼らはやはりプロレタリアートに精神的・政治的権威を認めざるをえない。なぜなら、プロレタ

リアートは、搾取者を打倒し、その反抗を鎮圧しているだけでなく、新しい、より高度な社会的連繋を建設し、社会的規律——自分を束縛するどのようなくびきも知らず、自分自身の団結の力、自分自身のいっそう自覚的な、大胆な、結束した、革命的な、鍛練された前衛の権力のほかには、どのような権力も知らない、自覚し、団結した働き手の規律——をつくりだしつつあるからである。

勝利するためには、社会主義を創設し確立するためには、プロレタリアートは二重の任務、あるいは二者一体の任務を解決しなければならない。それは、第一に、資本にたいする革命的闘争における献身的な英雄精神によって、勤労被搾取者の全大衆を引きつけること、ブルジョアジーを打倒し、ブルジョアジーのあらゆる反抗を完全に鎮圧するために、これらの大衆を引きつけ、組織し、指導すること、第二に、新しい経済建設の道に、新しい社会的連繋、新しい労働規律、新しい労働組織——科学および資本主義的技術の最新の成果と、大規模な社会主義的生産をつくりだしつつある自覚した働き手の大衆的結合とを結びつけた労働組織——をつくりだす道に、勤労被搾取者の全大衆、さらにすべての小ブルジョア層をみちびいてゆくことである。

この第二の任務は、第一の任務よりも困難である。というのは、それは、個々の英雄的な激情の奔出によってはけっして解決されず、大衆的な日常活動の最も持続的な、最もねばりづよい、最も困難な英雄精神を必要とするからである。だが、この任務は第一の任務よりもいっそう本質的なものである。というのは、けっきょくのところ、ブルジョアジーに勝利する力の最も深い源となり、またこれらの勝利を強固にしくつがえせないものとする、ただ一つの保障となりうるのは、新しい、より高度な社会的生産様式だけであり、資本主義的生産と小ブルジョア的生産を大規模な社会主義的生産とおきかえることだけだからである。

***

「共産主義土曜労働」は、それが、労働生産性を発展させ、新しい労働規律に移り、社会主義的な経済条件と生活条件とをつくりだすうえでの労働者の自覚した、自発的な創意をわれわれに示しているからこそ、巨大な歴史的意義をもっているのである。

一八七〇—一八七一年の教訓ののちに、排外主義や民族自由主義に移らず、社会主義に移ってきた少数の——例外といってよいほど稀な、と言うほうがむしろ正確であろう——ドイツのブルジョア民主主義者のひとりであるJ・ヤコービは、一つの労働者協会の創立はサドヴァーの会戦(三三)よりも大きな歴史的意味をもっている、と言った。それは正

当である。サドヴァーの会戦は、資本主義的ドイツ民族国家を創設するうえで、オーストリアとプロイセンの二つのブルジョア君主国のどちらが覇権をにぎるか、という問題を解決したのであった。一つの労働者協会の創立は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの世界的勝利へのささやかな一歩であった。それと同じように、われわれは、一九一九年五月一〇日にモスクワでモスクワ―カザン線の鉄道労働者によって組織された最初の共産主義土曜労働は、あるいはフォシュやイギリス軍のどのような勝利よりも、一九一四―一九一八年の帝国主義戦争でのヒンデンブルク、大きな歴史的意義をもっていると言うことができる。帝国主義者の勝利は、英米およびフランスの億万長者の利潤のために、何百万という労働者を殺戮することであり、滅びかけた、食いすぎた、生きたまま腐ろうとしている資本主義の残忍行為である。モスクワ―カザン線の鉄道労働者の共産主義土曜労働は、地上のすべての国民に資本のくびきと戦争からの解放をもたらす新しい社会主義社会の細胞の一つである。

自分は「世論」の代表者だと考えつけているブルジョア紳士諸君と、メンシェヴィキやエス・エルをもふくむその腰ぎんちゃくどもは、当然のことながら、共産主義者の希望をあざけり、この希望を「モクセイ草の鉢に植えたバオバブの木」[一三四]とよび、横領、怠惰、生産性の低下、原料の損傷、生産物の損傷といった例が大量にあるのにくらべて土曜労働の数はとるにたりない、と言ってあざわらっている。もしわれわれは、これらの諸君につぎのように答えよう。もしブルジョア・インテリゲンツィアがその知識を、ロシアや外国の資本家の権力の復活を助けるためにではなく、勤労者を助けるために用いたならば、変革はもっと速やかに、またもっと平和的におこなわれたであろう、と。しかし、これはユートピアである。なぜなら、問題は階級闘争によって解決されるのであって、インテリゲンツィアの大多数はブルジョアジーのほうに心をひかれているからである。インテリゲンツィアの援助によってではなく、その反抗にもかかわらず（すくなくとも、たいていの場合にそうである）、プロレタリアートは、度しがたいブルジョア・インテリゲンツィアを排除し、動揺しているインテリゲンツィアを改造し、再教育し、自分に服従させ、彼らのますます大きな部分をしだいに自分の味方につけることによって勝利するであろう。変革の困難と失敗を見てせせら笑ったり、恐怖気分をひろめたり、昔に帰れと宣伝したりすること――これはすべて、ブルジョア・インテリゲンツィアの階級闘争の用具であり手口である。プロレタリアートはこうしたものにあざむかれはしない。

だが、問題の本質をとりあげてみるならば、新しい生産様式が、あいつぐ幾多の失敗や誤りや逆転をともなわずに、一気に根をおろしたことが、はたして歴史上にあったであろうか？　農奴制が没落してから半世紀たっても、ロシアの農村にはまだ農奴制の遺物がすくなからず残っていた。アメリカで黒人奴隷制が廃止されてから半世紀たっても、同地の黒人の地位はきわめてしばしばなお半奴隷的であった。メンシェヴィキとエス・エルをもふくめたブルジョア・インテリゲンツィアは、資本に奉仕し、徹頭徹尾欺瞞的な論法を用いつづけている点で、その本領に忠実である。プロレタリアートの革命以前には、彼らはわれわれをユートピア主義だといって非難したが、革命後には、ありえないような速さで過去の痕跡をなくすようにわれわれに要求するのだ！

しかし、われわれはユートピア主義者ではない。われわれはブルジョア的「論証」の真価を知っており、また変革後ある期間は、慣習のなかに残る古いものの痕跡が新しいものの芽ばえよりも優勢であるのは避けられないことも知っている。新しいものが生まれたばかりのときには、いつでも古いものが、しばらくのあいだは新しいものよりもまだ強い。自然でも、社会生活でも、いつもそうである。新しいものの芽ばえの弱さにたいする嘲笑、安っぽいインテリゲンツィア的懐疑論、等々は、すべて、そのじつ、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの階級闘争の手口であり、社会主義から資本主義を防衛するものである。われわれは、新しいものの芽ばえを入念に研究し、最も注意ぶかくそれを取り扱い、あらゆる方法でその成長を助け、この弱い芽ばえを「いたわり育て」なければならない。そうした芽ばえのいくつかが枯れてしまうことは避けられない。「共産主義土曜労働」こそ、とくに重要な役割を演じるであろうと、請けあうわけにはいかない。問題はそこにあるのではない。問題は、新しいもののありとあらゆる芽ばえを支持することにあるのであって、生活がそのなかから最も生命力のあるものを選びだすであろう。日本の一学者〔註〕は、人々が梅毒を征服するのを助けるために、一定の要求をみたす六〇六号目の薬品をつくりだすまでに、六〇五種の薬品を試験するだけの忍耐力をもちあわせていたが、資本主義を征服するという、より困難な任務を解決しようと望むものは、最も適当な闘争のやり方、方法、手段をつくりあげるために、何百回何千回となく、新しい闘争のやり方、方法、手段を試験してみるだけの根気づよさをもっていなければならない。

「共産主義土曜労働」は、それを始めたのが、けっして、とくによい条件のもとにおかれている労働者ではなく、普

通の、つまりきわめて困難な条件のもとにおかれている種種な専門に属する労働者――なんの専門ももたない労働者、雑役工もふくめて――であるからこそ、きわめて重要なのである。われわれはみな、ひとりロシアだけでなく全世界に見られる労働生産性の低下の根本条件をよく知っている。それは、帝国主義戦争によって生じた零落と窮乏化、憤激と疲労、疾病と栄養不良である。この最後のものが、重要性からいえば第一位を占めている。飢え――これが原因である。だが、飢えをなくすためには、農業でも、運輸でも、工業でも、労働生産性の向上が必要である。したがって、労働生産性を高めるためには、飢えをまぬがれなければならず、飢えをまぬがれるためには、労働生産性を高めなければならないという、悪循環のようなものが生まれる。

だれでも知っているように、このような矛盾は、実践においては、この悪循環を断ちきることによって、大衆の気分の転換によって、個々のグループの英雄的なイニシアティヴによって解決される。そして、このようなイニシアティヴは、大衆の気分のこうした転換を背景として、しばしば決定的な役割を演じる。モスクワの雑役工や、モスクワの鉄道従業員（もちろん、その大多数のことを言っているのであって、ひとにぎりの白衛派の投機者、管理者等々のことではない）――これは、とほうもなく困難な条件のもとで生活している勤労者である。栄養不良はたえまなく、新しい収穫まえの端境期に食糧事情が全般的に悪化している現在では、まさしく飢えている。しかも、まさにこの飢えた労働者が、ブルジョアジー、メンシェヴィキ、エス・エルの悪意ある反革命的扇動にとりまかれながら、「共産主義土曜労働」を組織し、なんの報酬もなしに時間外労働を果たし、疲れはて、へとへとになり、栄養不良のために精根つきているにもかかわらず、労働生産性の大幅な向上を達成しているのである。これこそ最も偉大な英雄精神ではなかろうか？　これこそ、世界史的意義をもつ転換の発端ではなかろうか？

労働生産性、これこそ、けっきょくのところ、新しい社会制度が勝利するために最も重要な、最も肝心なものである。資本主義は、農奴制のもとでは見られなかったような労働生産性を達成した。資本主義は、社会主義が新しい、はるかに高度な労働生産性を達成することによって、これを最後的に打ち破ることができるし、また最後的に打ち破るであろう。これは非常に困難な、非常に長期にわたる事業である。だが、それはすでに始まっている。これこそ最も肝心なことである。もし一九一九年夏の飢えたモスクワで、帝国主義戦争の困難な四年間と、ついで、さらにいっそう困難な内戦の一年半をすごしてきた飢えた労働者が、

この偉大な事業を始めることができたとすれば、われわれが内戦に勝利し、平和をかちとったあかつきには、どのようないっそうの発展がおこなわれるであろうか？

共産主義は、自発的な、自覚した、団結した、先進的技術を利用する労働者の、資本主義的労働生産性にくらべてより高度な労働生産性である。共産主義土曜労働は、共産主義の事実上の端緒として、非常に貴重なものである。だが、これはまたきわめて稀な事柄である。なぜなら、われわれは「資本主義から共産主義への移行の、ようやく最初の数歩を踏みだしているにすぎない」段階にある（わが党の綱領にまったく正当に述べられているように(二六)）からである。

平労働者が、困難な仕事に打ちかちながら労働生産性を向上させようと献身的に心をくばり、労働者自身やその「身近な人々」のものにならないで、彼らにとって「遠い人々」、すなわち全体としての全社会の、はじめは一つの社会主義国家に結合され、のちにはソヴェト共和国連邦に結合される幾千万幾億の人々のものになる穀物、石炭、鉄その他の生産物の一プード一プードを守ろうと献身的に心をくばるところ、そこに共産主義が始まるのである。

カール・マルクスは『資本論』のなかで、自由と人権をうたうブルジョア民主主義の大憲章の大仰さと高言を嘲笑し、今日の卑劣なベルン・インタナショナルの卑劣な英雄たちにいたる、すべての国の小市民や俗物どもの目をくらましている自由、平等、友愛一般についてのこれらすべての美辞麗句を嘲笑している。マルクスは、この仰々しい権利宣言に、プロレタリアートの単純な、つつましい、実務的な、日常的な問題提起、すなわち労働日の国家による短縮を対置しているが(二七)、これはこのような問題提起の典型的な手本の一つである。マルクスの考察がまったく的確で深遠なことは、プロレタリア革命の内容が展開されればされるほど、ますます明らかに、ますますはっきりと現われてくる。真の共産主義の「公式」が、カウツキー派、メンシェヴィキ、エス・エルやその仲よしのベルンの「兄弟たち」の仰々しい、手のこんだ、もったいぶった空語と違うところは、それが万事を労働条件に帰着させていることにある。「勤労民主主義」や「自由、平等、友愛」や「人民権力」などについてのおしゃべりは、なるべく少なくしよう。世故に通じた人が「お偉がた」の非のうちどころないほど「つやつやした」人相や風采を一目見て、すぐ「たぶん詐欺師にちがいない」とまちがいなく見きわめるのと同じくらいにたやすく、今日の自覚した労働者と農民は、これらの大げさな文句のうちにブルジョア・インテリゲンツィアのいかさまを見わける。

美辞麗句をなるべく少なくし、単純な、日常的な仕事をなるべく多くし、一プードの穀物や一プードの石炭のことになるべく多く心をくばろう！　飢えた労働者と、ぼろをまとい、着るものもない農民に必要な、この一プードの穀物や一プードの石炭を、小商人的な取引によって、資本主義的なやり方で手にいれるのでなく、普通の勤労者、すなわちモスクワ―カザン線の雑役工や鉄道従業員のような人人の自覚した、自発的な、献身的、英雄的な労働によって手にいれるようにすることに、なるべく多く心をくばろう。

革命の諸問題のブルジョア・インテリゲンツィア的な、空論家的な取りあげ方の痕跡が、われわれの隊列内をもふくめて、いたるところに、一歩ごとに現われていることを、われわれはみな認めなければならない。たとえば、われわれの新聞は、腐った、ブルジョア民主主義的な過去が残した、これらの腐った遺物とろくろくたたかっていないし、また真の共産主義の単純な、つつましい、日常的な、だが生きた芽ばえをろくろく支持していない。

婦人の地位をとってみたまえ。この点では、世界で最も先進的なブルジョア共和国のどれ一つ、その国の民主的政党のどれ一つとして、ここ数十年のあいだに、われわれが権力をにぎった最初の一年間にこの点でやりとげたことの一〇〇分の一も、なしとげたものはない。われわれは、婦人の権利の不平等や、離婚の制限や、離婚にからまるわずらわしい手続きや、私生児の不認知や、私生児の父のせんさく等々にかんする卑劣な法律――このような法律の遺物は、ブルジョアジーと資本主義にとっては恥さらしなことだが、あらゆる文明諸国にたくさん残っている――を、文字どおりの意味で跡かたも残さなかった。われわれは、この分野でわれわれがなしとげたことをどれだけ誇ってもよい権利がある。しかし、われわれが古いブルジョア的法律や制度の屑を掃きすてて地面をきれいにすればするほど、これが建設のための整地にすぎず、建設そのものではないことが、ますます明らかになったのである。

あらゆる解放的な法律が出されたにもかかわらず、婦人は依然として家庭奴隷のままである。なぜなら、こまごました家事が彼女を押しつぶし、窒息させ、愚鈍にし、いやしめ、彼女を台所と子供部屋に縛りつけ、野蛮なほど不生産的な、こまごました、神経をいらだたせ、人を愚鈍にし、打ちひしぐような仕事によって、彼女の労働をむだづかいしているからである。真の婦人解放、真の共産主義は、このこまごました家事にたいする大衆的な闘争（国家権力をにぎっているプロレタリアートによって指導される）が、もっと正しく言えば、この家事の大規模な社会主義的家事経済への大がかりな改造が始まるところで、またそのとき

にはじめて開始するであろう。

われわれは、理論上すべての共産主義者にとって争う余地のないこの問題に、実践において十分注意をはらっているだろうか？　もちろん、いなである。われわれは、この分野でいますでに生じている共産主義の芽ばえを、十分注意ぶかく取り扱っているであろうか？　もう一度、いなである。公共食堂、託児所、幼稚園――これらこそ、その芽ばえの見本であり、これらこそ、仰々しい、誇大な、ものものしいことはなにもともなわずに、実際に婦人を解放することができ、社会的生産と社会生活で果たす役割のうえでの男女の不平等を実際に少なくし、なくすことのできる単純な、日常的な手段である。これらの手段は新しいものではない。それは、（一般に社会主義のすべての物質的前提がそうであるように）、大規模資本主義によってつくりだされたものである。だが、資本主義のもとでは、これらのものは、第一に、稀にしかみられなかったし、第二に、――とくに重要なことであるが――投機、金儲け、詐欺、いかさまのあらゆる悪い面をそなえた小商人的な企業か、でなければ、すぐれた労働者が憎みさげすむのも無理のない「ブルジョア的慈善の曲芸」であった。

わが国でこれらの施設がはるかにふえたこと、またこれらの施設がその性格を変えはじめていることは、疑う余地がない。婦人労働者や婦人農民のあいだには、われわれが知っているより何層倍も多くの組織者的人材が、とほうもなくうぬぼれている「インテリゲンツィア」や月たらずの「共産主義者」の常の「病弊」である、あの計画や方式等等についてのおびただしい空文句、空さわぎ、口論、おしゃべりなどなしに、多数の労働者とさらに多数の消費者とを参加させて実務を組織する能力をもっている人々がいることは、疑う余地がない。しかし、われわれは、この新しいものの芽ばえをしかるべくいたわり育てていない。

ブルジョアジーを見たまえ。彼らは自分に必要なことをなんとみごとにふいちょうする能力をもっていることであろう！　資本家の目から見た「模範的な」企業は、何百万部という彼らの新聞のなかで、なんとほめちぎられていることであろう！　「模範的な」ブルジョア的施設が、なんと国民的な自慢の種に仕立てられていることであろう！　われわれの新聞は、優秀な食堂や託児所の様子を紹介し、毎日の主張によってこれらのいくつかを模範施設にならせ、それらをふいちょうし、模範的な共産主義的労働のもとでは人間労働がどんなに節約されるか、消費者にどんな便宜があたえられるか、生産物がどんなに節約されるか、婦人が家庭奴隷の状態からどんなに解放されるか、衛生事情がどんなに改善されるか、いかにこうしたことをなしとげる

ことができ、そしてそれを全社会に、全勤労者におしおよぼすことができるかを、くわしく説明することに心をくばっていない、あるいはほとんどまったく心をくばっていない。

模範的な生産、模範的な共産主義土曜労働、穀物の一プードープードを調達し分配するさいの模範的な心づかいと誠実さ、模範的な食堂、しかじかの労働者住宅、しかじかの街区の模範的な清潔さ――こういうことはすべて、われわれの新聞にとっても、また労働者と農民のひとつひとつの組織にとっても、いまの十倍も大きな注意と心づかいの対象とならなければならない。こういうことはすべて、共産主義の芽ばえであり、これらの芽ばえをいたわり育てることは、われわれに共通する第一の義務である。われわれの食糧と生産の事情ははなはだ困難ではあるが、それでもやはり、ボリシェヴィキ権力の成立後一年半のあいだに全戦線にわたって前進がなされたことは、疑いない。穀物の買付は、三〇〇〇万プード（一九一七年八月一日から一九一八年八月一日まで）から一億プード（一九一八年八月一日から一九一九年五月一日まで）に増加した。蔬菜栽培もふえた。穀物の未播種地は少なくなった。鉄道輸送は、非常な燃料難があるにもかかわらず、改善されはじめた、等々。このような一般的背景のうえに、プロレタリア国家権力の支持のもとに、共産主義の芽ばえはしおれるのでなく、おい茂り、完全な共産主義に成長してゆくであろう。

＊＊

この偉大な創意から生まれる非常に重要な実践的教訓のすべてをそれから引きだすためには、「共産主義土曜労働」の意義をよく考えてみなければならない。

この創意を全面的に支持すること――これが第一の、そして主要な教訓である。「コミューン」ということばは、わが国ではあまりにかるがるしく使われるようになった。共産主義者が設立したか、あるいは共産主義者が参加して設立したあらゆる企業が、いきなり「コミューン」と称されることが、きわめてしばしばである。――その場合、このような名誉ある名称は長い根気づよい労働によってかちとられなければならないこと、真に共産主義的な建設のなかで立証された実践上の成功によってかちとらなければならないことが、忘れられていることが珍しくない。

だから、私の意見では、「消費コミューン」という名称にかんするかぎり、人民委員会議の布告を廃止するという、中央執行委員会の大多数の委員の心のなかに熟してきた決定[一〇三]は、まったく正しい。名称はもっと簡単にするがよい。――ついでながら、そうすれば、新しい組織活動の初期の

諸段階の欠陥や不十分な点も、「コミューン」のせいにされないで、悪い共産主義者の責任に帰せられるようになるであろう(当然そうあるべきだが)。「コミューン」ということばを日常の用語からしめだして、猫も杓子もこのことばにとびつくのを禁止するか、あるいは、共産主義的なやり方で仕事に取り組む能力と手腕を実践において真に証明した(そして付近の全住民の一致した承認によって確認された)真のコミューンにだけ、この名称を認めることにしたなら、きわめて有益であろう。まずはじめに、社会のために、全勤労者のために無報酬で働く能力、「革命的なやり方で活動する」能力、労働生産性を高め、模範的に仕事に取り組む能力をもっていることを示したまえ、そうしてのちに、「コミューン」という名誉ある名称に手をさしのべたまえ!

この点では、「共産主義土曜労働」はこのうえなく貴重な例外である。なぜなら、モスクワ—カザン線の雑役工と鉄道労働者は、まずはじめに、彼らが共産主義者として活動する能力があることを実際に示し、そうしてのちに、自分たちの創意に「共産主義土曜労働」という名称をあたえたからである。今後もこのとおりであるように、苦しい労働によって、長期にわたる労働で実地に成功をおさめることによって、模範的に、真に共産主義的に仕事に取り組むことによって証拠だてることもせずに、自分の企業や施設や事業をコミューンと名づける者は、だれであろうとみな容赦なくあざけられ、山師かほらふきとして恥をかかされるように、われわれは努力し、そういう状態を達成しなければならない。

「共産主義土曜労働」の偉大な創意は、いま一つ別の点でも利用されなければならない。すなわち、党の粛清のために利用されなければならない。変革直後の時期、すなわち「実直な」人たちや俗物かたぎの人たちの大多数がとくにおじけた態度をとり、メンシェヴィキやエス・エルをももちろんふくめて、ブルジョア・インテリゲンツィアがひとりのこらずサボタージュし、ブルジョアジーに媚びへつらっていた当時には、冒険主義者や、その他のきわめて有害な分子が支配政党にとりいるのは、まったく避けられないことであった。このようなことのなかった革命は一つもなかったし、またあるはずがない。万事は、健全で強力な先進的階級に依拠している支配政党が、自己の隊列の粛清をおこなう能力をもつことにかかっている。

この点での活動を、われわれはずっとまえから始めていた。この活動を、われわれはうまずたゆまずつづけなければならない。共産党員を戦争に動員したことは、われわれの助けになった。臆病者やろくでなしは党から逃げだした

からである。さっさと出ていってくれたまえ！　党員数のこのような減少は、党の力と威信の大きな増大である。「共産主義土曜労働」の創意を利用して、粛清をつづけなければならない。すなわち、党への加入は、半年のあいだ「革命的なやり方での活動」のいわば「試験」ないし「見習」を経たあとではじめて許すべきである。これと同じような点検は、一九一七年一〇月二五日以後に入党した者で、絶対に信頼でき、忠実で、共産党員たる能力があることを、特別な業績か功績によって証明していないすべての党員にたいしても、要求されなければならない。

真に共産主義的な活動についての党の要請の水準をたえず高めながら、それと結びつけて党の粛清をおこなうならば、国家権力機構は改善されるであろうし、農民が革命的プロレタリアートの側へ決定的に移行するのが大いに早められるであろう。

ついでながら、「共産主義土曜労働」は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとでの国家権力機構の階級的性格を非常にあざやかに照らしだした。党中央委員会が「革命的なやり方での活動」にかんする手紙を書いた。一〇万ないし二〇万の党員（いまはこれより多いから、大粛清ののちにこれだけ残るものと仮定する）をもつ一党の中央委員会が、この考えを提示した。

この考えは、労働組合に組織された労働者によって引きつがれた。わが国の組織労働者の数は、ロシアとウクライナで約四〇〇万人を数えている。彼らの大多数は、プロレタリア国家権力を支持し、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を支持している。二〇万と四〇〇万――これが、そう言ってよければ、「歯車」の伝動比である。それから、何千万人という農民がいる。この農民は次の三つの主要グループに分かれる。すなわち、最も数の多い、プロレタリアートに最も近いもの、すなわち半プロレタリアまたは貧農、ついで中農、最後にごく少数の富農または農村ブルジョアジー。

穀物を売買したり飢えをたねに投機をやったりする可能性が残っているあいだは、農民は依然としてなかば勤労者、なかば投機者である（これはプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとでも、ある期間は避けられないことである）。投機者としては、農民はわれわれに敵意をもち、プロレタリア国家に敵意をもつ。彼は、ブルジョアジーや、穀物売買の自由を主張するメンシェヴィキのシェールまたはエス・エルのベ・チェルネンコフにいたるブルジョアジーの忠実な従僕どもと、協定しようとする傾きがある。しかし、勤労者としては、農民はプロレタリア国家の友であり、地主と資本家とにたいする闘争における労働者の最も忠実な同盟者である。勤労者としては、農民、幾千万人にのぼるその

大多数者は、プロレタリア的前衛である一〇万から二〇万の共産党員に率いられ、幾百万人の組織されたプロレタリアからなっている国家「機構」を支持している。

真の意味でこれ以上民主的な、これ以上固く勤労被搾取大衆に結びついた国家は、地上にまだ存在したことがない。「共産主義土曜労働」とよばれ、またそれに具現されている、このようなプロレタリアの活動こそ、プロレタリア国家にたいする農民の尊敬と愛情の決定的な強化をもたらす。このような活動が——そして、このような活動だけが——、われわれの正しさ、共産主義の正しさを決定的に農民に確信させ、農民をわれわれの忠実な味方とし、したがって、食糧難の完全な克服に、穀物の生産と分配の問題における資本主義にたいする共産主義の完全な勝利にみちびき、共産主義の絶対的な確立にみちびくのである。

一九一九年六月二八日

一九一九年七月にモスクワの国立出版所から単行の小冊子として発行
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、第三九巻、一—二九ページ所収
邦訳全集、第二九巻、四一三—四三九ページ所収

国家について

スヴェルドロフ大学での講義(一六〇)

一九一九年七月一一日

同志諸君、諸君がきめて私に知らせてくれた計画によると、本日の私の談話の主題は国家の問題である。諸君がすでにどれだけこの問題に通じているのか、私は知らない。私の思いちがいでなければ、諸君の課程はいま始まったばかりで、諸君がこの問題を系統的にとりあげるのは今回がはじめてのはずである。もしそうだとすれば、私がこのむずかしい問題についての第一回の講義で、多くの聴講生に十分はっきりわかるように説明し、理解してもらうことができないということも、大いにありそうである。そういうことになっても、諸君はそれを気にしないように、お願いしておく。というのは、国家の問題は、最も複雑な、むずかしい、おそらくブルジョア学者や著作家や哲学者によって

いちばん混乱させられている問題の一つだからである。だから、短い談話でいっぺんにこの問題を完全に明らかにすることができるなどと、けっして期待してはならない。この問題についての最初の談話が終わってから、わからなかった箇所やはっきりしない箇所を自分で心にとめておいて、二度も、三度も、四度もそれに立ちかえるようにし、わからずに終わった点を、あとで、読書やいろいろの講義や談話で補い、さらに解明するようにしなければならない。私は、われわれがもう一度会合をもつことができればよいと思っている。そうすれば、補足的な問題のすべてについて意見を交換し、どういう点がいちばんはっきりしなかったかを、確かめることができるであろう。私はまた、諸君が、談話や講義の補いに、マルクスとエンゲルスの最も主要な著作のせめていくつかを読むために、いくらかの時間をさくように希望する。諸君の図書館でソヴェト学校と党学校の学生の利用に供されている文献目録と参考書のなかに、諸君がそれらの主要著作を見つけることは、疑いない。そして、この場合も、はじめのうちは、叙述がむずかしいため恐れをなす人がいるかもしれないが、それを気にしてはならないこと、はじめて読んだときはわからなかったことも、繰りかえして読んだり、あるいはのちにいくぶん違った側面から問題をとりあげてみれば、わかるようになることを、もう一度あらかじめ注意しておかなければならない。というのは、もう一度繰りかえして言うが、この問題はきわめて複雑で、ブルジョア学者や著作家のためにひどく混乱させられているので、だれでもこれを真剣に考えぬき、自主的に把握したいと思う人は、なんどもこの問題をとりあげ、繰りかえしそれに立ちかえり、いろいろな側面から問題を考え、こうして、明瞭な、しっかりした理解をもつようにならなければならないからである。そして、この問題は、政治全体のきわめて基本的な、きわめて根本的な問題であるから、現在のような、嵐のような革命期だけでなく、きわめて平穏な時期にも、諸君は、毎日、どの新聞を見ても、どの経済問題または政治問題に関連しても、国家とはなにか、その本質はなにか、その意義はどこにあるか、わが党、資本主義の打倒をめざしてたたかっている党、共産主義者の党の国家にたいする態度はどういうものか、という問題につねに出くわすので、それだけに諸君がこの問題に立ちかえることは、容易であろう。諸君は、毎日、いろいろな機会に、この問題に立ちかえることであろう。そして、いちばん肝心なことは、読書や、国家について諸君が耳にする談話や講義の結果として、諸君がこの問題を自主的にとりあげる能力をもつようになることである。なぜなら、諸君は、種々さまざまな機会に、どんな小さい問題

についても、まったく思いがけない組合せでこの問題に出くわし、さらに反対者との会話や論争のさいにも、この問題に出くわすだろうからである。この問題を自主的に判断することができるようになったときにはじめて、諸君は、自分で十分に堅固な信念をもつようになったと考えてよく、また、相手がだれであろうと、どんなときであろうと、自分の信念を十分にうまく主張できるようになるのである。

こういうちょっとした注意をしておいてから、本論に、すなわち、国家とはなにか、国家はどのようにして発生したか、資本主義者の完全な打倒をめざしてたたかう労働者階級の党、共産主義者の党の国家にたいする態度は根本においてどういうものでなければならないかという問題に、とりかかることにする。

国家の問題ほど、ブルジョア科学、哲学、法学、経済学、政論の代表者たちによって、意識的にであれ、知らず知らずであれ混乱させられている問題は、おそらくほかにはないだろうと、私はすでに言っておいた。これまでのところ、この問題は宗教上の問題と混同されている場合が非常に多い。宗教的教義の代表者だけでなく（彼らがそうするのはまったく当然であるが）、自分では宗教的な偏見をまぬかれているつもりでいる人々までが、国家という特殊問題を宗教の問題と混同して、国家とはある神的なもの、ある超自然的なものだとか、人類の生活を可能にしてきたある力、人間に由来せずに外部から人間にあたえられるあるものを人々にあたえており、あるいはあたえるはずであり、そういうものをみずからのうちにふくんでいるある力だとか、国家とは神的な起源をもつ力だとかいう学説――きわめてしばしば、観念的、哲学的にとりあげられ基礎づけられた、こみいった学説――をつくりあげようとしている場合が非常に多い。そして、この学説は、搾取階級――地主と資本家――の利益とたいへん固く結びついていて、彼らの利益に大いに役だっており、ブルジョアジーの代表者諸氏のあらゆる習慣、あらゆる見解、あらゆる学問のなかにたいへん深くしみこんでいるので、諸君は、メンシェヴィキやエス・エルの国家観をもふくめて、いたるところでこの学説の名ごりに出くわすであろうことを、言っておかなければならない。ところが、そのメンシェヴィキやエス・エルは、自分たちが宗教的偏見に支配されているという考えを憤然として否認しており、自分では冷静に国家を考察することができると信じている。この問題がこんなに混乱させられ、ややこしくなっているのは、それがほかのどんな問題にもまして支配階級の利害にふれるからである（この点では、経済科学の基礎原理に一歩ゆずるだけである）。国家学説は、社会的特権を正当化し、搾取の存在を正当化し、資本

主義の存在を正当化することに役だっている。——だからこそ、この問題で不偏不党を期待したり、科学性を僭称している人々がこの分野で純粋科学の見地を諸君に示すことができるかのような考えで、この問題をとりあげたりするのは、このうえない誤りである。諸君が問題に通じて、十分に深くそれをきわめたときには、諸君はつねに国家の問題、国家の学説、国家の理論のうちに、さまざまな階級相互の闘争を見てとるであろう。この闘争は、さまざまな国家観のあいだの闘争や、国家の役割と意義についての評価に反映するか、あるいは表現されているのである。

この問題をできるだけ科学的にとりあげるために、国家がどのようにして成立し、どのように発展してきたかについて、大ざっぱにもせよ歴史的回顧をしてみなければならない。社会科学の問題で最も確かなこと、またこの問題を正しくとりあげる習慣をつけ、たくさんのこまごましたことやあいたたから千差万別の意見のなかに迷いこんでしまわないために必要なこと——この問題を科学的な見地からとりあげるために最も重要なこと——、それは、基本的な歴史的連関を忘れないことであり、ある現象が歴史上どのようにして生じたか、この現象はその発展にあたってどういう主要な諸段階をとおってきたかという見地から、どの問題をも考察することであり、その現象のこのような発展の見地からその事物が今日どうなっているかを考察することである。

国家の問題については、諸君がエンゲルスの著作『家族、私有財産および国家の起源』を学ぶよう、希望する。これは、近代社会主義の基本的著作の一つであって、どの一句も信頼することができ、どの一句もあてずっぽうに言われたものではなく、膨大な歴史的材料と政治的材料にもとづいて書かれていると信頼することのできる著作である。この著作では、かならずしもすべての部分が同じようにはいりやすく、わかりやすく叙述されていないことは、確かである。ある部分は、すでにある程度の歴史上の知識や経済的知識をもちあわせている読者を予定している。しかし、もう一度言うが、この著作を通読していっぺんでそれが理解できないからといって、気にしてはならない。それをいっぺんで理解できた人は、まだひとりもなかったといってよいくらいである。だが、のちに、興味をもつようになってこの著作に立ちかえるなら、諸君は、その全部がすっかり理解できないまでも、その大部分を理解するところまでゆくであろう。私がこの本をあげるのは、この本が、さきほど述べたような意味で、問題の正しいとりあげ方を示しているからである。この本は、国家がどのようにして成立したかについての歴史的概説から始まっている。

この問題にかぎらず、あらゆる問題、たとえば資本主義の成立、人々のあいだの搾取の問題でも、社会主義の問題、社会主義がどのようにして出現したか、どういう条件がそれを生みだしたかという問題でも、それを正しくとりあげようと思えば——すべてこういう問題は、それの発展全体に歴史的な回顧をあたえてこそ、はじめてしっかりと、確信をもってとりあげることができるのである。この問題でまず注意をはらわなければならないことは、国家はつねに存在していたわけではないということである。国家のなかった時代があった。国家は、諸階級への社会の分裂が生じるところで、また生じるときに、搾取者と被搾取者が出現するときに、出現する。

人間による人間の搾取の最初の形態、階級区分の最初の形態——すなわち奴隷所有者と奴隷——が成立するまでは、まだ家父長制家族、あるいはときとして用いられる呼び名によれば——クラン制家族(クラン——血族、氏族。この時代には、人々は氏族、血族をつくって生活していた)が存在していた。この原始時代の痕跡は、多くの原始民族の生活様式にかなりはっきり残っている。また、どれでもよいから原始文化を論じた著作をとってみれば、社会が奴隷所有者と奴隷とに分裂していなかった、多少とも原始共産主義らしい時代があったことを、いくぶんともはっきり記述し、指摘し、回顧している箇所に、かならずゆきあたるであろう。そのころには国家はなかったし、強力を組織的に行使し、強力に人々を従わせるための特殊な機構はなかった。このような機構こそ、国家とよばれるものである。

人々が小さな氏族をつくって生活していて、まだごく低い発展段階に、野蛮に近い状態にあった原始社会には、数千年の歳月で現代の文明人からへだてられている時代には、国家の存在を示す徴候はまだなにも見られない。われわれは、慣習の支配、氏族の長老がもっていた権威、尊敬、権力を見るし、この権力がときには婦人にたいして承認されていたことを見るが——その当時の婦人の地位は、今日の無権利な、抑圧された状態とは似ても似つかないものであった——、しかし、他人を統治するために別に分離し、また統治のために、統治の目的で、ある種の強制機構、強力機構を組織的に、恒常的に掌握しているような人間の特殊な部類は、どこにも見られない。今日そういう機構をなしているのは、諸君がみな理解しているように、武装した軍隊や、監獄や、他人の意志を強力に従わせるためのその他の諸手段である。——つまり、これらのものが国家の本質をなしているのである。

ブルジョア学者が打ちたてている、いわゆる宗教的な教

義や、手のこんだ議論や、哲学理論や、種々さまざまな意見は捨てておいて、問題の真の核心を求めるならば、国家とは、けっきょく、人間社会から分離されたこういう統治の機構にほかならないことが、わかるであろう。統治だけを仕事とし、統治のために特殊な強制機構、他人の意志を強力に従わせるための機構——監獄、特殊な人間部隊、軍隊、その他——を必要とする特殊な人間集団が出現するときに、国家は出現するのである。

しかし、国家がなかった時代、全体的な結束も、社会そのものも、規律も、労働の規則も、慣習や伝統の力によって、氏族の長老や婦人——そのころには、婦人は、しばしば男子と同権の地位を占めていたばかりか、男子よりも高い地位を占めていたことさえ稀ではなかった——がもっている権威または尊敬によってたもたれていた時代、そして統治を専門とする人間の特殊な部類が存在しなかった時代があった。歴史の示すところでは、諸階級への社会の分裂——つまり、その一方が他方の労働をたえずわがものにすることができ、その一方が他方を搾取するような、人間諸集団への分裂——が生じたところではじめて、生じたときにはじめて、人々を強制するための特殊な機構としての国家が出現したのであった。

そして、歴史上のこのような諸階級への社会の分裂を、われわれは基本的な事実として、つねに明瞭に念頭におかなければならない。例外なくすべての国々での数千年にわたるすべての人間社会の発展は、次のような、この発展の一般的な法則性、規則性、継起性をわれわれに示している。すなわち、はじめには階級のない社会——原初の家父長制的原始社会があり、そこには貴族はいなかった。ついで奴隷制に基礎をおく社会、奴隷所有制社会がきた。現代の文明ヨーロッパ全体がこのような社会を経てきた。——二〇〇〇年以前には、奴隷制が完全に支配的であった。世界の他の部分の諸民族の大多数も、この制度を経てきた。最も発達の遅れた民族のあいだでは、いまでもまだ奴隷制の痕跡が残っており、たとえばアフリカには、諸君はいまでも奴隷制の諸制度を見いだすであろう。奴隷所有者と奴隷、これが最初の大きな階級区分であった。まえの集団は、すべての生産手段——土地、道具、たとえその道具がその当時にはどんなに貧弱で原始的であったにせよ——をもっていたばかりか、さらに人間まで所有していた。この集団は奴隷所有者とよばれていた。他方、労働し、他人に労働を提供していた人々は、奴隷とよばれていた。

この形態のあとに歴史上別の一形態がつづいた。——農奴制度がそれである。大多数の国々で、奴隷制はその発展につれて農奴制度に転化した。社会の基本的な区分は、農

奴主的地主と農奴的農民とであった。人間関係の形態は変化した。奴隷所有者は奴隷を自分の財産と見なしていたし、法律はこの見解を確認して、奴隷を完全に奴隷所有者の所有に属する物と見なしていた。農奴的農民について言えば、階級抑圧や隷属は依然として残っていたが、農奴主的地主は物としての農民の所有者とは見なされないで、農民の労働にたいする権利と、農民を強制してある種の役務を果たさせる権利とをもっていたにすぎなかった。実際には、諸君がみな知っているように、農奴制度は、とりわけ農奴制度がどこよりも長く存続し、最も野蛮な形態をとったロシアでは、奴隷制となんら選ぶところがなかった。

ついで、商業が発展し、世界市場が成立するにつれ、貨幣流通が発展するにつれて、農奴制社会のうちに新しい階級――資本家階級が成立した。商品から、商品交換から、貨幣の権力の成立から、資本の権力が成立した。一八世紀のあいだに、もっと正確に言えば、一八世紀の終りから一九世紀をつうじて、全世界に革命が起こった。農奴制は西ヨーロッパのすべての国々から駆逐された。この駆逐は、ロシアではどこよりも遅れておこなわれた。ロシアでも、一八六一年にやはり変革が起こり、その結果、一つの社会形態が他の社会形態と交替した。すなわち、農奴制が資本主義と交替した。資本主義のもとでは、階級区分は依然として残っており、農奴制度のさまざまな痕跡と遺物も残っているが、階級区分は大体において別の形態をとった。

資本の所有者、土地の所有者、工場の所有者は、すべての資本主義国家で住民中のとるにたりない少数を占めていたにすぎず、またいまでもそうであるが、この少数の者が国民労働全体をすっかり自由にしている。つまり、勤労大衆全体をその支配と抑圧と搾取のもとに引きとめているのである。この勤労大衆の多数は、プロレタリア、すなわち、生産過程でもっぱら自分の労力、労働力を売ることによって生活手段を受け取る賃金労働者である。農民は、農奴制時代にすでに細分され圧迫されていたが、資本主義に移るとともに、その一部(多数者)はプロレタリアに転化し、一部(少数者)は、自分で労働者を雇い農村ブルジョアジーを構成する富裕な農民に転化した。

この基本的事実――奴隷制の原始的な形態から農奴制への、そして最後に、資本主義への社会の推移――を、諸君はつねに念頭におかなければならない。なぜなら、この基本的事実を記憶していてはじめて、すべての政治学説をこの基本的な枠にいれることによってはじめて、諸君はこれらの学説を正しく評価し、それがけっきょくどういうことかを見きわめることができるからである。というのは、人類史のこれらの大きな時期――奴隷制時代、農奴制時代、

資本主義時代——は、それぞれ何千年、何万年にわたって、きわめて多くの政治形態、さまざまな政治学説、意見、革命を示しているので、この諸階級への社会の分裂や、階級支配の形態の変化を基本的なみちびきの糸としてしっかりとにぎり、すべての社会問題——経済的、政治的、精神的、宗教的、等々の——をこの見地から究明する場合にだけ、このように異常に雑多な、はなはだしく多様な事柄——とくにブルジョア学者や政治家の政治上、哲学上、その他の学説に関連して——を理解することができるからである。

もし諸君がこの基本的な区分の見地から国家を考察するならば、私がすでに述べたように、社会が諸階級に分かれるまえには国家も存在していなかったことがわかるであろう。だが、諸階級への社会の分裂が生じ、確立されてゆくにつれて、階級社会が成立するにつれて、国家が成立し、確立されてゆく。人類の歴史上には、奴隷制、農奴制、資本主義を経てきた国々、またいま経ている国々は、何十、何百となくある。これらの国のどれをとってみても、巨大な歴史的変化がいろいろ起こったにもかかわらず、人類のこの発展、すなわち奴隷制から農奴制を経て資本主義へ、さらに今日の資本主義反対の世界的闘争への推移にともなうあらゆる政治的転変、あらゆる革命にもかかわらず、つねに国家が成立しているのが見られる。国家はつねに、社会から分離し、統治だけを、あるいはほとんどそれだけを、または主としてそれを仕事とする人間の集団からなる、ある種の機構であった。人々は、統治される人間と、統治の専門家、社会のうえに立ち、統治者、国家の代表者とよばれる人間とに分かれる。この機構、他人を統治する人々のこの集団は、つねにある種の強制機構、物理的力の機構をその手におさめる。人々にたいするこの強力が、原始的な棍棒に表現されようと、あるいは奴隷制の時代にもっと完備した型の武器に表現されようと、または中世に出現した火器に表現されようと、あるいはまた、二〇世紀に技術上の奇跡をなしとげ、近代技術の最新の成果に全的に基礎をおいている近代兵器に表現されようと、それにはかかわらない。強力の方法はいろいろに変わったが、国家が存在していたかぎり、いつでも、どの社会にも、統治し指揮していた機構をその手ににぎる人間の集団が存在していた。そして、この一般的現象をよくしらべ、階級がなかったときには、搾取者と被搾取者がなかったときには、なぜ国家もなかったのか、また階級が成立したときには、なぜ国家も成立したのか、という問題を自分に提出するとき——その

ときにはじめてわれわれは、国家の本質とその意義の問題にたいする明確な回答を見いだすのである。

国家――それは一階級の他の階級にたいする支配を維持するための機構である。社会に階級がなかったころ、人間生活の奴隷制時代にさきだって、広範な平等が維持されていた原始的条件のもとで、まだきわめて低い労働生産性の条件のもとで人々が働いていたころ、原始人が最も粗野な原始生活をおくるのに必要な資料をかろうじて採取していたころ、そのころには、残りの社会全体を統治し支配するために専門的に分離した特殊な人間集団は発生しなかったし、また発生するはずもなかった。諸階級への社会の分裂の最初の形態が出現したとき、すなわち奴隷制が出現したとき、ある人間階級が、最も粗野な形態の農耕労働にもっぱら従事することによって、いくらかの余剰を生産できるようになったとき、この余剰が奴隷のこのうえなくみじめな生活を支えるのに絶対不可欠のものではなくなって、奴隷所有者の手にはいるようになったとき、こうしてこの奴隷所有者の階級の存在が確立されたとき、そのときにはじめて、この階級の存在を確立するために、国家の出現が必要となったのである。

そして、国家――奴隷所有者の国家――は出現した、奴隷所有者の手に権力をあたえ、すべての奴隷を統治する可能性をあたえた機構が。その当時には、社会も国家も今日よりはるかに小さく、交通機関もくらべものにならないほど貧弱なものしかもたなかった。――その当時には、今日のような通信手段はなかった。山や川や海は、今日にくらべて信じられないほど大きな障害となっていたし、国家の形成ははるかに狭い地理的境界のなかでおこなわれた。技術的に貧弱な国家機構が、比較的に狭い境界と狭い行動範囲とをもった国家に奉仕していた。だが、それでもやはり、奴隷を強制して奴隷制のもとにとどまらせ、社会の一部分を他の部分の強制と抑圧のもとに引きとめていた機構があった。社会の大部分を強制して、他の部分のために不断に労働させることは、常設の強制機構がなければ不可能である。階級がないあいだは、こういう機構もなかった。階級が出現したとき、いつでも、どこでも、この分裂が深まり固まるのにともなって、また特殊な制度――国家も出現した。国家の形態は種々さまざまであった。すでに奴隷制時代にも、その当時としては最も先進的、文化的、文明的であった国々、たとえば完全に奴隷制に基礎をおいていた古代ギリシアやローマには、さまざまな国家の形態があった。すでにその当時に、君主制と共和制、貴族制と民主制の差異が生じている。すなわち、一人の人間の権力である君主制、選挙によらない権力がまったく存在しない共和制、比

較的わずかな少数者の権力である貴族制、人民の権力である民主制（民主制とは、ギリシア語からの直訳では、人民の権力ということである）がそれである。すべてこうした差異は奴隷制の時代に生じた。こういういろいろな差異はあっても、奴隷制時代の国家は、それが君主制であったか、貴族的共和制であったか、それとも民主的共和制であったかにはかかわりなく、奴隷所有者の国家であった。

およそ古代史の課程でこの題目についての講義を聞くときには、諸君は君主制国家と共和制国家のあいだでたたかわれた闘争のことを聞くだろう。しかし、根本的な点は、奴隷は人間とは見なされていなかったということである。公民と見なされていなかったばかりか、人間とさえ見なされていなかったのである。ローマ法は奴隷を物と見なしていた。他の人格保護の諸法律はさておき、殺人についての法律さえ奴隷には及ぼされなかった。法律は、ひとり完全な権利をもつ市民と認められていた奴隷所有者だけを保護していた。君主国がつくられれば、それは奴隷所有者の君主国であったし、共和国がつくられれば、それは奴隷所有者の共和国であった。そこでは奴隷所有者がすべての権利をもっており、奴隷は法律上は物であって、奴隷にはどんな暴力をくわえてもよかったばかりか、奴隷を殺しても犯罪とは見なされなかった。奴隷所有者の共和国の内部組織はさまざまであった。貴族的共和制も、民主的共和制もあった。貴族的共和制では、少数の特権者だけが選挙に参加していたし、民主的共和制では、全員がこれに参加していたが、しかしその全員というのは、またしても奴隷所有者だけであり、奴隷を除いた全員であった。この根本的な事情を念頭におかなければならない。なぜなら、このことは、なににもまして国家の問題に光を投げかけるものであり、国家の本質をはっきり示しているからである。

国家とは、一階級が他の階級を抑圧するための機構、一階級に他の諸階級を服従させておくための機構である。この機構の形態はさまざまである。奴隷所有者の国家には、君主制も、貴族的共和制もあれば、民主的共和制さえある。じじつ、統治形態は種々さまざまであったが、事の核心はつねに同じであった。奴隷にはなんの権利もなく、彼らはつねに被抑圧階級であって、人間とは認められていなかった。これと同じことは、農奴制国家にも見られる。

搾取の形態が変わった結果、奴隷制国家は農奴制国家に変わった。これは非常に重要な意味をもっていた。奴隷制社会では、奴隷はまったく無権利で、人間とは認められていなかった。農奴制社会では、農民は土地に縛りつけられていた。農奴制度の基本的な標識は、農民が（その当時は

農民が大多数を占めており、都市住民の発達はきわめて弱かった）土地に緊縛されたもの（プリクレプリョンヌイ）と見なされていたことである。――ここからして、農奴制度（クレポストノエ・プラーヴォ）という概念そのものが出てきたのである。農民は、地主からあたえられた地所で、あるきまった日数だけ自分のために働くことができたが、その残りの日を農奴的農民は、御主人様のために働いた。階級社会という本質には変わりがなかった。社会は階級的搾取のうえに維持されていた。完全な権利をもつことができたのは地主だけであり、農民は無権利者と見なされていた。実際には、農民の地位は、奴隷制国家における奴隷の地位とたいして違わなかった。だが、それでも、彼らの解放への、農民の解放への、いっそう広い道がひらけていた。というのは、農奴的農民は地主の直接の財産とは考えられていなかったからである。農奴的農民は、その時間の一部を自分の地所ですごすことができ、いわばある程度まで自分自身のからだとなることができた。また、交換や商業関係が発展する可能性がより大きかったから、農奴制度はますます分解してゆき、農民の解放の範囲はますますひろがっていった。農奴制社会は、奴隷制社会にくらべてつねに複雑であった。ここには、商工業の発展の強力な要素があり、すでにそのころでさえ資本主義にみちびいていた。中世には農奴制度が優勢であった。ここでも国家の形態はさまざまであり、ここでも君主制もあれば共和制もあった。もっとも、共和制の現われははるかに弱かった。しかし、支配者と認められていたのは、つねに農奴主的地主だけであった。農奴的農民はあらゆる政治的権利の分野で絶対的に排除されていた。

　奴隷制のもとでも農奴制度のもとでも、わずかな少数の人々が大多数の人々を支配するには、強制なしではやっていけない。歴史は、被抑圧諸階級が抑圧をくつがえそうとしたたえまない企てにみちている。奴隷制の歴史には、奴隷制からの解放をめざした数十年にわたる戦争が知られている。ついでながら、今日ドイツの共産主義者――すなわち、真に資本主義のくびきに反対してたたかっているただ一つのドイツの党――が採用している「スパルタクス派」という名まえ、この名まえを彼らが採用したのは、スパルタクスが、約二〇〇〇年以前に起こった最大の奴隷蜂起の一つにおける最もすぐれた英雄のひとりだったからである。完全に奴隷制を基礎としており、一見全能のようであったローマ帝国は、スパルタクスの指揮下に武装し結束して巨大な軍隊をつくった奴隷の大蜂起のために、何年ものあいだゆすぶられ、打撃をうけた。奴隷はけっきょくは打ち破られ、捕えられ、奴隷所有者の手で責めさいなまれた。こういう内乱は、階級社会の存在の全歴史をつらぬいている。

私はいま、奴隷制時代におけるこういう内乱の最大のものを例にとった。農奴制度の時代も、同様に、農民のたえまない蜂起にみちている。たとえばドイツでは、中世に、二つの階級、すなわち地主と農民のあいだの闘争は広大な規模をとるようになり、地主にたいする農民の内乱に転化した。諸君がみな知っているように、ロシアでも、農民が農奴主的地主にたいしていくたびとなく同じような蜂起をおこした実例がある。

自分の支配を維持するため、自分の権力をたもつために は、地主は、膨大な数にのぼる人々を一つにまとめて地主に従属させ、ある種の法律や規則――これらの法律はみな、根本において一つのことに、つまり農奴的農民にたいする地主の権力を維持することに帰着するものであった――に従わせるような機構をもたなければならなかった。これがすなわち農奴制国家であって、この国家の形態は、たとえばロシアや、いまなお農奴制の支配のもとにある、まったく遅れたアジアの国々で、さまざまであり、あるものは共和制、あるものは君主制であった。君主制国家の場合には、一人の人間の権力が認められていた。共和制国家の場合には、地主社会から選挙された人々が多少ともこれに参加することが認められていた。これが農奴制社会の状態である。農奴制社会は、大多数者――農奴的農民――がとるにたりない少数者――土地を領有する地主――に完全に隷属しているような階級区分をあらわしていた。

商業の発展、商品交換の発展は、新しい階級――資本家――を分離させた。資本は中世の終りに発生した。その当時アメリカの発見につづいて世界貿易が大きな発展をとげ、貴金属の量がふえ、銀と金が交換用具となり、貨幣流通が一部の人の手に莫大な富をたくわえる可能性をあたえた。銀と金は全世界で富として承認された。地主階級の経済力は衰え、新しい階級――資本の代表者――の力が伸展していった。社会は、すべての市民が表面上平等となり、奴隷所有者と奴隷とへのこれまでの区分がなくなり、万人が法の前に平等と認められるというふうに改造された。こうして、だれがどんな資本をもっていようと、それが私的所有権にもとづく土地であろうと、働く手をもつだけの極貧者であろうと、そのことにはかかわりなく、万人が法の前に平等となった。法律は、すべての人を一律に保護し、だれの財産であろうと、それが、財産をもたず、自分の手のほかはなに一つもたず、しだいに窮乏し、零落し、プロレタリアになってゆく大衆のために侵害されることのないように保護する。これが資本主義社会である。

私は、この点にくわしく立ちいって述べることはできない。諸君は、党綱領について話し合うさいに、いま一度こ

の問題に立ちかえるであろう。そのときに諸君は、資本主義社会の特徴づけを聞かれるであろう。この社会は、農奴制に反対し、古い農奴制度に反対して、自由のスローガンをかかげて立ち現われた。しかし、それは、財産をもつ人人にとっての自由であった。そして、農奴制度が破壊されたとき――この破壊は、一八世紀末から一九世紀のはじめにかけておこなわれ、ロシアでは他の国々に遅れて一八六一年におこなわれた――、農奴制国家に入れかわって資本主義国家が現われた。この国家は、そのスローガンとして全人民の自由を宣言しており、みずから全人民の意思を表明すると語り、自分が階級国家であることを否認する。そして、ここでは、全人民の自由のためにたたかう社会主義者と資本主義国家とのあいだに闘争が発展する。この闘争は、いまではソヴェト社会主義共和国の創立にみちびいており、全世界にひろがっている。

世界資本にたいして始められたこの闘争を理解し、資本主義国家の本質を理解するためには、資本主義国家が農奴制国家に反対して立ち現われ、自由のスローガンをかかげて戦いにむかったということを、覚えておく必要がある。農奴制度の廃止は、資本主義国家の代表者たちにとって自由を意味していたし、また農奴制度が崩壊し、農民が買戻しによってか、あるいは小部分は年貢(オブローク)によって買い取った(それがどちらでであろうと、国家は気にかけなかった)土地を完全な財産として所有する可能性を得たかぎりで、これらの資本主義国家の代表者たちの役に立った。国家は、その財産がどういう経路で生じたかにかかわりなく、財産を保護した。というのは、この国家は私的所有の基礎のうえに立っていたからである。農民は、すべての近代的文明国で私的所有者に変わった。地主が土地の一部を農民に渡した場合にさえ、国家は私的所有を保護し、買戻し、すなわち金と引きかえの売却という手段で、地主に補償をあたえた。これはいわば、国家が、われわれは私的所有権を完全に保護する、と声明したにひとしく、国家は私的所有にあらゆる支持と庇護をあたえてきた。国家は、一人ひとりの商人、工業家、工場主に、この所有権を認めてきた。しかも、こういう社会が、――私的所有に、資本の権力に、すべての無産労働者と勤労農民大衆との完全な隷属に基礎をおくこの社会が、みずから、自由にもとづいて支配する社会であると称したのである。この社会は、農奴制度とたたかうさいに、財産は自由であると宣言したし、国家がもはや階級国家ではなくなったかのように言って、そのことをとりわけ自慢にした。

ところが、国家は依然として資本家が貧農と労働者階級を隷属させておくのを助ける機構であった。しかし、外見

上では国家は自由であった。この国家は、普通選挙権を布告し、自分の擁護者、宣伝者、学者、哲学者の口を借りて、この国家は階級国家ではない、と宣言している。この国家にたいするソヴェト社会主義諸共和国の闘争が始まっている今日でさえ、彼らはわれわれを非難して、われわれが自由の侵害者であるかのように、強制や、一部の人々による他の人々の抑圧に基礎をおく国家をつくっているかのように言い、自分たちのほうは全人民的な民主主義国家を代表しているかのように言っている。そこで、今日、全世界で社会主義革命が始まっているとき、そしていくつかの国で革命が勝利し、世界資本との闘争がとくに激しくなっているまさにこのときに、この問題——国家の問題は、このうえなく重要な意義をもつようになったのであって、それは最も切実な問題となり、現代のあらゆる政治問題とあらゆる政治的論争の焦点になった、と言ってさしつかえない。

ロシアでも、またどこであろうともっと文明的な国でも、そこのどの政党をとってみても、いまではほとんどすべての政治的論争、異論、意見は、国家の概念をめぐってたたかわされている。資本主義国における国家、民主的共和国——とくにスイスやアメリカのような——、最も自由な民主的共和国における国家は、民意の表現、全人民の決定の総括、国民意思の表現、等々であるのか、それとも国家は、その国の資本家が労働者階級と農民にたいする権力を維持できるようにするための機構であるのか？　これは、現在全世界の政治的論争の中心におかれている基本問題である。ボリシェヴィズムについて人々はなんと言っているか？ブルジョア新聞はボリシェヴィキを罵倒している。ボリシェヴィキにたいして、人民主権の侵害者だという流行の非難を繰りかえしていないような新聞は、ただの一つも見つかるまい。もしわがメンシェヴィキや社会革命党が、愚鈍なために（あるいは愚鈍のせいでさえないかもしれない。あるいはそれは、盗みよりもまだ悪いとことわざに言う、あの愚鈍かもしれない）、ボリシェヴィキは自由と人民主権を侵害したという、発明者は自分たちだと考えているとすれば、それはこのうえなく滑稽な思いちがいである。いまでは、どんなに富裕な国々のどんなに富裕な新聞でも——自紙の普及のために幾千万の金をつかい、幾千万の部数でブルジョアのうそや帝国主義的政策をひろめているこれらの新聞のどれ一つも——、ボリシェヴィズムに反対するこれらの基本的な論拠や非難を繰りかえしていないようなものはない。すなわち、アメリカやイギリスやスイスは人民主権に基礎をおく先進国家だが、ボリシェヴィキの共和国は盗賊の国家だ、ボリシェヴィキの国家には自由がない、ボリシェヴィ

キは人民権力の理念の侵害者であって、というのがそれである。ボリシェヴィキにたいするこうした恐ろしい非難、全世界で繰りかえされているこれらの非難は、われわれを国家とはなにかという問題にまっすぐにみちびく。これらの非難を理解するためには、——これらの非難をよく究明して、それにたいして十分意識的な態度をとり、うわさだけで判断するのでなく、しっかりした意見をもつためには、国家とはなにかということを、はっきり理解しなければならない。この点では、あらゆる種類の資本主義国家があり、またこれらの国家を擁護してあらゆる学説が戦前からつくりだされている。問題の解決に正しく取り組むためには、これらの学説と見解のすべてに批判的な態度で臨まなければならない。

私はすでに諸君の参考書として、エンゲルスの著作『家族、私有財産および国家の起源』をあげておいた。同書ではまさに次のように言っている。土地と生産手段の私的所有が存在しており、資本が支配している国家は、どんなに民主的であろうと、すべて資本主義国家であり、労働者階級と貧農を隷属させておくための資本家の手中にある機構である。そして、普通選挙権、憲法制定議会、国会——これらはただの形式、一種の約束手形にすぎず、けっして事態を本質的に変えるものではない、と。

国家の支配形態はさまざまでありうる。支配の形態が違えば、資本がその力をあらわす仕方は違ってくる。だが、実質上は権力はつねに資本の手にたもたれている。——制限選挙権があろうが、それとは違った選挙権があろうが、民主的共和制であろうがなかろうが、この点に変わりはない。——そして、民主的共和制であればあるほど、資本主義のこの支配はそれだけいっそう凶暴で、鉄面皮でさえある。世界で最も民主的な共和国の一つは北アメリカ合衆国である。しかも、資本の権力、全社会にたいするひとにぎりの億万長者の権力が、この国ほど乱暴な仕方で現われているところ(一九〇五年以後に同地をおとずれたものなら、きっと知っているだろう)、アメリカにおけるほど公然たる買収をともなっているところは、ほかにどこにもない。ひとたび資本が存在すれば、それは全社会を支配する。そして、どんな民主的共和制も、どんな選挙権も、事の本質を変えはしない。

民主的共和制と普通選挙権とは、農奴制度にくらべれば巨大な進歩であった。それらは、プロレタリアートに、いま彼らがもっているあの団結、あの結束を達成し、いま資本にたいする組織的闘争をおこなっているあの整然たる、規律ある隊列をつくる可能性をあたえた。奴隷はもちろん

のこと、農奴的農民も、近似的にせよこれに類するものをもっていなかった。われわれが知っているように、奴隷は蜂起をおこし、一揆を企て、内乱を始めたが、自覚した多数者、闘争を指導する政党をつくりだすことはけっしてできなかったし、自分がどういう目標にむかってすすんでいるのかをはっきりと理解できず、歴史上最も革命的な瞬間にさえ、つねに支配階級の手中にある歩駒であった。ブルジョア共和制、議会、普通選挙権——これらすべては、社会の世界的発展の見地からみて、巨大な進歩である。人類は資本主義にむかってすすんできた。そして、資本主義がはじめて、都市文化のおかげで、抑圧されたプロレタリア階級に自分自身を認識する可能性をあたえ、大衆の闘争を意識的に指導しているあの世界労働運動を、全世界で党に組織されているあの幾百万の労働者を、あの社会主義諸党をつくりだす可能性をあたえたのである。議会制度がなかったなら、選挙制がなかったなら、労働者階級のこのような発展は不可能であったろう。だからこそ、すべてこうしたことは、最も広範な人民大衆の目にきわめて重要なものとして映じるようになったのである。だからこそ、転換ははなはだしく困難なものと思えるのである。国家は自由であり、万人の利益を擁護する使命をおびているという、このブルジョア的なうそを支持し擁護しているのは、意識的な偽善者、学者、僧侶だけではない。昔ながらの偏見を本気で繰りかえし、古い資本主義社会から社会主義への移行を理解することのできない多くの人々も、これを擁護している。ブルジョアジーに直接に隷属している人々ばかりでなく、資本の抑圧下にある人々、あるいはこの資本に買収された人々(多数の、あらゆる種類の学者、芸術家、僧侶などが資本の御用をつとめている)ばかりでなく、たんにブルジョア的自由についての偏見の影響をうけているだけの人々までもふくめて、彼らのすべては、ソヴェト共和国がその創立にあたってブルジョアのこのうそをしりぞけて、次のように公然と声明したため、全世界でボリシェヴィズムに反対して立ちあがっている。すなわち、諸君は自分の国家を自由な国家とよんでいるが、実際には、私的所有があるかぎり、諸君の国家は、たとえ民主的共和国であっても、資本家の手中にある労働者抑圧の機構にほかならないし、国家が自由であればあるほど、この事実はいっそう明瞭に現われてくる、と。その例は、ヨーロッパではスイス、アメリカでは北アメリカ合衆国である。これらの国は民主的共和国であるが、たとえそれがどんなに優美にかざりたてられていようと、勤労民主主義とか、すべての市民の平等とかをどんなに口にしていようと、まさにこれらの国ほど、資本が鉄面皮に、無慈悲に支配しているところ、この

ことがこれらの国ほど明瞭に見られるところは、ほかにどこにもない。実際には、スイスとアメリカでは資本が支配しており、労働者が自分の地位のいくぶんでも重要な改善をかちとろうと試みるごとに、かならずただちに内乱に当面するのである。これらの国では、兵士、常備軍の人数は比較的少ない。スイスには民兵があって、スイス人はみな自分の家に小銃をもっている。アメリカでは最近まで常備軍はなかった。だから、ストライキが起こると、ブルジョアジーは自分で武装し、兵士を雇いいれてストライキを弾圧する。しかも、労働運動のこの弾圧がスイスやアメリカほど無慈悲な残虐さでおこなわれているところは、ほかにどこにもなく、また資本の影響がまさにこの両国ほど強く議会に現われているところは、ほかにどこにもない。資本の力——これがすべてである。取引所——これがすべてである。だが、議会、選挙——これはあやつり人形であり、傀儡である。……しかし、時とともに労働者の目はますます明らかに澄みゆき、ソヴェト権力の思想はますます広範にひろまってゆく。とくに、われわれがさきごろ味わった血なまぐさい屠殺のあとでは、なおさらそうである。労働者階級にとって、資本家との容赦ない闘争が必要だということは、ますます明らかになってゆく。

共和制がどのような形態をよそおっているにせよ、たとえどんなに民主的な共和国であろうと、それがブルジョア共和国であるかぎり、そこに土地や工場の私的所有が残っていて、私的資本が全社会を賃金奴隷制のもとに引きとめているかぎり、つまり、わが党の綱領とソヴェト憲法とが宣言しているような事柄がそこでなしとげられていないかぎり、その国家は、一部の人々が他の人々を抑圧するための機構である。だから、われわれは、資本の権力を打倒すべき階級の手にこの機構を掌握させるであろう。われわれは、国家とは普遍的な平等であるという古い偏見をすべて捨てさるであろう。これは欺瞞である。搾取があるかぎり、平等はありえない。地主は労働者と平等ではありえないし、飢えた人間は満腹した人間と平等ではありえない。国家とよばれ、人々が迷信的な崇敬をもってはばかっており、それは全人民的な権力であるというおとぎ話を信じているその機構——その機構をプロレタリアートは投げすてて、こう言う。これはブルジョアのうそだ。われわれはこの機構を資本家から取りあげて自分の手ににぎった。われわれはこの機構、つまり棍棒をつかって、あらゆる搾取を粉砕しよう。そして、この世にもはや搾取の可能性がなくなったとき、土地の所有者、工場の所有者がなくなったとき、一方では満腹しているのに、他方では飢えているというような状態がなくなったとき——そういうことをやる可能性が

もはやなくなったときに、はじめてわれわれはこの機構をごみためにほうりすてよう。そうなったときには、国家はなくなるであろうし、搾取もなくなるであろう、と。これがわが共産党の立場である。われわれが今後の講義でこの問題に立ちかかえることが、それも幾度か立ちかかえることができればよいと、私は思っている。

一九二九年一月一八日に新聞『プラウダ』第一五号にはじめて発表
全集、第五版、第三九巻、六四―八四ページ所収
邦訳全集、第二九巻、四七七―四九六ページ所収

ソヴェト共和国における婦人労働運動の任務について

第四回モスクワ全市党外婦人労働者会議での演説
一九一九年九月二三日

同志のみなさん。婦人労働者会議にあいさつを述べるのは、たいへんうれしいことである。私は、現在すべての婦人労働者の心にも、勤労大衆出身のどの自覚した人の心にも、当然になによりも大きな懸念を引きおこしているテーマ、問題には、あえて触れないことにする。それは、最も焦眉の諸問題、すなわち穀物の問題とわれわれの軍事情勢の問題である。だが、あなたがたの集まりについての新聞記事から、これらの問題については、この会議で軍事問題については同志トロツキーが、穀物の問題については同志ヤーコヴレヴァとスヴィデルスキーがあますところなく説

明したことを知っているので、私はこれらの問題にはあえてふれないことにする。

私は、ソヴェト共和国における婦人労働運動の一般的な諸任務について、すなわち、一般に社会主義への移行に関連した任務と、さらに現在とくに緊急なものとして前面に押しだされてきている任務との双方について、すこしばかり述べてみたいと思う。同志のみなさん、ソヴェト権力は、最初から婦人の地位の問題を提起してきた。私には、すべて社会主義へ移行しつつある労働者国家の任務は、二重となるように思われる。この任務の第一の部分は比較的簡単で容易である。それは、婦人を男子にたいして不平等な地位においてきた古い法律にかんする任務である。

ずっと昔から、西ヨーロッパのあらゆる解放運動の代表者は、何十年というだけでなく何百年ものあいだ、こうした時代おくれの法律を廃止し、男女の法律上の平等を確立するようにという要求を提出してきた。だが、ヨーロッパのどの民主主義国家も、どんなに進んだ共和国も、この要求を実現できたものは一つもなかった。というのは、資本主義が存在するところ、土地の私的所有、工場の私的所有が維持されているところ、資本の権力が維持されているところでは、男子の特権が残っているからである。ロシアでこの要求を実行することができたのは、ひとえに、一九一七年一〇月二五日にこの国で労働者の権力が樹立されたからである。ソヴェト権力は、最初から、あらゆる搾取に敵対する勤労者の権力として存在することを、その任務としてきた。それは、地主や資本家が勤労者を搾取できないようにし、資本の支配をなくすことを、その任務としてきた。ソヴェト権力は、勤労者が、土地の私的所有なしに、工場の私的所有なしに、つまり、全世界のどこでも、完全な政治的自由がおこなわれているところでさえ、どんなに民主的な共和国でも、事実上勤労者を貧困と賃金奴隷の状態におとしいれ、婦人を二重の奴隷状態におとしいれている、あの私的所有なしに、自分の生活を建設してゆくようにするために努力してきた。

勤労者の権力であるソヴェト権力は、成立当初の数ヵ月のあいだに、婦人にかんする立法の面で断固たる変革をおこなった。ソヴェト共和国では、婦人を隷属的地位においてきた法律は跡かたも残っていない。私が言っているのは、婦人の弱い立場をことさらに利用して、婦人を不平等な、しばしば屈辱的でさえある地位においてきたような法律、すなわち、離婚や、私生児や、子供の父親にたいして子供の扶助料の請求訴訟をおこす婦人の権利についての法律のことにほかならない。

まさにこの分野では、どんなに進んだ国々のブルジョア

立法も、婦人の弱い立場を利用して、婦人を不平等な地位におき、婦人をいやしめていると言わなければならない。しかも、まさにこの分野で、ソヴェト権力は、勤労大衆の代表者にとって耐えられない、古い不当な法律を、跡かたもなく一掃したのである。そして、現在われわれは、完全な誇りをもって、すこしの誇張もなしに、こう言うことができる。婦人の完全な同権がおこなわれている国、婦人が屈辱的な地位——これは、日常の家庭生活でとくに強く感じられる——におかれていない国は、ソヴェト・ロシアのほかには世界に一つもない、と。これが、われわれの第一の、最も重要な任務の一つであった。

もしあなたがたがボリシェヴィキに敵対的な政党と接触するおりがあれば、でなければ、コルチャックやデニーキンに占領された地方でロシア語で発行されている新聞を手にいれるか、あるいはこれらの新聞と見解を同じくしている人々と話をするおりがあれば、ソヴェト権力は民主主義を侵犯したという非難を、彼らの口からしばしば聞くことであろう。

われわれ、ソヴェト権力の代表者、ボリシェヴィキ派共産主義者、ソヴェト権力の味方は、民主主義を侵犯したといってたえず非難されており、この非難の証拠として、ソヴェト権力が憲法制定議会を解散したという事実がもちだされている。こういう非難にたいして、われわれは通常次のように答えている。土地の私的所有が存在しているところで、人々が相互に平等でなく、自分の資本をもつ者が主人で、その他の者、この主人のもとで働く者がその賃金奴隷であったときに成立した民主主義や憲法制定議会——そういう民主主義にわれわれは価値を認めない、と。そういう民主主義は、最も進んだ国々でさえ奴隷制をつつみかくしてきた。われわれ社会主義者は、民主主義が勤労者と被抑圧者の地位を楽にするかぎりでのみ、民主主義の味方である。社会主義は、全世界で、人間による人間のあらゆる搾取とたたかうことをその任務としている。われわれにとって真に重要なのは、被搾取者の役に立ち、不平等の地位におかれている人々の役に立つ民主主義である。働かない者から選挙権を奪うとすれば、それこそが、人々のあいだの真の平等である。働かない者は食うべからず。

右の非難に答えて、われわれは次のように言う。あれこれの国家で民主主義がどのように実現されているかという質問を提出しなければならない、と。すべての民主的共和国で平等が宣言されているのをわれわれは見ているが、民法でも、婦人の権利をきめた諸法律でも、家庭内の婦人の地位や、離婚にかんする面で婦人がたえず不平等な地位におかれ、いやしめられているのを、われわれは見ている。

そこで、われわれは言う。これこそ、民主主義にたいする侵犯であり、しかもほかならぬ被抑圧者にかんして民主主義を侵犯するものである、と。ソヴェト権力は、その法律に婦人の不平等の影さえ残さなかった点で、他のどの国よりも、最も進んだ国々よりもずっと多く民主主義を実現した。繰りかえして言うが、どの国家も、どの民主主義的な立法も、婦人のために、ソヴェト権力がその成立当初の数ヵ月のあいだにやったことの半分もなしとげたものはない。

もちろん、法律だけでは十分でなく、われわれはけっして布告だけに満足するものではない。だが、立法の分野で、われわれは、婦人の地位と男子の地位とを平等にするためにわれわれに要求されていたことはみなおこなったし、われわれは当然にこのことを誇ってさしつかえない。いまでは、ソヴェト・ロシアにおける婦人の地位は、最も進んだ国々の見地からみてさえ理想的なものである。だが、われわれは自分に言いきかせる。もちろん、これはまだ手はじめにすぎない、と。

婦人が家事に忙殺されているかぎり、婦人の地位はあいかわらず圧迫されたままである。婦人を完全に解放し、男女の真の平等を実現するためには、共同の家事経済を実現し、婦人を一般的な生産的労働に参加させなければならない。そうなれば、婦人は男子と同様な地位を占めるようになろう。

もちろん、ここで言っているのは、労働の生産性や、労働量や、労働日の長さや、労働条件などの点で、男女を平等にするということではない。婦人が、男子と違った経済的地位の圧迫をこうむることがあってはならないということである。あなたがたがみな知っているとおり、婦人は家事をのこらず負担させられているので、たとえ完全な同権がおこなわれていても、婦人はやはり事実上圧迫されたままである。この家事は、たいていの場合、婦人がおこなう仕事のうちで最も非生産的な、最も野蛮な、最も骨のおれる仕事である。この仕事は、ひどくこまごましたものであって、そこには婦人の進歩を助けるようなものはなにもふくまれていない。

われわれは、社会主義の理想を追求して、社会主義の完全な実現のためにたたかおうと思っているが、ここでは婦人のためにきわめて広い活動舞台がひらかれている。現在、われわれは社会主義を建設するための地ならしを真剣に準備しているが、社会主義社会の建設そのものは、われわれが婦人の完全な平等をかちとって、こまごました、人を愚鈍にする、非生産的な労働から解放された婦人といっしょに新しい仕事にとりかかるときにはじめて、始まるであろう。この仕事には何年も、何年もかかるだろう。

この仕事は、すぐに成果があがるようなものではなく、はなばなしい効果を生むことはないだろう。

われわれは、婦人を家事から解放するような模範施設、食堂や託児所をつくっている。ここでも、これらすべての施設を整備するこの仕事は、だれよりもまさに婦人の肩にかかっている。現在ロシアには、婦人が家内奴隷の状態から抜けだすのを助けるような施設はごくわずかしかないことを、認めなければならない。その数は言うにたりないほどである。しかも、ソヴェト共和国が現在おかれている状態——他の同志たちがこの会議でくわしく述べた軍事事情や、食糧事情——のために、われわれはこの仕事を妨げられている。だが、それでも、そうする可能性がすこしでもあるところにはどこにも、婦人を家内奴隷の地位から解放するこれらの施設が生まれていることを、言っておかなければならない。

労働者の解放は労働者自身の仕事でなければならない、とわれわれは言うが、それと同様に、婦人労働者の解放も婦人労働者自身の仕事でなければならない。婦人労働者自身がこうした施設の発展に心をくばらなければならない。そして、婦人のこういう活動は、資本主義社会で彼女たちがこれまで占めてきた地位をすっかり変えることになろう。

古い資本主義社会では、政治にたずさわるためには特殊な修業が必要であった。だから、どんなに進んだ自由な資本主義諸国でも、婦人の政治参加は言うにたりないほどであった。われわれの任務は、政治を、勤労婦人のだれの手にでもとどくものにすることである。土地や工場の私的所有がなくなり、地主と資本家の権力が打倒されたそのときから、政治の任務は、勤労大衆と勤労婦人にとって、簡単で明瞭で、だれにも完全に手のとどくものになっている。資本主義社会では、婦人ははなはだしく無権利な状態におかれているので、婦人の政治参加の割合は、男にくらべて言うにたりないほどである。この状態を変えるためには、勤労者の権力が存在する必要があり、そうなれば、勤労者自身の運命に直接に関係のあるあらゆる事柄が政治の主要な任務となるであろう。

ここでも、党員である自覚した婦人労働者だけでなく、非党員の、最も無自覚な婦人労働者を参加させることが必要である。ここでは、ソヴェト権力によって、婦人労働者にたいして広範な活動分野がひらかれている。

われわれは、ソヴェト・ロシアに敵対し、それに戦役をしかけている勢力との闘争で、非常な困難をなめてきた。軍事的な分野での、勤労者の権力に戦争をしかけている軍勢とのたたかいも、食糧の分野での投機者とのたたかいも、われわれにとってきわめて困難であった。なぜなら、骨を

おって心からわれわれを助けにきてくれる人々の数、勤労者の数は、まだ十分多くないからである。ここでも、非党員の婦人労働者の広範な大衆の援助ほど、ソヴェト権力にとってたいせつなものはありえない。婦人はどうか次のことを知ってほしい。古いブルジョア社会で政治活動にたずさわるには、おそらく、面倒な修業が必要であったろうし、この修業は婦人には手のとどかないものであったろう。だが、ソヴェト共和国における政治活動は、地主と資本家との闘争、搾取をなくすための闘争をその主要な任務とするものである。だから、ソヴェト共和国における政治活動は婦人労働者の手におよぶものであって、この政治活動は、婦人が自分の組織者としての能力によって男子を助けることにあるであろう。

われわれに必要なのは、幾百万人の規模での組織活動だけではない。われわれには、婦人も働くことのできるごく小規模な組織活動も必要である。戦争の条件のもとにあっても、軍隊を助け、軍隊のなかで扇動をおこなうという面で、婦人は働くことができる。自分たちのために心をくばり心配してくれる者がいることを、赤軍が知るように、婦人は、これらすべての仕事に積極的に参加しなければならない。婦人はまた、食糧の分野でも、食糧の配給や、公共給食の改善や、現在ペトログラードに広範に設置されている公共食堂の発展のために、働くことができる。

こうした分野では、婦人労働者の活動が真に組織者的な意義をもつものとなっている。大規模な実験施設を組織し監督する面でも、この仕事をわが国で個々ばらばらのものとならせないために、婦人が参加する必要がある。この仕事に多数の勤労婦人が参加しなければ、これは実行できない。しかも、婦人労働者は、食糧の配給を監督する面でも、食糧がもっと入手しやすくなるように監督する面でも、十分にこの仕事にとりかかることができる。この任務は非党員の婦人労働者でも十分にこなせるものであるが、その一方、この任務が実現されれば、なににもまして社会主義社会を強固にする助けとなるであろう。

土地の私的所有を廃止し、工場の私的所有をもほとんど全面的に廃止したのち、ソヴェト権力は、党員も非党員も、男子も婦人も、すべての勤労者をこの経済建設に参加させるよう努力してきた。ソヴェト権力によって始められたこの仕事は、何百人ではなく、何百万人、何千万人の婦人が全ロシアにおいてこれに参加するときにはじめて、これを前進させることができる。そうなれば、社会主義建設の事業はしっかりと確立されると、われわれは確信している。そうなれば、勤労者は、地主や資本家がいなくとも生活し、経済をいとなんでゆくことができるということを証明する

であろう。そうなれば、ロシアにおける社会主義建設はしっかりしたものとなり、他の国々のどんな外敵も、またロシア国内のどんな敵も、ソヴェト共和国にとって恐ろしいものではなくなるであろう。

『プラウダ』第二一三号、一九一九年九月二五日
全集、第五版、第三九巻、一九八―二〇五ページ所収
邦訳全集、第三〇巻、二一七―二二三ページ所収

プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の時期における経済と政治

ソヴェト権力成立の二周年記念日にあたって、私は、表題にあげたテーマについて小冊子を書くつもりであった。しかし、毎日の仕事に追われて、いままでに個々の部分の下準備以上にすすむことができなかった。(四〇) そこで私は、この問題についての最も重要な思想だと思われるものを、簡単に、要綱ふうに説明してみることにきめた。もちろん、要綱ふうの説明には、多くの不便な点やマイナスの点がともなう。しかし、それにもかかわらず、小さい雑誌論文でも、問題を提起し、さまざまな国の共産主義者がこの問題を討議するための基盤を提供するという、控え目な目的はたぶん達することができるであろう。

一

資本主義と共産主義のあいだに一定の過渡期があることは、理論上疑いをいれない。この過渡期は、この両社会経済制度の特徴または特性を一つに結びつけたものとならざるをえない。この過渡期は、死にかかった資本主義と生まれつつある共産主義との闘争、言いかえれば、打ち破られはしたが絶滅されていない資本主義と、生まれはしたがまだまったく弱い共産主義との闘争の時期とならざるをえない。

マルクス主義者だけでなく、いくらかでも発展理論に通じている教養ある人ならだれにでも、こういう過渡期の特徴をそなえた一歴史的時代が必要だということは、自明なはずである。ところが、現代の小ブルジョア民主主義派の代表者（社会主義であるかのようなレッテルを貼っている代表者はみな、第二インタナショナルの代表者はみな、マクドナルドやジャン・ロンゲ、カウツキーやフリードリヒ・アードラーのような連中もふくめて、これにはいる）の口から出る社会主義への過渡についての考察はすべて、この自明な真理を完全に忘れてしまったことを特徴とする。小ブルジョア民主主義者には、階級闘争にたいする嫌悪、階級闘争なしにすませようという夢想、まるくおさめ、和解させ、鋭い角を取りさろうという欲求がつきものである。だから、こういう民主主義者は、資本主義から共産主義への過渡の一歴史的時期をまったく認めまいとするか、あるいは、あいたたかう両勢力の一方の闘争を指導することではなく、この両者を和解させる計画をでっちあげることが自分の任務だと考えているか、どちらかである。

二

わが国は非常に遅れていて、小ブルジョア的であるため、ロシアにおけるプロレタリアートの執権が、いくつかの特殊性によって先進諸国のそれと区別されることは避けられない。だが、基本的な勢力――と基本的な社会経済諸形態――は、ロシアでも、どの資本主義国でも同一であるから、この特殊性は最も主要な点にかかわるものではありえない。

そうした基本的な社会経済諸形態とは、資本主義、小商品生産、共産主義である。そうした基本的な勢力とは、ブルジョアジー、小ブルジョアジー（とくに農民）、プロレタリアートである。

プロレタリアートの執権の時期におけるロシアの経済は、共産主義的に統合された――巨大な一国家を一つにした規模で――労働の第一歩と、小商品生産との闘争を、またいまなお維持されてもいるし、小商品生産にもとづい

て復活してもいる資本主義との闘争をあらわしている。

ロシアで労働が共産主義的に統合されているのは、第一に、生産手段の私的所有が廃止されており、第二に、プロレタリア国家権力が国有地と国営企業で大規模生産を全国的規模で組織し、労働力をさまざまな経済部門と企業とに配分し、国家に属する大量の消費物資を勤労者に分配しているかぎりにおいてである。

われわれがロシアにおける共産主義の「第一歩」と言っているわけは（一九一九年三月に採択されたわが党の綱領でもそう言っているのだが）、わが国ではこれらすべての条件が部分的にしか実現されていないからである。言いかえれば、これらの条件の実現がようやく端緒的段階にあるにすぎないからである。総じて一挙にやれることは、一挙に、革命的な一撃でなされた。たとえば、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の第一日である一九一七年一〇月二六日（一九一七年一一月八日）に、大土地所有者への補償なしに土地の私的所有が廃止され、大土地所有者は収奪された。数ヵ月のあいだに、ほとんどすべての大資本家、すなわち工場、株式企業、銀行、鉄道等々の所有者も、やはり補償なしに収奪された。工業では、国家による大規模生産の組織、工場や鉄道の「労働者統制」から「労働者管理」への移行は、おおまかにはすでに実現されているが、農業では、これはやっと始まったばかりである（国有地に労働者国家によって組織された大農場である「ソヴェト農場」）。小商品農業から共産主義農業への過渡としての、さまざまな形態の小農民の協同組合を組織することも、やはりやっと始まったばかりである。* 私的商業のかわりに国家が生産物の分配を組織すること、すなわち都市むけ穀物と農村むけの工業製品を国家が調達し供給することについても、同じことを言わなければならない。あとで、この問題についての手持ちの統計資料をあげよう。

* ソヴェト・ロシアにおける「ソヴェト農場」と「農業コミューン」の数は、およそ三五三六と一九六一、農業アルテリ[三二]の数は三六九六と算定される。目下わが中央統計局は、ソヴェト農場とコミューンの全部について正確な調査を実施しているところである。この調査の結果は、一九一九年一一月以後に判明するはずである。

農民経済は、依然として小商品生産のままである。ここには、異常に広範な、きわめて深く、きわめてしっかりと根をはった資本主義の基盤がある。この基盤のうえに資本主義が維持されており、また、新たに——共産主義ときわめて激しくたたかいながら——復活しつつある。この闘争の形態は、穀物（ならびに他の生産物）の国家調達に対抗しての——一般に国家による生産物の分配に対抗しての

——担ぎ屋商売と投機である。

三

以上の抽象的な理論的命題を例証するために、具体的な資料をあげよう。

コムプロード（食糧人民委員部）の資料によれば、一九一七年八月一日から一九一八年八月一日までのロシアにおける穀物の国家調達高は、約三〇〇〇万プードにのぼった。その次の年度には、約一億一〇〇〇万プードであった。その次の（一九一九―一九二〇年）調達カンパニアの最初の三ヵ月間の数字は、たぶん、一九一八年の同期（八―一〇月）の三七〇〇万プードにたいして、約四五〇〇万プードにのぼるであろう。

これらの数字は、資本主義にたいする共産主義の勝利という観点から見て、徐々にではあるが着実に事態が改善されていることを、明瞭に物語っている。ロシアと外国の資本家が世界最強の諸国の全力をあげて組織している内戦のために生じた世界に前例のない困難にもかかわらず、こういう改善が達成されているのである。

だから、万国のブルジョアと彼らの公然隠然の助手たち（第二インタナショナルの「社会主義者たち」）がどんなにうそをついたり、中傷したりしても、わが国のプロレタリアートの執権の基本的な経済的課題の見地からみれば、資本主義にたいする共産主義の勝利が保障されていることは、疑いない。全世界のブルジョアジーは、軍事力でわれわれを押しつぶさないかぎり、社会経済を改造するうえでのわれわれの勝利が避けられないことをよく理解しているからこそ、ボリシェヴィズムにたいして激怒し、狂暴にふるまい、ボリシェヴィキにたいして武力進攻、陰謀等々を組織しているのである。だが、ブルジョアジーは、こういうやり方でわれわれを押しつぶすことはできないであろう。

われわれが、自分にあたえられたこの短い期間に、世界に前例のない困難のなかで活動することをよぎなくされながらも、すでにどれほど資本主義に打ちかったかは、次の総括数字から明らかである。ついさきごろ、中央統計局は、ソヴェト・ロシア全国ではなく、その二六県だけについての、穀物の生産と消費にかんする資料を印刷にまわす準備を終わった。

総括は次のとおりであった〔次ページの表〕。

つまり、都市むけの穀物の約半分は食糧人民委員部が、残りの半分は担ぎ屋が供給しているのである。一九一八年度の都市労働者の食生活の正確な調査も、まさにこれと同じ比率を示している。この場合、国家によって供給される穀物に労働者が支払っている価額は、担ぎ屋に支払ってい

ソヴェト・ロシアの26県	人口（単位 百万人）	穀物生産高（種子と飼料を除く）（単位 百万プード）	穀物供給高 食糧人民委員部によるもの（単位 百万プード）	担ぎ屋によるもの	住民が入手した穀物総量（単位 百万プード）	一人あたり穀物消費量（単位 プード）
生産県	都市 4.4	—	20.9	20.6	41.5	9.5
	農村 28.6	625.4	—	—	481.8	16.9
消費県	都市 5.9	—	20.0	20.0	40.0	6.8
	農村 13.8	114.0	12.1	27.8	151.4	11.0
計（26県）	52.7	739.4	53.0	68.4	714.7	13.6

る価額の九分の一である。穀物の投機価格は国家価格より一〇倍も高いのだ。これが、労働者の家計の正確な研究が語るところである。

四

ここにあげた資料は、よく考えてみると、今日のロシアの経済の主要な特徴をすべて描きだす、正確な材料をあたえている。

勤労者は、多年の抑圧者であり搾取者である地主と資本家から解放された。真の自由と真の平等にむかってのこの一歩前進、その歩みの大幅な点で、その規模の点で、その速度の点で世界に前例のないこの一歩のことを、ブルジョアジーの支持者たち（小ブルジョア民主主義者もふくめて）は考えていない。彼らは、議会制ブルジョア民主主義の意味での自由と平等を論じながら、いつわってそれを「民主主義」一般、または「純粋民主主義」（カウツキー）であるかのように言っている。

しかし、勤労者が問題とするのは、まさに真の平等、真の自由（地主からの、資本家からの自由）であり、だからこそ、彼らはこのようにしっかりとソヴェト権力を擁護しているのである。

農民国で、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）によってまっさきに得をした者、だれよりも得をした者、すぐさま得をした者は、全体としての農民であった。地主と資本家の支配下のロシアでは、農民は飢えていた。農民は、わが国の数百年にわたる歴史のあいだに、自分のために働く可能性をもったことはまだ一度もなかった。農民は何億プードという穀物を資本家に、都市や外国に引き渡しながら、飢えていた。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとではじめて、農民は自分のために働き、都市の住民よりよい食事をとるようになった。農民ははじめて、ほんとうの自由、自分の穀物を食う自由、飢えからの自由を知ったのである。周知のように土地分

配のさいには、最大限の平等が打ち立てられた。大多数の場合に、農民は「ロ数で」土地を分配している。

社会主義とは、階級をなくすことである。

階級をなくすためには、第一に、地主と資本家を倒さなければならない。われわれは任務のこの部分をなしとげたが、これは部分にすぎず、しかも、最も困難な部分ではない。階級をなくすためには、第二に、労働者と農民の差異をなくし、すべての人々を働き手にしなければならない。これは、一挙にやるわけにはいかない。これは、はるかに困難な任務であり、必然的に長期にわたる任務である。これは、どれかある階級を倒すことによっては解決できない任務である。それは、社会経済全体の組織的改造によってはじめて、個別的な、孤立した小商品経済から大規模な共同経済に移ることによってはじめて、解決できる任務である。こういう移行は、必然的に長期にわたるものである。こういう移行は、性急な、慎重を欠く行政措置や立法措置によっては、かえって遅らされ、困難になるだけである。農民が大がかりに農業技術全体を改善できるように、それを根本的に改造できるように援助をあたえることによってはじめて、この移行を促進することができる。

任務のこの第二の、最も困難な部分を解決するためには、ブルジョアジーに勝利したプロレタリアートは、自分の農民政策の次のような基本方針をたゆみなく遂行しなければならない。すなわち、プロレタリアートは、勤労農民と所有者としての農民——働き手としての農民と小商人としての農民——働く農民と投機者としての農民を区別し、両者のあいだに分界線を引かなければならない。

こうした分界線を引くことが、社会主義の全核心である。

そして、ロさきの社会主義者、実際の小ブルジョア民主主義者（マルトフらとチェルノーフら、カウツキー一派）に、社会主義のこの核心が理解できないのは、驚くにあたらない。

ここに述べたような分界線を引くことは、たいへん困難である。なぜなら、生きた生活では、「農民」のあらゆる属性は、たがいにどんなに違っていても、矛盾していても、一つの全体に融けあっているからである。しかし、それでもやはり分界線を引くことは可能であり、しかも可能だというだけでなく、農民経済と、農民生活の諸条件から不可避的に生まれてくるのである。勤労農民は、何百年ものあいだ、地主、資本家、小商人、投機者、および最も民主的なブルジョア共和国をもふくめた彼らの国家によって抑圧されてきた。勤労農民は、何百年ものあいだに、これらの抑圧者、搾取者にたいする憎しみと敵意を心のうちに育ててきた。そして、実生活によって授けられたこの「教育」

が、農民をうながして、資本家に反対し、投機者に反対し、小商人に反対して、労働者との同盟を求めるように仕むけているのである。だが、その一方で、経済的環境、商品経済の環境が農民を（いつでもというわけではないが、大多数の場合に）小商人に、投機者にすることは、避けられない。

われわれがまえにあげた統計資料は、勤労農民と投機者としての農民との差異をまざまざと示している。一九一八—一九一九年に、飢えた都市労働者のために四〇〇〇万プードの穀物を国家の公定価格で国家機関の手に——これらの機関のもついっさいの欠陥にもかかわらず（労働者政府はこれらの欠陥をよく認識しているが、社会主義への過渡の最初の時期には、これらの欠陥を取りのぞくことはできない）——引き渡した農民、これらの農民こそ、勤労農民であり、社会主義的労働者の対等の同志であり、その最も信頼すべき同盟者、資本のくびきにたいする闘争での血を分けた兄弟である。これに反して、都市労働者の困窮と飢えにつけこみ、国家をだまし、いたるところで詐欺、略奪、ぺてんを強め、生みだしながら、四〇〇〇万プードの穀物を国家価格の一〇倍も高い価格でこっそり売った農民、これらの農民こそ投機者であり、資本家の同盟者であり、労働者の階級敵であり、搾取者である。なぜなら、農具をつくるには、農民だけでなく、労働者その他の者の労働もなんらかの仕方で支出されるのだが、そういう農具を使い、全国家の所有になる土地から取り入れた穀物の余剰をもっているということ、余剰の穀物をもっていて、それで投機をするということは、飢えた労働者の搾取者になることだからである。

わが国の憲法で労働者と農民が不平等になっていること、憲法制定議会の解散、余剰穀物の強制取上げなどを指しながら、人々は四方八方から、諸君は自由、平等、民主主義の破壊者だと、われわれにむかってわめきたてている。われわれはこれにこう答える。何百年ものあいだ働く農民を苦しめてきた事実上の不平等、事実上の不自由を取りのぞくために、こんなにたくさんのことをした国家は、これまで世界になかった。だが、われわれは、搾取者と被搾取者との、満腹した者と、飢えた者との「平等」、前者が後者を略奪する「自由」を認めないのと同様に、投機者としての農民との平等を、けっして認めないだろう。そして、この差異を理解しようとしない教養ある人々は、たとえ彼らが民主主義者、社会主義者、国際主義者、カウツキー派、チェルノーフ派、マルトフ派と自称していようと、われわれは彼らを白衛派として取り扱うであろう、と。

五

社会主義とは、階級をなくすことである。プロレタリアートの執権は、階級をなくすためにできることはなんでもした。だが、階級を一挙になくしてしまうことはできない。そして、階級はまだ残っており、そして、プロレタリアートの執権の時期のあいだはひきつづき残るであろう。階級が消滅すれば、執権は不必要になるであろう。階級は、プロレタリアートの執権なしには消滅しないであろう。

階級は残ってはいるが、プロレタリアートの執権の時期には、どの階級も姿を変えている。階級間の相互関係も変わった。プロレタリアートの執権のもとでは、階級闘争は消滅するのではなく、別の諸形態をとるにすぎない。

プロレタリアートは、資本主義のもとでは、被抑圧階級、生産手段をいっさい所有しない階級であり、ただ一つまっこうから、全面的にブルジョアジーに対立し、したがってただ一つ最後まで革命的でありえた階級であった。プロレタリアートは、ブルジョアジーを倒し、政治権力を獲得して、支配階級となった。彼らは、国家権力をその手ににぎり、すでに社会化された生産手段を運用し、動揺的な中間分子や階級を指導し、激しさをくわえた搾取者の反抗を弾圧している。これらはすべて、階級闘争の特殊な任務であり、以前にはプロレタリアートが提起しなかったし、提起することのできなかった任務である。

搾取者、地主と資本家の階級は、プロレタリアートの執権のもとでも消滅しなかったし、また一挙に消滅することはできない。搾取者は、打ち破られたが絶滅されてはいない。彼らには、国際資本という国際的な基盤が残っており、彼らはこの国際資本の一支部である。彼らには、部分的にいくらかの生産手段が残っており、金が残っており、広い社会的つながりが残っている。彼らの反抗は、まさに彼らが敗北したため、百倍にも千倍にも激しさをくわえた。国家行政、軍事管理、経済行政の「技術」をもっていることは、彼らにきわめて、きわめて大きな優位をあたえており、その結果、彼らの重要性は、人口総数に彼らが占める割合よりもはるかに大きい。倒された搾取者と、勝利した被搾取者の前衛すなわちプロレタリアートとの階級闘争は、はるかに激しいものとなった。そして、革命を問題にするかぎり、革命の概念を（第二インタナショナルの英雄たちがみなやっているように）改良主義的幻想とすりかえないかぎり、これ以外ではありえないのである。

最後に、農民は、一般にあらゆる小ブルジョアジーと同じように、プロレタリアートの執権のもとでも、中位の、中間的な地位を占めている。すなわち、一方では、彼らは、

地主と資本家からの解放をかちとるという勤労者の共通の利益で結ばれた、かなり多数の（遅れたロシアでは膨大な）勤労大衆であり、他方では、個々ばらばらな小経営主、所有者、商人である。こういう経済的地位がプロレタリアートとブルジョアジーのあいだでの動揺を引きおこすのは、避けられない。そして、この両者のあいだには激しい闘争がおこなわれており、すべての社会関係が信じられないほど急激に打ち砕かれているので、また、まさにこの農民と一般に小ブルジョアとは、古いものに、しきたりに、不変のものにだれよりも執着しているので、彼らのあいだに、不可避的に、一方から他方への鞍がえや、動揺や、転換や、半信半疑などが見られるのは、当然である。

この階級にたいする——あるいはこれらの社会的分子にたいする——プロレタリアートの任務は、指導すること、彼らに影響をおよぼすためにたたかうことである。動揺する者、ぐらついている者を率いてすすむこと——これこそ、プロレタリアートのなすべきことである。

すべての基本的勢力または階級や、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）によって形を変えたこれらの勢力の相互関係をいっしょに対比してみれば、「民主主義」一般「をつうじて」社会主義に移行するという、第二インタナショナルのすべての代表者に見られる流行の小ブルジョア的な考えが、理論的にどんなにとほうもなくばかげていて、愚鈍なものであるかが、わかるであろう。「民主主義」が絶対的な、超階級的な内容をもっているかのようにいう、ブルジョアジーから受けついだ先入見——これが、この誤りの根源である。だが実際には、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとでは、民主主義もまったく新しい段階に移行し、階級闘争は、ありとあらゆる形態を従属させながら、より高い段階にのぼるのである。

自由、平等、民主主義についてのきまり文句は、実際には、商品生産関係の模写である諸概念を盲目的に繰りかえすのにひとしい。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の具体的諸任務をこれらのきまり文句によって解決しようとすることは、全面的にブルジョアジーの理論的・原則的立場に移ることを意味する。プロレタリアートの見地からは、問題はただ次のように立てられるだけである。どの階級の抑圧からの自由か？　どの階級とどの階級との平等か？　私的所有にもとづく民主主義か、それとも、私的所有の廃止をめざす闘争を基盤とする民主主義か？　等々。

ずっと以前に、エンゲルスは、『反デューリング論』のなかで、平等の概念は商品生産関係の模写であって、もし平等を階級の廃止という意味に理解しないなら、それは先入見に変わってしまう、と説明した。（三三）ブルジョア民主主義

的な平等概念と社会主義的な平等概念との区別についての

この初歩的な真理は、たえず忘れられている。だが、この真理を忘れないなら、ブルジョアジーを打倒したプロレタリアートは、とりもなおさず、階級の廃止にむかって最も決定的な一歩をすすめているのだということ、そしてこの廃止を完全になしとげるためには、プロレタリアートは、国家権力機構を利用しながら、打倒されたブルジョアジーにたいし、また動揺する小ブルジョアジーにたいして、闘争し、影響をおよぼし、はたらきかけるさまざまな方法を用いながら、自分の階級闘争をつづけなければならないということが、明らかになる。

（つづく）[144]

一九一九年一〇月三〇日

『プラウダ』第二五〇号、一九一九年一一月七日
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三九巻、二七一―二八二ページ所収
邦訳全集、第三〇巻、九四―一〇四ページ所収

東洋諸民族共産主義組織第二回全ロシア大会での報告[145]

一九一九年一一月二二日

同志諸君！　東洋回教徒諸組織の代表者である共産主義者の同志諸君の大会にお祝いを述べ、現在のロシアの国内情勢と世界情勢との問題について、簡単にお話することができるのは、たいへんうれしいことである。私の報告の主題は現在の情勢であるが、この問題について現在最も重要な点は、帝国主義にたいする東洋諸民族の態度と、これら民族のあいだの革命運動であると思われる。言うまでもなく、東洋諸民族のこの革命運動は、国際帝国主義にたいするわがソヴェト共和国の革命的闘争と直接に結びつかずには、いまでは順調に発展することができないし、その任務を解決することができない。幾多の事情のため、とくにロシアが遅れた、広大な国であり、ヨーロッパとアジア、西

洋と東洋の境界になっているという事情の結果、われわれは、帝国主義にたいする世界的闘争の先駆者になるという重荷をすっかり引き受けることになった――このことをわれわれは、大きな名誉と考えている。だから、近い将来にせまっている諸事件の進展全体は、国際帝国主義とのいっそう広範でねばり強い闘争を予告しており、またそれは、連合した帝国主義――ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ――の勢力にたいするソヴェト共和国の闘争と、かならず結びつくであろう。

軍事的側面についていえば、現在すべての戦線の状態がわれわれに有利になっていることは、ご承知のとおりである。この問題にはくわしく立ちいらないことにするが、ただ、国際帝国主義が力ずくでわれわれに押しつけた内戦が、二年のあいだロシア社会主義連邦ソヴェト共和国に無数の苦難をもたらし、農民と労働者に彼らの力にあまる重荷をになわせたため、彼らはとうてい耐えきれないだろうと思われたこともしばしばあったことだけを、言っておこう。だが、それと同時にこの戦争は、その乱暴な暴力沙汰によって、野獣と化したいわゆるわが「同盟諸国」――彼らは、社会主義革命が始まらないまえから、われわれを略奪していた――の容赦ない乱暴な襲撃によって、奇跡をなしとげ、戦争に疲れ、一見してもはや新しい戦争を耐えぬくことができそうもないと思われた人々を戦士に変えたのであって、この戦士たちは二年のあいだ戦争にもちこたえたばかりか、戦争を勝利をもって終えようとしている。いまわれわれがコルチャック、ユデーニチ、デニーキンにたいして勝利をおさめていることは、自己の解放のための闘争に立ち上がった国々や諸民族にたいする世界帝国主義の闘争の歴史に新しい局面が始まったことを意味している。この点で、二年にわたるわれわれの内戦は、歴史上ずっと以前から観察されてきた事柄を完全に確証したというにとどまらない。その事柄とは、戦争の性格とその勝敗は、なによりもまず、戦争をおこなう国の内部体制によってきまるということ、また、戦争はその国が戦前におこなってきた国内政治の反映であるということである。このすべては、かならずや戦争の遂行に反映せずにはおかない。

どの階級が戦争をおこなってきたか、また戦争をつづけているかという問題は、きわめて重要な問題である。わが国の内戦は自己の解放をかちとった労働者と農民によっておこなわれており、自国と全世界の資本家から勤労者を解放するための政治闘争の継続であるという事情、もっぱらこの事情のおかげで、もっぱらこの理由によって、四年にわたる帝国主義戦争に疲れはてたロシアのように遅れた国に、前例のない、信じがたい苦痛と困難のなかでさらに二

年のあいだこの戦争をつづけようという強い意志をもつ人人が現われたのである。
内戦の歴史はこのことを、コルチャックの実例によってとくに明瞭に示した。世界最強の国々のすべてから援助を受け、数十万人の外国軍隊——それには、たとえば、帝国主義戦争の用意をととのえながら、ほとんどそれにくわわらず、したがってあまり被害をうけなかった日本軍のような、国際帝国主義者の最も優秀な軍隊もふくまれている——に守られた鉄道をもっていたコルチャックのような敵——最も裕福で、農奴制度を知らず、したがって当然のことながら共産主義からだれよりも遠く離れていたシベリアの農民に立脚していたコルチャック——このコルチャックの軍隊は国際帝国主義の先進部隊であったから、不敗の勢力であるように思われた。しかも、シベリアでは、いまなお日本軍、チェコスロヴァキア軍、その他いくつかの帝国主義国の軍隊が行動している。それにもかかわらず、莫大な天然資源をもつシベリアにたいする一年をこえるコルチャックの支配の経験、はじめのうちは第二インタナショナルの各国社会党からも、憲法制定議会委員会戦線をつくったメンシェヴィキとエス・エルからも支持されていて、こういう条件のもとにあっては、俗物的見地と普通の歴史の経過の見地からすれば強固で不敗であると思われた支配の経験は、実際には次のことを示した。すなわち、コルチャックがロシアの奥地ふかくへすすめばすすむほど、彼はますます消耗してしまい、けっきょく、コルチャックにたいするソヴェト・ロシアの完全な勝利をわれわれは見るにいたったのである。疑いもなく、ここに見られるものは、資本家のくびきから解放された労働者と農民が力を合わせれば真の奇跡を生むということの、実地の証明である。ここにあるものは、革命戦争が真に被抑圧勤労大衆を引きいれ、彼らの関心をひくときには、自分たちは搾取者に反対してたたかっているのだということを彼らに自覚させるときには、そのような革命戦争は奇跡をなしとげるエネルギーと能力を生むということの、実地の証明である。
私は、赤軍がなしとげたこと、赤軍の闘争とその勝利の歴史とは、すべての東洋民族にとって巨大な世界的意義をもつだろうと思う。赤軍は、東洋諸民族に次のことを示すであろう。すなわち、たとえこれらの民族がどんなに弱くても、また技術上および軍事技術上のあらゆる驚嘆すべき達成を闘争に応用しているヨーロッパの抑圧者の威力がどんなに打ち破りがたいものに見えようとも、それにもかかわらず、もし被抑圧民族がおこなう革命戦争が真に幾百万人の勤労者、被搾取者をめざめさせることができるなら、その革命戦争は大きな可能性、大きな奇跡をひそめている

のであって、それゆえ東洋諸民族の解放は、国際革命の展望の見地からみて現在十分に実現可能なばかりか、アジアで、シベリアで得られた直接の軍事的経験、すべての強大な帝国主義諸国の軍事的侵攻をうけたソヴェト共和国が得た経験の見地からみても十分に実現可能である、ということである。

そのうえ、ロシアにおける内戦のこの経験は、内戦の鉄火のなかで革命的熱情が高まるのにともなって、強力な内部的団結が生じるということを、われわれとすべての国の共産主義者に示してくれた。戦争は、あらゆる国民にとって、その全経済力と全組織力の試練である。二年間の経験のあとでは、けっきょくのところ、戦争が飢えと寒さに悩む労働者と農民にとってどんなにかぎりなく苦しかろうとも、われわれは勝利をおさめつつあるし、また今後も勝利をおさめるであろうと、この二年間の経験にもとづいて言うことができる。なぜなら、われわれには銃後が、しかも強固な銃後があり、農民と労働者は、飢えと寒さにもかかわらず結束し、強くなっており、重大な打撃をうけるたびに、力の結束を強め、経済力を強化することでそれにこたえているからである。だからこそ、コルチャックや、ユデーニチや、彼らの同盟者である世界最強の諸大国にたいして勝利することができたのである。過ぎさった二年間は、一方では革命戦争の発展の可能性をわれわれに示しており、他方では、革命の根拠地を急速に粉砕し、国際帝国主義にむかってあえて宣戦を布告した労農共和国を粉砕するという目的をもった、外国の侵攻の重大な打撃をうけながら、ソヴェト権力が強まったことを示している。これらの打撃は、ロシアの労働者農民を粉砕せずに、かえってこれを鍛えあげたのである。

これが、現在の時機の主要な決算であり、その主要な内容である。われわれは、わが国の領土に残存する最後の敵であるデニーキンにたいする決定的な勝利に近づいている。われわれは、自分が強力であることを感じており、何回でも繰りかえして次のように言うことができる。すなわち、共和国の内部構造は強まっており、デニーキンとの戦争を終えるときには、われわれははるかに強くなっているであろうし、社会主義の建物を建設する任務を実現するためのわれわれの準備もはるかに十分なものとなっているであろうと言っても、誤りではない、と。内戦の時期には、われわれはこの建設にほとんど時間と力をさくことができなかったが、ひらけた道に出ようとしているいまはじめて、われわれは、疑いもなく、この建設に全幅的に没頭することができるであろう。

西ヨーロッパでは帝国主義の解体が見られる。ご承知の

ように、一年前には、事態を理解できなかった大多数の社会主義者と同じように、ドイツの社会主義者にさえ、いま進行しているのは世界帝国主義の二つのグループの闘争であると思えた。そして、彼らは、この闘争が歴史の全内容であって、それ以外のものをもたらすことのできる勢力はないと考えた。彼らには、社会主義者にさえ、この強大な世界的略奪者グループのどちらかに加担するほかにはどうしようもないと思われた。一九一八年一〇月末にはそう見えたのである。だが、われわれが見ているように、その後一年間に世界史は空前の現象、広範で深刻な影響をおよぼす現象を経験した。これらの現象は、帝国主義戦争のさいには愛国主義者であった社会主義者、そして敵を目前にひかえているという理由で自分の行動を弁護し、イギリスやフランスの帝国主義者との同盟を、ドイツ帝国主義からの解放をもたらすものだといって弁護していた社会主義者のうちの多くの者の目をひらかせた。この戦争がどれだけの幻想を打ちこわしたかを、見てみたまえ！　ドイツ帝国主義が解体し、その結果、共和主義革命だけでなく社会主義革命も起こったことを、われわれは見ている。ご承知のように、現在ドイツでは、階級闘争はさらに鋭さをくわえており、内乱が、共和主義色に塗りかえてはいるが依然として帝国主義の代表者であるドイツ帝国主義者にたいするドイツ・プロレタリアートの闘争が、ますます間ぢかにせまっている。

だれでも知っているように、西ヨーロッパでは社会革命が、日ごとにどころか時々刻々に成熟しており、アメリカでもイギリスでも——文化と文明の代表者と自称し、蛮族であるドイツ帝国主義者にたいする勝利者であると自称しているこれらの国でも、同じことが起こっている。そして、ヴェルサイユ講和(122)が結ばれるにいたって、ヴェルサイユ講和が、かつてドイツの略奪者がわれわれに押しつけたブレスト講和よりも百倍も略奪的なものであること、このヴェルサイユ講和は、これらの不運な戦勝国の資本家と帝国主義者がおよそ自分で自分にくわえることのできる最大の打撃であることを、すべての人が知ったのである。ヴェルサイユ講和は、ほかならぬ戦勝国民の目をひらかせ、われわれの前にいるのは文化と文明の代表者ではなく、イギリスとフランスという、民主主義国家ではあるが、帝国主義的略奪者に統治されている国家であることを、証明した。これらの略奪者のあいだでは内部闘争がきわめて急速に発展しているので、われわれは、ヴェルサイユ講和が凱歌をあげた帝国主義者のうわべの勝利にすぎないこと、実際にはこれは帝国主義的講和全体の破綻を意味し、戦争中腐った帝国主義の代表者と同盟して、戦いあう略奪者グループの

一方を擁護してきた社会主義者たちから、勤労大衆をきっぱりと離反させるものであることを知って大いに喜んでよいところである。勤労者の目がひらかれたのは、ヴェルサイユ講和が略奪的講和であり、フランスとイギリスがドイツとたたかったのは、実際には、自国の植民地支配を打ちかため、自国の帝国主義的威力を強めるためであったことを、見せてくれたからである。この内部闘争は、さきになればなるほどますます広範に発展してゆく。きょう私が見た一一月二一日ロンドン発の無電のなかで、アメリカのジャーナリストたち――革命家に共鳴しているのではないかという嫌疑などおよそかけることのできない人たち――は、アメリカ人がヴェルサイユ講和条約の批准を拒否しているので、フランスの国内ではアメリカ人憎悪がかつてないほど燃えあがっているのが見られる、と言っている。

イギリスとフランスは勝利をおさめたものの、アメリカにたいして首がまわらないほどの債務を負っている。アメリカは、フランス人とイギリス人がどれほど戦勝者のつもりでいようと、いちばんうまい汁を吸い、戦時にあたえた援助にたいして法外な高利を取ろうと、腹をきめていた。そして、この保障をつとめることになっているのがアメリカの艦隊であって、これは現在建造中であり、その規模においてイギリスの艦隊を凌駕している。アメリカ人の略奪的帝国主義がどんなに乱暴にふるまっているかは、アメリカの仲買人たちが生きた商品、つまり女や若い娘を買い占めて、アメリカに運び、売春をはびこらせていることから、はっきりとわかる。自由で文化的なアメリカは、娼家に生きた商品を供給しているのだ！　ポーランドとベルギーでは、アメリカの仲買人とのあいだに紛争が起こっている。これは、連合国から援助を受けたすべての小国で大々的におこなわれていることの、ささやかな例証である。ポーランドを例にとってみよう。ご承知のとおり、同地にはアメリカの仲買人や投機者がやってきて、ポーランドのあらゆる富を買い占めている。それでも、このポーランドは、いまでは独立国として存在しているといって、鼻を高くしているのだ。ポーランドはアメリカの仲買人によって買い占められている。どんな工場でも、どんな工業部門でも、アメリカ人のポケットにはいらないものは一つもない。アメリカ人はひどくあつかましくなって、「偉大な、自由な戦勝国」フランスを隷属させはじめているほどである。フランスは、以前には高利貸国であったが、いまでは経済力を失って自国産の穀物や自国産の石炭ではやっていけず、自国の物質力を大々的に発展させることもできずにいるため、アメリカにすっかり借金をしょいこんでいる。だが、アメリカは、貢物を文句なしにすっかり支払うように要求して

いる。こうして、日とともに、フランス、イギリスその他の強大国の経済的破綻はますます明らかになってゆく。フランスの選挙では教権派が優勢を占めた。ドイツに反対して自由と民主主義のために全力をささげなければならないという言い分でだまされてきたフランス国民は、いまやその報酬として、とほうもない債務をしょいこみ、略奪的なアメリカ帝国主義者からは嘲弄をうけ、ついで最も野蛮な反動派の代表者からなる教権主義的多数派を受け取ったのである。

全世界の情勢ははるかにこみいったものになった。コルチャックやユデーニチ、これらの国際資本の召使にたいするわれわれの勝利は大きなものであるが、われわれが国際的な規模でおさめつつある勝利は、これほど明瞭でなくとも、はるかに大きなものである。この勝利は、帝国主義の内部的解体にある。帝国主義は、われわれにむかって彼らの軍隊を派遣することができない。協商国はそうしようと試みたのだが、どうにもならなかった。というのは、彼らの軍隊がわれわれの軍隊に出会って、彼らの国語に翻訳されたわがロシアのソヴェト憲法を読むと、この軍隊は瓦壊してしまうからである。わが国の憲法は、腐敗した社会主義の指導者たちの影響を押しのけて、つねに勤労大衆の共感をよんでいる。「ソヴェト」ということばは、いまではだれにも理解されており、ソヴェト憲法はすべての国語に翻訳されていて、どの労働者でもそれを知っている。労働者は、これが勤労者の憲法であること、これが国際資本にたいする勝利を呼びかけている勤労者の政治制度であることを知っており、これが国際帝国主義者からわれわれの獲得した成果であることを知っている。われわれはすべての帝国主義国から彼ら自身の軍隊を奪い取り、たたかいとって、ソヴェト・ロシアに軍隊を差しむけることができないようにしているのであるから、われわれのこの勝利はあらゆる帝国主義国で反響を生んだわけである。

彼らは、他国の軍隊、フィンランド、ポーランド、ラトヴィアの軍隊を使って戦おうと試みたが、これまたなんにもならなかった。数週間まえに、イギリスの大臣チャーチルは、下院で演説して、ソヴェト・ロシアにたいする一四ヵ国の侵攻が組織されており、新年までにロシアにたいする勝利が得られるであろう、と言って自慢した——そして、これは全世界に電報で知らされた。なるほど、多くの国がこれに参加していた。フィンランド、ウクライナ、ポーランド、グルジア、チェコスロヴァキア、日本、フランス、イギリス、ドイツがそれである。しかし、われわれはそれがどうなったかを知っている! エストニア人がユデーニチの軍隊を窮地に見捨てたことをわれわれは知っており、

いま新聞では、エストニア人がユデーニチを援助しようとしないこと、またフィンランドも、そのブルジョアジーがそうしたがったにもかかわらず、ユデーニチに援助をあたえなかったことをめぐって、激しい論戦がおこなわれている。こうして、われわれにたいする第二回目の強襲の企ても挫折した。第一の段階は、協商国自身の軍隊が派遣されたことであって、この軍隊は軍事技術の準則どおりに装備されていたから、ソヴェト共和国を打ち破るものと思われた。ところが、彼らはすでにカフカーズ、アルハンゲリスク、クリミアを放棄してしまい、チェコスロヴァキア軍がシベリアに残っているのと同じように、いまなおムルマンに残ってはいるが、それは離れ小島として残っているまでである。自国の軍隊を使ってわれわれを打ち破ろうとした最初の企ては、われわれの勝利に終わった。第二回目の企ては、協商国に財政的にまったく隷属しているわれわれの隣接諸国民をわれわれに差しむけ、彼らを使って社会主義の温床であるわれわれを圧殺することであった。だが、この企ても失敗に終わった。これらの小国家の一つとして、こういう戦争をする能力のないことがわかったのである。それればかりではない。どの小国家でも、協商国にたいする憎しみが強まっている。ユデーニチがすでにクラスノエ・セローを占領したときに、フィンランドがペトログラード占領のため進出しなかったのは、同国が動揺してしまい、フィンランドはソヴェト・ロシアとはならんで独立の生存をたもっていけるが、連合国とは仲よく暮らしてゆけないことを、見てとったためである。すべての小国がこれを経験した。フィンランド、リトアニア、エストニア、ポーランドがこれを経験している。これらの国にはひどい排外主義が横行しているが、そこにはまた、それらの国で搾取を強めている協商国にたいする憎悪がある。だから、いまわれわれが、諸事件の経過を厳密に考慮して、ソヴェト共和国にたいする国際戦争の第一の段階だけでなく、第二の段階も失敗したと言っても、すこしも言いすぎではない。いまではわれわれは、デニーキン軍さえ打ち破ればよいのであるが、この軍隊もすでになかば撃滅されている。

私が報告で簡単に特徴づけた今日のロシアの国内情勢と国際情勢は、以上のとおりである。終りにあたって、東洋諸民族がどういう状態にあるかについて、一言しておきたい。諸君は、東洋のさまざまな民族の共産主義組織および共産党の代表者である。ロシアのボリシェヴィキが、古い帝国主義に破口をうがって、革命の新しい道をひらくという非常に困難な、だが非常に気高い任務を引き受けることができたとすれば、諸君、東洋の勤労大衆の代表者は、いっそう大きな、いっそう新しい任務に当面している。いま

全世界にせまりつつある社会主義革命は、けっして、それぞれの国のプロレタリアートが自国のブルジョアジーに勝利することにとどまらないことが、ますます明らかになっている。もし革命がたやすく、急速にすすむものであれば、それにとどまることも可能であろう。帝国主義者がそれを許さないだろうこと、すべての国が自国内のボリシェヴィズムとたたかうために武装しており、どうやって自国内のボリシェヴィズムに勝利するかということばかり考えていることを、われわれは知っている。だから、すべての国で内乱が起ころうとしており、古い協調派の社会主義者は、ブルジョアジーの味方として、この内乱に参加しようとしている。こうして、社会主義革命は、たんにそれぞれの国の革命的プロレタリアが自国のブルジョアジーにたいしておこなう闘争にとどまらないだろうし、また主としてそういうものになりもしないであろう。そうではない。この革命は、帝国主義に抑圧されているすべての植民地と国々、すべての従属国が、国際帝国主義にたいしておこなう闘争となるであろう。去年の三月に採択されたわが党の綱領では、われわれは、世界社会革命の接近を特徴づけて、すべての先進国における帝国主義者と搾取者にたいする勤労者の内乱は、国際帝国主義にたいする民族戦争と結びつきはじめている、と述べている。このことは革命の経過によって確証されており、今後ますます確証されるであろう。東洋でもまたそうであろう。

そこでは自主的参加者として、新生活の創造者として、東洋の人民大衆が立ち上がるであろうことを、われわれは知っている。というのは、この何億という住民は、これまで帝国主義の国際政策の対象となってきて、資本主義の文化と文明を肥やす肥料として存在してきただけの、従属した不同権民族に属しているからである。そして、植民地の委任統治の割りふりが論じられるとき、それが強奪、略奪の委任の割りふりであり、地球の人口のわずかな部分が地球人口の多数者を搾取する権利の割りふりであることを、われわれはよく知っている。これまで自主的な革命勢力となることができなかったため、まったく歴史的進歩のそとにおかれてきたこの多数者が、二〇世紀のはじめからこうした受動的な役割を演じるのをやめたことを、われわれは知っている。一九〇五年のあとにトルコ、ペルシア、中国の革命がつづいたこと、インドに革命運動が発展したことを、われわれは知っている。帝国主義戦争もまた革命運動の成長をうながした。なぜなら、ヨーロッパの帝国主義者の闘争に幾多の植民地民族の連隊を引きいれなければならなくなったからである。帝国主義戦争は東洋をもめざめさせ、東洋諸民族を国際政治に引きいれた。イギリスとフラ

ンスは植民地諸民族を武装させて、彼らが兵器や改良された機械の使用に習熟するのを助けた。この知識を、彼らは帝国主義者諸氏に反対するために利用している。東洋が現代の革命にめざめた時期につづいて、東洋のすべての民族が、たんなる金儲けの対象であることをやめて、全世界の運命の決定にくわわる時期がやってきている。東洋諸民族は、実践的に行動するために、すべての民族が全人類の運命の決定にくわわるために、めざめつつある。

だからこそ、諸君は、世界革命――それは、その始まりから判断して多年にわたってつづき、多大の努力を要すると思われるが――の発展の歴史上で、革命闘争で、革命運動で、大きな役割を演じ、この闘争をつうじて国際帝国主義に反対するわれわれの闘争と融合すべき使命をおびていると、私は考えるのである。国際革命への諸君の参加は、諸君を複雑で困難な課題に当面させるであろうが、その課題の解決はわれわれ全体の成功の基礎となるであろう。なぜなら、ここにはじめて住民の多数者が自主的な運動にはいって、国際帝国主義の打倒をめざす闘争の能動的な要因となるからである。

大部分の東洋諸民族は、ヨーロッパで最も遅れた国であるロシアよりもまだ劣った状態にある。だが、われわれは、封建制の遺物と資本主義とにたいする闘争でロシアの農民と労働者を団結させることができた。そして、われわれの闘争がこんなにも容易にすすんだのは、農民と労働者が資本と封建制とに反対して団結したからである。ここでは、東洋諸民族との結びつきはとくに重要である。というのは、東洋諸民族の多数者は、典型的な勤労大衆――資本主義的工場の学校を修了した労働者でこそないが、中世的圧制に苦しむ勤労被搾取農民大衆だからである。ロシア革命は、資本主義に勝利したプロレタリアが幾千万人の分散した勤労農民大衆と団結して、中世的圧制にたいして蜂起し、勝利をおさめたことを示した。いまや、わがソヴェト共和国は、めざめつつある東洋のすべての民族とともに国際帝国主義にたいする闘争をおこなうために、彼らを自分のまわりに結集しなければならない。

この点で諸君は、これまで全世界の共産主義者がまだ当面したことのない任務に当面している。諸君は、共産主義の一般理論と実践に立脚しながらも、ヨーロッパ諸国には存在しない特異な諸条件に適応して、この理論と実践を、農民が大多数を占め、資本との闘争ではなく、中世の遺物との闘争の課題を解決しなければならないという条件に適用することができなければならない。これは困難で、特異な任務である。だが、これはとくにやりがいのある任務である。なぜなら、これまで闘争にくわわったことのない大

衆が闘争に引きいれられるからであり、また他方では、東洋に共産主義の細胞が組織されているおかげで、諸君は、第三インタナショナルとのきわめて緊密な結びつきを実現することができるからである。諸君は、全世界の先進的なプロレタリアと、しばしば中世的な条件のもとで生活している東洋の勤労被搾取大衆とのこの同盟の特異な諸形態を見いださなければならない。われわれがわが国で小さな規模で実現したことを、諸君は大きな国々で大きな規模で実現することになろう。そして、諸君がこの第二の任務をりっぱに果たすものと、私は期待している。ここで諸君が代表している東洋の共産主義諸組織のおかげで、諸君は先進的な革命的プロレタリアートとの結びつきをもっている。諸君は、それぞれの国内で共産主義の宣伝が人民にわかることばでおこなわれるよう、今後とも心をくばるという任務に当面している。

もちろん、最後の勝利は世界のすべての先進国のプロレタリアートだけがかちとることができ、われわれロシア人が始めている仕事は、イギリス、フランス、ドイツのプロレタリアートによって打ちかためられるであろう。だが、私の見るところでは、すべての被抑圧植民地民族、まず第一に東洋諸民族の勤労大衆の援助がなければ、彼らは勝利をおさめることはできないであろう。前衛だけでは共産主義への移行を実現できないことを、われわれはよく理解しなければならない。その勤労大衆がどういう水準にあるかにかかわりなく、勤労大衆のあいだに自主的に活動し組織をつくろうとする革命的熱意を呼びさまし、先進国の共産主義者を目あてとした真の共産主義学説をそれぞれの民族のことばに翻訳し、ただちに実現する必要のある実践的課題を実現し、共同の闘争をつうじて他の国々のプロレタリアと融合すること、これが任務である。

これらは、どんな共産主義の本にもその解決は見いだせない任務であるが、諸君はその解決をロシアが始めた共同闘争のうちに見いだすであろう。諸君はこの任務を提起し、自主的な経験にもとづいてそれを解決しなければならないであろう。諸君がそうするうえで助けとなるものは、一方では、他の国々のすべての勤労者の前衛との緊密な同盟であり、他方では、諸君がここで代表している東洋諸民族に近づく能力であろう。諸君は、これらの民族のあいだにめざめつつあり、またあざめざるをえない、しかも歴史的にみて正当なブルジョア民族主義に立脚しなければならないであろう。それと同時に、諸君は、それぞれの国の勤労被搾取大衆に近づく道を切りひらき、解放の望みはただ一つ国際革命の勝利にあること、国際プロレタリアートは何億という東洋諸民族のすべての勤労被搾取者の唯一の同盟者

であることを、彼らにわかることばで話さなければならない。

これこそ、諸君が当面しているなみなみならぬ大きな任務である。そして、この任務は、革命の時代と革命運動の成長――これは疑う余地がない――とのおかげで、東洋の共産主義諸組織の力を合わせることによって、りっぱに解決され、国際帝国主義にたいする完全な勝利をもたらすであろう。

『ロシア共産党（ボ）中央委員会通報』第九号、一九一九年一二月二〇日
全集、第五版、第三九巻、三一八―三三一ページ所収
邦訳全集、第三〇巻、一四二―一五四ページ所収

憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）

社会革命党の論集『ロシア革命の一年。一九一七―一九一八年』（モスクワ、一九一八年、「ゼムリャ・イ・ヴォーリャ」モスクワ出版所）に、エヌ・ヴェ・スヴャチッキーのすこぶる興味ある論文『全ロシア憲法制定議会選挙の総括（序文）』がのっている。筆者は、総計七九の選挙区のうち五四選挙区についての数字をあげている。

筆者の調査範囲には、ヨーロッパ・ロシアとシベリアのほとんどすべての県がはいっている。この部類の県のうちでこの調査にふくめられなかったのは、オロネッツ、エストニア、カルーガ、ベッサラビア、ポドリスク、オレンブルグ、ヤクーツク、ドンの諸県である。

われわれははじめに、エヌ・ヴェ・スヴャチッキーの発表した基本的な総括を引用し、ついでこの資料からでてく

る政治的結論を検討することにする。

一

一九一七年一一月に五四選挙区で投じられた票数は、合計三六二六万二五六〇票であった。筆者は七つの地方（プラス陸海軍）の集計として三六二五万七九六〇票という数字をあげているが、彼のあげている個々の党派別の得票を集計すると、まさに私が右に示した数字となる。

党派別の得票数は次のとおりである。ロシアのエス・エルは一六五〇万票を獲得したが、これに、他の諸民族（ウクライナ民族、回教諸民族、その他）のエス・エルを合わせると、二〇九〇万票となり、全体の五八％を占める。

メンシェヴィキは六六万八〇六四票[37]を獲得したが、これに、類似のグループである[38]「人民社会党」（三一万二〇〇〇票）、「エヂンストヴォ」派（二万五〇〇〇票）、協同組合代表（五万一〇〇〇票）、ウクライナ社会民主党（九万五〇〇〇票）、ウクライナ社会党（五〇万七〇〇〇票）、ドイツ人社会主義者（四万四〇〇〇票）、フィンランド社会党（一万四〇〇〇票）をくわえると、合計一七〇万票となる。

ボリシェヴィキは九〇二万三九六三票を獲得した。

カデットは一八五万六六三九票を獲得した。これに「土地所有者・地主同盟」（二一万五〇〇〇票）、「右翼諸派」（二一九万二〇〇〇票）、古教派（七万三〇〇〇票）、民族主義者――ユダヤ人（五五万票）、回教諸民族（五七万六〇〇〇票）、バシキール人（一九万五〇〇〇票）、ラトヴィア人（六万七〇〇〇票）、ポーランド人（一五万五〇〇〇票）、カザック（七万九〇〇〇票）、ドイツ人（一三万票）、ベロルシア人（一万二〇〇〇票）、「諸派・諸団体候補者リスト」（四一万八〇〇〇票）をくわえると、地主・ブルジョア諸政党の合計は四六〇万票となる。

周知のように、エス・エルとメンシェヴィキは、一九一七年二月から一〇月までの革命の全期間、ブロックを結んでいた。そのうえ、この期間とそれ以後の事態の全経過が明確に証明したところでは、この二つの党はいっしょに小ブルジョア民主主義派をなしているのであって、この派が自分で社会主義党のように思いこみ、またそう名のっていることが誤りであるのは、第二インタナショナルのすべての党の場合と同じである。

憲法制定議会の選挙に参加した三つの主要な党グループをまとめると、次のような結果が得られる〔A表を参照〕。

こんどは、エヌ・ヴェ・スヴャチツキーがあげている地方別の資料を引用しよう〔B表を参照〕。

これらの地方別の数字から、憲法制定議会の選挙のときボリシェヴィキはプロレタリアートの党であり、エス・エ

〔A 表〕

(単位 千票)

プロレタリアートの党 (ボリシェヴィキ)…………	9,020= 25%
小ブルジョア民主主義諸党 (社会革命党，メンシェヴィキ，その他)…………	22,620= 62%
地主・ブルジョア諸党 (カデットその他)…………	4,620= 13%
合　計…………	36,260=100%

〔B 表〕

(単位 千票)

地方名(1)(および陸海軍)	エス・エル(ロシア人)		ボリシェヴィキ		カデット		合計
	得票数	%	得票数	%	得票数	%	
北部地方	1,140.0	38	1,177.2	40	393.0	13	2,975.1
中央工業地方	1,987.9	38	2,305.6	44	550.2	10	5,242.5
ヴォルガ沿岸-黒土地方	4,733.9	70	1,115.6	16	267.0	4	6,764.3
西部地方	1,242.1	43	1,282.2	44	48.1	2	2,961.0
東部-ウラル地方	1,547.7	43(62%)(2)	443.9	12	181.3	5	3,583.5
シベリア地方	2,094.8	75	273.9	10	87.5	3	2,786.7
ウクライナ	1,878.1	25(77%)(3)	754.0	10	277.5	4	7,581.3
陸海軍	1,885.1	43	1,671.3	38	51.9	1	4,363.6

(1) 筆者は，普通のやり方とはいくらか違って，ロシアを次の地方に区分している。北部地方——アルハンゲリスク，ヴォログダ，ペトログラード，ノヴゴロド，プスコフ，リフランド。中央工業地方——ヴラヂーミル，コストロマ，モスクワ，ニジニ-ノヴゴロド，リャザン，トゥーラ，トヴェーリ，ヤロスラヴリ。ヴォルガ沿岸-黒土地方——アストラハン，ヴォローネジ，クールスク，オリョール，ペンザ，サマラ，サラトフ，シンビルスク，タンボフ。西部地方——ヴィテプスク，ミンスク，モギリョフ，スモレンスク。東部-ウラル地方——ヴャトカ，カザン，ペルミ，ウファ。シベリア地方——トボリスク，トムスク，アルタイ，エニセイ，イルクーツク，ザバイカル，アムール沿岸。ウクライナ——ヴォルィニャ，エカテリノスラフ，キエフ，ポルタヴァ，タヴリーダ，ハリコフ，ヘルソン，チェルニゴフ。

(2) 62%という括弧内の数字は，スヴャチツキーが回教諸民族とチュヴァシ人のエス・エルをくわえて算出したもの。

(3) 77%という括弧内の数字は，私がウクライナのエス・エルをくわえて算出したもの。

ルは農民の党であったことがわかる。純農民的な地域では、大ロシア人地域（ヴォルガ沿岸－黒土、シベリア、東部－ウラル）でも、ウクライナ人地域でも、エス・エルが投票の六二－七七％を獲得した。工業中心地では、ボリシェヴィキのほうがエス・エルよりも優勢である。エヌ・ヴェ・スヴャチッキーがあげた地域別資料では、この優勢は過小にあらわされている。なぜなら、彼の資料は、最も工業的でない選挙区がそれほど工業的でない選挙区や全然工業的でない選挙区といっしょにされているからである。スヴャチッキーがエス・エル、ボリシェヴィキ、カデットの諸党、ついで「民族主義者、その他の諸派」についてあげている県別の資料は、たとえば次のことを示している。

北部地方では、ボリシェヴィキの優勢はわずかであるように見える。すなわち三八％にたいして四〇％である。だが、この地方には、エス・エルが優勢を占めている非工業的な選挙区（アルハンゲリスク、ヴォログダ、ノヴゴロド、プスコフの諸県）と、次のような工業的な選挙区とがいっしょにされている。すなわち、ペトログラード首都区――ボリシェヴィキ四五％（得票数で）、エス・エル一六％、ペトログラード県――ボリシェヴィキ五〇％、エス・エル二六％、リフランド県――ボリシェヴィキ七二％、エス・エル零。

中央工業地方の諸県では次のようであった。モスクワ県――ボリシェヴィキ五六％、エス・エル二五％。モスクワ首都区――ボリシェヴィキ五〇％、エス・エル八％。トヴェリ県――ボリシェヴィキ五四％、エス・エル三九％。ヴラヂーミル県――ボリシェヴィキ五六％、エス・エル三二％。

ついでに指摘しておけば、ボリシェヴィキがプロレタリアートの「少数者」の支持しか得なかったし、いまでもそうであるかのように言うのは、これらの事実とつきあわせるとき、なんと滑稽なことだろう！　ところが、われわれはこういう話を、メンシェヴィキ（彼らの得票は六六万八〇〇〇票で、これになおザカフカーズの七〇－八〇万票がくわわるが、これにたいしてボリシェヴィキの得票は九〇〇万票である）からも、第二インタナショナルの裏切り社会主義者からも聞くのである。

二

ブルジョアジーと連合（連立）し、ブルジョアジーと合わせれば四分の三の票をとっていた小ブルジョア民主主義者に、四分の一の票数しかとらなかったボリシェヴィキが勝利するというような奇跡が、どうして起こりえたのだろうか？

というのは、協商国――世界的に強大な協商国――がボリシェヴィズムのあらゆる敵に二年のあいだ援助をあたえてきたあとの今日では、この勝利の事実を否定することは、まったく滑稽だからである。

第二インタナショナルの支持者全部をふくめて、敗北をこうむった人々のいだいている気違いじみた政治的憎悪のため、この人々がボリシェヴィキの勝利の原因という最も興味ぶかい歴史的および政治的問題を真剣に提起することさえできないという点にこそ、問題がある。これが「奇跡」なのは、俗流小ブルジョア民主主義派の見地から見るときだけだという点にこそ、問題がある。この民主主義派の無知と先入見がどんなにひどいものかということは、右の問題とそれへの回答とによって暴露されている。

階級闘争と社会主義の見地からすれば、第二インタナショナルが放棄したこの見地からすれば、問題は争う余地のないように解決される。

ボリシェヴィキが勝利したのは、なによりもまず、彼らがプロレタリアートの大多数者の支持を得ており、しかも、そのなかには、この先進的階級の最も自覚した、精力的な革命的部分、その真の前衛がふくまれていたからである。

両首都、ペトログラードとモスクワをとってみよう。憲法制定議会への総投票数のうち、一七六万五一〇〇票はこの両首都で投じられた。その内訳は次のとおりであった。

エス・エル……………二一万八〇〇〇票
ボリシェヴィキ…………八三万七〇〇〇票
カデット………………五一万五四〇〇票

社会主義者とか社会民主主義者とか自称している小ブルジョア民主主義者（チェルノーフ、マルトフ、カウツキー、ロンゲ、マクドナルドらの一派）が、「平等」、「普通選挙」、「民主主義」、「純粋民主主義」、「一貫した民主主義」という女神たちのまえにどんなにぬかづいても、そうしたからといって都市と農村との不平等という経済的および政治的事実は消えてなくなりはしない。

これは、一般に資本主義のもとでは、とくに資本主義から共産主義への過渡にあっては、避けることのできない事実である。

都市と農村とは平等ではありえない。農村は、現代の歴史的諸条件のもとでは、都市と平等ではありえない。都市が農村を率いることは避けられない。農村は不可避的に都市のあとに従う。問題はただ、「都市」諸階級のうちのどの階級が農村を率いることができるか、この任務をやりこなすか、また都市のこの指導はどういう形態をとるか、ということにある。

ボリシェヴィキは、一九一七年一一月にはプロレタリア

ートの大多数者を率いていた。プロレタリアートのあいだでボリシェヴィキと競争していた党、メンシェヴィキ党は、このころまでに徹底的に敗れてしまった（九〇〇万票にたいして、六六万八〇〇〇票とザカフカーズの七〇―八〇万票とを合わせても、一四〇万票）。しかも、この党は、一五年にわたる闘争（一九〇三―一九一七年）で敗れたのであって、この闘争がプロレタリアートの前衛を鍛え、啓蒙し、組織して、真の革命的前衛につくりあげたのである。この場合、第一次革命、一九〇五年の革命がこの二つの党のその後の発展を準備し、両党の相互関係を実践的に規定し、一九一七―一九一九年の偉大な諸事件の総稽古の役割を演じたのである。

「社会主義者」と自称している第二インタナショナルの小ブルジョア民主主義者は、プロレタリアートの「統一」のためというあまったるい空文句で最も重大な歴史的問題をかたづけることが好きである。彼らは、こういうあまったるい美辞麗句に気をとられて、一八七一―一九一四年のあいだに労働運動の内部に日和見主義が積みかさねられていった事実を忘れ、一九一四年八月に日和見主義が破綻したことの原因、一九一四―一九一七年に国際社会主義が分裂したことの原因を熟考するのを忘れている（あるいは、熟考しようとしない）。

日和見主義を駆逐し押しつぶすためにプロレタリアートの革命的部分をこのうえなく真剣に、全面的に訓練することをせずに、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を考えるのはばかげている。現在、口さきでプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を承認することでその場を切りぬけようとしているドイツの「独立」社会民主党や、フランス社会党等々の指導者たちは、ロシア革命のこの教訓を心にきざんでおくべきであろう。

話をすすめよう。ボリシェヴィキはたんにプロレタリアートの多数者を、日和見主義との長期にわたる頑強な闘争で鍛えられたプロレタリアートの革命的前衛を、率いていただけではない。軍事用語をつかってよければ、ボリシェヴィキは首都に強力な「打撃力」をもっていたのである。

決定的な瞬間に決定的な地点で勢力の圧倒的な優勢を占めること――この軍事上の成功の「法則」は、また政治上の成功、とくに革命とよばれる激烈な、煮えたぎる階級戦争での成功の法則でもある。

首都、あるいは一般に巨大な商工業中心地（わがロシアでは、この二つの概念はこれまで一致してきたが、かならずしもいつでも一致するわけではない）は、一国民の政治的運命をかなりの程度決定する。もちろん、これには、十分な地方勢力、農村勢力がこれらの中心地に、たとえ即時の支持でなくとも、支持をあたえることが条件となる。

両首都で、ロシアの最も主要なこれら二つの商工業中心地で、ボリシェヴィキは勢力の圧倒的な、決定的な優勢を占めていた。ここでは、われわれの勢力はエス・エルのほとんど四倍であった。ここでは、われわれの勢力は、エス・エルとカデットをいっしょにしたよりも大きかった。そのうえ、われわれの敵はばらばらになっていた。というのは、カデットとエス・エルおよびメンシェヴィキとの「連立」（メンシェヴィキは、ペトログラードでもモスクワでも、投票数のわずか三%を得たにすぎない）は、勤労大衆のあいだで極度に信用をなくしていたからである。この時点では、われわれに対抗してエス・エルとメンシェヴィキがカデットと真の統一をつくるなどということは、まったく問題にならなかった。[*] よく知られているように、エス・エル系やメンシェヴィキ系の労働者農民にくらべて、百倍もカデットとのブロックという思想に親しんでいたエス・エルとメンシェヴィキの指導者さえ、一九一七年一一月には、カデットぬきでボリシェヴィキとの連立を考えていた（そして、それについてわれわれと交渉した）！[(三)]

* 以上にあげた資料によっても明らかなように、小ブルジョアジーの諸党やブルジョアジーの諸党がはなはだしくばらばらになっていたときに、プロレタリアートの党が統一と団結をたもっていたことは、興味ぶかいことである。

一九一七年一〇—一一月には、われわれはたしかに両首都を獲得しつつあり、ボリシェヴィキの「軍隊」を集結し、集中し、訓練し、ためし、鍛えたという意味でも、「敵」の「軍隊」を解体させ、無力にし、分裂させ、その士気を沮喪させたという意味でも、勢力の圧倒的な優勢を占め、最も充実した政治的準備をもっていたのである。

そして、両首都、資本主義的国家機構全体の両中心地（経済の面でも政治の面でも）を急速な、決定的な打撃によって獲得する可能性を確実にもっていたので、われわれは、官僚や「インテリゲンツィア」の気違いじみた反抗やサボタージュ等々にもかかわらず、中央の国家権力機構の力を借りて、非プロレタリア勤労大衆に、プロレタリアートこそ彼らの唯一の確かな同盟者、味方、指導者であることを、行為によって証明することができた。

三

だが、この最も重要な問題——非プロレタリア勤労大衆にたいするプロレタリアートの態度の問題——に移るまえに、なお軍隊について論じなければならない。

帝国主義戦争の時期には、軍隊は人民勢力の優秀な部分をことごとく吸収していた。そして、第二インタナショナルの日和見主義的ならず者ども（社会排外主義者、すなわ

ち、あからさまに「祖国擁護」の味方となったシャイデマンらやルノデルらだけではなく、「中央派」もふくめて）が、そのことばと行為とによって、ドイツ・グループとイギリス＝フランス・グループの帝国主義的強盗どもの指導への軍隊の従属を強めたにしても、真のプロレタリア的革命家は、一八七〇年にマルクスの言ったことば、「ブルジョアジーはプロレタリアートに武器の使い方を教える」（註）を、けっして忘れなかった。帝国主義戦争、すなわち、どちらの側についてみても略奪戦争であった戦争で「祖国擁護」をうんぬんすることができたのは、オーストリア＝ドイツとイギリス＝フランス＝ロシアの社会主義の裏切者だけであって、プロレタリア的革命家は（一九一四年八月以来）、軍隊を革命化することに、帝国主義的なブルジョア的強盗どもに反対して軍隊を利用することに、二つの帝国主義的強盗グループのあいだの不正義の略奪戦争を、各国のプロレタリアと被抑圧勤労大衆が「自国の」ブルジョアジーにたいしておこなう正義の、正当な戦争に転化することに、あらゆる注意をむけてきた。

社会主義の裏切者たちは、一九一四—一九一七年のあいだに、それぞれの国の帝国主義政府に反対して軍隊を利用する準備をしなかった。

だが、ボリシェヴィキは、一九一四年八月以来、その宣伝、扇動、非合法の組織活動の全体をあげて、これを準備した。もちろん、社会主義の裏切者であるすべての国のシャイデマン、カウツキーらの連中は、この点について、ボリシェヴィキの扇動によって軍隊が解体したという空文句で言いのがれをしてきたが、われわれは、われわれの階級敵の軍隊を解体させ、武装した労働者農民大衆を彼らから奪いとって搾取者との闘争にくわわらせ、こうして自分の義務をはたしたことを、誇りに思っている。

われわれの活動の成果は、とりわけ、ロシアで軍隊も参加した一九一七年一一月の憲法制定議会の選挙における投票にも現われている。

エヌ・ヴェ・スヴャチッキーがあげているこの投票の主要な結果をつぎにかかげよう〔次ページの表〕。

総括すると次のとおりである。エス・エルは一八八万五〇〇票を獲得し、ボリシェヴィキは一六七万一三〇〇票を獲得した。ところで、後者にバルト艦隊の一二万票をくわえると、ボリシェヴィキの得票は一七九万一三〇〇票となる。

したがって、ボリシェヴィキの得票はエス・エルよりいくらか少なかったわけである。

したがって、一九一七年一〇—一一月には、軍隊はすでになかばボリシェヴィキ的だったわけである。

1917年11月の憲法制定議会選挙における投票数　（単位　千票）

陸海軍部隊名	エス・エル	ボリシェヴィキ	カデット	民族的グループその他の諸派	合計
北部方面軍	240.0	480.0	?	60.0 (2)	780.0
西部方面軍	180.6	653.4	16.7	125.2	976.0
南西部方面軍	402.9	300.1	13.7	290.6	1,007.4
ルーマニア方面軍	679.4	167.0	21.4	260.7	1,128.6
カフカーズ方面軍	360.0	60.0	?	—	420.0
バルト艦隊	—	(1) (120.0)	—	—	(1) (120.0)
黒海艦隊	22.2	10.8	—	19.5	52.5
総計	1,885.1	1,671.3 + (120.0) (1) 1,791.3	51.8 +?	756.0	4,364.5 + (120.0) (1) +?

(1)　概数。ボリシェヴィキが２人選出された。エヌ・ヴェ・スヴャチツキーは，被選出者１人あたりの平均得票を６万票と計算している。そこで，私は12万という数字をあげておく。

(2)　黒海艦隊の投票 19,500 票はどの党が獲得したのかについては資料がない。この欄の残りの数字は，どうやら，ほとんど全部ウクライナ社会党のもののようである。というのは，10人のウクライナ社会党員と１人の社会民主党員（すなわち，メンシェヴィキ）が選出されたからである。

このことがなかったなら、われわれは勝利をおさめることができなかったであろう。

だが、全体としての軍隊におけるわれわれの得票は約半数であったとしても、両首都に最も近くにいた方面軍や、一般にあまり遠くない地点に位置していた方面軍では、われわれは圧倒的優位を占めていた。カフカーズ方面軍を除外すれば、全体としてボリシェヴィキはエス・エルよりも優位にあった。また、北部方面軍と西部方面軍をとれば、エス・エルの四二万票にたいして、ボリシェヴィキの得票は一〇〇万票をこえている。

したがって、軍隊内でも、ボリシェヴィキは、一九一七年一一月には、すでに決定的な瞬間に、決定的な地点で勢力の圧倒的な優勢を保障するような政治的な「打撃力」をもっていたのである。北部方面軍と西部方面軍でボリシェヴィキが圧倒的な優勢を占めており、また、その他の、中央から遠く離れた方面軍でも、ボリシェヴィキがエス・エル党から農民を奪いとる時間と可能性をもっていた——これについてはあとで論じる——ときに、軍隊がプロレタリアートの十月革命に、プロレタリアートによる政治権力の獲得に反抗するというようなことは、問題になりえなかった。

四

われわれは憲法制定議会の選挙の資料にもとづいてボリシェヴィズムの勝利の三つの条件を研究した。(一)プロレタリアートのあいだで圧倒的多数をにぎっていたこと、(二)軍隊内でほとんど半数をにぎっていたこと、(三)決定的な瞬間に、決定的な地点で、すなわち両首都と中央に近い方面軍とで、勢力の圧倒的な優勢を占めていたことである。

だが、もしボリシェヴィキが非プロレタリア的勤労大衆の多数者を味方に引きつけ、エス・エルその他の小ブルジョア諸党から彼らを奪いとることができなかったなら、以上の諸条件もきわめて短期間の、不安定な勝利しかもたらしえなかったであろう。

これこそ肝心な点である。

そして、第二インタナショナルの「社会主義者」(小ブルジョア民主主義者と読め)にプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)が理解できない主要な根源は、彼らが次のことを理解していない点にある。

一階級すなわちプロレタリアートの手中にある国家権力は、非プロレタリア的勤労大衆をプロレタリアートの味方に引きつける道具に、これらの大衆をブルジョア諸党と小ブルジョア諸党から奪いとる道具になることができるし、またならなければならない。

第二インタナショナルの「社会主義者」諸君は、小ブルジョア的偏見でいっぱいになっていて、マルクスの国家学説のいちばん肝心な点を忘れてしまい、国家権力を、ある種の聖物、偶像のように、あるいは形式的表決の合成力、「一貫した民主主義」の絶対者(その他、どういう名でよぼうと、同様なばかげたもの)のように考えている。彼らは、国家権力とはさまざまな階級が彼ら自身の階級的目的のために利用することができ、また利用しなければならない(また利用する能力をもたなければならない)道具にすぎないことを、見ないのである。

ブルジョアジーは、プロレタリアートに対抗し、すべての勤労者に対抗するための資本家階級の道具として、国家権力を利用してきた。どんなに民主的なブルジョア共和制のもとでも、そうであった。このことを「忘れた」のは、マルクス主義の裏切者だけである。

プロレタリアートは、(十分に強力な政治的および軍事的な「打撃力」を集めたならば)、ブルジョアジーを打倒し、彼らから国家権力を取りあげ、こうしてこの道具を自分の階級的目的のために行使しなければならない。

だが、プロレタリアートの階級的目的とはどういうもの

か？

ブルジョアジーの反抗を弾圧することである。

農民を「中立化し」、彼らを——とにかく、彼らのうちの搾取者でない勤労者の部分を——できるだけ自分の味方に引きつけることである。

ブルジョアジーから収奪した工場や、一般に生産手段で、大規模機械制生産を組織することである。

資本主義の廃墟のうえに社会主義を組織することである。

＊＊＊

カウツキー主義者をもふくめて、日和見主義者の諸君は、マルクスの学説を嘲弄して、人民に次のように「教え」ている。プロレタリアートは、はじめに普通選挙権によって多数者を獲得し、ついで、こういう多数者の投票にもとづいて国家権力を獲得し、それからはじめて、この「一貫した」民主主義（「純粋」民主主義と言う人もある）にもとづいて社会主義を組織しなければならない、と。

だが、われわれは、マルクスの学説とロシア革命の経験にもとづいて、次のように言う。

プロレタリアートは、はじめにブルジョアジーを打倒して、国家権力を自分の手にたたかいとり、ついで、この国家権力、すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を、勤労者の多数者の共感を獲得するための自階級の道具として利用しなければならない、と。

＊＊＊

国家権力は、どうすればプロレタリアートの手中で、非プロレタリア的勤労大衆への影響力を獲得するため、彼らをプロレタリアートの味方に引きいれるため、また彼らをブルジョアジーから奪いとりたたかいとるための、プロレタリアートの階級闘争の道具となることができるのか？

第一に、プロレタリアートは、旧来の国家権力機構を運用するのでなく、それを粉みじんに打ちくだき、それを根こそぎ一掃して（おびえた小市民のわめきたてや、怠業者の威嚇にもかかわらず）、新しい国家機構をつくりだすことによって、これをなしとげる。この新しい国家機構は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）に適合し、ブルジョアジーに対抗して非プロレタリア的勤労大衆を獲得するためのプロレタリアートの闘争に適合したものである。この新しい機構は、だれかによって考案されるものではなく、プロレタリアートの階級闘争のなかから、この階級闘争がひろがり深まってゆくなかから成長してくるものである。この新しい国家権力機構、国家権力の新しい型が、ソヴェト権力である。

ロシアのプロレタリアートは、国家権力を獲得すると、

ただちに、数時間後に、旧来の国家機構（マルクスが示しているように、幾世紀ものあいだ、どんなに民主的な共和制のもとでも、ブルジョアジーの階級利益に奉仕することに適合させられてきたところの）[三四]の解散を宣言して、全権力をソヴェトに引き渡した。そして、ソヴェトには勤労被搾取者だけが加入を許され、ありとあらゆる搾取者は排除された。

このように、プロレタリアートは、国家権力を獲得したあとで、一挙に、一撃で、ただちに、小ブルジョア的、「社会主義的」諸党に属していたブルジョアジー支持者の膨大な大衆をブルジョアジーから奪いとるのである。なぜなら、この大衆は勤労被搾取者だからである。彼らは、これまでブルジョアジー（その追従者であるチェルノーフ、カウツキー、マルトフらの一派をもふくめて）によってだまされてきたが、ソヴェト権力を手に入れたことで、はじめて、ブルジョアジーに反対して自分の利益をめざす大衆闘争の道具を手に入れるのである。

第二に、プロレタリアートは、ブルジョアジーと小ブルジョア民主主義派とから、一挙にではないまでも、きわめて急速に、「彼らの」大衆、すなわちこれまで彼らのあとに従ってきた大衆を奪いとること――地主とブルジョアジーを収奪するという手段で大衆の最も切実な経済的必要を革命的にみたすことによって、奪いとることができるし、また奪いとらなければならない。

ブルジョアジーは、どんなに「強力な」国家権力をもっていても、こういうことをすることはできない。

プロレタリアートは、国家権力を獲得した翌日にそうすることができる。なぜなら、彼らは、そうするための機構（ソヴェト）も、経済的手段（地主とブルジョアジーの収奪）ももっているからである。

ロシアのプロレタリアートは、まさにこのようにしてエス・エルから農民を奪いとった。しかも、プロレタリアートが国家権力を獲得してから文字どおり数時間後に奪いとった。というのは、ペトログラードでブルジョアジーに勝利をえてから数時間後に、勝利したプロレタリアートは『土地にかんする布告』[三五]を公布し、この布告のなかで、全面的に、また一挙に、革命的な急速さと精力と献身で、農民の多数者の最も切実な経済的必要をすべて実現し、地主を完全に、無償で収奪したからである。

プロレタリアは農民に多数決で押しつけたり命令したりするつもりはなく、農民を助け、彼らの友人になりたいと望んでいるのだということを、農民に証明するために、勝利したボリシェヴィキは、『土地についての布告』のなかに自分のことばを一言も挿入せず、エス・エルがエス・エ

ルの新聞に公表した農民の委託書（もちろん、その最も革命的なもの）を、一語一語書き写した。

エス・エルは激怒し、憤激し、憤慨して、「ボリシェヴィキはわれわれの綱領を盗んだ」とわめきたてたが、そのことでエス・エルは人々の嘲笑を買っただけであった。その党の綱領のうちで革命的なもの、勤労者にとって有益なものをのこらず実現するためには、この党を打ち破り、それを政府から追放しなければならなかったとは、なんというりっぱな党であろう、と！

ほかならぬこの弁証法――プロレタリアートは、住民の多数者を自分の味方に獲得しなければ勝利することができない、という――を、第二インタナショナルの裏切者、鈍物、もの知り学者たちは、理解することができなかった。だが、この獲得するということを、ブルジョアジーの支配下の選挙で多数票を獲得することに限ったり、あるいはそれに依存させることとは、手のつけられない愚鈍さか、でなければ、労働者にたいするまったくの嘲笑である。住民の多数者を自分の味方に獲得するためには、プロレタリアートは、第一に、ブルジョアジーを打倒し、国家権力をその手ににぎらなければならない。第二に、プロレタリアートは、旧来の国家機構を粉みじんに打ち砕いてから、ソヴェト権力を導入しなければならない。そうすることで、彼らは、非プロレタリア的勤労大衆のあいだでのブルジョアジーと小ブルジョア的協調派の支配、権威、影響を、一挙にくつがえす。プロレタリアートは、第三に、搾取者の負担で非プロレタリア的勤労大衆の経済的必要を革命的に実現することによって、これらの大衆の多数者のあいだでのブルジョアジーと小ブルジョア的協調派の影響に、とどめをささなければならない。

もちろん、すべてこうしたことは、資本主義的発展が一定の水準に達している場合にはじめて可能となる。この基本的条件がなければ、プロレタリアートが特別の一階級に分離することもありえないし、また長年のあいだのストライキやデモンストレーション、日和見主義者を暴露し追放する闘争で、長期にわたってプロレタリアートを訓練し、陶冶し、教育し、闘争でためす仕事に成功をおさめることもできない。この基本的条件がなければ、中心地が大きな経済的および政治的な役割を果たし、そのため、プロレタリアートがこれらの中心地をにぎることによって、国家権力全体、より正しく言えばこの国家権力の中枢、核心、結節点をにぎるというようなことも、ありえない。この基本的条件がなければ、プロレタリアートの状態と、非プロレタリア的勤労大衆の状態とのあいだの親縁性、近似性、結びつきもありえない。しかも、これらのもの（親縁性、近似

性、結びつき）は、プロレタリアートがこれらの大衆に影響をおよぼすため、彼らにたいするプロレタリアートの働きかけが成功するために欠くことのできないものである。

五

話をすすめよう。

プロレタリアートは国家権力を獲得し、ソヴェト制度を実現し、搾取者の負担で勤労者の多数者を経済的に満足させることができる。

完全な、最後の勝利をおさめるのに、これで十分であろうか？

十分ではない。

資本主義のもとで勤労大衆が、長期にわたる闘争の経験を経ないでも、どの階級、あるいはどの党のあとについてゆくかを、単なる投票によって、あるいは総じてなんらかの方法でまえもって決定できるほどに、高度の自覚、堅固な志操、洞察力、広い政治的視野を獲得できるなどと考えるには、小ブルジョア民主主義者、現代におけるその主要な代表者である「社会主義者」と「社会民主主義者」の幻想をもたなければならない。

これは幻想である。これは、カウツキー、ロンゲ、マクドナルド型のもの知り学者やあまったるい社会主義者のあまったるいむだ話である。

もし資本主義が、一方では、打ちのめされ、おしひしがれ、おどしつけられた、ばらばらの（農村！）、無知の状態を大衆の運命とせず、他方では、巨大な虚偽と欺瞞の機構、労働者と農民を大量的になぶりものにし、これを愚鈍化する等々のための機構をブルジョアジーの手にあたえないとすれば、それは資本主義ではないであろう。

だから、勤労者を資本主義からぬけださせて共産主義にみちびく能力をもっているのは、プロレタリアートだけである。「労働者階級とともにすすむか、それともブルジョアジーとともにすすむか」という最も困難な政治問題を、小ブルジョア的あるいは半小ブルジョア的勤労大衆がまえもって解決するというようなことは、とても考えられない。非プロレタリア的な勤労者層が動揺するのは避けられない。また、彼らが、ブルジョアジーの指導とプロレタリアートの指導との比較をおこなえるだけの実践的な経験を自身でつむことも、避けられない。

最も重大な政治問題が投票で解決できるかのように考えている「一貫した民主主義」の崇拝者たちがいつも見おとしているのは、まさにこの事情である。実際には、これらの問題が鋭いものとなり、闘争によって激化させられているときには、それを解決するものは内乱である。そして、

この内乱において重要性をもっているものは、非プロレタリア的勤労大衆（なによりも農民）の経験であり、彼らがプロレタリアートの権力とブルジョアジーの権力とを比較し、対比することによってえた経験である。

この点で、一九一七年一一月のロシアにおける憲法制定議会の選挙と、一九一七―一九一九年の二年にわたる内戦とを対比してみることは、教えるところがきわめて多い。

どういう地域が最も非ボリシェヴィキ的であったかを見たまえ。第一には、東部―ウラル地方とシベリア地方である。ここでは、ボリシェヴィキの得票率はそれぞれ一二％と一〇％であった。第二はウクライナで、ボリシェヴィキの得票率は一〇％であった。残りの地域のうちでボリシェヴィキの得票率が最も少なかったのは、大ロシアの農民地域であるヴォルガ沿岸―黒土地方であったが、そこではボリシェヴィキには総票数の一六％が投じられた。

ところで、まさに一九一七年一一月にボリシェヴィキの得票率が最も少なかった地域で、反革命的な運動や、蜂起や、反革命勢力の組織が最も大きな成功をおさめたことがわかる。コルチャックとデニーキンの権力は、まさにこれらの地域で何ヵ月ももちこたえた。

プロレタリアートの影響が最も少ないところでの小ブルジョア的住民の動揺は、これらの地域でとくにあざやかに現われた。

はじめ、ボリシェヴィキが彼らに土地をあたえ、復員した兵士が講和の知らせをもたらしたとき、彼らはボリシェヴィキに賛成した。ついで、ボリシェヴィキが、革命の国際的発展をはかり、ロシアに革命の火床を維持するために、ブレスト講和に応じ、こうして小ブルジョアジーの最も深い感情、すなわち愛国主義的感情を「侮辱した」とき、彼らはボリシェヴィキに反対した。ボリシェヴィキが、余剰穀物の公定価格による国家への引渡しを厳格に強権をもって履行させるであろうことを明らかにしたとき、とくに余剰穀物の最も多い地方の農民には、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が気に入らなかった。ウラル、シベリア、ウクライナの農民は、コルチャックとデニーキンのほうへ向きをかえた。

つぎに、コルチャックやデニーキンの支配地域のあらゆる三文記者が、白衛派の新聞の各号でふいちょうしたコルチャックやデニーキン流の「民主主義」についてえられた経験は、民主主義や「憲法制定議会」についての空文句が実際には地主と資本家の執権（ディクタツーラ）の覆いとして役だつにすぎないことを農民に示した。

こうしてボリシェヴィズムへの新しい転換が始まった。コルチャックやデニーキンの背後に、農民蜂起がひろがった。そして、赤軍部隊は農民に解放軍として迎えられた。

主要な小ブルジョア的勤労大衆である農民のほかならぬこの動揺が、終局的にはソヴェト権力とコルチャック＝デニーキンの権力との運命を決定したのである。だが、この「終局」に到達するまでには、激しい闘争と苦しい試練とにみちたかなりに長い期間があった。これらの闘争と試練は、ロシアでは二年では終わらなかった。まさにシベリアとウクライナで終わらなかったのである。そして、たとえばあと一年そこそこのあいだに、それが最後的に終わると、保障するわけにはいかない。

「一貫した」民主主義の支持者たちは、この歴史的事実の意義をよく考えてみなかった。彼らは、資本主義のもとでプロレタリアートが勤労者の多数者を「説得し」、投票によって自分の強固な味方に獲得することができるというような、子供だましのおとぎ話をしてきたし、いまもしている。だが、現実の示すところでは、動揺的な小ブルジョアジーは、長い、激しい闘争でえた苦しい経験にもとづいてはじめて、プロレタリアートの執権と資本家の執権とを比較してみたうえで、前者のほうが後者よりもよいという結論に到達するのである。

マルクス主義を学んだことがあり、一九世紀における先進諸国の政治闘争の経験を参考にしたいと思っている社会主義者ならみな、小ブルジョアジーがプロレタリアートと資本家階級のあいだを動揺するのが避けられないことを、理論的には承認する。これらの動揺の経済的根源は経済科学によって明白に解明されており、この経済科学の真理は、第二インタナショナルの社会主義者の新聞やリーフレットや小冊子で、何百万回となく繰りかえし述べられてきた。

だが、この人々は、これらの真理をプロレタリアートの執権という特異な時期に適用することができない。彼らは階級闘争を、小ブルジョア民主主義派の偏見と幻想(諸階級の「平等」とか、「一貫した」民主主義または「純粋」民主主義とか、大きな歴史的問題の投票による解決、などについての)とおきかえる。国家権力を獲得したプロレタリアートは、ここでその階級闘争を停止するのではなく、別の形態で、別の手段でそれを継続するのだということを、彼らは理解しようとしない。プロレタリアートの執権とは、国家権力のような道具を用いてのプロレタリアートの階級闘争であり、そしてその階級闘争の任務の一つは、非プロレタリア的勤労者層にとってプロレタリアートの執権を支持するほうがブルジョアジーの執権を支持するよりも有利であり、しかも第三の道はありえないことを、長い経験にもとづいて、多くの実践上の実例にもとづいて実証することなのである。

一九一七年一一月の憲法制定議会の選挙についての資料

は、それにつづく二年間の内戦の発展が示した画面の基本的な背景をあたえている。この戦争の基本的な勢力は、すでに憲法制定議会の選挙に明瞭に認められる。すなわち、プロレタリア軍の「打撃力」の役割も、動揺的な農民の役割も、ブルジョアジーの役割も、認められる。エヌ・ヴェ・スヴャチッキーはその論文につぎのように書いている。「カデットが最もよい成績をおさめた地方は、ボリシェヴィキが最もよい成績をおさめたのと同じ地方であった。すなわち、北部地方と中央工業地方とである」(一一六ページ)。最も発展した資本主義的中心地で、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだに立つ中間分子が最も弱かったのは、当然である。これらの中心地で階級闘争が最も激しかったのは、当然である。ここにこそブルジョアジーの主力がおかれていたし、ここでこそ、ここでだけ、プロレタリアートはブルジョアジーを粉砕することができた。そして、プロレタリアートだけがブルジョアジーを徹底的に粉砕することができた。そして、ブルジョアジーを徹底的に粉砕してこそはじめて、プロレタリアートは、国家権力というような道具を利用して、住民の小ブルジョア層の共感と支持を最後的に獲得することができたのである。

憲法制定議会の選挙についての資料は、それを利用する能力さえあれば、それを読む能力さえあれば、階級闘争についてのマルクス主義の学説の基本的真理を、かさねてわれわれに示してくれる。

ついでながら、これらの資料は、また民族問題の役割と意義をも示している。ウクライナをとってみたまえ。最近おこなわれたウクライナ問題についての協議のさいに、本論の筆者は一部の同志から、ウクライナにおける民族問題に法外に「めだった扱い」をあたえすぎるといって非難された。憲法制定議会の選挙についての資料が示すところによれば、一九一七年一一月には、まだウクライナのエス・エルと社会党が多数票を獲得した(ウクライナにおける投票総数七六〇万票のうち、ロシアのエス・エルの得票一九〇万票にたいして、三四〇万票プラス五〇万票、すなわち三九〇万票)。軍隊内でも、南西部方面軍とルーマニア方面軍では、ウクライナ社会党が全投票中にそれぞれ三〇%と三四%を獲得した(ロシアのエス・エルの得票それぞれ四〇%と五九%にたいして)。

こういう事態のもとで、ウクライナの民族問題の意義を無視すること——大ロシア人はこういう誤りをおかすことが非常に多い(そして、おそらく大ロシア人ほどではないにしても、ユダヤ人もこういう誤りをしばしばおかしている)のだが——は、大きな、危険な誤りをおかすことを意味する。一九一七年にもまだウクライナでは、ロシアの

エス・エルとウクライナのエス・エルとに分かれていたことは、偶然ではありえない。そして、国際主義者として、われわれは、第一に、「ロシア人」の共産主義者のあいだにある大ロシア帝国主義および排外主義（ときとして無意識な）の遺物にたいして、とくに精力的にたたかう義務がある。第二に、比較的重要でない（国際主義者にとっては、国境の問題は、第十義的な問題ではないまでも、第二義的な問題である）民族問題においてこそ、われわれは譲歩する義務がある。重要なのは他の諸問題である。プロレタリア執権（ディクタツーラ）の基本的利益が重要である。デニーキンとたたかっている赤軍の統一と規律の利益が重要である。農民にたいするプロレタリアートの指導的役割が重要である。ウクライナが別個の国家となるかどうかの問題は、それらにくらべればはるかに重要でない。ウクライナの労働者農民がさまざまな方式をつぎつぎと試み、たとえば数年のあいだに、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国との合同をも、別個の、独自のウクライナ社会主義ソヴェト共和国としての前者からの分離をも、両者の緊密な同盟のさまざまな形態、その他等々をも、実地にためすというような見とおしさえ、われわれを驚かすものではありえないし、われわれはそんなことにおびえてはならない。

あらかじめ、一挙に、「きっぱりと」、「これっかぎり」、この問題を解決しようとすることは、理解の狭さか、まったくの愚鈍かであろう。というのは、このような問題で非プロレタリア的勤労大衆が動揺するのはまったく当然であり、避けられないことでさえあり、プロレタリアートにとってけっして恐ろしいことではないからである。実際に国際主義者であることのできるプロレタリアートの代表者は、このような動揺にたいして最大の用心ぶかさと忍耐を示さなければならず、非プロレタリア的勤労大衆自身が自分の経験にもとづいてこの動揺を克服するのにまかせることが義務である。われわれが非妥協的で仮借なく、非和解的で不屈でなければならないのは、他の、すでにさきほど部分的にあげておいたもっと根本的な問題においてである。

六

一九一七年一一月の憲法制定議会の選挙と、一九一七年一〇月から一九一九年一二月までのロシアにおけるプロレタリア革命の発展とを対比してみると、あらゆる資本主義国のブルジョア議会制度とプロレタリア革命とに関係のあるいくつかの結論をくだすことができる。以下に、これらの結論のおもなものを簡単に述べるか、せめてそのあらましを示すよう試みてみよう。

一、普通選挙権は、さまざまな階級が自己の任務をどれほど理解しているかを示す指標である。それは、さまざまな階級が自己の任務をどのように解決したがっているかを示す。だが、これらの任務の解決そのものは、投票によってはあたえられず、内乱にいたるまでのすべての形態の階級闘争によってあたえられる。

二、第二インタナショナルの社会主義者や社会民主主義者は、俗流小ブルジョア民主主義派の見地に立っており、階級闘争の根本的な諸問題を投票によって解決できるかのような偏見を彼らとともにしている。

三、革命的プロレタリアートの党がブルジョア議会制度に参加することは、選挙や、議会内での諸党の闘争によって大衆を啓蒙できるので、このために必要である。だが、階級闘争を議会内の闘争に限ること、あるいは議会内の闘争を最高の、決定的な闘争と見なし、その他の闘争諸形態はこれに従属するものと考えることは、事実上、プロレタリアートに反対してブルジョアジーの側に寝がえることを意味する。

四、第二インタナショナルの代表者と支持者がみな、ドイツのいわゆる「独立」社会民主党の指導者がみな、口さきでプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を承認しながら、実際には、プロレタリアートはまずはじめに資本主義のもとで住民の多数者の意志の形式的表現（つまり、ブルジョア議会内での多数票）をかちとらなければならない、そのつぎにやってくるはずの政治権力のプロレタリアートへの移行のためにはまずそうしなければならないという思想を、その宣伝によって、プロレタリアートに植えつけているのは、事実上、ブルジョアジーの側への同様な寝がえりである。

ドイツの「独立」社会民主党員や、それと同様な、腐った社会主義の指導者たちが、このような前提から出発してわめきたてている「少数者の執権(ディクタツーラ)」等々についての非難はすべて、どんなに民主的な共和国においても事実上支配しているのはブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)なのだということを、これらの指導者が理解しておらず、プロレタリアートの階級闘争によってこのブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)を破壊するための諸条件を理解していないことを意味するにすぎない。

五、この無理解はとりわけ次の点にある。それは、ブルジョア諸党が支配しているのは、大部分、彼らが住民大衆をだましているおかげであり、資本の圧制のおかげであり、これにさらに小ブルジョア諸党のなによりも第一の特徴である資本主義の本質についての自己欺瞞がつけくわわっているのだということを、彼らが忘れていることである。普通、小ブルジョア諸党は、階級闘争を、多かれすくなかれ隠蔽された階級融和の形態とおきかえようと望んでいるの

である。

「はじめに、私的所有を保持したままで、すなわち資本の権力と圧制を保持したままで、住民の多数者がプロレタリアートの党への賛成を表明するようにならせるがよい。そうなってはじめて、この党は権力をにぎることができるし、またにぎらなければならない」――「社会主義者」と自称しているが、事実上ブルジョアジーの召使である小ブルジョア民主主義者はこう言う。

「はじめに革命的プロレタリアートは、ブルジョアジーを打倒し、資本の圧制を打ち砕き、ブルジョア国家機構を粉砕するがよい。そうなれば、勝利をおさめたプロレタリアートは、搾取者の負担で非プロレタリア的勤労大衆の多数者を満足させることによって、急速に彼らの共感と支持を自分の側に引きつけることができるであろう」――われわれはこう言う。これと反対の場合は、歴史上稀な例外であろう(しかも、そういう例外の場合にさえ、ブルジョアジーが内乱にうったえるおそれがある。これは、フィンランドの例が示したところである)(三)。

六、言いかえれば、こうである。

「はじめに、私的所有と資本のくびきを(すなわち、形式上の平等のもとでの実質上の不平等を)保持したままで、平等または一貫した民主主義の原則を承認する義務を負わせよう。そして、これにもとづいて多数者の決定をかちとることに、われわれはつとめよう」――ブルジョアジーと、社会主義者とか社会民主主義者とか自称している彼らの追随者はこう言う。

「はじめにプロレタリアートの階級闘争が、国家権力をたたかいとることによって、事実上の不平等の基柱、基礎を破壊する。ついで、搾取者を打ちやぶったプロレタリアートが、階級の廃絶をめざして、すなわちただ一つ欺瞞でない社会主義的平等をめざして、すべての勤労大衆を率いてすすむ」――われわれはこう言う。

七、すべての資本主義国には、プロレタリアートとならんで、あるいはプロレタリアートのうちで自分の革命的任務を自覚しそれの実現のためにたたかう能力をもっている部分とならんで、多数の無自覚なプロレタリア的、半プロレタリア的、半小ブルジョア的な勤労大衆がいる。彼らは、ブルジョアジーにだまされ、自分の力またはプロレタリアートの力を信ぜず、搾取者を収奪するという手段で自分の最もさしせまった必要をみたすことができるということをさとらないで、ブルジョアジーとブルジョア民主主義派(第二インタナショナルの「社会主義者」をもふくめて)のあとに従う。

勤労被搾取者のこれらの層は、プロレタリアートの前衛

に同盟者を提供する。プロレタリアートの前衛は、これらの同盟者とともに住民の安定した多数派をなしているが、プロレタリアートがこれらの同盟者を獲得することは、国家権力のような道具を利用する場合にはじめて、ブルジョアジーを打倒してその国家機構を破壊したあとではじめて、可能となるのである。

八、どの資本主義国でも、プロレタリアートの力は、人口総数中にプロレタリアートが占める割合よりも比較にならないほど大きい。これは、プロレタリアートが経済的に資本主義経済制度全体の中枢を支配しているからであり、またプロレタリアートが、経済的および政治的に、資本主義のもとでの勤労者の圧倒的多数の真の利益を表明しているからでもある。

だから、プロレタリアートは、人口の少数者にすぎない場合でさえ（あるいは、プロレタリアートの自覚した、真に革命的な前衛が人口の少数者にすぎない場合でさえ）、ブルジョアジーを打倒する能力をもっているばかりでなく、ついで半プロレタリアおよび小ブルジョアの大衆のあいだから多くの同盟者を味方に引きつける能力をももっている。この半プロレタリアおよび小ブルジョアの大衆は、あらかじめプロレタリアートの支配に賛成することはけっしてなく、この支配の条件や任務を理解することはないのであって、ただその後の自分の経験にもとづいてはじめて、プロレタリア執権が不可避で、正しく、法則的だということを確信するようになるのである。

九、最後に、どの資本主義国にも、労資のあいだを不可避的に動揺する小ブルジョアジーのきわめて広範な層がつねに存在する。プロレタリアートは、勝利するためには、第一に、ブルジョアジーにたいする決定的攻撃の瞬間を正しく選ばなければならないし、その場合、とりわけ、ブルジョアジーとその小ブルジョア的同盟者との分裂、彼らの同盟の不安定性を考慮にいれなければならない。プロレタリアートは、第二に、勝利したあとで、小ブルジョアジーを中立化し、彼らが搾取者の味方になるのを妨げ、ある期間彼らのぐらつきにさからってもちこたえる、その他等等のために、彼らのこうした動揺を利用しなければならない。

一〇、プロレタリアートにその勝利を準備させるための必要な条件の一つは、日和見主義、改良主義、社会排外主義、その他のブルジョア的見解や潮流にたいする、長期にわたる、頑強な、仮借ない闘争である。プロレタリアートが資本主義的環境のもとで活動するかぎり、こうした見解や潮流が現われるのは、避けられない。このような闘争をおこなわなければ、労働運動内部の日和見主義にたいして

あらかじめ完全な勝利をえなければ、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)は問題になりえない。もしボリシェヴィズムが、あらかじめ一九〇三―一九一七年のあいだに、メンシェヴィキ、すなわち日和見主義者、改良主義者、社会排外主義者に勝利し、彼らをプロレタリア前衛の党から仮借なく放逐することを学びとらなかったなら、一九一七―一九一九年にブルジョアジーに勝利することはできなかったであろう。

そして、現在ドイツの「独立派」、フランスのロンゲ派、その他が、実際には日和見主義に大小の譲歩をおこない、それと和解し、ブルジョア民主主義（彼らのことばによれば「一貫した民主主義」または「純粋民主主義」）、ブルジョア議会主義、等々の偏見に盲従するという、昔ながらの習慣的な政策をとりつづけながら、口さきでプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を承認しているのは、最も危険な自己欺瞞であり、ときには労働者にたいするまったくの嘲笑である。

一九一九年一二月一六日

一九一九年一二月に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第七―八号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四〇巻、一―二四ページ所収
邦訳全集、第三〇巻、二五一―二七六ページ所収

デニーキンにたいする勝利にさいしてウクライナの労働者と農民に送る手紙

同志諸君！　四ヵ月まえの一九一九年八月末に、私は、コルチャックにたいする勝利にさいして労働者と農民に手紙で訴えたことがあった。(三)

いま私は、デニーキンにたいする勝利にさいして、ウクライナの労働者と農民のために、この手紙の全文を再録させる。

赤軍はキエフ、ポルタワ、ハリコフを占領し、ロストフに向けて勝利の進撃をおこなっている。ウクライナでは、デニーキンにたいする蜂起がたけなわである。地主と資本家の権力の復活を企てたデニーキン軍を徹底的に紛砕するために、全力をあげなければならない。ふたたび来襲する可能性をいっさい断つために、デニーキンを撃滅しなければ

ばならない。

コルチャックがシベリアを征服し、そして地主と資本家の長期にわたる圧制ののち赤軍がシベリアを解放した経験から、ロシアのすべての労働者と農民が引きだした教訓を、ウクライナの労働者と農民もよく知らなければならない。

ウクライナでは、デニーキンの支配は、シベリアにおけるコルチャックの支配と同じような苦しい試練であった。この苦しい試練の教訓が、ウクライナの労働者と農民に——ウラルとシベリアの労働者農民の場合と同様に——ソヴェト権力の任務をいっそうはっきりと理解させ、ソヴェト権力をいっそう断固として擁護するようにならせることは、疑う余地がない。

大ロシアでは、地主的土地所有は完全に一掃されている。ウクライナでも同じことをする必要があり、ウクライナの労働者農民のソヴェト権力は、地主的土地所有の完全な廃止、地主のあらゆる圧制と地主そのものとからのウクライナの労働者農民の完全な解放を、確実なものにしなければならない。

しかし、この任務や、大ロシアの勤労大衆とウクライナの勤労大衆とがこれまで一様に当面してきた、また現に当面しているその他多くの任務のほかに、ウクライナのソヴェト権力には特殊な任務がある。そのような特殊な任務の一つが、現在、大きな注目に値するものとなっている。それは民族問題である。すなわち、ウクライナは、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国と同盟（連邦）を結んだ別個の独立したウクライナ・ソヴェト社会主義共和国となるか、それとも、ウクライナはロシアと合同して単一のソヴェト共和国となるかという問題である。すべてのボリシェヴィキ、すべての自覚した労働者と農民は、この問題を注意ぶかく考えてみなければならない。

ウクライナの独立は、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国のロシア中央執行委員会によっても、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）によっても、承認されている。だから、ウクライナをロシアと合同させるか、ウクライナを自主的な独立の共和国として残しておくか、また後者の場合この共和国とロシアとのあいだにまさにどのような連邦関係を打ち立てるかという問題は、ウクライナの労働者と農民自身だけが、彼らの全ウクライナ・ソヴェト大会で解決することができるし、また解決するだろうということは、自明なことであり、完全に一般の承認するところとなっている。

勤労者の利益という見地から、また労働を資本のくびきから完全に解放しようとする彼らの闘争を成功させるという見地からみて、この問題はどう解決すべきであろうか？

第一に、労働の利益は、いろいろな国、いろいろな民族

の勤労者のあいだの最も完全な信頼、最も緊密な同盟を必要とする。地主、資本家、ブルジョアジーの支持者は、労働者を無力にし、資本の権力を固めるために、労働者を分裂させ、民族的な不和と敵意を強めることにつとめる。

資本は国際的な力である。それに勝利するためには、労働者の国際的同盟が、国際的な友好が必要である。

われわれは民族的敵意、民族的不和、民族的分立の反対者である。われわれは国際主義者であり、インタナショナリストである。われわれは、世界のあらゆる民族の労働者と農民を単一の世界ソヴェト共和国に緊密に統合し、完全に融合させることを目標としている。

第二に、勤労者は、資本主義が諸民族を、少数の抑圧民族、大国民族（帝国主義的民族）、完全な権利をもった特権的な民族と、大多数の被抑圧民族、従属的また半独立的な民族、平等な権利をもたない民族とに分裂させたことを忘れてはならない。このうえなく犯罪的で反動的な一九一四―一九一八年の戦争は、この分裂をさらにいっそう強め、これを基盤として敵意と憎悪を激しくした。大国民族、抑圧民族にたいする不同権民族、従属民族の――大ロシア民族のような民族にたいするウクライナ民族のような民族の――憤りと不信が、何世紀ものあいだに蓄積されてきた。

われわれは、諸民族の自発的な同盟――ある民族が他の民族にたいしていかなる暴力をくわえることも許さないような同盟――、最も完全な信頼に、兄弟的な統一のはっきりした自覚に、完全に自発的な合意にもとづくような同盟を望んでいる。このような同盟を一挙に実現することはできない。それをなしとげるには、事業をだいなしにしないように、不信をまねかないように、地主と資本家の抑圧、私的所有、それの分配と再分配をめぐる反目が何世紀もつづいたために残された不信を取りのぞくように、できるだけ辛抱づよくかつ慎重に努力しなければならない。

だから、諸民族の統一をめざして不断の努力をかさね、諸民族を分裂させるすべてのものごとを容赦なく追及しながらも、われわれは、民族的不信の名ごりにたいしては、きわめて慎重で、辛抱づよく、譲歩的でなければならない。われわれは、資本のくびきからの解放をめざしてたたかう労働の基本的利益にかかわりのあるすべてのことについては、非譲歩的、非妥協的でなければならない。ところで、国境をいまさしあたって――というのは、われわれは国境の完全な廃止をめざしているのであるから――どう決定するかという問題は、基本的でも、重要でもない、第二義的な問題である。この問題では、なりゆきを待ってよいし、また待たなければならない。というのは、農民や小経営主

の広範な大衆のあいだでは民族的不信がしばしばきわめて根づよく、性急にふるまうと、不信を強めるおそれがあるからである。すなわち、完全な最後的な統一の大業をそこなうおそれがあるからである。

　ロシアの労農革命、一九一七年の十月＝十一月革命の経験、この革命が国際資本家とロシアの資本家の侵攻にたいして二年間たたかって勝利した経験は、資本家が大ロシア人にたいするポーランド、ラトヴィア、エストニア、フィンランドの農民と小経営主の民族的不信を一時利用することができたこと、この不信を基盤にして彼らとわれわれのあいだに一時不和をひろめることができたことを、このうえなくはっきりと示した。この不信は、ごく徐々にしか根絶されず、消滅しないものであって、長いあいだ抑圧民族であった大ロシア人が慎重な態度と忍耐心を発揮すればするほど、ますます確実にこの不信が消えてゆくということを、経験は示した。ポーランド、ラトヴィア、リトアニア、エストニア、フィンランドの各国家の独立を承認してこそ、われわれは、近隣の小さな国家の最も遅れた、資本家から最もあざむかれ、しいたげられた勤労大衆の信頼を、徐々に、だが着実にかちとる。まさにこのような道によって、われわれは、最も確実に「自国」資本家の影響から彼らを切り離し、最も確実に、完全な信頼と将来の単一の国際ソヴェト共和国へ彼らをみちびくのである。

　ウクライナがデニーキンから完全に解放されるまでは、全ウクライナ・ソヴェト大会がひらかれるまでは、全ウクライナ革命委員会(一五四)がウクライナの政府である。このウクライナ革命委員会では、ウクライナのボリシェヴィキ派共産主義者とならんで、ウクライナのボロチバ派共産主義者(一五五)が政府部員として活動している。ボロチバ派がボリシェヴィキと違う点は、とりわけ彼らがウクライナの無条件の独立を固執していることである。ボリシェヴィキは、このことを意見の相違や分裂の種としてはいないし、このことを協力一致したプロレタリア的活動にたいするなんの妨げとも見ていない。資本のくびきに反対し、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をめざす闘争では、統一がなければならず、民族の境界の問題や、諸国家間に連邦関係があるべきか、それともその他の結びつきがあるべきかという問題をめぐって、共産主義者が袂をわかってはならない。ボリシェヴィキのあいだには、ウクライナの完全独立の支持者もおり、多少とも緊密な連邦関係の支持者もおり、ウクライナとロシアの完全な合同の支持者もいる。

　これらの問題をめぐって袂をわかつことは許されない。これらの問題は、全ウクライナ・ソヴェト大会が解決するであろう。

もし大ロシア人共産主義者がウクライナとロシアの合同を主張するなら、ウクライナ人は、大ロシア人共産主義者がこのような政策を擁護するのは、資本とたたかうためのプロレタリアの統一という考えによるのではなく、昔ながらの大ロシア的民族主義、帝国主義の偏見によるのではあるまいか、という疑いを、大ロシア人共産主義者にかけかねない。このような不信は当然であり、ある程度避けられないものであり、正当である。というのは、何世紀ものあいだ、大ロシア人は、地主と資本家の圧制のもとで、大ロシア的排外主義の恥さらしな、いまわしい偏見を吸収してきたからである。

もしウクライナ人共産主義者が、ウクライナの無条件の国家的独立を固執するなら、彼がそのような政策を擁護するのは、資本のくびきとたたかっているウクライナの労働者と農民の一時的利益の見地からではなく、小ブルジョア的、小経営主的な民族的偏見のためにそうしているのだ、という疑いをうけるおそれがある。というのは、経験が何百回となくわれわれに示しているように、いろいろな国の小ブルジョア的「社会主義者」——ポーランド、ラトヴィア、リトアニアのあらゆる自称社会主義者、グルジアのメンシェヴィキ、エス・エルその他——は、革命的労働者に敵対する「自国の」ブルジョアジーとの協調政策を、欺瞞の手段によってもちこむことを唯一の目的として、プロレタリアートの支持者をよそおってきたからである。われわれは、これを一九一七年二—一〇月のロシアのケーレンスキー主義の実例で見た。われわれは、これをありとあらゆる国で見てきたし、また現に見ている。

大ロシア人とウクライナ人の共産主義者の相互不信は、こういうわけできわめて生まれやすい。この不信とどうたたかうか？　それをどうやって克服し、相互の信頼をかちとるか？

このための最良の手段は、すべての国の地主および資本家とたたかい、その全能権力を回復しようとする彼らの企てとたたかうなかで、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)とソヴェト権力とを守りぬくために共同で活動することである。このような共同闘争は、国家的独立の問題あるいは国境の問題がどのように解決されようと、大ロシア人とウクライナ人の労働者にとっては緊密な軍事上、経済上の同盟がぜひとも必要なことを、実地にはっきりと示すであろう。なぜなら、そうしなければ、「アンタント」、「協商国」——すなわち、最も富裕な資本主義国であるイギリス、フランス、アメリカ、日本、イタリアの同盟——の資本家がわれわれを各個に押しつぶし、絞め殺してしまうだろうからである。これらの資本家から資金と武器を供給されたコルチャック

とデニーキンにたいするわれわれの闘争の実例は、この危険をはっきりと示した。

大ロシアとウクライナの労働者農民の統一と最も緊密な同盟とを破る者は、コルチャック派や、デニーキン派や、あらゆる国の略奪的資本家を助ける者である。

だから、われわれ大ロシア人共産主義者は、われわれのあいだに大ロシア人的排外主義がすこしでも現われた場合には、できるだけ厳重にこれを追及しなければならない。というのは、こうした現われは、総じて共産主義への裏切りであって、絶大な害悪をもたらし、われわれをウクライナの同志から分裂させ、それによってデニーキンとデニーキン派を利するからである。

だから、われわれ大ロシア人共産主義者が、ウクライナのボリシェヴィキ派共産主義者やボロチバ派と意見の相違をきたしたときには、その意見の相違がウクライナの国家的独立、ウクライナとロシアの同盟の形態、一般に民族問題にかんするものであるなら、われわれは譲歩しなければならない。われわれはみな、大ロシア人共産主義者も、ウクライナ人共産主義者も、他のどの民族の共産主義者も、プロレタリア闘争の基本的な、根本的な、すべての民族にとって一様な諸問題、すなわちプロレタリア執権（ディクタツーラ）、ブルジョアジーとの協調が許されないこと、われわれをデニーキンから防衛する勢力の細分化が許されないこと、などの問題については、非譲歩的、非妥協的でなければならない。

デニーキンに勝利し、これを滅ぼし、このような侵攻の反復を不可能にすること——これが、大ロシア人についてもウクライナ人についても、労働者農民の根本的な利益である。闘争は長期にわたり、困難である。というのは、全世界の資本家がデニーキンを助けており、将来も各種のデニーキンどもを助けるだろうからである。

この長期にわたる困難な闘争では、われわれ大ロシア人とウクライナ人の労働者は、緊密に同盟してすすまなければならない。個々別々では、きっとうまくやっていけないからである。ウクライナとロシアの境界がどうであろうと、両国の国家的相互関係の形態がどうであろうと、それはさほど重要ではない。この点では、譲歩に応じてさしつかえないし、また応じなければならない。この点では、これも、それも、あれも、ためしてみてさしつかえない。そうしたからといって、労働者と農民の大業、資本主義にたいする勝利の大業が滅びることはないであろう。

だが、もしわれわれが、われわれ相互の最も緊密な同盟、デニーキンに対抗する同盟、われわれ両国とあらゆる国の資本家および富農に対抗する同盟を維持することができないなら、そのときには、資本家がソヴェト・ウクライナを

て滅びるであろう。

も、ソヴェト・ロシアをも押しつぶし、絞め殺すことができるだろうという点で、労働の大業はきっと長期にわたって滅びるであろう。

すべての国のブルジョアジーも、あらゆる小ブルジョア党、労働者に対抗してブルジョアジーと同盟するのをはばからない「協調主義」諸党も、いろいろな民族の労働者を分裂させ、不信をあおり、労働者の緊密な国際的同盟と国際的友好を破ることに、なによりも努力してきた。ブルジョアジーがこれに成功するなら、労働者の大業は失敗する。ブルジョアジーがこれに成功するなら、労働者の大業は失敗する。願わくばロシアとウクライナの共産主義者は、辛抱づよく、ねばりづよい、頑強な共同活動によって、あらゆるブルジョアジーの民族主義的陰謀、あらゆる種類の民族主義的偏見を克服することに、そして、ソヴェト権力のためにたたかい、地主と資本家の圧制を一掃するためにたたかい、世界連邦ソヴェト共和国のためにたたかう諸民族の労働者農民の真に頑固な同盟の実例を全世界の労働者に示すことに、成功してほしいものである。

エヌ・レーニン

一九一九年一二月二八日

『プラウダ』第三号、一九二〇年一月四日
全集、第五版、第四〇巻、四一—四七ページ所収
邦訳全集、第三〇巻、二九一—二九八ページ所収

ロシア語の純化について

（ひまなときに、つまり集会で演説を聞いているあいだに浮かんだ随想）

われわれはロシア語をそこなっている。必要もないのに外国語を使っている。外国語の使い方がまちがっている。ネドチョートィ〔欠陥〕、あるいはネドズタートキ、あるいはプロベールィと言えばよいのに、どうして「デフェクトィ」と言う必要があるのか？

一般に読むことを、とくに新聞を読むことをつい近ごろ習い覚えた人が、熱心に新聞を読みはじめると、もちろん、その人は思わず知らず新聞流の口調を取りいれるものである。ところが、わが国では、ほかならぬ新聞の用語もまたそこなわれはじめている。つい近ごろ読むことを習い覚えた者が、新規なものとして外国語を使うのはしかたがないとしても、文筆家にはそれは許されない。必要もないのに

外国語を使うことに宣戦を布告すべきときではないだろうか？

正直なところ、必要もないのに外国語を使うのを聞くと、私はいらいらするが（なぜなら、それは、大衆にわれわれの影響をおよぼすのを困難にするからである）、新聞の執筆者たちの若干の誤りとなると、もうまったくわれをわすれることがある。たとえば、ヴォズブジダーチ〔喚起する〕の意味で、「ブヂーロヴァチ」〔扇動する〕ということばが使われている。しかし、フランス語の《bouder》（ブデ）はセルヂーツァ〔立腹する〕、ドゥーツァ〔ふくれっ面をする〕の意味である。だから、ブヂーロヴァチは、実際には、「セルヂーツァ」、「ドゥーツァ」の意味なのである。だから、ニージニー・ノヴゴロドふうのフランス語のことばづかいを取りいれることは、ロシアの地主階級の最悪の分子から最悪のものを取りいれることを意味している。この階級は、フランス語を学びはしたが、第一に、徹底的に学ばず、第二に、ロシア語をゆがめたのである。

いまや、ロシア語をゆがめることに宣戦を布告すべきときではないだろうか？

一九一九年または一九二〇年に執筆

一九二四年一二月三日に、新聞『プラウダ』第二七五号にはじめて発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四〇巻、四九ページ所収
邦訳全集、第三〇巻、二九九―三〇〇ページ所収

共産主義内の「左翼主義」小児病(一六)

一　どういう意味でロシア革命の国際的意義を語ることができるか？

プロレタリアートがロシアで政治権力を獲得した（一九一七年一〇月二五日〔ロシア暦〕―一一月七日）直後の数ヵ月には、遅れたロシアと進んだ西ヨーロッパ諸国との違いが大きいので、西ヨーロッパ諸国のプロレタリアートの革命は、わが国の革命とはあまり似ないものになるだろうと思われたかもしれなかった。いまでは、われわれはすでに相当の国際的経験をつんでいるが、この経験は、わが国の革命のいくつかの基本的な特徴が、地方的な、一国特有の、ロシアだけに限られた意義ではなくて、国際的な意義をもっていることを、きわめてはっきりと物語っている。私がここで国際的意義と言うのは、広い意味で言っているのではない。すなわち、わが国の革命の若干の特徴ではなくて、すべての基本的な特徴と、多くの第二義的な特徴とがすべての国に影響をおよぼすという意味で、国際的意義をもっているというのではない。そうではなく、ごく狭い意味に解して、すなわち、国際的意義ということを、わが国に起こったことは国際的に有効であると、あるいは、それが国際的な規模で繰りかえされるのは歴史的に避けられないというふうに解して、わが国の革命の若干の基本的な特徴がこのような意義をもっていることを認めなければならないのである。

もちろん、この真理を誇張し、それをわが国の革命の若干の特徴以外にもおよぼすなら、それははなはだしい誤りであろう。また、進んだ国々の一つででもプロレタリア革命が勝利したあとでは、おそらく急転換がやってくるだろうということ、すなわち、そのあとではロシアはじきに模範国ではなくなって、またもや遅れた国（「ソヴェト」の点で、社会主義の点で）となるだろうということを見おとすなら、これまた誤りであろう。

だが、現在の歴史的時機における事態は、ロシアの模範が*すべての*国に、その避けられない近い将来に属するある

ものを、しかもきわめて本質的なあるものを示しているということ、まさにこれが現在の歴史的時機の状態である。すべての国の先進的な労働者は、とっくにこのことを理解した——理解したというよりも、革命的階級の本能でこれをつかみとり、感じとった場合のほうがいっそう多かった。ソヴェト権力の国際的な「意義」（狭い意味の）、またボリシェヴィキの理論と実践の基礎の国際的な「意義」（狭い意味の）は、ここからきている。ドイツのカウツキー、オーストリアのオットー・バウアーとフリードリヒ・アードラーのような、第二インタナショナルの「革命的」指導者は、このことを理解しなかった。このため、彼らは反動派となり、最悪の日和見主義と社会主義の裏切りとの擁護者になったのである。ついでながら、一九一九年にウィーンで発行された匿名の小冊子『世界革命』（《Weltrevolution》）[毛]（社会主義叢書、第一一冊、イグナーツ・ブラント社）には、彼らの考え方と思考範囲の全体が、というよりもむしろまったく底なしの短見、衒学、卑劣さ、労働者階級の利益の裏切りが、とくに明瞭に現われている、——しかも、「世界革命」の思想を「擁護」するという装いのもとに。

だが、この小冊子をもっとくわしく論じるのは、いつか別の機会にゆずらなければならない。ここでは、もう一つのことだけを指摘しておこう。遠い、遠い昔、カウツキーが背教者でなく、まだマルクス主義者であったころ、彼は、歴史家としてこの問題に取り組み、ロシアのプロレタリアートの革命性が西ヨーロッパの手本となるような情勢がやってくる可能性を予見した。それは、カウツキーが革命的な『イスクラ』[芸]に論文『スラヴ人と革命』を書いた一九〇二年のことであった。彼はこの論文につぎのように書いている。

「現在では」（一八四八年とは反対に）「スラヴ人が革命的な国民の列にはいったばかりでなく、革命思想と革命事業との重心も、ますますスラヴ人のほうに移りつつあるように思われる。革命の中心は西から東に移りつつある。一九世紀の前半には、それはフランスにあり、ときにはイギリスにあった。一八四八年に、ドイツも革命的な国民の列にはいった。……新しい世紀は、われわれが、革命の中心のいっそうの移動、すなわちロシアへの移動をむかえようとしているという考えをわれわれにいだかせるような諸事件で始まっている。……西ヨーロッパからじつに多くの革命的イニシアティヴを受けいれたロシアは、今度はおそらく、それ自身、西ヨーロッパにとって革命的エネルギーの源になろうとしている。いま燃えあがっているロシアの革命運動は、おそらく、われわ

れのあいだにひろがりはじめている、あの意気地のない俗物根性と気のぬけた政治術策との精神を追いはらう最も強力な手段となるであろうし、闘争の意欲と、われわれの偉大な理想にたいする熱烈な献身とを、ふたたび赤赤と燃えあがらせるであろう。ロシアは、もうずっとまえから、西ヨーロッパにとって反動と絶対主義のたんなる砦(とりで)ではなくなっている。いまでは、事情はおそらく正反対になっている。西ヨーロッパは、ロシアにおける反動と絶対主義との砦になりつつある。……ロシアの革命家が、ツァーリの同盟者であるヨーロッパの資本にたいしても同時にたたかわざるをえないという事情がなかったなら、彼らは、おそらく、もうとっくにツァーリをかたづけていたであろう。今度は、彼らが首尾よく二つの敵をともにかたづけ、新しい『神聖同盟』がこれまでの『神聖同盟』(一五)よりも速やかに崩壊するよう期待したい。だが、ロシアの現在の闘争がどんな結末になろうとも、この闘争によって残念ながらあまりにも大量に失われるであろう殉教者の血と生の悦びとは、むだにはならないであろう。それは、全文明世界で社会変革の欲求をみのらせ、それをいっそう豊かに、かつ急速に成長させるであろう。一八四八年には、スラヴ人は人民の春の花を枯らした厳寒であった。おそらく、いまは彼らは、反動の氷を打ち砕いて、諸国民に新しいしあわせな春をもたらす嵐となる使命をになっている。」(カール・カウツキー『スラヴ人と革命』、ロシア社会民主党の革命的新聞『イスクラ』一九〇二年三月一〇日、第一八号所載の論文)

一八年まえには、カール・カウツキーは、なんとりっぱなことを書いたことだろう!

二　ボリシェヴィキの成功の一基本条件

おそらく、いまではもうほとんどだれでも理解していることであるが、わが党内にこのうえなく厳格な、真に鉄のような規律がなく、労働者階級の大多数者全体が、すなわち、労働者階級のなかの思慮に富み、誠実で、献身的で、影響力をもち、遅れた層をみちびき、あるいは引っぱってゆくことのできるすべての者が、わが党をこのうえなく完全に、どこまでも支持しなかったなら、ボリシェヴィキは、二年半はおろか、二ヵ月半も権力をたもてなかったであろう。

プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)は、自分よりも強力な敵であるブルジョアジーにたいする、新しい階級の最も献身的な、最も容赦ない戦いであって、このブルジョアジーの反抗は、彼らが打倒される(たとえ、一国内であれ)ことによって

十倍にも強まる。彼らの威力は、国際資本の力、ブルジョアジーの国際的なつながりの力と強固さにあるばかりではなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜなら、小規模生産は、残念ながら、まだこの世におびただしく残っていて、この小規模生産が資本主義とブルジョアジーを、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大量に生みだしているからである。これらすべての理由から、プロレタリアートの執権は不可欠である。そして、長期の、ねばりづよい、死にものぐるいの、生死をかけた戦い、堅忍、規律、剛毅、不屈、意志の統一を必要とする戦いなしには、ブルジョアジーに勝利することはできないのである。

繰りかえして言うが、ロシアにおけるプロレタリアートの執権の勝利の経験は、この問題について考える能力のない人々、あるいは深く考えみたことのない人々にさえ、プロレタリアートの無条件の中央集権と最も厳格な規律が、ブルジョアジーに勝利するための一つの基本条件であることを、明瞭に示したのである。

これは、しばしば論じられていることである。しかし、それがなにを意味しているのか、それはどんな条件のもとで可能なのかということについては、きわめて不十分にしか考えられていない。ソヴェト権力とボリシェヴィキに喝采を送るなら、それと同時に、ボリシェヴィキが革命的プロレタリアートに必要な規律をつくりあげることができた理由を、もうすこししばしば、最も真剣に分析すべきではなかろうか？

ボリシェヴィズムは、政治思想の潮流として、また政党として、一九〇三年以来存在している。ボリシェヴィズムが存在してきた全期間の歴史だけが、なぜボリシェヴィズムはプロレタリアートの勝利に必要な鉄の規律を、きわめて困難な条件のもとでつくりあげ、維持することができたかを、満足のゆくように説明することができる。

なによりも第一に生まれてくる問題は、プロレタリアートの革命党の規律は、なにによって維持され、なにによって点検され、なにによって補強されるかということである。それは、第一に、プロレタリア前衛の自覚によってであり、革命にたいする彼らの献身、彼らの堅忍、自己犠牲、英雄精神によってである。第二に、最も広範な勤労大衆、なによりもまずプロレタリア的勤労大衆と、しかしまた非プロレタリア的勤労大衆とも、結びつき、これに接近し、そう言いたければ、ある程度まで彼らと融合する能力によってである。第三に、この前衛のおこなう政治的指導の正しさによってであり、この前衛の政治的戦略戦術の正しさによってである——ただし、それは、最も広範な大衆が自身の経験によってこの正しさを納得する場合のことであるが。

これらの条件がなければ、ブルジョアジーを打倒して全社会を改造する使命を負った先進的階級の党に実際になることのできる革命党の規律は、実現できない。これらの条件がなければ、規律をつくりだそうとする試みは、かならず徒労に終わり、空文句に、ゼスチュアになる。だが、他方、これらの条件は一挙に生じることはできない。それは、長期にわたる労苦と苦しい経験によってはじめてつくりあげられる。これらの条件をつくりあげるのを容易にするものは、正しい革命理論である。そして、革命理論そのものは、教条ではなく、真に大衆的な、真に革命的な運動の実践と固く結びついてはじめて、最終的にできあがるのである。

ボリシェヴィズムは、一九一七—一九二〇年に、かつてなかったほど困難な条件のもとで、最も厳格な中央集権と鉄の規律をつくりあげ、それを首尾よく実現することができたが、その原因は、ひとえにロシアの幾多の歴史的特殊性にある。

一方では、ボリシェヴィズムは、一九〇三年にマルクス主義理論のきわめて強固な基盤のうえに成立した。そしてこの革命理論が正しいこと、しかもそれだけが正しいことは、一九世紀全体をつうじての世界の経験が証明しただけでなく、とくにロシアの革命思想のさまよいと動揺、誤りと失望の経験もまたこれを証明したのである。前世紀のほぼ四〇年代から九〇年代までの約五〇年のあいだに、ロシアの先進的な思想は、かつてなかったほど野蛮で反動的なツァーリズムの抑圧のもとで、正しい革命理論をむさぼるように探しもとめ、驚くほどの熱意と綿密さでこの分野でのヨーロッパとアメリカのありとあらゆる「最後のことば」を追求した。ロシアは、ただ一つ正しい革命理論であるマルクス主義を、前代未聞の苦しみと犠牲、未曽有の革命的英雄精神、信じられないほどの精力とひたむきな探求、学習、実践での試験、失望、点検、ヨーロッパの経験との比較の半世紀の歴史によって、真に苦しみぬいてたたかいとったのである。ツァーリズムのためによぎなくされた亡命生活のおかげで、革命的なロシアは、一九世紀の後半には、世界のどの国にもないような、豊かな国際的つながりをもち、世界の革命運動の形態と理論についてのすばらしい知識をもっていた。

他方では、この盤石のような理論的基盤のうえに生まれたボリシェヴィズムは、経験の豊かさの点で世界にくらべるもののない一五年（一九〇三—一九一七年）の実践の歴史を経てきた。なぜなら、どんな国でも、この一五年間にこれほど多くの革命的経験をなめ、合法的なものと非合法的なもの、平和的なものと激烈なもの、地下的なものと公然のもの、サークル的なものと大衆的なもの、議会的なも

のとテロリズム的なものというような、いろいろな運動形態の急速かつ多様な交替をこれほど多く経験したものは、近似的にでもなかったからである。どの国にも、これほど短い期間に、近代社会のすべての階級の闘争の形態、色合い、方法がこれほど豊富に集中されたことはなかった。しかも、国が遅れていて、ツァーリズムの抑圧がひどかったため、この闘争はとくに急速に成熟し、アメリカとヨーロッパの政治的経験の適切な「最後のことば」を、とくにむさぼるように、また首尾よくわがものにしたのである。

三　ボリシェヴィズムの歴史の主要な諸段階

革命の準備期（一九〇三―一九〇五年）。いたるところで大きな嵐の近づいていることが感じられる。あらゆる階級が激動し、準備する。国外では、亡命者の新聞雑誌が革命のすべての基本問題を理論的に提起する。三つの基本的階級、三つの主要な政治的潮流、すなわち、自由主義的ブルジョアの潮流、小ブルジョア民主主義（「社会民主党」や「社会革命党」の流派の看板のかげに隠れた）の潮流、革命的プロレタリアの潮流の各代表者は、綱領上、戦術上の見解の激烈きわまる闘争によって、きたるべき公然の階級闘争の前ぶれをし、それを準備する。一九〇五―一九〇七年と一九一七―一九二〇年に大衆の武装闘争の原因となったすべての問題は、萌芽のかたちで当時の出版物によって跡づけることができる（またそうしなければならない）。だが、これら三つの主要な潮流のあいだに、中間の、過渡的な、どっちつかずの組織がいくらでもあることは、言うまでもない。もっと正確に言えば、機関紙、政党、分派、グループの闘争のなかで、真に階級的な思想的・政治的潮流が結晶してゆき、各階級はきたるべき戦闘のために適当な思想的・政治的武器を鍛えあげるのである。

革命期（一九〇五―一九〇七年）。すべての階級が公然と登場する。すべての綱領上、戦術上の見解が、大衆の行動によって点検される。ストライキ闘争は、世界にかつてなかったほど広範で、激しいものとなる。経済的ストライキは成長して政治的ストライキとなり、政治的ストライキは成長して蜂起となる。指導するプロレタリアートと、指導される、動揺的で、ぐらぐらした農民との相互関係が、実践によって点検される。闘争の自然発生的な発展のなかで、ソヴェトという組織形態が生まれる。ソヴェトの意義についての当時の論争は、一九一七―一九二〇年の偉大な闘争の前ぶれをなしている。議会的闘争形態と非議会的闘争形態との交替、議会活動をボイコットする戦術と議会活

動に参加する戦術との交替、合法的な闘争形態と非合法的な闘争形態との交替、さらにまた両者の相互関係と結びつき――これらすべては、その内容の驚くほど豊かなことを特色としている。政治科学の基礎を、大衆にも指導者にも、階級にも党にも教えこんだ点で、この時期の一ヵ月は、「平和な」「立憲的」発展の一年に等しかった。一九〇五年の「総稽古」がなかったなら、一九一七年の十月革命の勝利は不可能であったろう。

反動期（一九〇七―一九一〇年）。ツァーリズムが勝利した。革命党と反政府党はみな粉砕されてしまった。衰退、士気沮喪、分裂、分散、背教、好色文学が政治にとってかわる。哲学的観念論への傾きが強くなる。神秘主義が反革命的な気分を隠す衣装となる。だが同時に、大きな敗北こそ、革命的諸政党と革命的階級に、ほんとうの、きわめて有益な教訓、歴史の弁証法の教訓、政治闘争の理解についての、また政治闘争をおこなう手腕と技術についての教訓をあたえるものである。不遇にして友を知る。敗軍はよく学ぶ。

勝利したツァーリズムは、ロシアの前ブルジョア的、家父長制的な生活様式の遺物を、急速に打ちこわすことをよぎなくされた。ロシアのブルジョア的発展は、めざましい急速度で前進する。資本主義を避けることができるという、非階級的で超階級的な幻想は消しとんでしまう。階級闘争は、まったく新たな、それだけにいっそう明瞭なかたちをとって現われる。

革命的諸政党は、徹底的に学ばなければならない。革命的諸政党は攻撃の仕方を学んだ。いまや、この科学を、より正しく退却する仕方についての科学で補うべきだということを、理解しなければならない。正しく攻撃し正しく退却することを学ばずには、勝利することはできないということを理解しなければならない。――そして革命的階級は、自身の苦い経験で、それを理解することを学ぶ。打ち破られたすべての反政府党や革命的政党のうちで、最も秩序正しく、その「軍隊」の損害は最も少なく、軍隊の中核を最もよく保存し、分裂すること（その深さと不治の度合いからみて）は最も少なく、士気沮喪は最も少なく、きわめて広範に、正しく、力づよく活動を再開する能力を最も多くたもって退却したのは、ボリシェヴィキであった。そして、ボリシェヴィキがこのことをやりとげたのは、退却の必要があること、退却するすべを知る必要があること、どんなに反動的な議会、どんなに反動的な労働組合、協同組合、保険組合その他の団体のなかでも合法的に活動するすべをぜひとも学ぶ必要があることを理解しようとしなかった革命的空論家たちを、容赦なく暴露し、追い放したからにほ

かならない。

高揚の時代（一九一〇—一九一四年）。はじめ、高揚は、信じられないほどのろのろしていたが、その後、一九一二年のレナ事件(一三〇)以後は、いくぶん速くなった。未曽有の困難に打ちかちながら、ボリシェヴィキはメンシェヴィキを押しのけたが、労働運動内のブルジョアの手先としてのメンシェヴィキの役割は、一九〇五年以後はブルジョアジー全体がみごとに理解していたところであって、そのため、ブルジョアジー全体が、ボリシェヴィキに反対して、百方手をつくしてメンシェヴィキを支持したのである。しかし、非合法活動と結合して、「合法的可能性」をかならず利用するという正しい戦術をとらなかったなら、ボリシェヴィキはメンシェヴィキを押しのけることにけっして成功しなかったであろう。ボリシェヴィキは、極反動的な国会で労働者クーリヤ(一三一)の全部を獲得した。

第一次帝国主義世界戦争（一九一四—一九一七年）。極反動的な「議会」の条件のもとでの合法的な議会活動は、革命的プロレタリアートの党、ボリシェヴィキにとってきわめて有益であった。ボリシェヴィキ派の代議士はシベリア行きをする(一三二)。われわれの亡命者の新聞には、社会帝国主義、社会排外主義、社会愛国主義、不徹底な国際主義と徹底した国際主義、平和主義と平和主義的幻想の革命的な否定といったあらゆる色合いの見解が、完全に表現されていた。ロシアの社会主義のうちにはおびただしい「分派」があり、それが相互に激しくたたかっているというので、軽蔑したように、高慢ちきに眉をひそめた第二インタナショナルの博学なばか者や腰ぬけたちは、いま戦争がすべての先進国でご自慢の「合法性」を奪いさってしまうと、ロシアの革命家たちがスイスその他いくつかの国で自由な（非合法な）意見交換を組織し、正しい見解を自由に（非合法に）仕上げたのにひきかえ、それにいくらかでも似たものさえ組織することができなかった。だからこそ、すべての国の露骨な社会愛国主義者も、「カウツキー主義者」も、プロレタリアートの最悪の裏切者となったのである。一九一七—一九二〇年にボリシェヴィズムは勝利することができたが、この勝利のおもな原因の一つは、ボリシェヴィズムがすでに一九一四年末以来、社会排外主義と「カウツキー主義」（これにあたるものは、フランスのロンゲ主義(一三五)、イギリスの独立労働党(一三四)の指導者とフェビアン派(一三六)の見解、イタリアのトゥラーティの見解などである）がけがらわしく、いまわしく、卑劣なものであることを容赦なく暴露し、ついで大衆も、彼ら自身の経験にもとづいて、ボリシェヴィキの見解の正しいことをますます確信するようになったことである。

ロシアの第二次革命（一九一七年二月から十月まで）。ツァーリズムが信じられないほどに老いぼれ、時代おくれになっていたことが、（このうえなく苦しい戦争の打撃や重荷とあいまって）ツァーリズムにむけられた信じられないほどの破壊力をつくりだした。数日のうちに、ロシアは、世界中のどの国よりも自由な――戦争の状況のもとで――民主的ブルジョア共和国に変わった。反政府諸党と革命的諸党の指導者たちが、最も「厳密に議会制的な」共和国におけると同じやり方で、政府をつくりはじめた。その場合、たとえどんなに反動的な議会であれ、議会内の反政府党の指導者であったという肩書は、その後これらの指導者が革命で一役果たすのを容易にした。

メンシェヴィキと「社会革命党員」は、ヨーロッパの第二インタナショナルの英雄たちや、入閣主義者や、その他のろくでなしの日和見主義者の手口と物腰、論拠と詭弁を、数週間のうちに、のこらずみごとに身につけた。われわれがいま、シャイデマンらとノスケら、カウツキーとヒルファディング、レンナーとアウステルリッツ、オットー・バウアーとフリッツ・アードラー、トゥラーティとロンゲ、イギリスのフェビアン派と独立労働党の指導者について読んでいることはみな、どれもこれもおなじみの古い調べの退屈な繰りかえし、反復のように思われる（また実際にそうである）。それらはすべて、われわれがすでにメンシェヴィキのところで見てきたものである。歴史がいたずらをして、遅れた国の日和見主義者に、いくつかの先進国の日和見主義者の先手を打たせたのである。

第二インタナショナルの英雄はみな破産してしまい、ソヴェトとソヴェト権力の意義と役割の問題で赤恥をかき、いまや第二インタナショナルから脱退した三つのきわめて重要な政党（すなわち、ドイツの独立社会民主党、フランスのロンゲ派の党、イギリスの独立労働党）の指導者も、この問題でとくに「めざましく」赤恥をかき、とまどいし、これらの全員が、小ブルジョア民主主義派の（「社会―民主主義者」と自称した一八四八年の小ブルジョアとまったく同じ流儀の）偏見のとりことなったが、われわれは、これらすべてのことを、すでにメンシェヴィキの実例で見てきた。歴史は、次のようないたずらをした。すなわち、一九〇五年にロシアにソヴェトが生まれ、一九一七年二―一〇月にメンシェヴィキがソヴェトを偽造したが、彼らはソヴェトの意義と役割を理解できなかったために破産してしまった、いま全世界に、ソヴェト権力の思想が生まれて、すべての国のプロレタリアートのあいだに未曾有の速さでひろがりつつある。ところが、第二インタナショナルの古い英雄たちは、わが国のメンシェウィキと同様に、ソヴェトの

役割と意義を理解できないため、いたるところで破産している。経験は、プロレタリア革命のいくつかのきわめて本質的な問題で、ロシアがやってきたことを、すべての国がかならずやらなければならないことを、証明したのである。

ボリシェヴィキは、議会制(事実上の)ブルジョア共和国とメンシェヴィキとにたいする勝利の闘争を、きわめて慎重に開始したのであって、いまヨーロッパやアメリカで往々見うけられる見解とは逆に、むぞうさにこれを準備したのではけっしてなかった。われわれは、この時期のはじめには、政府の打倒を呼びかけることはせずに、ソヴェトの構成と気分にまえもって変化がおきなければ、政府は打倒できないということを説明した。ブルジョア議会、憲法制定議会のボイコットを宣言することはせずに、われわれは、憲法制定議会をともなったブルジョア共和国のほうが、それをともなわない同様な共和国よりもすぐれており、また「労農」ソヴェト共和国のほうが、あらゆるブルジョア的民主的議会制共和国よりもすぐれていることを語り、わが党の四月(一九一七年)協議会以後は、党の名で公式にそう語った。[七七] このように慎重に、綿密に、周到に、長期にわたって準備しなかったなら、われわれは、一九一七年一〇月に勝利をかちとることも、この勝利を維持することもできなかったであろう。

四 ボリシェヴィズムは労働運動内のどんな敵とたたかって成長し、強くなり、鍛えられたか?

第一に、主として、日和見主義とたたかってである。日和見主義は、一九一四年には、完全に社会排外主義に変成し、完全にプロレタリアートに反対してブルジョアジーに味方するようになった。日和見主義は、当然に、労働運動内のボリシェヴィズムの主要な敵であった。この敵は、国際的な規模で、いまなお主要な敵である。ボリシェヴィズムは、この敵に最も多くの注意をはらってきたし、いまもはらっている。ボリシェヴィキの活動のこの側面は、いまではもう外国でもかなりよく知られている。

労働運動内のボリシェヴィズムのもう一つの敵については、そうは言えない。外国では、ボリシェヴィズムが小ブルジョア的革命主義との多年の闘争のうちに成長し、形づくられ、鍛えられたことが、まだあまりにも不十分にしか知られていない。この小ブルジョア的革命主義は、無政府主義にいくらか似ているか、さもなければ、それからなにかにか借りてきていて、一貫したプロレタリア階級闘争の条件と要求からは、およそ本質的な点で、逸脱している。

小所有者、小経営主（多くのヨーロッパ諸国では、非常に広くゆきわたった、大量に見られる社会的タイプ）は、資本主義のもとではたえまなく押えつけられており、非常にしばしば信じられないほど急激な生活の悪化と零落を身にうけているので、たやすく極端な革命主義に移ってゆくが、堅忍、組織性、規律、確固さを発揮する能力がないということは、マルクス主義者にとっては、理論上十分に確認されていることであり、ヨーロッパのすべての革命と革命運動の経験によって十分に裏書きされている。資本主義の悲惨に「逆上した」小ブルジョア――これは、無政府主義と同じように、すべての資本主義国につきものの社会現象である。このような革命主義が動揺常なく、不毛なもので、すぐに従順さに、無感覚に、空想性に転化する特性をもっていること、それどころか、あれこれのブルジョア的な「流行」思潮への「熱狂的」な心酔にさえ転化する特性をもっていること、――これはみな周知の事柄である。だが、これらの真理を理論的に、抽象的に認めるだけでは、革命党を古い誤りから救いだすことにはけっしてならない。というのは、こういう誤りは、いつでも予想外のきっかけで、すこしばかり新しい形態をとって、これまで見られなかった装いをして、あるいはこれまで見られなかった環境のもとで、独特な――多少とも独特な――情勢のもとで、現われてくるものだからである。

無政府主義は、労働運動の日和見主義的な過誤にたいする一種の罰である場合が、稀ではなかった。この二つのかたわものは、たがいに補いあってきた。ロシアの人口構成がヨーロッパ諸国よりも小ブルジョア的であったにもかかわらず、ロシアで無政府主義が、二つの革命期（一九〇五年と一九一七年）とその準備期とに、比較的わずかな影響力しかもっていなかったのは、疑いもなく、いくぶんは、日和見主義とつねに最も容赦なく非妥協的にたたかってきたボリシェヴィズムの功績に帰すべきである。「いくぶんは」と言うわけは、ロシアで無政府主義の力を弱めるうえでいっそう重要な役割を果たしたのは、無政府主義が以前に（一九世紀の七〇年代に）異常にさかんにはびこって、革命的階級の指導理論としてはまちがっており、役に立たないものであることを、徹底的にさらけだす機会があったという事情だからである。

ボリシェヴィズムは、一九〇三年に成立するにあたって、小ブルジョア的、半無政府主義的な（あるいは、無政府主義に媚態を呈しかねない）革命主義と容赦なくたたかう伝統を受けついだが、このような伝統は、革命的社会民主党にはつねにあったもので、わが国では、ロシアに革命的プロレタリアートの大衆党の基礎がすえられた一九〇〇―一

九〇三年に、とくに強固になった。ボリシェヴィズムは、小ブルジョア的革命主義の傾向を最も多くあらわしていた党、すなわち「社会革命」党との闘争を、三つの主要な点で受けつぎ、続行した。第一に、マルクス主義を否定したこの党は、どんな政治行動をとるにあたっても階級勢力とその相互関係を厳密に客観的に考慮にいれなければならないことを、頑として理解しようとしなかった（理解することができなかったというほうが、おそらく正しいであろう）。第二に、この党は、われわれマルクス主義者が断固として拒否した個人的テロル、暗殺を認めていることが自分たちの特別な「革命性」または「左翼主義」であると考えた。もちろん、われわれが個人的テロルを拒否したのは、それが目的にかなっていないからにすぎず、フランス大革命のテロルや、一般に勝利した革命党が全世界のブルジョアジーに包囲されているときに行使するテロルを「原則的」に非難するようなことをやれる連中については、すでにプレハーノフが、彼がまだマルクス主義者であり革命家であった一九〇〇—一九〇三年に、これを嘲笑し、侮蔑したものである。第三に、「社会革命党」は、ドイツ社会民主党の比較的に小さな日和見主義的な過誤を冷笑することを「左翼主義」と考えた一方で、たとえば農業問題あるいはプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の問題では、同じ党の極端な日和見主義者のまねをしたのであった。

ついでに言えば、われわれがいつも主張してきた意見、すなわち、革命的なドイツ社会民主党は（すでにプレハーノフが一九〇〇—一九〇三年にベルンシュタインを党から除名するよう要求したが、ボリシェヴィキは、つねにこの伝統を守りつづけて、一九一三年にはレギーンのはなはだしい下劣、卑劣、裏切りを暴露したことに注意せよ）（二六）、革命的プロレタリアートが勝利をおさめるために必要とする党に他のどの党よりも近いものであったという意見を、いまや歴史は大きな世界史的規模で確証している。戦時と戦争直後の時期のあらゆる恥ずべき崩壊と危機をとおってきた一九二〇年のいま、ドイツの革命的社会民主党こそ、西ヨーロッパのすべての党のうちで最もすぐれた指導者を出し、また他の党よりも早く立ちなおり、回復し、ふたたび強化したことが、はっきりと見られる。このことは、スパルタクス派の党についても、カウツキーら、ヒルファディングら、レーデブールら、クリスピーンらの日和見主義や無定見とたえずたたかっている「ドイツ独立社会民主党」のプロレタリア的左翼についても見られることである。完全に終了した歴史的一時代、すなわち、パリ・コミューンから最初の社会主義ソヴェト共和国までの時代をいま概観してみると、一般に無政府主義にたいするマルクス主義の

態度がまったく明確な、争う余地のない輪郭をとって現われてくる。けっきょく、マルクス主義が正しかったのである。そして、無政府主義者が、大多数の社会主義諸党のあいだで支配的な国家観の日和見主義的性格を正しく指摘したにしても、この国家観の日和見主義的性格は、第一に、マルクスの国家観の歪曲に、それどころか直接の隠蔽にもとづいていた（拙著『国家と革命』のなかで、私は、流行の社会民主主義的国家観の日和見主義をとくにくっきりと、痛烈、率直、明瞭に暴露したエンゲルスの手紙を、ベーベルが一八七五年から一九一一年まで三六年間も隠していたことを指摘しておいた(六九)）。第二に、この日和見主義的な見解を訂正すること、ソヴェト権力を承認し、それがブルジョア的議会制民主主義よりもすぐれていることを認めること、――すべてこれらのことは、ヨーロッパとアメリカの社会主義諸党のあいだの最もマルクス主義的な潮流の内部でこそ、最も急速かつ広範におこなわれた。

次の二つの場合に、自党内の「左翼的」偏向とのボリシェヴィズムの闘争は、とくに大規模なものになった。すなわち、一九〇八年に、極反動的な「議会」に参加すべきかどうか、極反動的な法律によって枠にはめられた合法的な労働者団体に参加すべきかどうかの問題が起こったときと、一九一八年にあれこれの「妥協」が許されるかどうかの問題（ブレスト講和）が起こったときとである。

一九〇八年に、「左翼」ボリシェヴィキは、極反動的な「議会」にも参加する必要があることを、頑として理解しようとしなかったために、わが党から除名された(七〇)。「左翼」――そのなかの多くの者はすぐれた革命家で、のちにはりっぱに共産党員となった（いまでもそうである）――がとくによりどころとしたのは、一九〇五年にボイコットで成功した経験であった。一九〇五年八月にツァーリが諮問「議会」(七一)の召集を布告したとき、ボリシェヴィキは――すべての反政府党やメンシェヴィキ党とは反対に――それのボイコットを宣言し、一九〇五年の十月革命(七二)が実際にそれを一掃してしまった。当時ボイコットが正しかったのは、反動的な議会に参加しないことが一般に正しいからではなく、大衆的ストライキを政治的ストライキへ、ついで革命的なストライキへ、ついで蜂起へと急速に転化させていった客観的情勢が正しく考慮されていたからである。そのうえ、当時の闘争は、最初の代議機関の召集をツァーリの手にまかせておくべきか、それとも、この召集を旧権力の手から奪いとるように試みるべきか、をめぐっておこなわれた。同じような客観的情勢が存在しているという、そしてそれが同じ方向へ同じテンポで発展するという確実性がなく、またありえなかったという点で、ボイコットは正しく

ないものになったのである。

一九〇五年におけるボリシェヴィキの「議会」ボイコットは、革命的プロレタリアートに非常に貴重な政治的経験をあたえ、合法的な闘争形態と非合法的な闘争形態、議会的闘争形態と議会外の闘争形態を結合するにあたって、議会的形態を放棄するすべを知ることが、ときには有益であり、またぜひとも必要でさえあることを示した。だが、この経験を、別な条件、別な情勢に、盲目的に、猿まね的に、無批判的に敷き移すことは、はなはだしい誤りである。一九〇六年にボリシェヴィキが「国会」をボイコットしたのは、すでに誤りであった。小さな、たやすく訂正できる誤りではあったが、とにかく誤りであった。* 一九〇七年、一九〇八年とその後の数年間にあっては、ボイコットは、きわめて重大な、訂正困難な誤りであった。当時、一方では、革命の波が非常に急速に高まって蜂起に移ってゆくとは期待できなかったし、他方では、改新されつつあったブルジョア君主制の歴史的情勢全体から、合法活動と非合法活動を結合することが必要となっていたからである。すでに完全に終了しており、それと次の諸時期との関連がすでに十分に明らかにされているこの歴史的時期を、いまふりかえってみると、もし、非合法的な闘争形態と合法的な闘争形態とをかならず結合し、極反動的な議会や、反動的な法律によって枠をはめられたその他多くの機関（保険金庫その他）にかならず参加しなければならないという立場を、苛烈きわまる闘争のなかで守りぬかなかったならば、ボリシェヴィキは、一九〇八―一九一四年にプロレタリアートの革命党の強固な中核を維持すること（強固にし、発展させ、強化することはさておいて）はできなかったであろうということが、とくにはっきりする。

＊ 個人にあてはまることは、政治と政党に――適当な変更をくわえて――あてはめることができる。誤りをおかさない人が賢いのではない。そういう人はいないし、またありえない。あまり重大な誤りをおかさない人、その誤りを容易に、すぐあらためることのできる人が、賢いのである。

一九一八年には、事は分裂にはいたらなかった。「左翼」共産主義者は、当時、わが党内に特別なグループあるいは「分派」を形成していたにすぎず、しかも、それは長いあいだではなかった。(一三) 同じ一九一八年に、「左翼共産主義」の最も著名な代表者、たとえば同志ラデックと同志ブハーリンは、自分たちの誤りを公然と認めた。彼らには、ブレスト講和は原則的に許されない、革命的プロレタリアートの党に有害な、帝国主義者との妥協だと思われた。これは、実際に帝国主義者との妥協であったが、しかし、その当時の情勢のもとではまさにぜひとも必要な妥協であった。

現在、ブレスト講和に調印したさいのわれわれの戦術に、たとえば「社会革命党」が攻撃をくわえるのを耳にするとき、また私との会談のさいに同志ランズベリが、「わがイギリスの労働組合の指導者たちは、ボリシェヴィキに妥協が許されるのなら、われわれにも妥協が許されるべきだ、と言っている」と語るのを聞くとき、私は、なによりも簡単で「わかりやすい」比喩で答えることにしている。

武装したギャングが、君の自動車を停止させたと思いたまえ。君は、彼らに金、居住証明書、ピストル、自動車をあたえる。そうすると君は、ギャングとの愉快なおつきあいから解放される。これが現に妥協であることは、疑う余地がない。〈Do ut des〉（「私は」君に金、武器、自動車を「あたえるが、それは君が」私にぶじに逃げる機会を「あたえるようにするためだ」）。しかし、気ちがいででもないかぎり、このような妥協を「原則的に許されないもの」と言ったり、このような妥協を結んだ人物をギャングの協力者だと称したりするような人間を見つけることはむずかしい（たとえギャングが自動車に乗りこんだのち、新たな強盗行為のために自動車と武器を使用するおそれがあるにしても）。ドイツ帝国主義というギャングとわれわれとの妥協は、このような妥協に似ていた。

だが、ロシアのメンシェヴィキとエス・エル、ドイツのシャイデマン派（カウツキー派もかなりの程度まで同じことである）、オーストリアのオットー・バウアーとフリードリヒ・アードラー（レンナー氏一派はいうにおよばず）、フランスのルノデルとロンゲの一派、イギリスのフェビアン派、「独立労働党員」、「労働党員」（「レーバーライト」）[154]が、一九一四―一九一八年と一九一八―一九二〇年に、自国の革命的プロレタリアートに対抗して、自国のブルジョアジーや、ときには「連合国」のブルジョアジーというギャングと妥協を結んだとき、そのときこそ、これらのすべての諸君は、ギャング行為の共犯者として行動したのである。

結論ははっきりしている。妥協を「原則的に」否定し、どんなものであろうと一般に妥協はいっさい許されないと主張するのは、児戯に類することであり、まじめにうけとることさえできない。革命的プロレタリアートの役に立ちたいと思う政治家は、許せない妥協、まさに日和見主義と裏切行為の現われであるような妥協の具体的な場合をとりだして、批判の力、容赦ない暴露と非妥協的な戦いとの鋒先をあげてこれらの具体的な妥協にむけることができなければならないし、海千山千の「実利的な」社会主義者や議会的権謀家が、「妥協一般」論で言いぬけたり、責任のがれをするのを許さないようにしなければならない。イギリスの労働組合や、さらにフェビアン協会と「独立」労働党

の「指導者」諸君は、自分が裏切行為をおかした責任、実際に最悪の日和見主義、背信、裏切行為を意味するような妥協をやった責任を、まさにこのようにして言いぬけようとしているのである。

妥協にもいろいろある。それぞれの妥協について、あるいは妥協のそれぞれの変種について、その状況と具体的な条件を分析することができなければならない。ギャングからうける被害を少なくし、ギャングを逮捕し銃殺する仕事をやりやすくするために、ギャングに金と武器をあたえた人と、盗品の分配にあずかるために、ギャングに金と武器をあたえる人とを区別することを学ばなければならない。政治上では、これは、こどもにでもわかる単純な実例の場合のように、いつでも容易なわけではけっしてない。だが、生活上のあらゆる場合のためにできあいの解決策をあたえたり、革命的プロレタリアートの政治には、どんな困難も、どんなこみいった状態も生じないであろうと約束したりするような処方箋を、労働者のために考えだそうとする者は、まったくの山師であろう。

曲解の余地を残さないように、具体的な妥協を分析するためのいくつかの基本的な命題を、ごく簡単にでも示してみよう。

ブレスト講和に調印するという妥協をドイツ帝国主義者と結んだ党は、一九一四年末からその国際主義を実際にきずきあげてきた。党は、二つの帝国主義的強盗どうしの戦争では、ツァーリ君主制の敗北をとなえ、「祖国擁護」に焼印を押すことを恐れなかった。この党の国会議員は、ブルジョア政府の大臣職につうじる道を選ばないで、シベリア行きをした。ツァーリズムを打倒し、民主的共和制をつくりだした革命は、この党に新たな、このうえなく大きな試錬を課した。党は、「自国」の帝国主義者とのどんな協定にも応ぜずに、彼らを打倒する準備をととのえ、実際に打倒した。政治権力をにぎってから、この党は、地主的所有をも資本家的所有をも、あますところなく一掃した。この党は、帝国主義者の秘密条約を公表し、破棄して、すべての国の人民に講和を提議したが、英仏の帝国主義者が講和をぶちこわしたのち、またボリシェヴィキが、ドイツその他の国の革命を促進するために人力で可能なことはなんでもやったのちにはじめて、ブレストの強盗どもの暴力に屈した。このような情勢のもとで、このような党が結んだこのような妥協がまったく正しかったことは、日ごとにだれの目にもますますはっきりし、明瞭になっている。

ロシアのメンシェヴィキとエス・エルは（一九一四―一九二〇年に全世界の第二インタナショナルのすべての指導者がやったように）、「祖国擁護」を、すなわち自国の強盗

的ブルジョアジーの擁護を、直接間接に正当化することによって、裏切行為を始めた。彼らは、自国のブルジョアジーと連立し、自国のブルジョアジーといっしょになって自国の革命的プロレタリアートとたたかうことによって、裏切行為をつづけた。ロシアで彼らは、はじめにはケーレンスキーやカデットと、のちにはコルチャックやデニーキンとブロックを結んだが、これは、外国の彼らの同僚が自国のブルジョアジーとブロックを結んだのと同様に、プロレタリアートに反対してブルジョアジーの側に寝がえったことであった。帝国主義の強盗との彼らの妥協は、はじめから終りまで、彼ら自身を帝国主義的強盗行為の共犯者にした点にあった。

五　ドイツの「左翼」共産主義。指導者―党―階級―大衆

これからわれわれが論じなければならないドイツの共産主義者は、「左翼」と自称するのでなく、――私の思いちがいでなければ――「原則的反対派」と自称している。[注] しかし、彼らが完全に「左翼主義小児病」の症状を呈していることは、以下の叙述によって明らかになるであろう。

「フランクフルト・アム・マイン地区グループ」から発行され、この反対派の立場に立っている小冊子『ドイツ共産党（スパルタクス同盟）の分裂』は、きわめてくっきりと、正確に、はっきりと、簡潔に、この反対派の見解の本質を述べている。この本質を読者に知らせるには、二、三の引用をすれば足りるであろう。

「共産党は、最も断固たる階級闘争の党である。……」

「……政治的には、この過渡期」（資本主義と社会主義との中間の）「は、プロレタリア執権の時期である。……」

「……次のような問題が生まれる。だれが執権の担い手となるべきか。共産党か、それともプロレタリア階級か？……原則上、共産党の執権を目標とすべきか、それともプロレタリア階級の執権を目標とすべきか？……」（引用のなかの傍点は、すべて原著者のもの。）

ついで、小冊子の筆者は、ドイツ共産党「中央委員会」がドイツ独立社会民主党との連立の道を求めているといって同「中央委員会」を非難し、この「中央委員会」が議会活動をもふくめて「あらゆる政治的」闘争「手段を原則的に承認する問題」を提出しているのは、独立社会民主党との連合をめざすほんとうの主要な努力を隠すためにすぎない、と非難している。そして、小冊子はつぎのようにことばをつづけている。

「反対派は別の道を選んだ。共産党の支配と党の執権（ディクタツーラ）の問題は、戦術上の問題にすぎないというのが反対派の意見である。いずれにせよ、共産党の支配は、いっさいの政党支配の最後の形態である。原則上は、プロレタリア階級の執権（ディクタツーラ）を目標にしなければならない。そして、党のすべての方策、その組織、その闘争形態、その戦略戦術は、この目標に照点を合わせるべきである。したがって、およそ他の諸党と妥協すること、およそ歴史的および政治的に寿命のつきた議会主義の闘争形態に逆もどりすること、およそ迂回と協調の政策をとることとは、断固として拒否しなければならない。」「プロレタリア特有の革命的闘争方法を、わけても強調しなければならない。しかし、共産党の指導のもとで革命的闘争に進出すべき最も広範なプロレタリア・グループと層を結集するためには、できるだけ広い基盤のうえに、できるだけ広い枠をもった新しい組織形態をつくらなければならない。すべての革命的分子のこの集合点は、工場組織を基盤としてつくられた労働者同盟である。労働組合から脱退せよ！というスローガンに従う労働者はみな、労働者同盟に団結しなければならない。ここで、たたかうプロレタリアートは最も広範な戦列に編成される。これに加入するには、階級闘争、ソヴェト制度、独裁を承認するだけでよい。たたかう大衆のさらにすすんだ政治的教育、闘争の政治的方向づけはすべて、労働者同盟のそとにある共産党の任務である。……」

「……したがって、いまでは二つの共産党が対立している。

一つは、指導者の党である。この党は、上から革命的闘争を組織し、指揮しようとつとめており、独裁をその手に掌握するはずの連立政府に自分たちが参加できるような情勢をつくりだすために、妥協に応じ、議会主義をうけいれる。

もう一つは、大衆の党である。この党は、革命的闘争が下からもりあがってくるのを期待しており、この闘争のために、ただ一つ明瞭に目標にみちびく方法を知っており、それを用い、いっさいの議会的方法と日和見主義的方法を拒否している。このただ一つの方法というのは、社会主義の実現をめざしてプロレタリアートの階級執権（ディクタツーラ）を打ち立てるために、ブルジョアジーを容赦なく打倒するという方法である。……」

「……あちらは指導者の執権（ディクタツーラ）、こちらは大衆の執権（ディクタツーラ）！　これがわれわれのスローガンである。」

以上が、ドイツ共産党内の反対派の見解の特徴を示している、最も本質的な諸命題である。

一九〇三年以後のボリシェヴィズムの発展に意識的に参加したか、あるいはそれを身近に観察したボリシェヴィキならだれでも、この議論を読んで、即座にこう言うだろう。「なんという古くさい、先刻ご承知のくだらぬ言い草だ！ なんという、『左翼的』な幼稚さだ！」と。

だが、ここに引用した議論をすこしくわしく調べてみよう。

「党の執権か、それとも階級の執権か？ 指導者の執権（党）か、それとも大衆の執権（党）か？」という問題の立て方だけでも、まったく信じられないほどの、手のつけられない思想の混乱を証明している。この人人は、なにかまったく特別なものを考えだそうと苦労しており、利口ぶることに懸命なあまり滑稽なものになっている。大衆がさまざまな階級に分かれていること、――大衆と階級を対置することができるのは、社会的生産体制内の地位によって区分されていない膨大な多数者一般を、社会的生産体制内で特別な地位を占めているさまざまなカテゴリーに対置する場合だけであること、――階級は、普通、大多数の場合、すくなくとも近代の文明国では、政党によって指導されていること、――政党は、通則として、指導者とよばれる、最も権威があり、影響力があり、経験に富み、最も責任の重い職務に選ばれた人々の、多少とも安定したグループによって管理されていること、これらはだれでも知っていることである。これらはすべてイロハである。これらはすべて簡単明瞭なことである。このかわりに、わけのわからない寝言や、新しいヴォラピューク語(三)のようなものが、なんのために必要だったのか？ 一方では、この人々は、党の合法状態と非合法状態とが急速に交替したために、指導者、党、階級のあいだの普通の、正常な、簡単な関係が撹乱されるという困難な状態におちいって、どうやら混乱してしまったらしい。ドイツでは、ヨーロッパのほかの国の場合と同様に、合法性に慣れすぎていたし、定期の党大会で「指導者」を自由に正規に選出したり、議会選挙、大衆集会、新聞によって、また労働組合その他の団体の気分などによって、党の階級構成を軽便に点検したりすることに慣れすぎていたのである。革命が嵐のように進展し、内乱が発展してきたために、こういう習慣的なやり方から、合法性と非合法性との交替へ、両者の結合へ、「不便な」「非民主的な」方法で「指導者団」を選抜あるいは結成あるいは維持することへ、急速に移ってゆかなければならなくなると、人々は呆然自失して、とんでもないばかげたことを考えだしはじめた。おそらく、とりわけ特権的で、とりわけ安定した合法状態の伝統と条件をもつ小国に運わるく生まれあわせたオランダ共産党の一部の党員、

これまで合法状態と非合法状態との交替をまったく見たことのなかった人々が、自分でも混乱し、呆然自失して、このばかばかしい思いつきの手助けをしたのであろう。

他方では、「大衆」と「指導者」というこのごろ「流行の」用語が、まったく無思慮に、支離滅裂に使われているのが目につく。人々は、「指導者」を攻撃したり、指導者を「大衆」に対置したりすることについて、多くのことを耳にし、すっかり暗記したが、それがいったいなんのことかを考えることも、事柄をはっきり理解することもできなかった。

「指導者」と「大衆」との背離は、あらゆる国で、帝国主義戦争の末期と戦後に、とくにはっきり、鋭く現われた。マルクスとエンゲルスは、一八五二―一八九二年にイギリスを例にとって、この現象のおもな原因を何度も解明した。イギリスの独占的地位が、なかば小ブルジョア的な、日和見主義的な「労働貴族」を「大衆」から分離させたのである。この労働貴族の指導者たちは、たえずブルジョアジーの側に移ってゆき、直接間接に、ブルジョアジーに養われていた。マルクスは、この無頼漢どもに公然と裏切者の焼印を押したために、光栄にも、彼らから憎まれることになった。最新の（二〇世紀の）帝国主義は、いくつかの先進国の独占的、特権的な地位を生んだ。そして、それを基盤として、第二インタナショナルのいたるところに、自分たちのギルドの、労働貴族という自分たちの層の利益を守ろうとする裏切指導者、日和見主義者、社会排外主義者の型が現われてきた。こうして、「大衆」からの、すなわち、最も広範な勤労者層からの、勤労者の大多数からの、最も薄給な労働者からの、日和見主義諸党の遊離が生じたのである。この害悪とたたかい、社会主義の裏切者である日和見主義的な指導者を暴露し、はずかしめ、追放しなければ、革命的プロレタリアートの勝利は不可能である。第三インタナショナルは、まさにこのような政策をとったのである。

このことで、一般に大衆の執権（ディクタトゥーラ）を指導者の執権（ディクタトゥーラ）に対立させるところまで脱線するのは、笑うべきナンセンスであり、ばかげたことである。とくに滑稽なのは、簡単な事柄について一般の常識にかなった見解をもっている古い指導者たちに代わって、とんでもないばかげたことや混乱したことをしゃべる新しい指導者たちが（「指導者を倒せ」というスローガンに隠れて）実際に押しだされてきていることである。ドイツではラウフェンベルク、ヴォルフハイム、ホルナー、カール・シュレーダー、フリードリヒ・ヴェンデル、カール・エルラー*がこれである。問題を「掘りさげ」、政党は一般に無用で「ブルジョア的」なものだと宣言しようとするカール・エルラーの試みは、ナンセンスの極であ

って、あいた口がふさがらない。まことに、誤りを固執し、それを掘りさげて基礎づけ、誤りを「どこまでも押しすすめる」ならば、小さな誤りも、いつでもとほうもない大きな誤りとなりうるのである。

＊『コンムニスティッシェ・アルバイターツァイトゥング』(一七)（ハンブルク、一九二〇年二月七日、第三二号所載のカール・エルラーの論文『党の解消』）。「労働者階級は、ブルジョア民主主義を絶滅しなければ、ブルジョア国家を破壊することはできない。そして労働者階級は、政党を破壊しなければ、ブルジョア民主主義を絶滅することはできない。」

ラテン系諸国のサンディカリストや無政府主義者のうちの最も頭の混乱している連中は、「満足」してよかろう。明らかにマルクス主義者だと自任している堅実なドイツ人（K・エルラーとK・ホルナーは、上述の新聞紙上の彼らの論文によって、彼らが自分を堅実なマルクス主義者と思いこんでいることをとくに堅実に証明しており、信じられないほどのばかげたことを、とくに滑稽にしゃべり、マルクス主義のイロハもわかっていないことを暴露している）が、まったくとんちんかんなことをしゃべっているのだから。マルクス主義を認めるだけでは、まだ誤りをまぬがれはしない。ロシア人はそれをとくによく知っている。なぜなら、わが国では、マルクス主義が「流行」となったことがとくに多いからである。

党と党規律の否定――まさにこれが、反対派のおちつくところであった。ところが、これは、ブルジョアジーのためにプロレタリアートを完全に武装解除するにひとしい。これこそ、小ブルジョア的な分散性、ぐらつきであり、忍耐し、団結し、整然たる行動をとる能力のないことである。これを放任すれば、どんなプロレタリア革命運動もかならず破滅させられるであろう。共産主義の立場からすれば、党を否定することは、資本主義の崩壊の前夜（ドイツでは）から、共産主義の低い段階や中位の段階へではなく、高度の段階へ一足とびにとびうつることを意味している。われわれはロシアで（ブルジョアジーを打倒してから三年目に）、資本主義から社会主義へ、すなわち共産主義の低い段階へ移行する第一歩を経過しつつある。階級は残っており、またどこでも、プロレタリアートが権力を獲得したのちも、多年にわたって残るであろう。農民のいない（それでも、小経営主はいる！）イギリスでは、おそらく、この期間はもっと短いであろう。階級をなくすとは、地主と資本家を追いだすこと――われわれはこれを比較的たやすくやりとげた――だけを意味するものではなく、小商品生産者をなくすことをも意味しているが、彼らを追いだすことはできず、彼らを押しつぶすことはできず、彼らとは仲よく暮らしてゆかなければならない。非常に長期にわたる、漸進的な、慎重な組織活動によってはじめて、彼らをつくりかえ、再教育することができる（またそうすべきであ

る)。彼らは、小ブルジョア的な雰囲気で四方八方からプロレタリアートを取りまき、それをプロレタリアートにしみこませ、それによってプロレタリアートを堕落させ、プロレタリアートの内部にたえず小ブルジョア的な無定見、細分状態、個人主義をぶりかえさせ、熱中から意気消沈への変転をぶりかえさせている。これに対抗して、プロレタリアートのになう組織者としての役割(これが、プロレタリアートの主要な役割である)を正しく、首尾よく果たし、勝利をおさめるためには、プロレタリアートの政党の内部に、厳格なうえにも厳格な中央集権と規律が必要である。プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)は、旧社会の諸勢力と伝統にたいする頑強な闘争、流血また無血の、強力的また平和的な、軍事的また経済的な、教育的また行政的な闘争である。幾百千万人の習慣の力は最も恐るべき力である。闘争のなかで鍛えられた鉄のような党がなく、その階級のすべての誠実な人々から信頼されている党がなく、たえず大衆の気分に留意し、それに影響をおよぼすことのできる党がなければ、このような闘争を首尾よくおこなうことはできない。集中化された大ブルジョアジーに打ちかつことは、何百万もの小経営主に「打ちかつ」ことよりも、千倍も容易である。小経営主は、日常的な、日ごとの、目に見えない、捕捉しがたい腐敗作用によって、まさにブルジョアジーが必要とする当の結果を、すなわち、ブルジョアジーを復活させる結果を達成している。プロレタリアートの党の鉄の規律をすこしでも弱める(とくにプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の時期に)者は、事実上プロレタリアートに反対してブルジョアジーを助けるものである。指導者—党—階級—大衆の問題とならんで、「反動的な」労働組合の問題を提出しなければならない。だが、まずわが党の経験にもとづいて二、三の結論的な意見を述べてみたい。「指導者の執権(ディクタツーラ)」にたいする攻撃は、わが党内にいつもあった。私の記憶では、最初にこのような攻撃がなされたのは、一八九五年のことであった。当時、党はまだ正式には存在していなかったけれども、ピーテル〔ペテルブルグ〕に中央グループが形成されはじめ、これが各地区グループの指導を引き受けなければならなかった(三四)のである。わが党の第九回大会(一九二〇年四月)でも小さな反対派があって、やはり「指導者の独裁」、「寡頭支配」などに反対をとなえた。(三五)だから、ドイツ人のあいだの「左翼共産主義」の「小児病」には、なにも驚くようなもの、新しいもの、恐るべきものはないのである。この病気はなんの危険もなく過ぎさり、病後には身体がいっそう丈夫になるくらいである。他方では、ほかならぬ司令部、ほかならぬ指導者を、とくに「かくまい」、とくに秘匿する必要をともなう合法活動と非合法活動の急激な

交替は、ときにはわれわれのあいだにきわめて危険な現象を生みだした。一九一二年に挑発者マリノフスキーがボリシェヴィキ中央委員会にはいったことは、最悪の場合であった。彼は、何十人という最も優秀な、最も献身的な同志を売り渡し、懲役に送り、彼らのうちの多くの者の死を早めた。彼がそれ以上の害をおよぼさなかったのは、われわれのところでは合法活動と非合法活動の相互関係が正しく設定されていたためである。党中央委員および国会議員としてのマリノフスキーは、われわれの信頼をえるために、われわれが合法的な日刊新聞を出すのを助けなければならなかったが、これらの新聞は、ツァーリズムのもとでも、メンシェヴィキの日和見主義とたたかい、ボリシェヴィズムの原則を適当に偽装されたかたちで宣伝することができた。マリノフスキーは、一方の手では、ボリシェヴィズムの何十人もの最も優秀な活動家を懲役と死に送りながら、もう一方の手では、合法的な新聞をつうじて、何万という新しいボリシェヴィキの育成を助けざるをえなかった。反動的な労働組合内で革命的な活動をおこなうすべを学びとる任務に当面しているドイツ（またイギリス、アメリカ、フランス、イタリア）の同志たちは、この事実をよく考えてみるがよかろう。*

* マリノフスキーはドイツで捕虜になった。ボリシェヴィキの権力下のロシアに帰国したとき、ただちにわが労働者によって裁判に付され、銃殺された。メンシェヴィキは、わが党の中央委員会に挑発者をいれたという誤りのことで、われわれをとくに激しく攻撃した。だが、国会議長ロジャンコは、マリノフスキーが挑発者であることをすでに戦前に知っていながら、それをトルドヴィキ[一〇]と労働者の国会代表に通報しなかったので、われわれは、ケーレンスキーの時代にロジャンコの逮捕と裁判を要求したが、当時、ケーレンスキーといっしょに政府に参加していたメンシェヴィキもエス・エルも、われわれの要求を支持しなかった。そこで、ロジャンコは自由の身にとどまり、自由にデニーキンのもとにはしったのであった。

もっと進んだ国をもふくめて、多くの国でブルジョアジーが共産党内に挑発者を送りこんでいるし、将来もそうするだろうということは、疑う余地がない。この危険とたたかう手段の一つは、非合法活動と合法活動をたくみに結合することである。

六　革命家は反動的な労働組合のなかで活動すべきか？

ドイツの「左翼」は、この問いにたいして無条件に否定の答えをするのは、彼らとしては決定ずみのことだと考え

ている。彼らの意見によれば、黄色の、社会排外主義的、協調主義的、レギーン的、反革命的な労働組合のなかで革命家、共産主義者が活動するのは無用であり、許されないものでさえあることを「証明する」には、「反動的」で「反革命的」な労働組合に反対して熱弁をふるい、憤激の叫びをあげれば（これは、K・ホルナーがとくに「堅実に」、とくにばかばかしくやっていることである）、それで十分なのである。

しかし、ドイツの「左翼」が、このような戦術の革命性をどれほど信じていようと、実際には、それは根本的に誤っており、空文句のほかにはなんの内容もない。

これを明らかにするために、ボリシェヴィズムの歴史と現在の戦術のなかで一般に適用できるもの、一般に有効なもの、一般に妥当するものを、西ヨーロッパに適用することを目的としたこの論文の全体的計画におうじて、われわれの経験から始めることにする。

指導者—党—階級—大衆の相互関係、それと同時に、労働組合にたいするプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）およびプロレタリアートの党の関係は、いまわが国では、具体的には次のようなかたちをとっている。執権（ディクタツーラ）を実現しているのは、ソヴェトに組織されているプロレタリアートであり、そのプロレタリアートを指導しているのは、最近の党大会（一九二〇年四月）の資料によれば六一万一〇〇〇名の党員をもつボリシェヴィキ共産党である。党員数は、十月革命のまえにもあとにも変動がはなはだしく、以前には、一九一八年と一九一九年にさえ、ずっと少なかった。[二二] われわれは、党の度をこした拡大を恐れる。なぜなら、政府与党には、銃殺してしかるべき立身出世主義者や詐欺師が、かならずとりいろうとするものだからである。前回にわれわれが党の門戸を広く——労働者と農民にだけ——開放したのは、ユデーニチがピーテルから数ヴェルスタのところにおり、デニーキンがオリョール（モスクワから約三五〇ヴェルスタ）にいた時期（一九一九年の冬）、すなわち、ソヴェト共和国が重大な、死ぬか生きるかの危険に脅かされており、冒険主義者、立身出世主義者、詐欺師、総じてたよりにならない連中が、共産党に加入しても、けっして立身出世を期待できなかった（期待できたのは、むしろ絞首台と拷問であった）時期であった。[二三] 党は年次大会（最近の大会では、党員一〇〇〇名につき代議員一名）を招集するが、この党を指導しているのは、大会で選出された一九名からなる中央委員会である。そのさい、モスクワで日常の活動をするのは、もっと小さな合議体、すなわちいわゆる「オルグビューロー」（組織局）と「ポリトビューロー」（政治局）である。[二四] この両ビューローは、中央委員会総会で選出され、

それぞれ五名の中央委員で構成される。したがって、正真正銘の「寡頭支配」ということになる。ただ一つの重要な政治問題あるいは組織問題も、党中央委員会の指令がなければ、わが共和国のどんな国家機関によっても決定されない。

党はその活動において労働組合を直接のよりどころとしているが、労働組合は、最近の大会（一九二〇年四月）の資料によれば、現在、四〇〇万以上の組合員をもっており、形式的には無党派である。だが事実上は、大多数の労働組合の指導機関、第一に、言うまでもなく、全ロシアの全労働組合の中央部ないしビューロー（ヴェ・ツェ・エス・ペ・エス――全ロシア労働組合中央評議会）の指導機関はすべて、共産党員からなっていて、党のすべての指令を実行している。こうして、形式上は共産主義的でない、弾力性のある、比較的に広幅な、きわめて強力なプロレタリア的機構が、だいたいできていて、党はこの機構を媒介として階級や大衆と緊密に結びつき、この機構を媒介として、党の指導のもとに階級の執権（ディクタツーラ）が実現されている。経済建設だけではなく、軍事建設においても、労働組合とのきわめて緊密な結びつきがなく、労働組合の熱烈な支持がなく、労働組合のきわめて献身的な活動がなかったなら、われわれが二年半はおろか、二ヵ月半のあいだでさえ国を統治し、執権（ディクタツーラ）を実現することはできなかっただろうということは、いうまでもない。もちろん、このきわめて緊密な結びつきは、実践においては、宣伝や扇動、労働組合の指導者とばかりでなく、一般に労働組合の有力な活動家との適時の、頻繁な協議、メンシェヴィキとの断固たる闘争といった、非常に複雑で多様な活動を意味している。メンシェヴィキは、ごく少数であるとはいえ、いまなおある数の支持者をもっていて、（ブルジョア）民主主義を思想的に擁護し、労働組合の「独立」（プロレタリア国家権力からの独立！）を説くことから、プロレタリア的規律をサボタージュすること等々にいたるまでの、ありとあらゆる反革命的策謀をこれらの支持者に教えこんでいる。

われわれは、労働組合をつうじて「大衆」と結びつくだけでは不十分なことを、認めている。わが国では、革命の過程で、実践が党外労働者農民会議のような機関をつくりだしており、われわれは、たえず大衆の気分に留意し、彼らに近づき、彼らの要望にこたえ、彼らのうちの最も優秀な働き手を国家の職務に抜擢し、等々するために、この機関を完全に支持し、発展させ、拡大することにつとめている。国家監督人民委員部を「労農監督局」に改組することにかんする最近の一布告では、各種の監察にあたる国家監督機関のメンバーを選ぶ権利を、この種の党外会議にあた

えている、等々。

つぎに、党のすべての活動が、勤労大衆を職業の別なく統合しているソヴェトをつうじておこなわれていることは、いうまでもない。郡ソヴェト大会は、ブルジョア世界の民主的共和国のうちの最良のものでさえ、まだ見たことのないほど民主的な機関である。そして、これらの大会（党は、できるだけ注意ぶかくこれらの大会の経過を見まもるようにつとめている）をつうじて、また農村のあらゆる職務にたいして自覚した労働者をたえず派遣することで、農民にたいするプロレタリアートの指導的な役割が実現され、都市プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が実現され、富裕な、ブルジョア的、搾取者的、投機的な農民との系統的な闘争が実現されている、等々。

これが、「上から」、執権（ディクタツーラ）を実際に実現するという立場から見た、プロレタリア国家権力の全体的な機構である。この機構を知っており、この機構が小さな、非合法の地下サークルから二五年のあいだにどう成長してきたかを見てきているロシアのボリシェヴィキには、「上からか」、それとも「下からか」、指導者の執権（ディクタツーラ）か、それとも大衆の執権（ディクタツーラ）かなどというこのおしゃべり全体が、左足と右手のどちらがより多く人間の役に立つかという論争に類した、滑稽な、こどもじみたたわごととしか思えない理由は、おそらく読者にはおわかりのことと思う。

共産主義者は反動的な労働組合のなかで活動することはできないし、また活動すべきではないとか、このような活動は拒否してもさしつかえないとか、労働組合から脱退して、たいへん愛すべき（おそらく、大部分は年若の）共産主義者が考えだした、まったく新規な、まったく純粋な「労働者同盟」を、ぜひともつくらなければならないとかいう、ドイツの左翼のもったいぶった、博学きわまる、おそろしく革命的なおしゃべりも、われわれには、同じように滑稽な、こどもじみたたわごととしか思えない。

資本主義は、かならず、一方では労働者のあいだの古い、何世紀もかかってできあがった職業や職種のうえの差異を、他方では労働組合を、遺産として社会主義に残す。この労働組合は、きわめて徐々に、長い年月をかけてはじめて、同職組合的性質のより少ない、より広範な産業別組合（ある職場、ある職種、ある職業ばかりでなく、ある産業全体をふくんだ）に発展することができるし、また発展するであろうが、そのあとで、これらの産業別組合をつうじて、人々のあいだの分業をなくし、全面的な発展をとげた、全面的な訓練をうけた人々、なんでもやる能力をもった人々を教育し、訓練し、養成することへ移ってゆくことができるし、また移ってゆくであろう。共産主義は、これをめざ

しており、またためざさなければならず、そしてそこに到達するであろうが、それは、長い年月を経たのちにはじめてなしとげられることとである。完全に発展をとげ、完全に確立され形成された、完全に展開し、成熟した共産主義のこのような未来の結果を、今日実際にさきどりしようとするのは、四歳のこどもに高等数学を教えるのにひとしい。

われわれは、架空な人的材料や、われわれがとくにつくりだした人的材料を使ってではなく、資本主義が遺産としてわれわれに残した人的材料を使って、社会主義の建設を始めることができる（またそうしなければならない）。これが非常に「困難」なことは言うまでもないが、およそこれ以外の仕方でこの任務をとりあげるのは、論じるに値しないふまじめな態度である。

労働組合は、資本主義の発展の初期には、労働者が個々ばらばらで孤立無援な状態から階級的団結の端緒に移ってゆく橋渡しとして、労働者階級の大きな進歩であった。プロレタリアの階級的団結の最高の形態であるプロレタリアートの革命政党（この党は、指導者と階級および大衆とを結びつけて、一つの全体に、ある不可分なものにすることを学びとるまでは、その名に値しないであろう）が成長しはじめると、労働組合が、いくらかの反動的特徴、いくらかの同職組合的狭量、いくらかの非政治主義への傾斜、いくらかの不活発などをあらわしはじめるのは、避けられなかった。だが、労働者階級の党と労働組合の相互作用をつうじるほかには、世界中のどこでも、プロレタリアートの発展はおこなわれなかったし、またおこなわれることもできなかった。プロレタリアートによる政治権力の獲得は、階級としてのプロレタリアートの大きな前進であって、党は、古いやり方ばかりでなく、新しいやり方でも、いっそう労働組合を教育し、指導しなければならない。だがそれと同時に、労働組合は、プロレタリアがその執権（ディクタツーラ）を実現するのに欠くことのできない「共産主義の学校」であり、予備校であり、国の経済全体の管理を、しだいに労働者階級（個々の職業でなく）の手に移し、ついで全勤労者の手に移すために欠くことのできない労働者の結合体であり、将来も長くそうであろうということを、忘れてはならない。

前記の意味での労働組合のいくらかの「反動性」は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとでは避けられない。これを理解しないのは、資本主義から社会主義への移行の基本条件をまったく理解しないことである。この「反動性」を恐れて、それを避けようと、それを飛びこえようと試みることは、このうえなく愚かなことである。なぜなら、それは、労働者階級と農民の最も遅れた層と大衆を訓練し、啓蒙し、

教育し、新しい生活に引きいれるという プロレタリア前衛の役割を恐れることを、意味しているからである。他方では、狭い職業意識をもつ労働者が一人もいなくなり、同職組合的な偏見や組合主義的な偏見をもつ労働者が一人もいなくなるときまで、プロレタリアートの執権の実現を引き延ばすことは、いっそう大きな誤りであろう。政治家の技術（と共産主義者の自己の任務についての正しい理解）は、プロレタリアートの前衛が首尾よく権力を掌握できる条件と時機、また権力掌握のさいとそのあととに、労働者階級と非プロレタリア勤労大衆との十分に広範な層の十分な支持をえることができる条件と時機、また権力を掌握したあとでますます広範な勤労大衆を教育し、訓練し、引きよせることによって、自分の支配を維持し、強化し、拡大することができる条件と時機を、正確に測定するところにこそある。

さらにまた、ロシアよりも進んでいる国々では、労働組合のいくらかの反動性がわが国よりもはるかに強く現われたし、また現われざるをえなかったことは、疑う余地がない。わが国でメンシェヴィキが労働組合内に支柱をもっていた（部分的には、ごく少数の組合では、いまでももっている）のは、まさに職業組合的な狭さと、職業的な利己心と日和見主義とのおかげである。西ヨーロッパでは、同地のメンシェヴィキは、わが国の場合よりも、労働組合内にはるかにしっかりと「足場」をかためており、そこでは職能的な、狭い、利己的な、無感覚な、貪欲な、小市民的な、帝国主義的気分をもった、帝国主義に買収され、帝国主義によって堕落させられた「労働貴族」のはるかに強力な層が分かれてできあがっている。これは争う余地のないことである。ゴンパーズらや、西ヨーロッパのジュオー、ヘンダソン、メラン、レギーン一派の諸氏とたたかうことは、社会的にも政治的にもまったく同種の型を代表しているわが国のメンシェヴィキとたたかうことよりも、はるかに困難である。この闘争を容赦なくおこない、われわれがそれをやりとおしたように、日和見主義と社会排外主義の度しがたい指導者全部にすっかり赤恥をかかせ、彼らを労働組合から放逐するまで、かならずやりとおさなければならない。この闘争が、ある程度まで押しすすめられていなければ、政治権力を獲得することはできない（またそれの掌握を試みてはならない）。そして、この「ある程度」というのは、国が違い、条件が違うにつれて、一様ではない。それを正しく測ることができるものは、それぞれの国のプロレタリアートの思慮ぶかい、経験に富んだ、練達した政治的指導者だけである（ロシアでこの闘争の成功を測る一つの尺度となったのは、一九一七年一〇月二五日のプロレタ

リア革命の数日後、一九一七年一一月におこなわれた憲法制定議会の選挙であった。その場合、メンシェヴィキはこの選挙で完敗し、その得票数は七〇万票、ザカフカーズの分をくわえて一四〇万票であったのにたいして、ボリシェヴィキは九〇〇万票を集めた。『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第七—八号所載の私の論文『憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁』を見よ)。[63]

しかし、われわれが「労働貴族」とたたかうのは、労働者大衆を代表し、労働者大衆をわれわれの味方に引きよせるためである。われわれが日和見主義的な指導者や社会排外主義的な指導者とたたかうのは、労働者階級をわれわれの味方に引きよせるためである。この最も初歩的な、わかりきった真理を忘れるのは、愚かなことであろう。しかも、まさにこのような愚かなことを、ドイツの「左翼」共産主義者はやっているのだ。彼らは、労働組合の上層が反動的で反革命的であるということから、労働組合から脱退し!! 労働組合内の活動を拒否し!! 頭で考えだした新しい形態の労働者組織をつくらなければならない!! という結論を引きだしている。これは、共産主義者がブルジョアジーにたいしてなしうる最大の奉仕にもひとしい、許しがたい愚行である。なぜなら、わがメンシェヴィキは、すべての日和見主義的、社会排外主義的、カウツキー主義的な労働組合指導者と同様に、「労働運動内のブルジョアジーの手先」(われわれがメンシェヴィキにたいしてつねに言ってきたように)、あるいはアメリカのダニエル・ディ・リーオンの追随者たちのみごとな、きわめて正確な言いまわしによれば、「資本家階級の労働副官」(labor lieutenants of the capitalist class) にほかならないからである。反動的な労働組合の内部で活動しないということは、十分に意識の発達していない、すなわち遅れた労働者大衆を、反動的な指導者、ブルジョアジーの手先、労働貴族、あるいは「ブルジョア化した労働者」(イギリスの労働者についてエンゲルスが一八五八年にマルクスあてに書いた手紙を見よ)[64] の影響のもとに残しておくことを意味している。

共産主義者は反動的な労働組合に参加してはならない、というこのばかげた「理論」こそ、これらの「左翼」共産主義者が、「大衆」に影響をおよぼす問題をいかに軽率に取り扱っているか、「大衆」についてのわめきたてをいかに悪用しているかを、最も明瞭に示すものである。大衆を助け、「大衆」の共感、共鳴、支持を獲得することができるためには、困難を恐れてはならず、「指導者」(彼らは、日和見主義者で社会排外主義者なので、たいていの場合、直接間接に、ブルジョアジーや警察と結びついている)の言いがかり、小またすくい、侮辱、迫害を恐れてはならず、

大衆のいるところでかならず活動しなければならない。いやしくもそこにプロレタリア大衆または半プロレタリア大衆がいるなら、まさにその施設、協会、団体——たとえそれがどんなに反動的であろうとも——のなかで系統的に、頑強に、根気づよく、忍耐づよく宣伝、扇動するために、どんな犠牲もはらい、最大の障害をものりこえることができなければならない。そして、労働組合と労働者協同組合(後者の場合は、すくなくとも、ときには)こそ、そこに大衆のいる組織なのである。スウェーデンの新聞『フォルケツ・ダーグブラード・ポリティーケン』[二六](一九二〇年三月一〇日付)の資料によれば、イギリスでは、労働組合員の数は、一九一七年末から一九一八年末までに、五五〇万人から六六〇万人に増加した。すなわち、一九%の増加である。一九一九年末現在の組合員数は、約七五〇万人である。これに見合うフランスとドイツの資料は私の手もとにはないが、これらの国でも労働組合員が激増していることを証明する事実は、まったく争う余地がなく、だれでも知っていることである。

　これらの事実は、他の無数の徴候によっても確証されていること、すなわち、まさにプロレタリア大衆、「下層」、遅れた分子のあいだに階級意識と組織にくわわろうとする熱望とが高まっていることを、このうえなくはっきりと物語っている。イギリス、フランス、ドイツの数百万の労働者は、まったくの無組織状態から、初歩的な、最も低い、最も簡単な、最も近づきやすい(まだブルジョア民主主義的偏見にすっかりそまっている者にとって)形態の組織、すなわち労働組合へ、いまはじめて移りつつある。——ところが、革命的ではあっても、分別のない左翼共産主義者は、わきに立って、「大衆」、「大衆」とわめきたて!——労働組合のなかでの活動を拒否する!! 労働組合の「反動性」を口実にして拒否する!! そして、新規の、純粋な、ブルジョア民主主義的偏見にそまっていない、同職組合的な過誤や、狭い職能意識という過誤をおかしていない「労働者同盟」を考えだしているのだ。「労働者同盟」は広範なものになるだろうし(だろう?)、それに加入するのに、要求されることは「ソヴェト制度と執権を承認する」ことだけ(だけ!)だというのだ(さきの引用を見よ)!!

　「左翼」革命家がもちこんでいるもの以上に無分別なもの、革命に有害なものは、想像もできない! ロシアと協商国のブルジョアジーにたいして未曽有の勝利をおさめてから二年半たった今日でも、ロシアで「執権を承認する」ことを労働組合への加入条件としてもちだすなら、われわれは、ばかなことをしでかし、大衆にたいする自分の影響力をそこない、メンシェヴィキを助けることになるだろう。

なぜなら、共産主義者の任務は、遅れている人たちを説得し、彼らのあいだで活動するすべを知ることにつきるのであって、頭のなかで考えだした、児戯に類する「左翼的」スローガンで、彼らと自分のあいだに垣をつくることではないからである。

ゴンパーズ、ヘンダソン、ジュオー、レギーンの諸氏が、ドイツの「原則的」反対派(神よ、われわれをこのような「原則性」から守りたまえ!)、あるいはアメリカの「世界産業労働者連盟」[52]の一部の革命家のように、反動的な労働組合から脱退し、そのなかでの活動を拒否するように説いている「左翼的」革命家にたいして、非常に感謝していることは、疑う余地がない。疑いもなく、日和見主義の「指導者」諸氏は、ブルジョア的な権謀術数のあらゆる策略にうったえ、ブルジョア政府、坊主、警察、裁判所の助けを求めて、共産主義者を労働組合にはいらせないようにし、あらゆる方法で彼らを組合から締め出し、労働組合のなかでの彼らの活動をできるだけやりづらくし、彼らを侮辱し、いじめ、迫害しようとするだろう。労働組合にはいりこみ、そこにとどまり、そこで万難を排して共産主義的活動をおこなうためでさえあれば、すべてこういうものに対抗し、どんな犠牲にも応じ、——必要な場合には——あらゆる術策、策略、非合法的なやり方、沈黙、真実の隠しだてにうったえることができなければならない。ツァーリズムのもとでは、一九〇五年まで、わが国には「合法的可能性」がまったくなかった。しかし、保安部員ズバートフが、[53]革命家をひっかけ、革命家とたたかうために、黒百人組ふうの労働者会議や労働者協会を組織したとき、われわれはこの会議や協会にわが党員を送りこんだ(私自身、彼らのひとりである同志バーブシキンを覚えている。彼は、ピーテルのすぐれた労働者であって、一九〇六年にツァーリの将軍たちに銃殺された)。彼らは、大衆との結びつきをつくり、たくみに機会をとらえて扇動し、労働者をズバートフ派の影響下から奪いとった。*もちろん、合法主義的、立憲主義的、ブルジョア民主主義的な偏見がとくに根ぶかくしみこんでいる西ヨーロッパでは、こういうことをやりとげるのはもっとむずかしい。だが、これをやりとげること、また系統的にやりとげることはできるし、またしなければならない。

* ゴンパーズ、ヘンダソン、ジュオー、レギーンの徒は、ズバートフ派にほかならないが、わが国のズバートフとの違いは、ヨーロッパ流の衣装を着、みばえがよく、卑劣な政策を実行するのに文明的な、洗練された、民主主義的にみがきのかかったやり方をする点である。

私個人の意見では、第三インタナショナルの執行委員会

は、一般に、反動的な労働組合に参加しないという政策を、とくに、このまちがった政策を支持してきた――直接であろうと間接であろうと、公然とであろうと内密にであろうと、全面的にであろうと部分的にであろうと同じことである――オランダ共産党の一部の党員の行動方針をも、率直に非難すべきだし（このような不参加がばかげていて、プロレタリア革命の大業にきわめて有害であることについて、くわしい理由をあげて）、また共産主義インタナショナルの次の大会に、これを非難するよう提案すべきである。第三インタナショナルは、第二インタナショナルの戦術と手を切り、難問題を避けたり、あいまいにしたりせずに、それを正面から提起しなければならない。われわれは、「独立派」（ドイツ独立社会民主党）に、面とむかってすべての真実を語った(二〇)が、「左翼」共産主義者にも、面とむかってすべての真実を語らなければならない。

七　ブルジョア議会に参加すべきか？

ドイツの「左翼」共産主義者は、最大の軽蔑を示しながら――また最大の軽率さを示しながら――、この問いに否定の回答をしている。彼らの論拠はどんなものか？　さきにあげた引用文につぎのように書かれている。

「……およそ歴史的および政治的に寿命のつきた議会主義の闘争形態に逆もどりすること……は、断固として拒否しなければならない。……」

これは、滑稽なほど思いあがった言い方で、明らかにまちがっている。議会主義に「逆もどりする」と！　もしかしたら、ドイツにはすでにソヴェト共和国が存在しているのであろうか？　どうも、そうではないようである！　それなら、どうして「逆もどりする」などと言えるのか？　これは空文句ではないだろうか？

議会主義は「歴史的に寿命がつきている」と言う。これは、宣伝の意味でなら、そのとおりである。だが、だれでも知っているように、それと議会主義を実際に克服することとのあいだには、まだたいへんなへだたりがある。資本主義は、すでに数十年もまえに「歴史的に寿命がつきたもの」と宣言することができたし、そう宣言するのはまったく正しかった。しかし、そのことは、資本主義の基盤のうえできわめて長期にわたってきわめてねばりづよく闘争する必要を、けっして取りのぞくものではない。議会主義は、世界史的な意味では「歴史的に寿命がつきている」。すなわち、ブルジョア議会主義の時代は終わって、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の時代が始まっている。これは、争う余地のないことである。だが、世界史の尺度の単位は、数十

年である。一〇—二〇年早いか遅いかは、世界史的な尺度から見ればどうでもよいことである。それは、——世界史の見地からは——おおよその計算をすることもできないほどの瑣末なことである。だが、それだからこそ、実際政治の問題で世界史的な尺度をもちだすことは、はなはだしい理論的誤りである。

議会主義は、「政治的に寿命がつきている」だろうか？これはまったく別の問題である。もしそれが正しいとすれば、「左翼」の立場はしっかりしたものであろう。しかし、これはきわめて真剣な分析によって証明すべきことであるのに、「左翼」はそうした分析にとりかかることさえできない。『共産主義インタナショナル・アムステルダム暫定ビューロー通報』(《Bulletin of the Provisional Bureau in Amsterdam of the Communist International》, February 1920) の第一号に発表されていて、オランダ人＝左翼の、あるいはオランダ左派の志望をはっきりとあらわしている『議会主義についてのテーゼ』でも、分析は、あとで見るように、やはりまったくなっていない。

第一に、周知のように、ドイツの「左翼」は、すでに一九一九年一月に、ローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトのようなすぐれた政治的指導者の意見にさからって、議会主義を「政治的に寿命のつきた」ものと考えていた。「左翼」が誤っていたことは、周知のとおりである。この一事だけでも、議会主義が「政治的に寿命がつきている」などという命題を、たちどころに、根本から打ち破ってしまう。「左翼」には、その当時の彼らの争う余地のない誤りがいまでは誤りでなくなった理由を、証明する義務がある。ところが、彼らは、その証明らしいもののかけらさえあげていないし、またあげることもできない。政党が自分のおかした誤りにたいしてとる態度は、その党がまじめであるかどうかを測り、党が自分の階級と勤労大衆とにたいする自分の義務を実際に果たしているかどうかを測る、最も重要で、最も確実な基準の一つである。誤りを公然と認め、その原因をあばきだし、それを生んだ状況を分析し、誤りをあらためる手段を注意ぶかく検討すること——これこそまじめな党のしるしであり、これこそ党が自分の義務を果たすことであり、これこそ階級を、ついでまた大衆を教育し、訓練することである。この自分の義務を果たさず、自分の明白な誤りの研究にたいして、このうえなく注意ぶかい、細心な、慎重な態度をとらなかったことで、ドイツ(とオランダ)の「左翼」は、まさに彼らが階級の党ではなく、サークルであり、大衆の党ではなく、インテリゲンツィアと、インテリかたぎの最も悪い面をまねる少数の労働者とのグループであることを証明している。

第二に、さきにくわしく引用しておいたフランクフルトの「左翼」グループの同じ小冊子に、つぎのように書かれている。

「……いまなお中央党」（カトリック「中央」党）「の政策に従っている数百万の労働者は、反革命的である。農村プロレタリアは、数軍団の反革命部隊を送りだしている。」（前掲の小冊子の三ページ）

これがあまりにも大げさな、誇張した言い方であることは、どの点からみても明白である。だが、ここに述べられている基礎的な事実は、争う余地のないものであって、「左翼」がそれを認めたことは、彼らの誤りをとくにはっきりと証明している。「数百万」、「数軍団」のプロレタリアが、いまなお議会主義一般に味方しているばかりでなく、あからさまに「反革命的」であるならば、どうして「議会主義は政治的に寿命がつきている」などと言うことができるのか?! 議会主義がドイツでまだ政治的に寿命がつきていないことは、明らかである。ドイツの「左翼」が自分らの願望、自分らの思想的・政治的態度を客観的な現実ととりちがえたことは、明らかである。これは、革命家にとって最も危険な誤りである。ツァーリズムのはなはだしく野蛮で残忍な圧制が、とくに長期にわたって、とくにさまざまなかたちで、いろいろな色合いの革命家、驚くべき献身、熱情、英雄精神、意志力を示した革命家を生みだしたロシア、このロシアで、われわれは革命家のこのような誤りをとくに身近に観察し、とくに注意ぶかく研究して、とくによく知っているので、他国の場合でも、この誤りはわれわれにはとくにはっきりとわかる。ドイツの共産主義者にとっては、議会主義は、もちろん、「政治的に寿命がつきたものである」。しかし、われわれにとって寿命のつきたものでも、階級にとって寿命がつきたもの、大衆にとって寿命がつきたものと考えてはならないということこそ、たいせつな点である。まさにこの点で、われわれは、「左翼」が階級の党として、大衆の党として判断することができず、ふるまうことができないことを、かさねて見るのである。諸君には、大衆の水準まで、階級の遅れた層の水準まで降りていってはならない義務がある。これは争う余地がないことである。諸君には、彼らに苦い真実を語る義務がある。諸君には、彼らのブルジョア民主主義的偏見や議会主義的偏見を偏見とよぶ義務がある。しかし、それと同時に、諸君には、まさに全階級（その共産主義的前衛だけでなく）の、まさに全勤労大衆（その先進的な人々だけでなく）の意識と準備の現実の状態を冷静に注視する義務がある。

たとえ「数百万」や「数軍団」ではなくて、たんに工業労働者のなかのかなりの数の少数者がカトリックの坊主に

従い、農村労働者のなかのかなりの数の少数者が地主と富農（Grossbauern）に従っている場合でも、すでにそのことからして次のような結論がでてくることは、疑いをいれない。すなわち、ドイツでは議会主義はまだ政治的に寿命がつきておらず、議会選挙や議政壇上の闘争に参加することが、まさに自分の階級の遅れた層を教育するために、意識の遅れた、うちひしがれた、無知な農村大衆をめざめさせ、啓蒙するために、革命的プロレタリアートの党にとって義務となる、ということである。ブルジョア議会や、どんなものにもせよその他の型の反動的な機関を、諸君が解散させる力をもたないあいだは、坊主や、片田舎の農村の生活のために愚鈍にされた労働者がまだそこにいるからこそ、諸君にはそういう機関の内部で活動する義務がある。そうしなければ、諸君にはただのおしゃべり屋になるおそれがある。

第三に、「左翼」共産主義者は、われわれボリシェヴィキのことをたいへんほめている。われわれをほめるのをもっと控え目にし、われわれの戦術をもっと深く研究し、それをもっと十分に知るようにしたまえと、ときには言いたくなる！ われわれは、一九一七年九―一一月にロシアのブルジョア議会すなわち憲法制定議会への選挙に参加した。われわれの戦術は正しかったかどうか？ もし正しくなかったとすれば、そのことをはっきりと述べ、証明しなければならない。これは、国際共産主義が正しい戦術をつくりあげるために必要である。もし正しかったとすれば、そこから一定の結論を引きださなければならない。もちろん、ロシアの条件と西ヨーロッパの条件とを同一視することは、問題にならない。しかし、「議会主義は政治的に寿命がつきている」という概念がなにを意味するかをとくに問題とする場合には、ぜひともわれわれの経験を正確に考慮にいれなければならない。なぜなら、具体的な経験を考慮にいれなければ、このような概念は、あまりにも容易に空文句になってしまうからである。われわれロシアのボリシェヴィキは、一九一七年九―一一月のロシアでは、議会主義が政治的に寿命がつきていたと見なす権利を、西ヨーロッパのどの共産主義者よりももっていたのではなかろうか？ もちろん、もっていた。なぜなら、肝心なことは、ブルジョア議会が存在しているのがずっと以前からか、それとも最近になってからかということではなく、広範な勤労大衆に、ソヴェト制度を採用し、ブルジョア民主主義的議会を解散する（あるいは解散を容認する）用意が（思想的、政治的、実践的に）どれほどできているかということだからである。一九一七年九―一一月のロシアでは、いくつかの特殊な条件のために、都市の労働者階級、兵士、農

民に、ソヴェト制度を採用し、最も民主的なブルジョア議会をも解散する準備が稀にみるほどよくととのっていたということ、これはまったく争う余地のない、完全に確定された歴史的事実である。だが、それにもかかわらず、ボリシェヴィキは、憲法制定議会をボイコットするまえにも、あとにも、プロレタリアートが政治権力を獲得するまえにも、あとにも、選挙に参加した。その選挙はきわめて貴重な（またプロレタリアートにとって非常に有益な）政治的結果をもたらしたが、そのことを私は、ロシアの憲法制定議会の選挙資料をくわしく分析した前掲の論文のなかで、証明したつもりである。

このことからでてくる結論は、まったく議論の余地のないものである。すなわち、ソヴェト共和国が勝利する数週間まえでさえ、このような勝利のあとでさえ、ブルジョア民主主義的議会に参加することは、革命的プロレタリアートに害をおよぼさないばかりか、プロレタリアートが、なぜこのような議会は解散に値するかの理由を遅れた大衆にたやすく証明できるようにし、その解散の成功を容易にし、ブルジョア議会主義の「寿命が政治的につきる」のを容易にするということが、証明されたのである。この経験を考慮にいれずにおいて、しかも同時に、共産主義インタナショナルに所属していると自任するのは、――インタナショナルはその戦術を（狭い、あるいは一面的な一国的戦術としてではなく、まさに国際的戦術として）国際的につくりあげなければならないのに――最もひどい誤りをおかし、口さきで国際主義を承認しながら、実際にはまさに国際主義にそむくことを意味している。

さて、議会不参加を主張する理由として「オランダ人＝左翼」があげている論拠を見よう。つぎにかかげるのは、さきにあげた「オランダの」テーゼのうちの最も重要な第四テーゼの翻訳（英語からの）である。

「資本主義的生産制度が瓦壊し、社会が革命状態にあるときには、議会活動は、大衆自身の行動にくらべて、しだいにその意義を失ってゆく。こういう条件のもとで、議会が反革命の中心および機関となる一方で、労働者階級がソヴェトというかたちで自分の権力の道具を打ち立てるときには、議会活動への参加をいっさい拒否することが必要とさえなりうる。」

第一の文章は明らかにまちがっている。なぜなら、大衆の行動――たとえば大ストライキ――はいつでも議会活動より重要であって、けっして革命のときや革命的情勢がある場合に限られないからである。この明らかに根拠のない、歴史的にも政治的にもまちがっている論拠は、このテーゼの筆者たちが、合法的な闘争と非合法的な闘争の結合の重

要性を示す全ヨーロッパの（一八四八年の革命と一八七〇年の革命以前のフランス、一八七八—一八九〇年のドイツ等々の）経験も、ロシアの経験（前述を見よ）も、全然考慮にいれていないことを、とくに明瞭に示しているにすぎない。この問題は、一般的にも特殊的にも、非常に大きな意義をもっている。なぜなら、すべての先進文明国では、プロレタリアートとブルジョアジーとの内乱が成熟し、近づいているため、また共和制政府や、一般にブルジョア政府が共産主義者を狂暴に迫害し、ありとあらゆる仕方で合法性を侵犯している（それにはアメリカの例だけで十分である）等々のために、このような結合が革命的プロレタリアートの党にとってますます必須となる——部分的にはすでにそうなっている——時期が急速に近づいているからである。この最も重要な問題を、オランダ人、一般に左翼は、まったく理解していない。

第二の文章は、まず第一に歴史的にまちがっている。われわれボリシェヴィキは、最も反革命的な議会にも参加してきた。そして、このような参加が、まさにロシアの第一次ブルジョア革命（一九〇五年）以後の革命的プロレタリアートの党にとって、第二次ブルジョア革命（一九一七年二月）を、ついで社会主義革命（一九一七年一〇月）を準備するうえに有益であっただけでなく、必要でもあったことは、経験の示すとおりである。第二に、この文章は、驚くほど非論理的である。議会が反革命の機関、および「中心」となり（実際に議会が「中心」となったことは、けっしてなかったし、またそうなることはありえない。しかし、これはことのついでに言っておくのである。）、労働者がソヴェトのかたちで自分の権力の道具をつくりだすということからは、労働者は、議会にたいするソヴェトの闘争のための、ソヴェトによる議会の解散のための準備を——思想的、政治的、技術的に——ととのえなければならないという結論がでてくる。しかし、そこからは、反革命的議会の内部にソヴェト的反対派がいるために、このような解散が困難になるとか、容易でなくなるとかいう結論は、けっしてでてこない。デニーキンやコルチャックにたいしてわれわれが勝利の闘争をすすめていた当時、われわれは、デニーキンやコルチャックのところにソヴェト的・プロレタリア的反対派がいることがわれわれの勝利にとってどうでもよいことであるなどと認めたことは一度もない。解散されるべき反革命的な憲法制定議会の内部に、徹底したソヴェト的反対派のボリシェヴィキと不徹底なソヴェト的反対派の左派エス・エルとがいたために、われわれが一九一八年一月五日に憲法制定議会を解散するのが困難にならずに、むしろたやすくなったことを、われわれはよく知って

いる。テーゼの筆者たちはまったく混乱してしまい、反動議会の外部の大衆行動と、この議会内部の、革命に共鳴している（もっとよいのは、革命を直接に支持していることだが）反対派とを結合することが、革命時にはとくに有益であることを証明している、すべての革命とは言わないまでも、多くの革命の経験を忘れてしまったのだ。ここでは、オランダ人、一般に「左翼」は革命の空論家として議論しているのであって、こういう空論家は、真の革命に一度も参加したことがないか、あるいは革命の歴史をふかく考えてみたことがないか、あるいはまた、一定の反動的な機関を主観的に「否定する」ことを、多くの客観的要因の力が合わさってその機関が現実に破壊されることと素朴にもとりちがえるかしているのである。新しい政治思想（政治思想には限らないが）の信用をおとし、それを傷つける最も確実な方法は、その思想を擁護するという口実でそれを背理にしてしまうことである。なぜなら、どんな真理も、それを「度はずれなもの」（父のほうのディーツゲンが言ったように）にし、誇張し、実際に適用できる範囲をこえて押しおよぼすならば、それを背理にしてしまうことができるし、右のような条件のもとでは、真理が背理に転化することは、むしろ避けがたいことでさえあるからである。オランダとドイツの左翼は、ソヴェト権力がブルジョア民主主義的議会よりもすぐれているという新しい真理について、まさにこういうよけいなおせっかいをやいているのである。もちろん、ブルジョア議会への参加を拒否するのはどんな条件のもとでも許されない、とあいかわらず一般的に述べようとする人があるなら、それは正しくないであろう。ボイコットが有益となる場合の諸条件をここで定式化するよう試みることは、私にはやれない。なぜなら、この論文の任務ははるかに控え目なものであって、国際共産主義の戦術のいくつかの緊急な問題に結びつけて、ロシアの経験を評価することだからである。ロシアの経験は、ボリシェヴィキが成功裏に、正しくボイコットを適用した一つの例（一九〇五年）と、誤って適用したもう一つの例（一九〇六年）とを示している。第一の場合を分析してわかることは、大衆の議会外の革命的行動（とくにストライキ運動）が異常に急速にもりあがり、プロレタリアートと農民のただ一つの層も反動権力をいっさい支持することができず、革命的プロレタリアートがストライキ闘争と農民運動とによって広範な遅れた大衆にたいする影響力を確保していた情勢のもとで、反動権力が反動議会を召集するのを阻止することに成功したことである。この経験がヨーロッパの現在の条件に適用できないことは、まったく明瞭である。また、オランダ人と「左翼」が、たとえ条件つきにせよ、

議会参加の拒否を擁護しているのは、根本的にまちがっており、革命的プロレタリアートの大業にとって有害であることも、――さきに述べた論拠にもとづいて――まったく明瞭である。

西ヨーロッパとアメリカでは、議会は労働者階級出身の先進的革命家からとくに憎まれるようになった。これは、争う余地がない。これは、まったくもっともである。なぜなら、戦時と戦後の議会内で大多数の社会党と社会民主党議員がとった行状以上にきたない、卑劣な、裏切り的なものを想像することは、むずかしいからである。だが、一般に認められているこの害悪とどうたたかうかという問題を解決するさいに、このような気分に屈するのは、分別を欠いているばかりでなく、まったく犯罪的なことであろう。西ヨーロッパの多くの国では、現在、革命的気分は、人々があまりにも長いあいだ、むなしく、しびれをきらして待っていた、いわば「新規なもの」あるいは「珍奇なもの」であって、おそらく、人々がこんなにも容易にこの気分に屈するのは、そのためであろう。大衆のあいだに革命的気分がなく、このような気分の高まりを助長する諸条件がなければ、革命的戦術が行動に転化することはできないのは、もちろんである。しかし、われわれは、ロシアでのあまりにも長い、苦しい、血みどろの経験によって、革命的気分だけにもとづいて革命的戦術を打ち立てることはできないという真理を確信するにいたった。戦術は、その国家(とそれを取りまく諸国家、および全世界のすべての国家)のすべての階級勢力を冷静に、厳密に、客観的に評価し、また革命運動の経験を考慮することにもとづいて、打ち立てられなければならない。たんに議会的日和見主義をののしるだけで、議会への参加を否定するだけで、自分の「革命主義」を示すことは、きわめてたやすいが、しかし、きわめてたやすいからこそ、これは困難な任務や、非常に困難な任務の解決にはならないのである。ヨーロッパの議会内にほんとうに革命的な議員団をつくることは、ロシアの場合よりもはるかに困難である。これは、もちろんのことである。だが、このことは、ロシアで一九一七年の具体的な、歴史的にきわめて独特な情勢のもとで社会主義革命を始めることはたやすかったが、ロシアでそれをつづけ、最後まで押しすすめることは、ヨーロッパ諸国の場合よりも困難であろうという一般的な真理の部分的表現にすぎない。私はすでに一九一八年のはじめにこの事情を指摘したことが(四)あるが、その後の二年間の経験は、このような考え方が正しいことを完全に確証した。次のような特殊な諸条件、すなわち、(一)ソヴェト革命と、労働者農民を信じられないほど苦しめた帝国主義戦争がこのソヴェト革命のおかげ

で終結させられるという事情とを結びつける可能性があったこと、(二) 帝国主義的強盗どもの世界的に強大な二つのグループのあいだの命がけの闘争を、ある期間利用する可能性があり、これらのグループがソヴェトという敵にたいして一つに団結できなかったこと、(三) いくぶんは国土が広大で交通機関が貧弱であったために、比較的長期にわたる内戦に耐える可能性があったこと、(四) 農民のあいだに、きわめて根ぶかいブルジョア民主主義的革命運動があり、このためプロレタリアートの党が農民の党（エス・エル、すなわちその党員の多数がボリシェヴィズムに鋭く敵対していた党）の革命的要求をとりあげ、そしてプロレタリアートによる権力の獲得にもとづいて、それをただちに実現したこと――このような特殊な諸条件は、いま西ヨーロッパにはないし、このような、あるいはこれに似た諸条件は、そんなにたやすく繰りかえされるものではない。とりわけ、これらの理由によって――ほかのいくつかの理由は別として――、西ヨーロッパで社会主義革命を始めることは、われわれの場合よりも困難である。革命の目的に反動議会を利用するという困難な仕事を「飛びこえ」、このような困難を「避け」ようと試みるのは、まったくこどもっぽいことである。諸君は新しい社会をつくりだしたいのか？　それなのに、諸君は、反動議会のなかに信念の堅い、献身的な、英雄的な共産主義者からなるりっぱな国会議員団をつくるうえでの困難を恐れているのだ！　これこそ、こどもっぽいことではないだろうか？　ドイツのK・リープクネヒトとスウェーデンのZ・ヘーグルンドは、下からの大衆的な支持がなくてさえ、反動議会を真に革命的に利用する手本を示すことができたとすれば、急速に成長しつつある大衆的革命党が、戦後の大衆の幻滅と憤激の状況のなかで、最悪の議会のなかにでも共産主義的議員団を鍛えあげることが、どうしてできないことがあろう?!　西ヨーロッパでは、労働者の遅れた大衆と、――それ以上に――小農の遅れた大衆とが、ロシアよりもはるかに強くブルジョア民主主義的偏見や議会主義的偏見にそまっているからこそ、共産主義者は、これらの偏見を暴露し、駆逐し、克服するための、長期にわたる、ねばりづよい、どんな困難にもたじろがない闘争を、ブルジョア議会のような機関の内部からのみおこなうことができるのである（また、おこなわなければならない）。

ドイツの「左翼」は、自分たちの党の劣悪な「指導者たち」のことで不平をならし、絶望におちいり、滑稽にも「指導者」を「否定する」ところまで脱線している。しかし、しばしば「指導者」を地下に隠さなければならないような条件のもとでは、優秀な、信頼できる、老練な、権威

ある「指導者」を育てあげることは、とくに困難な仕事であって、合法活動と非合法活動を結合しなければ、またとりわけ議政壇上でも「指導者」をためさなければ、これらの困難に首尾よく打ちかつことはできない。批判——それも最も痛烈な、容赦ない、非妥協的な批判——の鋒先は、議会制度あるいは議会活動にむけるべきではなく、議会選挙や議会の演壇を革命的、共産主義的に利用することのできない指導者に——それにもましてこういうものを利用したがらない指導者に——むけるべきである。このような批判だけが、——もちろん、それが、無能な指導者を放逐して有能な指導者と交替させることと結びつけられるならば——有益な、実り多い革命的な活動となるであろうし、「指導者」を教育して、労働者階級と勤労大衆とにふさわしいものにすると同時に、大衆をも教育して、彼らに、政治情勢を正しく見きわめ、この情勢から生じてくるしばしば非常に複雑でこみいった任務を理解することを学びとらせるであろう。*

* 私は、イタリアの「左翼」共産主義を知る機会があまりにも少なかった。同志ボルディガと彼の分派である「ボイコット派共産主義者」(Comunista astensionista) が議会不参加を弁護しているのがまちがっていることは、疑う余地がない。だが、一つの点では、彼は正しいと思われる。——彼の新聞『ソヴェト』(二九)の二つの号(『ソヴェト』、一九二〇年一月一八日付の第三号と二月一日付の第四号)、同志セラーティのすぐれた雑誌『共産主義』の四冊(『コムニスモ』(三〇)第一—四号、一九一九年一〇月一日—一一月三〇日)と、私が目をとおすことのできたイタリアのブルジョア新聞のとびとびの号によって判断できるかぎりでは、そうである。つまり、同志ボルディガと彼の分派がトゥラーティとその同調者を攻撃しているのは、正しいのである。後者は、ソヴェト権力とプロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)を承認した党に依然として籍をおき、国会議員にとどまりながら、その最も有害な、古い日和見主義的な政策をつづけている。これを大目にみることによって、同志セラーティとイタリア社会党全体(三一)が誤りをおかしていることはいうまでもない。この誤りは、ハンガリーの場合と同様な深刻な害悪と危険をもたらすおそれがある。ハンガリーでは、ハンガリーのトゥラーティというべき諸君が、内部から党をもソヴェト権力をもサボタージュした。日和見主義者の国会議員にたいするこのような誤った、不徹底な、あるいは無定見な態度は、一方では、「左翼」共産主義を生みだし、他方では、ある程度まで「左翼」共産主義の存在を正当化している。同志セラーティが代議士トゥラーティの「不徹底」を非難している(『コムニスモ』第三号)のは、明らかにまちがいであって、トゥラーティ一派のような日和見主義者の国会議員を大目にみているイタリア社会党こそ不徹底なのである。

八　いっさい妥協しないか？

われわれは、フランクフルトの小冊子からの引用のなかで、「左派」がまったく断固としてこのスローガンをかかげているのを見た。疑いもなくマルクス主義者だと自任している人々や、マルクス主義者でありたいと思っている人人が、マルクス主義の基本的真理を忘れているのを見るのは、悲しいことである。エンゲルスは、マルクスと同様に、そのどの大著のどの章句にも驚くほど深い内容がもられている、稀にみる、きわめて稀にみる著述家のひとりであるが、そのエンゲルスは、三三人のブランキ派コミューン戦士の宣言に反対して、一八七四年に次のように書いている。

『『……われわれが共産主義者であるのは、』（と、ブランキ派コミューン戦士はその宣言のなかに書いている）『われわれが中間駅にとどまることなく、勝利をさきに延ばし奴隷制を長びかせるだけの妥協にとどまることなく、われわれの目的に達しようと望んでいるからである。』

ドイツの共産主義者が共産主義者であるのは、彼らが、彼ら自身によってでなく、歴史の発展によってつくりだされるすべての中間駅と妥協とをつうじて、階級の廃止、土地と生産手段の私的所有がもはや存在しない社会の樹立という終局目標をはっきりと見とおし、追求しているからである。三三人が共産主義者であるのは、彼らが、中間駅と妥協をとびこえたいという善良な意志さえもっていれば、事はかたづくと思いこみ、そして一両日中に事が『起こって』――これは、むろん、既定のことだというわけだ――、彼らが権力をにぎりさえすれば、あさってには『共産主義が実施される』と思いこんでいるからなのである。したがって、もしそれがいますぐ可能でないなら、彼らは共産主義者ではないことになる。

なんとこどもじみた素朴さだ――性急さを理論的に説得力ある論拠としてもちだすとは！」（F・エンゲルス『ブランキ派コミューン戦士の綱領』、ドイツ社会民主党機関紙『フォルクスシュタート』、一八七四年、第七三号、論集『一八七一―一八七五年の諸論文』(二四)、ロシア訳、ペトログラード、一九一九年、五二―五三ページ。）

エンゲルスは、この同じ論文のなかでヴァイヤンに深い敬意を表し、ヴァイヤンの「争いがたい功績」について語っている（ヴァイヤンは、ゲードと同じように、一九一四年八月に社会主義を裏切るまでは、国際社会主義の最大の指導者であった）。しかし、エンゲルスは、明瞭な誤りをくわしく検討もしないでほうっておくようなことはしない。

もちろん、非常に若くて経験の浅い革命家には、また、いとも尊敬すべき年令に達し大いに経験に富んでいても、小ブルジョア的革命家には、「妥協を許す」ことは、はなはだ「危険な」、不可解な、正しくないものに思われるだろう。また、多くの詭弁家は、(彼らはなみはずれて、あるいはあまりにも「経験に富んだ」策士なので)同志ランズベリがあげたイギリスの日和見主義的指導者とちょうど同じように論じている。「もしボリシェヴィキにこれこれの妥協が許されるなら、なぜわれわれにはいかなる妥協も許されないのか?」と。だが、たびたびのストライキ(階級闘争のこの現われだけをとってみれば)で教育されたプロレタリアは、エンゲルスが述べた非常に深遠な(哲学的、歴史的、政治的、心理的)真理を、りっぱにわがものにしているのが普通である。どのプロレタリアにも、ストライキの経験があり、労働者がなにひとつ獲得することなしに、あるいはその要求の部分的な貫徹に同意して、作業にかからなければならないような、憎むべき抑圧者や搾取者との「妥協」の経験がある。どのプロレタリアも、大衆闘争が起こり、階級対立が鋭く激化する環境のなかで生活しているので、客観的条件(ストライキ労働者に資金が乏しく、外部からの応援がなく、耐えきれないほどに飢え疲れきった場合)によぎなくされた妥協――このような妥協を結んだ労働者の革命的な献身とひきつづき闘争する覚悟をすこしも減じることのない妥協――と、もう一つは、裏切者の妥協との差異をその目で見ている。裏切者は、自分の利己心(ストライキ破りもやはり「妥協」を結ぶのだ!)、自分の臆病、資本家にへつらいたいという自分の願望、資本家のおどかし、ときにはくどきおとし、ときには施し物、ときには甘言にすぐ乗ってしまう自分の素質を、客観的な原因のせいにする(イギリスの労働運動の歴史には、イギリス労働組合の指導者がこのような裏切者の妥協をした例がとくに多い。しかし、あらゆる国のほとんどすべての労働者が、あれこれのかたちで同様な現象をその目で見てきた)。

いうまでもなく、懸命な努力をはらってはじめてあれこれの「妥協」のほんとうの性格を正しく見きわめることができるような、異常に困難でこみいった個々の場合もある。ちょうど殺人事件において、それがまったく正当な、それどころか、必至の殺人(たとえば正当防衛)であったか、それとも許しえない不注意、それどころか、たくみに実行された陰険な謀殺であったかをきめるのが、なかなか容易でない場合があるのと同様である。諸階級や諸政党のあいだの極度に複雑な――一国的な、また国際的な――相互関係が往々にして問題となる政治では、ストライキのさいの「妥協」が正当なものか、それともストライキ破り、裏切

的指導者等々の裏切的な「妥協」か、といった問題よりもはるかに困難な場合が非常に多いことは、いうまでもない。あらゆる場合に役だつような処方箋や通則（「いっさい妥協しない」！）をでっちあげるのは、ばかげている。個々の場合を理解できるためには、自分の頭で考えなければならない。複雑な政治問題を速やかに正しく解決するために必要な知識、必要な経験、必要な――知識や経験のほかに――政治感覚を、その階級の思慮ぶかいすべての人々の*長期にわたる、ねばりづよい、多様な、全面的な活動によってつくりあげること――まさにこの点に、とりわけ、党組織とその名に値する党指導者との意義があるのである。

* 最も開化した国の条件のもとでさえ、どの階級にも、最も先進的な、しかも、ときの事情によってそのあらゆる精神力が例外的な高揚状態に高められている階級にさえ、ものごとを考えようとしない、また考える能力のない分子はいつでもいるし、――階級が存在するあいだは、無階級の社会が完全に強固となり、確立し、それ自身の基盤のうえに発展するようになるまでは、そういう分子がいることは、避けられないであろう。もしそうでないとすれば、資本主義は大衆を抑圧する資本主義ではなくなるであろう。

素朴で、まったく無経験な人々は、妥協が許されることを一般的に認めれば、それだけで、われわれが非妥協的にたたかっており、またたたかわなければならないあの日和見主義と、革命的マルクス主義すなわち共産主義とのあいだのあらゆる境界がぬぐいさられるものと想像している。だが、こういう連中が、自然でも社会でもすべての境界は可動的であって、ある程度まで条件的なものだということをまだ知らないとすれば、長期にわたる訓練、教育、啓蒙、政治的経験や日常の経験によるほかには、彼らをどうするすべもない。それぞれの歴史的時点、あるいは特殊な歴史的時点における政治の実際問題のうちから、革命的階級にとって有害な日和見主義をあらわしている許しえない裏切的妥協の最も主要な形態の現われであるような問題をとりだすすべを知り、それを説明し、それとたたかうことに全力を傾けることが、たいせつである。どちらも同じように強盗的、略奪的な国々の二つのグループがたたかった一九一四―一九一八年の帝国主義戦争の時期には、日和見主義のこのような最も主要な基本的な形態は、社会排外主義であった。すなわち、「祖国擁護」を支持することであった。これは、このような戦争にあっては、実際上、「自国」のブルジョアジーの略奪的利益を擁護するのに等しかった。戦後には――略奪的な「国際連盟」[一〇三]を擁護すること、革命的プロレタリアートと「ソヴェト」運動とに反対して自国のブルジョアジーとの直接間接の同盟を擁護すること、「ソ

ヴェト権力」に反対してブルジョア民主主義とブルジョア議会主義を擁護すること――これが、許しえない裏切的妥協の最も主要な現われであり、こういう妥協があい集まって、革命的プロレタリアートとその大業にとって有害な日和見主義を生んだのである。

「……およそ他の諸党と妥協すること、……およそ迂回と協調の政策をとることは、断固として拒否しなければならない」――

と、ドイツの左翼はフランクフルトの小冊子に書いている。この左翼が、こうした見解をもっていながら、ボリシェヴィズムに断固たる非難をくわえないのは、不思議なことである！　ボリシェヴィズムの全歴史は、十月革命のまえにもあとにも、迂回政策や、妥協の事例にみちみちていることを、他の政党との協調や、ブルジョア政党をもふくめたドイツの左翼が知らなかったはずがない。

国際ブルジョアジーを打倒するための戦争、すなわち国家間の普通の戦争のうちの最も頑強な戦争よりも百倍も困難で、長期にわたる、複雑な戦争をおこなうにあたって、迂回政策をとり、敵のあいだの利害の対立（たとえ一時的なものでも）を利用し、ありうべき同盟者（たとえ一時的な、たよりにならない、ぐらぐらした、条件的な同盟者であっても）と協調し、妥協することを、まえもって拒否するのは、とほうもなくおかしなことではなかろうか？　これはちょうど、まだ踏査されたことがなく、いままで人をよせつけなかった山に苦労して登るにあたって、ときにはジグザグに進み、ときにはあともどりをし、ときには一度選んだコースを捨てていろいろなコースをためしてみることを、まえもって拒否するようなものではないだろうか？しかも、これほどに意識の低い、無経験な人々（それが彼らの若さによるものなら、まだよい。青年がある期間こんなばかげたことをしゃべるのは、神御自身のおぼしめしである）を支持する（直接にであろうと間接にであろうと、公然とであろうと内密にであろうと、全面的にであろうと、部分的にであろうと、同じことである）ようなことを、オランダ共産党の一部の党員はやれたのである!!

プロレタリアートの最初の社会主義革命が起こり、一国でブルジョアジーが打倒されたあとでも、ブルジョアジーは大規模な国際的結びつきをもっているということからしても、さらにブルジョアジーを打倒した国の小商品生産者が資本主義とブルジョアジーを自然発生的に、たえず再生させ、復活させているということからしても、この国のプロレタリアートはなお長いあいだブルジョアジーよりも弱い。力のまさる敵に打ちかつことは、全力をふりしぼる場合にはじめてできることであり、どんなに小さなものでも、

敵のあいだのあらゆる「亀裂」を、各国のブルジョアジーのあいだや、個々の国の内部のブルジョアジーのいろいろなグループまたは種類のあいだのあらゆる利害の対立を、またたとえ一時的な、動揺的な、ふたしかな、たよりにならない、条件的な同盟者であろうと、大衆的同盟者を獲得するあらゆる可能性を、どんなに小さなものでも、かならず、できるだけ綿密に、注意ぶかく、慎重に、たくみに利用する場合にはじめてできることである。このことを理解しなかった者は、マルクス主義と近代の科学的社会主義一般をまったく理解しなかったものである。かなり長い期間にわたって、かなり多様な政治情勢のもとで、この真理を実際に適用する能力を実践的に証明しなかった者は、勤労する人々全体を搾取者から解放するための闘争で革命的階級を助けるすべをまだ学びとっていないものである。そしてここに述べたことは、プロレタリアートが政治権力を獲得するまえの時期にも、あとの時期にも同じようにあてはまるのである。

われわれの理論は教条ではなく行動の指針である、とマルクスとエンゲルスは言った[一六六]。そして、カール・カウツキー、オットー・バウアーその他のような「特許」マルクス主義者の最大の誤り、最大の罪悪は、彼らがこのことを理解せず、プロレタリアートの革命の最も重要な時機にこれを適用することができなかったことである。「政治活動はネフスキー大通りの歩道」（ペトログラードの目ぬき通りのまっすぐな清潔な、広々とした、平坦な歩道）「ではない」と、すでにマルクス以前の時代のロシアの偉大な社会主義者エヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーがよく言ったものである[一六七]。チェルヌィシェフスキー以来、ロシアの革命家たちは、この真理を無視したり、忘れたりしたために、数しれないほどの犠牲をはらってきた。西ヨーロッパとアメリカの左翼共産主義者や労働者階級に一身を捧げている革命家が、この真理を会得するのに、遅れたロシア人のように高い代価を支払わずにすむようにぜひともしなければならない。

ロシアの革命的社会民主主義者は、ツァーリズムが打倒されるまえに、ブルジョア自由主義者の助力を何度も利用した。すなわち、彼らと多くの実際上の妥協を結んだし、まだボリシェヴィズムが成立しないまえの一九〇一―一九〇二年には、旧『イスクラ』編集局（この編集局には、プレハーノフ、アクセリロード、ザスーリチ、マルトフ、ポトレソフと私がはいっていた）は、ブルジョア自由主義派の政治的指導者ストルーヴェと正式の政治同盟を結んだ[一六八]（もっとも、長くはつづかなかったが）が、それと同時に、ブルジョア自由主義派にたいし、また労働運動内部のブル

ジョア自由主義の影響のどんなに小さな現われにたいしても、まったく容赦ない思想闘争および政治闘争をやめずにつづけるすべを心えていた。一九〇五年以後、ボリシェヴィキは、自由主義的ブルジョアジーとツァーリズムに反対してつねにこの政策をつづけてきた。ボリシェヴィキは、労働者階級と農民の同盟を系統的に守りぬく一方で、ツァーリズムに反対してブルジョアジーを支持すること（たとえば選挙の第二段階で、あるいは決選投票のときに）をけっして拒まなかったし、またブルジョア的・革命的農民党である「社会革命党」にたいする最も非妥協的な思想闘争および政治闘争をやめずに、彼らが社会主義者と偽称する小ブルジョア民主主義者であることを暴露した。一九〇七年には、ボリシェヴィキは、国会選挙のさい、短期間、「社会革命党」と正式の政治的ブロックを結んだ。一九〇三年から一九一二年までのあいだに、われわれは数年間メンシェヴィキといっしょに形式上単一の社会民主党にはいっていたが、プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の伝達者である日和見主義者である彼らとの思想闘争および政治闘争をけっしてやめなかった。戦時には、われわれは「カウツキー主義者」、メンシェヴィキ左派（マルトフ）、「社会革命党」の一部（チェルノーフ、ナタンソン）とある種の妥協を結び、ツィンメルヴァルトとキーンタール[九九]では彼らと同席し、共同宣言を出したが、しかし、「カウツキー主義者」、マルトフ、チェルノーフとの思想闘争および政治闘争をけっしてやめなかったし、それを弱めもしなかった（ナタンソンは、われわれに非常に近く、われわれとほとんど同意見のナロードニキ派「革命的共産主義者」として、一九一九年に死んだ）。十月革命の当の時機には、われわれは小ブルジョア的農民とのあいだに、正式なものではないが、非常に重要な（そして非常な成果をあげた）政治的ブロックを結び、エス・エルの農業綱領をそっくり、全然変更をくわえずに採用した。すなわち、われわれが多数決で農民を押しきろうとするものではなく、農民との協調を望んでいることを農民に証明するために、疑う余地のない妥協を結んだのである。同時にわれわれは、「左派エス・エル」に、正式の政治的ブロックを結んで政府に参加するように申し入れた（これは、まもなく実現した）。ところが、彼らは、ブレスト講和の締結後、われわれとのこのブロックを破棄し、ついで一九一八年七月にはわれわれにたいして武装蜂起をおこし、またその後はわれわれにたいして武装闘争をおこなうまでになった。

そこで、「独立派」（「ドイツ独立社会民主党」、カウツキー派）とのブロックという考えをドイツ共産党中央委員会が認めているからといって、ドイツの左翼がこれを攻撃し

ているのは、われわれにはまったくふまじめなもの、「左翼」のまちがいをはっきり証明するものと思えることは、いうまでもない。わがロシアにも、ドイツのシャイデマン派にあたるメンシェヴィキ右派（ケーレンスキー政府にはいっていた）と、ドイツのカウツキー派にあたり、メンシェヴィキ右派にたいする反対派であったメンシェヴィキ左派（マルトフ）とがいた。われわれは、労働者大衆がメンシェヴィキからしだいにボリシェヴィキに移ってくるのを、一九一七年にはっきり目撃した。一九一七年六月の第一回全ロシア・ソヴェト大会では、われわれは一三％しか占めていなかった。エス・エルとメンシェヴィキが多数派であった。第二回ソヴェト大会（旧暦一九一七年一〇月二五日）では、われわれは投票総数の五一％を獲得した。ドイツでも右から左への同じような、まったく同質の労働者の移動が起こったのに、なぜそれがただちに共産主義者を強めずに、まず「独立派」という中間政党を強めたのであろうか？　この党は、どんな自主的な政治思想も、どんな自主的な政策ももったことがなく、シャイデマン派と共産主義者のあいだを動揺していたにすぎないのに。

その一つの原因がドイツの共産主義者の誤まった戦術であったことは、明らかである。彼らは臆せずに、正直にこの誤りを認め、それをただすすべを学びとらなければならない。誤りは、反動的なブルジョア議会と反動的な労働組合への参加を否定したことにあった。誤りは、「左翼」小児病の多くの現われにあった。この病気は、いまでは表面に現われており、それだけにより根本的に、より速やかにそれだけよい結果を身体にもたらすように、治癒されるであろうし、その予後もより順調であろう。

ドイツ「独立社会民主党」の内部は、明らかに等質的なものではない。この党には、ソヴェト権力とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の意義を理解する能力がなく、プロレタリアートの革命闘争を指導する能力のないことを証明した古い日和見主義的指導者（カウツキー、ヒルファディング、どうやらクリスピーン、レーデブールその他もかなりの程度までそうらしい）とならんで、プロレタリア的左翼が結成され、めざましい速度で成長している。この党（ほぼ七五万の党員をもっていると思われる）の数十万の党員は、シャイデマンから離れて、急速に共産主義のほうにすすんでいるプロレタリアである。このプロレタリア的左翼は、すでに独立社会民主党のライプチヒ大会（一九一九年）で、第三インタナショナルへの即時の無条件加盟を提案している。同党のこの翼との「妥協」を恐れるのは、まったく滑稽である。その反対に、彼らとの妥協の適切な形態を探しもとめ、そして見いだすことが、共産主義者の義務である。そ

の妥協は、一方では、この翼との必要な、完全な融合をたやすくし、促進するとともに、他方では、「独立派」の日和見主義的な右翼にたいする共産主義者の思想的＝政治的闘争をけっして妨げないようなものでなければならない。おそらく、妥協の適切な形態をつくりあげることは容易ではあるまいが、ドイツの労働者とドイツの共産主義者に勝利への「たやすい」道を約束することができるのは、山師だけであろう。

もし「純粋な」プロレタリアートが、プロレタリアから半プロレタリア（労働力を売って生計の資のなかばを得ている者）まで、半プロレタリアから小農（および小手工業者、家内工業者、一般に小経営主）まで、小農から中農まで、等々の、多数のきわめて雑多な過渡的タイプに取りまかれていないようなら、もしプロレタリアートそのものの内部に進んだ層と遅れた層とへの区分や、同郷関係、職業、ときには宗教その他による区分がないようなら、資本主義は資本主義でなくなるであろう。そして、これらすべてのことからして、プロレタリアートの前衛、その自覚した部分、すなわち共産党にとって、迂回政策に、プロレタリアのいろいろなグループ、労働者や小経営主のいろいろな党との協調や妥協にうったえる必要が――それも無条件の必要が、絶対的な不可避性をもって生じてくるのである。肝心なことは、ひとえに、プロレタリア的な自覚、革命精神、闘争能力と勝利をかちとる能力の一般水準を引き下げずに高めるために、この戦術を適用するすべを知ることにある。ついでながら、ボリシェヴィキがメンシェヴィキに勝利するためには、一九一七年の十月革命のまえばかりでなく、そのあとでも、迂回、協調、妥協の戦術、いうまでもなく、メンシェヴィキの犠牲でボリシェヴィキの仕事を容易にし、促進し、強固にし、強化するような迂回、協調、妥協の戦術を適用する必要があったことを、注意しておかなければならない。小ブルジョア民主主義者（メンシェヴィキもふくむ）が、ブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだ、ブルジョア民主主義とソヴェト制度とのあいだ、改良主義と革命精神とのあいだ、労働者にたいする好意とプロレタリア執権（ディクタツーラ）にたいする恐怖とのあいだ、等々を動揺することは、まぬかれられない。共産主義者の正しい戦術は、これらの動揺を無視することではけっしてなく、それを利用することでなければならない。それを利用するには、プロレタリアートのほうに向きをかえる分子にたいし、彼らがそうするときに、またそうするかぎりで、譲歩すると同時に、ブルジョアジーのほうに向きをかえる分子とたたかうことが必要である。正しい戦術を適用した結果、わが国ではメンシェヴィズムはますます崩壊していったし、いまも崩壊

しつつあり、頑迷な日和見主義的指導者を孤立させ、すぐれた労働者、すぐれた分子を小ブルジョア的民主主義派からわれわれの陣営に移らせている。これは長期にわたる過程であって、「いっさい妥協しない、いっさい迂回政策をとらない」という性急な「決定」は、革命的プロレタリアートの影響を強化し彼らの勢力を増強する仕事に害をあたえるものでしかありえない。

最後に、ドイツの「左翼」のおかした疑う余地のない誤りの一つは、彼らがヴェルサイユ講和の不承認を一本調子に固執していることである。この見解を、たとえばK・ホルナーが「堅実に」、「もったいぶって」、「断固として」、うむを言わさぬ調子で定式化すればするほど、それはますます愚かしいものになる。国際プロレタリア革命の現在の条件のもとでは、協商国と戦争するためにドイツ・ブルジョアジーとのブロックを主張するまでに脱線した「民族的ボリシェヴィズム」（ラウフェンベルクその他の）の驚くべき愚論を否認するだけでは十分でない。ソヴェト・ドイツ（ドイツ・ソヴェト共和国がまもなく生まれるものとすれば）がある期間はぜひともヴェルサイユ講和を承認し、それに従わなければならないことを認めようとしない戦術は、根本的に誤りだということを、理解しなければならない。だからといって、シャイデマンらが政府の座にすわっていたとき、ハンガリーでまだソヴェト権力が打倒されていなかったとき、ウィーンのソヴェト革命がソヴェト・ハンガリー支持の援助をあたえる可能性がまだなくなっていなかったときに、——当時の条件のもとで「独立派」がヴェルサイユ講和条約の調印という要求をかかげたのが正しかったということにはならない。その当時に「独立派」のやった迂回と駆引きはすこぶるまずかった。なぜなら、彼らは裏切者のシャイデマンの責任を多少とも引きうけ、シャイデマンらとの容赦ない（かつきわめて冷静な）階級戦の立場から、「無階級的」あるいは「超階級的な」立場に多少とも転落したからである。

だが、いまの情勢は、明らかに、ドイツの共産主義者が自分で自分の手を縛って、共産主義が勝利したあかつきにはヴェルサイユ講和をぜひとも、かならず破棄すると公約すべきではない、そういう情勢である。それはばかなことである。こう言うべきである。——シャイデマン派とカウツキー派は多くの裏切行為をやって、ソヴェト・ロシアや、ソヴェト・ハンガリーとの同盟の事業を困難にした（部分的には、それをまったくだめにした）。われわれ共産主義者は、あらゆる手段によってこのような同盟を容易にし、その準備をするであろうが、そのさいわれわれには、ヴェルサイユ講和をかならず、しかもただちに破棄しなければ

ならない義務はけっしてない。それをうまく破棄できるかどうかは、ソヴェト運動がドイツで成功するばかりでなく、国際的にも成功するかどうかにかかっている。この運動をシャイデマン派とカウツキー派は妨害したが、われわれはそれを援助する。ここにこそ問題の核心があり、ここにこそ根本的な違いがある。また、われわれの階級敵、搾取者、その従僕のシャイデマン派とカウツキー派が、ドイツのソヴェト運動をも国際的なソヴェト運動をも強め、ドイツのソヴェト革命をも国際ソヴェト革命をも強める多くの機会を逸したとすれば、それは彼らの罪である。ドイツのソヴェト革命は、ヴェルサイユ講和と国際帝国主義一般にたいする最も強力な砦（しかもただ一つたのむにたる、不敗の、世界的に強大な砦）である国際ソヴェト運動を強めるであろう。ヴェルサイユ講和からの解放を、帝国主義に抑圧されている他の国々を帝国主義の圧制から解放する問題に優先させて、ぜひとも、かならず、すぐさま第一位におくことは、小市民的民族主義（カウツキー、ヒルファディング、オットー・バウアー一派にふさわしい）であって、革命的国際主義ではない。ドイツをもふくめたヨーロッパの大国のどれか一つでブルジョアジーを打倒することは、国際革命にとって大きなプラスであるから、そのためとあればヴェルサイユ講和がもっと長期にわたって存続することに同意してもよいし、また――必要とあれば――同意しなければならない。ロシアが一国で、革命の利益になるよう、ブレスト講和を数ヵ月にわたって耐えぬくことができたのであるから、ソヴェト・ドイツがソヴェト・ロシアと同盟して、革命の利益になるよう、ヴェルサイユ講和がもっと長期にわたって存続するのを耐えぬくことに、なにも不可能なことはないのである。

フランス、イギリス等々の帝国主義者は、ドイツの共産主義者を挑発し、彼らをわなにかけようとしている。「君たちは、ヴェルサイユ講和に調印しないと言いたまえ」と。ところが、左翼共産主義者は、この悪がしこい、いまのところ力のまさっている敵を相手に駆引きするのでなく、この敵にむかって、「いまはわれわれはヴェルサイユ講和に調印する」と言うのでなく、こどものように、敵の仕かけたわなにひっかかっている。まえもって自分で自分の手を縛り、現在は自分よりも装備のすぐれている敵にむかって、われわれが彼とたたかうかどうか、またいつたたかうかを公然と語るのは、ばかげたことであって、革命的態度ではない。戦闘が敵に有利で、味方に不利なことがわかっているときに戦闘に応じるのは、犯罪である。不利なことのわかっている戦闘を避けるために「迂回、協調、妥協」をおこなうすべを知らないような革命的階級の政治家は、なん

の役にも立たない。

九　イギリスの「左翼」共産主義

イギリスにはまだ共産党はないが、労働者のあいだには、溌剌（はつらつ）とした、広範な、力づよい共産主義運動があって、急速に成長しており、その前途はきわめて有望である。共産党の創立を希望し、それについてすでに話合いをしている政党と政治団体がいくつかある（「イギリス社会党」(一〇〇)、「社会主義労働党」、「南ウェールズ社会主義協会」、「労働者社会主義連盟」(一〇一)）。ここにあげた団体のうちの最後の団体の週刊機関紙で、同志シルヴィア・パンクハーストが編集している『ワーカーズ・ドレッドノート』(一〇二)紙（第六巻第四八号、一九二〇年二月二一日付）に、彼女の論文『共産党をめざして』がのっている。この論文は、第三インタナショナルへの加盟、議会制度に代わるソヴェト制度の承認、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の承認にもとづいて単一の共産党を結成することについて、右にあげた四つの団体が話し合った経過を述べている。これでみると、単一の共産党をいますぐつくるうえでのおもな障害の一つは、議会参加の問題で意見の違いがあること、主として労働組合からなっている組合主義的、日和見主義的、社会排外主義的な古い「労働党」に新しい共産党が加盟する問題についての意見の相違だということがわかる。「労働者社会主義連盟」は――「社会主義労働党」*もそうだが――、議会選挙と議会への参加に反対し、「労働党」への加盟に反対しており、この点で、彼らがイギリスの「共産主義諸党の右翼」と見なしているイギリス社会党のすべての党員あるいは大多数の党員と意見がくいちがっている（右にあげたシルヴィア・パンクハーストの論文、五ページ）。

＊　この党は、「労働党」に加盟することには反対であるが、かならずしも全党員が議会参加に反対しているのではないようである。

こういうわけで、意見の相違が現われている形態（ドイツにおけるこの形態は、イギリスの場合よりもずっと「ロシア的な」形態に近い）や、またその他多くの事情に、非常に大きな違いがあるとはいえ、基本的な区分はドイツの場合と同じである。そこで、「左翼」の論拠を見よう。

議会参加の問題について、同志シルヴィア・パンクハーストは、同じ号に同志W・ギャラチャーがグラスゴーの「スコットランド労働者評議会」を代表して書いている論文を引合いにだしている。ギャラチャーはこう書いている。

「この評議会は、明確に反議会主義的で、いろいろな政治団体の左翼の後援をうけている。われわれはスコッ

トランドの革命運動を代表しているが、この運動は、諸産業（さまざまな産業部門内）に革命的な組織をつくり、全国にわたって、社会委員会を基礎として共産党をつくることに努力している。長いあいだ、われわれは公認の国会議員らと口喧嘩してきた。われわれは、彼らに公然と宣戦する必要があるとは考えなかったし、彼らもわれわれにたいして攻撃を開始することを恐れている。だが、このような事態は長つづきするはずがない。われわれは全線にわたって勝利をおさめつつある。

スコットランドの独立労働党の一般党員は、議会の思想にますますいやけがさしてきている。そして、ソヴェト（ロシア語が英語ふうに表記されて使用されている）すなわち労働者評議会は、ほとんどすべての地方グループから支持されている。もちろん、このことは、政治をかせぎ口と（職業と）見なしている紳士諸君にとってはきわめて重大であって、彼らは、自派の党員に、議会のふところにかえるよう、あらゆる手段をつかって説きつけている。革命的な同志諸君は、この一味に支持をあたえてはならない（傍点はすべて原筆者のもの）。ここでのわれわれの闘争は、きわめて困難なものとなろう。この闘争の最も悪い特徴のひとつは、革命への関心よりも個人的な利益のほうがより強い推進力になっている人たちの裏切りであろう。議会主義を支持することはすべて、わがイギリスのシャイデマン、ノスケらの手に権力がおちいるのを助けるにすぎない。ヘンダソン、クラインズ一派はどうしようもないほど反動的である。公認の独立労働党は、ますますブルジョア自由主義者に支配されるようになっている。これらの自由主義者は、マクドナルド、スノーデン一派の諸氏の陣営に精神的避難所を見いだしたのである。公認の独立労働党は第三インタナショナルに激しい敵意をいだいているが、大衆は第三インタナショナルを支持している。およそ日和見主義的議員たちにたいする支持は、これらの紳士諸君を利するにすぎない。……ここで必要なのは、健全な革命的産業別組織と、はっきりした、正確に規定された科学的な原則にもとづいて行動する共産党とである。もしわが同志諸君がこの両者をつくるうえでわれわれを助けることができるなら、われわれは喜んで彼らの援助をうけよう。もし彼らにそれができないならば、議会の『名誉ある』（？）（この疑問符は原筆者のもの）称号を得ようと懸命につとめ、自分たちが『ボス』の階級政治家たち自身と同じようにうまく統治できることを証明したいという熱意に燃えている反動家どもに手を貸すことで革命を裏切りたくなければ

ば、後生だから全然口出しをしないでほしい。」

編集局あてのこの手紙は、私の見るところでは、若い共産主義者、あるいはやっと共産主義にたどりつきかけた一般の労働者の気分と見解をみごとにあらわしている。この気分は非常に喜ぶべきものであり、貴重なものである。われわれはこれを尊重し、支持するすべを知らなければならない。なぜなら、この気分がなければ、イギリスでは――また他のどの国でも――、プロレタリアートの革命の勝利は望みがないからである。大衆のこうした気分を表現できる人々、この種の気分（非常にしばしば眠っていて、意識されず、めざまされていない）を大衆のあいだに呼びおこすことのできる人々をたいせつにし、心をくばってあらゆる援助をこれにあたえなければならない。しかし同時に、彼らにむかって、偉大な革命闘争で大衆を指導するには気分だけでは足りず、革命の大業に真に献身している人々がおかしがちな、あるいは現におかしているしかじかの誤りは、革命の大業に害をあたえかねない誤りであると、率直に、公然と言わなければならない。編集局にあてた同志ギャラチャーの手紙は、ドイツの「左翼」共産主義者が現におかしており、ロシアの「左翼」ボリシェヴィキが一九〇八年と一九一八年におかしたすべての誤りの芽ばえを、疑う余地なく示している。

この手紙の筆者は、ブルジョア的「階級政治家」にたいするきわめて高潔なプロレタリア的憎しみ（だが、プロレタリアにとってだけでなく、すべての勤労者にとっても、ドイツ語の表現を用いれば、すべての「細民」にとってもよくわかり、身近な憎しみ）にみちている。抑圧され搾取されている大衆の代表者のこの憎しみは、まことに「あらゆる知恵の始まり」であり、あらゆる社会主義運動、共産主義運動とその成功との基礎である。だが、筆者は、どうやら、政治が科学であり、技術であって、天から降ってくるものでも、ただでもらえるものでもなく、プロレタリアートは、ブルジョアジーに勝利したければ、自分たちのプロレタリア的「階級政治家」、しかもブルジョア政治家に劣らないような「階級政治家」を育てあげなければならないということを、考慮にいれていないようだ。

手紙の筆者は、議会ではなく、労働者ソヴェトだけがプロレタリアートの目的を達成する用具となりうることを、りっぱに理解した。もちろん、いまだにこのことを理解していない者は、どんなに博学な人であろうと、どんなに経験に富んだ政治家であろうと、どんなに誠実な社会主義者であろうと、どんなに博識なマルクス主義者であろうと、どんなに正直な市民であり家庭人であろうと、最悪の反動家である。だが、手紙の筆者は、「ソヴェト的」政治家を

議会の内部に送りこまないでも、議会制度を内部から崩壊させないでも、きたるべき議会解散の任務にソヴェトが成功するように、議会の内部から準備をしないでも、ソヴェトを議会にたいする勝利にみちびくことができるかどうかという問題を提起しておらず、この問題を提起する必要があるとも考えていない。ところで、手紙の筆者は、イギリスの共産党は科学的な原則にもとづいて行動しなければならないという、まったく正しい考えを述べている。科学は、第一に、他国の経験を考慮にいれるよう要求する。同じく資本主義国である他の諸国が非常によく似た経験を現になめているか、あるいは最近になめた場合には、とくにそうである。第二に、科学は、その国のなかで行動している勢力、グループ、党、階級、大衆のすべてを考慮にいれるよう、けっしてただ一つのグループまたは党の願望と見解、意識程度と闘争決意だけにもとづいて政策を決定しないよう要求する。

ヘンダソンら、クラインズら、マクドナルドら、スノーデンらがどうしようもないほど反動的だということは、ほんとうである。彼らが権力をにぎりたがっており（もっとも、ブルジョアジーと連合するほうを好んでいるが）、彼らがあの同じ古くさいブルジョア的な方式で「統治」したがっており、彼らが権力をにぎったあかつきには、かならずシャイデマンらやノスケらと同じようにふるまうだろうということも、やはりほんとうである。これはみなそのとおりである。しかし、ここからでてくる結論は、彼らを支持することは革命を裏切ることだということではけっしてなく、革命の利益のためには、労働者階級の革命家は、これらの諸君にある程度の議会的援助をあたえなければならないということである。この考えを明らかにするために、最近のイギリスの二つの政治文書をとってみよう。すなわち、（一）一九二〇年三月一八日の首相ロイド・ジョージの演説（『マンチェスター・ガーディアン』[103]、一九二〇年三月一九日号の報道による）、（二）「左翼」共産主義者の同志シルヴィア・パンクハーストのさきにあげた論文のなかの所説がそれである。

ロイド・ジョージは、その演説のなかで、アスキス（彼は集会にとくに招かれたが、出席をことわった）や、また保守党との連立を望まず、労働党との接近を望んでいる自由党員たちと論戦した。（編集局あての同志ギャラチャーの手紙のうちにも、自由党員が独立労働党に移っていっている事実があげられているのを、われわれは見た。）ロイド・ジョージは、自由党と保守党の連立、しかも緊密な連立が必要であること、なぜなら、そうしなければ労働党が勝利するおそれがあるからだということを、証明しようと

した。ロイド・ジョージは、この労働党を社会党と「よぶほうがよい」と思っており、この党は生産手段の「集団的所有」をめざしているという。「フランスではこれは共産主義とよばれてきた」と、イギリス・ブルジョアジーのこの指導者は、その聴衆である自由党の国会議員たちにわかりやすくこう説明したが、自由党の議員は、どうやらこれまでこうしたことは知らなかったものとみえる。「ドイツではそれは社会主義とよばれている。ロシアではボリシェヴィズムとよばれている。」自由党員にとっては、これは原則的に容認しがたいことである、なぜなら、自由党員は原則上私有財産制の味方であるから、とロイド・ジョージは説明した。演説者はこう言明した。「文明は危険にさらされている」、だから自由党と保守党は連合すべきだと。

……

「……もし農業地区に行くなら」と、ロイド・ジョージは言った——「古い政党の区分がもとどおりに強く残っているのが見られるということに、私は同意する。そこは危険から遠い。そこには危険はない。だが、事が農村地区にまで及ぶときには、そこでも危険は、いまいくつかの工業地区で見られるのと同じくらい大きなものとなるだろう。わが国の五分の四は工業と商業にたずさわっており、農業に従事する者は、五分の一になるかならぬかである。これは、わが国の将来がもたらす危険のことを思いめぐらすとき、いつでも私の念頭にある事柄の一つである。フランスでは人口は農業的である。だから、明確な見解のしっかりした基盤が見いだされ、それはそう急速に動きもしないし、革命運動によってそうたやすく刺激もされない。わが国では、わけが違う。わが国は、世界の他のどの国よりもひっくりかえしやすく、もしよろめきはじめれば、わが国の崩壊は、いまあげた理由から、他の国よりも強烈なものとなるだろう。」

これによって読者は、ロイド・ジョージ氏が非常に賢い人であるばかりでなく、マルクス主義者から多くのものを学んでいることが、おわかりになろう。われわれもロイド・ジョージから学んでも悪くはあるまい。

ロイド・ジョージの演説のあとでおこなわれた討論のうちから、さらに次のようなエピソードをあげるのは興味がある。

「ウォレス氏——首相は、工業地区で彼の政策から工業労働者にどういう結果が生じると考えていられるか、おうかがいしたい。工業労働者のうち非常に多くの者が現在自由党員であり、われわれは彼らからきわめて大きな支持をうけている。ありうべき結果は、現在われわれの心からの支持者である労働者によって労働党の勢力が

圧倒的に増大することではないだろうか？

首相――私はまったく違った見解をもっている。自由党員が同士打ちをやっている事実が、非常に多くの自由党員を絶望のあまり労働党にはしらせていることは、疑いをいれない。労働党内には、すでにかなり多数の自由党員、きわめて有能な人々がおり、彼らの目下の仕事は政府の信用をおとすことである。その結果、公衆の気分がいちじるしく労働党にとって有利さをくわえていることは、疑いない。世論は、労働党外の自由党員のほうに向かないで、労働党のほうに向きをかえており、このことは補欠選挙が示している。」

ついでにいえば、この議論は、ブルジョアジーのうちの最も賢い人々でさえ、いかに混乱してしまったか、いかに度しがたいほどばかげたことをしでかさずにはおかないかを、とくによく示している。まさにこのためにブルジョアジーは滅びるのである。われわれの側でもばかげたことをするとしてさえ（もっとも、このばかげたことがあまり大きなものでなく、適時に訂正されるということが条件だが）、それにもかかわらず、われわれはけっきょくは勝利者となるであろう。

もう一つの政治文書は、「左翼」共産主義者の同志シルヴィア・パンクハーストの次のような所説である。

「……同志インクピン（イギリス社会党書記）は労働党をさして『労働者階級運動の主要な団体』と言っている。イギリス社会党のもうひとりの同志は、第三インタナショナルの会議で、イギリス社会党の見解をもっとあざやかに言いあらわした。『われわれは労働党を組織された労働者階級と見なす』と彼は言った。

われわれは、このような労働党観をとらない。労働党の党員数は非常に多い。とはいえ、党員の大部分は無活動で無関心である。彼らは、職場の仲間が労働組合員であるため、また扶助金をもらいたいため、労働組合にはいった男女の労働者である。

しかし、労働党が多人数を擁していることの一つの原因は、同党がイギリス労働者階級の多数者がまだのりこえられずにいる思想的一流派によってつくりだされたものだという事実にあることを、われわれは承認する。とはいえ、人民の心には大きな変化が準備されており、人民はまもなくこういう事態を変えるであろう。……」

「……イギリス労働党は、他の国々の社会愛国主義的団体と同様に、社会が自然に発展してゆくうちに、かならず権力をにぎるであろう。社会愛国主義者を打倒する勢力をきずくことが共産主義者の仕事であり、われわれはわが国でこの活動を遅らせたり、ためらったりしては

ならない。

われわれは自分の精力を分散させて、労働党の勢力を増大させるようなことをしてはならない。労働党が権力の座につくことは、避けられない。われわれは、労働党に打ち勝つ共産主義運動を創設することに力を集中しなければならない。労働党はまもなく政府をつくるだろう。革命的反政府党は、それを攻撃する準備をしなければならない。……」

こういうわけで、自由主義的ブルジョアジーは、数百年来の経験によって歴史的に神聖化された――搾取者にとって非常に有利な――「二党」制（搾取者の）を放棄しようとしており、労働党とたたかうために二党の勢力を一つに結合する必要があると考えている。一部の自由党員は、沈みかけている船から逃げだす鼠のように、労働党にはしっている。左翼共産主義者は、権力が労働党に移ってゆくことは避けられないと考えており、いまのところ労働者の多数者が労働党を支持していることを認めている。このことから、彼らは奇妙な結論を引きだしている。同志シルヴィア・パンクハーストはそれを次のように定式化している。

「共産党は妥協してはならない。……共産党はその教義を純粋にたもち、改良主義からの党の独立性を無垢のままにたもたなければならない。共産党の使命は、立ちどまったり、わき道にそれたりせずに、共産主義革命への道をまっすぐに前進することである。」

その反対に、イギリスの労働者の多数者がまだイギリスのケーレンスキー派あるいはシャイデマン派に追随していること、彼らにはこういう連中でつくられた政府をもった経験がない――そうした経験は、ロシアでもドイツでも、労働者が大量に共産主義に移行してゆくために必要であった――こと、このことから疑いをいれないものとしてでてくる結論は次のものである。すなわち、イギリスの共産主義者は、議会活動に参加しなければならず、ヘンダソンやスノーデンの政府の結果を労働者大衆が実地に見てとるよう、議会の内部から助けてやらなければならず、ヘンダソンやスノーデンを助けてロイド・ジョージとチャーチルの連合に勝利させなければならない、ということである。それ以外の行動をとることは、革命の事業を困難にすることを意味している。なぜなら、労働者階級の多数者の見解に変化が生じなければ革命は不可能であるが、このような変化は、大衆の政治的経験によってつくりだされるのであって、けっして宣伝だけでつくりだされるものではないからである。「妥協せずに、わき道にそれずに、前進せよ」――もし、労働者の明らかに無力な少数者が、ロイド・ジョージとチャーチルにたいしてヘンダソンとスノーデンが

勝利するならば、労働者の多数者は短期間に自分たちの指導者に幻滅して共産主義支持に変わるであろう（あるいは、すくなくとも共産主義者にたいする中立に、多くは好意的中立に変わるであろう）ということを知っていながら（すくなくとも、当然知っているべきなのに）、こういうことを言うとすれば——このようなスローガンは明らかに誤っている。これは、来援の途上にあるがいますぐ行動することのできない一〇万の増援軍の到着を待つためとあれば、「立ちどまったり」、「わき道にそれたり」、それどころか「妥協」まで結ばなければならないときに、一万の兵が五万の敵との戦闘に突入するのも同然である。これは、インテリゲンツィア的な幼稚さであって、革命的階級のまじめな戦術ではない。

すべての革命、とくに二〇世紀の三次のロシア革命によって確証された革命の基本法則は次のとおりである。すなわち、搾取され抑圧されている大衆がいままでどおりに生活できないことをさとって、変更を要求するだけでは、革命にとっては不十分であって、搾取者がいままでどおりに生活し統治することができないということが、革命にとって不可欠である。「下層」がいままでのものをもはや欲せず、「上層」がいままでどおりにやっていけなくなるとき、そのときにはじめて革命は勝利することができる。いいかえれば、この真理は、全国民的な（搾取される者をも搾取する者をもとらえた）危機がなければ革命は不可能である、ということばで言いあらわされる。つまり、革命のためには、第一に、労働者の多数者（あるいは、すくなくとも自覚した、思慮ぶかい、政治的に積極的な労働者の多数者）が完全に変革の必要を理解し、この変革のためにすすんで死地におもむく覚悟をもっていること、第二に、支配階級が政府の危機に見まわれ、この危機が最も遅れた大衆をも政治に引きいれ（あらゆる真の革命の標識は、いままで無関心であった勤労被抑圧大衆のなかに、政治闘争をおこなう能力のある分子の数が十倍に、あるいは百倍にさえ急増することである）、政府を無力にし、革命家が政府を速やかに打倒するのを可能にすること、が必要である。

イギリスでは、とりわけ、まさにこのロイド・ジョージの演説からわかるように、プロレタリア革命の成功の条件が二つとも明らかに成熟しつつある。そして、左翼共産主義者の誤りは、一部の革命家のあいだに、この二つの条件のどちらについても、思慮の足りない、注意の足りない、自覚の足りない、慎重さの足りない態度が見られるからこそ、いまでは二重に危険なのである。もしわれわれが革命的なグループではなく、革命的な階級の党であるなら、もしわれわれが大衆を自分についてこさせたいと思うなら

(そうしなければ、われわれはたんなるおしゃべり屋に終わる危険がある)、われわれは、第一に、ヘンダソンあるいはスノーデンがロイド・ジョージとチャーチルを打ち破るのを助けなければならない(もっと正確にいえば、むしろ前者を強制して、後者を打ち破らせなければならない。なぜなら、前者は自分の勝利を恐れているからである!)。第二に、労働者階級の多数者がわれわれの正しいことを、すなわち、ヘンダソンらやスノーデンらがまったくものの役に立たないこと、彼らが小ブルジョア的、裏切的な本性をもっていること、彼らの破産が避けられないことを、自分の経験で確信するように助けなければならない。第三に、ヘンダソンらにたいする労働者の多数者の幻滅にもとづいて、十分な成功の見込みをもって、一挙にヘンダソンらの政府を打倒することのできる時機を近づけなければならない。きわめて賢明で、きわめて堅実な、小ブルジョアならぬ大ブルジョアのロイド・ジョージでさえ、まったくとほうにくれてしまい、きのうはチャーチルと「摩擦」を生じ、きょうはアスキスと「摩擦」を生じることで、ますます自分(とブルジョアジー全体)を無力にしているとすれば、ヘンダソンらの政府は、なおいっそうとほうにくれてもがくことだろう。

もっと具体的に述べよう。私の見るところでは、イギリスの共産主義者は、第三インタナショナルの諸原則と議会にかならず参加することとを基礎にして、自分たちの四つの党とグループ(いずれも非常に微力であり、あるものはまるっきり微力である)を一つの共産党に統合すべきである。共産党は、ヘンダソンら、スノーデンらに「妥協」、つまり選挙協定を申し入れる。ロイド・ジョージと保守党との同盟にたいして共同でたたかおうではないか。労働者が労働党あるいは共産党に入れた投票数(選挙のさいの票数ではなく、特別の表決による)におうじて議席を分けようではないか。扇動、宣伝、政治活動の最も完全な自由を保持しようではないか、と。もちろん、この最後の条件がなければ、ブロックに応じてはならない。なぜなら、それは裏切りになるからである。イギリスの共産主義者は、ヘンダソンら、スノーデンらを暴露する最も完全な自由を絶対に主張し、そして貫徹しなければならない。ちょうどロシアのボリシェヴィキが、ロシアのヘンダソンら、スノーデンら、すなわちメンシェヴィキにたいして、この自由を主張し、まもりつづけ(一九〇三年から一九一七年まで一五年間)、そして貫徹したのと同じように。

もしヘンダソンら、スノーデンらがこういう条件でブロックを受け入れるなら、われわれは得をする。なぜなら、われわれにとっては議席の数はまったく重要でないからで

ある。われわれは議席を追いもとめはしない。この点では、われわれは譲歩的であるだろう（ところが、ヘンダソンら、とくに彼らの新しい友だち――というよりは、彼らの新しい主人――、つまり独立労働党に移った自由党員たちは、なによりも議席を追いもとめている）。われわれは得をする。なぜなら、われわれは、ロイド・ジョージ自身が大衆を「あおりたてた」そのときに、われわれ自身の扇動を大衆のなかにもちこむからであり、われわれは、労働党がいっそう早く自分の政府をつくるように助けるばかりでなく、ヘンダソンらに反対して、なに一つ省略せず、なに一つ黙過せずに共産主義的宣伝をおこなうことによって、われわれの共産主義的宣伝全体を大衆がいっそう速やかに理解するのを助けるからである。

　ヘンダソンら、スノーデンらがこういう条件でわれわれとブロックを結ぶことを拒絶するなら、われわれはいっそう大きな得をする。なぜなら、われわれは、ヘンダソンらが、すべての労働者の統合よりも、自分たちと資本家との近しい関係のほうを好ましいと考えていることを、ただちに大衆に示すからである（純メンシェヴィキ的な、まったく日和見主義的な独立労働党の内部でさえ、大衆はソヴェトに賛成していることに注目せよ）。われわれは大衆の目の前でただちに得をする。大衆は、とりわけロイド・ジョージのりっぱな、きわめて正しい、きわめて有益な（共産主義にとって）説明を聞いたあとでは、ロイド・ジョージと保守党との同盟に対抗する全労働者の統合に共鳴するであろう。われわれはただちに得をする。なぜなら、ヘンダソンら、スノーデンらが、ロイド・ジョージに勝利することを恐れ、単独で権力をにぎることを恐れ、労働党に反対して保守党に公然と手をさしのべているロイド・ジョージの支持をこっそりとりつけようとつとめていることを、大衆の目の前で実証するからである。わがロシアでは、一九一七年二月二七日（旧暦）の革命のあとで、メンシェヴィキとエス・エル（すなわちロシアのヘンダソンら、スノーデンら）に反対するボリシェヴィキの宣伝が、まさに同じような事情によって得をしたことを、指摘しておかなければならない。われわれはメンシェヴィキとエス・エルにむかってこう言った。――君たちはソヴェト内で多数を占めている（一九一七年六月の第一回全ロシア・ソヴェト大会では、ボリシェヴィキは総投票数の一三％しか占めていなかった）のだから、ブルジョアジーをいれずに全権力をにぎりたまえ、と。だが、ロシアのヘンダソンら、スノーデンらは、ブルジョアジーをいれずに権力をにぎることを恐れた。そして、ブルジョアジーが、憲法制定議会ではエス・エルとメンシェヴィキ*（両者は、きわめて緊密なブロ

ックを結んでおり、実際には一つの小ブルジョア的民主主義派をあらわしていた）が多数を占めるであろうことをよく知っていたので、憲法制定議会の選挙を延期したとき、エス・エルとメンシェヴィキは、この延期に反対して精力的に最後までたたかいぬく力がなかった。

＊　一九一七年一一月におこなわれたロシアの憲法制定議会の選挙では、三六〇〇万人以上の選挙人をふくむ集計表によると、ボリシェヴィキの得票は総投票数の二五％、地主とブルジョアジーの諸政党が一三％、小ブルジョア的民主主義派、すなわちエス・エルとメンシェヴィキおよびそれに類似の小グループが六二％であった。

ヘンダソンら、スノーデンらが共産主義者とのブロックを拒絶するならば、共産主義者は、大衆の共鳴を獲得し、ヘンダソンら、スノーデンらの信用をおとさせるという点で、ただちに得をするであろう。そして、このためにいくつかの議席を失うとしても、それはわれわれにとってはまったく重要でない。われわれは、絶対に確実なごく少数の選挙区、つまり、わが党が候補者を立てたために労働党員が落ちて自由党員が当選するようなことにならないような選挙区でだけ、自党の候補者を立てよう。われわれは選挙の扇動をおこない、共産主義の宣伝ビラをまき、わが党の候補者の出ていないすべての選挙区では、ブルジョアに反対して労働党員に投票するように勧めよう。同志シルヴィア・パンクハーストと同志ギャラチャーが、これを共産主義への裏切り、あるいは裏切社会主義者にたいする闘争の放棄と見るならば、それは誤りである。その反対に、これによって共産主義革命の事業は疑いもなく得をするであろう。

現在では、イギリスの共産主義者が大衆に近づくことさえ、自分たちの言い分に耳をかたむけさせることさえ、困難な場合が非常に多い。私が共産主義者として演説し、ロイド・ジョージに反対してヘンダソンに賛成投票してほしい、と述べるなら、人々はきっと私の言うことに耳をかたむけるだろう。そうすれば、私は、なぜソヴェトが議会よりもすぐれており、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）がチャーチルの執権（ディクタツーラ）（ブルジョア「民主主義」という看板で隠されている）よりもすぐれているかということだけでなく、次のこともわかりやすく説明することができるだろう。すなわち、私が自分の投票によってヘンダソンを支えたいと思っているのは、ちょうど一本の綱が絞首された者を支えるのと同じだということ、また、ヘンダソンらを彼ら自身の政府をもつところへ近づければ、ロシアとドイツにおける彼らの思想上の同類の場合と同じように、私の言うことの正しさが証明され、大衆は私の側に引きよせられ、ヘンダソ

ンら、スノーデンらの政治上の死が早められるだろうということである。

もし、それはあまりにも「手のこんだ」あるいは複雑な戦術だ、大衆はそれを理解できないだろう、それはわれわれの勢力をばらばらにし細分化するだろう、それはわれわれの勢力をソヴェト革命に集中するのを妨げるだろう、などと言って私に反論する者があれば、私はこの「左翼的な」反対論者にこう答えよう。——君たち自身の空論主義を大衆になすりつけないでくれたまえ！と。たしかに、ロシアでは大衆の文化水準はイギリスより高くはなく、むしろ低い。それでも、大衆はボリシェヴィキを理解した。そして、ボリシェヴィキがソヴェト革命の前夜、つまり一九一七年九月にブルジョア議会（憲法制定議会）への自党の候補者名簿を作成し、ソヴェト革命の直後の一九一七年一一月にこの同じ憲法制定議会の選挙に参加し、一九一八年一月五日にこの議会を解散させたという事情は、ボリシェヴィキの妨げにならず、むしろ助けになったのである。

私は、イギリスの共産主義者のあいだの第二の意見の相違、すなわち、労働党に加盟すべきかどうかという問題を、ここで詳論することはできない。私の手もとには、この問題についての資料があまりにも少ない。しかも、この問題は、イギリス「労働党」がきわめて独特なもので、その構造そのものからしてヨーロッパ大陸の普通の政党にあまりにも似ていないために、とくに複雑なのである。ただ疑う余地のないことは、第一に、「共産党は、その教義を純粋にたもち、改良主義からの党の独立性を無垢のままにたもたなければならない。共産党の使命は、立ちどまったり、わき道にそれたりせずに、共産主義革命への道をまっすぐに前進することである」といったたぐいの原則から革命的プロレタリアートの戦術を引きだそうと企てる者は、この問題についてもかならず誤りにおちいるだろうということである。なぜなら、このような原則は、一八七四年にいっさいの妥協といっさいの中間駅を「否定する」ことを宣言した、フランスのブランキ派コミューン戦士の誤りを繰りかえすものにすぎないからである。第二に、疑いもなく、いつの場合でもそうであるように、ここでもまた任務は、共産主義の一般的な基本的諸原則を、それぞれの国に固有な諸階級、諸政党間の関係の独特な点に、共産主義への客観的発展の独特な点に適用するすべを知ることにある。それぞれの国に固有な、こうした独特な点を、われわれは研究し、発見し、推測することができなければならない。

だが、これは、イギリスの共産主義だけとの関連においてではなく、すべての資本主義国における共産主義の発展にかんする一般的結論と関連させて述べるべきことである。

いまや、このテーマに移ることにしよう。

一〇　いくつかの結論

一九〇五年のロシアのブルジョア革命は、世界史のきわめて独特な一転換を明るみにだした。つまり、最も遅れた資本主義国のひとつで、世界ではじめてストライキ運動が未曽有のひろがりと力づよさに達したのである。一九〇五年の最初の一ヵ月間のストライキ労働者の数は、過去一〇年間（一八九五—一九〇四年）のストライキ労働者の年平均数を十倍も上まわり、一九〇五年一月から一〇月まで、ストライキはたえまなく増加し、大きな規模に達した。まったく独特な一連の歴史的条件の影響をうけて、遅れたロシアは、抑圧されている大衆の自主活動が革命時には飛躍的に高まること（これは、すべての大革命のさいにあったことである）をはじめて世界に示したばかりでなく、プロレタリアートの重要性が人口中に占めるその割合よりも無限に高いことをも、経済的ストライキと政治的ストライキとの結合、後者の武装蜂起への転化、資本主義に抑圧されている階級の大衆闘争と大衆組織の新しい形態、すなわちソヴェトの誕生をも、はじめて世界に示したのである。

一九一七年の二月革命と十月革命は、ソヴェトを全国的な規模で全面的に発展させ、ついでプロレタリア社会主義革命のなかでソヴェトを勝利させた。そして、二年たらずのうちに、ソヴェトが国際的な性格をもっていること、この闘争形態と組織形態が世界の労働運動にひろまったこと、ブルジョア議会制度、一般にブルジョア民主主義の墓掘人、相続人、後継者となるのがソヴェトの歴史的使命であることが、明らかにされた。

それればかりではない。労働運動の歴史はいま次のことを示している。すなわち、あらゆる国で労働運動は、生まれ強化し勝利をめざしてすすんでいる共産主義と、まず第一に、また主として、自分たちの（それぞれの国の）「メンシェヴィズム」すなわち日和見主義および社会排外主義との闘争を、第二に、いわば補足として、「左翼」共産主義の闘争を、今後経験しなければならない（またすでに経験しはじめている）ということである。第一の闘争は、見たところ一つの例外もなくすべての国で、第二インタナショナル（いまはもう事実上葬りさられている）と第三インタナショナルの闘争として展開された。第二の闘争は、ドイツにも、イギリスにも、イタリアにも、アメリカにも（すくなくとも「世界産業労働者連盟」とアナルコ－サンディカリズム的潮流とのある部分は、ほとんど全体的に、ほとんど全幅的にソヴェト制度を承認するとともに、左翼

共産主義の誤りを擁護している)、フランスにも(政党と議会制度にたいしてかつてのサンディカリストの一部がとっている態度。彼らもまたソヴェト制度を承認している)、つまり、疑いもなく、国際的な規模というだけでなく、全世界的な規模でも、見うけられるのである。

だが、ブルジョアジーに勝利するために、どこでも実質上同種の予備課程をへながらも、各国の労働運動は、それぞれ自分なりの流儀でこの発展をとげつつある。しかも、先進的な資本主義的大国は、組織された政治的潮流として自己の勝利を準備するために歴史から一五年の期間をあたえられたボリシェヴィズムよりも、はるかに急速にこの道をすすんでいる。第三インタナショナルは、一年という短期間にすでに決定的な勝利をかちとり、社会排外主義的な第二黄色インタナショナルを粉砕してしまった。その第二インタナショナルは、わずか二、三ヵ月まえまでは、第三インタナショナルとはくらべものにならないほど強力であったし、しっかりとした、強大なものに思われ、全世界のブルジョアジーから全面的な——直接間接の、物質的(閣僚の地位、パスポート、新聞)および思想的援助をうけていたのである。

いま肝心なことは、各国の共産主義者が、日和見主義と「左翼」的空論主義とにたいする闘争の基本的な原則的任務を十分意識的に考慮にいれると同時に、それぞれの国で、その国の経済、政治、文化、その民族構成(アイルランドなど)、その植民地、その宗教的区分などの独特な特徴におうじてこの闘争がとっている、またかならずとらざるをえない具体的特殊性を、十分意識的に考慮にいれることである。いまいたるところで第二インタナショナルにたいする不満が感じられ、ひろがり、高まっているが、これは、第二インタナショナルの日和見主義のためであるとともに、また第二インタナショナルが世界ソヴェト共和国をめざす闘争で革命的プロレタリアートの国際的戦術を方向づけることのできる、真に中央集権的な、真に指導的な中央部をつくることを解せず、その能力をもたないためである。闘争の戦術的準則を型にはめ、機械的に一律化し、画一化することにもとづいてこのような中央指導部を建設することはけっしてできないということを、はっきりと理解しなければならない。諸国民、諸国のあいだに民族や国家の差異があるかぎり——そして、こういう差異は、世界的な規模でプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)が実現されたのちでさえ、なお非常に長いあいだ存続するであろう——、すべての国の共産主義的労働運動の国際的戦術を統一するために必要なことは、多様性を取りのぞくことでもなく、民族的差異をなくすこと(それは、いまのところばかげた夢である)でも

なく、共産主義の基本的諸原則（ソヴェト権力とプロレタリアートの執権）を適用するにあたって、それを細部において正しく変更し、それを民族的および民族国家的な差異に正しく適応させ、適用することである。単一の国際的任務を解決し、労働運動内部の日和見主義と左翼的空論主義に勝利し、ブルジョアジーを打倒し、ソヴェト共和国とプロレタリア執権を樹立することに、それぞれの国が具体的に取り組むにあたって、民族的に特殊なもの、民族的に特有なものを調査し、研究し、探しだし、推測し、把握すること――まさにここに、すべての先進国（先進国に限らないが）が際会している歴史的時機の主要な任務がある。労働者階級の前衛を味方に引きよせ、彼らを議会主義に反対してソヴェト権力の味方に移らせ、ブルジョア民主主義に反対してプロレタリアートの執権の味方に移らせるうえで、主要なこと――もちろん、まだけっしてすべてのことではないが、しかし主要なこと――はすでになされた。いまや、すべての力とすべての注意を次の一歩に集中しなければならない。それは、それほど基本的でないように見える――また、ある見地からすれば実際にそうである――が、そのかわり、任務の実践的解決に実際にさらに近づく一歩である。すなわち、プロレタリア革命への移行あるいは接近の形態を探しだすということがそれである。

プロレタリア前衛は思想的に獲得された。これは主要なことである。これがなければ、勝利への第一歩さえ踏みだすことができない。だが、ここから勝利まではまだかなり遠い。前衛だけで勝利することはできない。階級全体が、広範な大衆が、前衛を直接に支持する立場をとるか、すくなくとも前衛にたいして好意的な中立をたもって、この前衛の敵をけっして支持しない立場をとるかしないかぎり、前衛だけを決戦に投入することは、ばかげたことであるばかりでなく、犯罪でもある。ほんとうに階級全体が、資本に抑圧されている勤労者のほんとうに広範な大衆が、このような立場に達するためには、宣伝だけ、扇動だけでは足りない。そのためには、これらの大衆自身の政治的経験が必要である。これは、あらゆる偉大な革命の基本法則であって、いまではロシアによってばかりでなく、ドイツによっても、驚くほど力づよく、あざやかに確証されている。教養がなく、往々読み書きのできないロシアの大衆ばかりでなく、教養が高く、ひとりのこらず読み書きのできるドイツの大衆もまた、決定的に共産主義へ方向を転換するためには、第二インタナショナルの騎士たちの政府のまったくの無力さ、まったくの無定見、まったくの頼りなさ、ブルジョアジーにたいするまったくの屈従、卑劣さを、プロレタリアートの執権に代わる唯一の選択として極端な反動

派（ロシアのコルニーロフ派[二〇五]、ドイツのカップ一味[二〇六]）の執権（ディクタツーラ）が避けられないことを、身をもって経験する必要があった。

国際労働運動の自覚した前衛、すなわち共産党、共産主義グループ、共産主義的潮流の当面の任務は、広範な（いまはまだ大多数の場合に眠っており、無関心で、因襲にとらわれ、不活発で、めざめていない）大衆を、この彼らの新しい立場にみちびいてゆくすべを知ることであり、もっと正確に言えば、自分の党を指導するばかりでなく、またこれらの大衆が新しい立場に近づき移ってゆく過程で彼らを指導するすべを知ることである。第一の歴史的任務（プロレタリアートの自覚した前衛をソヴェト権力と労働者階級の執権（ディクタツーラ）の味方に引きよせること）は、日和見主義と社会排外主義にたいして思想的および政治的に完全に勝利しなければ、解決できなかったが、いま当面の任務となっている第二の任務、革命における前衛の勝利を保障することのできる新しい立場に大衆をみちびいてゆくすべを知るという任務は、左翼的空論主義を一掃し、それの誤りを完全に克服し、それから脱却するのでなければ、これを果たすことができない。

プロレタリアートの前衛を共産主義の味方に引きよせることが問題となっていたあいだは（また、それがなお現に問題となっているかぎりでは）、そのあいだは、そのかぎりでは、宣伝が第一位に押しだされてくる。サークル根性のあらゆる弱点をもっているサークルでさえ、ここでは有用であり、実りの多い成果をもたらす。だが、大衆の実践的行動が問題となり、――もしこのような言いまわしが許されるならば――何百万という軍勢を配置し、その社会のすべての階級勢力を最後の決戦のために配備することが問題となるときには、そこではもはや宣伝の技能だけでは、「純粋な」共産主義の真理を繰りかえすだけでは、なんの役にも立たない。ここでは、まだ大衆を指導したことのない小グループのメンバーである宣伝家が実質上やっているように、千の単位で数えるべきではない。ここでは、何百万、何千万という単位で数えなければならない。ここでは、われわれが革命的階級の前衛を説得したかどうかを自問してみるだけでなく、さらにすべての階級――かならず、その社会の例外なくすべての階級――の歴史的に活動力ある勢力の配置が、決戦の機はすでに完全に熟したとみてよい状態になっているかどうか、すなわち、（一）われわれに敵対するすべての階級勢力が十分に混乱し、十分に同士討ちを演じ、その力にあまる闘争によって十分に無力化し、（二）すべての動揺的な、ぐらついた、不安定な中間分子、すなわち小ブルジョアジー、つまりブルジョアジーとは区

別された小ブルジョア的民主主義派が人民の面前で十分に正体を暴露し、その実践的破産によって十分に赤恥をさらし、(三) ブルジョアジーにたいする最も断固とした、一身をかえりみぬ勇敢な革命的行動を支持しようとする大衆的な気分が、プロレタリアートのあいだに生まれ、力づよく高まりはじめているような状態になっているかどうかを、自問してみなければならない。そうなっているときにこそ、革命の機は熟しているのである。そうなっているときにこそ、簡単に概略を述べた上述のすべての条件をわれわれが正しく考慮にいれ、時機を正しく選ぶならば、われわれの勝利は保障されている。

一方ではチャーチルらとロイド・ジョージら――これらの政治的タイプは、国によってごくわずかな違いはあるが、すべての国に存在する――とのあいだにある意見のくいちがい、つぎに、他方では、ヘンダソンらとロイド・ジョージらとのあいだにある意見のくいちがいは、純粋な、すなわち抽象的な共産主義、すなわち、まだ実践的、大衆的な政治行動をとるまでに成熟していない共産主義の見地からすれば、まったく重要でない、些細なことである。だが、大衆のこの実践的な行動の見地からすれば、この意見のくいちがいは、きわめて、きわめて重要である。これらの意見のくいちがいを考慮にいれること、これらの「僚友たち」のあいだの避けられない衝突、これらすべての「僚友たち」を全体として弱め、無力化する衝突が完全に成熟しきる時機を決定すること――この点にこそ、自覚した、確信のある思想的宣伝家であるにとどまらず、革命において大衆の実践的な指導者であろうとする共産主義者の全事業、全任務がある。ヘンダソンら(個々の人物の名まえをあげないとすれば、第二インタナショナルの英雄たち、社会主義者と自称している小ブルジョア的民主主義派の代表者たち)の政治権力の実現とその破綻を促進するためには、実践における彼らの不可避な破産――それは、大衆をまさにわれわれの精神で、まさに共産主義への方向で啓蒙する――を促進し、ヘンダソンら、ロイド・ジョージら、チャーチルらのあいだの(メンシェヴィキとエス・エル――カデット――帝政派のあいだ、またシャイデマン一味――ブルジョアジー――カップ一味のあいだ、等々の)避けられない軋轢(あつれき)、いがみあい、衝突、完全な分裂を促進するためには、そして、すべてこれらの「神聖な私有財産の支柱」のあいだの分裂が極点に達する時機を正しく選んで、プロレタリアートの断固たる攻勢によって彼らすべてを打ち破り、政治権力を獲得するためには――共産主義の思想にたいする最も厳格な忠誠と、あらゆる必要な実践上の妥協、迂回、協調、ジグザグ、退却、等々をおこなう能力とを結びつけ

なければならない。

一般に歴史は、とくに革命の歴史は、どんなにすぐれた政党、どんなに先進的な階級のどんなに自覚した前衛が頭にえがいているよりも、つねにいっそう内容に富み、多様で、多面的で、生きいきとしており、「手のこんだ」ものである。これは当然のことである。なぜなら、どんなにすぐれた前衛でも、何万人かの意識、意志、情熱、空想を言いあらわすだけであるのに、革命を実現するのは、人間のあらゆる能力が特別に高まり、緊張する時機に、最も激しい階級闘争によってかきたてられた何千万という人々の意識、意志、情熱、空想だからである。ここから、きわめて重要な二つの実践的結論がでてくる。革命的階級は、その任務を実現するためには、(政治権力を獲得したあとで、それを獲得するまえになしとげなかったことを、ときには大きな冒険やたいへんな危険をおかしてなしとげながら)社会活動の例外なくあらゆる形態あるいは側面に習熟することができなければならないということ、これが第一である。革命的階級は、一つの形態から他の形態への、どんなに急速で、思いがけない交替が起こっても、それに応じられるようでなければならないということ、これが第二である。

敵が現にもっているか、あるいはもっている可能性のあるあらゆる種類の武器、あらゆる戦闘手段や戦闘方法に習熟する準備をしないような軍隊の行動が、愚かなものであり、犯罪でさえあるということには、だれでも同意するであろう。だが、このことは、軍事よりも政治のほうにいっそうよくあてはまる。政治においては、将来のあれこれの条件のもとでどんな闘争手段がわれわれに使用できるようになるか、そしてわれわれに有利であるかを、まえもって知る可能性はいっそう少ない。他の諸階級の状態にわれわれの意志によらない変化が生じ、それが、われわれのとくに不得手な活動形態を日程にのぼせる場合、あらゆる闘争手段に習熟していなければ、われわれは大きな敗北を——ときには決定的な敗北さえ——なめるかもしれない。あらゆる闘争手段に習熟していれば、われわれが真に先進的な、真に革命的な階級の利害を代表しているかぎり、敵にとって最も危険な武器、最も迅速に致命的な打撃をあたえる武器を使用することが、なにかの事情でわれわれに許されないとしてさえ、われわれはまちがいなく勝利するであろう。経験の浅い革命家はしばしばこう考える。合法的な闘争手段は日和見主義的だ、その証拠にブルジョアジーはこの部面でとくにしばしば(革命的でない「平和な」時代には最も頻繁に)労働者をあざむき愚弄してきたではないか——非合法的な闘争手段こそ革命的だ、と。だが、これはまち

がっている。正しいのは、次のことである。たとえば、一九一四―一九一八年の帝国主義戦争のときには、最も自由な民主主義諸国のブルジョアジーが、戦争の強盗的性格について真実を語ることを禁止して、前代未聞のあつかましさと凶暴さで労働者をあざむいたが、そのような条件のもとで非合法的な闘争手段を用いる能力がないか、あるいは用いることを望まない（できないとは言わせない、欲しないと言え）党と指導者は、日和見主義者であり、労働者階級の裏切者である。だが、非合法的な闘争形態をあらゆる合法的な闘争形態と結合することのできない革命家は、まったくやくざな革命家である。すでに革命が勃発し燃えさかっているとき、たんなる熱中から、流行から、ときには立身出世のためにさえ、だれもかれも革命にくわわってくるとき、そういうときに革命家になるのはわけはない。こういうえせ革命家から「解放」されるために、プロレタリアートは、あとで、勝利したのちに、たいへんな苦労を、いわば殉教者の苦しみをなめなければならないであろう。あからさまな、公然たる、ほんとうに大衆的な、ほんとうに革命的な闘争の条件がまだないときに革命家である能力をもつこと、革命的でない、それどころかしばしばまったく反動的な機関のなかで、革命的でない情勢のもとで、また革命的な行動方法の必要をすぐには理解することのできない大衆のあいだで、革命の利益を守る（宣伝、扇動、組織によって）能力をもつこと、このほうがはるかに困難であり、はるかに尊い。大衆をほんとうの、決定的な、最後の、偉大な革命闘争へみちびいてゆく具体的な道、あるいは事件の特別の転換点を見いだし、探りだし、正確に決定する能力をもつこと――まさにここに、西ヨーロッパとアメリカの今日の共産主義の主要な任務がある。

その実例はイギリスである。われわれは、イギリスではほんとうのプロレタリア革命がどのくらい急速に燃えあがるか、いまはまだ眠っているきわめて広範な大衆を、どんなきっかけがなによりもよくめざめさせ、あおりたて、闘争へ駆りたてるかを、知ることはできないし――だれも、まえもって決定することはできない。だから、われわれは、(故プレハーノフがマルクス主義者であり、革命家であったときに好んで言ったように) 四本の足全部に蹄鉄が打ってあるように、われわれのすべての準備活動をすすめなければならない。議会の危機が「突破口をうがち」、「糸口になる」かもしれない。手のつけようがないほどもつれていて、ますます深刻になり、鋭くなっている植民地の帝国主義的矛盾から生じる危機が、糸口になるかもしれない。また、第三、第四、等々のなにかが糸口になるかもしれない。われわれが論じているのは、どんな闘争がイギリスのプロ

レタリア革命の運命を決するかということではない（どの共産主義者も、この問題に疑いをもってはいない。この問題は、われわれすべてにとって解決ずみであり、それもはっきり解決ずみである）。われわれが論じているのは、いまはまだ眠っているプロレタリア大衆をめざめさせて、運動に引きいれ、彼らを革命のまぎわまでみちびいてゆくきっかけのことである。たとえば、ブルジョア的なフランス共和国では、国際的にも国内的にも現在の百分の一も革命的でなかった情勢のもとで、反動軍閥の何千という恥しらずな陰謀の一つ（ドレフュス事件）のような、「思いがけない」、「瑣末な」きっかけがあっただけで、人民を内乱寸前にみちびいたことを、忘れないようにしよう。

イギリスの共産主義者は、議会選挙をも、イギリス政府のアイルランド政策、植民地政策、世界帝国主義政策のあらゆる迂余曲折をも、社会生活のその他のすべての分野、領域、側面をも、たえず、うまずたゆまず、一貫して利用し、そのすべてについて新しいやり方、共産主義的なやり方で、第二インタナショナル流にでなく、第三インタナショナル流に、活動しなければならない。私は、ここで議会選挙や議会闘争への「ロシア的な」、「ボリシェヴィキ的な」参加のやり方を紹介する時間も紙面ももたないが、それが西ヨーロッパの普通の議会運動とはまったく似もつかないものであったことは、外国の共産主義者にたいして断言することができる。このことから、しばしば次のような結論が引きだされている。「なるほど、君たちのロシアではそうだったろうが、われわれのところの議会主義はそれとは違う」と。この結論はまちがっている。世界中に共産主義者がおり、あらゆる国に第三インタナショナルの支持者がいるのは、古い社会主義的な、組合主義的な、サンディカリスト的な議会活動を、全面的に、あらゆる生活分野で、新しい共産主義的な活動につくりかえるためである。ロシアの選挙にも、日和見主義的なもの、純ブルジョア的なもの、打算的なもの、資本家のペテンふうのものが、いつでもありあまるほどあった。西ヨーロッパとアメリカの共産主義者は、新しい、ありきたりのものでない、日和見主義的でない、立身出世主義的でない議会主義をつくりだす仕方を学びとらなければならない。つまり、共産主義者の党は自分のスローガンをかかげなければならず、ほんとうのプロレタリアが、まったく打ちひしがれた未組織の貧民の助けをかりてビラをまき、くばり、労働者の住居、農村プロレタリアや僻地（さいわいなことに、ヨーロッパでは、僻地の農村がわが国よりははるかに少なく、イギリスではごく少ない）の農民の小屋をまわって歩き、どんなに庶民的な居酒屋にももぐりこみ、どんなに庶民的な組合や

団体や折りにふれての寄合いにもはいりこみ、学者ぶらずに（またあまり議員ぶらずに）民衆と話をし、「議席」などすこしも追いもとめず、いたるところで思想をめざめさせ、大衆を引きつけ、ブルジョアジーの言質をとらえ、彼らがつくった機構、彼らのきめた選挙、彼らがおこなった全人民への呼びかけを利用し、選挙のとき以外には（もちろん、大ストライキのときは別である。大ストライキのときには、われわれのところでは同じような全人民的な扇動機構がいっそう強力に活動した）けっしてやれない（ブルジョアジーの支配のもとでは）ほど、人民にボリシェヴィズムを知らせなければならない。西ヨーロッパとアメリカでこういうことをするのは、たいへん骨がおれることであり、非常に、非常に骨がおれることである。しかし、そうすることはできるし、またそうしなければならない。そもそも共産主義の任務を骨をおらずに解決することはできないし、われわれは、ますます多様になり、社会生活のあらゆる部門とますます緊密に関連し、一部門また一部門、一分野また一分野と、つぎつぎにブルジョアジーの手からたたかいとってゆく実践的諸任務の解決に、骨をおらなければならないからである。

この同じイギリスでは、同じように新しいやり方で（社会主義的なやり方ではなく、共産主義的なやり方で、改良主義的にではなく、革命的に）、軍隊のなかで、また「自分の」国家の被抑圧・非同権諸民族（アイルランド、植民地）のあいだで、宣伝、扇動、組織の活動に取り組まなければならない。なぜなら、一般に帝国主義の時代には、とくに、諸国民を疲弊させ、真実（すなわち、数千万の人間が殺され、かたわにされたのは、イギリスとドイツの強盗のどちらがよけいに諸国を略奪するかという問題を解決するだけのためであったということ）にたいして急速に人人の目をひらかせた戦争を経てきた現在では、社会生活のこれらすべての分野は、可燃材料がとくにいっぱいになっており、紛争や危機のきっかけ、階級闘争の激化のきっかけを、とくに数多くつくりだしているからである。われわれは、いま世界的な経済的および政治的危機の影響で、あらゆる国で四方八方に飛び散っている無数の火花のうちのどの火花が火の手をあげる――大衆をとくにめざめさせるという意味で――ことができるかを知らないし、また知ることもできない。だから、われわれは、自分の新しい共産主義的な原理によって、たとえきわめて古い、陳腐な、一見したところ見込みがないような部面であろうと、ありとあらゆる活動部面に「加工する」仕事にとりかからなければならない。なぜなら、そうしなければ、われわれは自分の任務を果たすことができず、全面的な活動をすることも

なく、あらゆる種類の武器に習熟することもなく、ブルジョアジー（彼らは、社会生活のあらゆる側面をブルジョア流に整備したが、いままたブルジョア流に攪乱してしまった）にたいする勝利を準備することもなく、この勝利のあとで、きたるべき全生活の共産主義的改造を準備することもないだろうからである。

ロシアにプロレタリア革命が起こり、この革命がブルジョアジーや俗物どもには思いがけなかった、国際的な規模の勝利をおさめたあとで、いまや全世界は別のものになり、ブルジョアジーもまたいたるところで別のものになってしまった。ブルジョアジーは「ボリシェヴィズム」におびえて、気も狂わんばかりに腹を立てている。だからこそ、彼らは、一方で事件の進展を速めるとともに、他方では暴力でボリシェヴィズムを押しつぶすことに注意を集中しており、そのために他の多くの部面で自分の立場を弱めている。すべての先進国の共産主義者は、この事情を二つながら自分の戦術のなかで考慮にいれなければならない。

ロシアのカデットとケーレンスキーが——とくに一九一七年四月以後、またそれにもまして一九一七年の六月と七月に——ボリシェヴィキを気ちがいじみた仕方で迫害したとき、彼らは「塩をきかせすぎた」。何百万部ものブルジョア新聞がさまざまにボリシェヴィキを非難してわめきたて、かえって大衆がボリシェヴィズムを評価するのを手伝った。また新聞以外にも、社会生活全体がボリシェヴィズム論争でもちきりであったのは、まさにブルジョアジーの「熱心」のおかげではないか。いま国際的規模で、あらゆる国の百万長者は、われわれが心から彼らにお礼を言わずにいられないようなふるまいをしている。彼らは、ケーレンスキー一派がやったのと同じように熱心にボリシェヴィズムを迫害している。そのさい、彼らは迫害にあたって、ケーレンスキーと同じように「塩をきかせすぎて」おり、同じようにわれわれの「手伝いをしている」。フランスのブルジョアジーは、ボリシェヴィズムを選挙運動の中心問題とし、比較的に穏健な、あるいは動揺的な社会主義者をボリシェヴィズムだと言ってののしっており、——アメリカのブルジョアジーは、まったく血迷って何千もの人々をボリシェヴィズムの嫌疑でつかまえ、ボリシェヴィキの陰謀という報道をいたるところにまきちらして恐怖の雰囲気をつくりだしており、——世界で「いちばん堅実な」イギリスのブルジョアジーでさえ、あれほどの知恵と経験をもちながら、信じられないほどばかげたことをやっており、豊富な資金をもった「反ボリシェヴィズム協会」を設立し、ボリシェヴィズムにかんする特別の文献をつくり、ボリシェヴィズムとのたたかいのために、たくさんの学者、扇動

家、坊主を余分に雇いいれているが、——われわれは、資本家諸君に頭をさげてお礼を言わなければならない。彼らは、われわれのために働いてくれているのである。彼らは、われわれが大衆にボリシェヴィズムの本質と意義の問題に関心をもたせるのを手伝ってくれているのである。しかも、彼らはこのようにしかふるまいようがない。なぜなら、ボリシェヴィズムを「黙らせ」、その「息の根をとめる」ことには、すでに失敗しているからである。

だが同時に、ブルジョアジーは、ボリシェヴィズムのほとんど一つの側面しか、蜂起、強力、テロルしか見ていない。そこで、ブルジョアジーは、とくにこの部面で反撃と抵抗を準備することにつとめている。個々の場合に、個々の国で、ある短い期間、彼らはそれに成功するかもしれない。そういう可能性があることを考慮にいれなければならない。だが、彼らがそれに成功しても、われわれとしてはなにも恐れることはない。共産主義は、社会生活の例外なしにすべての側面から「成長する」ものであり、その芽ばえはくまなくどこにでもあり、この「伝染病」(ブルジョアジーとブルジョア警察のお気にいりの、そして彼らにとっていちばん「気持のいい」比喩をつかえば)はしっかりと身体に食いこみ、全身を完全におかしてしまっている。とくに念入りに一つのはけ口を「ふさいでも」、「伝染病」は別な、ときにはまったく思いがけないはけ口を見つけるであろう。生活は自分の意志をつらぬくものである。ブルジョアジーが悪あがきをし、気も狂わんばかりに逆上し、塩をきかせすぎ、ばかなことをやり、ボリシェヴィキにまえもって報復し、このうえなお何百、何千、何十万ものあすのボリシェヴィキや、きのうのボリシェヴィキを皆殺しにしようとつとめるなら(インド、ハンガリー、ドイツなどで)、そうするがよい。ブルジョアジーがそのようにふるまうのは、歴史から滅亡の宣告を受けたすべての階級がしてきたとおりにふるまっているのである。共産主義者は、未来はどのみち自分のものだということを知らなければならない。だから、われわれは、偉大な革命闘争に最大の情熱をかたむけると同時に、ブルジョアジーの気ちがいじみた悪あがきをだれよりも冷静におちついて評価することができるのである(またそうしなければならない)。ロシア革命は、一九〇五年には無残にも打ち破られた。ロシアのボリシェヴィキは、一九一七年七月に打ち破られた。ドイツの共産主義者は、シャイデマンとノスケがブルジョアジーや帝政派の将軍たちとぐるになって仕かけた巧妙な挑発と、たくみな策謀とにかかって、一万五〇〇〇名以上も殺された。フィンランドとハンガリーでは、白色テロルが荒れくるっている。しかし、どんな場合にも、あらゆる国で、

共産主義は鍛えられ、成長している。共産主義の根は深いので、迫害もそれを弱め、無力にすることなく、かえって強めるのである。われわれが勝利にむかって、もっと確信をもって、もっとしっかりとすすむのに、一つだけ足りないものがある。すなわち、戦術においては最大限の柔軟性を示さなければならないことを、すべての国のすべての共産主義者がいたるところで、徹底的に考えぬいて認識することである。とくに先進諸国ですばらしく成長している共産主義にいま足りないものは、この認識と、この認識を実践に適用する能力とである。

カウツキー、オットー・バウアーその他のような、博学ならびないマルクス主義者と、社会主義に一身をささげた第二インタナショナルの指導者たちの身のうえに起こったことは、有益な教訓になることができよう（またそうならなければならない）。彼らは、柔軟性のある戦術が必要なことを十分に認識していた。彼らはマルクスの弁証法を学び、ひとにも教えた（そして、彼らがこの面でなしとげたものの多くは、社会主義文献の貴重な成果として永久に残るであろう）。だが、彼らは、この弁証法を適用するにあたって、大きな誤りをおかし、あるいは実践のうえでまったくの非弁証法論者に、諸形態が急速に変化し、古い形態に新しい内容が急速に盛られてゆくのを考慮にいれることのできない人になってしまったため、彼らの運命は、ハインドマン、ゲード、プレハーノフの運命にくらべてたいしてうらやましいものではなくなったのである。彼らが破産した基本的な原因は、彼らが労働運動と社会主義の成長の一つの特定の形態だけに「見とれて」、それが一面的なものであることを忘れ、客観的条件のために不可避となった急激な変転を見るのを恐れ、単純な、棒暗記した、一見争う余地のない真理——三は二より大きい——を繰りかえしつづけたところにある。しかし、政治は算術よりも代数に似ており、さらに初等数学よりも高等数学にいっそうよく似ている。現実においては、社会主義運動のすべての古い形態に、新しい内容が盛りこまれ、そのため、数字の前に新しい記号、「マイナス」が現われたのである。ところが、わが賢人たちは、「マイナス三」は「マイナス二」よりも大きいと、自分にも他人にもかたくなに説きつづけた（また現につづけている）。

共産主義者にあってもこれと同じ誤りが、ただ別な側面から繰りかえされることのないよう、われわれはつとめなければならない。もっと正確に言えば、「左翼」共産主義者がおかしている——ただ別な側面から——この同じ誤りを、できるだけ速やかに訂正し、できるだけ速やかに、できるだけ身体に苦痛のないように根絶することにつとめな

ければならない。左翼的な空論主義もやはり誤りである。右翼的な空論主義だけがそうなのではない。もちろん、共産主義内の左翼的な空論主義の誤りは、いまのところ、右翼的な空論主義（すなわち社会排外主義とカウツキー主義）の誤りにくらべると、千分の一も危険でなく、重大でもない。だが、それはただ、左翼共産主義がまったく若い、やっと生まれたての潮流だからにすぎないのだ。だからこそ、この病気は、ある条件のもとではたやすく治療することができるし、最大限の精力をかたむけてその治療にとりかからなければならないのである。

古い諸形態は破裂してしまった。なぜなら、それに盛りこまれた新しい内容——反プロレタリア的、反動的な内容——が度はずれに発展をとげたからである。現在、われわれの活動のもっている内容は、国際共産主義の立場からみてきわめて堅固な、きわめて力づよい、きわめて強大なもの（ソヴェト権力のため、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のための活動）なので、この内容は、新しい形態であれ古い形態であれ、どんな形態をとっても現われることができるし、また現われなければならない。またそれは、あらゆる形態を、新しい形態ばかりでなく古い形態をも、つくりかえ、克服し、自分に従属させることができるし、またそうしなければならない。——それは、古いものとの宥和をはかるためではなく、新しいものも古いものも、ありとあらゆる形態を、共産主義の完全で最後的な、決定的で確固不動の勝利をもたらす武器とするためである。

共産主義者は、労働運動と社会発展一般を、できるだけまっすぐな、できるだけ近い道をとおってソヴェト権力の世界的な勝利とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とに向かわせるよう、全力をかたむけなければならない。これは、議論の余地のない真理である。だが、ほんのささやかな一歩でも——同じ方向への一歩と見えようとも——ゆきすぎると、真理は誤りに変わるであろう。ドイツとイギリスの左翼共産主義者が言っているように、われわれはただ一本の道だけを、まっすぐな道だけを認める、われわれは迂回、協調、妥協を許さない、と言うならば、それだけでもう誤りであり、この誤りは共産主義に非常に重大な害をおよぼしかねないし、いくぶんはすでにおよぼしたし、いまもおよぼしている。右翼的な空論主義は、古い形態だけを認めることを固執して、新しい内容に気がつかなかったため、徹底的に破産してしまった。左翼的な空論主義は、一定の古い形態を無条件に否定することを固執して、新しい内容がありとあらゆる形態をつうじて自分の道を切りひらいてゆくことを見ず、すべての形態に習熟し、できるかぎり速やかに一つの形態を他の形態で補い、一つの形態を他の形態と交

瞀させ、われわれの階級によって、またはわれわれの努力によって引きおこされたものでない、こうしたいっさいの変転に自分の戦術を適応させるすべを学びとることが共産主義者としてのわれわれの義務であることを見ないのである。

世界革命は、帝国主義世界戦争の惨禍、醜さ、いまわしさと、この戦争によって生じた八方ふさがりの状態によって、きわめて強力に推進され、促進されており、——この革命は、すばらしく多種多様な形態の交替をともない、きわめて教訓的な仕方であらゆる空論主義を実践的に論駁しながら、めざましい速度で、広く深く発展している。だから、国際共産主義運動が「左翼」共産主義の小児病から速やかに、完全に治癒されることを期待するには、十分な根拠があるのである。

一九二〇年四月二七日

補論

全世界の帝国主義者は、プロレタリア革命にたいする復讐として、わが国を略奪したし、自分で自国の労働者にあたえたあらゆる約束を無視して、その略奪と封鎖をいまもつづけているのだが、そのわが国でわれわれの出版所が私のこの小冊子を出版する任務をまだ果たすことができずにいるあいだに、外国から追加の資料が手にはいった。私は、この小冊子では、政論家の走り書きした覚え書以上のものをあたえるつもりはけっしてないので、いくつかの点に簡単にふれてみることにする。

一　ドイツ共産主義者の分裂

ドイツの共産主義者の分裂は事実となった。「左翼」または「原則的反対派」は、「共産党」とは別個の「共産主義労働者党」を結成した。イタリアでも、見たところ事態は分裂にむかってすすんでいるようである。見たところ、と言うのは、私がもちあわせているのは、左翼の新聞『ソ

ヴェト』《Il Soviet》の新着分（第七号と第八号）だけだからである。この二つの号では分裂の可能性と必要が公然と論議されており、そのさい、いまのところイタリア社会党に属している「アステンシオニスタ」分派（すなわちボイコット派、つまり議会参加の反対者）の大会のことも論じられている。

「左翼」すなわち反議会主義者（部分的には、また反政治主義者、すなわち政党と労働組合内活動の反対者でもある）との分裂は、「中央派」（すなわちカウツキー派、ロンゲ派、「独立派」など）との分裂と同じように、国際的な現象となるおそれがある。そうなるなら、なるがよい。とにかく、分裂は混乱よりはましである。混乱は、党の思想的、理論的、革命的な成長、党の成熟を妨げ、また、党の一致結束した、真に組織的な、真にプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を準備する実践活動をも妨げる。

「左翼」には、一国的および国際的な規模で実際に自分をためしてみさせるがよい。鉄の規律をもった厳格に中央集権的な党なしに、また政治活動と文化活動のあらゆる部面、部門、種類に習熟する能力をもたずに、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を準備しようと（ついで実現しようと）するなら、そうするがよい。実践の経験が彼らを急速に教育するであろう。

ただ、心から、誠実にソヴェト権力とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を支持している労働運動のすべての参加者が単一の党に合同することは、近い将来にかならず起こるべきことであり、必要なことであるが――、「左翼」との分裂のためにこの合同に支障をきたすことのないよう、あるいはその支障をできるだけ少なくするように、全力をかたむけなければならない。ロシアでは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をめざす直接の大衆闘争が起こるはるか以前に、ボリシェヴィキが一五年にわたって、メンシェヴィキ（すなわち日和見主義者と「中央派」）にたいしても「左翼」にたいしても系統的、徹底的にたたかったことは、ボリシェヴィキの特別の好運であった。ヨーロッパとアメリカでは、いまこれと同じ仕事を「強行軍」でやらなければならない。個々の人物、とくに指導者を気どってやりそこなった人々のうちには、いつまでも（彼らにプロレタリア的規律と「自分にたいする正直さ」が足りないなら）自分の誤りを固執する者がいるかもしれないが、労働者大衆は、機が熟すれば、たやすく急速にみずから団結するであろうし、またソヴェト制度とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を実現する能力をもった単一の党に、すべての誠実な共産主義者を統合するであろう。*

* 「左翼」共産主義者、反議会主義者と一般の共産主義者と

が将来合同する問題については、なお次のことを述べておこう。私がドイツの「左翼」共産主義者の新聞と一般の共産主義者の新聞について知りえたかぎりでは、前者には、後者よりもうまく大衆のあいだで扇動することができるという長所がある。同じようなことを、私はボリシェヴィキ党の歴史上でも再三観察した、――ただ、それはもっと小さい範囲で、個々の地方組織のなかに限られ、全国的な規模のものではなかった。たとえば、一九〇七―一九〇八年に「左翼」ボリシェヴィキは、ときには、あちこちで、われわれよりもうまく大衆のあいだで扇動をおこなった。これは、一部は、革命的時機には、あるいは革命の記憶がまだ生まなましいときには、否定「一点ばり」の戦術で大衆に近づくほうがやさしいという事情によるものである。しかし、だからといって、これは、このような戦術が正しいという論拠にはならない。いずれにしても、いささかの疑いもいれないのは、共産党が実際に革命的階級、プロレタリアートの前衛、先進部隊となることを望み、なおそのうえに、プロレタリアだけでなく、非プロレタリアの広範な大衆、勤労被搾取大衆をも指導することを学ぼうと望むなら、都市、工場の「住人」にとっても、農村にとっても、できるだけとりつきやすい、できるだけわかりやすい、できるだけ明瞭で、生きいきとしたやり方で宣伝し、組織し、扇動することができなければならないということである。

二　ドイツの共産主義者と独立派

私はこの小冊子のなかで、共産主義者と独立社会民主党の左翼との妥協は、共産主義にとって必要であり、有益であるが、その実現は容易ではないだろうという意見を述べておいた。その後に私が入手した数号の新聞は、このどちらのことをも裏書きした。ドイツ共産党中央委員会の機関紙『赤旗』の第三二号（《Die Rote Fahne》, Zentralorgan der Kommunistischen Partei Deutschlands, Spartakusbund, 26. III. 1920）には、カップ＝リュトヴィッツの軍人「一揆」（陰謀、冒険）と「社会主義政府」との問題にかんするこの中央委員会の「声明」がのっている。この声明は、基本的な前提からみても、実践的な結論からみても、まったく正しい。基本的な前提は、要するに、「都市労働者の多数者」が独立派を支持しているから、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のための「客観的な基礎」はいまのところないということである。そして結論は、「ブルジョア的・資本家的諸政党を除外した社会主義」政府にたいして「忠誠な反対派」となる（すなわち「強力による打倒」の準備を放棄する）という約束である。

この戦術が基本的に正しいものだということは、疑いが

ない。だが、この定式のちょっとした不正確な点にこだわるべきでないとしても、やはり、次のことを黙過するわけにはいかない。すなわち、社会主義の裏切者の政府を（共産党の公式の声明のなかで）「社会主義」政府とよぶことは許されないし、また、シャイデマンらの党も、カウツキー＝クリスピーン諸氏の党も小ブルジョア民主主義党なのに、「ブルジョア的・資本家的諸政党」を除外するなどと述べてはならず、声明の第四節のようなことを書いてはならないということである。この第四節は、次のようになっている。

「……プロレタリア大衆をさらにいっそう共産主義の味方に獲得するうえで、政治的自由が無制限に利用できるような、そして、ブルジョア民主主義が資本の執権として現われることができないような状態が、プロレタリア執権の発展の見地からみて非常に大きな重要性をもっている。……」

このような状態はありえない。小ブルジョア的な指導者たち、すなわちドイツのヘンダソンら（シャイデマンら）とスノーデンら（クリスピーンら）はブルジョア民主主義の枠からぬけでてはおらず、またぬけでることもできないし、つぎにそのブルジョア民主主義はどうかといえば、これは資本の執権とならざるをえないのである。共産党中央委員会がまったく正しく追求してきた実践的な成果をかちとる立場からすれば、こういう原則的にまちがった、政治的に有害なことをけっして書くべきではなかった。実践的な成果をかちとるためには、こう言えば事が足りたであろう（議会ふうの礼儀を守りたければ）。都市労働者の多数者が独立派に従っているかぎり、われわれ共産主義者は、これらの労働者が「自分たちの」政府をもった経験にもとづいて、彼らの最後の小ブルジョア民主主義的（すなわち、やはり「ブルジョア的、資本家的」な）幻想を克服するのを妨げることはできない、と。妥協の理由づけとしてはこれで十分である。妥協は現実に必要であり、そしてその妥協は、都市労働者の多数者が信頼している政府を暴力で打倒する試みを、ある期間さしひかえることでなければならない。しかし、公式の議会的礼儀の枠に縛られない日常の大衆的な扇動では、もちろん、次のようにつけくわえてもよいであろう。シャイデマン派のような悪党、カウツキー＝クリスピーン派のような俗物どもに、彼ら自身がどれほどばかにされているか、また彼らが労働者をどれほどばかにしているかを、実地にさらけださせるがよい。彼らの「きれいな」政府は、社会主義、社会民主主義、その他の種類の裏切り社会主義のアウゲイアスの畜舎を「掃除」する仕事を、「だれよりもきれいさっぱり」やってくれるだ

ろう、と。

「ドイツ独立社会民主党」の現指導者たち（彼らはすでにいっさいの影響力を失っているかのように言う者があるが、それはまちがいであって、共産主義者だと自称して、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を「支持する」ことを約束したハンガリーの社会民主主義者よりも、彼らのほうがプロレタリアートにとって実際にいっそう危険である）の正体は、ドイツのコルニーロフ一揆、すなわちカップ氏とリュトヴィッツ氏のクーデタのときにまたまた明るみにだされた。* ささやかな、しかし明瞭な例証をあたえているのは、一九二〇年三月三〇日付の『フライハイト』（独立社会民主党の機関紙、『自由』）にのった、カール・カウツキーの小論文『決定的な瞬間』（《Entscheidende Stunden》とアルトゥール・クリスピーンの小論文『政治情勢によせて』（前掲紙、一九二〇年四月一四日）である。これらの諸君は、革命家としてものごとを考えたり、判断することが絶対にできない。彼らは泣虫の小ブルジョア民主主義者であって、彼らが自分でソヴェト権力とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の支持者だと言明するとすれば、プロレタリアートにとっての危険は千倍も大きい。なぜなら、自分ではプロレタリアートを助けていると「心から」確信していながら、……実際には困難な、危険な瞬間にはいつもかならず裏切行為をやるだろうから！　じっさい、共産主義者に宗旨替えしたハンガリーの社会民主主義者が、臆病と無定見とから、ハンガリーのソヴェト権力の状態を絶望的なものと考え、協商国の資本家と協商国の死刑執行人の手先の面前ですすり泣きをはじめたときも、彼らはプロレタリアートを「助け」たいと思っていたのだ。

＊　ちなみに、これは、オーストリア共産党のすばらしい機関紙『赤旗』の一九二〇年三月二八日号と三〇日号で、きわめてはっきりと、簡潔に、正確に、マルクス主義的に解明されている（『ローテ・ファーネ』[103]、ウィーン、一九二〇年、第二六六号、第二六七号、L・L『ドイツ革命の新段階』）。

三　イタリアのトゥラーティ一派

さきにあげたイタリアの新聞『ソヴェト』の数号は、私がこの小冊子で、こういう党員、それどころかこういう議員グループまで党の隊列にいれているイタリア社会党の誤りについて述べたことを、完全に裏書きしている。さらにいっそうこれを裏書きしているのは、イギリスのブルジョア自由主義新聞『マンチェスター・ガーディアン』のローマ特派員のような局外の証人である。彼は、同紙の一九二〇年三月一二日号にトゥラーティとのインタビューをのせ

ている。

「……トゥラーティ氏の考えでは」、とこの特派員は書いている、「イタリアでは、革命的な危険は、いわれのない不安を呼びおこすようなものではない。マッシマリスタ(10)がソヴェト理論の火をもてあそんでいるのは、大衆を高ぶった、興奮した気分に引きとめておくためにすぎない。だが、これらの理論は、まったく伝説的な観念であり、実用には役だたない未熟な綱領である。それは、労働する諸階級に期待をたもたせておく役にしか立たない。この理論をプロレタリアの目をくらますおとりにつかっている当の連中自身、労働者階級が彼らの幻想と彼らのお気にいりの神話への信仰とを捨てる時を引きのばすために、若干の、往々にしてとるにたりない経済的改良をかちとるための日常闘争をおこなうことをよぎなくされている。最近の郵便局と鉄道庁のストライキにいたるまで、あらゆる規模の、またあらゆる口実によるストライキがつぎつぎと起こっているのは、そのためである。――これらのストライキは、そうでなくても困難な国の状態をさらに困難にしている。わが国は、アドリア海問題にからむ困難のためにいらだっており、外債と紙幣の濫発によって押しつぶされている。それでも、この国は、労働の規律を採用する必要をまだすこしもさとっていない。労働の規律だけが秩序と繁栄を回復することができるのに。……」

トゥラーティ自身も、イタリアにおける彼のブルジョア的な擁護者、共犯者、激励者たちもおそらくは隠蔽し美化しているらしい真実を、このイギリスの特派員がはからずも洩らしたことは、明々白々である。トゥラーティ、トレーヴェス、モディリアーニ、ドゥゴーニ一派の諸氏の思想と政治活動は、実際にこのとおりであり、まさにこのイギリスの特派員がえがいているとおりであるというのが、その真実である。これは、徹頭徹尾、裏切社会主義である。賃金奴隷の状態にあって、資本家を儲けさせるために働いている労働者にとって、秩序と規律を擁護するだけでなんの役に立とう！　われわれロシア人は、こんなメンシェヴィキ的な言い草は百も承知である！　大衆がソヴェト権力に賛成しているとは、なんと貴重な告白であることか！　自然発生的に拡大してゆくストライキの革命的な役割を理解しないとは、なんという愚鈍さ、なんというブルジョア的な低劣さであることか！　そうだ、そうだ、イギリスのブルジョア自由主義新聞の特派員は、トゥラーティ一派の諸氏におせっかいな世話をやいて、同志ボルディガと新聞『ソヴェト』に拠る彼の友人たちの要求の正しさをみごとに裏書きしたのである。同志ボルディガとその友人たちは、

イタリア社会党が実際に第三インタナショナルを支持しようと思うなら、トゥラーティ一派の諸氏を自分の隊列からあほうばらいにして、名実ともに共産党になれ、と要求しているのである。

四　正しい前提から引きだされたまちがった結論

だが、同志ボルディガとその「左翼的な」友人たちは、トゥラーティ一派の諸氏にたいする正しい批判から、議会への参加は総じて有害であるというまちがった結論を引きだしている。イタリアの「左翼」は、この見解を擁護するために、これといった論拠はいささかもあげることができないでいる。彼らは、ブルジョア議会を真に革命的、共産主義的に、プロレタリア革命の準備にとって争う余地なく有益な仕方で利用した国際的な模範をまるで知らないのである（あるいは忘れようとつとめている）。彼らは、議会活動の「新しい」利用の仕方などまるきり考えずに、「古い」、非ボリシェヴィキ的な利用の仕方についてわめきたて、際限もなくそれを繰りかえしている。

この点にこそ彼らの根本的な誤りがある。共産主義は、議会の舞台だけでなく、あらゆる活動舞台で、第二インタナショナルの伝統と根本的に手をきった原則的に新しいものを（同時に第二インタナショナルがあたえたよいものを保持し、発展させながら）もちこまなければならない（長期にわたって、ねばりづよく、頑強に骨をおらなければ、これをもちこむことはできないであろう）。

たとえば、ジャーナリズムの活動をとってみよう。新聞、小冊子、ビラは、宣伝、扇動、組織という欠くことのできない仕事を果たしている。ジャーナリズムの機構がなければ、多少とも文明的な国では、大衆運動はなにひとつやっていけない。「指導者」に反対してどんなにわめきたてようと、指導者の影響から大衆の純潔を守るとどんなに誓約しようと、ブルジョア・インテリゲンツィア出身者をこの仕事につかう必要をまぬかれるわけではなく、資本主義のもとでこの仕事がおこなわれるブルジョア民主主義的、「所有者的な」雰囲気と環境をまぬかれるわけではない。プロレタリアートがブルジョアジーを打倒してから、プロレタリアートが政治権力を獲得してから二年半もたっているのに、われわれの周囲には、大量な（農民や手工業者の）ブルジョア民主主義的、所有者的関係のこの雰囲気、この環境が見られるのである。

議会活動とジャーナリズムは、それぞれ別々の活動形態である。双方の分野の働き手が真の共産主義者であり、プロレタリア的大衆党の真の党員であるならば、どちらの場

合にも活動の内容は共産主義的なものになることができるし、またならなければならない。だが、どちらの分野でも――また、資本主義のもとでの、さらに資本主義から社会主義への過渡期のどんな活動部面でも――、ブルジョア出身者を自分の目的に利用するため、ブルジョア・インテリゲンツィアの偏見と影響に打ちかつため、小ブルジョア的な環境の抵抗を弱める（やがてはこの環境を完全に改造する）ためにプロレタリアートが克服し解決しなければならない困難や独特な任務を避けるわけにはいかない。

一九一四―一九一八年の戦争前に、われわれは、きわめて「左翼的な」無政府主義者、サンディカリストその他が、議会制度をこきおろし、ブルジョア的俗悪におちいった社会主義代議士たちをあざわらい、その立身出世主義を糾弾し等々しておきながら、彼ら自身がジャーナリズムをつうじて、サンディカ（労働組合）内の活動をつうじて、同様なブルジョア的な立身出世をした実例を、あらゆる国で真にありあまるほど見たではないか？　フランスに限ってみても、ジュオーやメランらの諸氏の例は典型的ではないか？

労働運動内部のブルジョア民主主義的影響とたたかうという困難な任務を、このような「単純な」、「安易な」、自称革命的な方法で「解決」しようと考えながら、実際には、自分の影におびえて逃げだし、困難に目を閉ざすだけであり、口さきだけで困難からのがれようとしているところにこそ、議会制度への参加を「否定」することの幼稚さがある。まったく恥しらずの立身出世主義、議員の地位のブルジョア的利用、議会活動のはなはだしい改良主義的歪曲、俗悪な小市民的因襲――これらすべては、資本主義がいたるところで、労働運動の外部だけでなく内部でも生みだしている、ありふれた、広くゆきわたった特徴であることは、疑いをいれない。しかし、資本主義と資本主義がつくりだすブルジョア的な環境（これは、ブルジョアジーが打倒されたあとでも、きわめて徐々にしか消えてゆかない。というのは、農民がたえずブルジョアジーを復活させるからである）は、かたちのうえではわずか違っていても、実質的には同じブルジョア的立身出世主義、民族的排外主義、小市民的俗悪さ、等々を、文字どおりすべての活動分野と生活分野で生みだしている。

親愛なボイコット主義者、と反議会主義者よ、君たちは自分では「おそろしく革命的」だと思っているが、実際には君たちは、労働運動内部のブルジョア的影響との闘争の比較的に小さな困難におじけてしまったのだ。ところが、君たちが勝利をおさめたとき、すなわちプロレタリアートがブルジョアジーを打倒して、政治権力を獲得したときに

は、この同じ困難が、もっと大きな、はるかに大きな規模で生みだされるだろう。君たちは、君たちがきょう当面している小さな困難にこどものようにおじけてしまって、あすとあさってにはるかに大きな規模で現われてくる同じ困難を克服する仕方を、ぜひとも学習し、習得しなければならないことがわからない。

ソヴェト権力のもとでは、君たちのプロレタリア党にも、われわれのプロレタリア党にも、もっと多くのブルジョア・インテリゲンツィア出身者がもぐりこむであろう。彼らは、ソヴェトにも、裁判所にも、行政機関にも、這いこむであろう。なぜなら、資本主義がつくりだした人的材料によらずに、共産主義を建設することはできないからである。なぜなら、ブルジョア・インテリゲンツィアを追放し、一掃することは不可能であって、彼らに打ちかち、彼らをつくりかえ、同化し、再教育しなければならないからである。それはちょうどプロレタリア自身をも、長期にわたる闘争のなかで、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を基盤として再教育しなければならないのと同じことである。プロレタリアは、一挙に、奇跡や、聖母のお告げや、スローガン、決議、布告の指図によって自分自身の小ブルジョア的な偏見を脱するわけではなく、大量の小ブルジョア的影響との長期にわたる困難な大衆闘争をつうじてのみ、それを脱するのである。反議会主義者が、いまあれほど高慢に、あれほど横柄に、あれほど軽率に、あれほどこどもっぽく、あっさり放棄している任務――その同じ任務が、ソヴェト権力のもとで、ソヴェトの内部に、ソヴェト行政機関の内部に、ソヴェト「弁護士団」の内部に復活しつつある(われわれはロシアでブルジョア弁護士業を廃止したし、そしてそれを廃止したことは正しかったが、それが、わが国で「ソヴェト」「弁護士団(一〇二)」を隠れみのにして復活しつつある)。ソヴェト技師たちの内部、ソヴェト教師たちの内部、ソヴェトの工場で働く特権的な、すなわち最も熟練した、最もいい地位にある労働者たちの内部に、ブルジョア議会制度につきものの、文字どおりすべての否定的な特徴がたえず復活しているのが見られるが、われわれは、プロレタリア的な組織性と規律をもって、繰りかえし、倦まずたゆまず、長期にわたり、頑強にたたかうことによってはじめて、この害悪を――徐々に――克服しつつある。

もちろん、ブルジョアジーの支配のもとでは、自分の党、すなわち労働者の党の内部にあるブルジョア的な習慣に打ちかつことは、非常に「困難」である。ブルジョア的偏見によって手のつけられないほど腐らされた、おきまりの議会指導者を党から放逐することは「困難」である。絶対に必要な数の(ごく限られているとはいえ、ある数の)ブル

ジョア出身者をプロレタリア的規律に従わせることは「困難」である。労働者階級に十分ふさわしい共産党議員団をブルジョア議会内につくることは「困難」である。共産党議員がつまらないブルジョア議会遊びにふけらずに、大衆のあいだの宣伝、扇動、組織という最も緊急な活動に取り組むようにならせることは「困難」である。すべてこうしたことが「困難」なことは、言うまでもない。これはロシアでも困難であった。ブルジョアジーがはるかに強く、ブルジョア民主主義的な伝統その他がもっと強い西ヨーロッパとアメリカでは、これはくらべものにならないほどいっそう困難である。

しかし、これらすべての「困難」は、プロレタリアートが勝利するためにも、プロレタリア革命のときにも、またプロレタリアートが権力を掌握したあとでも、どのみちかならず解決しなければならないまったく同じ種類の任務にくらべれば、それこそ児戯に類する困難である。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとで、何百万という農民と小経営主、何十万という職員、官吏、ブルジョア・インテリゲンツィアを再教育し、彼らのすべてをプロレタリア国家とプロレタリアートの指導に従わせ、彼らのブルジョア的な習慣と伝統を克服しなければならないというこれらの真に巨大な任務にくらべれば、ブルジョアジーの支配のもとで、ブルジョア議会のなかに、ほんとうのプロレタリア党の真の共産党議員団をつくることは、こどもじみたたやすい仕事である。

もし、「左翼」や反議会主義者の同志たちが、いまのような些細な困難をさえ克服することを学ばないようなら、次のように断言してまちがいないであろう。彼らは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を実現する力がなく、ブルジョア・インテリゲンツィアとブルジョア諸機関を大がかりに自分に従わせ、改造することができないか、それとも、大急ぎでその学習を完了しなければならなくなり、こういうふうに急ぐことでプロレタリアートの大業に大害をおよぼし、普通以上に多くの誤りをおかし、平均以上の弱点と無能をさらけだし、等々することになるか、そのどちらかであろう、と。

ブルジョアジーが打倒されるまでは、ついでまた小経営と小商品生産がまったく消滅するまでは、ブルジョア的な環境、所有者的な習慣、小市民的な伝統が、労働運動の外部からも内部からも、議会活動というただ一つの活動部面においてだけでなく、かならずや社会活動のありとあらゆる分野、文化と政治の例外なしにすべての舞台でも、プロレタリア的活動をそこなうであろう。一つの活動分野の「不愉快な」任務または困難のうちの一つを回避し、それ

を締めだそうと試みることは、最大の誤りであって、あとでかならずその償いをしなければならなくなる。仕事と活動の例外なくすべての分野に習熟し、あらゆる困難とあらゆるブルジョア的な習性、伝統、習慣にいたるところで打ちかつことを学び、そして学びとらなければならない。これとは違ったふうに問題を立てることは、まったくふまじめであり、まったくこどもっぽいことである。

一九二〇年五月一二日

五

この本のロシア語版で、私は国際的な革命政策の分野における全体としてのオランダ共産党の行動をいくらかまちがって説明した。だから、この機会をとらえて、この問題にかんするわがオランダの同志たちの以下の手紙を公表し、つぎに私がロシア語原文で用いた「オランダのトリビューネ派」という表現を訂正して、それを「オランダ共産党の一部の党員」ということばとおき代えることにする。[三〇]

エヌ・レーニン

ウェインコープの手紙

モスクワ、一九二〇年六月三〇日

親愛な同志レーニン

御好意によって、われわれコミンテルン第二回大会のオランダ代議員団は、あなたの著書『共産主義内の「左翼主義」小児病』が西ヨーロッパ諸国語に翻訳されて公刊されるまえに、それに目をとおすことができました。この本のなかで、あなたは、オランダ共産党の一部の党員が国際政治で演じた役割にたいして不同意であることを、なんども強調しておられます。

それにもかかわらず、われわれは、あなたがこれら党員の行動の責任を共産党に負わせていることに抗議しなければなりません。これはきわめて不正確です。そればかりでなく、これは不当です。なぜなら、これらのオランダ共産党員は、わが党の日常の活動にごくわずかしか参加していないか、あるいは全然参加していないからです。彼らはまた、共産党内で反対派的なスローガンをおしとおそうと直接間接に試みていますが、それにたいしては、オランダ共産党とその全機関はきわめて精力的な闘争をおこなってきましたし、今日でもおこなっているのです。

兄弟のあいさつをもって

(オランダ代議員団を代表して)

D・I・ウェインコープ

一九二〇年四月—五月に執筆
一九二〇年六月にペトログラードで
国立出版所から単行本として発行
全集、第五版、第四一巻、一—一〇四ページ所収
邦訳全集、第三一巻、三—一〇七ページ所収

事項注

(一)『プラウダ』――ソ連邦共産党中央委員会機関紙。はじめボリシェヴィキの最初の日刊新聞として、一九一二年五月五日にペテルブルグで創刊され、一九一八年三月以降モスクワで発行されている。九

(二) レーニンは、『プラウダ』、一九一八年一一月二〇日付、第二五一号からピチリーム・ソローキンの手紙を引用しているが、同紙では手紙の出所が誤って『北ドヴィナ執行委員会通報』となっていた。実際には、この手紙を掲載した(一九一八年一〇月二九日付、第七五号)北ドヴィナ県執行委員会の新聞は、『農民と労働者の考え』という題名であった。九

(三) エス・エル(社会革命党)――一九〇一年末から一九〇二年はじめにかけて、さまざまなナロードニキ的グループおよびサークルの合同によって成立した小ブルジョア政党。エス・エルの見解は、ナロードニキ主義の思想と修正主義の思想との折衷的混合物であった。

ボリシェヴィキ党は、エス・エルが社会主義者の仮面をかぶろうとするのを暴露し、農民にたいする影響力をめぐって彼らとねばりづよくたたかい、個人的テロルという彼らの戦術が労働運動に有害なことを明らかにした。それと同時にボリシェヴィキは、一定の条件のもとで、ツァーリズムにたいする闘争でエス・エルと一時的な協定を結んだ。第一次世界大戦中、エス・エルの大多数は社会排外主義の立場をとった。

二月革命ののち、エス・エルはメンシェヴィキおよびカデットとともに、ブルジョア的臨時政府の主要な支柱となった。

一九一七年一一月末、エス・エル左派は独立の左派エス・エルの党を結成した。左派エス・エルは農民のあいだに影響力を維持しようとして、ソヴェト権力を形式的に承認し、ボリシェヴィキと協定を結んだが、まもなくソヴェト権力にたいする闘争を始めた。

外国の武力干渉と内戦の時期には、エス・エルは反革命的破壊活動をおこなった。内戦が終わってから、エス・エルは国内でも亡命白衛派のあいだでも、ソヴェト国家にたいする敵対活動をつづけた。九

(四) 憲法制定議会の選挙は、十月革命後の一九一七年一一月一二(二五)日におこなわれた。この選挙は、十月革命前に作成された名簿により、また臨時政府の承認した規則にしたがい、さらに人民の大多数がなお社会主義革命の意義を理解できなかった状況のもとで、実施された。これに乗じてエス・エル右派は、首都や工業中心地から遠く離れた県や地方で、過半数の票を獲得することができた。憲法制定議会はソヴェト政府によって招集され、一九一八年一月五(一八)日にペトログラードでひらかれた。憲法制定議会の反革命的多数派が、全ロシア中央執行委員会から提出された『勤労被搾取人民の権利の宣言』を否決し、また講和について、土地について、および権力のソヴェトへの移行についての第二回ソヴェト大会の布告の承認を拒否したので、同議会は、全ロシア中央執行委員会の一月六(一九)日の布告によって解散された。九

(五) ブレスト講和――ソヴェト・ロシアとドイツ、オーストリア＝ハンガリー、トルコおよびブルガリアとのあいだに結ばれた講和条約で、一九一八年三月三日にブレスト＝リトフスクで調印され

た。この条約によって、ポーランド、バルト海沿岸地方のほとんど全部、ベロルシアの一部が、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの支配下におかれることになった。ウクライナもソヴェト・ロシアから分離されて、ドイツの従属国にされた。カルス、バトゥーム、アルダガンの三市がトルコに奪われた。一九一八年八月、ドイツはソヴェト・ロシアに追加条約と金融協定を押しつけ、さらに略奪的な要求をもちだした。

ブレスト講和の締結をめぐって、トロツキーおよび「左翼共産主義者」にたいするねばりづよい闘争がおこなわれた。レーニンの異常な努力によってはじめて、対ドイツ講和条約は調印された。ブレスト講和の締結は適切な政治的妥協であった。ブレスト講和はソヴェト国家に息つぎの期間をあたえ、古い軍隊を復員して新しい赤軍を建設し、社会主義建設を開始し、国内の反革命派、干渉軍とたたかう力をたくわえることを可能にした。ブレスト講和の締結は、すべての交戦国の軍隊と人民大衆のあいだに平和擁護闘争が強まり、革命的気運が高まるのをうながした。一九一八年のドイツの十一月革命で君主制が倒れたのち、全ロシア中央執行委員会は一一月一三日に同条約を破棄した。一〇

(六) **クスターリ**――市場めあての家内生産に従事している農民出身の手工業者のこと。通常は農業からまだ分化していない。一四

(七) **第六回臨時全ロシア・ソヴェト大会**――一九一八年一一月六―九日にモスクワでひらかれた。大会には一二九六名の代議員が出席し、そのうち共産党員は一二六〇名であった。大会は次の諸問題を議題とした――十月革命の一周年記念日、国際情勢、軍事情勢、中央でのソヴェト権力の建設、地方での貧農委員会とソヴェトの建設の問題。

レーニンは大会の席上で、十月革命の一周年について演説し、また国際情勢について演説した。大会は、ソヴェト・ロシアと交戦中の各国政府に講和交渉の開始を提案する呼びかけを採択し、また革命的法秩序、ソヴェト建設、貧農委員会と郷および村ソヴェトとの合同についての各決議を採択した。大会の代議員は、ドイツに革命が始まったという報道に感激して、ドイツの蜂起した労働者、兵士、水兵との連帯を表明した。

ソヴェト大会は、ソヴェト権力の一年間についての基本的な総括をおこない、ソヴェト政府の当面の活動計画を定めた。一五

(八) 一九一八年一一月六日にモスクワ人民銀行臨時株主総会で採択された同銀行の国有化反対の決議をさす。一九一八年一二月二日の人民委員会議の布告により、モスクワ人民銀行は国有化され、その資産と負債はすべてロシア共和国人民銀行に移された。一六

(九) レーニンは、カール・カウツキーの小冊子『プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)』を読んだ直後の一九一八年一〇月はじめに本書の執筆にとりかかった。カウツキーはこの小冊子のなかで、マルクス主義のプロレタリア革命理論を極力歪曲して卑俗化し、またソヴェト国家を中傷していた。ヴェ・デ・ボンチ-ブルエーヴィチは、レーニンが本書の執筆に熱中し、「怒りにもえて」、「この驚くほど力づよい著作を連日夜おそくまで書いた……」と、その回想記に書いている。

本書は、一九一九年にイギリス、フランス、ドイツで発行された。一八

(一〇) **『ソツィアル-デモクラート』**(『社会民主主義者』)――ロシア社会民主労働党の中央機関紙、非合法新聞。一九〇八年二月から一九一七年一月まで発行された。第一号はロシア国内で出されたが、そのあとで発行所は国外に移され、第二号―第三二号(一九〇

九年二月—一九一三年一二月）はパリで、第三三号—第五八号（一九一四年一一月—一九一七年一月）はジュネーヴで発行された。一九一一年一二月以後、『ソツィアル-デモクラート』はレーニンによって編集された。

『コムニスト』（『共産主義者』）——レーニンの創刊した雑誌。『ソツィアル-デモクラート』編集局が、発行資金を出したゲ・エリ・ピャタコーフ、イエ・ベ・ボーシと共同で発行し（雑誌の編集にはエヌ・イ・ブハーリンもくわわった）、一号（合併号）だけ出た（一九一五年九月）が、これには、レーニンの論文『第二インタナショナルの崩壊』、『フランスの一社会主義者の正直な声』、『イタリアにおける帝国主義と社会主義』（全集、第二一巻、二〇一—二六一、三五八—三六七、三六八—三七八ページ）の三篇が掲載された。一九一六年、ブハーリン、ピャタコーフ、ボーシ一派の反党的言動を考慮して、『ソツィアル-デモクラート』編集局は、レーニンの提案にしたがって、同誌の続刊を不可能と認めると声明した。一八

（一一）『社会主義と戦争（戦争にたいするロシア社会民主労働党の態度）』（全集、第二一巻、三〇一—三四八ページを参照）をさす。この小冊子は、第一回国際社会主義者会議の準備に関連してレーニンが企画したもの。その執筆にはゲ・イエ・ジノヴィエフも参加したが、大部分はレーニンによって書かれた。『社会主義と戦争』は、一九一五年九月にひらかれたツィンメルヴァルト会議の直前に、ロシア語とドイツ語の小冊子として発行されて、会議の参加者たちに配布され、会議ののち、フランス語版も発行された。一八

（一二）バーゼル宣言——一九一二年一一月二四—二五日にバーゼルでひらかれた国際社会主義者臨時大会で採択された『戦争にかんする宣言』のこと。宣言は、せまりくる帝国主義世界戦争の脅威について諸国民に警告し、この戦争の略奪的目的をあばき、各国の労働者に平和のために断固たたかい、「資本主義的帝国主義にたいしてプロレタリアートの国際連帯を対置する」よう呼びかけていた。バーゼル宣言は、帝国主義戦争が起こったなら、社会主義者は戦争によって生じた政治的・経済的危機を利用して社会主義革命のためにたたかうべきだという、シュトゥットガルト大会（一九〇七年）の決議のレーニンによって定式化された一項をふくんでいた。一九

（一三）全集、第二一巻、三一九ページを参照。一九

（一四）全集、第二二巻、三〇九ページを参照。なお本文中の書名は同書初版のもので、再版以後、現行の『資本主義の最高の段階としての資本主義』にあらためられた。一九

（一五）前掲書、三〇八ページを参照。一九

（一六）本選集、第八巻、九三—一〇七ページを参照。二〇

（一七）マルクス『ゴータ綱領批判』（『ドイツ労働者党綱領評注』）、全集、第一九巻、二八—二九ページを参照。二三

（一八）カウツキーの原語は Alleinherrschaft である。二三

（一九）一八七五年三月一八—二八日付のアウグスト・ベーベルにあてたエンゲルスの手紙、全集、第一九巻、七ページを参照。二六

（二〇）この考えは、マルクスの『フランスにおける内乱』ドイツ語第三版への序文のなかでエンゲルスが述べたもの（全集、第一七巻、五九二ページを参照）。二九

（二一）エンゲルス『権威について』、全集、第一八巻、三〇五ページを参照。二九

（二二）一八四〇年代のフランスにおける「社会-民主主義者」とは、「民主党または共和党のうち、いくぶんとも社会主義的な色合

いをもった部分を意味していた。」（エンゲルス、『共産党宣言』一八八八年英語版への序文）二九

（二三）　一八七一年四月一二日付のルートヴィヒ・クーゲルマンにあてたマルクスの手紙（選集、第八冊、一九三ページ）、マルクスの『フランスにおける内乱』（全集、第一七巻、三一二、三一七、三一八ページ）、またマルクスの『フランスにおける内乱』ドイツ語第三版へのエンゲルスの序文（全集、第一七巻、五九四ページ）を参照。二九

（二四）　マルクス＝エンゲルス『共産党宣言』の一八七二年ドイツ語版序文（全集、第四巻、五九〇―五九一ページを参照）。三〇

（二五）　エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』、選集、第七冊、二六七ページを参照。三一

（二六）　全集、第一九巻、七ページを参照。三二

（二七）　全集、第一七巻、五九五―五九六ページを参照。三二

（二八）　選集、第七冊、二六九ページを参照。三二

（二九）　全集、第一七巻、三一五、三一七ページを参照。三三

（三〇）　ウイッグ党とトーリ党――一七世紀の七〇年代から八〇年代にかけて成立したイギリスの政党。ウイッグ党は、金融界と商業ブルジョアジー、さらに一部のブルジョア化した貴族の利益を代表していた。ウイッグ党は自由党の前身である。トーリ党は、大土地所有者とイギリス国教会の上層聖職者を代表し、封建制の過去の伝統を擁護し、自由主義的な要求や進歩的な要求とたたかった。のち保守党の母胎となった。ウイッグ党とトーリ党は、交替で政権をにぎった。三三

（三一）　ポグロム――なんらかの民族グループにたいする反動的、排外主義的な襲撃で、財産の略奪や殺人をともなうもの。三四

（三二）　ドレフュス事件――フランス軍部の反動的王党派が、参謀本部付の将校でユダヤ系のドレフュスにたいして一八九四年におこした挑発的な訴訟。ドレフュスはスパイ活動と売国行為のでっちあげ容疑で告発された。反動軍部によって仕組まれたドレフュスにたいする終身禁固の判決は、フランスの反動層によって反ユダヤ主義をあおりたて、共和制度と民主的自由を攻撃するために利用された。一八九九年、世論の圧力のもとにドレフュスは特赦を受けて釈放され、一九〇六年には大審院の判決で無罪になり、軍隊に復帰した。三四

（三三）　一九一六年のアイルランド蜂起が残虐なやり方で鎮圧されたことをさす。この蜂起は、イギリスの支配からアイルランドを解放する目的でおこされたもの。

アルスター――アイルランド東北部で、おもにイギリス人が住んでいる。アルスターの部隊はイギリス人とともに、アイルランド人民の蜂起の鎮圧に参加した。三四

（三四）　クーリヤ――ブルジョア諸国で財産、民族、人種等々の標識によって分けられた選挙人の等級。三五

（三五）　シャイロック――シェークスピアの喜劇『ヴェニスの商人』に登場する強欲な金貸しの名。三八

（三六）　マルクス『政治問題への無関心』、全集、第一八巻、二九七ページを参照。三九

（三七）　エンゲルス『権威について』、全集、第一八巻、三〇五ページを参照。四〇

（三八）　一八七五年三月一八―二八日付のアウグスト・ベーベルにあてたエンゲルスの手紙。全集、第一九巻、七ページを参照。四〇

（三九）　アウゲイアスの畜舎――ギリシア神話によると、エリスの

国王アウゲイアスの畜舎には三〇〇〇頭の牛がおり、この畜舎は三〇年のあいだ掃除されずに放置されていたが、英雄ヘラクレスが二つの河の河水をそそぎこんで一日でこれを掃除した。「アウゲイアスの畜舎」とは、非常な汚穢、または極端な無秩序のこと。四三

(四〇)　本選集、第七巻、一七五ページを参照。四六

(四一)　ロシア社会民主労働党第七回（四月）全国協議会――一九一七年四月二四―二九日（五月七―一二日）にペトログラードでひらかれた。これは、最初の合法的な党協議会であった。協議会には、議決権をもつ代議員一三三名と、評議権をもつ代議員一八名が、七八の党組織から出席した。協議会は、党大会の役割を果たし、全党の政治方針を確立し、党指導部をつくった。

協議会の議題は、現在の情勢（戦争と臨時政府その他）、講和会議、労働者・兵士代表ソヴェトにたいする態度、党綱領の改正、インタナショナルの状態と党の任務、国際主義的社会民主主義諸組織の統合、農業問題、民族問題、憲法制定議会、組織問題、各地方の報告、中央委員会の選挙であった。

レーニンは、協議会の全活動を指導し、現在の情勢、党綱領改正の問題、農業問題についての主報告をおこなったほか、他の議題についても演説し、また協議会に提出された決議案を作成した。

第七回（四月）協議会の歴史的な意義は、これがロシア革命の第二段階への移行というレーニン的方針を採択し、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させるための闘争計画を立て、全権力をソヴェトに移せという要求をかかげたことにあった。四六

(四二)　全集、第四巻、四九四ページを参照。四八

(四三)　マルクスの『フランスにおける内乱』ドイツ語第三版へのエンゲルスの序文、全集、第一七巻、五九五ページを参照。四八

(四四)　本書、一〇三―一〇六ページを参照。五一

(四五)　小冊子『ロシアの諸政党とプロレタリアートの任務』（全集、第二四巻、七七―九二ページ）をさす。この小冊子は、新聞『イーヴニング・ポスト』一九一八年一月一五日号と、アメリカ社会党左派の雑誌『クラース・ストラッグル』一九一七年一一―一二月付、第四号とに英訳掲載され、また単行の出版物としても発行された。五三

(四六)　ロシア社会民主労働党（ボ）第七回（四月）全国協議会で採択された『党綱領の改正についての決議』をさす。決議のテキストはレーニンが書いた（全集、第二四巻、二八六―二八七ページを参照）。五三

(四七)　全集、第一九巻、七ページを参照。五四

(四八)　カデット（立憲民主党）――ロシアの自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの主要な政党。一九〇五年一〇月に創立された。十月革命が勝利したのち、カデットは、ソヴェト権力のあいいれない敵となり、あらゆる反革命的武装行動と干渉軍の軍事行動とに参加した。干渉軍と白衛軍が撃破されたのち、カデットの党員たちは亡命したが、その反ソ・反革命活動をやめなかった。五六

(四九)　全ロシア民主主義会議――権力の問題を解決するために、メンシェヴィキ＝エス・エルに牛耳られるソヴェト中央執行委員会が一九一七年九月にペトログラードでひらいたもの。会議の主催者がねらった真の目的は、ますます高まる革命的気運から人民大衆の注意をそらせることにあった。会議には一五〇〇名以上が出席した。メンシェヴィキとエス・エルの指導者たちは、労働者・農民代表ソヴェトの代表をなるべく少なくし、各種の小ブルジョア団体やブルジョア団体の代表をふやし、こうして会議で多数を制するために、

あらゆる措置をとった。ボリシェヴィキは、メンシェヴィキとエス・エルを暴露する演壇として利用するために、この会議に参加した。民主主義会議は予備議会（共和国臨時議会）の創設についての決定を採択した。これは、ロシアに議会制度が実施されているように見せかけるたくらみであった。だが、臨時政府の承認した規則によると、予備議会は政府の諮問機関にすぎないものになるはずであった。五八

（五〇）　**第一回全ロシア・ソヴェト大会**——一九一七年六月三—二四日（六月一六日—七月七日）にペトログラードでひらかれた。大会には一〇九〇名の代議員が出席した。ボリシェヴィキはそのころにはソヴェト内の少数派で、一〇五名の代議員しかもっていなかった。圧倒的多数の代議員は、メンシェヴィキ＝エス・エルのブロックとこれを支持する小ブルジョア的諸グループに所属していた。大会のエス・エル＝メンシェヴィキ的多数派は、採択した決議のなかで臨時政府を支持する立場をとり、臨時政府の準備していた戦線での攻勢を是認し、権力をソヴェトに移すことに反対した。大会は中央執行委員会を選出したが、そのなかではエス・エルとメンシェヴィキが圧倒的多数を占めていた。五八

（五一）　**第二回全ロシア・ソヴェト大会**——一九一七年一〇月二五—二六日（一一月七—八日）にペトログラードでひらかれた。大会には一連の郡および県農民代表ソヴェトの代議員も参加した。開会のときまでに六四九名の代議員が出席し、そのうちボリシェヴィキ三九〇名、エス・エル一六〇名、メンシェヴィキ七二名、国際派メンシェヴィキ一四名であった。大会は一〇月二五日（一一月七日）午後一〇時四〇分、スモーリヌイで開会された。社会主義革命の承認を拒否したメンシェヴィキ、エス・エル右派およびブンドは、大会から退場した。一〇月二六日（一一月八日）午前四時、大会は、冬宮の占領と臨時政府の逮捕とについての報告を聴取し、レーニンの書いたアピール『労働者、兵士、農民諸君へ！』（全集、第二六巻、二四七—二四八ページを参照）を採択したが、このアピールには、全権力を労働者・兵士・農民代表ソヴェトの手に移すことが宣言されていた。大会の第二回会議は、一〇月二六日（一一月八日）午後八時四〇分にひらかれた。レーニンは大会の席上で講和および土地について報告し、大会は、レーニンの書いた『講和にかんする布告』と『土地にかんする布告』（本選集、第八巻、二〇二—二一四ページを参照）を承認した。大会は労農政府——レーニンを議長とする人民委員会議——を組織した。大会で選出された全ロシア中央執行委員会には、ボリシェヴィキ六二名、エス・エル左派二九名、国際派メンシェヴィキ六名、ウクライナ社会党三名、エス・エル派マクシマリスト一名、合計一〇一名がはいった。五八

（五二）　**第三回全ロシア・ソヴェト大会**——一九一八年一月一〇—一八（二三—三一）日にペトログラードでひらかれた。大会には、三一七の労働者・兵士・農民代表ソヴェトと、一一〇の方面軍、軍団、師団の委員会とが代表を送った。一月一三（二六）日には、農民代表ソヴェト第三回全ロシア大会の参加者が合流し、大会の最終会議には一五八七名の代議員が出席した。大会は、全ロシア中央執行委員会の活動についてのヤ・エム・スヴェルドロフの報告と、人民委員会議の活動についてのレーニンの報告とを聴取した。大会は、レーニンの書いた『勤労被搾取人民の権利の宣言』（本選集、第八巻、二二六—二二七ページを参照）を承認したが、この宣言はのちにソヴェト憲法の基礎となった。大会で採択された決議は、全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の政策を完全に支持し、両者

に全面的な信頼を表明した。大会は、ロシア社会主義共和国はロシア民族の自発的な同盟にもとづいてソヴェト共和国連邦として樹立される、という決定を採択した。大会はまた、土地についての布告を基礎として作成された土地社会化法の基本条項を承認した。

大会で選出された全ロシア中央執行委員会には、ボリシェヴィキ一六〇名、左派エス・エル一二五名、国際派メンシェヴィキ二名、共産主義的無政府主義者三名、エス・エル派マクシマリスト七名、エス・エル右派七名、それにメンシェヴィキ二名がはいった。

(五三)　**第四回臨時全ロシア・ソヴェト大会**――ブレスト講和条約批准の問題を決定するために招集され、一九一八年三月一四―一六日にモスクワでひらかれた。大会には議決権をもつ代議員一二三二名が出席したが、そのうちボリシェヴィキ七九五名、左派エス・エル二八三名、エス・エル中央派二九名、メンシェヴィキ二一名、国際派メンシェヴィキ一一名、その他であった。レーニンは全ロシア中央執行委員会を代表して、講和条約について報告した。ブレスト条約の批准に反対したのは、メンシェヴィキ、エス・エル左右両派、マクシマリスト、無政府主義者、その他であった。激しい討論ののち、大会は記名投票による圧倒的多数で、レーニンの講和条約批准の決議案(全集、第二七巻、二〇三―二〇四ページを参照)を採択した。賛成七八四票、反対二六一票、棄権一一五票であった。「左翼共産主義者」は表決に参加せず、特別声明を出して、講和締結は国防を破壊し、革命の成果をだいなしにする、と声明した。これは第七回党大会および党中央委員会の決定にそむくものであった。

(五四)　**第五回全ロシア・ソヴェト大会**――一九一八年七月四日にモスクワでひらかれた。大会には議決権をもつ代議員一一六四名が出席したが、そのうちボリシェヴィキは七七三名、左派エス・エル三五三名、マクシマリスト一七名、無政府主義者四名、国際派メンシェヴィキ四名、その他の政党員三名、無所属一〇名であった。全ロシア中央執行委員会の活動についてはスヴェルドロフが、人民委員会議の活動についてはレーニンが報告した。激しい討論ののち、大会は大多数で、共産党代議員団から提出された決議案を採択し、そのなかで「ソヴェト政府の内外政策を全面的に支持する」と述べた。ソヴェト政府の不信任、ブレスト講和条約の破棄、ソヴェト権力の内外政策の変更などを提案した左派エス・エルの決議案は否決された。

大会で敗北した左派エス・エルは、七月六日、モスクワで反革命的反乱をおこした。そのため、大会は議事を中断し、七月九日に再開された。七月六―七日事件についての政府発表を聴取した大会は、左派エス・エルの犯罪的冒険を掃討した政府の行動を完全に支持し、またその上層指導部と意見をともにする左派エス・エル党員を「労働者・農民代表ソヴェトにとどめておくわけにはいかない」と指摘した。

大会は、食糧人民委員ア・デ・ツュルーパの報告にかんする決議のなかで、穀物専売制が確固不動なことを確認し、断固として富農の反抗を鎮圧する必要を指摘し、また貧農委員会の設立を支持した。大会は七月一〇日の最終会議で、共産党代議員団から提出された赤軍の創設についての決議案を全員一致で採択したが、そのなかでは、勤労者の兵役義務にもとづいて赤軍を創設し強化する措置が定められていた。大会はまた、最初のロシア共和国憲法を可決した。

(五五)　一八七〇―一八七一年のフランス＝プロイセン戦争におけるフランス軍の敗北のあとで、一八七一年三月にパリ・コミューンの革命が起こったとき、ヴェルサイユに逃げこんだブルジョアジー

のいわゆる「国防」政府が、敵国プロイセンと取引し、屈辱的な講和条件の受諾と引きかえに、ドイツに捕虜になっていたフランス兵一〇万の送還をうけて、コミューンを鎮圧したことをさす。六〇

（五六）ペトルーシカ――ゴーゴリの『死せる魂』に出てくる従僕の名。内容をすこしも理解できないのに、本を読むのが好きな男。六〇

（五七）協商国の帝国主義者がメンシェヴィキとエス・エルの積極的な参加をえて組織したチェコスロヴァキア軍団の反革命的反乱をさす（この軍団は、戦争中にチェコ人とスロヴァキア人の捕虜から編成されたもので、シベリア経由でフランスに向かうことをソヴェト政府から許可されていたのである）。白系チェコ軍団は、白衛軍や富農と緊密な連絡をとりながら行動して、ウラル、ヴォルガ沿岸地方、シベリアの相当部分を占領し、いたるところでブルジョアジーの権力を復活させた。白系チェコ軍団の占領地域には、メンシェヴィキやエス・エルも参加した白衛派政府（オムスクのシベリア「政府」、サマラの憲法制定議会議員委員会、等々）が組織された。一九一八年の秋にヴォルガ沿岸地方は赤軍によって解放された。白系チェコ軍団は、コルチャック反乱の一掃と時を同じくして、最後的に撃滅された。六〇

（五八）これは、一九一八年四月二八日付の『プラウダ』および『イズヴェスチヤ』に発表された論文『ソヴェト権力の当面の任務』をさしている（本選集、第八巻、二七九ページを参照）。六三

（五九）イウドゥシカ・ゴロヴリョーフ――サルトィコーフ－シチェドリーンの作品『ゴロヴリョーフ家の人々』に出てくる人物。農奴主的地主階級の精神的堕落、寄生生活、強欲、偽善と裏切りを形象化したもの。六三

（六〇）一九一八年六月一四日に全ロシア中央執行委員会の採択した決議はこう述べていた。メンシェヴィキとエス・エル右派は、武装暴動をふくむあらゆる手段でソヴェト共和国とたたかっている。そこで、ソヴェト権力の信用を失墜させ、これを打倒しようとする党派がソヴェト内に席を占めることはまったく許しがたい、と。この決議は圧倒的多数で採択された。メンシェヴィキとエス・エル右派はすべての地方ソヴェトから除外され、彼らの機関誌紙は閉鎖された。六三

（六一）リーベルダン――デミヤーン・ベードヌィの読物『リーベルダン』に由来する皮肉な呼び名で、メンシェヴィキの指導者リーベルとダン、および彼らの支持者たちをさしている。六三

（六二）「アクチヴィスト」――十月革命の当初から武力闘争の方法でソヴェト権力およびボリシェヴィキ党とたたかったメンシェヴィキのグループ。メンシェヴィキ「アクチヴィスト」は、各種の反革命陰謀団に参加し、コルニーロフ、カレーヂン、ブルジョア民族主義的なウクライナ・ラーダを支持し、白系チェコ軍団の反乱に積極的に参加し、外国の干渉軍部隊と同盟を結んでいた。六三

（六三）一九一〇年九月二〇日、ドイツ社会民主党のマクデブルク大会におけるアウグスト・ベーベルの演説をさす。この大会については、レーニンの論文『二つの世界』（全集、第一六巻、三二二－三三一ページ）を参照。六四

（六四）ドイツ社会民主党中央機関紙『フォールヴェルツ』の一九一八年一〇月二一日付、第二九〇号の社説『独裁か民主主義か？』をさす。六五

（六五）一九〇三年七月三〇日（八月一二日）にロシア社会民主労働党第二回大会で党綱領の審議のさいにプレハーノフがおこなった

演説をさす。このプレハーノフの発言は、レーニンの著作『一歩前進、二歩後退』のなかに引用されている（本選集、第二巻、二〇八ページを参照）。六七

（六六）　スイスのツィンメルヴァルトでひらかれた国際社会主義者会議をさす。

ツィンメルヴァルト（または第一回）国際社会主義者会議は、一九一五年九月五―八日にひらかれた。ヨーロッパの一一ヵ国（ドイツ、フランス、イタリア、ロシア、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、スウェーデン、ノルウェー、オランダ、スイス）の代表三八名が出席した。ロシア社会民主労働党中央委員会の代表団は、レーニンが指導した。

会議で討議された問題は、（一）各国代表の報告、（二）ドイツおよびフランス代表の共同声明、（三）原則的決議の採択についてのツィンメルヴァルト左派の提案、（四）宣言の採択、（五）国際社会主義委員会の選挙、（六）戦争犠牲者と被迫害者にたいする同情決議の採択であった。

会議は宣言――『ヨーロッパのプロレタリアに訴える』檄を採択した。そのなかには、レーニンと左派社会民主主義者の強い要請で、革命的マルクス主義の一連の基本命題が取りいれられた。会議は、国際社会主義委員会を選出した。六八

（六七）　ツィンメルヴァルト左派――一九一五年九月にツィンメルヴァルトでひらかれた国際社会主義者会議で、レーニンの提唱で結成され、八名の代議員――ロシア社会民主労働党中央委員会、スウェーデン、ノルウェー、スイス、ドイツの各国社会民主党左派、ポーランド社会民主党反対派、ラトヴィア辺区社会民主党の各代表――を結合していた。レーニンに率いられるツィンメルヴァルト左派は、会議の中央派的多数派とたたかった。左派は、指導機関として、レーニン、ジノヴィエフ、カ・ラデックからなるビューローを選出した。ツィンメルヴァルト左派はその機関誌『フォールボーテ』（『先駆者』）をドイツ語で発行したが、これにはレーニンの論文がいくつか掲載された。ツィンメルヴァルト左派の主導力は、ボリシェヴィキであった。六九

（六八）　マルクスの『フランスにおける内乱』ドイツ語第三版へのエンゲルスの序文、全集、第一七巻、五八六ページを参照。七一

（六九）　マルクス『フランスにおける内乱』、全集、第一七巻、三一五ページを参照。七一

（七〇）　本選集、第八巻、三二一ページを参照。七五

（七一）　スパルタクス派――ドイツ社会民主党左派の革命的組織。第一次世界大戦の初期に、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルク、フランツ・メーリング、クララ・ツェトキーン、ユリアン・マルフレフスキ、レーオ・ヨギヘス（ティシカ）、ヴィルヘルム・ピークによって結成された。スパルタクス派は、大衆のあいだで革命的宣伝をおこない、大衆的な反戦行動を組織し、ストライキを指導し、世界大戦の帝国主義的性格と社会民主党の日和見主義的指導者の裏切りとを暴露した。しかし、スパルタクス派は、理論と政策の諸問題で重大な誤りをおかした。レーニンは、ドイツ社会民主党左派のこれらの誤りを再三批判し、同派が正しい立場をとるように援助した（たとえば、『ユニウスの小冊子について』、『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』、全集、第二二巻、三五三―三七一ページ、本選集、第七巻、五五一―一〇四ページを参照）。一九一七年四月、スパルタクス派は中央主義的なドイツ独立社会民主党に加入したが、そのなかで組織上の自主性を

維持した。一九一八年一一月のドイツ革命中、スパルタクス派は「スパルタクス同盟」を結成し、その綱領を一二月一四日に発表して「独立派」と手を切った。一九一八年一二月三〇日から一九一九年一月一日にかけてひらかれた創立大会で、スパルタクス派はドイツ共産党を創立した。七〇

（七二）　カウツキーの論文『ロシア革命の推進力と展望』をさす。この論文は、ロシア語では、レーニンの監修および序文付の小冊子として、一九〇六年一二月に発行された。八一

（七三）　マルクス『ブルジョアジーと反革命』、全集、第六巻、一〇二―一〇五ページを参照。八二

（七四）　左派エス・エルがドイツ大使ミルバッハを挑発的に暗殺し、また一九一八年七月六―七日の反乱をおこしたあとで、左派エス・エルの党から二つの新党――「ナロードニキ派共産主義者」の党と「革命的共産主義党」――が分離した。

「ナロードニキ派共産主義者」は、左派エス・エルの反ソ活動を非難し、一九一八年九月の会議で独自の党を結成した。「ナロードニキ派共産主義者」は、中農と同盟を結ぶボリシェヴィキ党の方針に賛成した。彼らの多くの者はソヴェト機関に参加し、全ロシア中央執行委員会にはいった（たとえばゲ・デ・ザクス）。一九一八年一一月六日、同党の臨時大会は、自党を解散してロシア共産党(ボ)に合流する決定を、全員一致で採択した。

「革命的共産主義党」は、一九一八年九月二五―三〇日にモスクワでひらかれた新聞『ヴォーリャ・トルダー』（『労働の意志』）支持者グループの大会で成立した。大会の決定には、新党は、そのイデオロギーと綱領においては依然としてナロードニキ的であるが、「ボリシェヴィキと現実的で誠実な協力」をおこなう政策をとるむねが述べられていた。その中央執行委員会には、ア・アレクサンドロフ、エム・ドブロホートフ、ア・コレガーエフ、その他がはいった。「革命的共産主義党」は一九二〇年まで小さなグループとして存続したが、同年九月にひらかれた同党の第五回大会で、ロシア共産党（ボ）に加入する決定を採択した。一九二〇年一〇月、ロシア共産党（ボ）中央委員会は、旧「革命的共産主義党」員を党に採用することを、党の諸組織に許可した。八三

（七五）　一八七一年四月一二日付のルートヴィヒ・クーゲルマンにあてたマルクスの手紙、選集、第八冊、一九三ページを参照。八六

（七六）　東部方面軍司令官エム・ア・ムラヴィヨーフの反逆は、一九一八年七月の左派エス・エルの反乱と密接な関係があった。七月一〇日、シンビルスクに着いたムラヴィヨーフは、ブレスト講和を承認せず、ドイツにたいして宣戦を布告する、と声明した。ムラヴィヨーフは無線電報で、サマラからヴラヂヴォストークにいたる白衛軍および干渉軍に、モスクワへの進撃を開始せよ、と呼びかけた。ソヴェト政府はムラヴィヨーフの冒険を一掃するための緊急措置をとった。ムラヴィヨーフは抵抗を試みて射殺され、その共謀者たちも逮捕された。八七

（七七）　「七月危機」――一九一八年の夏、メンシェヴィキとエス・エルが外国干渉軍の支持をえて中央諸県、ヴォルガ沿岸地方、ウラル、シベリアでおこした富農の反革命的蜂起をさす。八八

（七八）　十月革命の数日まえに農相エス・エリ・マースロフが臨時政府に提出したエス・エルの法案をさす。この法案は、土地委員会のもとに特別借地フォンドを設け、国有地と修道院所有地をこのフォンドに引き渡すことをきめていた。地主的土地所有は温存されるはずであった。地主は、それまで小作に出していた土地だけを臨時

借地フォンドに引き渡し、農民の支払う「借地」料は地主の手にはいることになっていた。

土地委員の逮捕は、農民暴動や農民による地主所有地の奪取にたいする報復として、臨時政府がおこなったもの。九〇

(七九)　郷――革命前のロシアで、郡の下の地域行政単位。九二

(八〇)　本選集、第八巻、二一〇―二一四ページを参照。九二

(八一)　前掲書、二二六―二二七ページを参照。九二

(八二)　村団――革命前のロシアで最下級の行政単位。人口三〇〇人ないし二〇〇〇人の範囲で、一つないし数個の村で構成され、いくつかの村団が郷をつくっていた。村団の行政機構は村寄合と村長老であった。九二

(八三)　『一九〇五―一九〇七年のロシア革命における社会民主党の農業綱領』、全集、第一三巻、二一一―四四三ページを参照。九三

(八四)　マルクス『剰余価値学説史』第二部、第八章第三節c、全集、第二六巻(II)、四二ページを参照。九七

(八五)　一九一八年夏にブハーリンが書いた『社会主義革命とロシアにおけるプロレタリアートの執権期のプロレタリアートの諸任務とについてのテーゼ』のこと。九八

(八六)　『ブティルカ地区の集会での演説』、全集、第二八巻、三一ページを参照。一〇〇

(八七)　箱のなかの男――チェーホフの同名の短篇小説（一八九八年作）の主人公で、中学教師。天気の日にも雨靴をはき、傘をもって外出するほど用心ぶかく、周囲の影響をうけるのを恐れて殻のなかに閉じこもった小心な人物。一〇一

(八八)　一九一八年のドイツにおける十一月革命の直接の原因は、ドイツが敗戦し、経済が崩壊し、人民大衆と軍隊が悲惨な状態におちいり、停戦を要求したことであった。ロシアの十月革命も、ドイツの革命的諸条件に大きな影響をおよぼした。

一九一八年一一月三日にキールで起こった水兵の反乱が、革命の発端となった。沿岸の諸都市がつぎつぎと蜂起にくわわった。最初の兵士評議会、労働者評議会が、艦艇、兵営、企業に成立しはじめた。北部ドイツの全土に波及した革命は、短期間に国の中部および南部地域にひろがった。一一月九日、スパルタクス派の呼びかけにおうじて、ベルリンでゼネストが開始され、たちまち武装蜂起に転化した。人民蜂起の結果、ユンカー＝ブルジョア的君主制は打倒された。一一月一〇日にベルリン評議会の総会で組織された臨時政府は、社会民主党右派（フリードリヒ・エーベルト、フィリップ・シャイデマン、オットー・ランツベルク）と、のちに政府から脱退した「独立」社会民主党（フーゴー・ハーゼその他）とで構成された。政府の綱領は、ブルジョア制度の枠内での社会改良の範囲を出るものではなかった。一九一八年一二月一六―二一日にベルリンでひらかれた第一回全ドイツ評議会大会の席上、社会民主党の右派指導者は、政府に立法権と執行権とを引き渡し、憲法制定議会の選挙をおこなうという決議を可決させた。これは事実上、評議会の解体を意味していた。

ドイツのブルジョアジーは、共産党から指導者を奪い去り、労働者階級の前衛を粉砕するため、労働者を挑発して時機尚早の武装蜂起をおこさせることにした。一月六日にベルリンで始まった蜂起の指導権は「独立派」がにぎったが、同派は最初から敵への急速果敢な攻勢を組織せず、ついで革命を裏切って政府と交渉を開始した。社会民主党右派のグスタフ・ノスケ陸相に率いられる反革命部隊は、残虐きわまるやり方でベルリン・プロレタリアートの行動を鎮圧し

た。一月一五日、カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクは逮捕されて、虐殺された。ドイツのブルジョアジーは、一月蜂起を粉砕し、ドイツ労働者のすぐれた指導者を虐殺することによって、一九一九年一月一九日の憲法制定議会の選挙でブルジョア諸政党の勝利を確保することができた。十一月のブルジョア民主主義革命は大きな進歩的な意義をもっていた。ドイツ国内では、君主制が打倒されて民主的共和制が樹立されたが、これはブルジョア民主主義の基本的自由を保障し、八時間労働日を制定した。ドイツの十一月革命は、ソヴェト・ロシアにとって大きな援助となり、ブレスト講和条約を破棄することを可能にした。一〇三

(八九) **予備議会**（共和国臨時議会）――一九一七年九月一四―二〇日（九月二七日―一〇月五日）の全ロシア民主主義会議（注四九を参照）で創設された。これは、ロシアに議会制度が制定されたように見せかけることを目的としたものであるが、臨時政府の承認した規定によると、臨時政府の諮問機関にすぎなかった。

民主主義会議のボリシェヴィキ代議員団会議は、七七票対五票で予備議会への参加を決定し、党中央委員会もこれを承認した。レーニンは、民主主義会議にたいするボリシェヴィキの戦術の誤りを批判し、ボリシェヴィキが予備議会から脱退するよう断固として要求し、蜂起の準備に全力を集中する必要があると強調した。党中央委員会は、レーニンの提案を審議し、ボリシェヴィキの予備議会脱退を決定した。一〇月七（二〇）日の予備議会開会の日に、ボリシェヴィキは宣言を読みあげて退場した。一〇三

(九〇) **ウクライナ中央ラーダ**――一九一七年四月、キエフでひらかれたウクライナのブルジョア的および小ブルジョア的な民族主義的政党政派の全ウクライナ国民会議で創立された反革命的なブルジョア民族主義組織。ラーダの議長はウクライナ・ブルジョアジーのイデオローグであるエム・エス・グルシェフスキー、副議長はヴェ・カ・ヴィンニチェンコ、メンバーはペトリューラ、エフレーモフ、アントノーヴィチ、その他の民族主義者であった。十月革命の勝利後、ラーダは「ウクライナ人民共和国」の最高機関と自称し、ソヴェト権力との公然たる闘争にのりだし、全ロシアの反革命の一中心となった。

一九一七年一二月にハリコフでひらかれた第一回全ウクライナ・ソヴェト大会で、ウクライナはソヴェト共和国と宣言された。大会は中央ラーダの権力の打倒を宣言した。ロシア共和国人民委員会議は、ウクライナ・ソヴェト政府をウクライナの唯一の合法政府として承認し、ラーダとのたたかいで同政府をただちに援助することを決定した。一九一八年一月、ウクライナのソヴェト軍部隊は攻勢に転じ、一月二六日（二月八日）にキエフを占領して、ラーダの支配を打倒した。

ソヴェト・ウクライナの領土から駆逐された中央ラーダは、ソヴェト権力の打倒とウクライナにおけるブルジョア制度の復活とをめざして、ドイツ帝国主義者と同盟を結んだ。ソヴェト共和国とドイツとの講和交渉のさい、ラーダは代表団をブレスト＝リトフスクへ派遣し、ソヴェト代表団に隠れてドイツと単独講和を結び、それによってウクライナの穀物、石炭、原料をドイツにあたえる一方、ソヴェト権力とのたたかいで軍事援助をうけた。一九一八年三月、オーストリア＝ドイツ占領軍とともにラーダはキエフに復帰し、彼らのかいらいとなった。ドイツ軍は、ラーダがウクライナの革命運動を鎮圧する能力も、要求された食糧の供給を保障する能力もまったくもたないことを知って、四月末にラーダを解散させた。一〇四

（九一）　農民代表ソヴェト第二回全ロシア大会――一九一七年一一月二六日―一二月一〇日（一二月九―二三日）、ペトログラードでひらかれた。大会には、エス・エル右派に牛耳られる農民執行委員会の招請で地方から来着した代議員以外に、農民代表ソヴェト臨時全ロシア大会（一九一七年一一月一一―二五日（一一月二四日―一二月八日））の代議員全員が出席した。議決権をもつ代議員七九〇名のうち、エス・エル右派および中央派が三〇五名、エス・エル左派三五〇名、ボリシェヴィキ九一名であった。大会はきわめて緊張した空気のなかでおこなわれた。憲法制定議会にたいする態度の問題と、カデットを人民の敵と宣言する人民委員会議の布告をめぐって、エス・エル左派の支持をうけたボリシェヴィキとエス・エル右派とのあいだにとくに激しいたたかいが起こった。意見の相違は大会を決裂にみちびき、エス・エル右派は大会から退場した。大会はその議事を続行し、臨時全ロシア農民大会の諸決定（講和と土地にかんする労働者・兵士代表ソヴェト第二回大会の布告および労働者統制にかんする全ロシア中央執行委員会の布告を承認する決議、土地の均等用益の原則にかんする決議を承認した。一〇五

（九二）　『プラウダ』に発表されたこのテーゼのテキストでは、ここに、「このスローガンが実際にはソヴェト権力を取りのぞくための闘争を意味することが、全人民に明らかになりつつあり、」という一句がはいっている。一〇五

（九三）　一八七五年三月一八―二八日付のアウグスト・ベーベルにあてたエンゲルスの手紙、全集、第一九巻、七ページを参照。一一三

（九四）　エム・ヤ・オストロゴルスキーの著書『民主主義と政党』をさす。この書物の初版は一九〇三年に、（改訂）第二版は一九一二年に、パリで発行された。一一三

（九五）　共産主義インタナショナル（コミンテルン）第一回大会――一九一九年三月二―六日にモスクワでひらかれた。

大会にさきだって、大々的な準備活動がレーニンの指導のもとにすすめられた。レーニンの指示により、また彼の参加をえて、『共産主義インタナショナル第一回大会のために』というアピールが作成されたが、それには新しいインタナショナルの諸原則が述べられていた。一九一九年一月、一連の共産主義政党およびグループと社会主義政党およびグループの代表者会議がモスクワでひらかれ、「共産主義インタナショナル大会を招集する問題の審議」を始めるよう、三九の組織に呼びかける決定を採択した。大会がひらかれる直前、レーニンの指導のもとに、一連の代表団の代表者会議がひらかれて、予定議題、報告書、委員会の構成などをきめた。また大会を協議会としてひらくこと、議事の過程で第三インタナショナル結成の問題を審議することがきめられた。

大会には、三〇ヵ国の共産主義者と左派社会主義者の政党、グループ、団体から五二名の代議員が出席し、そのうち三四名は議決権をもつ代議員、一八名は評議権をもつ代議員であった。レーニン、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、スターリン、ゲ・ヴェ・チチェーリン、フーゴー・エーベルライン（マックス・アルベルト）、オ・ヴェ・クーシネン、フリッツ・プラッテン、ボリス・ラインシュタイン、S・リュトゲルス、イ・エス・ウンシリフト（ユロフスキ）、ユリエ・シロラ、エヌ・ア・スクルィプニク、エス・イ・ゴプネル、カール・シュタインハルト（I・グルーバー）、J・ファインバーグ、ジャック・サドゥル、その他が大会の代議員であった。

レーニンが開会の辞を述べた。各地の報告につづいて、共産主義インタナショナルの政綱が審議され、採択された。大会の主要な議

題は、ブルジョア民主主義とプロレタリアートの執権の問題であった。レーニンは、一九一九年三月四日、この問題について報告した。大会は全員一致でレーニンのテーゼを承認し、それを各国に普及させることをコミンテルン執行委員会ビューローに委託し、またレーニンから提出されたテーゼの補足決議（全集、第二八巻、五〇八ページ）を承認した。同じ日、大会は第三（共産主義）インタナショナル創立の決定を採択した。レーニンの提案で、ツィンメルヴァルト連合を解体する決定が可決された。コミンテルン第一回大会は、全世界のプロレタリアートへの宣言、その他一連の決議と決定を採択した。大会はまた、二つの指導機関——執行委員会と、その互選による五名からなるビューロー——を設置することを決定した。

共産主義インタナショナルは、一九一九年から、一九四三年にコミンテルン執行委員会幹部会が各国共産党の同意をえてコミンテルン解散の決定を採択したときまで存続した。コミンテルンが解散されたのは、情勢が変化して、単一の中央部から国際共産主義運動を指導することが、できなくなったからである。共産主義インタナショナルの歴史的意義は、それが各国勤労者の結びつきを回復、強化し、第一次世界大戦後の新しい情勢のもとで労働運動の理論的諸問題を研究し、共産主義思想の宣伝扇動の一般原則を確立し、日和見主義による俗流化と歪曲からマルクス＝レーニン主義の学説を守りぬいたことにある。こうして、若い各国共産党が大衆的な労働者党に転化する条件がつくりだされた。二四

(九六) ベルン会議——第二インタナショナルの復活をめざして招集された、社会排外主義者や中央派の諸政党の戦後最初の会議で、一九一九年二月三—一〇日にベルンでひらかれた。会議の主要議題のひとつは、民主主義と執権の問題であった。この問題についての報告のなかで、中央派のヤルマル・ブランティングは、社会主義革命とプロレタリアートの執権が社会主義をもたらさないことを論証しようとした。カウツキーとベルンシュタインは、会議にボリシェヴィズムと十月革命を非難させようとした。ブランティングの提出した決議案は、偽善的にロシア、オーストリア＝ハンガリー、ドイツの各革命を歓迎してから、実質的にはプロレタリアートの執権を非難し、ブルジョア民主主義を賛美した。この決議案は大多数で採択された。

共産主義インタナショナル第一回大会は、『「社会主義的」諸潮流とベルン会議とにたいする態度について』という特別決議を採択し、そのなかで同会議の諸決定を批判し、とりわけ、帝国主義者の対ソ武力干渉を隠蔽するような決定をベルン会議に採択させようとした右派社会主義指導者の企てを非難した。二四

(九七) マルクスの『フランスにおける内乱』ドイツ語第三版へのエンゲルスの序文、全集、第一七巻、五九五—五九六ページを参照。二五

(九八) マルクス『フランスにおける内乱』、全集、第一七巻、三一七ページを参照。二六

(九九) **Shop Stewards Committees**（職場世話役委員会）——第一次大戦中にイギリスの一連の産業部門に広く普及した労働者の選出した代表組織。協調主義的労働組合が「国内平和」の政策をとり、ストライキ闘争を拒否していたのに反し、この委員会は、労働者大衆の利益と要求をまもり、ストライキを指導し、反戦宣伝をおこなった。世話役は工場委員会、地区委員会、市委員会に統合されていた。一九一六年には、職場世話役委員会と労働者委員会の全国組織が結成された。

外国の武力干渉の時期には、職場世話役委員会はソヴェト・ロシア支持の積極的な行動をとった。ウィリアム・ギャラチャー、ハリ・ポリット、アーサー・マクマナス、その他の活動家は、イギリス共産党に入党した。一三

(一〇〇) 『フライハイト』(『自由』) ——ドイツ独立社会民主党の日刊の機関紙。一九一八年一一月から一九二二年一〇月までベルリンで発行されていた。一三三

(一〇一) 一九一七年四月にゴータの創立大会で結成されたドイツ独立社会民主党をさす。「独立派」は中央派的言辞にかくれて、社会排外主義者との統一を説き、階級闘争を放棄する立場に転落した。党の主要部分をなしていたのは、カウツキー派の国会グループ「社会民主主義有志団」であった。

一九二〇年一〇月のハレ党大会で分裂が起こり、一二月には「独立派」のかなりの部分がドイツ共産党と合同した。右派は別の党を結成し、従来の名を採用して、一九二二年まで存続していた。一三三

(一〇二) 一九一九年三月六—八日の第七回党大会で採択された党名および党綱領の変更についての決議をさす（全集、第二七巻、一三九—一四〇ページを参照）。一三四

(一〇三) 『印刷労働者新聞』——モスクワ印刷労働組合が一九一八年一二月八日に創刊したもの。当時、同労働組合はメンシェヴィキの影響下にあった。一九一九年三月、反ソ扇動のかどで禁止された。一三六

(一〇四) 一九一八年一〇月三〇日の夜半、ハンガリーにブルジョア民主主義革命が起こり、権力は社会民主党と連立政府を結成した自由主義的ブルジョアジーの手に移った。新政府は、労働者階級や農民の状態を改善するような措置をまったくとらなかったので、勤労大衆の不満を買い、労働者・農民・兵士代表ソヴェトが組織されはじめた。一一月一六日、ハンガリーは共和国と宣言され、旧国会は解散された。ブルジョア諸政党は憲法制定議会招集の広範な扇動を繰りひろげた。一九一八年一一月二〇日に成立したハンガリー共産党は、「全権力をソヴェトに！」のスローガンをかかげた。共産党の指導のもとに、同年末から翌年はじめにかけて、ハンガリー・プロレタリアートの大規模な行動がいくつも起こった。国内に革命的情勢が生まれた（注一二七を参照）。

スイスでも、十月革命の影響をうけて一九一七—一九一九年に労働運動が高まった。一九一八年一一月、ソヴェト・ロシア支持の政治的ゼネストがスイスに始まった。スイス社会党左派の革命的分子は共産主義グループを結成し、リーフレットや小冊子で労働者・農民代表ソヴェトの組織を呼びかけた。コミンテルン第一回大会で、スイス共産主義グループの代表は、共産主義的綱領を政綱として承認するチューリヒ労働者代表ソヴェトの成立を報告した。一三六

(一〇五) 一九一八年一一月一八日付の新聞『ローテ・ファーネ』第三号にのったローザ・ルクセンブルクの論文『始まり』をさす。

『ローテ・ファーネ』(『赤旗』) ——カール・リープクネヒトおよびローザ・ルクセンブルクによって「スパルタクス同盟」の中央機関紙として創刊された新聞、のちドイツ共産党の中央機関紙。一九一八年一一月九日からベルリンで発行され、再三弾圧と禁止にあった。一九三三年にファシスト独裁が樹立されたのち、『ローテ・ファーネ』は禁止されたが、非合法に続刊された。一九三五年、新聞の発行所はプラハ（チェコスロヴァキア）に移され、一九三六年一〇月から一九三九年の秋までは、ブリュッセル（ベルギー）で発行された。一三八

（一〇六）　貧農委員会——一九一八年六月一一日の全ロシア中央執行委員会の布告によって設置された。貧農委員会は、富農とたたかい、農村でソヴェト権力を強化するうえで大きな役割を果たし、穀物や農具の厳格な記録と分配をおこなった。一九一八年秋までに貧農委員会はその課題を解決したし、他方、「ソヴェト共和国の全土に一様なソヴェト組織をつくりあげてソヴェト建設を完成する」必要があったため、一九一八年一一月の第六回臨時全ロシア・ソヴェト大会は、すべての郷および村ソヴェトの改選を提案し、この改選の実施を貧農委員会に担当させた。改選後、貧農委員会はその活動を停止し、全資金と事務を新しいソヴェトに引き渡した。三九

（一〇七）　ロシア共産党（ボ）第八回大会——一九一九年三月一八日から二三日までモスクワでひらかれた。大会には、三一万三七六六名の党員を代表する議決権をもった代議員三〇一名、評議権をもった代議員一〇二名が参加した。大会の議題は、中央委員会の報告、党綱領、共産主義インタナショナルの創立、軍事情勢と軍事政策、農村における活動、組織問題、中央委員会の選挙、などであった。

レーニンは開会と閉会の辞を述べ、中央委員会の報告、党綱領についての報告、農村における活動についての報告をおこない、軍事問題について演説した。

大会の中心問題は新しい党綱領の審議と採択であった。新しい綱領草案は、第七回党大会で選出されたレーニンを長とする綱領起草委員会が起草した。綱領草案の主要な部分は、すべてレーニンが書いた（全集、第二九巻、八五—一二六ページを参照）。新しい綱領は、資本主義から社会主義への過渡期全体における党の諸任務を規定していた。一九一九年二月二五—二七日の『プラウダ』に発表された草案の序文のなかで、起草委員会は、「資本主義の最新の帝国主義段階だけでなく、世界大戦の経験や、国家権力を掌握したプロレタリアートの一年間の実践をもマルクス主義的に研究した結果」が、綱領に反映されている、と指摘した。

綱領草案の審議のさい、エヌ・イ・ブハーリンは、帝国主義の規定とならんで独占以前の資本主義と小商品生産の特徴づけを綱領にふくめることに反対した。これは、レーニンの社会主義革命論に反する、根本的に誤った立場であった。この立場は、プロレタリアートが民主主義運動を支持する必要、社会主義建設にあたって労働者階級と勤労農民が同盟する必要を否定し、同時にまた小商品生産から富農分子が発生し成長する事実を無視し、富農の危険性を軽視することと結びついていた（その結果、のちにブハーリンは、社会主義への「富農の成長移行」という日和見主義的理論におちいった）。ブハーリンとピャタコーフはまた、民族自決権の条項を綱領から削除することを要求した。このような提案は、党の民族政策の基礎と、ソヴェト・ロシアの国際的影響力とをそこなうものであった。

大会は、ブハーリンとピャタコーフの提案を否決し、レーニンの党綱領草案を採択した。

中農にたいする態度の問題は、大会の最も重要な問題のひとつであった。中農がソヴェト権力の側に転換しはじめた一九一八年秋、レーニンは、この転換を確保し、中農の中立化から、貧農に依拠して富農とたたかい、プロレタリアートの指導的役割を保持しながら、中農との強固な同盟に移る必要があると指摘した。第八回党大会は、この政策を承認し、レーニンの書いた『中農にたいする態度についての決議』（全集、第二九巻、二〇九—二一二ページを参照）を採択した。レーニンの政策は、労働者階級と農民の軍事的＝政治的同盟の強化をうながし、干渉軍と白衛軍に勝利するうえで決定的な役

割を果たした。この政策は、その後の労働者と農民の協力による社会主義建設を保障した。

軍事情勢の問題、党の軍事政策の問題、赤軍建設の問題は、大会の議事で重要な地位を占めていた。中央委員会のテーゼに反対したのは、旧「左翼共産主義者」（ヴェ・エム・スミルノーフ、ゲ・イ・サファーロフ、エリ・ゲ・ピャタコーフ、その他）からなるいわゆる「軍事的反対派」であった。「軍事的反対派」は、パルチザン主義の遺物を擁護し、旧来の軍事専門家を引きいれる必要を否定し、軍隊内に厳格な規律を設けることに反対した。レーニンは一九一九年三月二一日に大会の秘密総会で演説して、厳格な規律をもつ正規軍を建設し、ブルジョア軍事科学の成果を利用し、コミサールと党細胞の監督下に軍事専門家を引きいれる必要を強調した。発言した代議員の大多数は「軍事的反対派」を非難した。同時に共和国革命軍事会議の活動の誤りと欠陥、とりわけ同議長トロツキーの行動がきびしく批判された。トロツキーは、軍隊内での党幹部の役割を軽視し、動員のさいの階級的選抜の原則に違反していた。レーニンの命題にもとづいて調停委員会の作成した軍事問題についての決議案は、党大会の全員一致（棄権一名）で可決された。

大会は組織問題についての決議のなかで、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のもとでの党の指導的役割を否定したサプローノフ＝オシンスキー一派に反撃をくわえた。党建設についての決定では、労働者・農民以外の分子の入党条件を厳格にし、党の社会的構成を悪化させないようにする必要が強調された。一九一九年五月一日までに全党員の再登録をおこなうことが決定された。

第八回党大会は、国内の少数民族地域での共産党の結成に関連して、連合制的党組織の原則を拒否し、単一の中央集権的な共産党の必要を認め、各民族ソヴェト共和国の党中央委員会が地方委員会の権限をもって、ロシア共産党（ボ）中央委員会に下属することを決定した。

大会は、共産主義インタナショナルの創立を歓迎し、その政綱に全面的に同意した。一三〇

（一〇八）　ロシア共産党（ボ）第七回大会（一九一八年三月六―八日）で選出された、レーニンをはじめとする綱領起草委員会のことである。一三〇

（一〇九）　三十年戦争（一六一八―一六四八年）は全ヨーロッパ戦争であった。戦争は、ハプスブルク君主国のくびきとカトリック反動派の攻勢とに抗するベーメンの蜂起で始まった。戦争は、封建的カトリック陣営（教皇、スペインとオーストリアのハプスブルク家、ドイツのカトリック派諸侯）と、ハプスブルク家の敵であるフランス国王に支援されたプロテスタント諸国（ベーメン、デンマーク、スウェーデン、ブルジョア的オランダおよび宗教改革を受けいれた一連のドイツ諸邦）とのあいだの戦争に転化した。ドイツはこの戦いの主戦場となり、参戦諸国による略奪とその強盗的要求との対象となった。この戦争は、当初は封建的＝絶対主義的ヨーロッパの反動勢力にたいする抵抗という性格をもっていたが、とくに一六三五年以後は、相あらそう外国征服者たちがあいついでドイツ領土に侵入して、ドイツの未曾有の荒廃をもたらした。戦争は、一六四八年にヴェストファーレン講和条約の締結をもって終わり、この講和条約によってドイツの分裂が固定化された。一三一

（一一〇）　エンゲルス『ボルクハイムの小冊子「一八〇六―一八〇七年のドイツの熱狂的愛国者を追憶して」の序文』、二一巻選集、第一七巻、五九ページを参照。一三一

（一二）マルクス『資本論』第一巻、全集、第二三巻a、四八三ページを参照。一三三

（一二）本選集、第八巻、一九〇一一九四ページを参照。一三五

（一三）レーニンが一九一七年一二月一八（三一）日に、フィンランドのブルジョア政府の首班ペール・スヴィンフヴドと国務相K・エンケルに、フィンランドの独立を承認するという人民委員会議の決定を伝えたことをさす。一九一七年一二月二二日（一九一八年一月四日）、全ロシア中央執行委員会はフィンランド独立承認の布告を承認した。一三六

（一四）モスカーリ――ウクライナ、ベロルシア、ポーランドなどで大ロシア人をさすのに用いられた卑称。一三六

（一五）一九一九年三月にバシキール代表団とのあいだにおこなわれたバシキール自治ソヴェト共和国の創設についての話合いをさす。三月二〇日、「ソヴェト自治バシキリアについての中央ソヴェト政府とバシキール政府との協定」が調印された。この協定により、ソヴェト憲法にもとづいてバシキール自治ソヴェト共和国を創設することが定められ、同共和国の国境と行政区画が決定された。協定は一九一九年三月二三日付の『イズヴェスチヤ』第六三号に発表された。一三六

（一六）ムラー――回教の聖職者で、カージー（法官）に下属し、礼拝堂ではイマーム（導師）と同様の役をする。一三七

（一七）ワルシャワ労働者代表ソヴェト――一九一八年一一月一一日に創設された。労働者代表ソヴェトはまた、ポーランドの他の多くの都市や工業中心地にも成立した。ワルシャワ労働者代表ソヴェトは、企業で八時間労働制を事実上実施しはじめ、企業主のサボタージュとの闘争を開始し、また革命ロシアと提携する決定などを採択した。しかし、一九一九年の夏、各地のソヴェトはポーランドのブルジョア政府によって一掃された。一三九

（一八）この草案は、『ロシア共産党（ボ）第八回大会の党諸組織への呼びかけ』として同日の大会で採択され、翌三月二〇日の『プラウダ』に発表された。一四〇

（一九）『消費コミューンにかんする布告』は、一九一九年三月一六日に人民委員会議で採択され、三月二〇日の『イズヴェスチヤ』に発表された。レーニンは布告の作成に直接参加した。この布告により、都市と農村にあるすべての協同組合が単一の消費コミューンに統合された。協同組合のこの新しい名称があちこちで布告の誤解を生んだので、全ロシア中央執行委員会は、一九一九年六月三〇日の「労農消費組合について」の決定のなかで、「消費コミューン」という名称を「消費組合」という名称にあらためることを決定した。一四二

（二〇）ノーヴァヤ・ジーズニ派――新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』を中心に集まっていた国際派メンシェヴィキをさす。レーニンは、同派を皮肉って、「自称国際主義者」、「でもマルクス主義者」とよんでいた。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』（『新生活』）――メンシェヴィキ的傾向の日刊新聞で、一九一七年四月一八日（五月一日）からペテルブルグで発行されていた。十月革命後、ソヴェト権力にたいして敵対的な立場をとったため、一九一八年六月に禁止された。一四六

（二一）一九一八年七月に第五回全ロシア・ソヴェト大会で可決されたロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法は、ソヴェトの選挙のさい、プロレタリアートに特権をあたえていた。全ロシア・ソヴェト大会の代議員は、次のような代表基準にしたがって選挙された

――都市住民は有権者二万五〇〇〇名ごとに代議員一名、農村住民は有権者一二万五〇〇〇名ごとに代議員一名。憲法第二三条には、「労働者階級全体の利益にしたがい、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国は、社会主義革命の利益をそこなうために利用されるような権利を、個々人および個々のグループから剝奪する」と明記してあった。

この条文は、一九三六年に第八回ソ連邦ソヴェト大会が新しいソ連邦憲法を可決するまで効力をもっていた。この新憲法によって、すべての市民は、ソヴェトの代議員を選挙し、また代議員に選挙される平等の権利をもつようになった。一四八

（一三二） **チャーティズム**――一九世紀の三〇―四〇年代におけるイギリス労働者の大衆的革命運動。この名称は**charter**（憲章）に由来する。この運動の組織上の中心は「ロンドン労働者協会」であった。協会の指導部は一八三八年に、二一歳に達した男子の普通選挙権、秘密投票、議員立候補者にたいする財産資格の撤廃、毎年の議会選挙、その他の要求をふくむ議会への請願書（人民憲章）を作成した。一八四〇年に創立された「全国チャーティスト協会」は、労働運動の歴史上最初の大衆的な労働者党であった。一八四八年以後、チャーティズムの運動は衰退にむかった。チャーティズムの運動の失敗のおもな原因は、明確な綱領と戦術をもち首尾一貫して革命的なプロレタリア的指導部が、なかったことにあった。しかし、チャーティストは、イギリスの政治史にも、国際労働運動の発展にも、巨大な影響をおよぼした。それは「最初の広範な、真に大衆的な、政治的にはっきりしたかたちをとったプロレタリア的革命運動」（レーニン、全集、第二九巻、三〇七ページ）であった。一五三

（一三三） 一八四八―一八四九年のフランスのブルジョア民主主義革命のさなかに、一八四八年六月二三日から二六日にかけてパリの労働者がおこなった英雄的蜂起、いわゆる六月蜂起をさす。ブルジョア的臨時政府から独裁的全権をあたえられたカヴェニャック将軍によって、激しい市街戦ののち、武力をもって残虐に鎮圧された。一五四

（一三四） 一八五八年一〇月七日付のマルクスにあてたエンゲルスの手紙、二三巻選集、第九巻、四九〇―四九一ページを参照。一五四

（一三五） 一八五六年四月一六日付のエンゲルスにあてたマルクスの手紙、選集、第八冊、一七七ページを参照。一五五

（一三六） これはレーニンの論文『ベルン・インタナショナルの英雄たち』をさしている。全集、第二九巻、三九五―四〇五ページを参照。一五七

（一三七） 一九一九年三月二一日、ハンガリーにソヴェト共和国が宣言された。ハンガリーの社会主義革命は比較的平和的におこなわれた。革命運動を鎮圧する力もなく、対外的な難局をきりぬける力もなかったハンガリー・ブルジョアジーは、革命の発展をはばむために権力を右派社会民主主義者に引き渡すことにきめた。しかし、そのころハンガリー共産党の権威が大衆のあいだで非常に高く、また共産主義者との同盟を求める一般社会民主党員の要求が非常に強かったので、社会民主党の指導部は、逮捕されていた共産党の指導者たちに共同で政府を組織することを申し入れた。社会民主党の指導者は、ソヴェト政府の組織、ブルジョアジーの武装解除、赤軍と民兵の創設、地主の土地の没収、工業の国有化、ソヴェト・ロシアとの同盟の締結など、共産主義者の提出した条件を受けいれざるをえなかった。それと同時に、両党が合同してハンガリー社会党を結成する協定も調印された。両党の合同のさいに誤りがおかされ、そ

れがのちに禍因を残した。日和見主義的分子を除かずに、機械的な合体によって合同がおこなわれた。

革命政府の第一回閣議で赤軍の創設が決定された。ソヴェト政府は、三月二六日、工業企業、交通機関、銀行の国有化についての布告を公布し、四月二日には外国貿易の独占が布告された。労働者の賃金は平均二五％引き上げられ、八時間労働日が実施された。四月二日に可決された農地改革法によると、面積一〇〇ホルド(五七ヘクタール)以上の領地はすべて没収され、大規模な国営農場とされるが、事実上は同じ管理者の手に残されることになっていた。ソヴェト権力の手から土地を受け取れると思っていた貧農は、期待を裏切られた。このことは、プロレタリアートと農民の強固な同盟の確立を妨げ、ハンガリーのソヴェト権力を弱めた。

一九一九年八月一日、外国の干渉軍と国内の反革命派によってソヴェト権力は打倒された。一五八

(二八) マルクス『ゴータ綱領批判』、全集、第一九巻、二八一二九ページを参照。一五九

(二九) マルクス『資本論』第一巻、全集、第二三巻a、七三一七四ページを参照。一六〇

(三〇) 一九一八年一一月にドイツ帝国主義が崩壊したのち、イギリス、フランス、アメリカ合衆国、日本等の協商国帝国主義者は、ソヴェト共和国にたいする公然たる軍事干渉を開始した。ソヴェトの国の南部では、黒海からフランス、ギリシア、ルーマニアその他の軍隊が大部隊を揚陸し、北部のムルマンスクとアルハンゲリスクには、イギリス兵とアメリカ兵四万人以上が上陸した。極東では、アメリカ軍と日本軍が上陸し、日本は一〇万近い兵力を投入した。それと同時に、帝国主義者は、エス・エルとメンシェヴィキを積極的な手先として、国内の反革命派への援助を強化した。シベリアでは、一九一八年一一月にイギリスの干渉軍が提督コルチャックを「最高統治者」に押し立てた。コルチャックは、すべての反ソヴェト勢力を糾合し、富農の支持に依拠してシベリアで地歩を固め、またウラルとその工業を手中におさめた。南部では、協商国は、デニーキン将軍を総指揮官として、ドン・カザック軍と白衛派の志願軍を統合させ、これに装備や弾薬やを供給し、軍事顧問を派遣した。

一九一九年三月には、ソヴェト国家の軍事情勢はきわめて緊張したものとなった。コルチャック軍は、東部戦線でソヴェト軍の前線を突破し、ヴォルガに向かって進出した。南部ではデニーキン軍がドンバスの一部を奪取し、ソヴェトの国はその石炭基地を失った。五月にはユデーニチ将軍がペトログラードめざして攻勢を開始した。協商国によって編成されたポーランド軍は、リトアニアとベロルシアに侵入した。北方からも、バルト海沿岸地方でも、干渉軍と白衛軍とが攻撃してきた。反革命の全兵力が攻勢に転じたのである。

干渉と内戦の開始以来、ロシア共産党、労働者階級、人民大衆は、レーニンの指導のもとに、全力をふりむけて内外の敵と戦い、社会主義祖国の防衛にあたった。この目的のために国の工業と全資源が動員された(戦時共産主義)。一九一九年四月一一日、党中央委員会は、レーニンの書いた『東部戦線の状況についてのロシア共産党(ボ)中央委員会のテーゼ』(全集、第二九巻、二七四一二七七ページを参照)によって、すべての勤労者に敵を粉砕するため全力をふりしぼるように呼びかけた。このテーゼは偉大な動員的役割を果たした。二万人をこえる共産党員、三〇〇〇人以上の共産青年同盟員、六万人以上の労働組合員が戦線に派遣された。労働者階級は、党中央委員会の呼びかけにこたえて、大衆的な労働英雄主義を発揮

した。労働者大衆のただなかから、社会的労働の新しい形態——共産主義土曜労働が生まれてきた。一九一九年の後半には、共産主義土曜労働は全国にゆきわたった。レーニンは、共産主義土曜労働を偉大な創意とよび、英雄的な労働、共産主義の事実上の端緒と評価した。銃後の労働者のこの英雄的労働のおかげで、赤軍にすべての必要物資、まず第一に兵器弾薬が保障された。赤軍は東部で反攻に転じ、一九一九年の夏までに主要な危険としてのコルチャック軍の脅威は解消させられた。一六三

(一三一) これは、レーニンの書いた『東部戦線の状況についてのロシア共産党(ボ)中央委員会のテーゼ』をさしている。前注参照。一六三

(一三二) 反革命団体「全国中央部」に指導されたペトログラード明渡しの陰謀をさす。一九一九年六月一二日の夜半、陰謀参加者は、ペトログラードへの主要近接路のひとつであるクラースナヤ・ゴールカ堡で反乱を起こした。反乱軍を撃滅するため、海岸警備隊、バルト艦隊の艦艇、空軍、義勇兵の部隊が派遣された。六月一五日の夜半、海岸警備隊が要塞を占領した。陰謀を指導した反革命団体も摘発されて、一掃された。一七〇

(一三三) サドヴァーの会戦——サドヴァーはチェコスロヴァキアのフラデツ-クラーロヴェー州内の村(いまは市)。一八六六年七月三日におこなわれたこの会戦は、プロイセン軍の完勝とオーストリア軍の壊滅に終わり、プロイセン=オーストリア戦争の結末を決定した。一七四

(一三四) バオバブは幹の直径が八—九メートルになる大木。もくせい草は三〇センチ内外の植物であるから、その鉢にバオバブの木を植えるというのは、かなわぬ大望をいだくことになる。一七五

(一三五) 秦佐八郎(一八七三—一九三八年)のこと。一七六

(一三六) ロシア共産党(ボ)第八回大会で採択された党綱領をさす。国民文庫『党綱領問題』下、七〇八ページを参照。一七八

(一三七) 全集、第二三巻a、三九七—三九八ページを参照。一七八

(一三八) 注一一九を参照。一八〇

(一三九) スヴェルドロフ共産主義大学——一九一八年にスヴェルドロフの提唱で全ロシア中央執行委員会に付設されたいくつかの扇動家・指導員養成所の後身。一九一九年七月、スヴェルドロフ共産主義大学となった。レーニンは大学の組織、その教案作成に多大の注意をはらった。一九一九年七月一一日と八月二九日、レーニンはこの大学で国家について講義した(二回目の講義の記録は見つかっていない)。一八四

(一四〇) レーニン『プロレタリアートの独裁について』、全集、第三〇巻、八四—九三ページを参照。二〇七

(一四一) アルテリ——歴史的には、ロシアにおける単純商品生産者、すなわち農民、手工業者、漁民の協同組合。基本的な生産手段は社会化されていて、全組合員が集団的労働に従事し、生産物を共同で販売し、その収益を一定の割合で分配していた。今日の社会主義的集団農業の基本形態もこれである。二〇九

(一四二) 全集、第二〇巻、一一〇—一一一ページを参照。二一五

(一四三) この論文は完結されなかった。二一六

(一四四) 東洋諸民族共産主義組織第二回全ロシア大会——ロシア共産党(ボ)中央委員会の東洋諸民族共産主義組織中央ビューローによって招集され、一九一九年一一月二二日から一二月三日までモスクワでひらかれた。大会には、議決権をもつ代議員七一名、評議権をもつ代議員一一名が出席した。レーニンは、大会の初日に現情

勢について報告した。レーニンの報告にもとづいて採択された決議は、「東洋での活動の基礎となるべき主要なテーゼを具体化し作成するために」議長団に回付された。大会は、中央ビューローの活動報告、各地の報告、中央回教徒軍事委員会および民族人民委員部中央回教徒委員部の報告、タタール＝バシキール問題、さらに国家組織分科会および党問題分科会の報告、東洋の婦人のあいだでの活動、青年のあいだでの活動についての報告、その他を聴取した。大会は、東洋での党活動とソヴェト活動の任務を定め、新中央ビューローを選出した。二六

（四五）ヴェルサイユ講和条約——一方のアメリカ、イギリス、フランス、イタリア、日本およびその連合国と、他方のドイツとによって、一九一九年七月二八日に調印された条約で、第一次世界大戦を終結させたもの。ヴェルサイユ条約の目的は、戦勝国に有利なように世界の再分割を確定し、またソヴェト・ロシアの圧殺と世界革命運動の粉砕とを目標とする国際関係の体制をつくりだすことにあった。三〇

（四六）「人民社会党」（勤労人民社会党、エヌ・エス）——一九〇六年に社会革命党（エス・エル）右派から分離した小ブルジョア的な党。エヌ・エスはカデットとのブロックを主張した。第一次世界大戦中、「人民社会党」は、社会排外主義の立場をとった。二月革命後は、トルドヴィキと合同し、自党の代表者を入閣させて、ブルジョア的臨時政府の活動を積極的に支持した。十月革命後、エヌ・エスは反革命の陰謀と武力行動にくわわった。外国の軍事干渉および内戦の時期に消滅した。三六

（四七）「エヂンストヴォ」（「統一」）派——プレハーノフを指導者とする祖国防衛派メンシェヴィキの極右グループ。その機関紙『エヂンストヴォ』は、一九一七年三月から一一月までペトログラードで発行されていた。同紙は、臨時政府を支持し、帝国主義戦争を「完全な勝利まで」つづけるように要求した。三六

（四八）政府の構成問題について話し合うためにヴィクジェリ（鉄道従業員組合全ロシア執行委員会）でひらかれた会議にボリシェヴィキが参加したことをさす。

メンシェヴィキとエス・エルが指導的役割を演じていたヴィクジェリは、ペテルブルグで十月武装蜂起が勝利したのち、反革命のとりでの一つであった。一九一七年一〇月二九日（一一月一一日）、ヴィクジェリは、「ボリシェヴィキから人民社会党にいたる」あらゆる政党の代表がはいるような、新しい、いわゆる「同質の社会主義政府」を組織することを呼びかける決議を採択した。同日、政府の構成問題についての会議がヴィクジェリでひらかれた。ボリシェヴィキ党中央委員会は、交渉に参加してもよいと考えたが、そのさい、政府および全ロシア中央執行委員会の構成拡大についての交渉は、第二回ソヴェト大会で採択されたソヴェト権力の活動計画の承認をもとにする場合にだけ可能だ、と認めた。党中央委員会の委任により、エリ・ベ・カーメネフとゲ・ヤ・ソコーリニコフが会議に参加した。全ロシア中央執行委員会も、その代表デ・ベ・リャザーノフその他を会議に派遣した。

しかし、メンシェヴィキとエス・エルが、連立政府内に指導的地位を占め、それを利用してプロレタリアートの執権とたたかうつもりであることが明らかとなったため、党中央委員会は、一一月一（一四）日、交渉を打ち切ることを決定した。三三

（四九）一八七〇年一二月一三日付のクーゲルマンあてのマルクスの手紙、国民文庫『クーゲルマンへの手紙』、一四四ページを参

照。二三六

（二五〇）　マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』（全集、第八巻、一九三ページ）およびマルクスの『フランスにおける内乱』ドイツ語第三版へのエンゲルスの序文（全集、第一七巻、五九四―五九六ページ）を参照。二三六

（二五一）　本選集、第八巻、二一〇―二一四ページを参照。二三六

（二五二）　フィンランドでは、一九一八年一月二七日、南部の工業地帯でプロレタリア革命が起こった。革命はフィンランド社会民主党指導部の呼びかけに応じて開始された。スヴィンフヴドのブルジョア政府は打倒され、権力は労働者の手に移った。一月二九日、E・ギュリング、オット・クーシネン、ユリエ・シロラ、A・タイミ、その他からなる人民全権代表会議というかたちで、フィンランド革命政府が樹立された。しかし、プロレタリア革命はフィンランドの南部でしか勝利しなかった。スヴィンフヴド一派は国の北部で地歩をかため、そこに全反革命勢力を集中しはじめ、白軍を編成して内乱を開始し、ドイツ皇帝政府に援助を求めた。ドイツ軍が介入した結果、三ヵ月間つづいた激しい内戦ののち、五月二日にフィンランドの労働者革命は鎮圧された。国内に白色テロルが始まり、数千の革命的な労働者農民が処刑され、獄中で虐殺された。二四六

（二五三）　全集、第二九巻、五六八―五七六ページを参照。二四八

（二五四）　**全ウクライナ軍事革命委員会**――一九一九年一二月一一日（ポルタヴァおよびハリコフがデニーキンの支配から解放された日）に、ウクライナ中央執行委員会および人民委員会議の決定によって、ゲ・イ・ペトロフスキーを議長とし、ヴェ・ペ・ザトンスキー、デ・ゼ・マヌイリスキーおよび他の諸政党の代表二名を委員として設置されたウクライナの革命的臨時権力機関。ウクライナ中央執行委員会および人民委員会議の機能を付与された革命委員会の任務は、白衛軍を完全に撃滅するうえで赤軍に協力し、地主と地主的土地所有を一掃し、ソヴェト・ウクライナの領土に強固な労農権力を樹立し、ウクライナ領土の大部分が解放されしだい、第四回全ウクライナ・ソヴェト大会を招集することにあった。二五一

（二五五）　**ボロチバ派**――一九一八年五月、ウクライナ社会革命党の分裂後に生まれた小ブルジョア民族主義政党の党員。党中央機関紙『ボロチバ』（『闘争』）からきた名称。一九一九年三月にはウクライナ・ボロチバ派共産主義者社会革命党、八月にはウクライナ・ボロチバ派共産党という名称を採用した。

ボリシェヴィキの影響力が農民大衆のあいだに増大し、ソヴェト権力がウクライナで成功をおさめたので、ボロチバ派は自主的解散を決定せざるをえなかった。一九二〇年三月にひらかれたウクライナ共産党（ボ）第四回協議会は、ボロチバ派をウクライナ共産党に入党させることに賛成した。しかし、その後、多くのボロチバ派は反ソ活動をつづけ、ウクライナで反革命分子、ブルジョア民族主義分子の闘争を指導した。二五一

（二五六）　著作『共産主義内の「左翼主義」小児病』は、共産主義インタナショナル第二回大会のために書かれた。

この著作の原稿は四月二七日に完成し、補論は、ゲラ刷の出た五月一二日に書かれた。レーニンは、コミンテルン第二回大会に間にあわせるため、植字から印刷まで自分で監督した。この著作は一九二〇年六月一二日に出版され、七月にはフランス語版と英語版が国内で発行された。この著作はコミンテルン第二回大会の全代議員に配布され、そのなかの重要な命題や結論は、大会決定の基礎になった。

本書の手稿には、『(マルクス主義の戦略戦術についての平易な講話の試み)』という副題と、次のようなロイド・ジョージへの献辞とが書かれている。「ほとんどマルクス主義的な、いずれにせよ全世界の共産主義者とボリシェヴィキにとって非常に有益な一九二〇年三月一八日の演説に謝意を表して、いとも尊敬すべきロイド・ジョージ氏に本書を献げる。」レーニンの生前に出た版では、この副題と献辞はけずられていた。三六六

(三五七)　小冊子『世界革命』は、オットー・バウアーの書いたもの。三六七

(三五八)　『イスクラ』(『火花』)——一九〇〇年にレーニンが創刊した最初の全国的なマルクス主義的非合法新聞で、党創立に決定的な役割を果たした。

一九〇三年七—八月にひらかれた第二回党大会後まもなく、メンシェヴィキはプレハーノフの支持をえて『イスクラ』をその手におさめた。第五二号からの『イスクラ』(新『イスクラ』)は、革命的マルクス主義の機関紙ではなくなった。三六七

(三五九)　**神聖同盟**——対ナポレオン戦争の終了後、一八一五年九月二六日に、ロシアのツァーリ、アレクサンドル一世の提唱で設立された、あらゆる進歩的運動との闘争のためのヨーロッパのほとんどすべての君主国の反動的同盟。君主たちは、どこで革命が起こっても、その鎮圧のために援助し合う義務を負った。三六八

(三六〇)　**レナ事件**——一九一二年四月四(一七)日、シベリアのレナ金鉱のストライキのさいちゅうに憲兵将校が労働者に発砲して、五〇〇名以上の死傷者を出した。この事件にたいして、ペテルブルグ、モスクワ、その他の工業中心地のプロレタリアートは、大衆的なストライキやデモンストレーションや集会でこたえた。レナ事件は、大衆の革命的な気分を革命的高揚に転化するきっかけとなった。三六三

(三六一)　本書、三四ページ、および注三四を参照。三六三

(三六二)　第四国会のボリシェヴィキ議員、ア・イェ・バダーエフ、エム・カ・ムラーノフ、ゲ・イ・ペトロフスキー、エフ・エヌ・サモイロフ、エヌ・エル・シャーゴフのこと。一九一四年七月二六日(八月八日)の国会で、ボリシェヴィキ議員団はロシアの参戦に抗議した。議員団はまた、戦費への賛成投票を拒否し、大衆のあいだで革命的宣伝をおこなった。一九一四年一一月、ボリシェヴィキ議員は逮捕され、翌年二月、東部シベリアへの終身流刑に処せられた。法廷におけるこれらボリシェヴィキ議員の闘争は、専制の正体を暴露し、反軍国主義の宣伝をおこない、大衆の意識を革命化するうえで大きな役割を果たした。三六三

(三六三)　**ロンゲ主義**——ジャン・ロンゲを指導者とするフランス社会党内の中央派的潮流。第一次世界大戦中、ロンゲ派は社会排外主義者にたいして妥協政策をとった。この派は革命的闘争を否認し、帝国主義戦争における「祖国擁護」の立場に立った。十月革命後、ロンゲ派は、口先ではプロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)を支持すると称しながら実際にはそれに反対しつづけた。一九二〇年一二月、ロンゲ派は公然たる改良主義者とともに脱党し、いわゆる第二半インタナショナルに加盟した。三六三

(三六四)　**イギリス独立労働党**——一八九三年に「新労働組合」の指導者たちが創立した改良主義的な組織。キア・ハーディ、ラムゼイ・マクドナルドがその指導者。独立労働党は、主として議会的闘争形態や自由党との議会取引に注意をはらった。三六三

(三六五)　**フェビアン派**——一八八四年に創立されたイギリスの改

良主義団体フェビアン協会の会員。この協会の名は、ハンニバルとの戦争で決戦を回避する戦術をとった紀元前三世紀のローマの司令官ファビウス・マクシムスの名からきている。おもな会員は、ブルジョア知識人である学者、作家、政治家（シドニおよびビアトリス・ウェッブ夫妻、ラムゼイ・マクドナルド、バーナード・ショーなど）であった。プロレタリアートの階級闘争と社会主義革命との必要を否定し、改良を積みかさね、社会を徐々に改造してゆけば、資本主義から社会主義に移ることが可能であると主張した。一九〇〇年に、同協会は労働党に加盟した。「フェビアン社会主義」は、労働党イデオロギーの一源泉となっている。二六三

（一六六）「入閣主義」（または「入閣社会主義」）——社会主義者が反動的なブルジョア政府に参加するという日和見主義的な戦術。一八九九年にフランスの社会主義者ミルランがワルデック・ルソーのブルジョア政府に入閣したことから、ミルラン主義ともいう。二六四

（一六七） ロシア社会民主労働党（ボ）第七回全国協議会の諸決議『臨時政府にたいする態度について』、『労働者・兵士代表ソヴェトについて』（レーニン全集、第二四巻、二八〇—二八一ページ、三〇一—三〇二ページ）を参照。二六五

（一六八） 一九一四年四月にボリシェヴィキの雑誌『プロスヴェシチェーニエ』（『啓蒙』）に発表されたレーニンの論文『ドイツ労働運動のなにをまねてはならないか』（全集、第二〇巻、二六五—二七〇ページ）をさすらしい。この論文では、一九一二年のアメリカ訪問中に下院で政府とブルジョア諸政党にあいさつを述べたドイツの社会民主主義者カール・レギーンの裏切り的な態度が暴露されている。二六七

（一六九） 本選集、第八巻、五九ページを参照。二六八

（一七〇） 召還派と最後通牒派をさす。両派とのたたかいは一九〇八年におこなわれ、一九〇九年には召還派の指導者ア・ボグダーノフがボリシェヴィキ党から除名された。召還派は、革命的言辞に隠れて、第三国会から社会民主党議員を召還し、労働組合や協同組合など、合法団体内での活動をやめるように要求した。最後通牒主義は召還主義の一種であった。社会民主党議員にたいして骨のおれる、ねばりづよい工作をおこない、彼らを一貫した革命的議員に育てあげる必要を理解しない最後通牒派は、党中央委員会の決定に絶対服従せよという最後通牒を社会民主党国会議員団につきつけ、これが遂行されない場合には社会民主党議員を国会から召還することを提案した。一九〇九年六月にひらかれたボリシェヴィキの新聞『プロレタリー』拡大編集局会議は、その決定で、「ロシア社会民主労働党内の特定の潮流としてのボリシェヴィズムは、召還主義および最後通牒主義とは縁もゆかりもない」と述べるとともに、「断固として革命的マルクス主義からのこれらの偏向とたたかうこと」を、ボリシェヴィキに呼びかけた（全集、第一五巻、四三四—四三五ページを参照）。二六八

（一七一） 諮問「議会」——一九〇五年八月六（一九）日、ツァーリの詔書——国会開設法と国会選挙規則——が公表された。この国会は、ツァーリから原案作成を委任されたア・ゲ・ブルィギン内相の名にちなんでブルィギン国会とよばれた。この原案によると、国会は法律を可決する権限もなく、ツァーリの諮問機関として若干の問題を審議するものにすぎなかった。ボリシェヴィキはブルィギン国会の積極的なボイコットを労働者農民に呼びかけた。ボリシェヴィキは、すべての革命勢力を動員し、大衆的政治的ストライキをおこない、武装蜂起を準備するために、ブルィギン国会のボイコット

運動を利用した。ブルィギン国会の選挙は実施されず、政府はその召集に失敗した。革命の高揚と一九〇五年一〇月の全国的政治的ストライキが、この国会を一掃した。 三六八

（一七二） **一九〇五年の十月革命**——一九〇五年一〇月の全国的政治的ストライキをさす。このストライキは、専制の打倒、ブルィギン国会の積極的ボイコット、憲法制定議会の召集、民主的共和制の樹立というスローガンのもとにおこなわれた。全国的政治的ストライキは、労働運動の実力と威力を示し、農村と陸海軍の内部における革命的闘争の発展を刺激した。一〇月のストライキはプロレタリアートを一二月の武装蜂起にみちびいた。十月ストライキについては、レーニンの論文『全国的政治的ストライキ』（全集、第九巻、四一六—四一九ページ）を参照。 三六八

（一七三） これは、ドイツ帝国主義とのブレスト－リトフスク条約（注五を参照）の締結をめぐって党内に生まれた「左翼的」反対派にたいするボリシェヴィキ党の闘争をさしている。

ブレスト－リトフスクでドイツ帝国主義者がもちだした条件がまぎれもなく略奪的なものであったにもかかわらず、レーニンは講和の締結を主張した。なぜなら、ソヴェト権力の強化のためには息つぎが必要であり、住民全体が戦争に疲れきって、経済が崩壊し、軍隊が戦闘力をもたない状態で戦争をつづけるなら、ソヴェト権力はかならず破滅する、と考えたからであった。レーニンとその支持者の立場は、トロツキーからも、また「左翼共産主義者」のグループ（ブハーリン、ア・ローモフ（ゲ・イ・オポーコフ）、ア・ア・ヨッフェ、ゲ・エリ・ピャタコーフ、エヌ・オシンスキー（ヴェ・ヴェ・オボレンスキー））、その他からも反対をうけた。「左翼共産主義者」は、交渉の打切りを要求し、冒険主義的な「革命戦争」のスローガンをかかげ、レーニンとその支持者にたいして激しい闘争をおこなった。「左翼共産主義者」の見解は、モスクワ、ペトログラード、ウラルなどの一連の党組織内でもいくらかの支持をうけた。講和交渉の第二段でソヴェト代表団長であったトロツキーは、降伏主義の立場をとった。できるだけ交渉を引きのばしながらも、ドイツ側が最後通告を突きつけてきたなら講和条約に調印せよという、中央委員会の指令およびレーニンの指示にそむいて、トロツキーはブレスト－リトフスクで、ソヴェト・ロシアは講和条約に調印しないが、戦争を停止し、軍隊を復員する、と声明した。この声明の結果、交渉は決裂した。二月一八日、ドイツ軍は全戦線にわたって攻勢を開始した。

二月一七日と一八日（朝）の中央委員会の会議では、ドイツとただちに交渉を始めようというレーニンの提案は、少数の賛成票しかえられなかった。ドイツ軍の攻勢が事実となった二月一七日の夕刻にひらかれた中央委員会の緊急会議で、トロツキーおよび「左翼共産主義者」との激しい闘争をおこなったのち、レーニンは、講和条約の調印に賛成する多数票をはじめて獲得することができた。二月一九日の朝、ソヴェト政府から、ブレスト－リトフスクでドイツ側から提示された条件にもとづいて講和条約に調印することに同意するという無線電報が、ドイツ政府に送られた。

二月二三日の朝、いっそう苛酷な講和条件を内容とするドイツ軍司令部の回答が到着した。二月二三日の党中央委員会でドイツの新たな最後通告を審議したさいにも、激しい闘争がおこなわれた。その結果、党中央委員会は大多数で、ドイツから提示された条件で講和条約にただちに調印しようというレーニンの提案に賛成した。二月二四日の夜半、全ロシア中央執行委員会は、ついでまた人民委員

会議も、ドイツの講和条件の受諾を決定し、これはただちにドイツ政府に通告された。

緊急に招集された第七回党大会は、講和の問題におけるレーニンの方針が正しいことを大多数で確認した。三月一四―一六日にひらかれた第四回臨時ソヴェト大会は、ブレスト条約を批准した。

ドイツの十一月革命（一九一八年）が帝政を打倒したので、ソヴェト政府はブレスト条約を破棄することができた。二六九

（一七四）**「レーバーライト」**――イギリス労働党員のこと。同党は、議会内に労働者の代表団をつくる目的で、労働組合、社会主義団体およびグループの合同体（「労働者代表委員会」）として、一九〇一年に創立された。この委員会が一九〇六年に労働党と改称された。労働党は、労働者からなる政党として発足した（その後、小ブルジョア分子が大量に入党した）が、イデオロギーと戦術の点では日和見主義的な組織である。党の創立以来、幹部はブルジョアジーとの階級協調の政策をとっている。第一次世界大戦のときには、指導者（アーサー・ヘンダソンなど）は社会排外主義の立場をとって、入閣した。彼らの積極的な支持のもとに、一連の反労働者法（国の軍事化などについての法律）が可決された。二七〇

（一七五）**「原則的反対派」**――アナルコ・サンディカリズムの見解を説いていたドイツの「左翼」共産主義者。一九一九年一〇月にハイデルベルクでひらかれたドイツ共産党第二回大会は、この反対派を党から除名した。反対派は一九二〇年四月にいわゆるドイツ共産主義労働者党を結成した。二七三

（一七六）**ヴォラピューク語**――一九世紀の七〇年代にドイツ人牧師ヨハン・シュライアーの考案した世界語。二七四

（一七七）**『コムニスティッシェ・アルバイターツァイトゥング』**（『共産主義労働者新聞』）――ドイツのアナルコ・サンディカリズム的な「左翼」共産主義者の機関紙。一九一九年から一九二七年までハンブルクで発行されていた。

レーニンのあげているカール・エルラーは、ハインリヒ・ラウフェンベルクの筆名。二七六

（一七八）**ピーテルの中央グループ**――一八九五年の秋にレーニンが組織したペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の指導機関。「闘争同盟」は、ペテルブルグの約二〇のマルクス主義サークルを統合した。「闘争同盟」の先頭に立った中央グループには、レーニン、ア・ア・ヴァネーエフ、ペ・カ・ザポロージェッツ、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、クルプスカヤ、エリ・マルトフ、エム・ア・シリヴィン、ヴェ・ヴェ・スタルコーフ、その他がはいった。直接の指導権は、レーニンをはじめとする五名のグループの手に集中されていた。組織は地区別のグループに分かれ、先進的な労働者（イ・ヴェ・バーブシキン、ヴェ・ア・シェルグノーフ、その他）がこれらのグループを工場に結びつけていた。

ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」は、労働運動に立脚してプロレタリアートの階級闘争を指導する革命党の萌芽であった。二七七

（一七九）**第九回党大会**――一九二〇年三月二九日―四月五日にモスクワでひらかれた。六一万一九七八名の党員を代表する七一五名の代議員が出席し、そのうち議決権をもつ代議員は五五三名、評議権をもつ代議員は一六二名であった。多くの代議員が戦線から大会に直行してきた。

大会の議題はつぎのとおりであった。中央委員会の活動報告、経済建設の当面の任務、労働組合運動、組織問題、共産主義インタナ

ショナルの任務、協同組合にたいする態度、民兵制度への移行、中央委員会の選挙、当面の諸問題。

大会の活動は、レーニンの直接の指導のもとにすすめられた。レーニンは中央委員会の政治活動について報告し、報告の結語を述べた。

大会は決議『経済建設の当面の任務について』のなかで、「国の経済復興の主要な条件は、当面の歴史的時代を考慮した単一経済計画の着実な実施である」と指摘した。単一経済計画のなかでは、一〇年ないし二〇年間の計画としてレーニンのかかげた電化が、主要な地位を占めていた。第九回大会の指令は、一九二〇年一二月に第八回全ロシア・ソヴェト大会で最終的に承認されたロシア電化国家委員会（ゴエルロ）の計画の基礎となった。

大会では、生産管理の組織に多くの注意がはらわれた。この問題についての決議には、単独責任制にもとづいて、適切で、強固な指導体制をつくりだす必要があると述べてあった。

「民主主義的中央集権派」（テ・ヴェ・サプローノフ、エヌ・オシンスキー、ヴェ・エム・スミルノーフなど）は、大会で党の経済建設の方針に反対した。民主主義的中央集権制をうんぬんしながら、実際にはこの原則を歪曲していた「民主主義的中央集権派」は、生産上の単独責任制の必要を否認し、強固な党規律、国家規律に反対し、中央委員会では集団指導の原則がおこなわれていない、等々と主張した。ア・イ・ルィコフ、エム・ペ・トムスキー、ヴェ・ペ・ミリューチン、ア・ローモフは、大会で「民主主義的中央集権派」を支持した。大会は「民主主義的中央集権派」の提案を非難し、これを拒否した。

大会では、労働競争と共産主義土曜労働に特別の注意がはらわれた。競争を普及させるために、割増賃金制度を広く利用することが勧告された。

労働組合の問題も、大会の議事で重要な地位を占めていた。大会は、労働組合の役割、それと国家および党との関係、共産党の労働組合指導の形態と方法、労働組合の経済建設参加の形態などをはっきり規定した。二〇七

（八〇）　トルドヴィキ（勤労グループ）――四次の国会の全部にわたって存在し、ナロードニキ主義的な農民やインテリゲンツィアの代表で構成されていた小ブルジョア民主主義者のグループ。トルドヴィキ議員団は、一九〇六年四月に第一国会の農民議員によって結成された。国会内で、トルドヴィキは、カデットと革命的社会民主主義者とのあいだを動揺した。第一次世界大戦中、その大多数は社会排外主義の立場をとった。二月革命後、トルドヴィキは臨時政府を積極的に支持した。トルドヴィキは十月革命に敵対し、ブルジョアジーの反革命に参加した。二〇八

（八一）　二月革命から一九一九年までに、党員数は次のように増加した。一九一七年の第七回（四月）全国協議会のときには八万人、第六回党大会（一九一七年七―八月）のときには約二四万人、第七回党大会（一九一八年三月）のときにはすくなくとも三〇万人、第八回党大会（一九一九年三月）のときには三一万三七六六人。二〇九

（八二）　党員増加についての第八回党大会の決定にもとづいて実施された「党週間」をさす。中央委員会は、九月末、すべての党組織に通達をだし、党週間中に労働者だけでなく、婦人労働者、赤軍兵士、水兵、農民をも入党させなければならない、と指示した。党週間の結果、ロシア共和国ヨーロッパ地方の三八県だけでも入党者

は二〇万人をこえ、その半数以上は労働者であった。陸海軍の兵員総数の約二五%も、戦線で入党した。 二七九

（一八三） **党中央委員会の政治局と組織局**は、第八回党大会の組織問題についての決議にしたがい、同大会で選出された中央委員会の第一回総会で、一九一九年三月二五日に常設機関として設置された。二七九

（一八四） **『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』**（『共産主義インタナショナル』）――共産主義インタナショナル執行委員会の機関誌。ロシア語、ドイツ語、フランス語、英語で、のちには、スペイン語、中国語でも刊行された。創刊号は一九一九年五月一日に出た。この雑誌には、理論上の論文やコミンテルンの文書が掲載され、レーニンの論文もいくつか発表された。同誌に掲載された『憲法制定議会とプロレタリアートの執権』については、本書、二二七―二四八ページを参照。二八四

（一八五） 一八五八年一〇月七日付のマルクスにあてたエンゲルスの手紙、二三巻選集、第六巻、四九一ページを参照。二八四

（一八六） **『フォルケツ・ダーグブラード・ポリティーケン』**（『人民日刊政治新聞』）――スウェーデン社会民主党左派の機関紙。一九一六年四月にストックホルムで創刊され、はじめは隔日刊、ついで日刊になった（一九一七年一一月までは『ポリティーケン』という題名であった）。二八五

（一八七） **世界産業労働者連盟**（I. W. W.）――一九〇五年に創立されたアメリカの労働組合組織。主として各職種の未熟練労働者、低賃金労働者を組織していた。アメリカ労働運動の活動家D・デ・リーオン、ユージン・デブズ、ウィリアム・ヘイウッドが、その創立に積極的に参加した。世界産業労働者連盟の組織はまた、カナダ、オーストラリア、イギリス、ラテン・アメリカ、南アフリカにも創設された。第一次世界大戦のときには、連盟の参加のもとにアメリカ労働者階級の一連の大衆的反戦行動がおこなわれた。連盟の活動には、アナルコ・サンディカリズムの特徴が現われていた。連盟は、プロレタリアートの政治闘争を認めず、党の指導的役割を否定し、プロレタリアートの執権の必要を否認した。また、アメリカ労働総同盟に加入している労働組合員のあいだで活動することを拒否した。指導部の日和見主義的政策の結果、世界産業労働者連盟はセクト的な組織となり、労働運動のなかで影響力を失った。二八六

（一八八） **黒百人組**――極反動の暴力団体（ロシア国民同盟、大天使ミカエル会議）がこうよばれていた。一九〇五年に結成され、そのなかではルンペン・プロレタリア、小商人、小手工業者の出身者が多かった。大地主、大商人に指導され、官憲の支持をえて、解放運動の弾圧や、ユダヤ人の虐殺、革命家の暗殺などの暴力行為をはたらいた。ここからして、極右派を総称して黒百人組とよぶようになった。 二八六

（一八九） レーニン『ドイツ独立社会民主党の手紙にたいするロシア共産党の回答草案（あるいは要綱）』、全集、第三〇巻、三四三―三五〇ページを参照。 二八七

（一九〇） 『ロシア共産党（ボ）第七回臨時大会。中央委員会の政治報告』、本選集、第八巻、二二八―二三四ページを参照。 二九四

（一九一） 『ソヴェト』（《Il Soviet》）――イタリア社会党の新聞。一九一八年から一九二二年まで、ナポリで発行されていた。一九二〇年からはイタリア社会党「ボイコット派共産主義者」の機関紙。二九六

（一九二） 『コムニスモ』――イタリア社会党の隔週刊雑誌。ジャチ

ント・セラーティの編集で、一九一九年から一九二二年まで、ミラノで発行されていた。二九六

（一九三）　イタリア社会党――一八九二年に創立された。創立以来、二つの潮流――日和見主義的潮流と革命的潮流と――の激しい思想闘争が党内でたたかわれてきた。十月革命後は左派が社会党内で強くなった。一九一九年一〇月五―八日にボローニャでひらかれた第一六回党大会は、第三インタナショナル加入の決定を採択した。イタリア社会党の代表たちはコミンテルン第二回大会に参加した。中央主義的立場をとった代表団長ジャチント・セラーティは、大会後、改良主義者と手を切ることに反対した。一九二一年一月にリヴォルノでひらかれた第一七回党大会で、中央派は多数を制し、改良主義者と絶縁することを拒否し、コミンテルンへの加入条件を全面的に承認することを拒絶した。左派の代議員は、一九二一年一月二一日、大会を退場してイタリア共産党を創立した。二九六

（一九四）　エンゲルス『ブランキ派コミューン亡命者の綱領』、全集、第一八巻、五二六―五二七ページを参照。この論文は、はじめ『フォルクスシュタート』一八七四年六月二六日付、第七号に掲載され、一八九四年に論集『「フォルクスシュタート」国際問題（一八七一―一八七五年）』に再録された。

『フォルクスシュタート』（『人民国家』）――ドイツ社会民主党（アイゼナッハ派）の中央機関紙。ヴィルヘルム・リープクネヒトの編集で、一八六九―一八七六年にライプチヒで発行されていた。マルクスとエンゲルスもこの新聞に寄稿した。二九七

（一九五）　国際連盟――第一次世界大戦から第二次世界大戦までのあいだ存在していた国際機構。一九一九年に、パリ講和会議で設立された。国際連盟の規約は、一九一九年のヴェルサイユ講和条約の一部で、四四ヵ国によって調印された。国際連盟の活動は、総会、理事会、また事務総長を中心とする常設事務局によっておこなわれた。国際連盟の規約は、この機構が侵略の防止、軍備縮小、平和と安全の強化を目的としているような印象をあたえるように作成されていた。だが実際には、国際連盟は侵略者を大目にみ、軍備競争を奨励し、第二次世界大戦を準備した。

一九二〇年から一九三四年までの国際連盟の活動は、ソ連邦に敵対するもので、一九二〇―一九二一年には対ソ武力干渉の中心機関の一つであった。

一九三四年九月一五日、ソ連邦は、平和擁護闘争のために国際連盟に加入した。しかし、平和戦線を結成しようとするソ連邦の試みは、西側諸国の反動層の反対をうけた。第二次世界大戦が始まるとともに、国際連盟の活動は事実上停止した。一九四六年四月、とくに招集された総会の決定により、国際連盟は正式に解散された。二九九

（一九六）　一八八六年一一月二九日付のフリードリヒ・A・ゾルゲにあてたエンゲルスの手紙、二三巻選集、第一七巻、二五一ページを参照。三〇一

（一九七）　アメリカの経済学者ヘンリ・C・ケアリの著書『アメリカ合衆国大統領への政治経済的書簡』にたいする書評のなかで、エヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーはこう書いている。「歴史の道はネフスキー大通りの歩道ではない。それはつねに、あるいは埃っぽい野ややぬかった原を通り、あるいは泥沼を通り、あるいは密林を通ってゆく。埃だらけになることや、靴をよごすことを恐れる者は、社会活動に手をださないがよい。」三〇一

（一九八）　国外で『ソヴレメンノエ・オボズレーニエ』（『現代評論』）

という非合法機関誌を共同で出すことについて、『イスクラ』編集局がペ・ベ・ストルーヴェとおこなった交渉をさす。この出版は実現しなかった。『イスクラ』の代表者とストルーヴェとの交渉は、完全な決裂に終わった。この問題は、イスクラ時代のレーニンの諸労作にくわしく述べられている(全集、第四巻、四一六―四一九ページ、第三四巻、四六―四八ページ、第四一巻、三―四ページを参照)。三〇一

(一九九)　これは、ツィンメルヴァルトおよびキーンタール(スイス)でひらかれた国際社会主義者会議をさしている。

ツィンメルヴァルト会議については、注六七を参照。

キーンタール(または第二回)**国際社会主義者会議**は、一九一六年四月二四―三〇日にスイスのキーンタールでひらかれた。一〇ヵ国(ロシア、ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ポーランド、ノルウェー、オーストリア、セルビア、ポルトガル)の代表四三名が出席した。それ以外に、来賓としてイギリス代表、青年インタナショナル書記局代表も出席した。ロシア社会民主労働党中央委員会は、レーニンほか二名の代表を出席させた。

会議で討議された問題は、戦争を終わらせるための闘争、講和問題にたいするプロレタリアートの態度、宣伝と扇動、議会活動、大衆闘争、国際社会主義ビューローの招集であった。

レーニンを先頭とするツィンメルヴァルト左派は、キーンタール会議では、ツィンメルヴァルト会議のときよりも強固な地歩を占めた。これは、国際労働運動内の力関係が国際主義に有利に変化したことを反映するものであった。

会議は、宣言――『荒廃と死にいたらしめられている諸国民へ』の訴え――を採択し、平和主義と国際社会主義ビューローとを批判する決議を可決した。レーニンは、会議の諸決定を、帝国主義戦争とたたかう国際主義者を結集するうえでさらに一歩前進したものと評価した。三〇二

(二〇〇)　**イギリス社会党**――一九一一年に社会民主党とその他の社会主義グループとが合同して、マンチェスターで創立された。社会党はマルクス主義の精神で扇動をおこない、「日和見主義的な党ではなく、実際に自由主義者から独立している」党であった(全集、第一九巻、二八一ページ)。

イギリス社会党は十月革命を歓迎した。同党の党員は、外国の武力干渉からソヴェト・ロシアを守るイギリス勤労者の運動で大きな役割を果たした。一九一九年、党地方組織の大多数(九八対四)は、共産主義インタナショナルへの加入に賛成した。イギリス社会党は共産主義統一グループとともに、イギリス共産党の結成に主要な役割を果たした。一九二〇年にひらかれた第一回合同大会で、社会党地方組織の圧倒的多数が共産党にくわわった。三〇七

(二〇一)　**社会主義労働党**――社会民主主義連盟を脱退した、主としてスコットランド人からなる左派社会民主主義者のグループが、一九〇三年にスコットランドで創立した革命的なマルクス主義団体。

南ウェールズ社会主義協会――主としてウェールズの革命的な炭鉱労働者からなっていた小さなグループ。

労働者社会主義連盟――一九一八年五月に婦人参政権擁護協会から生まれた小さな団体で、主として婦人からなっていた。

イギリス共産党は、議会選挙への参加と労働党への加入の条項を綱領にふくめていたので、イギリス共産党の創立(創立大会は一九二〇年七月三一日―八月一日にひらかれた)のさいには、これらの団体は共産党にくわわらなかった。一九二一年一月、南ウェールズ

社会主義協会と、そのころ「共産党（第三インタナショナル・イギリス支部）」と改称していた労働者社会主義連盟とは、イギリス共産党と合同したが、社会主義労働党の指導部は合同を拒否した。三〇七

（三〇二）『ワーカーズ・ドレッドノート』（『労働者の弩級艦』）――一九一四年三月から一九二四年六月までロンドンで発行されていた。一九一七年七月までは『ウーマンズ・ドレッドノート』という題名であった。一九一八年に労働者社会主義連盟が創立されると、この団体の機関紙となった。三〇七

（三〇三）『マンチェスター・ガーディアン』――イギリスのブルジョア自由主義系の新聞。発行部数が最も多く、最も有力なブルジョア新聞の一つ。一八二一年に創刊された。三一〇

（三〇四）アナルコ－サンディカリズム――労働組合運動内の小ブルジョア的、日和見主義的潮流で、イデオロギー的に無政府主義の影響下にあった。一九世紀末に生まれ、二〇世紀はじめにフランス、イタリア、スペイン、スイスおよびラテン・アメリカ諸国で最も発展した。

アナルコ－サンディカリストは労働者の政治闘争参加の必要を否定し、労働者階級の独自の政党の必要、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を否認する。彼らの考えでは、労働者階級の最高の組織形態は労働組合であり、労働者階級の利益に合致する唯一の闘争は経済闘争なのである。彼らの方法は、経済的ボイコット、サボタージュ、ストライキである。アナルコ－サンディカリストは、プロレタリアートによる国家権力の掌握なしに、経済的ゼネストによって、労働組合が生産手段を収奪し、新しい社会を建設することができると主張する。三一九

（三〇五）コルニーロフ反乱をさしている。

コルニーロフ反乱――一九一七年八月に起ったブルジョア・地主の反革命的反乱。反乱の先頭に立ったのは、ツァーリの将軍で最高総司令官のコルニーロフであった。陰謀者一味のねらいは、ペトログラードを占領し、ボリシェヴィキ党を粉砕し、ソヴェトを解散させ、国内に軍事独裁（ディクタトゥーラ）を打ち立て、帝政の復活を準備することにあった。臨時政府の首相ケーレンスキーも陰謀に参加したが、反乱が始まると、自分がコルニーロフもろとも一掃されることを恐れて、彼と手をきり、彼を臨時政府にたいする反乱者と宣告した。

反乱は八月二五日（九月七日）に開始された。コルニーロフは第三騎兵軍団をペトログラードに進撃させた。当のペトログラード市内では、コルニーロフ派の反革命組織が行動の準備をととのえていた。

コルニーロフの行動は、ボリシェヴィキ党に指導される労働者、農民によって鎮圧された。大衆の圧力に押されて、臨時政府はやむなく、コルニーロフ一味を逮捕して、反乱のかどで裁判にかける命令を出した。三一三

（三〇六）これは、ドイツの反動的軍部のおこしたいわゆる「カップ一揆」をさしている。帝政派の地主カップと、ルーデンドルフ、ゼークト、ルートヴィッツの三将軍が、一揆の主謀者であった。陰謀参加者は、このクーデタを社会民主党政府の黙認のもとに準備した。一九二〇年三月一三日、一揆をおこした将軍連中は部隊をベルリンにすすめ、軍事独裁（ディクタトゥーラ）を宣言した。ドイツの労働者はゼネストでクーデタにこたえ、カップ政府は三月一七日に崩壊した。

（三〇七）『ローテ・ファーネ』（『赤旗』）――一九一八年一一月にウィーンで創刊されたオーストリア共産党の中央機関紙。はじめは

『ヴェックルーフ』(『呼びかけ』)、一九一九年七月からは『ゾツィアーレ・レヴォルツィオーン』(『社会革命』)、同年七月から『ローテ・ファーネ』という題名で発行された。一九三三年に、『ローテ・ファーネ』は非合法の状態に移らざるをえなかった。一九四五年八月からは、『エスターライヒッシェ・フォルクスシュティンメ』(『オーストリア人民の声』)という題名で発行され、一九五七年二月二一日からは、『フォルクスシュティンメ』(『人民の声』)という題名になっている。三二六

(三〇八)　マッシマリスター——一九一九年にイタリア社会党内に生まれた潮流。この名称の由来は、ロシアのボリシェヴィキをイタリア語化したもの。はじめは党内の左翼を代表し、プロレタリア革命とプロレタリア執権(ディクタトゥーラ)に賛成し、ソヴェト・ロシアとコミンテルンを支持していた。しかし、その指導者ラッツァーリとセラーティは、はっきりした革命闘争の綱領をもたず、労働者階級による権力の奪取は時機尚早だと考えていた。マッシマリスタは、党の役割を理解せず、党からの改良主義者の排除に反対し、コミンテルン加入の二一ヵ条に反対した。一九二一年の社会党大会で、マッシマリスタは共産主義派から出された党更新の提案を拒否し、このため、後者は党を脱退して、別に共産党を創立した。マッシマリスタ内にはいくつかのグループがあったが、そのうちの左翼グループは、一九二四年に共産党に加入した。三二七

(三〇九)　ソヴェト「弁護士団」——一九一八年二月に労働者・兵士・農民・カザック代表ソヴェトのもとに設立された弁護士団。たいていの弁護士団ではブルジョア弁護士の勢力が強く、彼らはソヴェト訴訟手続の原則をねじまげ、職権を濫用していた。一九二〇年一〇月、弁護士団は廃止された。三四〇

(三一〇)　この指示にしたがい、本文中にあった「オランダのトリビューネ派」という表現は「オランダ共産党の一部の党員」ということばにおきかえられている〔本書、二七四ページ、二八八ページおよび三〇〇ページを参照〕。

トリビューネ派——新聞『トリビューネ』を機関紙とするオランダ社会民主党左派のこと。トリビューネ派の指導者は、D・ウェインコープ、H・ホルテル、A・パンネクーク、H・ローラント-ホルストであった。トリビューネ派は一貫した革命党ではなかったが、オランダ労働運動の左翼を代表し、第一次世界大戦中はだいたい国際主義の立場をとった。一九一八年、トリビューネ派はオランダ共産党を結成した。三四二

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アウクセンチエフ、エヌ・デ（一八七八—一九四三）——エス・エル党員。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年にケーレンスキー連立政府の内相。のち国外に亡命。

アウステルリッツ、フリードリヒ（一八六二—一九三一）——オーストリア社会民主党の指導者、国会議員。第一次大戦中は社会排外主義者。

アクセリロード、ペ・ベ（一八五〇—一九二八）——メンシェヴィキの指導者、第一次大戦中は社会排外主義者、ついでツィンメルヴァルト中央派。十月革命後、反ソ活動にしたがった。

アスキス、ハーバート・ヘンリ（一八五二—一九二八）——イギリス自由党指導者のひとり。一九〇八—一九一六年に首相。帝国主義ブルジョアジーの政策を遂行し、労働運動および解放運動を弾圧した。

アードラー、フリードリヒ（一八七九—一九六〇）——オーストリア社会民主党員、同党書記。のち第二半インタナショナルの創立に参加。

インクピン、アルバート（一八八四生）——イギリスの労働運動活動家、社会党機関紙『コール』の編集者。一九二〇年、イギリス共産党創立とともにその書記長。一九二九年に右翼的偏向のかどで政治局員を解任された。

ヴァイヤン、エドウアール・マリ（一八四〇—一九一五）——フランスの社会主義者、パリ・コミューン執行委員会のメンバー、第一インタナショナル総評議会のメンバー、第二インタナショナルの指導者のひとり、フランス社会党の創立者のひとり。第一次大戦時には社会排外主義者。

ヴァンデルヴェルデ、エミル（一八六六—一九三八）——ベルギー労働党および第二インタナショナルの指導者。極端な修正主義者で日和見主義者。

ウィルソン、ウッドロー（一八五六—一九二四）——アメリカ大統領（一九一三—一九二〇）。民主党首。第一次大戦中、「一四ヵ条」の講和条約を発表し、国際連盟の組織案を起草した。

ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一）——ドイツ皇帝およびプロイセン国王（在位一八八八—一九一八）。

ウェインコープ、ダーヴィット（一八七七—一九四一）——オランダの社会民主主義者、のち共産党員。第一次大戦中はツィンメルヴァルト左派。社会民主党の創立者のひとり。

ウェッブ夫妻（夫シドニ、一八五九—一九四七、妻ビアトリス、一八五八—一九四三）——イギリスの改良主義的社会活動家、フェビアン協会の創立者、労働党員。イギリス労働運動史にかんする著作がある。

ヴェーバー、ハインリヒ——バウアー、オットー

ヴェンデル、フリードリヒ（一八八六—一九六〇）——ドイツの「左翼」共産主義者。一九一九年一〇月に共産党から除名され、共産主義労働者党の創立に参加したが、一九二〇年末に同党からも除名され、社会民主党に復帰した。

ヴォルフハイム、フリッツ——ドイツの「左翼」共産主義者。一九一九年一〇月に共産党から除名され、共産主義労働者党の創立に

参加したが、一九二〇年末に同党からも除名された。

ウォレス、ジョン（一八六八生）――イギリスの政治家、自由党員。

エルラー、カール→ラウフェンベルク、ハインリヒ

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇―一八九五）

オストロゴルスキー、エム・ヤ（一八五四―一九一九）――ブルジョア自由主義的法学者、第一国会議員。イギリスおよびアメリカ合衆国の歴史上の事実資料を集めた著作『民主主義と政党政治』の著者。

カウツキー、カール（一八五四―一九三八）――第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家、日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

カップ、ヴォルフガング（一八六八―一九二二）――ドイツの政治家、反動派。「祖国党」創立者のひとり。一九二〇年にクーデタ（「カップ一揆」）をおこして反乱政府の首相となったが、労働者のゼネストに敗れてスウェーデンに亡命。

カレーヂン、ア・エム（一八六一―一九一八）――帝政軍の将軍、ドン地方のカザックのアタマン（頭領）。コルニーロフ反乱の積極的な参加者。十月革命後、カザックの反革命を指導し、白衛派「義勇軍」の創設に参加。射殺された。

ギャラチャー、ウィリアム（一八八一―一九六五）――イギリス共産党の指導者のひとり。一九三五―一九五〇年には国会議員、一九四三―一九五六年には党執行委員会議長、一九五六年以後党総裁。

クラインズ、ジョン・ロバート（一八六九―一九四九）――イギリス労働党の指導者のひとり、下院議員、たびたび大臣になった。反労働者政策の遂行者。

クラスノーフ、ペ・エヌ（一八六九―一九四七）――帝政軍の将軍、コルニーロフ反乱の積極的参加者。一九一八―一九一九年にはドン地方で白衛派カザック部隊を指揮、のち亡命し、反ソ活動をつづけた。一九四一―一九四五年にはヒトラー一味に協力し、捕虜となって処刑された。

グラベール、エルネスト・ポール（一八七五生）――スイス社会民主党の指導者、第一次大戦中は国際主義者、のち中央派、ついで右派。第二半インタナショナルの創立に参加した。

クリスピーン、アルトゥル（一八七五―一九四六）――ドイツ社会民主党員。一九一六年の党分裂後は独立社会民主党の指導者のひとり。のち社会民主党に復帰。一九二〇―一九三三年国会議員。

グリム、ローベルト（一八八一―一九五八）――スイス社会民主党の指導者、同党書記。第一次大戦中は中央派、ツィンメルヴァルト、キーンタール両会議の議長、国際社会主義委員会議長。中央派の第二半インタナショナルの創立者のひとり。

クルップ――ドイツの製鋼業者、兵器工場主の一家。

クレマンソー、ジョルジュ・バンジャマン（一八四一―一九二九）――フランス急進党首。一九〇六―一九〇九年首相。第一次大戦中は猛烈な排外主義者。一九一七年にふたたび首相、対ソ武力干渉の組織者。

ゲード・ジュール（一八四五―一九二二）――フランスの社会主義運動および第二インタナショナルの組織者で指導者。マルクス主義思想の普及と社会主義運動の発展に貢献したが、セクト主義的な誤りをおかした。第一次大戦が始まると、社会排外主義の立場をとり、ブルジョア政府に入閣した。

ケーレンスキー、ア・エフ（一八八一―一九七〇）――エス・エ

ル党の指導者、第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、臨時政府の閣僚、ついで首相兼最高総司令官。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、一九一八年に国外へ亡命。

ゴーゴリ、エヌ・ヴェ（一八〇九―一八五二）――ロシアの大作家。批判的リアリズム文学の基礎をきずいた。喜劇『検察官』、小説『死せる魂』はその代表作。

コルチャック、ア・ヴェ（一八七五―一九二〇）――ロシアの海軍提督、反革命家。一九一八年一一月オムスクで反ソ武力闘争を開始、一九一九年末赤軍に粉砕され、銃殺された。

コルニーロフ、エリ・ゲ（一八七〇―一九一八）――帝政軍の将軍、帝政派。一九一七年七―八月、ロシア軍最高司令官、反革命的反乱の先頭に立った。反乱の鎮圧後、逮捕されたが、ドン地方に逃亡し、白衛派「義勇軍」を組織した。戦死した。

コルプ、ヴィルヘルム（一八七〇―一九一八）――ドイツ社会民主党員。極端な修正主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。

コレガーエフ、ア・エリ（一八八七―一九三七）――エス・エル左派、一九一七年一二月に農業人民委員。一九一八年一一月にボリシェヴィキ党に入党。一九二一年以後経済活動に従事した。

ゴンパーズ、サミュエル（一八五〇―一九二四）――アメリカ労働総同盟の創立者、労資協調論者。第一次大戦中は主戦論者。戦後、パリ講和会議の活動に参加。ソヴェト・ロシア孤立化の政策を支持した。

サーヴィンコフ、ベ・エヌ（ロープシン）（一八七九―一九二五）――エス・エル党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、陸軍次官、ついでペトログラード軍事総督。十月革命後は一連の反革命的反乱の組織者。のち逮捕され、獄中で自殺。

ザスーリチ、ヴェ・イ（一八四九―一九一九）――ナロードニキ運動、ついで社会主義運動の著名な婦人活動家。「労働解放」団員、『イスクラ』編集者のひとり。第二回党大会後はメンシェヴィキ。十月革命に否定的な態度をとった。

シェール、ヴェ・ヴェ（一八八四―一九四〇）――メンシェヴィキ。一九一七年の二月革命後、モスクワ兵士代表ソヴェト書記、七月事件後、陸軍省政治局長。十月革命後は経済活動に従事した。一九三一年に反国家活動のかどで有罪判決をうけた。

シテイン（ルビンシテイン）、**ア**（一八八一―一九四八）――メンシェヴィキ。一九〇六年にドイツに亡命、一九一七年にドイツ独立社会民主党に加入し、党中央機関紙『フライハイト』を編集した。反ソ中傷宣伝に積極的にたずさわった。

ジノヴィエフ、ゲ・イエ（一八八三―一九三七）――ボリシェヴィキ。第一次大戦中は国際主義者。一九一七年一〇月には武装蜂起に反対した。十月革命後は党、ソヴェトおよびコミンテルンの指導的活動にあたった。のちカーメネフ、ついでトロツキーと反党ブロックを結び、党から除名された。

シミット、ヴェ・ヴェ（一八八六―一九四〇）――金属労働者出身のボリシェヴィキ。一九一八年に全ロシア労働組合評議会書記。一九一八―一九二八年に労働人民委員。再三党中央委員または同候補。

シャイデマン、フィリップ（一八六五―一九三三）――ドイツ社会民主党の日和見主義的極右派の指導者。第一次大戦中は猛烈な社会排外主義者。一九一八年の一一月革命のさいのスパルタクス団員虐殺の張本人。一九一九年に首相。

ジュオー、レオン（一八七九―一九五四）――フランスおよび国

際労働組合運動の改良主義的指導者、アムステルダム・インタナショナルの右翼指導者のひとり。第一次大戦のさいには排外主義者。

シュレーダー、カール（一八八四—一九五〇）——ドイツの「左翼」共産主義者。一九一九年一〇月に共産党から除名され、共産主義労働者党の創立に参加したが、まもなく脱党し、社会民主党に入党。ファシズム下では非合法の党活動に従事し、逮捕、投獄された。

スヴィデルスキー、ア・イ（一八七八—一九三三）——一八九九年以来の社会民主党員、ボリシェヴィキ。十月革命後は食糧人民委員部参与、ついでロシア共和国食糧人民委員代理、一九二九年以後ラトヴィア駐在公使。

スヴィンフヴド、ペール・エヴィンド（一八六一—一九四四）——フィンランドの政治家。一九一七—一九一八年にフィンランド労働者革命を弾圧したフィンランド政府の首相、一九三一—一九三七年に大統領。

スヴャチツキー、エヌ・ヴェ（一八八七生）——エス・エル。憲法制定議会議員、一九一八年にサマラの反革命的な憲法制定議会議員委員会の書記。ついでエス・エルの「人民」グループの一員。のちソヴェト機関で働いた。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇—一九四四）——ブルジョア経済学者、評論家、カデット党の指導者。「合法マルクス主義」の著名な代表者。ロシア帝国主義の思想的代弁者。十月革命後はソヴェト権力の狂暴な敵。

スノーデン、フィリップ（一八六四—一九三七）——イギリスの政治家、独立労働党右派の指導者。一九〇六年から下院議員。第一次大戦中は中央派、ブルジョアジーとの連立を支持した。のち無任所相。共産主義の狂暴な敵。

ズバートフ、エス・ヴェ（一八六四—一九一七）——憲兵大佐、モスクワの秘密警察長官。御用組合を組織し、労働者を革命的活動から引きはなそうと試みた。二月革命の直後、自殺した。

スパルタクス（紀元前七一死）——古代ローマ最大の奴隷蜂起の指導者。

セラーティ、ジャチント・メノッティ（一八七二—一九二六）——イタリア労働運動の著名な活動家、社会党の指導者。第一次大戦中は国際主義者。ツィンメルヴァルト、キーンタールの両会議に参加。のちイタリア共産党内で積極的に活動。

ソローキン、ペ・ア（一八八九生）——エス・エル、社会学者、ペトログラード大学私講師。一九二二年に反革命活動のかどで国外に追放。

ダーヴィット、エドゥアルト（一八六三—一九三〇）——ドイツの経済学者、社会民主党員、国会議員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九—一九二〇年、内相。

ダン（グールヴィチ）、エフ・イ（一八七一—一九四七）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員、第一次中央執行委員会幹部会員。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、国外に追放された。

チェルヌィシェフスキー、エヌ・ゲ（一八二八—一八八九）——ロシアの革命的民主主義者、ユートピア社会主義者。一八五〇—六〇年代の革命運動の指導者。一八六二年に逮捕、流刑に処され、赦免直後に死んだ。

チェルネンコフ、ベ・エヌ（一八八三生）——エス・エル。一九一八年に憲法制定議会議員、一九一八年九月に反革命的なウファ総統政府の農業大臣。一九一九年にエス・エルの「人民」グループに

参加した。

チェルノーフ、ヴェ・エム（一八七六―一九五二）――エス・エル党の指導者で理論家。一九一七年にブルジョア臨時政府の農相、地主の土地を占拠した農民にたいして苛酷な弾圧政策をとった。十月革命後、反ソ反乱の組織者。

ヂヤチェンコ、ア・ペ（一八七五―一九五二）――ボリシェヴィキ、一九一九年にモスクワ―カザン線の補助医師。

チャーチル、ウィンストン（一八七四―一九六五）――イギリス保守党員。一九一八―一九二一年に陸相、対ソ武力干渉の鼓舞者。一九四〇―一九四五年に首相、第二次大戦中、ソ連邦の弱化をねらう第二戦線引延し政策の主唱者。一九五一―一九五五年にふたたび首相。

ディーツゲン、ヨーゼフ（一八二八―一八八八）――ドイツの労働者出身の哲学者、社会主義者。独自に弁証法的唯物論の立場に到達した。

ディ・リーオン、ダニエル（一八五二―一九一四）――アメリカ社会主義運動の指導者、社会主義労働党の党首、ＩＷＷの創立者。労働組合運動の日和見主義的指導者とたたかったが、その一方でセクト的な誤りをおかし、アナルコ・サンディカリズム的な見解を説いた。

デニーキン、ア・イ（一八七二―一九四七）――ロシアの将軍。一九一八年に反ソ武力闘争を開始し、北カフカーズとウクライナを占領したが、翌年三月赤軍に撃破されて、国外へ逃亡。

ドゥートフ、ア・イ（一八六四―一九二一）――帝政軍の大佐、オレンブルグ・カザークのアタマン（頭領）。十月革命後、メンシェヴィキおよびエス・エルとともにオレンブルグで反革命的な「祖国・革命救済委員会」を組織した。一九一八―一九一九年にはコルチャック軍のもとでたたかい、一九二〇年三月に中国国境を越えて逃亡した。

トゥラーティ、フィリッポ（一八五八―一九三二）――イタリア社会党の改良主義的右派の指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。

トレーヴェス、クラウディオ（一八六八―一九三三）――イタリア社会党の改良主義的指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。

ドレフュス、アルフレド（一八五九―一九三五）――フランス陸軍参謀本部付将校、ユダヤ人。一八九四年にでっちあげにもとづき反逆罪のかどで終身懲役に処せられた。一九〇六年に復権させられた。

トロツキー（ブロンシテイン）、エリ・デ（一八七九―一九四〇）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、第六回党大会でボリシェヴィキ党に入党。つねに党の一般方針に反対する分派闘争をおこない、一九二七年に党から除名された。

ナタンソン、エム・ア（一八五〇―一九一九）――ナロードニキの「土地と自由」の創立者のひとり。エス・エル党中央委員。第一次大戦中は国際主義者。一九一七年には左翼エス・エル党の創立者のひとり。一九一八年の左翼エス・エルの反乱に反対した。

ネーヌ、シャルル（一八七四―一九二六）――スイス社会民主党の指導者、第一次大戦中は、はじめ国際主義者、のちに中央派、ついで右派。第二半インタナショナルの創立に参加した。

ノスケ、グスタフ（一八六八―一九四六）――ドイツ社会民主党右派、ドイツ労働運動の裏切者。一九一九年一月にカール・リーブ

クネヒトとローザ・ルクセンブルクの虐殺を組織した張本人のひとり。

ノプス、エルンスト（一八八六―一九五七）――スイス社会民主党の指導者。第一次大戦中は国際主義者、のち中央派。共産主義運動に反対した。一九四九年にスイス大統領。

バウアー、オットー（一八八二―一九三八）――オーストリア社会民主党および第二インタナショナルの指導者。いわゆる「オーストリア・マルクス主義」の代表者。

ハーゼ、フーゴー（一八六三―一九一九）――ドイツ社会民主党の指導者。第一次大戦中は中央派。カウツキーとともに「ドイツ独立社会党」を創立。

バーブシキン、イ・ヴェ（一八七三―一九〇六）――労働者出身の職業革命家。ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」および「イスクラ」組織で活動した。一九〇五年の革命のさい、イルクーツクおよびチタの党委員会のメンバー、武器輸送に従事中捕縛され、銃殺された。

パンクハースト、シルヴィア（一八八二―一九六〇）――イギリス労働運動の婦人活動家。極左的な社会主義労働者連盟の組織者のひとり、党機関紙『ワーカーズ・ドレッドノート』の編集者。一九二一年にイギリス共産党に加入したが、まもなく党規律への服従をこばんで除名され、ソ連邦と共産党を攻撃した。

パンネクーク、アントン（一八七三―一九六〇）――オランダの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一八年からオランダ共産党員、コミンテルンの活動に参加。一九二一年に脱党、のち政治活動から離れた。

ヒルファディング、ルードルフ（一八七七―一九四一）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの理論家、日和見主義者、経済学者。第一次大戦中は中央派。

ヒンデンブルク、パウル・フォン（一八四七―一九三四）――ドイツの将軍、政治家。一九一六―一九一七年にドイツ軍総司令官。一九二五―一九三四年に大統領。

フォシュ、フェルディナン（一八五一―一九二九）――フランスの将軍、元帥。第一次大戦で連合軍最高司令官。

ブハーリン、エヌ・イ（一八八八―一九三八）――ボリシェヴィキ。第六回党大会で中央委員、十月革命後、党中央委員会政治局員、『プラウダ』編集者、コミンテルン執行委員。のち反党活動のために党から除名された。

プラッテン、フリードリヒ（フリッツ）――スイス社会民主党左派、共産党創立者のひとり。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一七年四月、レーニンのスイスからロシアへの帰還を組織した。

ブラン、ジャン－ジョゼフ－ルイ（一八一一―一八八二）――フランスの小ブルジョア社会主義者、歴史家、階級協調主義者。一八四八年革命のときに臨時政府の閣員。

ブランキ、ルイ－オギュスト（一八〇五―一八八一）――フランスの革命家、ユートピア共産主義者。革命的陰謀家の小グループによる権力奪取をめざし、大衆の組織が革命闘争に果たす決定的な役割を理解しなかった。

ブランティング、カール・ヤルマル（一八六〇―一九二五）――スウェーデン社会民主党首、日和見主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九年に連立政府に入閣。対ソ軍事干渉を支持した。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六―一九一八）――ロシアおよ

び国際労働運動のすぐれた活動家、ロシア最初のマルクス主義宣伝家。メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者。

ブレンターノ、ルーヨ（一八四四―一九三一）――ドイツのブルジョア経済学者、講壇社会主義者。マルクス主義的用語をつかってマルクス主義に反対した。いわゆる「国家社会主義」の支持者。

プロシヤーン、ペ・ペ（一八八三―一九一八）――左翼エス・エル党中央委員。一九一七年一二月に逓信人民委員。一九一九年に左翼エス・エルの反乱に参加したが、のち政治活動から隠退した。

ヘーグルンド、カール・Z・コンスタンティン（一八八四―一九五六）――スウェーデンの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一七―一九二四年、スウェーデン共産党の指導者。党から除名されて社会民主党に復帰した。

ベーベル、アウグスト（一八四〇―一九一三）――ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇―一九三二）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極右日和見主義派の指導者。一八九〇年代末にマルクス主義の理論的基礎にたいする全面的な日和見主義的修正を試みた。

ヘンダソン、アーサー（一八六三―一九三五）――イギリス労働党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。ブルジョア政府に入閣。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

ポトレソフ、ア・エヌ（一八六九―一九三四）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年には悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなった。十月革命後、国外に亡命。

ボルディガ、アマデーオ（一八八九生）――一九二一年にイタリア共産党の創立に参加。一九二六年まで党指導諸機関のメンバー。左翼セクト主義者、コミンテルンの統一戦線戦術に反対し、一九三〇年に除名。

ホルナー、K→パンネクーク、アントン

マクドナルド、ジェイムズ・ラムゼイ（一八六六―一九三七）――イギリスの政治家、労働党首、日和見主義者。第一次大戦の後期には帝国主義ブルジョアジーを公然と支持した。のち再三首相。

マースロフ、ペ・ペ（一八六七―一九四六）――経済学者、メンシェヴィキ。反動期には解党派。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後政治活動から離れた。

マリノフスキー、エル・ヴェ（一八七六―一九一八）――挑発者。ボリシェヴィキ党に潜入し、第四国会議員に当選。一九一四年に危険を感じて国外へ逃亡。十月革命後帰国して銃殺された。

マルクス、カール（一八一八―一八八三）

マルトフ、エリ（ツェーデルバウム、ユ・オ）（一八七三―一九二三）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキのグループを指導。十月革命後はソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命。

ミリュコーフ、ペ・エヌ（一八五九―一九四三）――カデット党首、ロシア帝国主義ブルジョアジーの代弁者。二月革命後、第一次臨時政府の外相。十月革命後、外国の対ソ武力干渉の組織者。

ムラヴィヨーフ、エム・ア（一八八〇―一九一八）――帝政軍の将校。十月革命後エス・エル左派。一九一八年七月、東部方面軍司令官の職にあって、ソヴェト権力に反逆した。逮捕にあたって抵抗して、射殺された。

メラン、アルフォンス（一八八一―一九二五）――フランスの労

働組合活動家、サンディカリスト。第一次大戦中はツィンメルヴァルト右派。一九一八年以後は公然たる社会排外主義者、改良主義者。
メンガー、アントーン（一八四一―一九〇六）――オーストリアの法学者。
モディリアーニ、ヴィットーリオ・エマヌエーレ（一八七二―一九四七）――古くからのイタリア社会党員、改良主義者。第一次大戦中は中央派、ツィンメルヴァルト左派に反対した。
ヤーコヴレヴァ、ヴェ・エヌ（一八八五―一九四四）――ボリシェヴィキ。労働組合論争では「緩衝」派。一九二三年にトロツキーに同調。ついでトロツキー派中央部で活動、のち反対派と絶縁。
ヤコービ、ヨハン（一八〇五―一八七七）――ドイツの民主主義者。一八四八年にはプロイセン国民議会の左翼。一八七二年以後社会民主党員。
ユデーニチ、エヌ・エヌ（一八六二―一九三三）――帝政軍の将軍。十月革命後、反革命的な「北西政府」の閣員、白衛派北西軍総司令官。一九一九年に赤軍に敗れて、エストニアに、ついでイギリスに亡命。
ラウフェンベルク、ハインリヒ（エルラー、カール）（一八七二―一九三二）――ドイツの「左翼」共産主義者。一九一九年一〇月に共産党から除名され、共産主義労働者党の創立に参加したが、一九二〇年末に同党からも除名された。
ラデック、カール（一八八五―一九三九）――一九〇〇年代のはじめからガリチア、ポーランドおよびドイツの社会民主主義運動に参加。第一次大戦中、国際主義の立場をとったが、中央派への動揺を示した。一九一七年からボリシェヴィキ党員、コミンテルンで活動した。のち反党活動のために除名された。
ランズベリ、ジョージ（一八五九―一九四〇）――イギリス労働党指導者。『デイリー・ヘラルド』の創立者および編集者、下院議員。一九二九―一九三一年に労働相。
リトレ、エミル（一八〇一―一八八一）――フランスのブルジョア的折衷哲学者。『フランス語辞典』を編集した。
リヒター、オイゲン（一八三八―一九〇六）――ドイツの自由主義者、社会主義の激しい敵。
リープクネヒト、カール（一八七一―一九一九）――第一次大戦中、ドイツ国会で軍事予算に反対した唯一の議員。一九一五年にスパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに斃れた。
リーベル（ゴリドマン、エム・イ）（一八八〇―一九三九）――ブンドの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後は臨時政府を支持した。十月革命に敵対したが、のち経済活動に従事。
リュトヴィッツ、ヴァルター（一八五九―一九四二）――ドイツの将軍、反動的軍閥の代表者のひとり。一九一九年夏以後、ドイツ軍総司令官。一九二〇年三月の「カップ一揆」の組織者のひとり、陰謀の敗北後、国外に逃亡した。
ルクセンブルク、ローザ（一八七一―一九一九）――ポーランド生まれの婦人革命家、経済学者、ドイツ社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者、スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに斃れた。
ルノデル、ピエール（一八七一―一九三五）――フランス社会党の改良主義的指導者。『ユマニテ』主筆。第一次大戦中は社会排外主義者。
レギーン、カール（一八六一―一九二〇）――ドイツの労働組合

指導者、社会民主党国会議員、修正主義者。第一次大戦中は極端な社会排外主義者。戦後はブルジョアジーの政策を支持し、プロレタリアートの革命運動とたたかった。

レーデブール、ゲオルク（一八五〇—一九四七）——ドイツの社会民主主義者、国会議員。第一次大戦中はツィンメルヴァルト右派。独立社会民主党の指導者のひとり。

レンナー、カール（一八七〇—一九五〇）——オーストリア社会民主党の修正主義の代表者。一九一九—一九二〇年に首相兼外相。一九三一—一九三三年に国民議会議長。第二次大戦後に大統領。

ロイド・ジョージ、デーヴィッド（一八六三—一九四五）——イギリスの政治家、自由党首。一九一六—一九二二年に首相。十月革命後、対ソ武力干渉および封鎖の唱道者で組織者。

ロジャンコ、エム・ヴェ（一八五九—一九二四）——大地主、オクチャブリスト党の指導者、第三および第四国会の議長、反動派の首領のひとり。十月革命後、デニーキンのもとにはしり、ソヴェト権力との闘争のためにすべての反革命勢力を結集しようとつとめた。

ロンゲ、ジャン（一八七六—一九三八）——フランス社会党および第二インタナショナルの活動家、カール・マルクスの孫。第一次大戦中、中央派的=平和主義的立場をとった。

大月書店